県道三木国分寺線道路改修事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告

兀　塚　遺　跡

2014．11

香　川　県　教　育　委　員　会

調査地より瀬戸内海方面を望む（南より）

調査地より六ッ目山方面を望む（東より）

巻頭図版２　兀塚遺跡

調査地より北を望む（南より）

Ⅲ区空中写真（上が北）

Ⅵ区空中写真（上が南）

Ⅸ区空中写真（上が北）

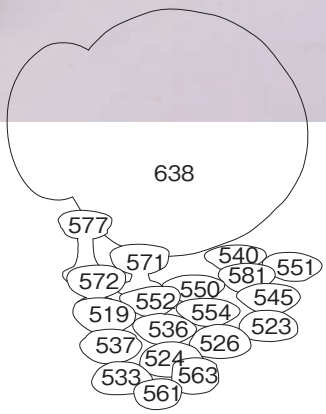
巻頭図版 4　兀塚遺跡

Ⅳ区 SR401

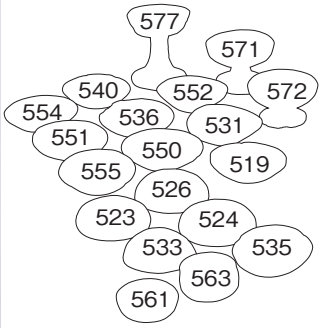
Ⅳ区 SR401

Ⅴ区 SD516

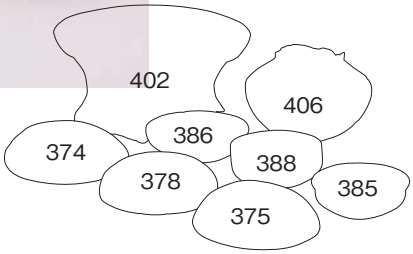
Ⅵ区 SR602・604


638
577
571
540
551
581
572
550
552
545
519
554
536
523
537
526
524
533
563
561

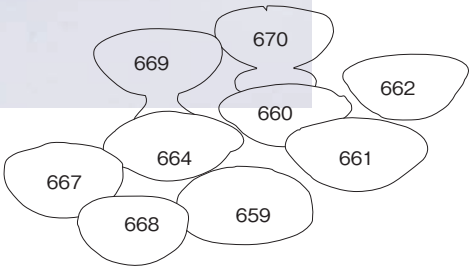
巻頭図版 6　兀塚遺跡



Ⅵ区 SR602



Ⅵ区 SD604



Ⅶ－２区 SH701

Ⅵ区 SR602・Ⅷ－１区 SB803

巻頭図版 8　兀塚遺跡

Ⅷ－１区 SB801・802・805，SD805・816ABC，柱穴・包含層

Ⅷ－１区 SB803・805，SD805・816B・823，柱穴

序文

兀塚遺跡は高松市檀紙町・円座町に所在する、弥生時代から中世までの遺跡です。発掘調査は県道三木国分寺線道路改修事業に伴い発掘調査で、香川県教育委員会からの委託により、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが平成７年から平成９年度までの期間で調査を実施しました。

注目される調査成果としては、古代と中世の集落跡や、集落に隣接する自然河川で検出した当時の水田跡などです。また、自然河川からは周辺の集落から廃棄されたと考えられる多量の遺物と共に、墨書土器や土馬の破片などが出土し、貴重な調査成果になりました。

兀塚遺跡の調査成果が、本県の歴史研究の資料として広く活用されますとともに、埋蔵文化財に対する理解と関心が一層深められる一助となれば幸いです。

最後になりますが、発掘調査から出土品の整理、報告書の刊行に至るまでの長期間、香川県土木部及び関係諸機関、地元関係者各位に多大な御協力をいただきました。ここに深く感謝の意を表すとともに、今後とも御支援を賜りますようお願い申し上げます。

平成26年11月28日
香川県埋蔵文化財センター
所長　　真鍋　昌宏

例言

1．本報告書は、県道三木国分寺線道路改修事業伴う、高松市檀紙町・円座町に所在する兀塚遺跡（はげづかいせき）の調査成果を収録した。

2．発掘調査は、香川県土木部から依頼を受けて、香川県教育委員会が調査主体となり、現地調査は平成７・８・９年度に財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが担当した。整理作業は平成 24・25 年度に香川県埋蔵文化財センターが実施した。

3．発掘調査の担当者は以下のとおりである。

平成７年度担当　　文化財専門員　蘆原秀稔・主任技師　蔵本晋司・調査技術員　門脇範子

平成８年度担当　　文化財専門員　森下友子・文化財専門員　樋本清輝・調査技術員　三好弘美

平成９年度担当　　文化財専門員　宮崎哲治・文化財専門員　岡本　利・調査技術員　東条貴美

4．調査にあたっては、下記の関係諸機関の協力を得た。記して謝意を表したい（順不同、敬称略）。

香川県土木部、香川県高松土木事務所、地元自治会、地元水利組合

5．本報告書の作成は、香川県埋蔵文化財センターが実施した。

6．本書の整理作業及び執筆・編集は西村尋文が担当した。

7．本報告書で用いる方位の北は、旧国土座標系第Ⅳ系（日本測地系）の北であり、標高は東京湾平均海面（T．P.）を基準としている。

8．本書で用いている遺構記号は次のとおりである。

SH：竪穴建物跡　SB：掘立柱建物跡　SA：柵列跡　SP：柱穴跡　SK：土坑跡　ST：墓跡　SD：溝状遺構　SX：不整形遺構　SR：自然河川跡

9．報告遺構名は、以下の方法で再整理を行った。

発掘調査時は「調査区」単位で、遺構の種別ごとに「01」から始まる通し番号を付していた。報告書記載の際には同じ遺構番号が重複するため、調査区の数字を遺構番号の先頭に付すことで、固有の報告遺構名を表すことにした。

例）Ⅳ区検出の SB01（検出時遺構名）→ SB401（報告遺構名）

10. 挿図の一部に国土交通省国土地理院作成の１／25,000 地形図を使用した。

11. 遺物観察表中の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色標監修『新版標準土色帖 1997 年度版』による。

12. 本遺跡の報告にあたっては、下記の機関に自然科学分析、デジタルトレース及び写真撮影を委託した。

土壌分析 …… 川崎地質株式会社

樹種同定報告 …… 株式会社吉田生物研究所

金属器分析 …… 株式会社イビソク

デジタルトレース …… 株式会社アート

遺物写真撮影 …… 岡村印刷工業株式会社

本文目次

第Ⅰ章　調査の経緯と経過

第１節　発掘調査に至る経緯・経過 …… 1
第２節　整理作業の経過 …… 3

第Ⅱ章　調査の方法

第１節　発掘調査の方法 …… 5
第２節　整理作業の方法 …… 5

第Ⅲ章　地理的・歴史的環境

第１節　地理的環境 …… 8
第２節　歴史的環境 …… 8

第Ⅳ章　兀塚遺跡の調査

第１節　兀塚遺跡の概要 …… 11
第２節　基本層位 …… 12
第３節　Ⅰ～Ⅳ区の調査 …… 19
第４節　Ⅴ・Ⅵ区の調査 …… 45
第５節　Ⅶ～Ⅸ区の調査 …… 99

第Ⅵ章　自然科学分析

第１節　兀塚遺跡における花粉、プラントオパール分析 …… 163
第２節　香川県兀塚遺跡出土木製品の樹種調査結果 …… 176
第３節　兀塚遺跡に係わる鍛冶関連遺物の金属学的分析業務委託 …… 183

第Ⅶ章　まとめ－兀塚遺跡の歴史的変遷－ …… 217

挿図目次

第 1 図　遺跡位置図 …… 1
第 2 図　調査区割図 …… 6
第 3 図　周辺遺跡位置図 …… 10
第 4 図　Ⅰ～Ⅵ区基本層位柱状図 …… 13
第 5 図　Ⅶ～Ⅸ区基本層位柱状図 …… 14
第 6 図　Ⅰ～Ⅱ区遺構配置図 …… 16
第 7 図　Ⅲ～Ⅳ区遺構配置図 …… 18
第 8 図　SA101 平・断面図 …… 19
第 9 図　SD101 ～ 105 断面図，出土遺物 …… 20
第 10 図　Ⅱ区北壁土層断面図 …… 22
第 11 図　SR201・202・203 出土遺物 …… 23
第 12 図　Ⅲ区北・南壁土層断面図 …… 26
第 13 図　SD301・SR302 断面図，出土遺物 …… 27
第 14 図　SR301 出土遺物 …… 27
第 15 図　SR302 出土遺物（1）…… 29
第 16 図　SR302 出土遺物（2）…… 30
第 17 図　SR301・302 第 1・2 水田面 …… 31
第 18 図　畦畔 301・302 断面図，出土遺物 …… 32
第 19 図　SD401 断面図，出土遺物 …… 32
第 20 図　SD401 ～ 404 断面図，出土遺物 …… 33
第 21 図　SD405 断面図，出土遺物 …… 35
第 22 図　SX401 平・断面図 …… 35
第 23 図　Ⅳ区北・南壁土層断面図 …… 38
第 24 図　SR401 出土遺物（1）…… 39
第 25 図　SR401 出土遺物（2）…… 40
第 26 図　SR401 出土遺物（3）…… 41
第 27 図　SR401 出土遺物（4）…… 42
第 28 図　Ⅴ～Ⅵ区遺構配置図 …… 44
第 29 図　SK501・502・504・505・508
平・断面図，出土遺物 …… 46
第 30 図　SK509 平・断面図，出土遺物（1）…… 47
第 31 図　SK509 出土遺物（2）…… 48
第 32 図　SK510 平・断面図，出土遺物 …… 49
第 33 図　SK511 平・断面図，出土遺物 …… 50
第 34 図　SK512 平・断面図，出土遺物 …… 50
第 35 図　ST501・502，SK503，SD506・510 平・断面図 …… 52
第 36 図　ST501・502 出土遺物 …… 53
第 37 図　SD501 ～ 504 断面図，出土遺物 …… 54
第 38 図　SD504・506 ～ 513・521 断面図，出土遺物 …… 55
第 39 図　SD504・508・509・513 出土遺物 …… 56
第 40 図　SD515・516 断面図，出土遺物 …… 58
第 41 図　SD517 断面図，出土遺物 …… 59
第 42 図　SD518 断面図，出土遺物 …… 59
第 43 図　SD519 ～ 521 断面図，出土遺物 …… 60
第 44 図　SX501 平・断面図 …… 61
第 45 図　SX502 平・断面図 …… 62
第 46 図　SX503 平・断面図，出土遺物 …… 62
第 47 図　Ⅴ区柱穴，包含層出土遺物 …… 64
第 48 図　SB601・602 平・断面図，出土遺物 …… 66
第 49 図　SB603 平・断面図，出土遺物 …… 67
第 50 図　SB604 平・断面図 …… 67
第 51 図　SB605 平・断面図，出土遺物 …… 68
第 52 図　SB606 平・断面図 …… 69
第 53 図　SB607 平・断面図 …… 69
第 54 図　SK601 平・断面図 …… 70
第 55 図　SK602 平・断面図 …… 70
第 56 図　SK603・604・605 平・断面図，出土遺物 …… 71
第 57 図　SD601・602 断面図，出土遺物 …… 72
第 58 図　SD603 断面図，出土遺物 …… 73
第 59 図　SD604 平・断面図，出土遺物（1）…… 74
第 60 図　SD604 出土遺物（2）…… 75
第 61 図　SX601 平・断面図，出土遺物 …… 76
第 62 図　SX604 平・断面図，出土遺物 …… 77
第 63 図　SX605 断面図，出土遺物 …… 77
第 64 図　Ⅵ区北・南壁土層断面図 …… 80
第 65 図　SR601 断面図，出土遺物 …… 81
第 66 図　SR602 断面図 …… 82
第 67 図　SR602 出土遺物（1）…… 83
第 68 図　SR602 出土遺物（2）…… 84
第 69 図　SR602 出土遺物（3）…… 85
第 70 図　SR602 出土遺物（4）…… 86
第 71 図　SR602 出土遺物（5）…… 87
第 72 図　SR602 出土遺物（6）…… 88
第 73 図　SR602 出土遺物（7）…… 89
第 74 図　SR602 出土遺物（8）…… 90
第 75 図　SR603 出土遺物 …… 91
第 76 図　SR604 出土遺物（1）…… 92
第 77 図　SR604 出土遺物（2）…… 93
第 78 図　Ⅵ区包含層出土遺物 …… 94
第 79 図　Ⅶ区遺構配置図 …… 96
第 80 図　Ⅷ・Ⅸ区遺構配置図 …… 98
第 81 図　SB701 平・断面図，出土遺物 …… 100
第 82 図　SB702 平・断面図，出土遺物 …… 101
第 83 図　SB703 平・断面図 …… 102
第 84 図　SB704 平・断面図 …… 102
第 85 図　SB705 平・断面図 …… 103
第 86 図　SB706 平・断面図，出土遺物 …… 104
第 87 図　SB707 平・断面図 …… 105
第 88 図　SB708 平・断面図 …… 106
第 89 図　SB709 平・断面図 …… 106
第 90 図　SB710 平・断面図 …… 107
第 91 図　SB711・712 平・断面図 …… 108
第 92 図　SD701・702 断面図 …… 109
第 93 図　SX701 断面図，出土遺物 …… 109
第 94 図　SH701 平・断面図，出土遺物 …… 110
第 95 図　SB713 平・断面図 …… 111
第 96 図　SB714 平・断面図 …… 113
第 97 図　SB715 平・断面図，出土遺物 …… 113
第 98 図　SB716 平・断面図，出土遺物 …… 114
第 99 図　SB717 平・断面図，出土遺物 …… 115
第 100 図　SB718 平・断面図，出土遺物 …… 116
第 101 図　SB719 平・断面図 …… 117
第 102 図　SB720・721 平・断面図，出土遺物 …… 118
第 103 図　SB722 平・断面図，出土遺物 …… 119
第 104 図　SB723・724 平・断面図 …… 120
第 105 図　SB723・724 出土遺物 …… 121
第 106 図　SB725 平・断面図，出土遺物 …… 122
第 107 図　SK701 平・断面図，出土遺物 …… 123
第 108 図　SK702 平・断面図，出土遺物 …… 123
第 109 図　SD704・706・707 断面図，出土遺物 …… 124
第 110 図　SX702 平・断面図，出土遺物 …… 125
第 111 図　SB726 平・断面図 …… 126
第 112 図　SB727 平・断面図，出土遺物 …… 126
第 113 図　SB728 平・断面図 …… 128

第 114 図　SB729 平・断面図 …… 128
第 115 図　SB730 平・断面図 …… 129
第 116 図　SA701 平・断面図 …… 129
第 117 図　SK703 平・断面図，出土遺物 …… 130
第 118 図　SD708 ～ 711・713 断面図，出土遺物 …… 131
第 119 図　SX704 断面図，出土遺物 …… 133
第 120 図　SX706 断面図，出土遺物 …… 133
第 121 図　Ⅶ区柱穴，包含層出土遺物 …… 134
第 122 図　SB801 平・断面図，出土遺物 …… 135
第 123 図　SB802，SD805・806，SX801
平・断面図，出土遺物 …… 136
第 124 図　SB803，SD816A・819，SX802 平・断面図 …… 138
第 125 図　SB803，SX802・803 出土遺物 …… 139
第 126 図　SB804・805，SD816B・816C 平・断面図 …… 140
第 127 図　SB804・805 断面図，出土遺物 …… 141
第 128 図　SB806 平・断面図，出土遺物 …… 142
第 129 図　SB807 平・断面図 …… 143
第 130 図　SB808 平・断面図 …… 143
第 131 図　SK801 平・断面図，出土遺物 …… 144
第 132 図　SK802 平・断面図，出土遺物 …… 144
第 133 図　SK803 平・断面図，出土遺物 …… 144
第 134 図　SD801 ～ 807・810・811・813・815
断面図，出土遺物 …… 147
第 135 図　SD816B 遺物出土状況図 …… 148
第 136 図　SD816A・B 出土遺物 …… 149
第 137 図　SD816C・817・819・823 断面図，出土遺物 …… 150
第 138 図　SD824 断面図，出土遺物 …… 152
第 139 図　Ⅷ区柱穴出土遺物 …… 153
第 140 図　Ⅷ区包含層出土遺物 …… 154
第 141 図　SB901 平・断面図，出土遺物 …… 156
第 142 図　SB902 平・断面図 …… 157
第 143 図　SB903 平・断面図 …… 157
第 144 図　SB904 平・断面図 …… 158
第 145 図　SK901 平・断面図，出土遺物 …… 159
第 146 図　ST901 平・断面図，出土遺物 …… 160
第 147 図　SD901・902 断面図 …… 160
第 148 図　Ⅸ区柱穴，包含層出土遺物 …… 161
第 149 図　兀塚遺跡・正箱遺跡建物主軸方位分布図 …… 218
第 150 図　兀塚遺跡遺構変遷図 …… 220
第 151 図　兀塚遺跡周辺条里地割図 …… 223

表目次

第 1 表　年度別発掘調査担当一覧 …… 2
第 2 表　平成 7 ～ 9 年度調査体制 …… 2
第 3 表　平成 24・25 年度整理体制 …… 4
第 4 表　兀塚遺跡 SR301・302 水田跡一覧 …… 30
第 5 表　兀塚遺跡古代Ⅰ～Ⅲ期
建物主軸方位類型別一覧 …… 218
第 6 表　兀塚遺跡掘立柱建物跡一覧 …… 226
第 7 表　正箱遺跡掘立柱建物跡一覧 …… 227
第 8 表　兀塚遺跡出土土器観察表 (1) …… 230
第 9 表　兀塚遺跡出土土器観察表 (2) …… 231
第 10 表　兀塚遺跡出土土器観察表 (3) …… 232
第 11 表　兀塚遺跡出土土器観察表 (4) …… 233
第 12 表　兀塚遺跡出土土器観察表 (5) …… 234
第 13 表　兀塚遺跡出土土器観察表 (6) …… 235
第 14 表　兀塚遺跡出土土器観察表 (7) …… 236
第 15 表　兀塚遺跡出土土器観察表 (8) …… 237
第 16 表　兀塚遺跡出土土器観察表 (9) …… 238
第 17 表　兀塚遺跡出土土器観察表 (10) …… 239
第 18 表　兀塚遺跡出土土器観察表 (11) …… 240
第 19 表　兀塚遺跡出土土器観察表 (12) …… 241
第 20 表　兀塚遺跡出土土器観察表 (13) …… 242
第 21 表　兀塚遺跡出土土器観察表 (14) …… 243
第 22 表　兀塚遺跡出土土器観察表 (15) …… 244
第 23 表　兀塚遺跡出土土器観察表 (16) …… 245
第 24 表　兀塚遺跡出土土器観察表 (17) …… 246
第 25 表　兀塚遺跡出土土器観察表 (18) …… 247
第 26 表　兀塚遺跡出土土器観察表 (19) …… 248
第 27 表　兀塚遺跡出土土器観察表 (20) …… 249
第 28 表　兀塚遺跡出土土器観察表 (21) …… 250
第 29 表　兀塚遺跡出土土器観察表 (22) …… 251
第 30 表　兀塚遺跡出土土器観察表 (23) …… 252
第 31 表　兀塚遺跡出土土器観察表 (24) …… 253
第 32 表　兀塚遺跡出土土器観察表 (25) …… 254
第 33 表　兀塚遺跡出土土器観察表 (26) …… 255
第 34 表　兀塚遺跡出土土器観察表 (27) …… 256
第 35 表　兀塚遺跡出土土器観察表 (28) …… 257
第 36 表　兀塚遺跡出土土器観察表 (29) …… 258
第 37 表　兀塚遺跡出土土器観察表 (30) …… 259
第 38 表　兀塚遺跡出土土器観察表 (31) …… 260
第 39 表　兀塚遺跡出土土器観察表 (32) …… 261
第 40 表　兀塚遺跡出土土器観察表 (33) …… 262
第 41 表　兀塚遺跡出土石器観察表 (1) …… 263
第 42 表　兀塚遺跡出土石器観察表 (2) …… 264
第 43 表　兀塚遺跡出土石器観察表 (3) …… 265
第 44 表　兀塚遺跡出土瓦観察表 …… 265
第 45 表　兀塚遺跡出土鉄器観察表 …… 265
第 46 表　兀塚遺跡出土木製品観察表 …… 265
第 47 表　兀塚遺跡検出時・報告時遺構名新旧対照表 (1) …… 266
第 48 表　兀塚遺跡検出時・報告時遺構名新旧対照表 (2) …… 267
第 49 表　兀塚遺跡検出時・報告時遺構名新旧対照表 (3) …… 268
第 50 表　兀塚遺跡検出時・報告時遺構名新旧対照表 (4) …… 269
第 51 表　兀塚遺跡検出時・報告時遺構名新旧対照表 (5) …… 270

付図

兀塚遺跡全体図

図版目次

巻頭図版 1
　調査地より瀬戸内海方面を望む（南より）
　調査地より六ッ目山方面を望む（東より）
巻頭図版 2
　調査地より北を望む（南より）
　Ⅲ区空中写真（上が北）
巻頭図版 3
　Ⅵ区空中写真（上が南）
　Ⅸ区空中写真（上が北）
巻頭図版 4
　Ⅳ区 SR401 出土遺物
　Ⅴ区 SD516 出土遺物
巻頭図版 5
　Ⅵ区 SR602・604 出土遺物
巻頭図版 6
　Ⅵ区 SR602 出土遺物
　Ⅵ区 SD604 出土遺物
巻頭図版 7
　Ⅶ－２区 SH701 出土遺物
　Ⅵ区 SR602・Ⅷ－１区 SB803 出土遺物
巻頭図版 8
　Ⅷ－１区 SB801・802・805，SD805・816ABC，
　　柱穴・包含層出土遺物
　Ⅷ－１区 SB803・805，SD805・816B・823，柱穴出土遺物
図版 1
　兀塚遺跡周辺空中写真（上が北）
図版 2
　Ⅰ区空中写真（上が北）
　Ⅱ区空中写真（上が北）
図版 3
　Ⅲ区第２水田面（上が北）
　Ⅲ区第 SR301 ～ 303（上が北）
図版 4
　Ⅳ区空中写真（上が北）
　Ⅴ－１区空中写真（上が北）
　Ⅴ－２区空中写真（上が北）
図版 5
　Ⅵ区空中写真（上が北）
　Ⅶ－１区空中写真（上が北）
　Ⅶ－２区空中写真（上が北）
図版 6
　Ⅶ－３区空中写真（上が北）
　Ⅶ－４区空中写真（上が北）
　Ⅷ－１区空中写真（上が北）
図版 7
　Ⅷ－２区空中写真
　Ⅸ－１区空中写真
　Ⅰ区全景（西から）
　Ⅰ区 SR202 土層断面（北から）
図版 8
　Ⅲ区第１水田面全景（西から）
　Ⅲ区第２水田面全景（東から）
　Ⅲ区第２水田面全景（南から）
　Ⅲ区第２水田面全景（南から）
　Ⅲ区第２水田面全景（北東から）
　Ⅲ区 SD301 全景（南から）
　Ⅲ区 SR301 全景（南西から）
　Ⅲ区 SR302 全景（南東から）
図版 9
　Ⅲ区 SR303 全景（南から）
　Ⅲ区 SR303 土層断面（北から）
　Ⅲ区第２水田面畦畔 308 土層断面（北から）
　Ⅲ区第２水田面畦畔 313 土層断面（北から）
　Ⅲ区第２水田面畦畔 308･313 土層断面（北から）
　Ⅳ区 SD401 全景（南から）
　Ⅳ区 SD402・403 全景（南から）
　Ⅳ区 SR401 全景（北から）
図版 10
　Ⅳ区 SR401 最下層木製品出土状況（北から）
　Ⅳ区 SR401 最下層木製品出土状況（南から）
　Ⅴ区 SK509（南から）
　Ⅴ区 SK510（南から）
　Ⅴ区 ST501 全景（北から）
　Ⅴ区 ST501 全景（南から）
　Ⅴ区 ST501　P1 出土状況（西から）
　Ⅴ区 ST502 全景（北から）
図版 11
　Ⅴ区 ST502　P1 出土状況（北から）
　Ⅴ区 SD502 全景（東南から）
　Ⅴ区 SD517 全景（南から）
　Ⅵ区 SB607，SD603 全景（北から）
　Ⅵ区 SD603，SR604 全景（南から）
　Ⅵ区掘立柱建物群全景（東から）
　Ⅵ区 SB601･603 全景（北から）
　Ⅵ区 SB601 全景（北東から）
図版 12
　Ⅵ区 SB603･604 全景（北から）
　Ⅵ区 SB605 全景（北から）
　Ⅵ区 SB606 全景（北から）
　Ⅵ区 SK602 全景（南から）
　Ⅵ区 SD601･602 全景（北から）
　Ⅵ区 SD602 全景（南から）
　Ⅵ区 SD602 土層断面（南から）
　Ⅵ区 SD603，SK606 土層断面（北から）
図版 13
　Ⅵ区 SD604 遺物出土状況（南から）
　Ⅵ区 SD604 完掘状況（南から）
　Ⅵ区 SX601・602 全景（北から）
　Ⅵ区 SD601，SX605 全景（南から）
　Ⅵ区 SR601 全景（南から）
　Ⅵ区 SR602 全景（南から）
図版 14
　Ⅵ区 SR602 北半上層鉄鏃出土状況
　Ⅵ区 SR602 遺物出土状況（南から）
　Ⅵ区 SR603 南部中・下層遺物出土状況（南から）
　Ⅵ区 SR603 南部中・下層遺物出土状況（南から）
　Ⅵ区 SR604 中・下層遺物出土状況（東から）
　Ⅵ区 SR604 中層遺物出土状況（北から）
　Ⅶ－１区全景（東から）
　Ⅶ－２区 SH701 全景（南から）
図版 15
　Ⅶ－２区 SH701 遺物出土状況（北から）
　Ⅶ－２区 SH701 遺物出土状況（南から）
　Ⅶ－２区 SH701 遺物出土状況（西から）

Ⅶ－２区 SB713･721 全景（東から）
Ⅶ－２区 SB715･716 全景（南から）
Ⅶ－２区 SB718 全景（南から）
Ⅶ－２区 SB717･719（南から）
Ⅶ－３区 SB727 完掘状況南（東から）
図版 16
Ⅶ－３区 SB710・727・728 全景（東から）
Ⅶ－３区 SB728 全景（南から）
Ⅶ－３区 SB730 全景（西から）
Ⅶ－３区 SD708 ～ 710 全景（西から）
Ⅶ－４区全景（西から）
Ⅷ－１区全景（東から）
Ⅷ－１区 SB801（南から）
Ⅷ－１区 SB804 全景（西から）
図版 17
Ⅷ－１区 SB806 全景（南から）
Ⅷ－１区 SB807 全景（南から）
Ⅷ－１区 SB807･808 全景（南から）
Ⅷ－１区 SB808 全景（西から）
Ⅷ－１区 SD816 遺物出土状況（東から）
Ⅸ－１区全景（東から）
Ⅸ－１区 SB901・902 全景（東から）
Ⅸ－１区 ST901（北から）
図版 18 ～ 25
兀塚遺跡出土遺物

第Ⅰ章　調査の経緯と経過

第１節　発掘調査に至る経緯・経過

兀塚遺跡は、高松市檀紙町から円座町に位置する遺跡である。当該地は四国横断自動車道高松西インターに隣接し、同インターが竣工後には交通量は飛躍的に増大した。交通量の増加に伴い香川県土木部道路建設課（現道路課）は、高松西インターから東西に続く県道三木国分寺線の拡幅工事を計画した。工事の照会を受けた県教育委員会文化行政課（現生涯学習･文化財課）は、遺跡の有無を確認するため、用地の条件が整った区域より適宜試掘調査を実施した。その結果、工事を行う際に発掘調査が必要な範囲が確定し、平成７年度から財団法人香川県埋蔵文化財センターが本調査を実施することになった。

平成７年度の調査は遺跡の東半部にあたるⅠ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ－１、Ⅵ区の調査を実施した。対象地は全面農地で、調査面積は4,280㎡を測る。平成７年９月から平成８年３月までの７ヶ月間で実施した。７年度の調査では、弥生時代中期頃の円形周溝状遺構、古代の小規模な集落跡を確認した。また、集落周辺からは弥生時代～古代の数条の自然河川を確認した。河川からは集落からの廃棄物として、多量の遺物が出土した。河川の一部には古代～中世前半頃の水田跡を形成している流路も確認された。

平成８年度の調査は遺跡の西半部にあたるⅤ－２、Ⅶ－１・２・４、Ⅷ－１・２、Ⅸ－１・２区の調査を実施した。対象地は全面農地で、対象面積は3,529㎡を測る。調査は平成８年４月から９月までの６ヶ月間で実施した。８年度の調査では、多数の建物跡からなる古代及び中世以降の集落跡を確認した。

平成９年度の調査は平成７年度と８年度の境に位置する、Ⅶ－３区の調査を実施した。対象面積は338㎡を測る。調査は平成９年４月から５月までの２ヶ月間で実施した。９年度の調査は、平成８年度調査で確認した集落内の発掘調査にあたり、数棟の古代の建物跡を確認した。

第１図 遺跡位置図

第１表　年度別発掘調査担当一覧

年度	調査担当	調査区	面積（㎡）	調査期間
平成７年度	蘆原・蔵本・門脇	Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ－１、Ⅵ	4,280	H7．９～H8．３
平成８年度	森下・樋本・三好	Ⅴ－２、Ⅵ、Ⅶ－１・２・４、Ⅷ－１・２･４、Ⅸ－１・２	3,529	H8．４～９
平成９年度	宮崎・岡本・東条	Ⅶ－３	338	H9．４～５
計			8,147	

第２表　平成７～９年度調査体制

平成７年度

香川県教育委員会事務局文化行政課			財団法人香川県埋蔵文化財調査センター		
総括	課長	高木　尚（～10.23）	総括	所長	大森　忠彦
		藤原　章夫（10.24～）		次長	真鍋　隆幸
	主幹	小原　克己	総務	参事	別枝　義昭
	課長補佐	高木　一義		係長	前田　和也
総務	係長	源田　和之（～5.31）		主査	西村　厚二
	係長	山崎　隆（6.1～）		主査	大西　健司（～5.31）
	主査	星加　宏明		主任主事	西川　大（6.1～）
	主事	高倉　秀子	調査	参事	糸目　末夫
埋蔵文化財	副主幹	渡部　明夫		主任文化財専門員	廣瀬　常雄
	主任技師	森下　英治		係長	大山　真充
	技師	塩崎　誠司		文化財専門員	蘆原　秀稔
				主任技師	蔵本　晋司
				調査技術員	門脇　範子

平成８年度

香川県教育委員会事務局文化行政課			財団法人香川県埋蔵文化財調査センター		
総括	課長	藤原　章夫	総括	所長	大森　忠彦
	課長補佐	高木　一義		次長	小野　善範
	課長補佐	北原　和利	総務	参事	別枝　義昭
総務	係長	山崎　隆		係長	前田　和也
	主査	星加　宏明		主査	西川　大
	主事	國方　秀子（～5.31）		主査	西村　厚二（～5.31）
	主事	打越　和美（6.1～）		主査	佐々木隆司（6.1～）
埋蔵文化財	副主幹	渡部　明夫	調査	参事	近藤　和史
	文化財専門員	木下　晴一		主任文化財専門員	廣瀬　常雄
	技師	塩崎　誠司		主任文化財専門員	大山　真充
				文化財専門員	森下　友子
				文化財専門員	樋本　清輝
				調査技術員	三好　弘美

平成９年度

香川県教育委員会事務局文化行政課			財団法人香川県埋蔵文化財調査センター		
総括	課長	菅原　良弘	総括	所長	大森　忠彦
	課長補佐	北原　和利		次長	小野　善範
総務	係長	山崎　隆	総務	参事	別枝　義昭
	主査	星加　宏明（～5.31）		副主幹	田中　秀文（6.1～）
	主査	松村　崇史（6.1～）		係長	前田　和也（～5.31）
	主事	打越　和美		主査	西川　大
埋蔵文化財	副主幹	渡部　明夫		主査	佐々木隆司
	文化財専門員	木下　晴一		主事	細川　信哉（6.1～）
	技師	塩崎　誠司	調査	参事	近藤　和史
				主任文化財専門員	大山　真充
				主任文化財専門員	藤好　史郎
				文化財専門員	宮崎　哲治
				文化財専門員	岡本　利
				調査技術員	東条　貴美

第２節　整理作業の経過

兀塚遺跡の整理作業は平成 24 年と 25 年の 2 ヵ年に分けて実施した。平成 24 年度は 4 月～ 9 月までの 6 ヶ月間、平成 25 年度は 8 ～ 10 月までの 3 ヶ月間の合計 9 ヶ月間で整理を実施した。

初年度にあたる平成 24 年度は、まず遺構から出土した土器の接合と抽出作業を先行した。その結果、抽出された実測遺物は当初予定していた数量を超え、土器 912 点、石器 93 点、木器 12、鉄器 3 点、合計 1,020 点に至った。実測作業は 6 月から土器実測から開始し、9 月までの 4 ヶ月間を要した。

遺構図面の整理は遺物整理と並行し順次進めた。まず原図のチェックと､図面のスキャニングを行い、原図をデジタル化した後に全体図作りから開始した。その後、個別の遺構挿図作りに移行した。なお、遺構の整理に際しては、整理担当が発掘担当と異なるため、残された資料から個別の遺構の状況を把握する際に、苦慮する局面が多々あった。

先述したように、本整理作業の報告遺物点数が当初予定より超過したことから、整理工程の再考を計る必要が出てきた。その結果、専門の民間業者に実測遺物のトレース業務の一部を委託することで、作業工程の短縮を計る事になった。また、出土遺物の写真撮影に際しては、基本的には直営で実施したが、集合写真など難易度の高いものについては、平成 24 年度に民間業者に委託して撮影を実施した。

各種分析委託業務については、平成 24 年度内に実施する必要があり、年度末に間に合うように発注を急いだ。分析対象としては、Ⅲ区の自然河川から古代～中世の水田跡を検出したこともあり、水田の有無や当時の自然環境を復元するため、プラントオパールや花粉分析、樹種同定等を平成 24 年度に実施した。また、河川の河床から古代の建築部材の良品が数点出土しており、保存処理を委託することになった。

平成 25 年度の整理作業は 8 月から再開した。平成 25 年度の主になる業務は報告書の原稿執筆及び編集作業である。順次作業を進め各種作業が完了した段階で、遺物や図面類の収納作業を行い、遺構・遺物の整理作業を終了した。

平成 24・25 年度の整理作業に係わる調査体制は次表のとおりである。

第３表　平成 24・25 年度整理体制

平成 24 年度

香川県教育委員会事務局生涯学習・文化財課			香川県埋蔵文化財センター		
総括	課長	炭井　宏秋	総括	所長	藤好　史郎
	副課長（総括）	木虎　淳		次長	真鍋　正彦
総務・生涯学習	副主幹	松下　由美子	総務課	総務課長（兼務）	真鍋　正彦
推進グループ	主任主事	白川　弘二		副主幹	林　　文夫
				主任	宮武　ふみ代
文化財グループ	課長補佐	西岡　達哉		主任	中川　美江
	主任文化財専門員	森下　英治		主任	高木　秀哉
	文化財専門員	松本　和彦	資料普及課	課長	森　　格也
				主任文化財専門員	西村　尋文
				嘱託整理作業員	山地　眞理子
					猪木原美恵子
					甲斐　美智子
					香西　栄理
					佐々木博子
					竹内　悦子
					東渕　愛
					原　　節子

平成 25 年度

香川県教育委員会事務局生涯学習・文化財課			香川県埋蔵文化財センター		
総括	課長	増田　宏	総括	所長	真鍋　昌宏
	副課長	木虎　淳		次長	前田　和也
総務・生涯学習	副主幹	松下　由美子	総務課	総務課長（兼務）	前田　和也
推進グループ	主任主事	白川　弘二		主任	俟野　英二
	主任主事	丸山　千晶		主任	宮武　ふみ代
文化財グループ	課長補佐	片桐　孝浩		主任	中川　美江
	主任文化財専門員	山下　平重		主任	高木　秀哉
	文化財専門員	松本　和彦	資料普及課	課長	森　　格也
				主任文化財専門員	西村　尋文
				嘱託整理作業員	山地　眞理子
					猪木原美恵子
					中野　優美
					佐々木博子
					西本　智子
					田中　沙千子
					原　　節子
					香川　和子

（参考文献）
香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター　1996　平成７年度「兀塚遺跡」『県道関係埋蔵文化財発掘調査概報』
香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター　1997　平成８年度「兀塚遺跡」『県道関係埋蔵文化財発掘調査概報』
香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター　1998　平成９年度「兀塚遺跡」『県道・河川関係埋蔵文化財発掘調査概報』

第Ⅱ章　調査の方法

第１節　発掘調査の方法

兀塚遺跡の調査区は、幅約 18 m、延長約 570 m、面積 8,147㎡を測り、対象地は全面農地であった。発掘調査は平成７年度から９年度までの３ヵ年で実施する必要上、調査対象地は最低３区域に分けて調査を行う必要があった。また、対象地の延長が長いため、周辺の土地区画をもとに東から西に向けてⅠ区～Ⅸ区に区分し、各調査区単位で調査を実施することにした。発掘調査に際しては、残土の仮置き場を調査区内で設ける必要があった。調査区内で仮置き場を確保するには、調査地区と仮置き場地区を交互に入れ替えて調査を進める必要があり、調査区は更に細分された。そのため、Ⅴ区をⅤ－１・２区、Ⅶ区をⅦ－１～４区、Ⅷ区をⅧ－１・２区、Ⅸ区をⅨ－１・２区に細分し、合計 15 区画に区分して調査を進める事になった。

機械掘削は地元の土木業者と契約し重機で行った。調査事務所や仮設電力及び主な調査用具は地元業者とリース契約を結び調査に用いた。現場作業員はセンターとの直接契約により雇用し、人力掘削等の作業にあたった。

調査の基準点については測量業者に委託して設定した。遺構の全体測量は航空測量業者に委託し 1/100 と 1/50 の全体図を作成した。測量の方法としては､ヘリコプターによる航空測量により実施した。なお、現場の個別写真撮影や遺物の出土状況・土層断面図等の個別の実測作業については、適宜担当職員が分担して実施した。

なお、Ⅲ区の自然河川からは古代～中世の水田跡を検出したこともあり、周辺の自然河川に水田域が広がる可能性が推定された。そのため、Ⅲ区周辺では水田の有無や当時の自然環境を復元するため、プラントオパールや花粉分析を視野に入れて土壌を採集した。

第２節　整理作業の方法

１.遺構名の整理

兀塚遺跡の発掘調査は多年度に及び調査区が細分され、遺構名は年度単位ないしは調査区単位で 01 番から付されているため、報告の都合上再整理を必要とした。遺構名を付す方法としては、調査区の名称を残した通し番号を付けるのが混乱を防ぐ得策と考え、番号の先頭に調査区番号を付した三桁の遺構名を付けることにした。

例）検出時遺構名：Ⅰ区の SD01 →報告遺構名 :SD101

２.遺構の整理

遺構図面の整理は遺物の整理と並行し順次進めた。まず、原図のチェックと、図面のスキャニングを行い、原図をデジタル化した後に全体図作りから開始した。その後、個別の遺構挿図を作成した。また、掘立柱建物は抽出しきれていないものや、柱穴の組み合わせ等を含め再整理を行った。その結果Ⅵ区以西で数棟の建物の追加と、建物に伴う廂の確認や構造の修正等が出てくることになった。

Ⅸ−2区
Ⅸ−1区
Ⅷ−2区
Ⅷ−1区
Ⅶ−4区
Ⅶ−3区
Ⅶ−2区
Ⅶ−1区
Ⅵ区
Ⅴ−2区
Ⅴ−1区
Ⅳ区
Ⅲ区
Ⅱ区
Ⅰ区
新池
古川
中間橋
森光橋
三宝荒神社
県道三木国分寺線
0
100m
(1/3,000)

第２図 調査区割図

３.遺物の整理

遺物実測については、出土遺物の中で図化可能な遺物については極力図化した。なお、本整理作業の報告遺物は数が多く、整理期間との関係で効率化を計る必要が出てきた。そのため、実測遺物のトレース作業の一部を民間業者に委託した。

遺物写真撮影については、基本的に担当者が実施したが、難易度の高いものについては専門業者に撮影を委託した。

４.自然科学分析、保存処理

Ⅲ区周辺の自然河川から古代～中世の水田跡を検出したこともあり、水田の有無や当時の自然環境を復元するため、プラントオパールや花粉分析、樹種同定等の化学分析を平成 24 年度に実施した。

本遺跡からは、木製品、金属製品等の保存対象の遺物が数点出土している。木製品については、自然河川の河床から古代の建築部材の良品が数点出土している。また、掘立柱建物の柱穴から数点柱材が出土している。建築部材については平成 24 年度に委託で保存処理を行った。柱材については、劣化が進んでいることもあり、当センターの PEG 槽で平成 24 年度から保存処理作業を開始し、翌 25 年度に終了した。本遺跡の金属製品中に鉄鏃が 1 点出土している。この遺物は材質上緊急性を伴うことから、平成 7 年度の発掘調査時に委託で保存処理を行った。

（参考文献）
香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター　1996　平成 7 年度「兀塚遺跡」『県道関係埋蔵文化財発掘調査概報』
香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター　1997　平成 8 年度「兀塚遺跡」『県道関係埋蔵文化財発掘調査概報』
香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター　1998　平成 9 年度「兀塚遺跡」『県道・河川関係埋蔵文化財発掘調査概報』

第Ⅲ章　地理的・歴史的環境

第１節　地理的環境

高松平野は東西約 11.0㎞、南北約 10.0km の広さを持つ香川県を代表する平野の一つである。西方には五色台・六ツ目山・堂山、東方には立石山・雲附山・五瀬山、南方には上佐山などの山塊が取り囲み、北には瀬戸内海が開ける。この高松平野は本津川・香東川・春日川・新川等の中小河川により形成された扇状地性の沖積平野である。兀塚遺跡は高松平野西辺部、高松市檀紙町兀塚から円座町佐古・川向までの区間に位置する遺跡である。西辺には本津川の支流の一つ古川が、香東川の上流附近から本津川まで蛇行しながら北上しており、この遺跡は古川東岸を西端として、東方の香東川方面に位置する。

遺跡周辺は農地が広範囲に広がり多数の溜池が点在し、標高は約 30 m前後を測る。調査対象地の東半部では、香東川ないし古川の上流域から流下していたであろう旧河川の跡が南北方向へかなり長区間確認できる。事実、発掘調査の際には複数の埋没小河川を検出している。

第２節　歴史的環境

高松市檀紙町周辺は、最近の四国横断自動車の工事や県道の新設に伴う発掘調査により、埋蔵文化財の資料は増加傾向にあるが、いまだに資料不足が指摘されるのは否定できない。そのため、今回報告する兀塚遺跡の調査成果を含めたうえで、この地域の歴史的な流れを簡単に触れる。

旧石器時代に係わる資料は比較的豊富で、数遺跡の調査例がある。中間西井坪遺跡の調査では AT 火山灰層上位で、ナイフ形石器・角錐状石器を含む２万点あまりの石器類を検出した、これらの資料は多数の石器ブロックや接合資料を伴う良好な一括資料であり、香川県の旧石器を研究するうえで大変貴重な調査成果になった。また、中間西井坪遺跡より東方の中間東井坪遺跡・正箱遺跡・中森遺跡等の諸遺跡でも瀬戸内技法以降の特徴を留めた石器群を確認している。

縄文時代の遺跡は少ない。草創期の資料では兀塚遺跡の河川から出土したサヌカイト製の有舌尖頭器がある。また、正箱遺跡では後期の溝状遺構、国分寺六ツ目遺跡では後期のサヌカイト集積遺構等を確認している。

弥生時代になると遺跡数は増加する。前期～中期の資料は少ないが、兀塚遺跡の河川中より後期の土器に混じって弥生時代前期～中期の土器が少量出土している。また、兀塚遺跡では中期中葉以降の円形周溝墓の可能性が高い周溝状の遺構を検出している。ただ、削平で主体部を欠いているため、この遺構の評価については問題を残している。集落に伴う遺構としては、正箱遺跡で中期前半以降の円形竪穴建物跡を１棟確認した。また、中間西井坪遺跡では後期後半～古墳時代初頭頃の集落の一部を確認しているが、いずれも集落の中心には至っていない。そのため、正箱遺跡や中間西井坪遺跡の周辺域には、中期～後期の集落の中心が所在することは間違いない。

古墳時代では古墳と集落跡の調査がある。古墳の調査例としては、国分寺六ツ目古墳と中間西井坪遺跡の調査例があげられる。国分寺六ツ目古墳は４世紀中頃の小型の前方後円墳で、竪穴石室・粘土槨・箱式石棺等の主体部を確認した。中間西井坪遺跡内では小規模な古墳を３基確認した。中間西井坪遺跡１号は前期後半の前方後円墳、中間西井坪遺跡２・３号墳は円墳で中期後半以降の古墳である。

古墳以外で注目できるのは中間西井坪遺跡で、埴輪生産関係の焼成土坑・作業場としての大型竪穴住居跡等の工房跡を確認した点である。円筒埴輪、盾形などの形象埴輪を始めとして、箱形・割竹形・円筒形の土製棺が出土した。また、円筒埴輪、箱形土製棺の形状などから、土製棺は香東川下流域の今岡古墳への供給が想定されている。

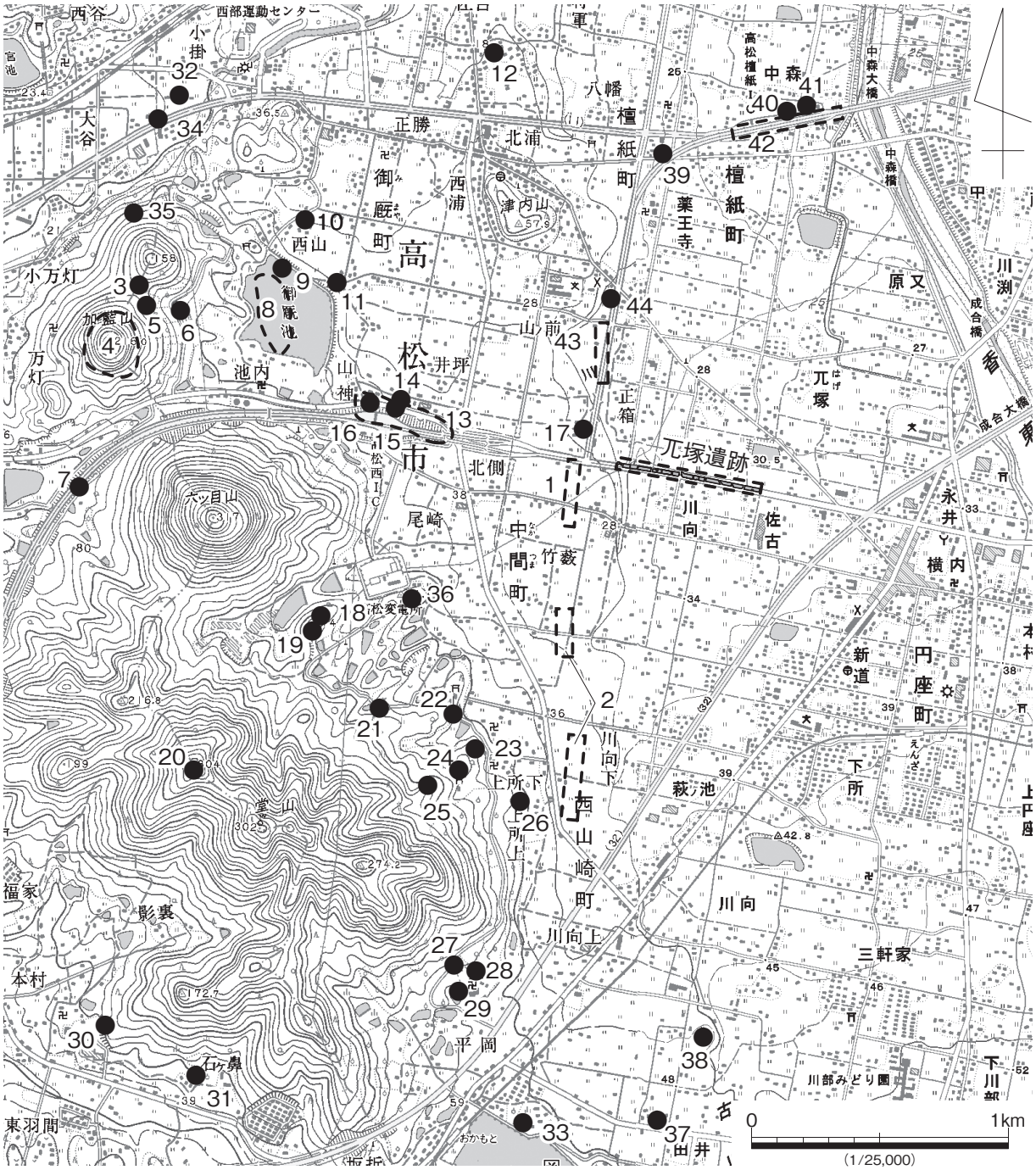
古代集落の調査としては、本遺跡をはじめ中間西井坪遺跡・正箱遺跡の調査例があげられる。これらの調査で確認した建物群の配置には比較的共通する点が見出せる。例えば6世紀末～7世紀段階の建物配置は不揃いであるが、正箱遺跡等で確認されている8世紀以降の集落では、条里地割の坪堺に相当する東西溝を調査区内で検出している。建物群もその溝跡を基準に分布し、建物主軸も条里方位に向きを揃えており、正箱遺跡周辺の条里地割の施行時期が8世紀中頃以降を示している良事例となっている。なお、当地を含めた香東川の東・西両岸に広がる条里地割は、北から約10°前後東へ向く方位に合わせた地割である。

条里地割と密接に係わる課題として、南海道の問題がある。讃岐国の南海道と条里地割の代表的な研究に、歴史地理学の金田氏の研究がある。氏は空中写真と地形図を基に讃岐国を東西に貫通する路線を復元した。氏の視点としては、平野部に良好に残る条里地割を復元するにあたり、基準となる地形の変化点を数地点で抽出し、その基点間を結ぶ基準線をもとに条里地割を復元した。その復元の過程で抽出した条里地割の余剰帯や切り通し状の地形から、古代南海道の路線を復元した。高松平野の南海道は、①三木郡・山田郡郡境木田郡三木町「白山」付近→②高松市国分寺町「伽藍山・六ツ目山」→③香川郡・阿野郡の郡境を直線で結ぶ路線で、主軸は北から約10°前後東に傾く方位を基準にしている。

金田氏によれば、兀塚遺跡の約200m南には条里地割の東西軸の余剰帯が認められ、古代南海道ルートに推定されている。このルート上で行われた川原遺跡の調査では、南海道の一部と考えられる8世紀後半頃の道路側溝を検出しており、このルート上に南海道が敷設されていた可能性が更に高くなった。南海道が通っていた8世紀後半頃は兀塚遺跡や正箱遺跡の盛期とも重複するため、これらの集落跡との係わりが今後も問題視される。

中世～近世の遺跡としては、兀塚遺跡、薬王寺遺跡等で集落跡を確認している。また、中世の当地は讃岐の国人「羽床氏」の勢力圏に含まれ、国分寺町の「堂山」に所在する堂山城跡はその家臣にあたる「福家氏」の拠点と言われている。また、堂山の山麓には堂山城の里城と考えられる福家居館の推定地もあるが、実態はいまだに不明瞭で今後の調査に期待したい。

（参考文献）
金田　章裕　1988「条里と村落生活」『香川県史第1巻通史編原始・古代』四国新聞社
西村　尋文　1994「第4章　第2節　正箱遺跡における古代集落の展開」『県道山崎御厩線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　正箱遺跡・薬王寺遺跡』香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター
香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター　1994『県道山崎御厩線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　正箱遺跡・薬王寺遺跡』
香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団　1996『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第25冊　中間西井坪遺跡』
香川県教育委員会　2003『香川県中世城館跡詳細分布調査報告』
香川県教育委員会・国土交通省四国地方整備局・日本道路公団　2004「中森遺跡」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第53冊　』
香川県教育委員会　2008『県道円座香南線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第2冊　本郷遺跡・川原遺跡』
西村　尋文　2011「第4章土地区画が語ること、第5章道が語ること」『讃岐国府の時代』香川県埋蔵文化財センター



1　川原遺跡
2　本郷遺跡
3　うたい塚古墳
4　伽藍山遺跡
5　伽藍山東麓古墳
6　山王神社古墳
7　国分寺六ツ目遺跡
8　御厩池遺跡
9　御厩池古墳
10　御厩天神社古墳
11　三つ塚古墳
12　御厩大塚
13　中間西井坪遺跡
14　中間西井坪２号墳
15　中間西井坪１号墳
16　中間西井坪３号墳
17　中間東井坪遺跡
18　失塚北古墳
19　失塚南古墳
20　堂山城跡
21　弓塚下古墳
22　西山崎１号墳
23　西山崎２号墳（稚倶塚）
24　西山崎３号墳
25　西山崎４号墳
26　北岡城跡（中間城跡）
27　本尭寺北１号墳
28　本尭寺北２号墳
29　本尭寺西古墳
30　本村古墳
31　石ヶ鼻古墳
32　大谷塚３号墳
33　奈良須池古墳
34　大谷塚４号墳
35　万灯塚４号墳
36　新池東遺跡
37　川岡遺跡Ⅰ区
38　川岡遺跡Ⅱ区
39　八幡遺跡
40　中森２号墳
41　中森１号墳
42　中森遺跡
43　正箱遺跡
44　薬王寺遺跡

第３図 周辺遺跡位置図

第Ⅳ章　兀塚遺跡の調査

第１節　兀塚遺跡の概要

兀塚遺跡の調査区は、幅約 18 m、延長約 570 m、面積 8,147㎡の調査区で、対象地はほぼ全面農地であった。調査区は周辺の土地区画をもとに東から西に向けてⅠ区～Ⅸ区の 9 調査区に区分したが、調査の都合上更に細分を必要とする区域がでてきたため、15 区画に細分して調査を実施した。

Ⅰ～Ⅳ区は平成7年度に実施した調査区東半部の東部に位置し、延長約233ｍを測る調査区である。Ⅰ・Ⅱ区では香東川水系の上流域から派生する 3 条の埋没小河川 SR201 ～ 203 を検出した。遺物が少なく時期を決めるのが難しいが、古墳時代後期末頃から埋没が開始し、古代前半頃に埋没が完了しているようである。Ⅲ区からは 2 条の幅広の河川 SR301・302 と、両者を繋ぐ小規模な SR303 を検出した。河川からは集落からの廃棄物として、①弥生時代中期中葉～後期後半、② 7 世紀初頭、③ 8 ～ 9 世紀、④ 12 世紀頃の遺物が出土した。河川の埋没が終了した段階で、SR301・302 の上面には、古代・中世の水田跡を上下 2 面確認した。検出した水田跡は河川跡を利用した水田跡で、流路方向に畦畔の向きを揃え、旧流路の水源を利用した水田跡であり、坂出市下川津遺跡等で確認した古代の水田跡に類似している。Ⅳ区からは幅広で北東方向へ延びる河川 SR401 を検出した。この河川からは集落からの廃棄物として、弥生時代中期・後期後半、7 世紀前半～ 8 世紀頃の遺物が出土した。注目できる遺物としては、8 世紀中頃の杯底部外面に「中」と記載した墨書土器や、河床から出土した大型の建築部材などがあり、兀塚遺跡の古代集落の性格を推定するうえで重要な資料になっている。

Ⅴ・Ⅵ区は平成 7・8 年度に実施した調査区東半部の西部に位置し、延長約 96 ｍを測る調査区である。Ⅴ区からは、2 基の弥生時代中期以降の円形周溝状遺構、数条の 7 世紀前半～ 8 世紀後半の溝状遺構、近世以降の外郭溝を伴う屋敷地等を検出した。円形周溝状遺構は住居の外周を巡る周溝の可能性もあるが、周溝の規模等から墓の可能性が高い。ただ、削平により主体部を欠くため、若干の問題を残している。Ⅵ区からは古代の 7 棟の建物からなる集落グループと、3 条以上の流路が重複する河川跡 SR602・603・604 を検出した。河川からは弥生時代中期～後期後半、6 世紀末～ 7 世紀頃の遺物が多量に出土している。遺物の出土状況から推定して、SR602・603・604 は弥生時代後期後半以降には初期の流路が存在し、7 世紀前半以降に本格的に埋没が開始し始め、完全に平坦化するのは古代前半頃と考えられる。注目できる遺物としては、形状から土馬の脚部と推定される資料や、鉄鏃が 1 点出土しており、先述したⅣ区 SR401 の墨書土器を含め、兀塚遺跡の古代集落の性格を推定するうえで極めて示唆的な資料になった。

Ⅶ・Ⅷ・Ⅸ区は平成 8・9 年度に実施した調査区西半部に位置し、延長約 241 ｍを測る調査区である。Ⅶ区からⅨ区にかけては平坦な微高地が続き、微高地上には 7 世紀前半、12 ～ 13 世紀、近世以降等の集落が展開している。住居跡としては竪穴建物 1 棟、掘立柱建物はⅦ区 30 棟、Ⅷ区 8 棟、Ⅸ区 4 棟合わせて 43 棟の住居を確認した。大まかな傾向としては、7・8 世紀頃の古代の建物が約 6 割、12 ～ 13 世紀頃の中世の建物が約 4 割を占める。建物の分布傾向としては、概ねⅦ・Ⅷ・Ⅸ区の全域から確認しているのであるが、古代の建物はⅦ－ 1 ～ 3・Ⅸ－ 1 区、中世の建物はⅦ－ 2 区・Ⅷ－ 1 区に集中する傾向がある。

注目される遺構としては、Ⅸ－ 1 区で梁間 6 ｍ、桁行 13 ｍ以上、面積 78㎡以上の条里地割方向に向く南北棟の大型建物 SB901 を確認している。遺物が極めて少量のため、時期判断に問題を残すが、検

出状況から推定して古代の建物跡と考えられる。周辺に同時代の建物等が認められないため、具体的な性格については不明瞭な点が多いが、先述したように近くの河川から墨書土器や土馬片等が出土しており、公的施設の一端の可能性が高い。

Ⅸ－２区は調査区西端部に位置し香東川の一支流「古川」の東岸の氾濫源にあたる区域である。そのため、Ⅷ区から延びる微高地は途切れ、レベルも極端に下がる。耕作土直下には細砂・粗砂層が広範囲に堆積しており、遺構・遺物伴に検出できなかったため、部分調査で調査を終えた。浅いトレンチ数本で調査を終えたため、下層の堆積層中からの遺物を採集していない。そのため、古川がいつ頃この微高地周辺に至ったのか問題を残すことになった。

第２節　基本層位

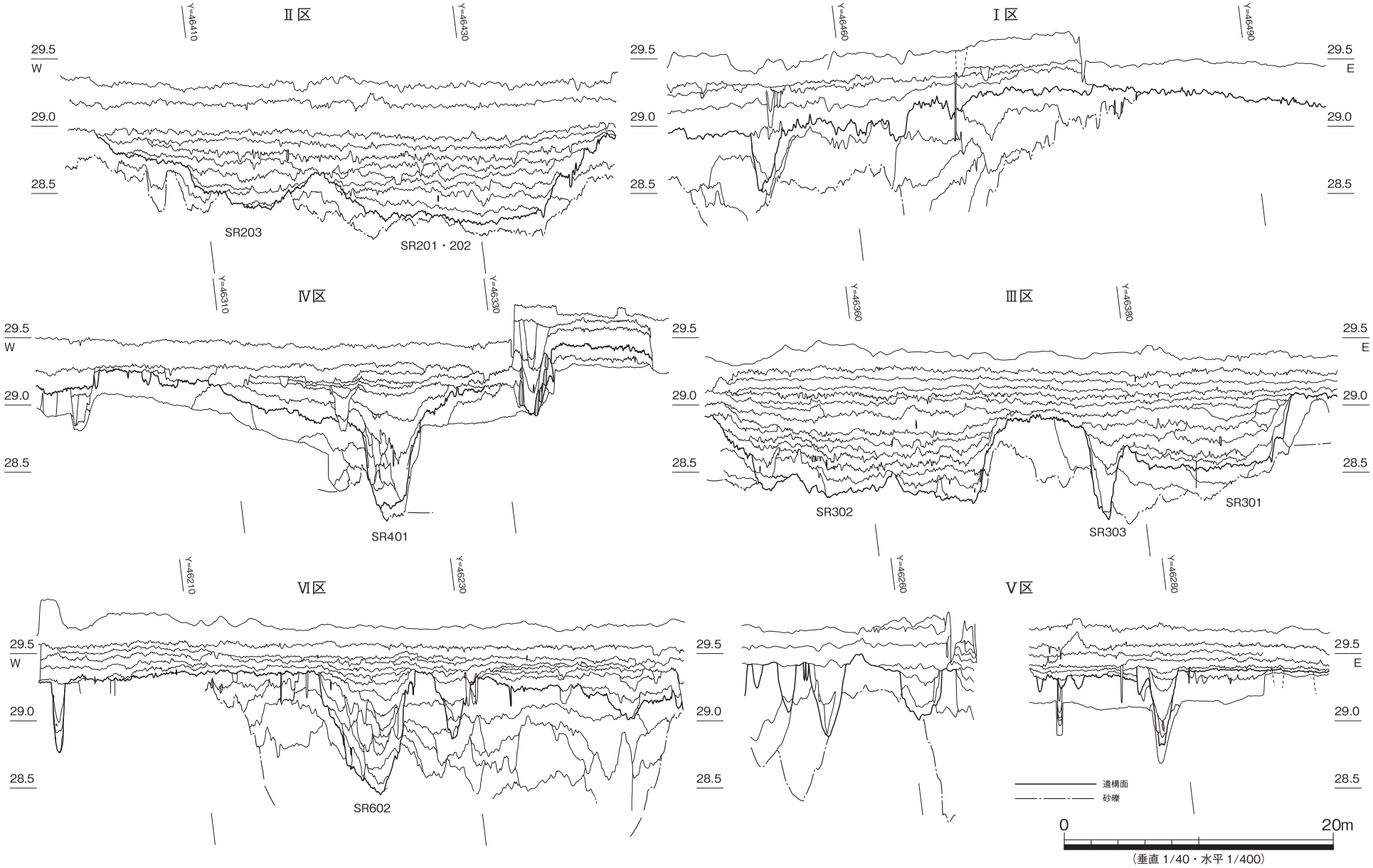
兀塚遺跡は香東川、古川等で形成された沖積地上に位置する。本遺跡の調査対象地は、一部の宅地を残しほぼ全面農地であった。遺構面の上位には、現在の耕作土や中･近世頃の耕作に伴う土層が、平均 0.3 ～ 0.4 m程の厚さで堆積し、これらの上層の堆積層を除去した後に、弥生時代以降の遺構面に至る。遺構面は丸亀平野や高松平野で通常黄褐色系の粘質土ないしシルト層をベースにし、その下位に河川堆積よるものと考えられる砂礫層が広範囲に堆積しているのが一般的である。

Ⅰ～Ⅵ区では、香東川や古川の上流域から続く数条の埋没河川を確認している。何れの河川も小規模な河川でⅡ区で２条、Ⅲ区で３条、Ⅳ区で１条、Ⅵ区で３条、合わせて９条の河川を確認している。河川間は平坦な微高地が広がり、微高地上には古代～中世の集落が展開している。

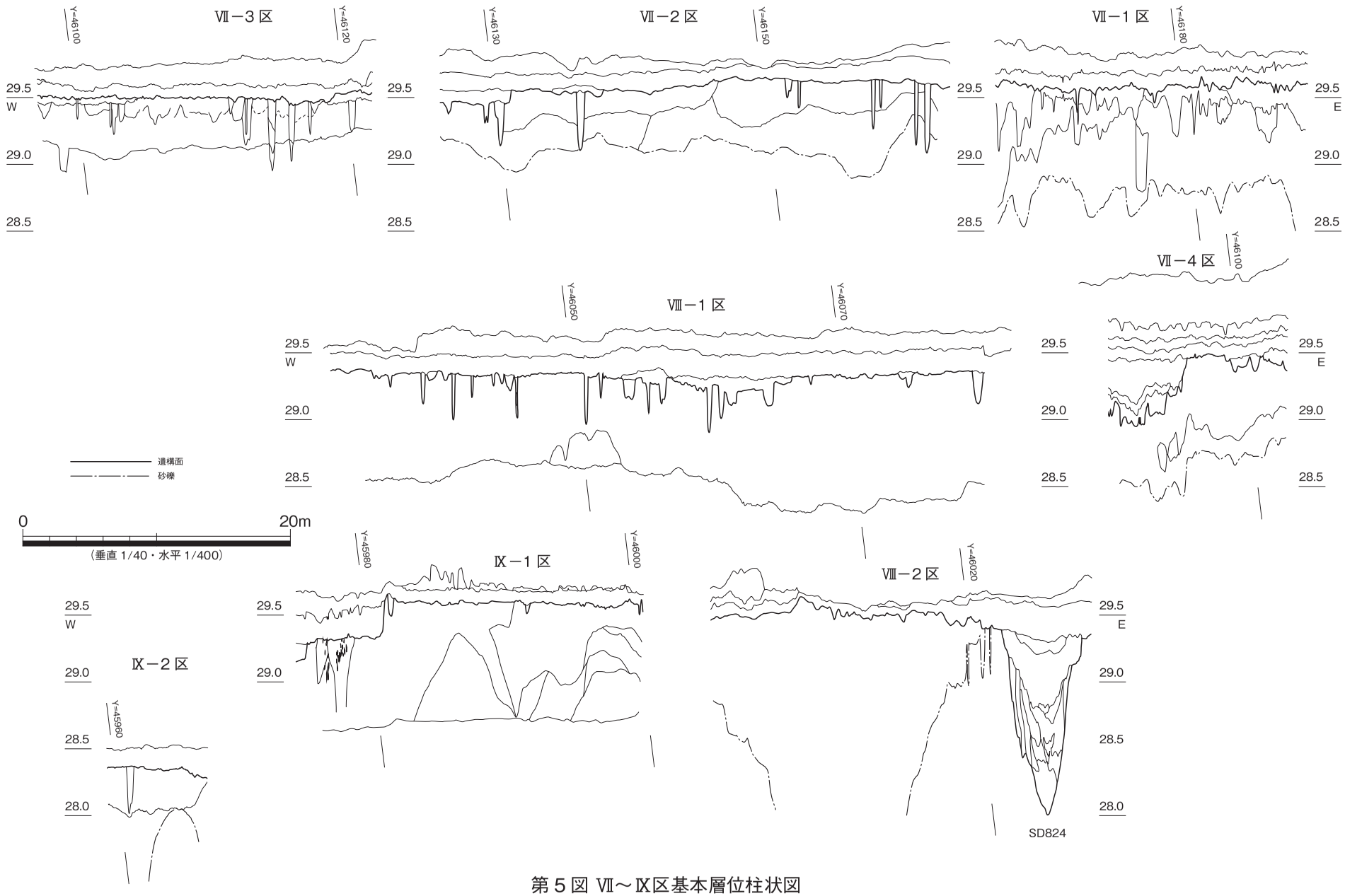
Ⅰ～Ⅵ区の地表面は標高 29.4 ～ 29.9 mを測る。遺構面は東端部にあたるⅠ・Ⅱ区で標高 29.0 m、Ⅲ・Ⅳ区で 29.1 ～ 29.3 m、Ⅴ・Ⅵ区で 29.4 mを測り、緩やかに東へ傾斜していることが解る。遺構面を形成するベースは、黄褐色系粘質土～シルト層や灰色系砂質土を主体にしている。黄褐色系粘質土～シルト層と灰色系砂質土の割合については、確認した埋没河川の河川堆積作用により、灰色系砂質土をベースにしている区域の方が多い。先のベース層は地点にもよるが層厚は薄く、平均すれば約 0.3 ～ 0.4 m を測る。ベース層下には砂礫層が広範囲に堆積している。Ⅰ・Ⅱ区で標高 28.6 m、Ⅲ・Ⅳ区で 28.8 m、Ⅴ・Ⅵ区で 29.9 mを測り、緩やかに東へ傾斜していることが解る。

Ⅶ～Ⅸ－１区ではⅥ区の西端部から続く微高地が安定して広がっている。Ⅸ－２区は古川の氾濫源にあたりレベルもⅨ－１区に比べ大きく下がる。微高地上では、古代～中世の集落が広範囲に展開している。氾濫源にあたるⅨ－２区は、耕作土直下には細砂・粗砂層が広範囲に堆積しており、遺構・遺物伴に検出できなかったためトレンチ数本で調査を終えた。下層からの遺物採集を行えていないため、古川がいつ頃この微高地周辺に至ったのか不明である。

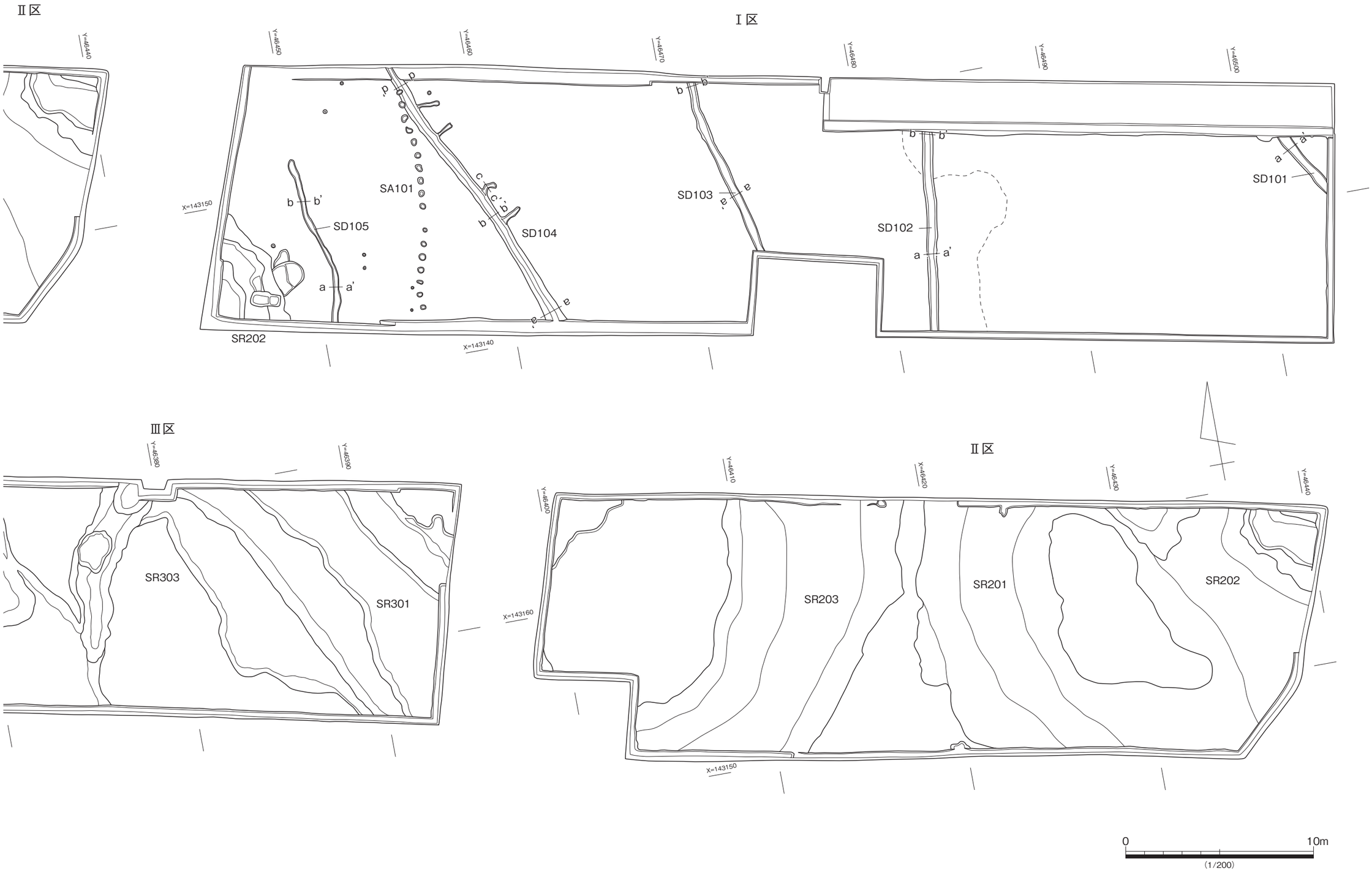
Ⅶ～Ⅸ－１区の地表面は標高約 29.7 mを測る。遺構面はⅦ・Ⅷ区で標高 29.3 ～ 29.5 m、Ⅸ－１区で 29.3 m、Ⅸ－２区で 28.5 mを測り、古川氾濫源にあたるⅨ－２区で大きく下がっている事が解る。遺構面を形成するベースは灰色系砂質土層が主体を占め、一部砂礫層が遺構面上に表れる区域もある。



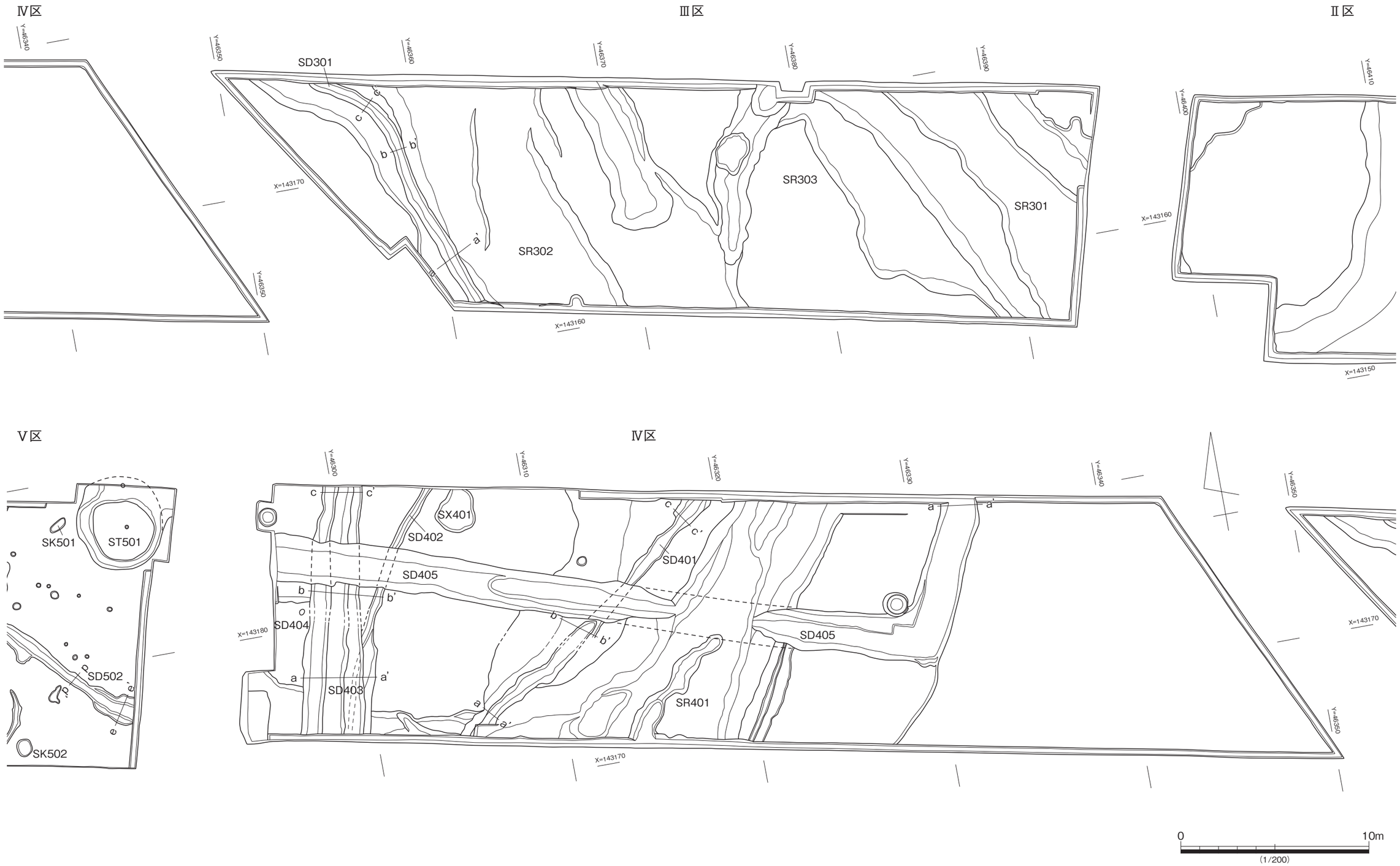
第４図 Ⅰ～Ⅵ区基本層位柱状図



第５図 Ⅶ～Ⅸ区基本層位柱状図



第６図 Ⅰ～Ⅱ区遺構配置図



第７図 Ⅲ～Ⅳ区遺構配置図

第３節　Ⅰ～Ⅳ区の調査

１.はじめに

Ⅰ～Ⅳ区は調査区東半部の東部に位置し、延長約 233 mを測る調査区である。Ⅰ・Ⅱ区からは河川 SR201 ～ 203 を検出した。遺物が少なく時期を決めるのが難しいが、古代前半頃に埋没したようである。Ⅲ区からは２条の幅広の河川 SR301・302 と、小規模な SR303 を検出した。河川からは集落からの廃棄物として、①弥生時代中期中葉～後期後半、②７世紀初頭、③８～９世紀、④ 12 世紀頃の遺物が出土した。また、SR301・302 の上面には、古代・中世の水田跡を上下２面確認した。

Ⅳ区からは幅広で北東方向へ延びる河川 SR401 を検出した。この河川からは集落からの廃棄物として、弥生時代中期・後期後半、７世紀初頭～８世紀頃の遺物が出土した。注目できる遺物としては、８世紀中頃の杯底部外面に「中」と記載した墨書土器や、河床から出土した大型の建築部材などがあり、兀塚遺跡の古代集落跡の性格を推定する上で重要な資料になった。

２.Ⅰ区の調査

（１）柵列状遺構

SA101（第８図）

Ⅰ区西半部で検出したピット列の遺構である。不整形で浅い小ピット 17 基で構成される。略南北方向へ配されているが、僅かに東に湾曲している。径約 0.2 ～ 0.4 m、深さ約 0.1 mを測る。配置に規則性等が認められなく、柱痕も認められないことから、柵列とみるより底面の凹凸が著しい溝跡が、削平により底面の窪み部分が残存した遺構の可能性が高い。

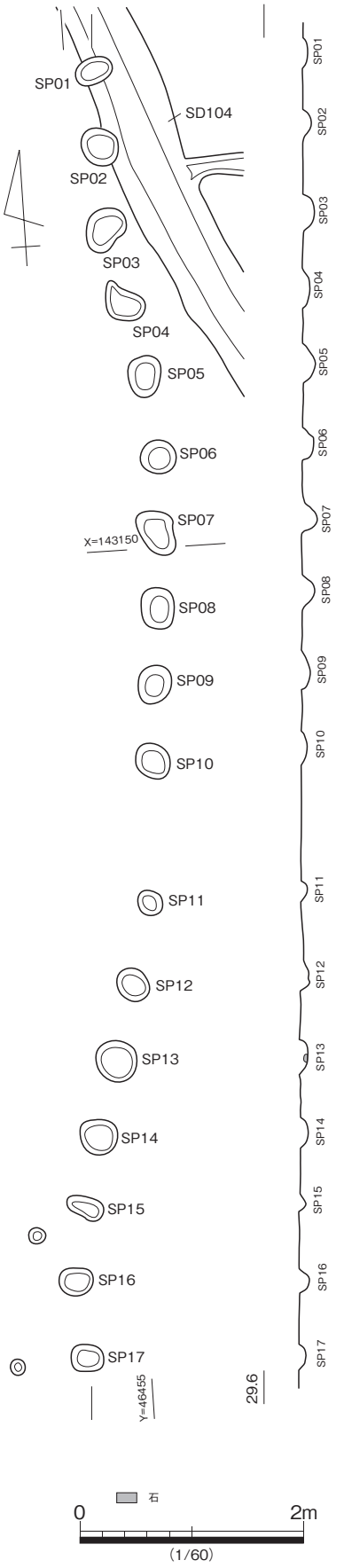
検出したピットからは明瞭な遺物は出土しなかった。そのため詳細な時期判断には無理がある。

（２）溝状遺構

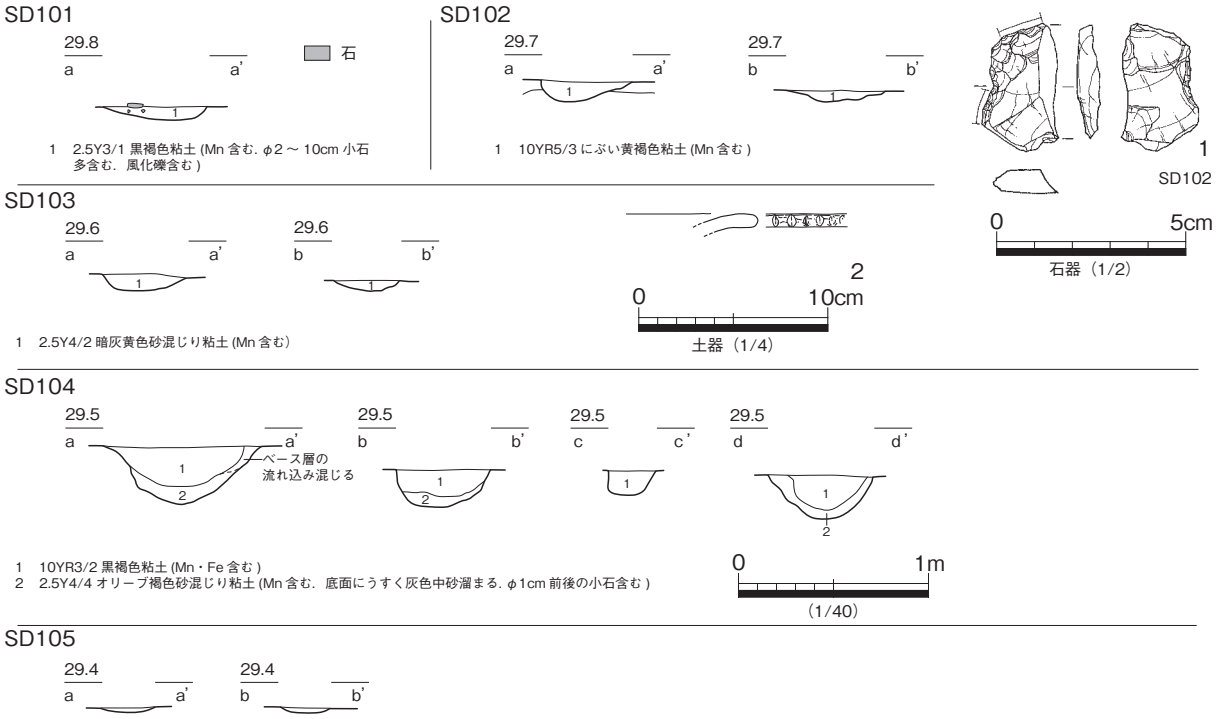
SD101（第９図）

Ⅰ区東端部で検出した北西方向に延びる直線溝である。検出長 4.0 m、幅 0.45 ～ 0.6 m、深さ 0.08 m、主軸方位 N30.0° W を測る。断面は不整形な皿状を呈し、埋土は黒褐色粘土である。

埋土からは弥生土器の細片が１点出土した。この溝跡は出土遺物が少なく詳細な時期判断には無理がある。



第８図 SA101 平・断面図



第 9 図 SD101 ～ 105 断面図，出土遺物

SD102（第 9 図）

Ⅰ区中央で検出した条里地割の方向に揃えて、南北方向に延びる直線溝である。検出長 10.01 m、幅 0.5 ～ 0.6 m、深さ 0.06 ～ 0.1 m、主軸方位 N8.0° E を測る。断面は不整形な皿状を呈し、埋土はにぶい黄褐色粘土からなる。

埋土からは弥生土器の細片と石器が 1 点出土した。1 はサヌカイト製の楔形石器である。形状から推定して、おそらく石庖丁の転用品であろう。SD102 からは弥生時代の遺物が数点出土しているが、条里地割の方向に向きを揃えている事や、埋土の状況等から、少なくとも古代以降の可能性が高い。

SD103（第 9 図）

Ⅰ区中央、SD102 の西側で検出した南北方向に延びる直線溝である。検出長 9.5 m、幅 0.4 ～ 0.6 m、深さ 0.06 ～ 0.08 m、主軸方位 N12.0° W を測る。断面は不整形な皿状を呈し、埋土は暗灰黄色粘土である。

埋土からは弥生土器の細片が出土した。2 は弥生前期前半以降の甕口唇部である。弥生土器が出土しているが、出土遺物が少なく詳細な時期判断には無理がある。

SD104（第 9 図）

Ⅰ区西半部で検出した北西方向に延びる直線状の溝跡である。検出長 15.4 m、幅 0.22 ～ 0.84 m、深さ 0.12 ～ 0.3 m、主軸方位 N25° W を測る。断面は浅い U 字状を呈し、埋土は上下 2 層に分かれ、上層は黒褐色粘土、下層はオリーブ褐色粘土からなる。

埋土からは弥生土器の細片が数点出土したが、出土遺物が少なく詳細な時期判断には無理がある。

SD105（第 9 図）

Ⅰ区西端部で検出した西方に湾曲気味に延びる溝跡である。検出長 9.0 m、幅 0.2 ～ 0.4 m、深さ 0.02 ～ 0.03 m、主軸方位 N11.0° W を測る。断面は浅い皿状を呈する。埋土から遺物が出土していないため時期判断は出来ない。

３. Ⅱ区の調査

（１）自然河川

SR201・202（第 10・11 図）

Ⅱ区東半部で検出した幅広で、浅い 2 条の自然河川である。2 条の河川は北端部と南端部で合流しているが、明瞭な切り合いは認められないため、ほぼ同時期に埋没した自然河川と考えられる。また、上層は SR201 の東に隣接する SR203 の堆積層と同一の堆積層で、最終的には SR203 と同時期に埋没したことが解る。

検出長約 14.0 m、合流している北端部の幅は約 17.0 m、中央部は二股に分かれ西側の SR202 は幅約 7.0 m、東側の SR201 は幅約 6.5 m、合流する南端部では幅約 19.0 m を測る。深さは北端部で約 0.6 m を測る。断面は地点により微妙に異なるが、概ね浅い谷状を呈する。底面は比較的平坦である。堆積層は 7 層前後に分かれる。図中の 3 層は最上層、4 層は上層、5・13・18 層は中層、14・15・16 層は下層に対応する。概ね上層は黄褐色系粘土、中層は灰色系粘土、下層は黒色系粘土を呈する。堆積層から推定して、かなり長期間湿地状を呈しており、時間をかけてゆっくりと埋没したことが推定される。

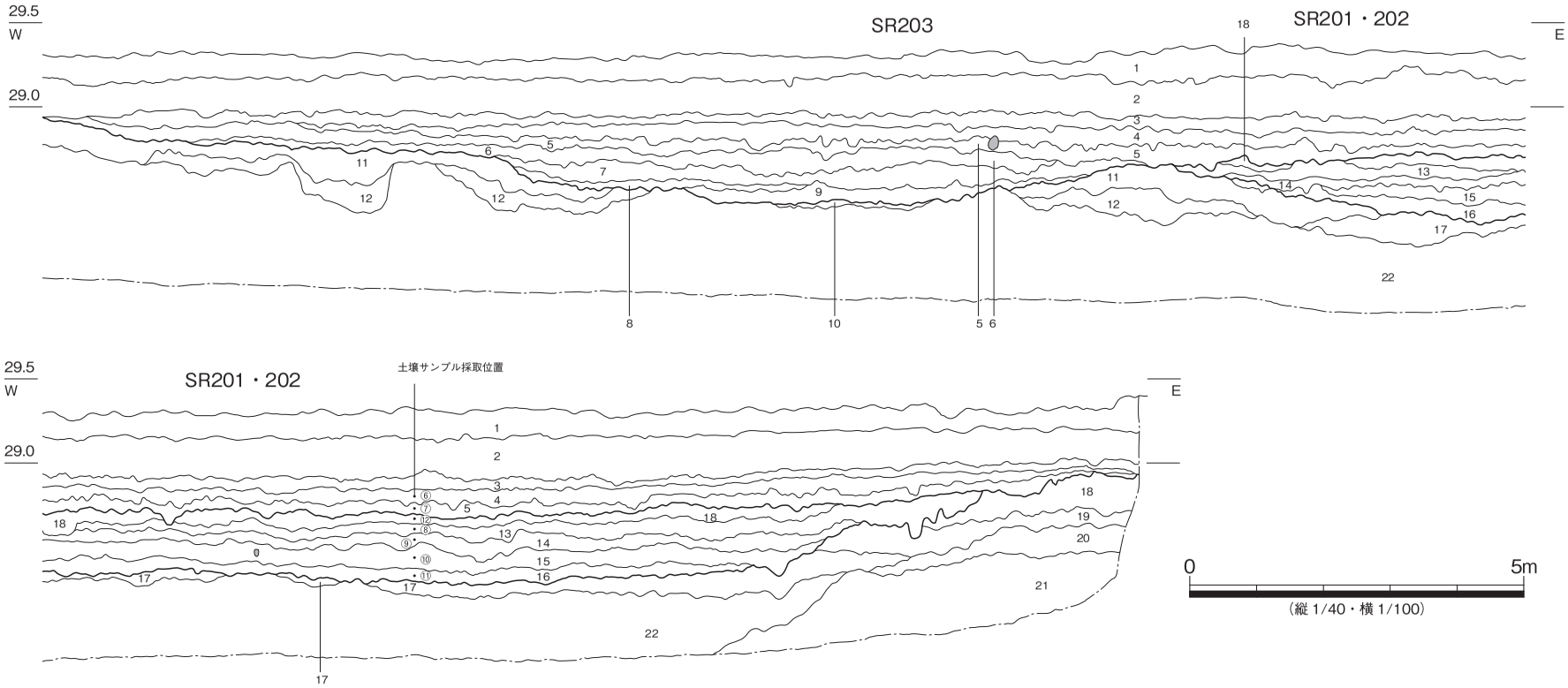
堆積層からは土師器・須恵器、サヌカイト製石器等が出土した。3 ～ 7 は須恵器の資料である。3・4 は杯蓋、5・6 は杯身、7 は須恵器鉢の上半部である。8 は土師器の甕の口縁部片である。9 ～ 12 はサヌカイト製石器で混入品であろう。9・10・11 は石鏃である。11 は平基式の大型石鏃である。12 は横長剥片の側縁部に刃部を設けた削器である。出土遺物が少なく問題を残すが、SR201・202 は SR203 同様に 8 世紀後半以降に埋没を開始し、9 ～ 10 世紀頃に平坦化した可能性が高い。

SR203（第 10・11 図）

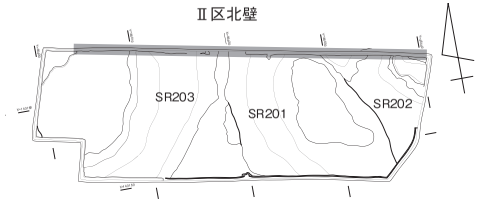
Ⅱ区西半部、SR202 の西に隣接して検出した幅広で、浅い自然河川である。北東方向から北方へ湾曲気味に向く。検出長約 15.0 m、北端部の幅約 9.5 m、南端部の幅約 7.0 m、北端部深さ約 0.6 m、断面は浅い皿状を呈し、底面は比較的平坦である。堆積層は上層から 3 ～ 9 層に分かれる。3 層は最上層、4 層は上層、5・6 層は中層、7 ～ 9 層は下層にあたる。上層は黄褐色系粘土層、下層は黄褐色～黒褐色系粘土を呈する。3 ～ 5 層の上層～中層上位では、SR201・202 の上位にまで堆積層が広範囲に広がっており、最終的には SR201・202 と同時期に埋没しているようである。

堆積層からは土師器･須恵器･陶磁器、サヌカイト製石器類等が出土した。13 ～ 17 は須恵器の資料で、13 は 6 世紀後半の杯蓋、14 は 8 世紀頃の杯蓋である。15・16・17 は杯の上半部である。20 は土師器の鍋の口縁部片である。18・19 が陶磁器の椀で混入品であろう。21 ～ 25 はサヌカイト製の石器で混入品であろう。21・22 は凹基式の石鏃である。23 は石庖丁片に分類したが、削器の可能性もある。24 は削器に分類した。25 は裁断面が認められることから、最終的には楔形石器に転用した槍先形石器、または石庖丁であろう。出土遺物が少なく問題を残すが、SR203 は 8 世紀後半以降に埋没した自然河川の可能性が高い。

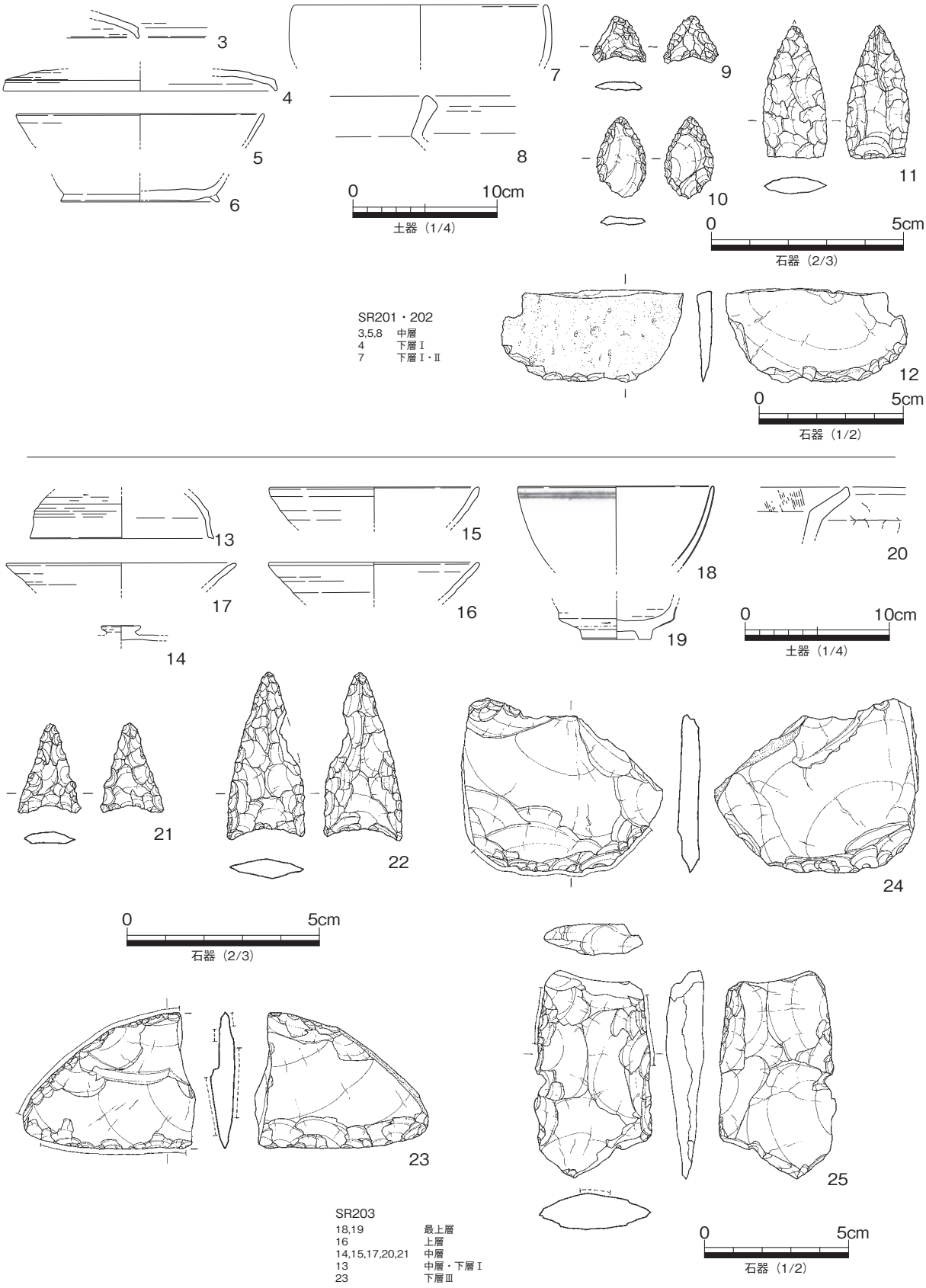
Ⅱ区北壁



Ⅱ区北壁
1　耕土・盛土
2　床土・旧耕土 (数層に細分可)
3　2.5Y7/6 明黄褐色粘土 (Fe 含む, Φ5cm の小石を微量含む)=SR203 最上層
4　2.5Y6/1 黄灰色粘土 (Mn 微量含む)=SR203 上層
5　10YR4/1 褐灰色粘土 (強粘質 φ5cm の小石微量含む, 上面凹凸顕著で攪拌を受けた形跡あり, Fe 含む)=SR203 中層
6　2.5Y6/6 明黄褐色砂混じり粘土 (Mn 含む)=SR203 中層下位
7　2.5Y3/1 黒褐色砂混じり粘土 (一部下面に灰色細砂細層の堆積あり, Φ1 ～ 2cm のベースブロック微量含む, Fe 含む)=SR203 下層Ⅱ
8　7.5Y2/1 黒色粘土 (強粘質, Fe 含む)=SR203 下層Ⅱ
9　7.5YR5/1 褐灰色砂 混じり粘土 (強粘質 Fe 含む, 東肩付近に灰色細砂ラミナー層有)=SR203 下層Ⅲ
10　N4/ 灰色粘土 (強粘質, Fe 含む, わずかに砂混じる)= ベース ?
11　2.5Y8/4 淡黄色シルト (やや粘性有り, Fe 含む, Φ2 ～ 4cm のクサレ礫まれに含む, 東半部は粘性あまりない)= ベース
12　10Y7/1 灰白色細砂 (φ2 ～ 5cm のクサレ礫少量含む)= ベース
13　茶混じり 5YR3/1 黒褐色砂混じり粘土 (Fe・φ2 ～ 8cm のクサレ礫含む)
14　10YR2/1 黒色粘土 (強粘質, Φ2 ～ 5cm のクサレ礫含む)
15　N5/ 灰色砂混じり粘土 (強粘質, (南壁 18 層) との境は攪拌状を呈す, Φ2 ～ 3cm の小石少量含む)
16　5Y4/1 灰色～ 5Y5/1 オリーブ黒色粘土 (わずかに砂混じる, 強粘質, Φ2 ～ 8cm の 17 層ブロック含む, 西肩付近でブロック多い)
17　(部分的にシルト質を帯びている)10Y8/1 灰白色粘土 (ややシルト質, Fe 含む)= ベース
18　2.5Y7/8 黄色砂混じり粘土 (強粘質, Mn わずかに含む)= ベース
19　2.5Y7/6 明黄褐色粘土 (強粘質, Φ2 ～ 5cm の小石わずかに含む, 18 層に近似)= ベース
20　2.5Y7/1 灰白色砂礫 (19 層の影響で粘性強い, φ2 ～ 5cm の小石少量含む)= ベース
21　2.5Y5/1 黄灰色砂礫 (φ3 ～ 7cm の小礫多量に含む)= ベース
22　2.5Y5/1 黄灰色砂礫 (φ5 ～ 30cm の砂岩, クサレ礫多量に含む)= ベース



第 10 図　Ⅱ区北壁土層断面図



第 11 図　SR201・202・203 出土遺物

４.Ⅲ区の調査

（１）溝状遺構

SD301（第 12・13 図）

Ⅲ区西端部の SR302 の上面で検出した溝状遺構である。南端から中央までは、直線気味の南北方向の溝跡であるが、北端部で湾曲気味に西へ振る。検出長 14.5 m、幅 0.64 ～ 0.9 m、深さ 0.14 ～ 0.2 mを測る。断面は不整形で凹凸のある浅い U 字状を呈する。埋土は数層に分かれるが、主体を占めるのは黒色粘土である。

埋土からは弥生土器・土師器の細片が数点出土した。26・27 は弥生土器の壺または甕の底部片であるが、出土状況から混入品と考えられる。この溝跡は出土遺物が少なく、詳細な時期判断には無理がある。

（２）自然河川

SR301（第 12・14・17 図）

Ⅲ区東半部で検出した自然河川である。平面形は幅広で不整形な形状を呈し、概ね北西方向へ延びる。西方には同規模で同方向に延びる SR302 が位置する。また、SR301 と SR302 の間には、二つの流路を繋ぐ小規模な SR303 が位置している。SR301・302 の中層～上層では、古代と中世頃の水田面を 2 面検出した。

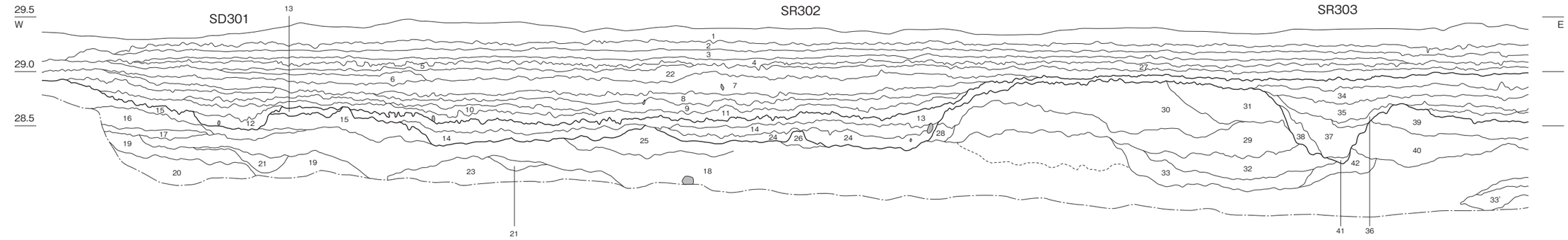
検出長約 17.0 m、幅 11.0 ～ 13.0 m、深さ約 0.7 mを測る。断面の形状は浅い谷状を呈し、底面は比較的平坦である。堆積層は 9 層前後に分かれる。南壁土層断面図中で堆積層を大別すれば、下層は 8 ～ 11 層、中層は 5 ～ 7・18 層、上層は 4 層に区分できる。概ね下層は黒色～褐灰色系粘土、中層は黄褐色系粘土、上層は明黄褐色粘土を呈する。堆積層から推定して、かなり長期間湿地状を呈しており、時間をかけてゆっくり埋没したことが考えられる。なお、南壁 7 層は古代の水田耕土層に対応し、北壁面の 50 層は中世水田耕土層に対応する。

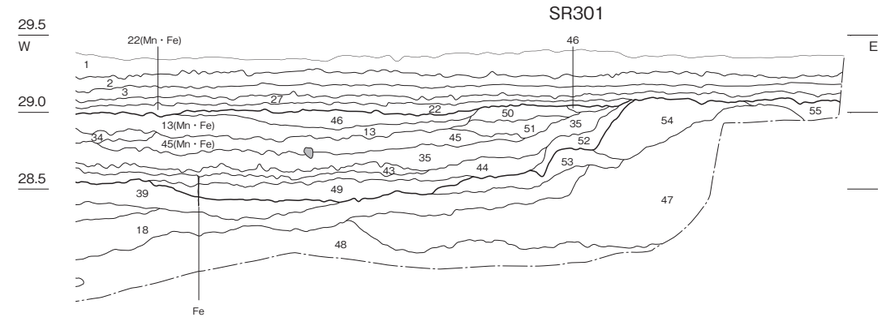
堆積層中からは弥生土器・土師器・須恵器・黒色土器・瓦器、サヌカイト製石器等が出土した。28・29 は弥生時代後期後半頃の弥生土器で、28 は壺口縁部、29 は高杯の脚部片である。30・31 は弥生の甕と鉢のﾐﾆﾁｭｱ土器である。32 ～ 37 は古墳時代前期頃の土師器高杯である。38 ～ 43・45 ～ 47・52 は須恵器の資料である。41 は蓋、38 ～ 40・42・43 は杯である。38 ～ 40 は TK217 の杯身、42 は 8 世紀頃の杯、45 ～ 47 は 8 世紀頃の皿である。44 は土師器の杯、48 は土師器の椀の上半部、49・50 は黒色土器の椀、51 は瓦器椀底部である。なお、土師器高杯 33 及び須恵器杯 39 は、上位の古代水田面の耕土層から出土した土器で、水田面の上限期を示す資料になる。53 ～ 56 はサヌカイト製の石鏃である。出土遺物より SR301 は弥生時代後期後半頃から埋没が進行し、7 ～ 8 世紀頃には河川機能は失われ、その後、耕地化がなされたものと考えられるが、具体的な時期については不明瞭である。

SR302（第 12・13・15 ～ 17 図）

Ⅲ区西半部で検出した自然河川である。平面形は幅広で不整形な形状を呈し、概ね北西方向へ延びる。西方には同規模で同方向に延びる SR301 が位置する。また、SR302 と SR301 の間には、二つの流路を繋ぐ小規模な SR303 が位置している。SR301・302 の中層～上層では、古代と中世頃の水田面を 2 面検出した。検出長約 14.0 m、幅 13.0 ～ 15.0 m、深さ約 0.6 mを測る。断面の形状は浅い谷状を呈し、底面は部分的に凹凸がある。堆積層は 10 層前後に分かれる。

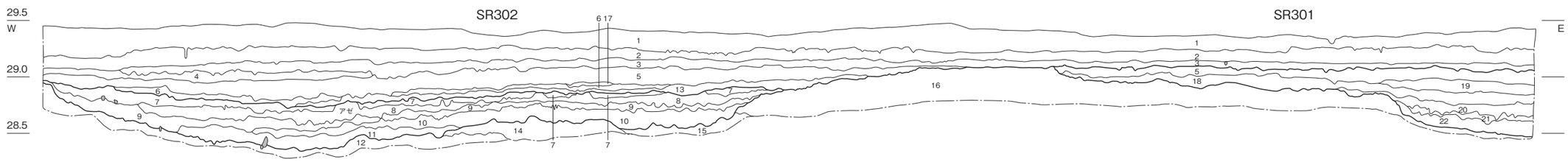
Ⅲ区北壁





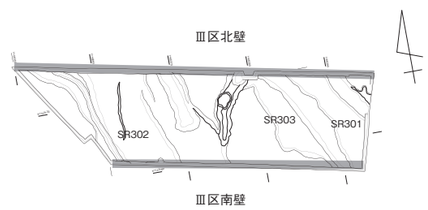
Ⅲ区北壁
1　耕土
2　赤褐色混じり 10YR6/1 褐灰色粘質シルト (Fe 斑著)= 床土
3　明黄褐色混じり 10YR7/1 灰白色粘質シルト (Mn 斑・Fe 斑含む)= 旧耕土
4　10YR7/1 灰白色砂混じり粘土 (Mn 斑少．5 層 φ1 ～ 2cm ブロック少含む)= 旧耕土
5　10YR6/8 明黄褐色砂混じり粘土 (強粘質．砂少・Mn 斑含む)= 上層か中層
6　7.5YR5/8 明褐色粘土 (Fe 斑著)= 中層　Mn 斑わずか
7　2.5Y6/8 明黄褐色混じり 10YR5/1 褐灰色粘土 (Fe 斑含む)= 中層
8　10YR4/1 褐灰色粘土 (Fe 含む)= 中層
9　2.5Y6/8 明黄褐色混じり 10YR4/1 褐灰色粘土 (強粘質．Fe 含む)= 中層？
10　10YR4/1 褐灰色粘土 (強粘質．Fe 含む)= 下層
11　2.5Y3/1 黒褐色砂混じり粘土 (φ～ 1cm 小石少含む)= 下層
12　N3/ 暗灰色粘土 (炭化物層細層多量に含む．強粘質) と 13 層のラミナー =SD301 埋土
13　10YR4/1 褐灰色粘土 (シルト味帯．極細砂多含む．φ1 ～ 2cm の黒色粘土 15 層ブロック含む．φ2 ～ 5cm 風化礫含む．炭化物粒含む)
14　10YR2/1 黒色砂混じり粘土 (砂極少．強粘質．炭化物粒多含む)= 下層Ⅳ
15　7.5Y8/2 灰白色粘質シルト (Fe 含む．炭化物粒含む)= ベース
16　10BG7/1 明青灰色粘土 (細砂混じる．強粘質)= ベース
17　7.5YR3/1 黒褐色粘質シルト (極細砂混じる．草本質．植物遺体多含む．φ2 ～ 5cm の小石まれに含む)= ベース
18　N7/ 灰白色砂礫 (φ2 ～ 10cm の風化礫・砂岩礫多含む)= ベース
19　N7/ 灰白色粘土・5B7/1 明青灰色細～中砂・5Y8/2 灰白色粗砂ラミナー = ベース
20　10BG7/1 明青灰色砂礫 (φ2 ～ 20cm の風化礫・砂岩礫多含む)= ベース
21　10YR3/1 黒褐色砂混じりシルト (細～中砂ラミナー状に混じる．草本質植物遺体多含む．15 層の礫を若干混じる)= ベース
22　10YR7/8 黄橙色粘土 (Mn 斑わずか含む)= 中層
23　10Y6/1 灰色～ N7/ 灰白色砂礫 (φ1 ～ 5cm の風化礫多量に含む．ベースは細～中砂)= ベース
24　2.5Y5/1 黄灰色粘土 (強粘質．炭化物粒多含む．Fe 含む．わずかに砂含む)=SR302 最下層
25　2.5Y6/8 明黄褐色中～粗砂 (φ2 ～ 5cm の風化礫やや多含む)= ベース
26　10YR7/6 明黄褐色砂礫 (φ2 ～ 5cm の風化礫少含む．基本的には 18 層と大差なし)= 地山
27　灰白色混じり 2.5Y7/8 黄色粘土 (Mn 斑少含む．4 層に近似)
28　10GY7/1 明緑灰色粘土 (Fe 含む)·29 層ラミナー = 地山
29　2.5Y7/2 灰黄色中～粗砂 (Fe 含む)= 地山 (20m 以東では N7/ 灰白色シルト・2.5Y8/8 黄色砂礫 (φ2 ～ 4cm の風化礫含む) をラミナー状に含む)
30　10YR8/2 灰白色・10YR8/8 黄橙色粘土 (部分的に Mn 斑含む)= 地山
31　10Y8/1 灰白色粘土～粘質シルト (Fe 斑含む)
32　5PB7/1 明青灰色砂礫 (φ2 ～ 15cm の風化礫等多量に含む)
33　10YR2/1 黒色砂混じり粘土 (粘性強い．φ2 ～ 5cm の小石等多く含む)= 地山
33'　7.5YR3/1 黒褐色シルト～粘土 (植物遺体集積)
34　10YR6/6 ～ 7/6 明黄褐色粘土 (極少砂礫・Mn・Fe 含む)
35　10YR3/4 暗褐色砂混じり粘土 (砂極少・Fe 斑・Mn 斑含む．φ1 ～ 4cm の 39 層ブロック多含む)
36　10YR3/1 黒褐色砂混じり粘土 (Fe 含む．ベースブロック極少含む)=SR303
37　N2/ 黒色粘土 (φ1 ～ 8cm のベース 39・40 層ブロック含む．炭化物粒含む)
38　31・37 層のラミナー堆積 (下位に 31 層の φ2 ～ 4cm のブロック多含む．水流下の堆積か？)=SR303
39　灰白色混じり 2.5Y7/8 黄色粘土 (極少砂混じる．Fe・Mn 含む)= 地山
40　5G5/1 緑灰色粘土 (シルト質．強粘性．Fe 含む)= 地山
41　5Y3/2 オリーブ黒色砂礫 (粘性あり．φ1 ～ 3cm の小石多含む)=SR303
42　5YR4/1 褐灰色砂混じり粘土 (炭化物粒含む)·2.5Y7/2 灰黄色粗砂 (φ1cm の小石多含む)・10GY7/1 明緑灰色細砂ラミナー
43　2.5Y6/1 黄灰色中～粗砂
43'　10YR6/2 灰黄褐色中砂 (この層より 44 層にかけて Fe 沈着)
44　N3/ 暗灰色粘土 (上面に Mn 斑含む．Fe 沈着)
44　10YR3/1 黒褐色砂混じり粘土 (6m 付近で φ2 ～ 5cm の小石少含む．Fe 斑含む)
45　10YR6/6 明黄褐色粘土 (Fe・Mn 斑含む．極少砂混じる)34 層に近似．基本的には同一層
46　10YR5/2 灰黄褐色粘土 (Mn 斑少含む)
47　5Y5/6 オリーブ色砂混じり粘土 (ベタ粘 φ5 ～ 15cm の砂岩礫少含む．Fe 沈着により黄色味強い)= 地山
48　5B6/1 青灰色砂礫 (φ3 ～ 20cm の風化礫・砂岩礫多含む．ベース粗砂)7m 以東は Fe の影響で黄色味強 = 地山
49　N6/ 灰色砂混じり粘土 (砂極少·強粘質．上位に Mn 斑・Fe 含む)=SR301 下層　炭化物 45 層
50　10YR6/8 明黄褐色粘質シルト (φ2 ～ 10cm のベースブロック・45 層ブロック多含む．Mn 斑含む)= 中世水田畦畔
51　10YR4/2 灰黄褐色粘土 (φ3 ～ 10cm のベースブロック多含む．Mn・Fe 斑含む)= 古代水田畦畔
52　2.5Y6/1 黄灰色粗砂混じり粘土 (弱粘質．φ2 ～ 5cm の小石含む．砂多混じる)=SR301 下層
53　40 層と基本的に同じ．4.8m 以東では下層の影響で粗砂・φ1cm の小石多混じる (Fe 含む)= 地山
54　5Y6/1 灰色粗砂混粘土 (砂多混じる．φ2 ～ 6cm の小石多含む．風化礫多混じる)= 地山
55　黄色混 7.5Y8/2 灰白色粘土 (M n 斑含む)= 地山

Ⅲ区南壁

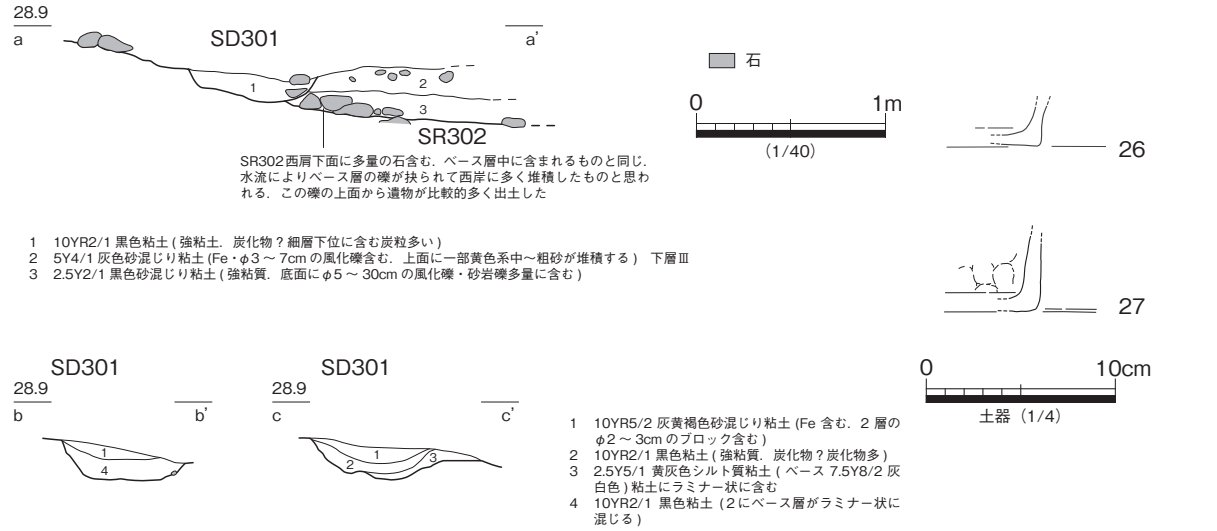


Ⅲ区南壁
1　耕土
2　床土及び旧耕土
3　2.5Y7/6 明黄褐色粘土 (Fe・Mn 含む)
4　10YR6/8 明黄褐色粘土 (砂混じる．Fe)=SR302 上層
5　2.5Y4/6 オリーブ褐色粘土 (砂混じる．Fe)=SR302 中層Ⅰ
6　2.5Y5/6 黄褐色粘土 (強粘質．わずかに砂混じる．Fe．上面が中世水田面)=SR302 中層Ⅱ
7　2.5Y6/6 明黄褐色粘土 (強粘質．Fe 微)= 古代水田耕土
8　2.5Y4/1 黄灰色 (強粘質．φ1 ～ 5cm の風化礫少量含む．Fe 含む．φ1 ～ 3cm の 15 ～ 16 層ベース少量含む)=SR302 下層Ⅰ？
9　2.5Y2/1 黒色粘土 (強粘質．φ1 ～ 5cm の風化礫少量含む．上面は攪拌を受けたイメージ．Fe)=SR302 下層Ⅱ
10　10YR5/1 褐灰色粗砂混粘土 (φ1 ～ 2cm の風化礫少量含む．Fe)=SR302 下層Ⅲ
11　10Y3/1 オリーブ黒色粘土 (強粘質．砂微混じる．φ1 ～ 5cm の風化礫混じる)=SR302 下層Ⅳ
12　2.5Y4/1 黄灰色砂礫 = ベース
13　10YR5/1 褐灰色粘土 (Fe 斑含む)=SR302 中層Ⅲ
14　2.5Y7/1 灰白色シルト (Fe 含む)= ベース
15　7.5GY8/1 明緑灰色粘土 (Fe 含む)= ベース
16　10Y8/1 灰白色シルト質粘土 (Fe·Mn 含む)= ベース
17　N5/ 灰色粘土 (Fe·Mn 含む)
18　2.5Y5/3 黄褐色粘土 (Mn 斑顕著)= 7 層？ =SR301 中層Ⅱ
19　2.5Y6/4 にぶい黄色粘土 (Fe 斑)=13 層？ =SR301 中層Ⅰ下位
20　2.5Y4/1 黄灰色粘土 (上面に Fe 斑顕著)φ1 ～ 3cm のベース 16 層ブロック多含む
21　2.5Y2/1 黒色粘土 (強粘質)=9 層 =SR301 下層Ⅱ
22　2.5Y4/1 黄灰色 (強粘質．Fe)=10 層 =SR301 下層Ⅲ

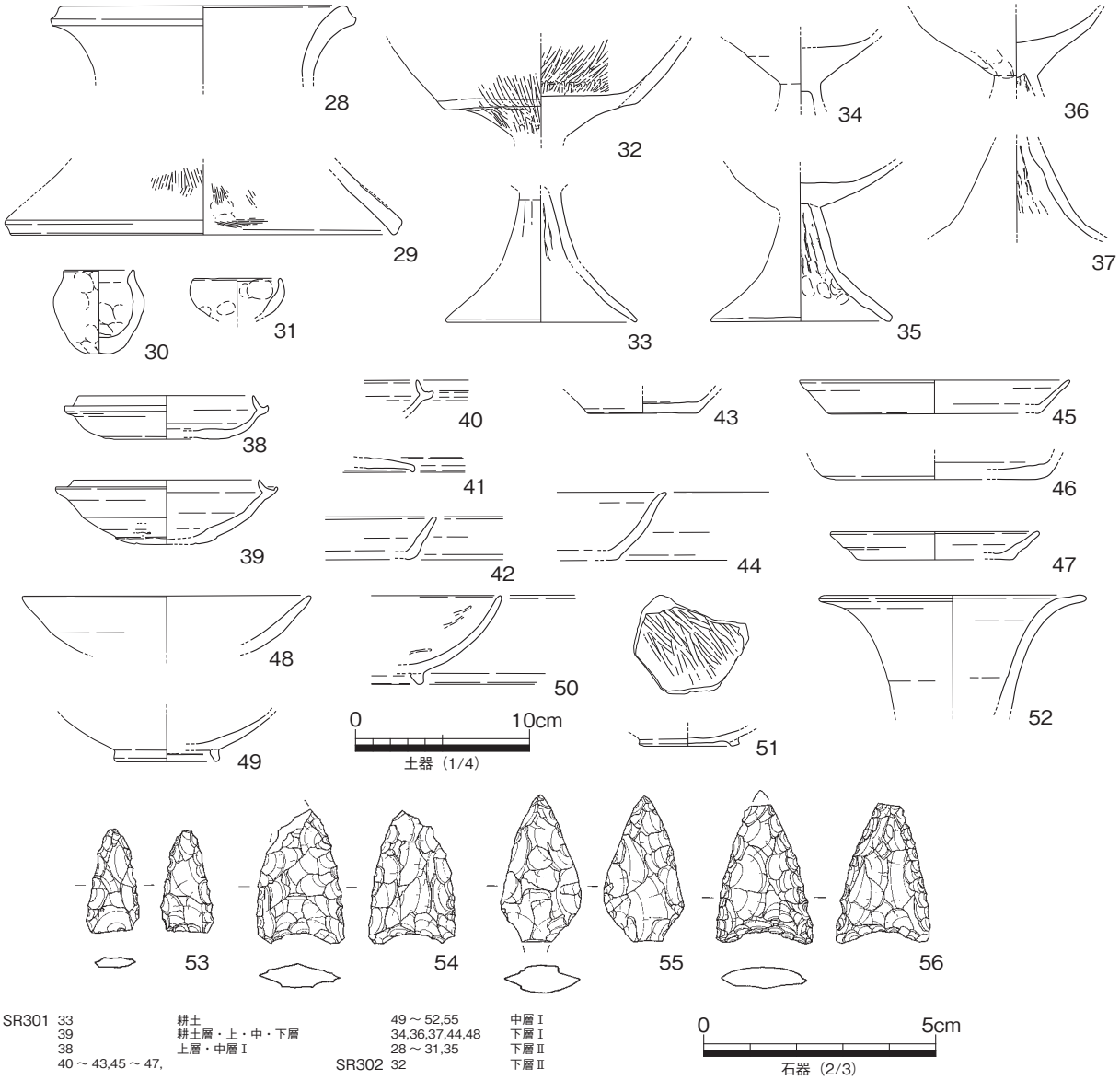
0　5m
（縦 1/40・横 1/100）



第 12 図　Ⅲ区北・南壁土層断面図



第 13 図　SD301・SR302 断面図，出土遺物



第 14 図　SR301 出土遺物

北壁土層断面図中で堆積層で大別すれば、最下層は 24 層、下層は 10・11・13・14 層、中層は 6 ～ 9 層、上層は 5 層に区分できる。概ね下層は黒色～褐灰色系粘土、中層～上層は明黄褐色系粘土が主である。堆積層から推定して、かなり長期間湿地状を呈しており、時間をかけてゆっくり埋没したことが考えられる。なお、南壁 7 層は古代の水田耕土層に対応し、北壁面の 50 層は中世水田耕土層に対応する。

堆積層中からは縄文土器・弥生土器・須恵器・黒色土器、サヌカイト製石器類が出土した。57 は縄文土器の浅鉢の上半部である。口縁端部には一対の穿孔が施されている。58 ～ 66 は弥生土器である。58・59 は弥生時代中期後半頃の壺の口頸部である。60・61 は甕の口縁部片、62 ～ 66 は甕の底部である。64 ～ 66 の底部は弥生時代中期後半頃の可能性が高い。68･69 は弥生土器の甕転用の紡錘車である。67 は土師器高杯の脚部である。70 ～ 87 は須恵器杯の資料である。70・71 は 7 世紀前半の TK217 並行の杯身片である。73 ～ 75 は 8 世紀頃の杯である。76 ～ 87 の杯は、おそらく 10 世紀前後の杯であろう。88 は土師器椀、89･90 は黒色土器の椀、92 は須恵器壺の高台付底部である。なお、須恵器杯 78 は、河川の上位で確認した古代水田面の耕土層から出土した土器で、水田面の上限期を示す資料になる。

93 ～ 100 はサヌカイト製の石器である。93・94 は凹基式の石鏃である。95・96 は大型の横長剥片を素材にした削器である。95 の側縁部には、ほぼ全周にツブレ痕を残している。97 ～ 99 は裁断面が認められることから楔形石器に分類した。100 は石核である。平坦打面から剥片剥離を行っている。101 は棒状の不明鉄器である。出土遺物より SR302 は弥生時代中期頃から埋没が進行し、SR301 同様に 7 ～ 8 世紀頃には河川機能は失われ、その後耕地化がなされたものと考えられるが、具体的な時期については不明瞭である。

SR303（第 12 図）

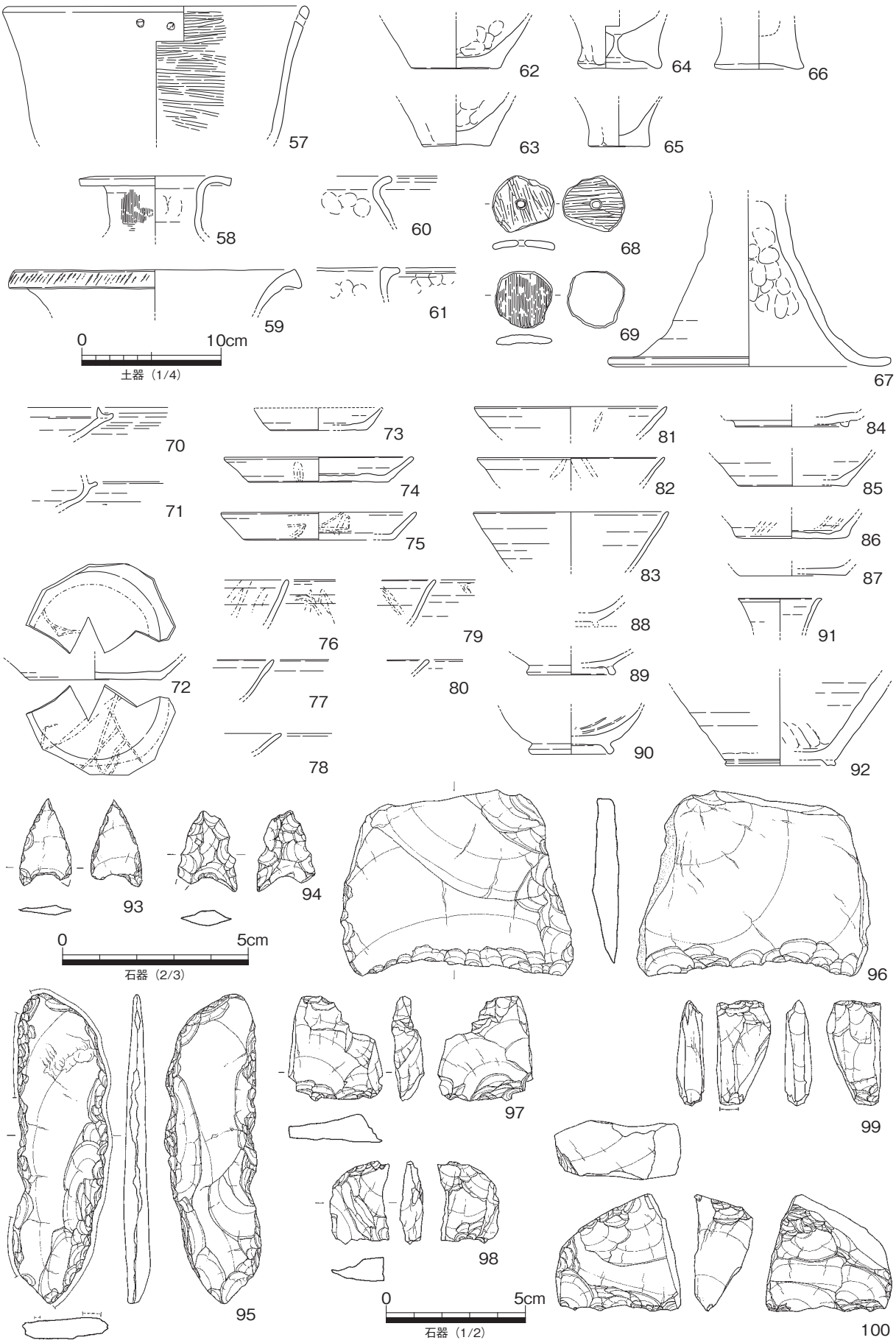
Ⅲ区中央の SR302 と SR301 の間で検出した二つの流路を繋ぐ小規模な流路である。平面形は不整形な形状を呈し、SR302 の南東の肩口から僅かに東に湾曲し、SR301 の北西の肩口に繋がる状況で検出した。二つの流路との切り合いが確認できないことから、他の二つの流路と同一歩調で埋没した流路と考えられる。検出長約 10.0 m、幅 1.5 ～ 2.8 m、深さ約 0.65 mを測る。断面の形状は凹凸がある逆台形状を呈する。底面には北端部と中央部で窪状の落ち込みが認められる。堆積層は 4 層前後に分かれ、上層は褐灰色系粘土、下層は黄灰色系粘土を呈する。堆積層からは弥生土器の細片、古代の須恵器片等が少量出土した。

SR301・302 水田跡（第 17・18 図，第 4 表）

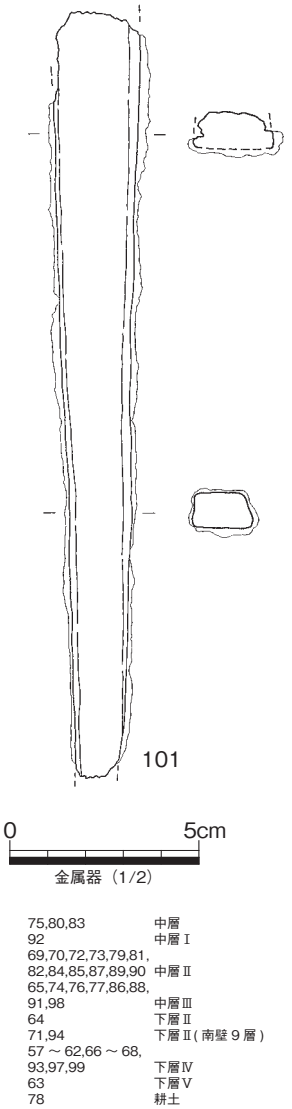
Ⅲ区 SR301・302 の最終埋没層の上面で、中世前半と古代の水田面を検出した。中世水田面を第 1 水田面、古代の水田面を第 2 水田面と仮称する。

第 1 水田面は SR301 の上面で部分的に検出した。SR301 周辺の SR201 ～ 203 及び SR302 上面では、後世の削平等により、この時期の水田面は確認できなかった。水田跡は機械掘削の際に一部を欠いたため､残りは極めて悪い。検出した畦畔は､SR301 の河川を東西に横断するように､東西方向の畦畔 301 と、その畦畔に短く南北方向の畦畔が 2 条取り付く。水田は①～④等の 4 筆が推定できるが、いずれも残りが悪く形状等不明瞭な点が多い。Ⅲ区北壁 50 層が水田面のベースになる土層、北壁 13 層前後が耕土層にあたる。水田面の標高は 29.3 m前後を測る。

東西畦畔 301 は推定検出長約 13.0 m、幅約 1.0 m、高さ 0.08 mを測る。主軸方向は N52° E を測り、



第 15 図　SR302 出土遺物（1）



第 16 図　SR302 出土遺物（2）

現地表の地割（条里地割）とは大きく異なり、下層の流路方向に規制された状況が窺える。畦畔の断面は台形状を呈し、造成土中には径 0.02 ～ 0.1 m程度のベース黄褐色粘土ブロックを多量に含んでいる。耕土層からの出土遺物は極めて少ないが、瓦器椀、西村産の須恵器椀片などが出土しており、概ね 12 世紀以降の水田跡と考えられる。

第 2 水田面は第 1 水田面より下位の SR301・302 の最終埋没層の上面で検出した。水田域は、SR301 水田域と SR302 水田域の二つの範囲に分かれる。検出状況から、本来、広範囲に広がっていた水田域が、後世の削平により SR301･302 間の水田域が消失し、結果的に二つの水田域に分離したものと考えられる。

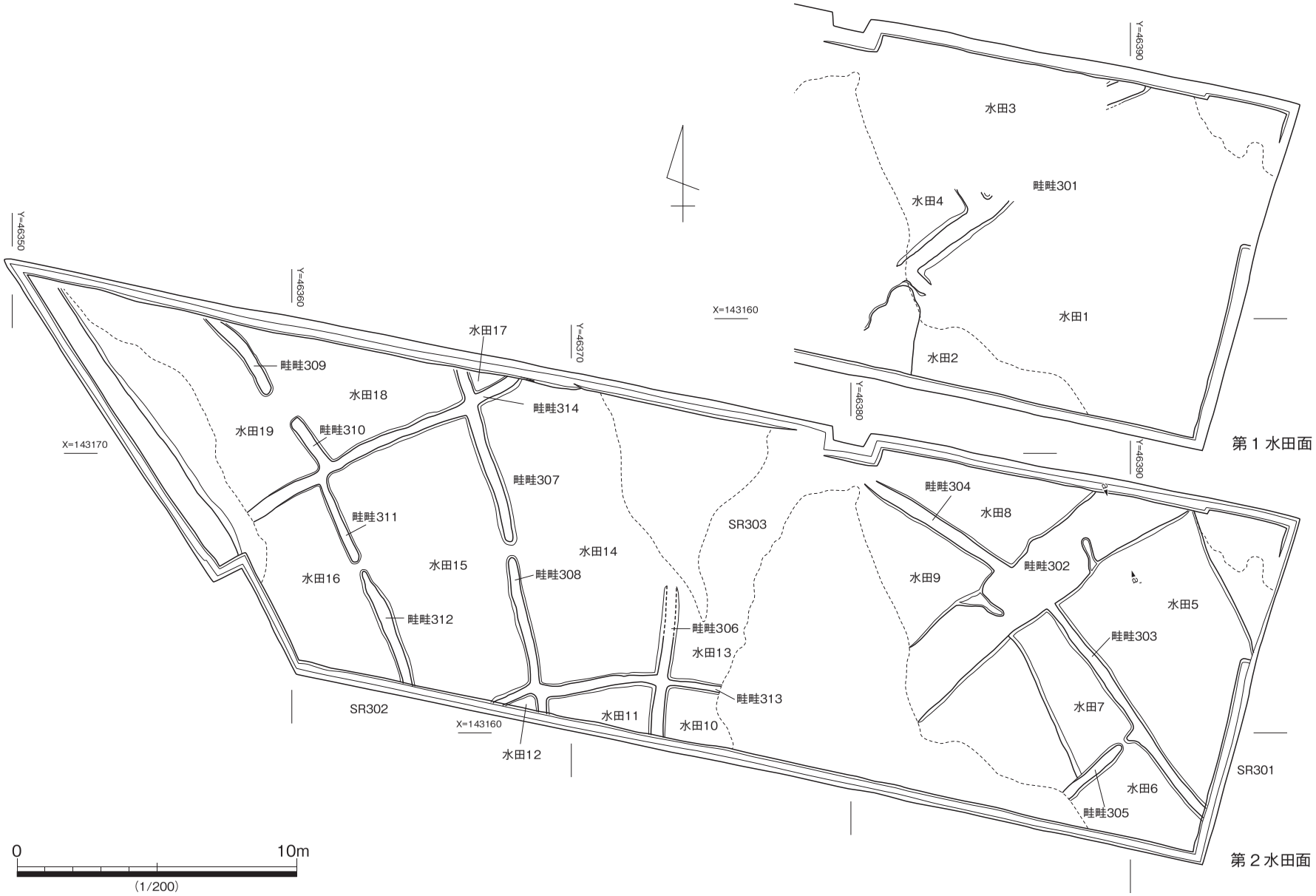
第 2 水田面 SR301 域は、流路を横断する形で配された、幅 2.2 ～ 2.3 m、高さ 0.15 mを測る大型畦畔 302 により大きく南北に二分され、小畦畔 304・303・305 がとりつくことにより、計 5 筆の水田（水田⑤～⑨）に分かれる。Ⅲ区北壁 51 層が水田面のベースになる土層、北壁 13 層が耕作土層にあたる。水田面の標高は 29.2 m前後を測る。水田⑤・⑧間の畦畔 302、⑥・⑦間の畦畔 305 では、田渡しの水口を確認した。また、大畦畔 302 は上層水田面の畦畔 301 とほぼ重複して検出しており、上層水田と基本的な地割方向に大きな変化はない。水田面のベース層中には、径 0.01 ～ 0.1 m程度のベース黄褐色粘土及び下位層のブロックを多量に含んでおり、水田造成に伴い整地された可能性が高い。

第 2 水田面 SR302 域は、河川の流路方向に向きを揃え主軸となる長軸畦畔を南北方向に 3 条配し、更に長軸畦畔に直交する形で短軸畦畔を 2 条配している。検出した水田は不整長方形～不整台形状を呈し、水田⑩～⑲の計 10 筆を確認した。Ⅲ区南壁 8 層が水田畦畔を構成する土層、南壁 7 層が耕作土層にあたる。水田面の標高は 28.8 m前後を測る。水田の面積は残りが良好な水田⑭・⑮等で約 47.0 ～ 52.0 ㎡を測る。また、水田⑭･⑮間、水田⑮･⑯間、水田⑱・⑲間の長軸畦畔には田渡しの水口を確認した。

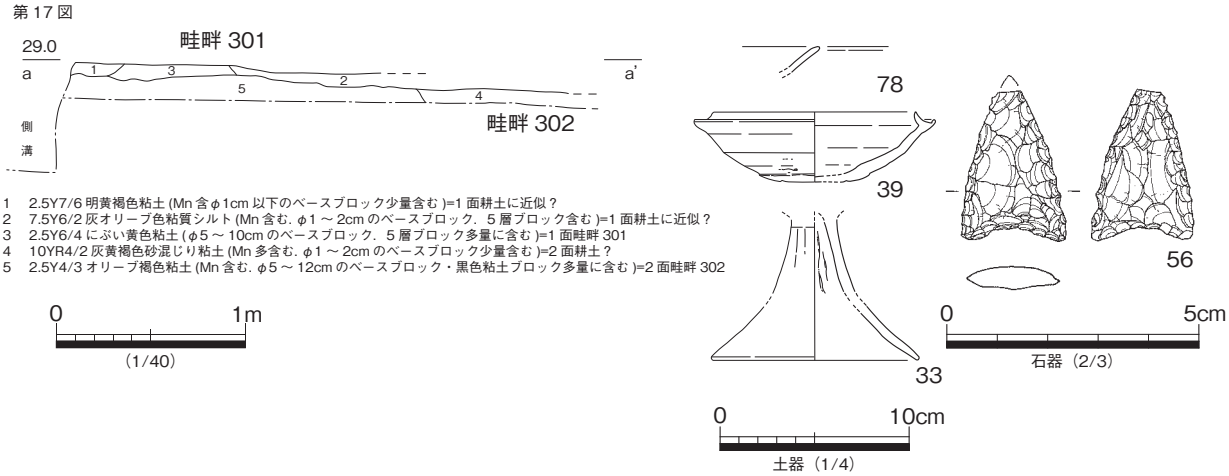
第 2 水田面の時期を示す資料は少ないが、水田面のベース層より 7 世

第 4 表　兀塚遺跡 SR301・302 水田跡一覧

遺構名	形態	規模（m）	面積（㎡）	平均高（m）
水田①	－	4.0 以上×－	－	29.3 前後
水田②	－	6.0 ？×－	－	29.3 前後
水田③	－	2.0 ×－	－	29.3 前後
水田④	－	3.3 以上× 0.9 以上	－	29.3 前後
水田⑤	長方形？	9.1 以上× 6.0	38.8 以上	29.2 前後
水田⑥	長方形？	3.7 以上× 3.3 以上	11.1 以上	29.2 前後
水田⑦	台形	5.7 × 2.8	12.2	29.2 前後
水田⑧	長方形？	6.8 以上× 4.1 以上	13.1 以上	29.2 前後
水田⑨	台形	5.7 以上× 4.1 以上	12.4 以上	29.2 前後
水田⑩	台形？	2.7 以上× 1.8 以上	4.3 以上	28.8 前後
水田⑪	方形？	4.0 × 1.8 以上	5.1 以上	28.8 前後
水田⑫	－	1.2 以上× 0.7 以上	0.4 以上	28.8 前後
水田⑬	台形？	3.7 以上× 2.0 以上	5.4 以上	28.8 前後
水田⑭	長方形	10.3 × 4.2 以上	51.9 以上	28.8 前後
水田⑮	長方形	9.9 × 5.5	46.6	28.8 前後
水田⑯	長方形？	7.6 以上× 2.7 以上	19・8 以上	28.8 前後
水田⑰	－	1.3 以上× 1.0 以上	0.6 以上	28.8 前後
水田⑱	台形？	6・5 以上× 5.3	19.4 以上	28.8 前後
水田⑲	長方形？	7.0 以上× 3.0 以上	21.2 以上	28.8 前後



第 17 図　SR301・302 第１・２水田面



第 18 図　畦畔 301・302 断面図，出土遺物

紀前半頃の須恵器・土師器片を少量出土した。また、水田面上面の包含層から古代前半の遺物が少量出土している。39 は水田⑤の水田ベース層から出土した TK217 並行期頃の須恵器杯身で 7 世紀初頭頃の土器である。33 は水田⑮から出土した 7 世紀前半頃の土師器高杯の脚部である。これらの資料は第 2 水田面の上限を示す資料の一つであるが、SR301・302 の両河川共に 11 ～ 12 世紀頃までの古代後半の土器を含んでおり、おそらく、この頃が第 2 水田面の形成時期と考えられる。

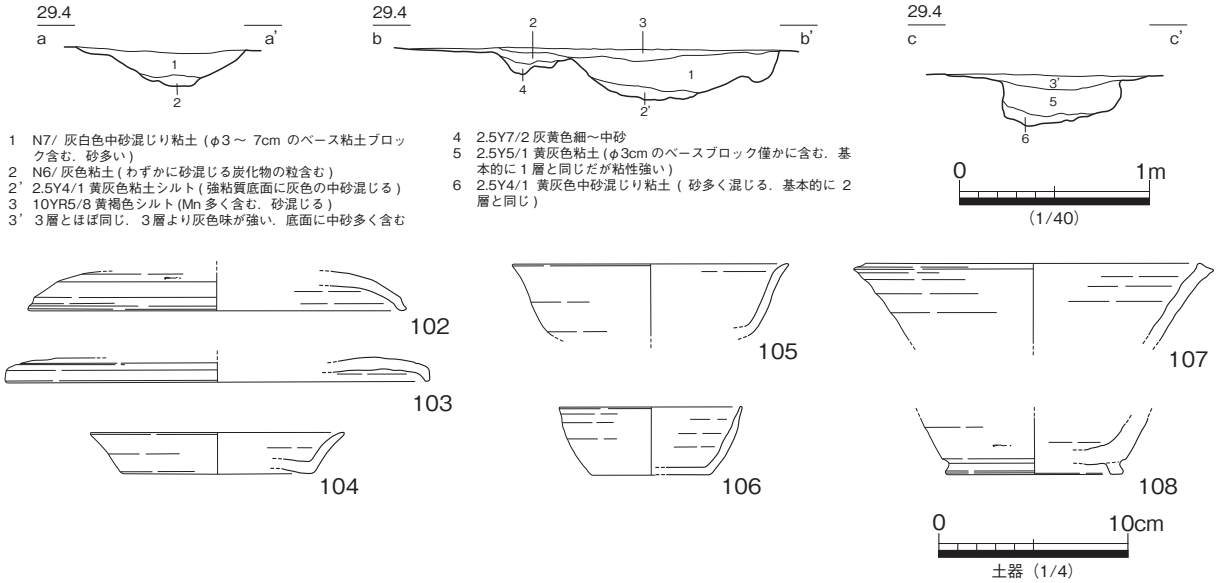
5. Ⅳ区の調査

（1）溝状遺構

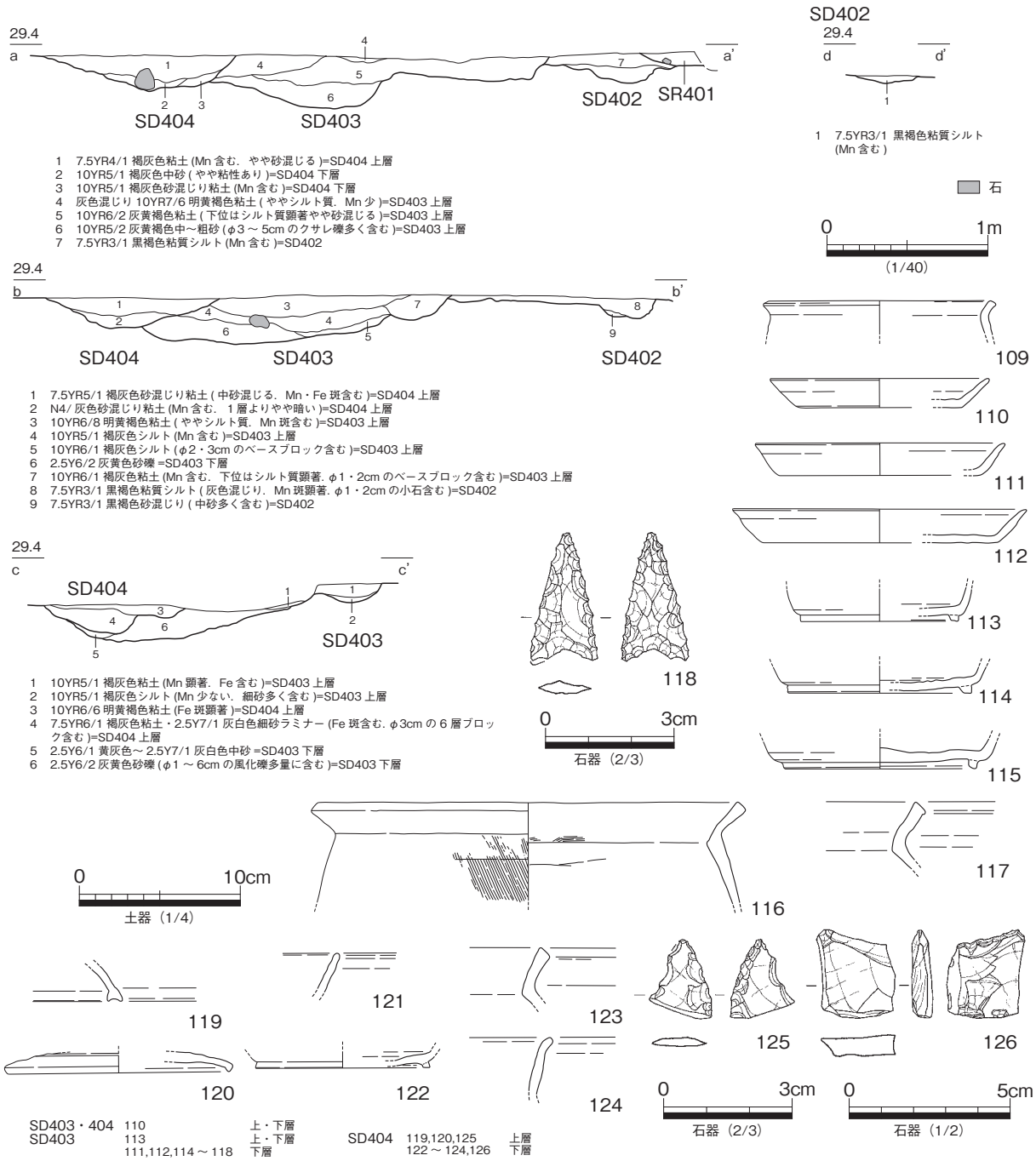
SD401（第 19・20・23 図）

Ⅳ区中央の SR401 上面で検出した北東方向に延びる直線溝である。検出長 17.3 m、幅 0.9 ～ 1.94 m、深さ 0.18 ～ 0.28 m、主軸方位 N54.0° E を測る。断面は幅広な U 字状を呈し、埋土は灰色～黄灰色系の粘土・シルト等からなる。

埋土からは古代の土師器・須恵器、中世土師器片が出土した。102 ～ 108 は SD401 から出土した 8 ～



第 19 図　SD401 断面図，出土遺物



第 20 図　SD401 ～ 404 断面図，出土遺物

9 世紀頃の須恵器の資料である。102・103 は杯蓋の口縁部、104 ～ 106 は杯、107 は甕の口縁部片、108 は高台付の壺底部である。SD401 は出土遺物から中世以降の溝跡と考えられる。

SD402（第 20・23 図）

Ⅳ区西端部に位置し、SD403・404 に切られる形で検出した直線気味の溝である。検出長 13.9 m、幅 0.4 ～ 1.3 m、深さ 0.04 ～ 0.18 m、主軸方位 N34.5° E を測る。断面形状は地点により様々な形状を呈し、埋土は上層が褐灰色粘土、下層は黒褐色粘土からなる。

埋土からは弥生・土師器の小片が数点出土した。109 は弥生土器の甕口縁部片である。この溝跡は出

土遺物が少なく、詳細な時期判断には無理があるが、8 世紀中頃の SD403･404 に切られていることから、8 世紀中頃以前の時期が考えられる。

SD403（第 20・23 図）

Ⅳ区西端部に位置し、SD404 に切り込まれている直線溝である。なお、SD403・404 は条里地割の南北の坪境に隣接するため、条里地割の溝状遺構の可能性が高い。検出長 13.2 m、幅 1.9 ～ 2.1 m、深さ 0.22 ～ 0.32 m、主軸方位 N13.0° E を測る。断面は幅広で不整形な形状を呈し、埋土は上層が褐灰色シルト、下層が灰黄色砂～砂礫からなる。

埋土からは 7 ～ 8 世紀の土師器・須恵器が出土した。110 ～ 115 は 8 世紀中頃の須恵器である。110 ～ 112 は皿、113 ～ 115 は杯底部、116・117 は土師器の甕口縁部である。118 は凹基式のサヌカイト製の石鏃で混入品であろう。SD403 は出土遺物から 8 世紀中頃以降に埋没した溝跡と考えられる。

SD404（第 20・23 図）

Ⅳ区西端部に位置し、SD403 を切り込む直線溝である。なお、先述したように SD403・404 は条里地割の南北の坪境に隣接するため、条里地割の溝状遺構の可能性が高い。検出長 13.2 m、幅 0.9 ～ 1.1 m、深さ 0.18 ～ 0.22 m、主軸方位 N13.0° E を測る。断面は浅い皿状を呈し、埋土は褐灰色粘土・灰色粘土等からなる。

埋土からは 7 ～ 8 世紀の土師器・須恵器片が出土した。119 ～ 122 は SD404 出土の須恵器である。119・120 は杯蓋、121・122 は杯、123・124 は土師器の甕口縁部片である。125・126 はサヌカイト製の石器で混入品であろう。125 は石鏃未製品の先端部片、126 は裁断面が認められることから楔形石器に分類した。SD404 は出土遺物から 8 世紀中頃以降に埋没した溝跡と考えられる。

SD405（第 21・23 図）

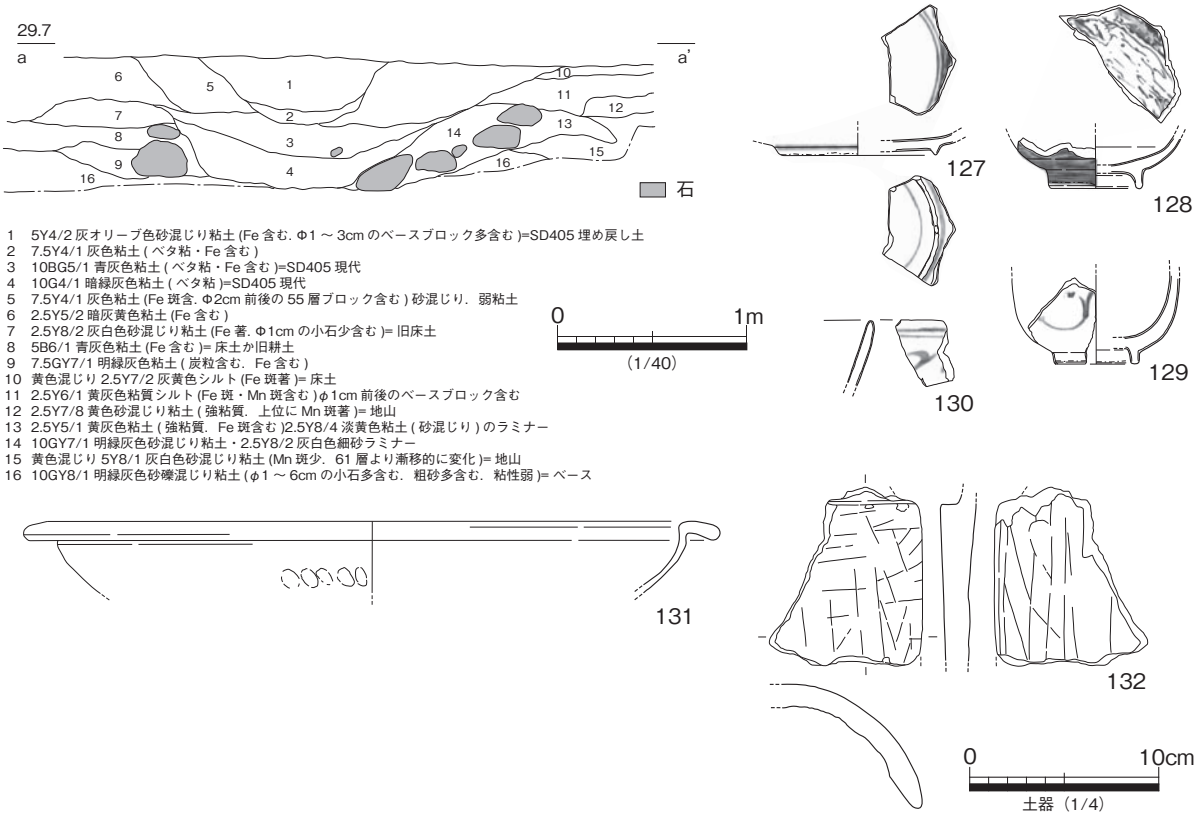
Ⅳ区西半部の耕作土直下で検出した L 字型に折れ曲がる直線溝である。検出状況からこの溝跡は、近現代の溝跡である。切り込み面はベース面より約 1.0 m上位の包含層上面から切り込んでいる。検出長 42.5 m、幅 0.7 ～ 1.0 m、深さ 0.9 m、方位 N72° W26.0° E を測る。断面は不整形な逆台形状を呈し、埋土の堆積状況から 2 回以上の改修が考えられる。

埋土からは土師器・陶磁器・瓦等が出土した。127 は磁器の皿、128 ～ 130 は陶器の椀、131 は瓦質土器の焙烙、132 は丸瓦片である。SD405 は出土遺物から近世以降の溝跡と考えられる。

（2）不整形遺構

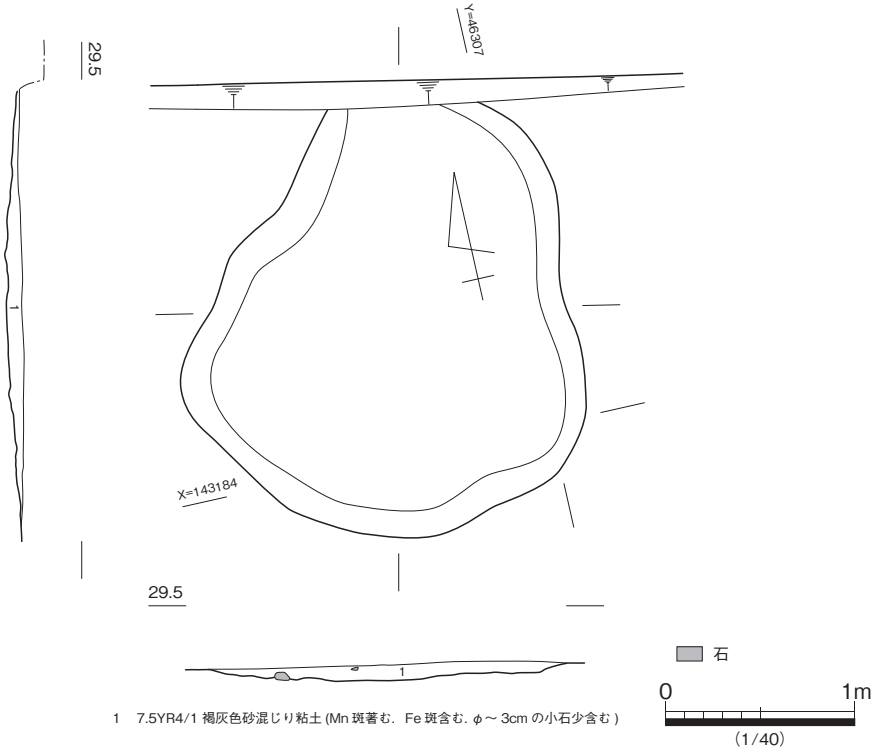
SX401（第 22 図）

Ⅳ区西半部、北壁際で検出した不整形な落ち込み状の遺構である。平面形状は不整形な楕円形状を呈し、長径 2.3 m、短径 2.14 m、深さ 0.08 mを測る。断面は浅い皿状を呈し、埋土は単層で、褐灰色砂混じり粘土からなる。埋土からは 7 世紀頃の須恵器細片が出土しているが、資料が少なく詳細な時期判断には無理がある。



1　5Y4/2 灰オリーブ色砂混じり粘土 (Fe 含む. Φ1 ～ 3cm のベースブロック多含む)=SD405 埋め戻し土
2　7.5Y4/1 灰色粘土 (ベタ粘・Fe 含む)
3　10BG5/1 青灰色粘土 (ベタ粘・Fe 含む)=SD405 現代
4　10G4/1 暗緑灰色粘土 (ベタ粘)=SD405 現代
5　7.5Y4/1 灰色粘土 (Fe 斑含. Φ2cm 前後の 55 層ブロック含む) 砂混じり．弱粘土
6　2.5Y5/2 暗灰黄色粘土 (Fe 含む)
7　2.5Y8/2 灰白色砂混じり粘土 (Fe 著. Φ1cm の小石少含む)= 旧床土
8　5B6/1 青灰色粘土 (Fe 含む)= 床土か旧耕土
9　7.5GY7/1 明緑灰色粘土 (炭粒含む．Fe 含む)
10　黄色混じり 2.5Y7/2 灰黄色シルト (Fe 斑著)= 床土
11　2.5Y6/1 黄灰色粘質シルト (Fe 斑・Mn 斑含む)φ1cm 前後のベースブロック含む
12　2.5Y7/8 黄色砂混じり粘土 (強粘質．上位に Mn 斑著)= 地山
13　2.5Y5/1 黄灰色粘土 (強粘質．Fe 斑含む)2.5Y8/4 淡黄色粘土 (砂混じり) のラミナー
14　10GY7/1 明緑灰色砂混じり粘土・2.5Y8/2 灰白色細砂ラミナー
15　黄色混じり 5Y8/1 灰白色砂混じり粘土 (Mn 斑少．61 層より漸移的に変化)= 地山
16　10GY8/1 明緑灰色砂礫混じり粘土 (φ1 ～ 6cm の小石多含む．粗砂多含む．粘性弱)= ベース

第 21 図　SD405 断面図，出土遺物



1　7.5YR4/1 褐灰色砂混じり粘土 (Mn 斑著む．Fe 斑含む. φ～ 3cm の小石少含む)

第 22 図　SX401 平・断面図

（3）自然河川

SR401（第 23 ～ 27 図）

Ⅳ区中央で検出した自然河川である。平面形は幅広で不整形な形状を呈し、概ね北東方向へ延びる。検出長約 15.0 m、幅 12.0 ～ 15.0 m、深さ約 1.0 mを測る。断面は幅広な皿状を呈し、埋土は複数層に分かれる。埋土からは少量の弥生時代前期・後期の土器と、7 ～ 8 世紀の土師器・須恵器等が多量に出土した。出土状況としては、弥生土器は主に最下層から出土している。7 世紀の土器は最下層前後～上層まで、8 世紀の土器は最上層前後を中心に出土している。

埋土からは 133 ～ 226 の土器・石器類が出土した。133 ～ 136・138 は弥生土器の資料で、主に最下層ないし下層から出土している。133 は弥生時代後期前半頃の長頸壺の口縁部で、135 は壺の底部である。136 は如意状の口縁部を呈する、弥生時代前期末～中期前半の甕上半部である。

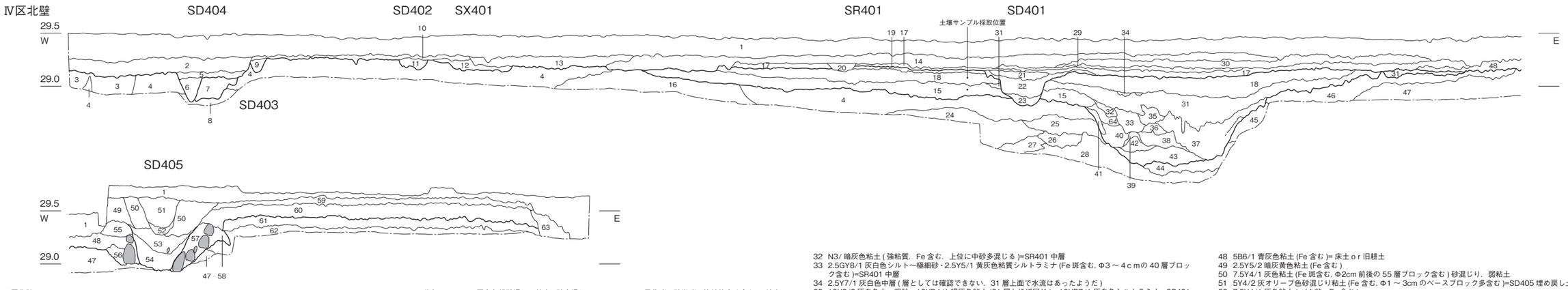
139 ～ 193・195 ～ 198 は 7 世紀前半～ 8 世紀後半頃の須恵器である。139 ～ 154 は TK209・217 並行の 7 世紀初頭頃の杯で 139 ～ 145 は杯蓋、146 ～ 148 は杯部内面にかえりが付く杯蓋、149 ～ 154 は杯身である。169 ～ 175 は 8 世紀中頃～後半の高台が付く杯である。173 は墨書土器で、底部外面の上部に「中」の記載があり注目される。底部下半部には記載は確認できないが、あと 1 ～ 2 字は記入できるスペースがある。「中」が何を意図した記載か判断が難しいが、一つの見方として兀塚遺跡は古代の香川郡中間郷に位置する。そのため、記載している「中」は地名の「中間郷」を指す可能性も考えられるが、詳細な点は今後の課題となる。186・187 は皿である。187 は墨書土器と考えられるが記載内容については不明である。188 ～ 191 は 7 世紀前半頃の高杯である。192・193 は鉢である。195 ～ 197 は甕上半部である。198 は壺口縁部である。口縁部内面にはヘラ記号を残している。

199 ～ 207 は土師器の資料である。199 ～ 204 は甕片である。194 は外面に縄目タタキを施しており、下半部を欠く韓式土器の小型の平底の鉢と考えられる。205 は竈片、206 は飯蛸壺、207 は土錘である。

208 ～ 226 はサヌカイト製石器類である。208 ～ 219 は石鏃である。208・209 は凹基式、211 ～ 213 は平基式、214 ～ 216 は凸基式の石鏃である。217 ～ 219 は形状から石鏃の未製品と考えられる。220 は削器、221 ～ 223 は打製石斧の基部及び先端部、225 は円盤状の形状をした敲き石である。側縁部には潰れ痕が顕著に認められる。

227 ～ 230 は SR401 から出土した木製品である。227・228 は最下層から出土した大型の木製品で、形状から建築部材と考えられる。227 は角柱状に整形した部材で、おそらく柱材と考えられる。外面にはヤリガンナの工具痕を顕著に残している。材質は同定結果によればブナ科アカガシ亜属に分類される。228 は残りが悪いが、形状からミカン割材と考えられる。材質は同定結果によればブナ科アカガシ亜属に分類される。229・230 は小型の板材である。材質は同定結果によればヒノキ科ヒノキ亜属に分類される。

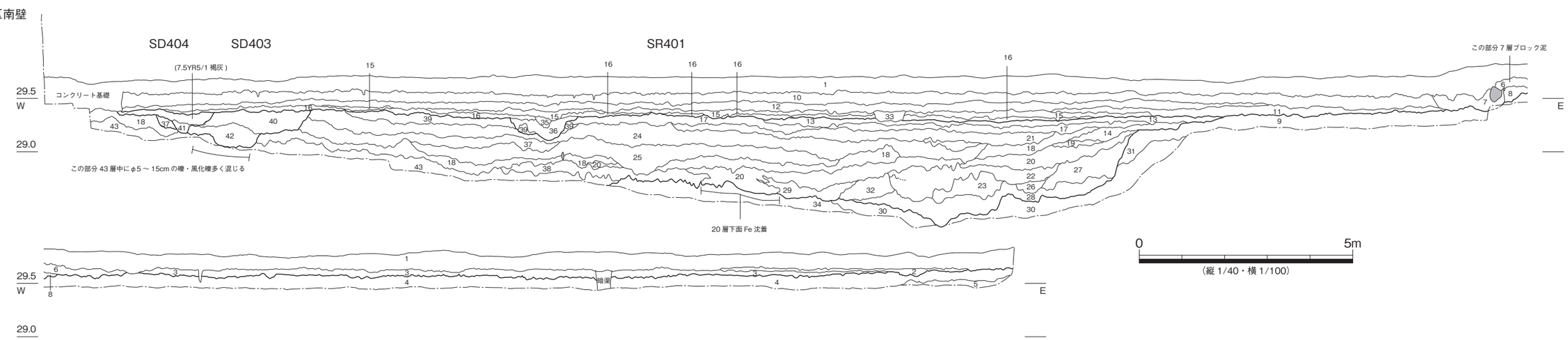
遺物の出土状況から SR401 の埋没過程は概ね 2 段階に分けられる。第 1 段階は弥生時代後期前半以降、第 2 段階は 7 世紀前半～ 8 世紀後半頃と考えられる。



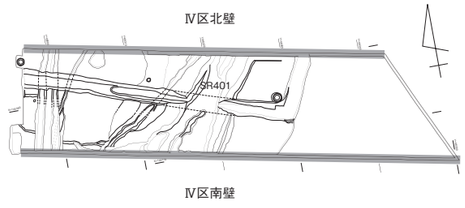
Ⅳ区北壁
1　耕作土
2　7.5Y5/1 灰色粘質シルト (花崗土少混じる．Fe 含む)= 旧耕作土
3　撹乱
4　灰白色混じり 10YR7/8 黄橙色粘土 (Mn 斑著．粘性強い)= 地山　16 層付近でφ5cm 前後の砂岩礫少含む
5　灰白色・10YR7/6 明黄褐砂混じり粘土 (細砂少混じる．Fe 斑著)=SD404
6　10YR6/1 褐灰色砂混じり粘土をブロック状に含む．2.5Y7/1 灰白色細砂 =SD404
7　2.5Y6/1 黄灰色砂礫 (粗砂．Φ1 ～ 5cm の風化小礫多含む)=SD403 下層
8　黄橙色混じり 5Y8/1 灰白色砂混じり粘土 (ややシルト質．Mn 斑著．4 層と基本的に同じ．4 層よりやや灰色味強) = 地山
9　2.5Y5/1 黄灰色粘土 (上位に Mn 斑著．Fe 斑含む．下位は砂混じる)=SD403 土層
10　2.5Y6/8 明黄褐色粘質シルト (Fe 斑著)= 旧耕土か床土
11　10YR4/1 褐灰色砂混じり粘土 (Mn 斑著．Fe 斑含む)=SD402
12　7.5YR4/1 褐灰色砂混じり粘土 (Mn 斑著．Fe 斑含む．φ～ 3cm の小石少含む)=SX401
13　5Y6/1 灰色粘土 (Fe 著)= 旧耕土
14　2.5Y6/1 黄灰色砂混じり粘土 (Fe 著．Φ1 ～ 2cm のベースブロック含む)= 旧耕土
15　10YR3/1 黒褐色砂混じり粘土 (Mn 斑著．φ1 ～ 5cm の小石少含む．16 層上面付近に多い)=SR401
16　黄色・2.5Y8/1 灰白色粗砂混じり粘土 (砂多混じる．φ1 ～ 7cm の風化礫．砂岩礫．比較的多く含む)= 地山
17　灰色・10YR7/8 黄橙色砂混じり粘土 (Mn 斑著．Fe 斑含む)=SR401
18　黄色混じり 10YR7/8 黄橙色粘土 (Mn・Fe 斑含む)=SR401
19　2.5Y6/1 ～ 5/1 黄灰色砂混じり粘土 (Mn 斑含む)=SR401
20　2.5Y8/2 灰白色シルト (Mn 斑含む．上面に Fe 斑含む)= 近世溝？
21　7.5YR6/1 褐灰色砂混じり粘土 (細砂混じる．Mn・Fe 斑含む)=SD401
22　10YR5/1 褐灰色砂混じり粘土 (上面と下面に中砂細層混じる．Mn・Fe 斑少含む．Φ1cm の小石極少含む) =SD401
23　10YR5/1 褐灰色砂混じり粘土 (22 層よりやや暗い)=SD401
24　黄色混じり 5Y5/1 灰白色粘土 (粘性強．Fe 含む)= 地山．4 層より漸移的．ややシルト質
25　2.5Y6/6 明黄褐色砂混じり粘土 (粘性強いシルト質．Fe 斑著．4 層より漸移的)= 地山
26　N4/ 灰色粘土・10GY7/1 明緑灰色細砂ラミナ
27　5Y7/1 灰白色シルト・5Y7/6 黄色中砂ラミナ
28　7.5Y6/1 灰色砂礫 (粗砂φ5 ～ 15cm の風化礫．砂岩礫含む)
29　2.5Y8/4 淡黄色粘質シルト (Mn 斑・Fe 斑少含む)= 旧耕土．20 層に近似
30　N6/ 黄色褐灰色粘土 (Fe 著．14 層に近似)= 旧耕土
31　5YR5/1 褐灰色砂混じり粘土 (砂多い．Φ1cm 前後の小石極少含む．Fe 含む)= 南壁 18 層
32　N3/ 暗灰色粘土 (強粘質．Fe 含む．上位に中砂多混じる)=SR401 中層
33　2.5GY8/1 灰白色シルト～極細砂・2.5Y5/1 黄灰色粘質シルトラミナ (Fe 斑含む．Φ3 ～ 4 c m の 40 層ブロック含む)=SR401 中層
34　2.5Y7/1 灰白色中層 (層としては確認できない．31 層上面で水流はあったようだ)
35　10Y8/2 灰白色中～粗砂・10YR4/1 褐灰色粘土 (31 層とほぼ同じ)・10YR7/1 灰白色シルトラミナ =SR401 中層
36　35 層と基本的に同じ灰白色シルトが主体を占める．33 ～ 37 層は一まとめにしてもよいかもしれない =SR401 中層
37　2.5Y5/1 黄灰色粘土・N7/ 灰白色細砂～シルト・5GY8/1 灰白色細～中砂ラミナ (上位に Fe 浸．Φ10cm の 40 層ブロック含む．下位にφ1 ～ 5cm の風化礫含む)
38　10YR8/4 浅黄橙色中砂・10YR5/8 明黄褐色中～粗砂ラミナ =SR401 最下層．42・43 層は分離する必要はないかもしれない
39　N6/ 灰色砂混じり粘土 (強粘質・炭化物粒含む)
40　N2/ 黒色粘土 (強粘質・炭化物粒含む)=SR401 下層
41　N3/ 暗灰色砂質粘土 (Fe 含む．砂多混じる)=SR401 下層
42　N7/ 灰白色細～中砂・2.5Y8/8 黄色中～粗砂ラミナ =SR401 最下層．42・43 層は分離する必要はないかもしれない
43　N7/ 灰白色～ 10YR7/8 黄橙色砂礫 (φ2 ～ 15cm の風化礫など多含む)=SR401 最下層
44　5PB7/1 明青灰色砂混じり粘土 (強粘質)= 地山
45　7.5Y6/3 オリーブ黄色粘土 (強粘質．Fe 含む．46 層より漸移的に変化)= 地山
46　10GY8/1 明緑灰色砂混じり粘土 (φ1 cm 前後の小砂含む．29.5m以西で Fe 含む)= ベース
47　10GY8/1 明緑灰色砂礫混じり粘土 (φ1 ～ 6cm の小石多含む．粗砂多含む．粘性弱)= ベース
48　5B6/1 青灰色粘土 (Fe 含む)= 床土 o r 旧耕土
49　2.5Y5/2 暗灰黄色粘土 (Fe 含む)
50　7.5Y4/1 灰色粘土 (Fe 斑含む．Φ2cm 前後の 55 層ブロック含む) 砂混じり．弱粘土
51　5Y4/2 灰オリーブ色砂混じり粘土 (Fe 含む．Φ1 ～ 3cm のベースブロック多含む)=SD405 埋め戻し土
52　7.5Y4/1 灰色粘土 (ベタ粘・Fe 含む)
53　10BG5/1 青灰色粘土 (ベタ粘・Fe 含む) ビニール袋有り =SD405 現代
54　10G4/1 暗緑灰色粘土 (ベタ粘)=SD405 現代
55　2.5Y8/2 灰白色砂混じり粘土 (Fe 著．Φ1cm の小石少含む)= 旧床土
56　7.5GY7/1 明緑灰色粘土 (炭粒含む．Fe 含む)
57　10GY7/1 明緑灰色砂混じり粘土・2.5Y8/2 灰白色細砂ラミナー
58　2.5Y5/1 黄灰色粘土 (強粘質．Fe 斑含む)2.5Y8/4 淡黄色粘土 (砂混じり) ラミナー
59　黄色混じり 2.5Y7/2 灰黄色シルト (Fe 斑著)= 床土
60　2.5Y6/1 黄灰色粘質シルト (Fe 斑・Mn 斑含む)φ1cm 前後のベースブロック含む
61　2.5Y7/8 黄色砂混じり粘土 (強粘質．上位に Mn 斑著)= 地山
62　黄色混じり 5Y8/1 灰白色砂混じり粘土 (Mn 斑少・61 層より漸移的に変化)= 地山
63　7.5Y6/1 灰色粘土 (Fe 斑含む．60 層φ5cm 前後のブロック含む)= 旧耕土か床土
64　N6/ 灰色粘土 (Fe 斑含強粘質)=SR401 中層？
※　37 層より北半部は多くの土器が出土した

北 壁18 層 = 南 壁17 層
北 壁17 層 = 南 壁13 層

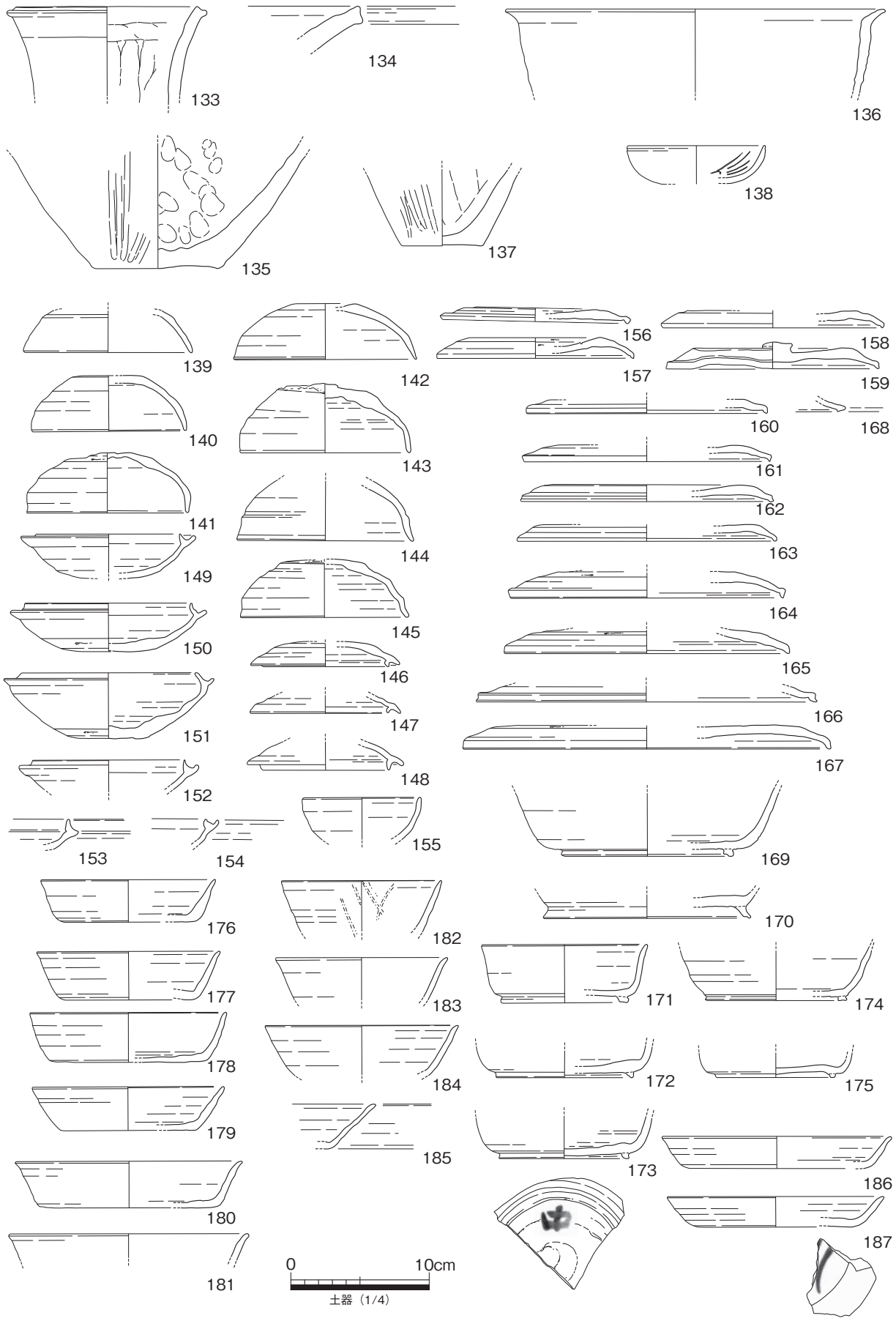
Ⅳ区南壁



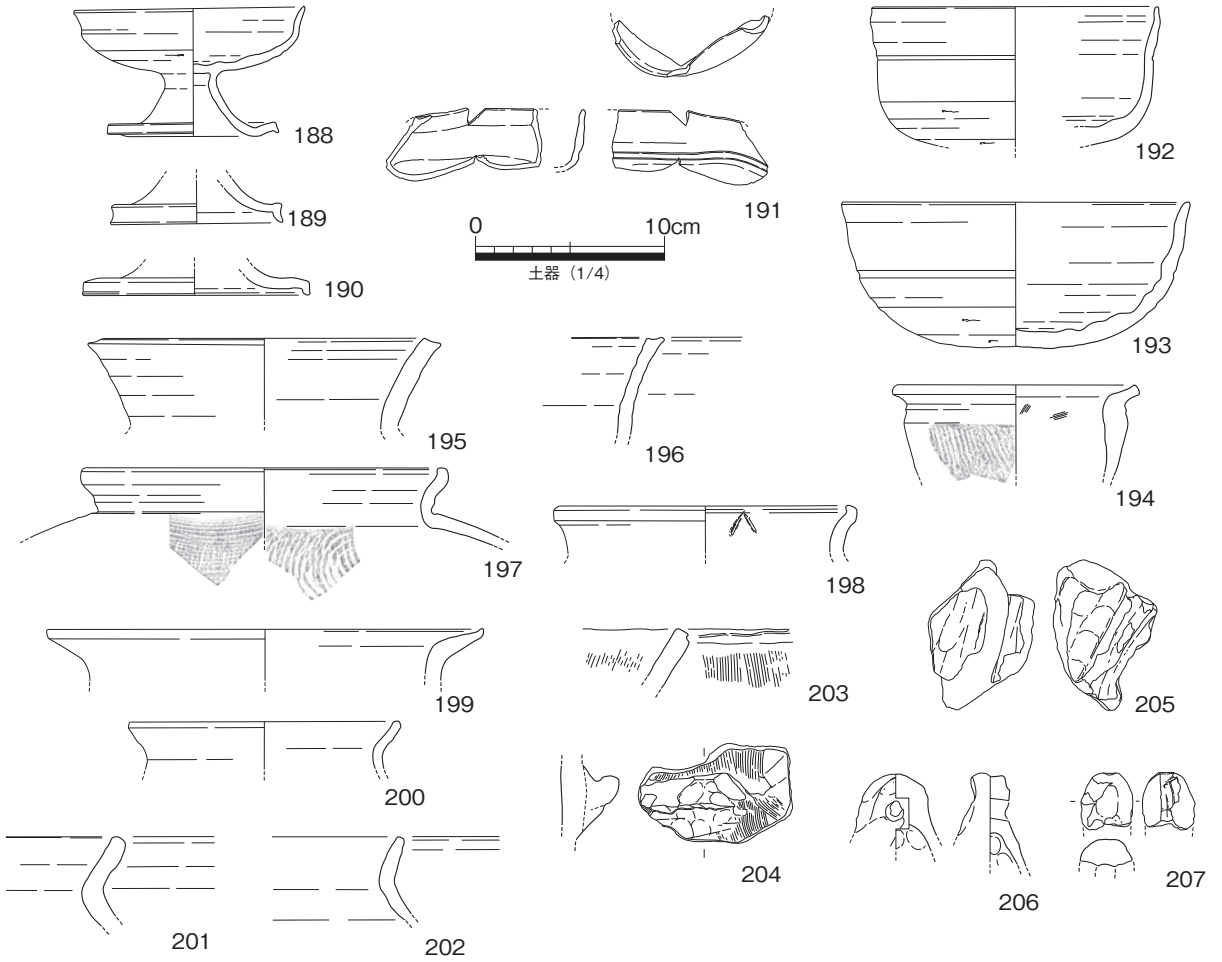
Ⅳ区南壁
1　耕作土
2　2.5Y7/1 灰白色粘質シルト (Fe 著)= 床土
3　N6/ 灰色シルト (Fe・部分的にφ2 ～ 3cm のベース 4 層ブロック含む)= 旧耕土か床土　中世？
4　2.5Y8/4 濃黄色粘土 (上位に Mn 斑著)= ベース．下位はややシルト質
5　黄色・2.5Y8/1 灰白色砂混じり粘土 (φ3 ～ 10cm 砂岩礫・風化礫含む)= ベース
6　5Y6/1 灰色粘質シルト (上位に Fe・φ2 ～ 3cm の 4 層ブロック含む．Φ2 ～ 3cm の小石少量含む)= 床土
7　7.5Y4/1 灰色粘土 (1 層に近似)= 旧耕土か溝埋土
8　5Y5/1 灰色粘質シルト (Mn 著)= 近世？溝か包含層
9　10GY8/1 明緑灰色砂混じり粘土 (φ2 ～ 30cm の砂岩礫・風化礫多量に含む)= ベース
10　5Y7/1 灰白色粘質シルト (上位 Fe 著・φ2 ～ 3cm の小石わずか含む)= 床土
11　N7/ 灰白色砂混じり粘土 (砂多い．Φ2 ～ 4cm の風化礫多く含む)= 中世？包含層
12　2.5Y8/2 灰白色シルト (Fe 含む)= 旧耕土か床土
13　7.5YR5/1 褐灰色粘土 (砂混じる．Fe 含む)SR401 埋土
14　7.5YR4/1 褐灰色砂混じり粘土 (Fe 含む)SR401 埋土
15　2.5Y8/2 灰白色粘土 (Mn 含む．部分的に 2 層に細分される可能性有り) 中世耕作土層
16　灰色混じり 2.5Y6/8 明黄褐色粘土 (わずかに砂混じる粘性強い．わずかに Mn 含む)
17　2.5Y7/6 明黄褐色砂混じり粘土 (Mn 含む・わずかに炭細粒含む．10YR7/8 黄橙色を呈する所有)
18　7.5YR5/1 褐灰色砂混じり粘土 (φ2 ～ 4cm の風化礫少量含む．粗砂混じる)
19　2.5Y3/1 黒褐色粗砂混じりシルト (φ1 ～ 3cm の風化礫少量含む)
20　2.5Y8/1 灰白色～ 2.5Y8/2 灰白色．細～中砂 (φ2 ～中砂 (φ2 ～ 7cm の風化礫多く含む．2.5Y3/3 暗オリーブ褐色～ 2.5Y3/1 黒褐色粘土ラミナー (東半部 37m 以西では 18 層に灰白色の細～中砂を多く混じるようになる分層不能)40m以西では 29 層ラミナー状に含む)
21　黄色混じり 10YR5/1 褐灰色粘土 (Fe・Mn 含む・炭細粒含む・東半部では 18 層に近似する)
22　5Y2/1 黒色粘土 (φ2 ～ 5cm の 23 層ブロック含む．灰色中砂ブロック状に含む)
23　10Y7/2 灰白色シルト 2.5Y4/1 黄灰色粘土・ラミナー
24　10YR6/8 明黄褐色粘土 (Mn 多く含む．42m より西では 10YR6/2 灰黄褐色を呈するようになる)
25　2.5Y5/6 黄褐色砂混じり粘土 (砂少ない．Mn 多い．24 層と大差なし．43m50cm 付近ではやや深くなり 18 層のφ7・8cm のブロックを多く含む．分層困難・溝か ?)
26　7.5YR2/1 黒色粘土 (わずかに砂混じる粘性強いベタ粘)
27　2.5Y5/1 黄灰色砂混じり粘土 (砂多く Fe 顕著．27 層上面より)
28　10Y6/1 灰色中～粗砂 (φ3 ～ 15cm の風化礫等多量に含む．部分的に 22・26・27 層とラミナー状を呈す．30 層砂礫層と分層困難) 南端より 6 世紀末の高杯が正置の状態で出土
29　2.5Y4/1 黄灰色粘土 (植物遺体多量に含む．22 層のφ10 ～ 20cm のブロックを含む．部分的にシルト質を帯びる．細砂をラミナー状に含む部分もある．安定した体積状況を示さない)(遺物・土器類は少ない) 本層より木製品が多く出土した
30　5Y7/1 灰白色砂礫 (φ3 ～ 30cm の風化礫．円礫等多量に含む)= 地山
31　5Y7/1 灰白色砂混じり粘土 (この層上面より Fe・上面は上層の影響により濁る．下層の影響によって下位にφ3 ～ 10cm の風化礫等含む)= 地山
32　10GY7.5/1 明緑灰色粘土 (上面より Fe 下位は 28 層の影響で砂混じる．遺物きわめて少ない．23 層に近似)
33　2.5Y8/2 灰白色粘土 (わずかに砂混じる．Mn 含む．Φ2 ～ 3cm の 13 層ブロック含む．15 層に近似)
34　10BG 明青灰色粗砂混じり粘土 (Fe 含む．Φ10cm 前後の風化礫少量含む)
35　10YR7/6 明黄褐色中砂混じりシルト (15 層に近似)
36　10YR5/1 褐灰色粗砂混じり粘土 (Φ2 ～ 5cm のベースブロック含む)
37　10YR3/3 暗褐色粘土 (Mn 顕著に含む．24 層より漸移的に変化)
38　2.5Y5/1 黄灰色極細砂混じりシルト (部分的に粗砂混じる．Φ2・3cm のベースブロックまれに含む)
39　10YR6/6 明黄褐色砂混じり粘土 (Mn 多く含む．17 層に近似．17 層より灰味強い)
40　10YR6/6 明黄褐色粘土 (Mn 含む．52m ～ 52m60cm 部分で灰色の細～中砂ラミナー状に含む 53m60cm 以西では 7.5YR5/1 褐灰色を呈する分層は困難)
41　7.5YR4/1 褐灰色砂混じり粘土 (Mn わずかに含む)
42　2.5Y6/2 灰黄色砂礫 (φ1 ～ 5cm の風化礫多量に含む)
43　灰白色・2.5Y7/8 黄色砂混じり粘土 (φ2 ～ 3cm の小石少量含む)



第 23 図　Ⅳ区北・南壁土層断面図

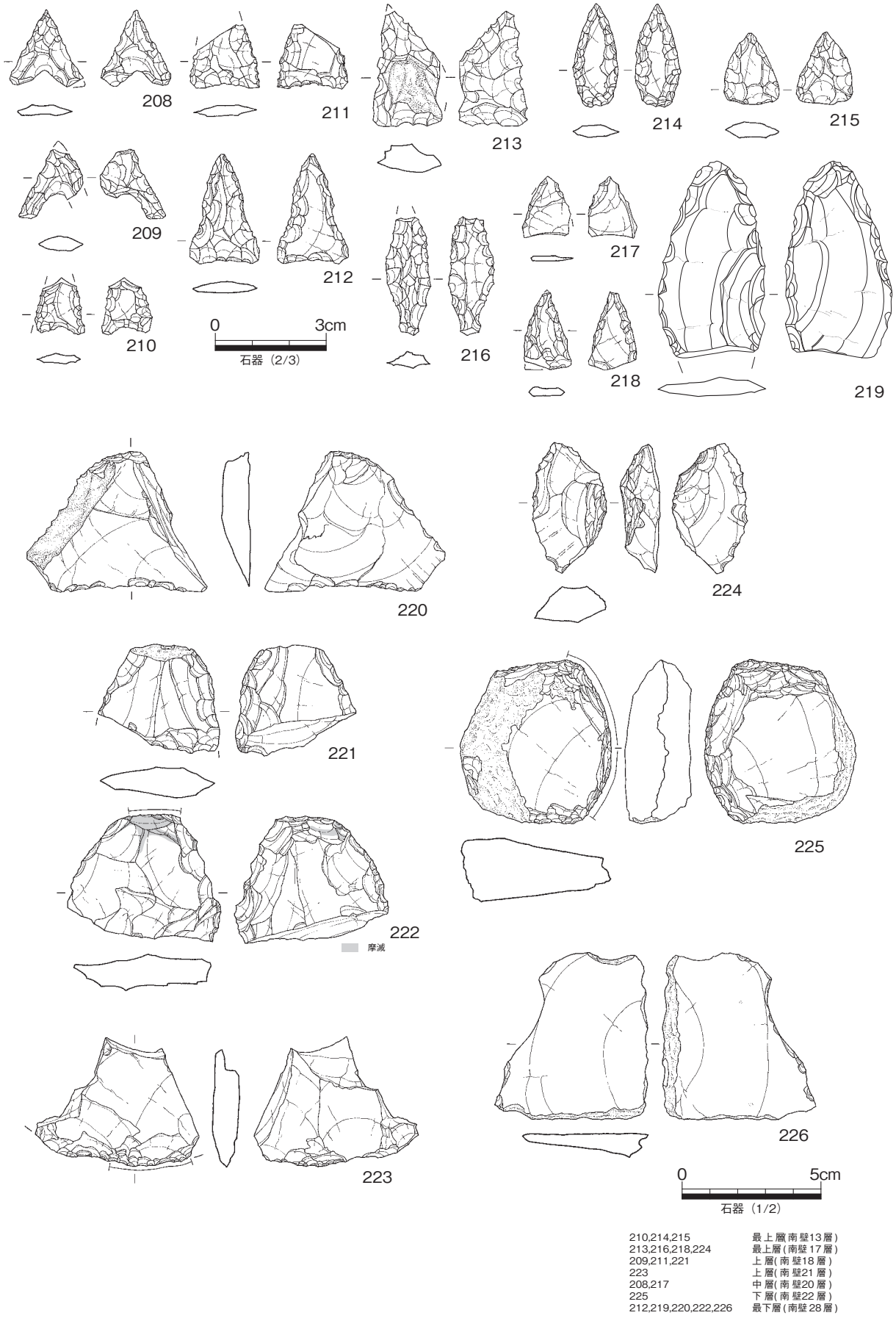


第 24 図　SR401 出土遺物（1）



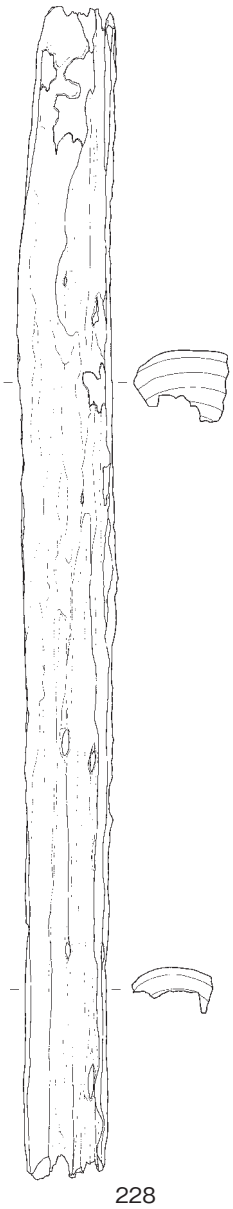
134,157,176,187,196,200	最上層 (南壁 13 層)
156,160,177,179,182	最上層 (南壁 16 層)
158,159,161 ～ 164,167,	
169,170,173,	
178,180,185,186,190,203,	
204,207	最 上 層 南 壁17 層)
165,174,206	最 上 層 北 壁18 層)
171	最上・上層 (南壁 17・21 層)
152	最上・上層 (南壁 13・18 層)
147,154,155,205	上 層(南 壁18 層)
166,172,175,183,184,194,	
195,199,201	上 層(南 壁21 層)
150	上・中層 (南壁 18・20 層)
141	上・中層 (南壁 14・18 層)
146	上・中・下層 (南壁 18・20・22 層)
145	上・下層 (南壁 18・22 層)
197	上・下・最下層 (南壁 18・22・28 層)
153,168	中 層(南 壁20 層)
138,139,144	下層 (南壁 22･29ﾗｲﾅ)
142,189	下 層(南 壁22 層)
136,181,202	下 層(北 壁15 層)
143,191,193	下・最下層 (南壁 22・28 層)
133,135,137,140,148,149,	
151,188,192,198	最 下 層 南 壁28 層)

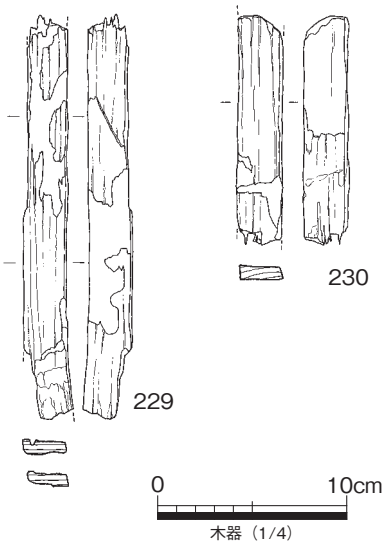
第 25 図　SR401 出土遺物（2）



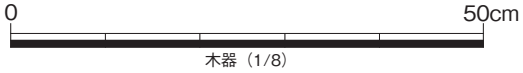
210,214,215	最上層(南壁13層)
213,216,218,224	最上層(南壁17層)
209,211,221	上層(南壁18層)
223	上層(南壁21層)
208,217	中層(南壁20層)
225	下層(南壁22層)
212,219,220,222,226	最下層(南壁28層)

第26図　SR401 出土遺物（3）

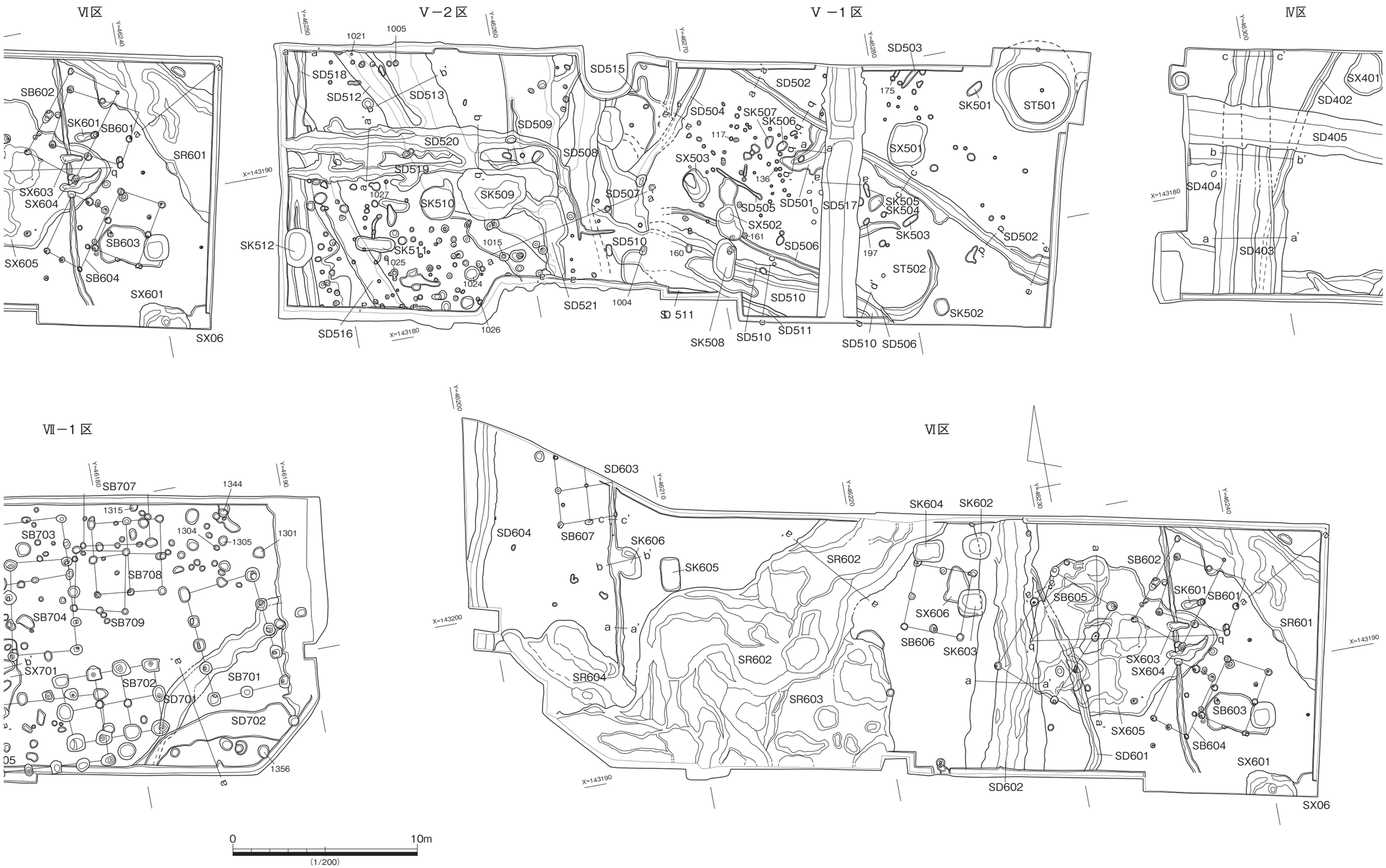




227～229　下層
230　　下層（南壁 29 層）



第 27 図　SR40



第 28 図　Ⅴ～Ⅵ区遺構配置図

第４節　Ⅴ・Ⅵ区の調査

１.はじめに

Ⅴ・Ⅵ区は調査区東半部の西部に位置し、延長約 96 ｍを測る調査区である。Ⅴ区からは２基の弥生時代中期以降の円形周溝状遺構、数条の７世紀初頭～８世紀後半の溝状遺構、近世以降の外郭溝を伴う屋敷地等を検出した。円形周溝状遺構は住居の外周を巡る周溝の可能性もあるが、周溝の規模等から墓の可能性が高い。ただ、削平により主体部を欠くため若干の問題を残している。Ⅵ区からは７世紀初頭頃の７棟の掘立柱建物からなる集落グループと３条以上の流路が重複する河川跡 SR602 ～ 604 を検出した。河川からは、弥生時代中期～後期後半、７世紀初頭頃の遺物が多量に出土しており、遺物の出土状況から推定して、SR602 ～ 604 は弥生時代後期後半以降には初期の流路が存在しており、７世紀前半以降に本格的に埋没が開始し、完全に平坦化するのは古代前半頃と推定される。注目できる遺物としては、土馬の脚部と考えられる資料や鉄鏃が１点出土しており、先述したⅣ区 SR401 から出土した墨書土器を含め、周辺域に所在する集落の性格を推定するうえで重要な遺物になる。

２.Ⅴ区の調査

（１）土坑跡

SK501（第 29 図）

Ⅴ区東端部、ST501 の西側で検出した土坑である。削平を受けたものと考えられ残りは極端に悪い。平面は長楕円形状を呈し、長径 1.08 ｍ、短径 0.43 ｍ、深さ 0.02 ｍ、主軸方位 N61° E を測る。断面は皿状を呈し、埋土からは弥生土器か土師器か判断できない土器の細片が数点出土した。出土遺物が少ないため、SK501 の時期の判断は出来ない。

SK502（第 29 図）

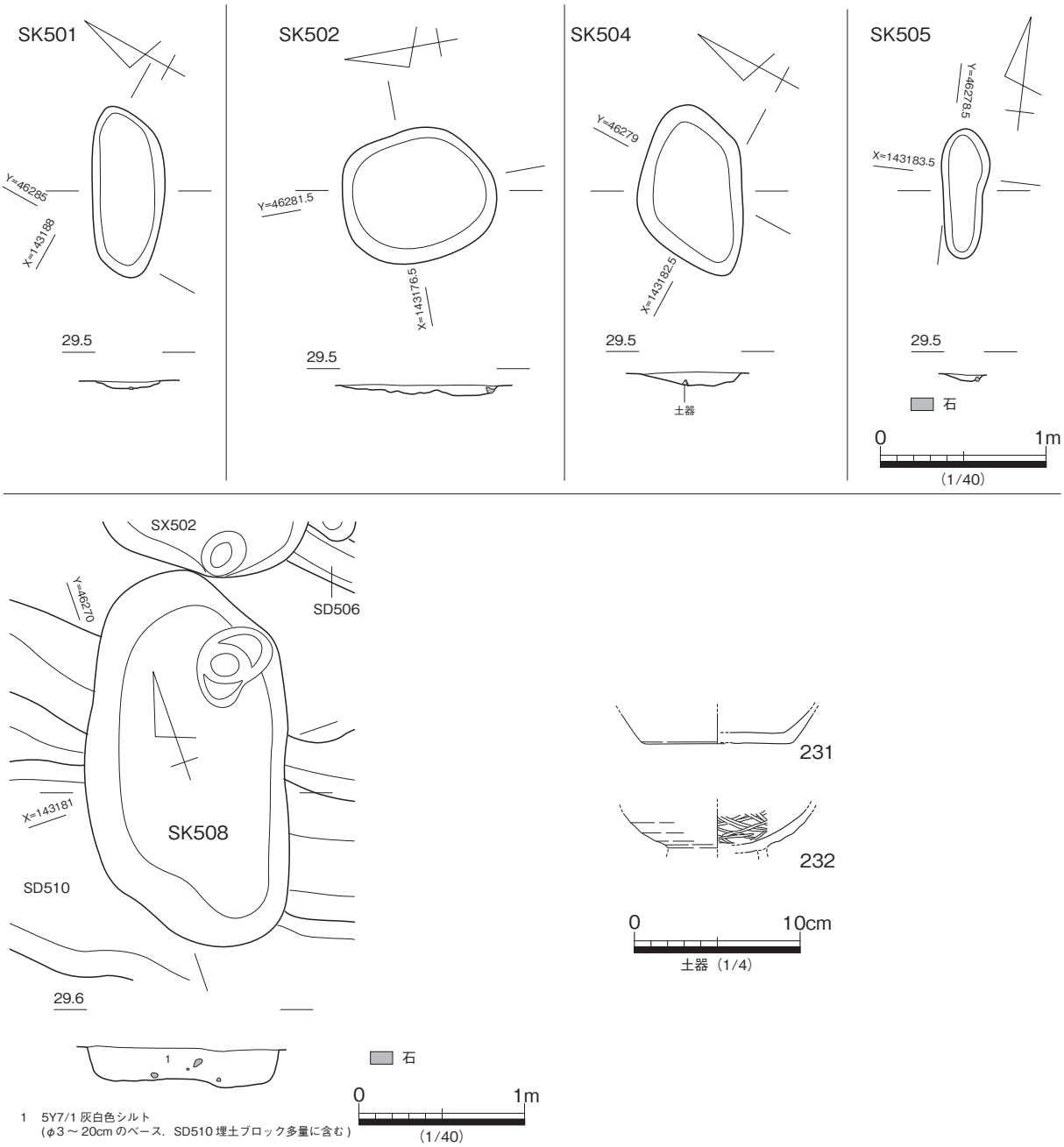
Ⅴ区東半部、ST502 の南東側で検出した土坑である。削平を受けたものと考えられ残りは悪い。平面は円形状を呈し、長径 0.94 ｍ、短径 0.84 ｍ、深さ 0.08 ｍを測る。断面は凹凸のある皿状を呈し、埋土から遺物は出土しなかったため、SK502 の時期の判断は出来ない。

SK503（第 35 図）

Ⅴ区東半部､ST502 の北東側で検出した土坑である。削平を受けたものと考えられ残りは極端に悪い。平面は長楕円形状を呈し、長径 1.0 ｍ、短径 0.34 ｍ、深さ 0.02 ｍ、主軸方位 N65° E を測る。断面は皿状を呈し、埋土からは弥生土器か土師器か判断できない土器の細片が数点出土だけで、出土遺物が少ないため、SK503 の時期の判断は出来ない。

SK504（第 29 図）

Ⅴ区東半部、ST502 の北側で検出した土坑である。削平を受けたものと考えられ残りは悪い。平面は不整楕円形状を呈し、長径 1.04 ｍ、短径 0.64 ｍ、深さ 0.08 ｍ、主軸方位 N61° E を測る。断面は皿状を呈し、埋土からは土師器片、須恵器甕片等が数点出土した。出土遺物から SK504 の詳細な時期判断を下すには無理があるが、概ね古代の遺構と考えられる。



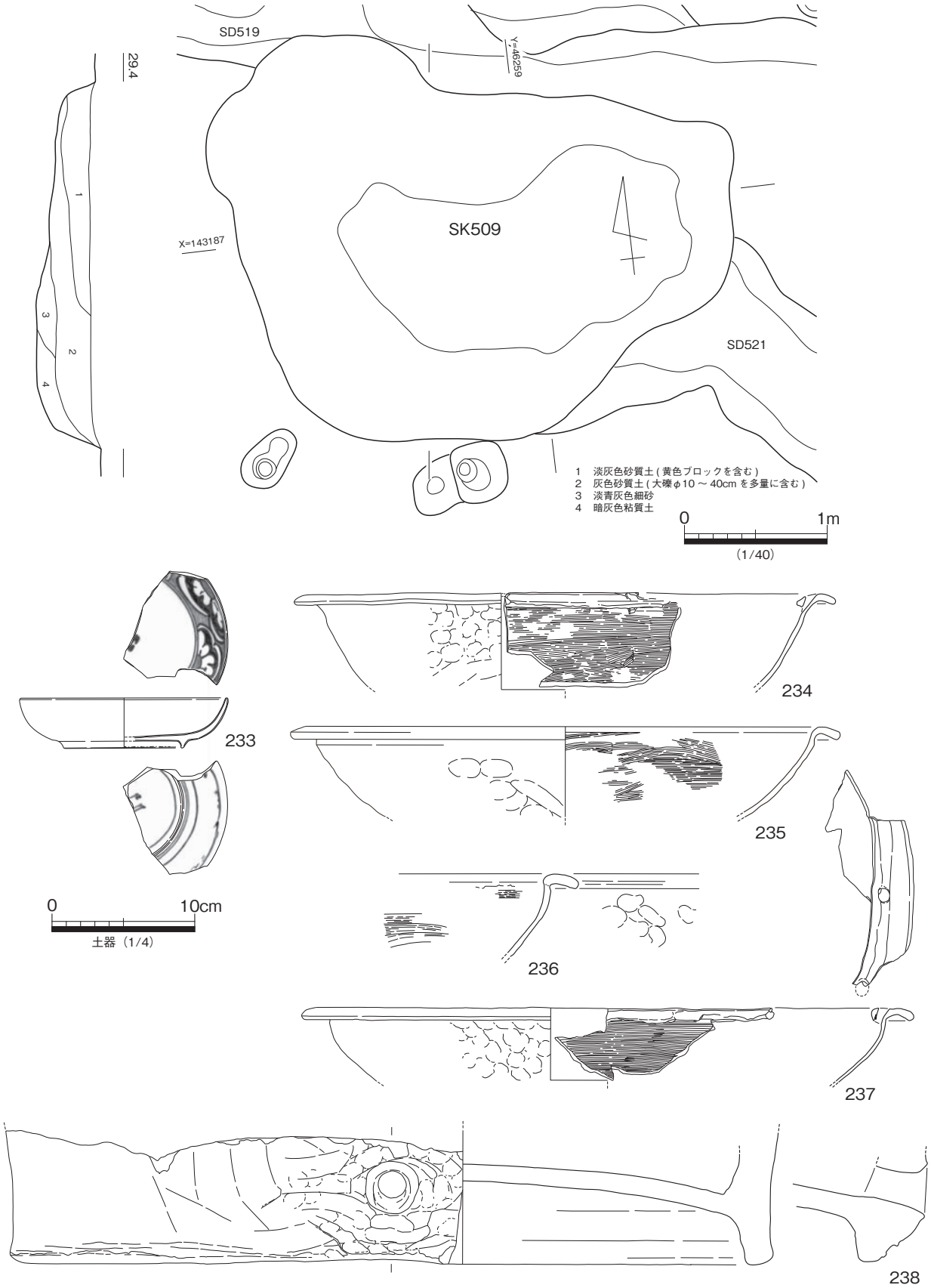
第 29 図　SK501・502・504・505・508 平・断面図，出土遺物

SK505（第 29 図）

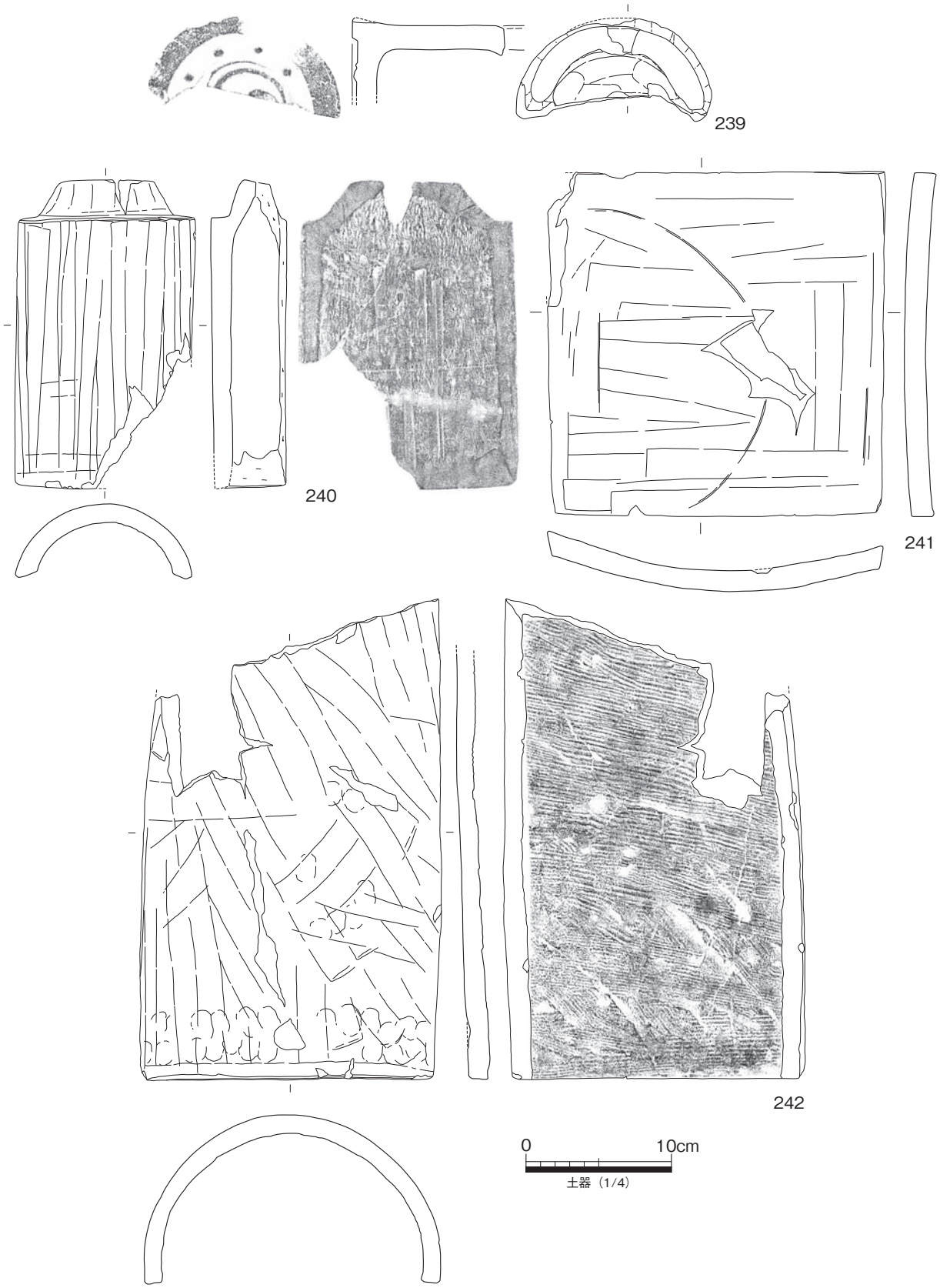
Ⅴ区中央部、SD517 の東側で検出した土坑である。削平を受けたものと考えられ残りは悪い。平面は長楕円形状を呈し、長径 0.8 m、短径 0.3 m、深さ 0.04 m、主軸方位 N6° W を測る。断面は浅い皿状を呈し、埋土からは土師器片が数点出土しただけで、詳細な時期判断を下すには無理がある。

SK508（第 29 図）

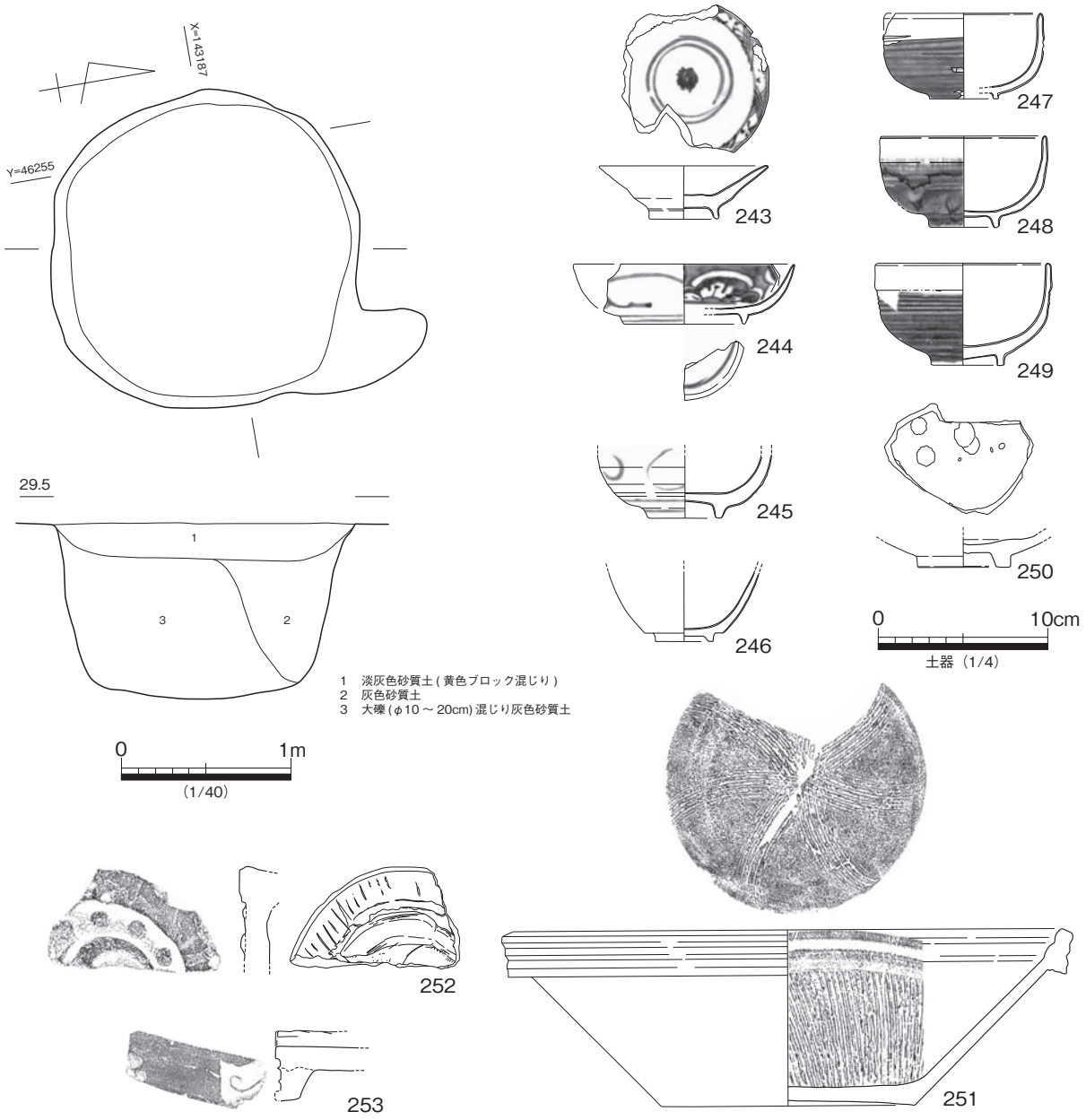
Ⅴ区中央に位置し、SD510 を切り込んで検出された土坑である。平面は不整楕円形状を呈し、長径 2.24 m、短径 1.2 m、深さ 0.21 m、主軸方位 N20° E を測る。断面は幅広な U 字状を呈し、埋土は灰白色シルトの単層である。



第 30 図　SK509 平・断面図，出土遺物（1）



第 31 図　SK509 出土遺物（2）

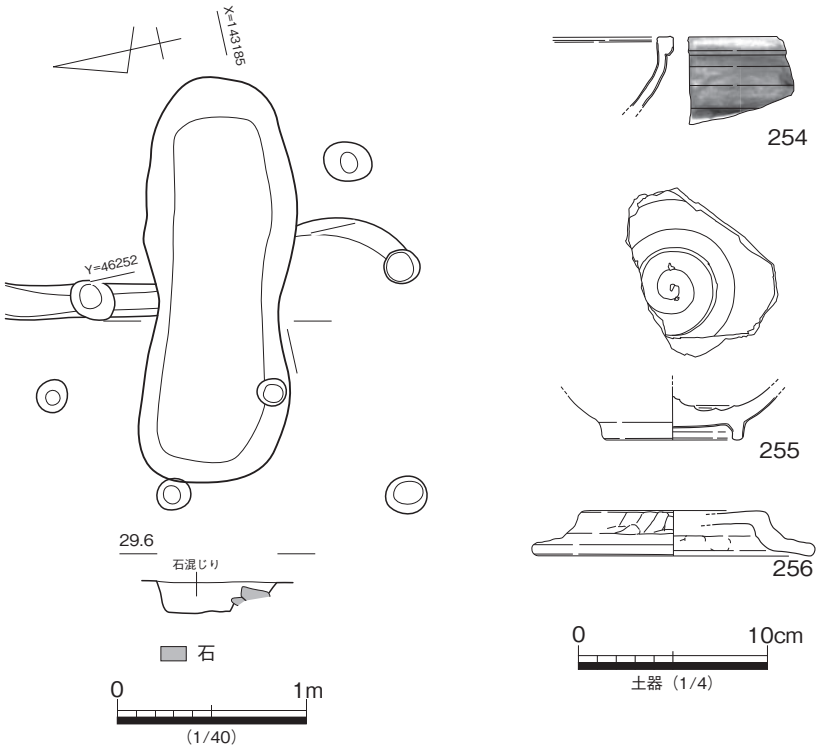


第 32 図　SK510 平・断面図，出土遺物

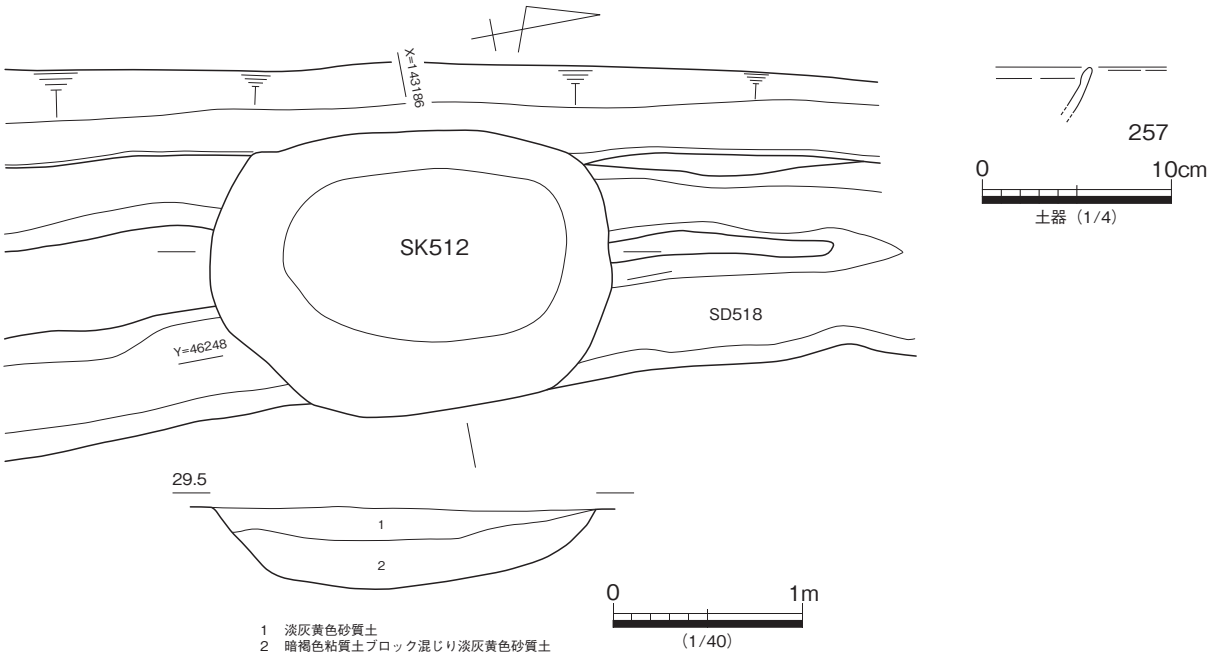
埋土からは土師器・須恵器が少量出土した。231 は土師器の杯底部である。232 は黒色土器の椀の底部片である。出土遺物から SK508 は古代末の 12 世紀頃の時期が考えられる。

SK509（第 30・31 図）

Ⅴ区西半部、SK510 の東側、SD519・521 を切り込む形で検出した土坑である。平面は不整楕円形状を呈し、底面は比較的平坦である。掘方の下位層ではベースの砂層を掘りこんでおり、湧水がみられることから水溜め状の遺構の可能性が高い。長径 3.72 m、短径 2.82 m、深さ 0.24 ～ 0.38 mを測る。断面は幅広な隅丸逆台形状を呈し、上層は径 10 ～ 40cmの礫混じり灰色砂質土、下層は淡青灰色細砂、暗灰色粘質土である。



第 33 図　SK511 平・断面図，出土遺物



第 34 図　SK512 平・断面図，出土遺物

埋土からは 19 世紀頃の染付、瓦質土器、瓦等が出土した。233 は染付皿、234 ～ 237 は瓦質土器の焙烙、238 は土師質の風呂釜の底部、239 は軒丸瓦、240 ～ 242 は丸瓦と平瓦である。出土遺物から SK509 は近世後半以降の時期が考えられる。

SK510（第 32 図）

Ｖ区西半部、SD519 の南、SK509 の西側で検出した土坑である。平面は円形状を呈し、底面は比較的平坦である。掘方の下位層ではベースの砂層を掘りこんでおり、かなり湧水がみられることから井戸であった可能性が高い。長径 2.24 m、短径 1.9 m、深さ 1.04 mを測る。断面はＵ字状を呈し、上層は淡灰黄色砂質土、下層は径 10 ～ 20㎝程の礫混じりの灰色砂質土をからなる。

埋土からは近世陶磁器、瓦片等が出土した。243・244 は染付皿、245 ～ 250 は陶器の椀、251 は備前の擂鉢、252・253 は軒丸瓦と軒平瓦である。出土遺物から SK510 は近世以降の時期が考えられる。

SK511（第 33 図）

Ｖ区西端部、SK512 の東側で検出した土坑である。平面は長楕円形状、断面は逆台形状を呈する。長径 2.16 m、短径 0.84 m、深さ 0.16 m、主軸方位 N14° E を測る。

埋土からは 19 世紀頃の陶磁器等が出土した。254 は陶器の鉢､255 は陶器壺､256 は土師器の蓋である。出土遺物から SK511 は近世後半以降の時期が考えられる。

SK512（第 34 図）

Ｖ区西端部、SD518 を切り込んで検出した土坑である。平面は楕円形状を呈し、長径 2.12 m、短径 1.52 m、深さ 0.42 m、主軸方位 N11° E を測る。断面は幅広のＵ字状を呈し、上層は淡灰黄色砂質土、下層は暗褐色粘質土ブロック混じり淡灰黄色砂質土からなる。

埋土からは土師器・須恵器片が数点出土した。257 は土師器の杯口縁部片である。出土遺物から詳細な時期判断を下すには無理があるが、検出状況から SK512 は近世以降の土坑と考えられる。

（２）円形周溝状遺構

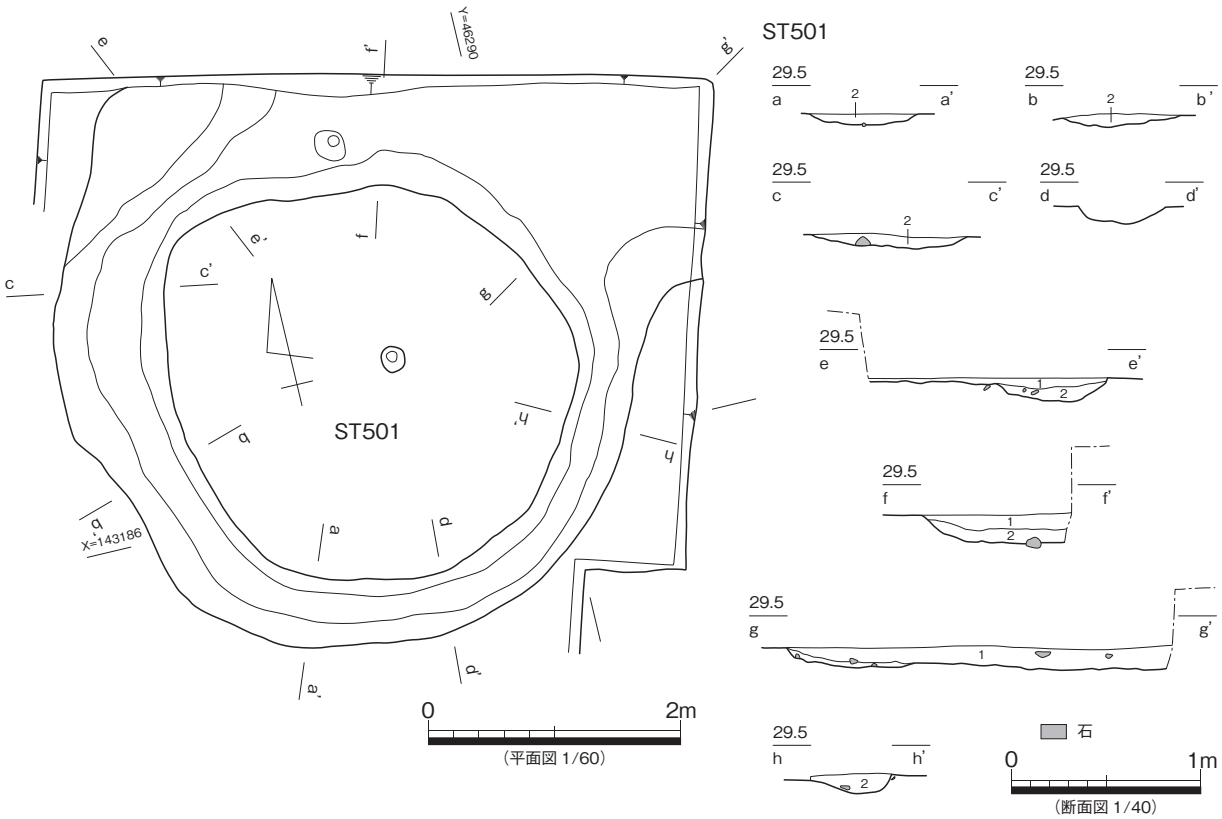
ST501（第 35・36 図）

Ｖ区北東端部で検出した円形周溝墓と考えられる遺構である。削平を受けたものと考えられ残りは悪く主体部は残っていない。周溝内側の径は約 3.4 mを測る。周溝は約 0.5 ～ 0.9 mの幅で南半部を巡るが、北半部は壁際に向けて広がることから、おそらく調査区外にもう一基の周溝墓が所在しているものと推定される。周溝の深さは 0.1 ～ 0.2 mを測る。断面は浅い皿状を呈し、埋土の上層は黒褐色粘質シルト、下層は暗灰黄色粘質シルトからなる。

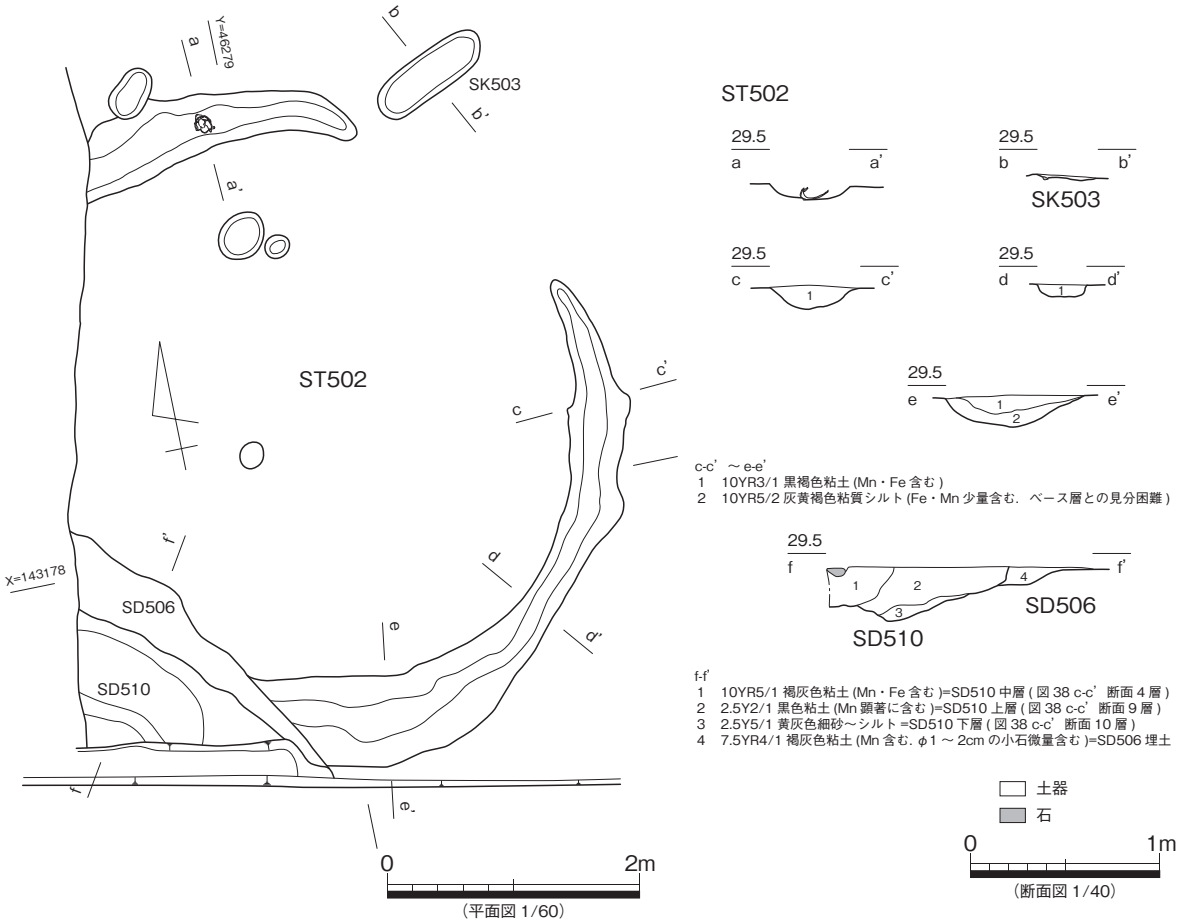
周溝からは弥生土器と石器片が数点出土した。258・259 は弥生土器の甕と鉢の口縁部片である。260 はサヌカイトの石鏃の先端部片である。出土遺物が少なく、これらの出土遺物から ST501 の詳細な時期判断を下すには無理がある。

ST502（第 35・36 図）

Ｖ区東半部の南壁際で検出した円形周溝墓である。削平を受けたものと考えられ残りは悪く主体部は残っていない。周溝内側の径は約 4.4 mを測る。西半部を SD517・510・506 等に切られている為、東半部の約 2/3 が残存している。周溝は円形状に巡るが､北東部がブリッジ状に 2.0 m程空いた形状を呈する。溝幅約 0.2 ～ 0.7 m、深さ 0.1 ～ 0.2 mを測る。断面の形状は浅いＵ字状を呈する。埋土は黒色粘土及び褐灰色粘土からなる。



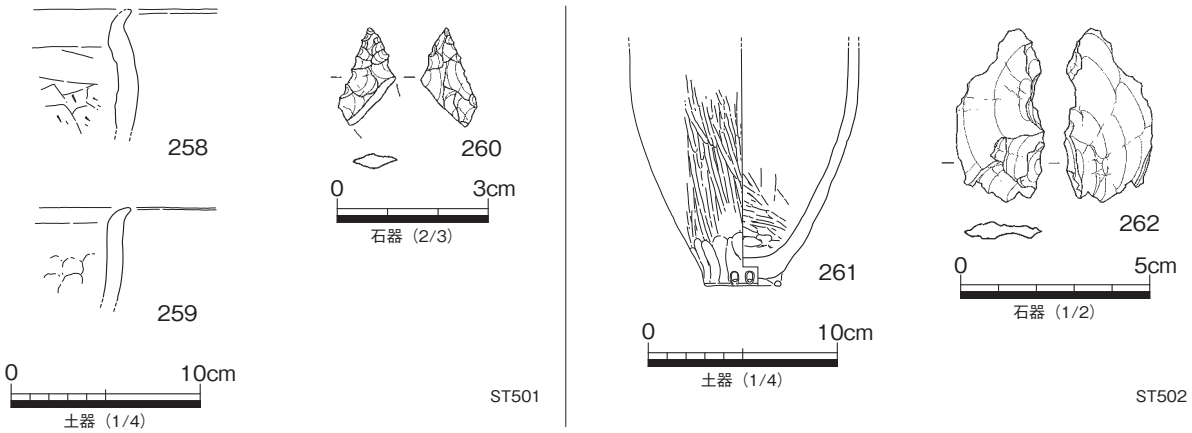
ST501
1　10YR2/2 黒褐色粘質シルト
　(砂混じる．Mn 含む．φ3 ～ 10cm の石少量含む)
2　2.5Y5/2 暗灰黄色粘質シルト
　(Mn 含む．φ1 ～ 10cm の石少量含む．ベース層に類似し、ベース層の流れ込みの可能性有り)



c-c'　～ e-e'
1　10YR3/1 黒褐色粘土 (Mn・Fe 含む)
2　10YR5/2 灰黄褐色粘質シルト (Fe・Mn 少量含む．ベース層との見分困難)

f-f'
1　10YR5/1 褐灰色粘土 (Mn・Fe 含む)=SD510 中層 (図 38 c-c'　断面 4 層)
2　2.5Y2/1 黒色粘土 (Mn 顕著に含む)=SD510 上層 (図 38 c-c'　断面 9 層)
3　2.5Y5/1 黄灰色細砂～シルト =SD510 下層 (図 38 c-c'　断面 10 層)
4　7.5YR4/1 褐灰色粘土 (Mn 含む．φ1 ～ 2cm の小石微量含む)=SD506 埋土

第 35 図　ST501・502，SK503，SD506・510 平・断面図



第 36 図　ST501・502 出土遺物

埋土からは弥生土器と石器が数点出土した。261 は口縁部を欠く甕である。262 はサヌカイト製の剥片である。出土遺物から ST502 は弥生時代前期末～中期前葉頃の遺構と考えられる。

（3）溝状遺構

SD501（第 37 図）

Ⅴ区東半部で検出した SD517・502 に切り込まれている不整形な溝跡である。弧を描くように若干湾曲しているが、削平を受けたものと考えられ残りは悪い。形状から円形周溝墓の一部が残存している可能性がある。検出長約 4.0 m、幅約 1.2 m、深さ約 0.1 mを測る。断面は浅い皿状を呈し、埋土は上層が黒褐色シルト、下層が黄灰色シルトからなる。

埋土からは土師器片が数点出土した。出土遺物から詳細な時期判断を下すには無理があるが、SD502 との切り合い関係から、少なくとも 7・8 世紀より前の溝跡であることは間違いなく、弥生時代まで遡る可能性もある。

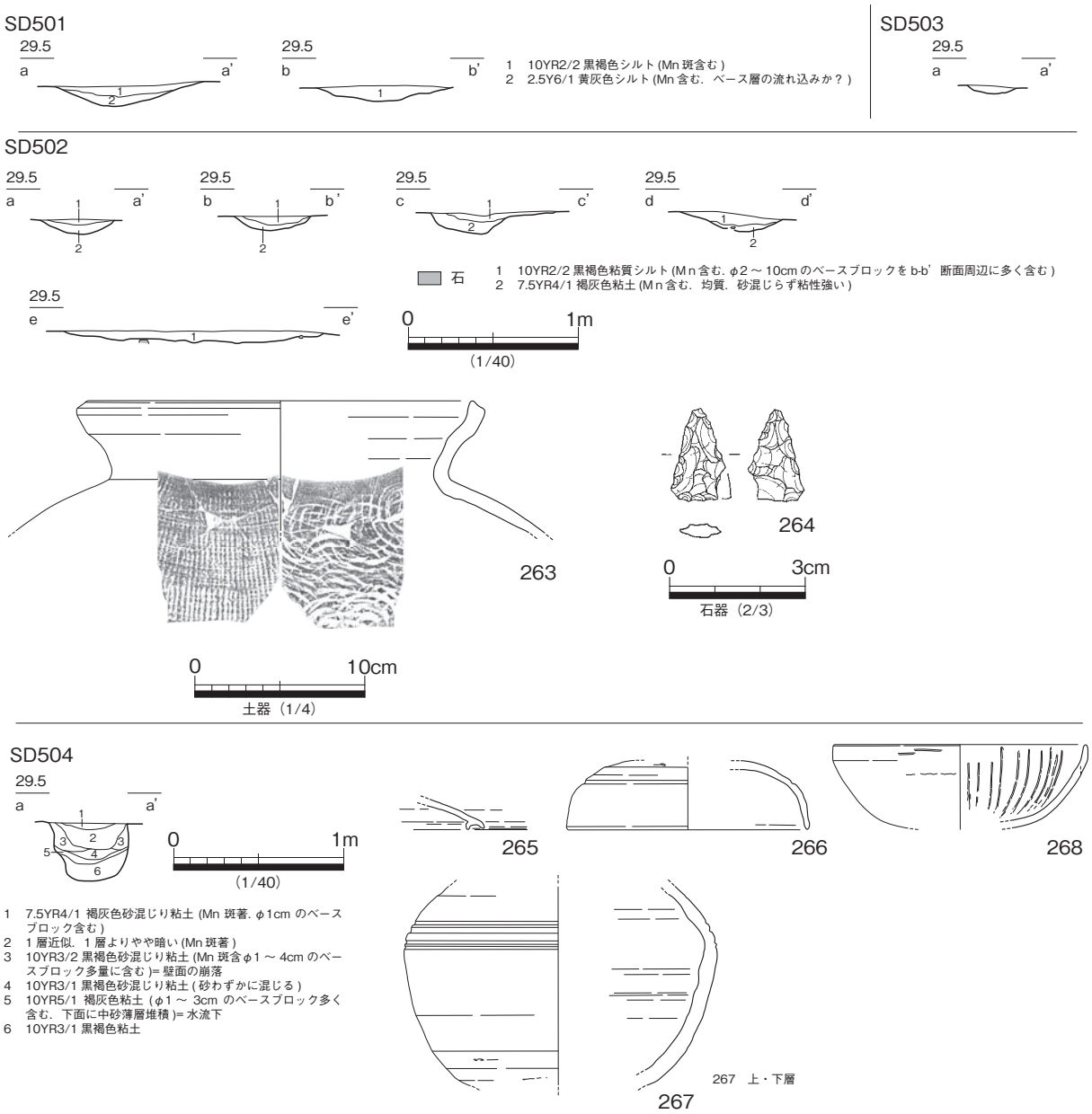
SD502（第 37 図）

Ⅴ区東半部で検出した北西方向へ延びる直線溝である。溝跡の中央部分で SD517 に切り込まれ、SD501 を切り込んでいる。検出長 20.6 m、幅 0.42 ～ 1.52 m、深さ 0.08 ～ 0.12 m、主軸方位 N45.0° W を測る。断面は浅い皿状を呈し、埋土は上層が黒褐色粘質シルト、下層が褐灰色粘土からなる。

埋土からは弥生土器・須恵器・石器等が少量出土した。263 は 7・8 世紀頃の須恵器甕上半部、264 はサヌカイトの石鏃で混入品である。出土遺物から SD502 は 7・8 世紀頃の溝跡と考えられる。

SD503（第 37 図）

Ⅴ区東半部、北壁際で検出した溝跡である。削平を受けたものと考えられ、残りは極めて悪い。検出長約 1.4 m、幅約 0.3 m、深さ 0.05 m、主軸方位 N51° E を測る。断面は浅い皿状を呈する。埋土からは須恵器片が数点出土した。遺物から詳細な時期判断を下すには無理があるが、SD503 は古代の溝跡の可能性がある。



第 37 図　SD501 ～ 504 断面図，出土遺物

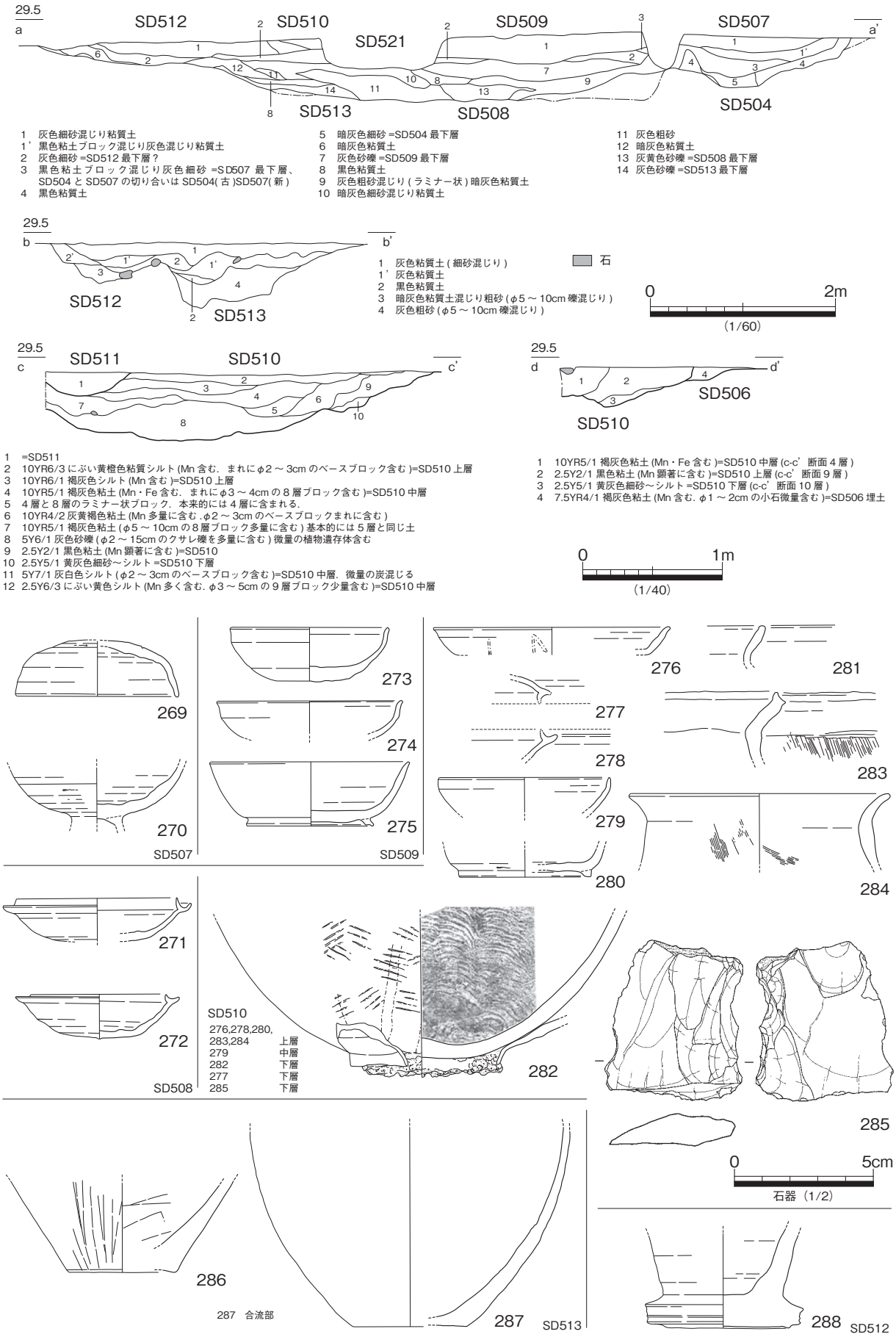
SD504（第 37 ～ 39 図）

Ⅴ区中央で検出した北東方向へ延びる直線溝である。西辺は SD515 を切り込み、南半部は SD507 に切り込まれている。検出長 6.9 m、幅 0.46 m、深さ 0.34 m、方位 N38.5° E を測る。断面は不整形な U 字状を呈し、埋土は複数層に分かれる。

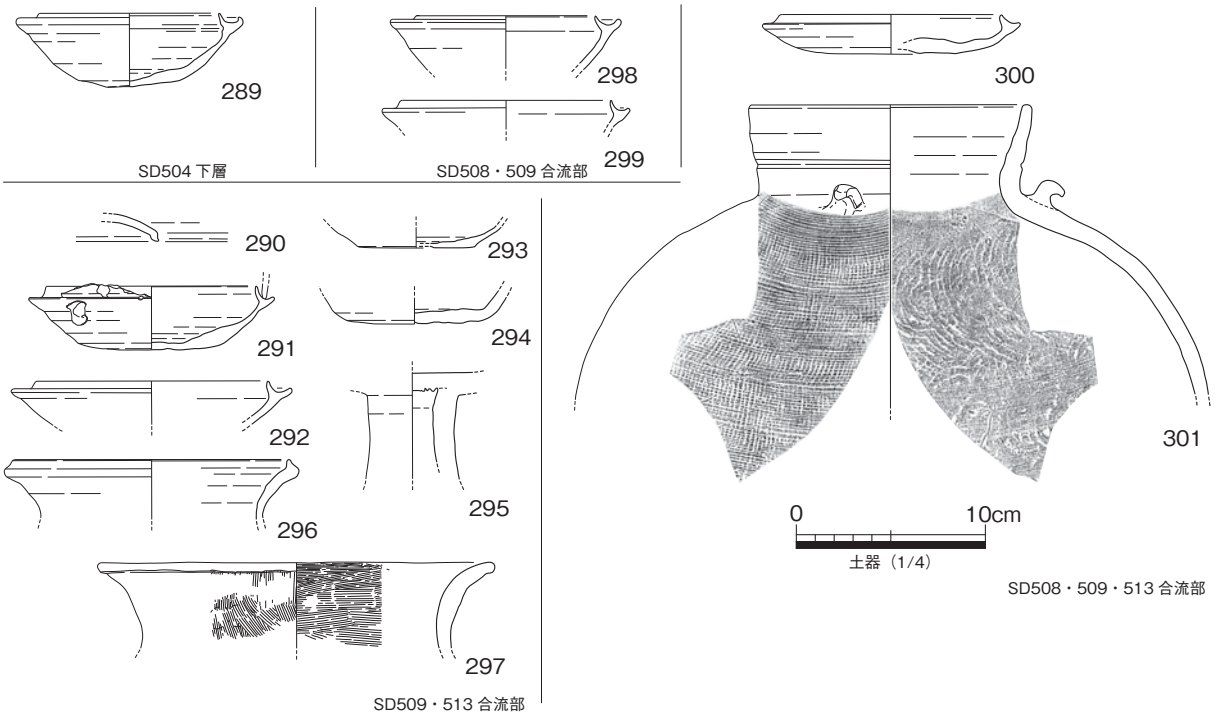
埋土からは 7 世紀初頭頃の土師器・須恵器片等が出土した。265・266 は須恵器の杯蓋、267 は口縁部と底部を欠く須恵器の小型の壺、268 は土師器の杯で、内面にはヘラ磨きを顕著に残している。出土遺物から SD504 は 7 世紀初頭頃に埋没した溝跡と考えられる。

SD506（第 35・38 図）

Ⅴ区東半部で検出した北西方向へ延びる直線溝である。溝跡の東端部では、SD517・510 に切り込ま



第 38 図　SD504・506 ～ 513・521 断面図，出土遺物



第 39 図　SD504・508・509・513 出土遺物

れている。検出長 13.5 m、幅 0.3 ～ 0.5 m、深さ 0.1 m以上、主軸方位 N55° W を測る。断面は浅い U 字状を呈し、埋土は褐灰色粘土からなる。埋土からは弥生土器の細片が数点出土した。遺物から詳細な時期判断を下すには無理があるが、SD506 は SD510 に切られており、SD510 の時期をもとにすれば、8 世紀後半以前の時期が考えられる。

SD507（第 38 図）

Ⅴ区中央部で検出した不整形な溝状遺構である。概ね南北方向に延びるが、南端では SD512 に切り込まれ、北端では SD504 を切り込み、SD508 に切り込まれている。検出長 7.4 m、幅 0.8 ～ 1.8 m、深さ 0.45 mを測る。断面は幅広で不整形な U 字状を呈し、上層が灰色系砂混じり粘質土、下層が黒色粘土ブロック混じり灰色細砂層からなる。

埋土からは 6 世紀末頃の須恵器が少量出土した。269・270 は須恵器の杯蓋と高杯の杯部である。出土遺物から SD507 は 6 世紀末以降に埋没した溝跡と考えられる。

SD508（第 38・39 図）

Ⅴ区中央部で検出した不整形な溝状遺構である。東辺部は SD507 を切り込み、西辺部は SD509、南端部は SD512 に切り込まれている。検出長約 6.7 m、幅約 1.5 m、深さ 0.7 mを測る。

埋土からは 7 世紀初頭頃の須恵器が少量出土した。271・272 は須恵器の杯である。出土遺物から SD508 は 7 世紀初頭以降に埋没した溝跡と考えられる。

SD509（第 38・39 図）

Ⅴ区西半部で検出した不整形で南北方向の溝状遺構である。南端部では SD508 を切り込み、SD512

に切り込まれている。検出長約 9.3 m、幅 1.7 ～ 2.8 m、深さ約 0.5 mを測る。

埋土からは土師器・須恵器が少量出土した。273・274 は 7 世紀前半の須恵器杯、275 は 8 世紀初頭の須恵器高台付杯である。SD509 は出土遺物が少なく時期を決め難いが、8 世紀前半以降に埋没した溝跡と考えられる。

SD510（第 35・38 図）

Ⅴ区中央南半部で検出した北西方向に延びる幅広な溝跡である。東半部では ST502・SD506 を切り込み、SD517 に切り込まれている。SD510 の流路方向の西側の延長には、SD512・513 等の溝跡が位置し、SD510 との連続する見方もできるが、両者の中間地点にあたる SD510 の西端部では、SD507・508・509・513 等の古代の溝跡と近世の SD520・521 等が複雑に重複しており不明瞭な点が多い。これらの溝跡との前後関係については、SD510 は近世の SD520・521 等より先行することは間違いないが、SD507 ～ 509 等の古代の溝跡との切り合いについては、遺構が複雑に錯綜しているため、関係は不明瞭であるが、SD510 がこれらの溝跡を切り込んでいる可能性が高い。検出長 17.5 m、幅 2.1 ～ 3.2 m以上、深さ約 0.47 m、主軸方位 N61° W を測る。断面は幅広い皿状を呈し、埋土の上層は粘土・シルト、下層は砂礫層からなる。

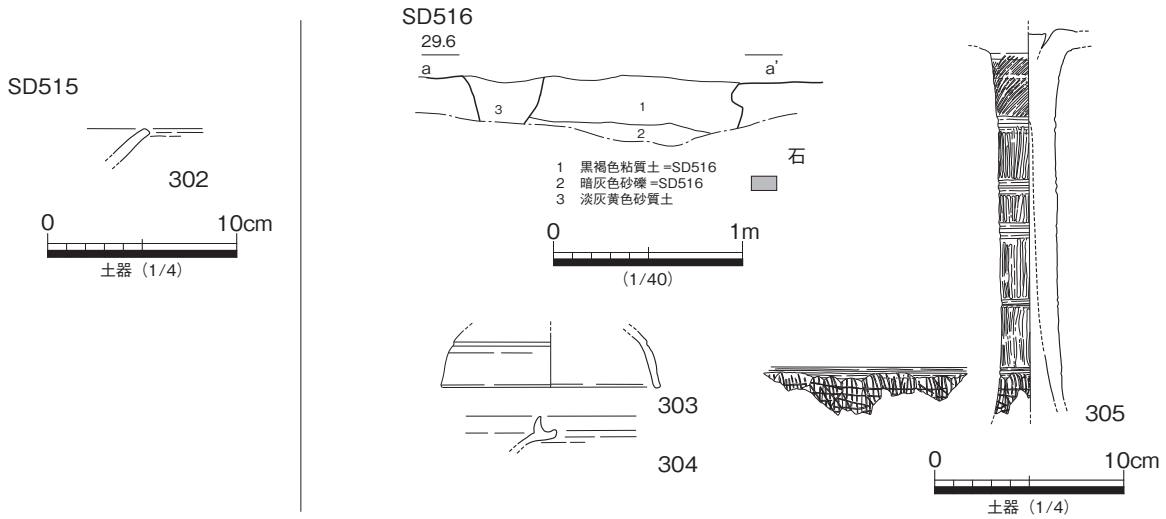
埋土からは 7 世紀初頭・8 世紀後半頃の須恵器・土師器や石器等が出土した。276 は須恵器皿、277 は須恵器杯蓋である。278 ～ 280 は 7 世紀初頭・8 世紀中頃の須恵器杯、281・282 は須恵器甕、283・284 は土師器の甕口縁部である。285 はサヌカイト製で、側縁部を作業にあてた交互剥離の石核である。出土遺物から SD510 は 8 世紀中頃以降に埋没した溝跡と考えられる。

SD512・513（第 38・39 図）

Ⅴ区西半部で検出した北西方向へ湾曲気味に延びる溝状遺構である。東半部では幅広な一条の溝跡であるが、西半部の下層では 2 条の溝跡に別れる。流路方向から推定して、Ⅴ区中央部の SD510 と連続する可能性もあるが、接続地点にあたる SD513・512 の東端部では、古代の SD507 ～ 509、近世の SD520・521 等が複雑に重複しており、不明瞭な点が多い。これらの溝跡との前後関係については、SD512・513 は近世の SD520・521 等より先行することは間違いない。古代の SD507 ～ 509 との切り合いについては、土層断面図等の記録が少ないため不明瞭であるが、東端部の合流地点の土層断面図の記録でみる限り、上層には SD512 が広範囲に広がり、中層で SD513、最下層には SD504・508・513 等の埋土が観察できる。断面図の状況を整理し前後関係をまとめれば、SD504・508・513 → SD509 → 507 → 512 の順番が考えられる。なお、SD512・513 と SD510 の関係については、連続する可能性が高いが、証明できる記録がないため今後の課題にしておく。検出長約 17.7 m、幅約 4.0 m、深さ（SD513: 約 0.6 m、SD512: 約 0.4 m）を測る。

SD512 からは弥生時代後期前半頃の弥生土器や 8 世紀頃の須恵器が少量出土した。SD513 からは、弥生時代後期前半頃の弥生土器や 7・8 世紀頃の須恵器が出土した。286・287 は SD513 から出土した弥生時代後期前半頃の甕の下半部と壺の底部である。288 は SD512 から出土した 7 世紀の須恵器鉢の底部である。

289 ～ 301 はⅤ区の SD504・508・509・513 等から出土した遺物の中で、遺構を越えて接合した土器や、複数の遺構が重複する地点で出土した遺物の中で、出土遺構を特定できなかった遺物である。289 は、



第 40 図　SD515・516 断面図，出土遺物

SD504・508 出土の破片同士が接合した 7 世紀初頭頃の須恵器杯である。290 ～ 297 は、SD509・513 の合流部で出土した遺物である。290 は 8 世紀頃の須恵器蓋の口縁部片、291 ～ 294 須恵器杯、295 須恵器高杯の脚部片である。296 は須恵器甕口縁部である。297 は土師器甕の口縁部である。298・299 は、SD508・509 合流部で出土した須恵器杯である。300・301 は、SD509・508・513 出土の破片同士が接合した須恵器壺及び杯である。301 は須恵器の短頸壺の上半部である。体部肩部には小型の突起が付されている。

SD515（第 40 図）

Ⅴ区中央の北半部で検出した不整形で湾曲気味に延びる溝跡である。SD504・SD507 等が切り込んでいて、残りがかなり悪い。形状から円形周溝墓の溝跡とも考えたが、詳細な記録がないため検証できなかった。検出長約 5.0 m、幅 0.2 ～ 0.3 m以上、深さ約 0.3 mを測る。

埋土からは弥生土器が数点出土した。302 は弥生土器の甕口縁部片である。

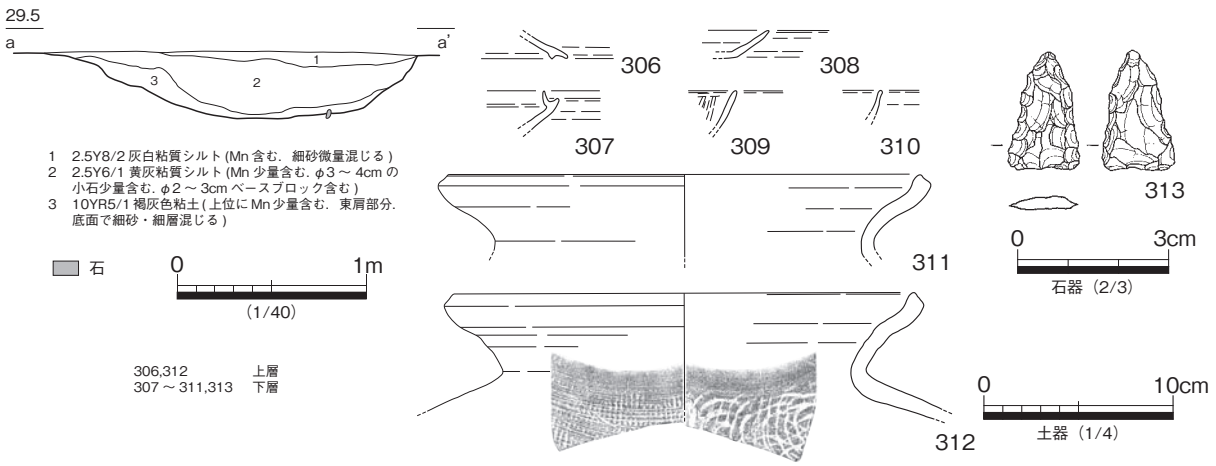
SD516（第 40 図）

Ⅴ区西端部の南辺で検出した直線溝である。検出長 12.8 m、幅 1.1 ～ 1.4 m、深さ 0.38 m、主軸方位 N16.5° W を測る。断面は不整形な形状を呈し、埋土上層は黒褐色粘質土、下層は暗灰色砂礫層からなる。

埋土からは弥生土器・土師器・須恵器等が出土した。303・304 は 6 世紀後半の須恵器蓋・杯、305 は須恵器の異型土器に類する土器で、当初高杯とも考えたが、特殊扁壺土器の可能性が高い。把手部は異常に長く、上端部は充填しているが、下半部は中空である。外面には櫛描を顕著に施している。外面下端部は若干「ハ」の字状に広がり、外面はヘラ削りにより整形後、ヘラ状工具により線刻を施している。出土遺物から SD516 は 6 世紀末頃に埋没した溝跡と考えられる。

SD517（第 41 図）

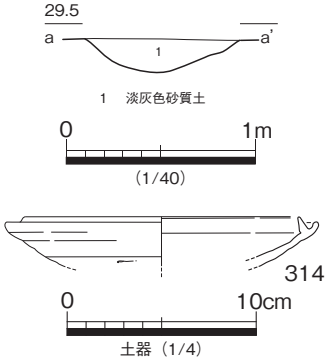
Ⅴ区中央部に位置し、SD502・506・ST502 を切り込んでいる南北方向の直線溝である。検出長 13.6 m、幅 2.1 m、深さ 0.36 m、主軸方位 N13.0° E を測る。断面は幅広で浅い U 字状を呈し、埋土は



第 41 図　SD517 断面図，出土遺物

上層が灰白色シルト、中層が黄灰色シルト、下層が褐灰色粘土からなる。

埋土からは土師器・須恵器・黒色土器・陶磁器、石器等が出土した。306・307 は 7 世紀前半の須恵器蓋・杯片で、308 は須恵器皿の口縁部片である。309 は黒色土器椀の口縁部片、310 は陶器椀の口縁部片、311・312 は 7 世紀頃の須恵器甕口頸部である。313 はサヌカイト製の平基式石鏃である。出土した須恵器・黒色土器・石器等は混入品で、出土した陶磁器等から SD517 は近世以降に埋没した溝跡と考えられる。



第 42 図　SD518 断面図，出土遺物

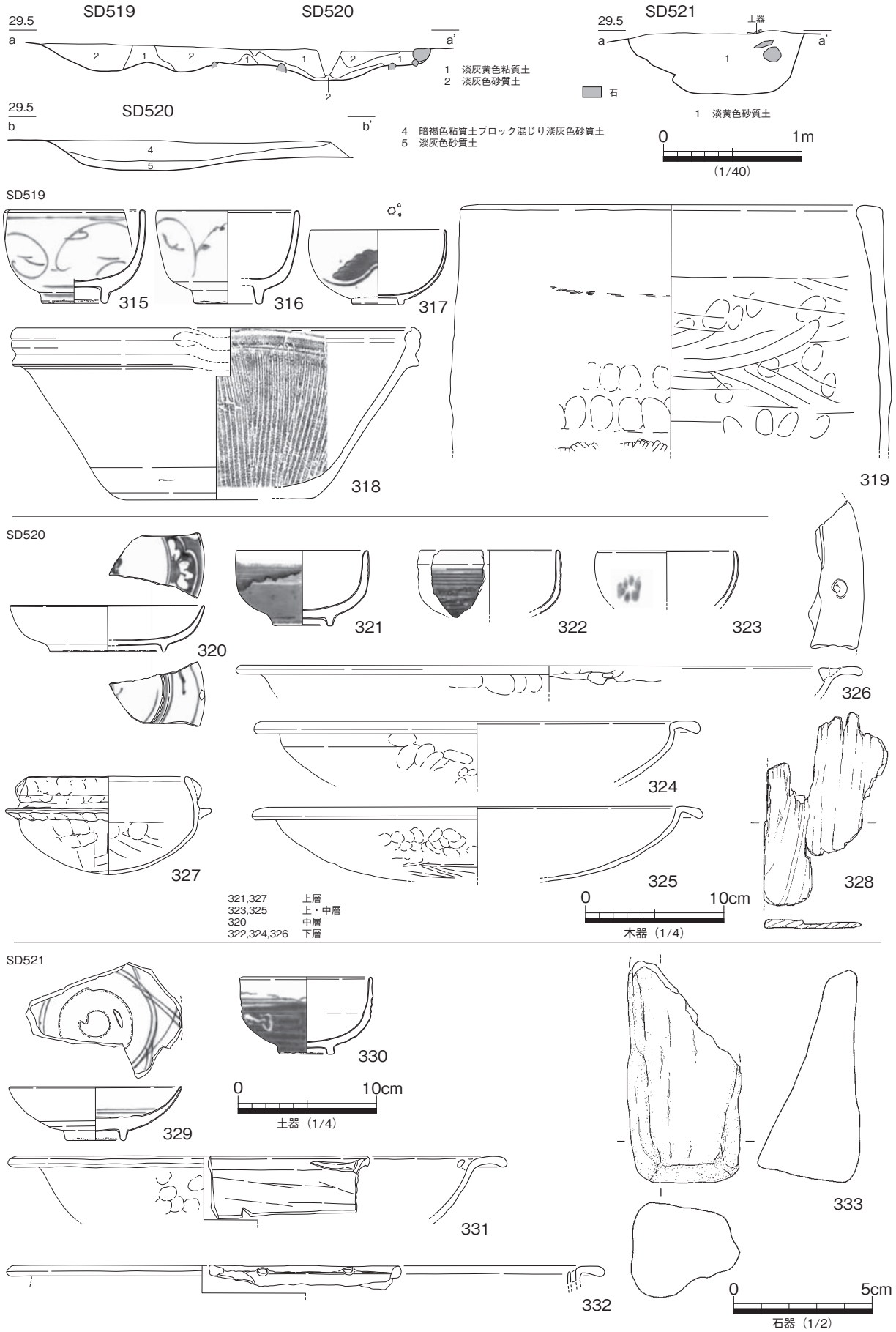
SD518（第 42 図）

V 区西端部で検出した南北方向の直線状の溝で、南半部では二股状に 2 条の溝に別れている。溝中央で SD520・519、南半部で SK512 等に切り込まれている。検出長 13.8 m、幅 0.82 m、深さ 0.18 m、主軸方位 N8.0° E を測る。断面は浅い U 字状を呈し、埋土は淡灰色砂質土の単層である。

埋土からは 7 世紀初頭頃の須恵器杯、近世以降の土師器甕等が少量出土した。314 は 7 世紀初頭頃の須恵器杯上半部である。出土遺物から SD518 は近世以降に埋没した溝跡と考えられる。

SD519（第 43 図）

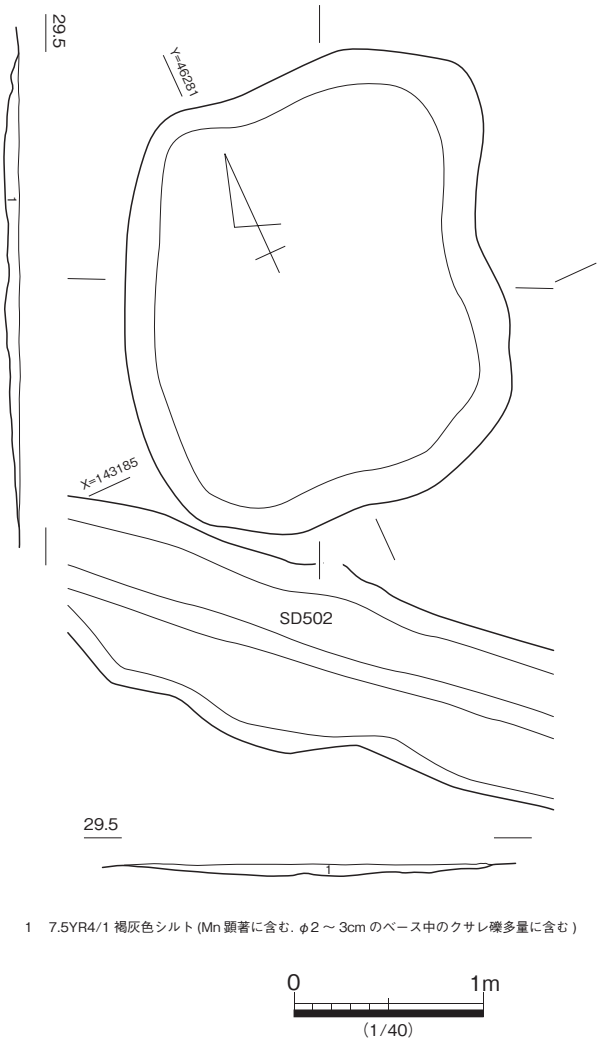
V 区西半部で検出した近世屋敷地の外郭の北辺と東辺を画くする溝状遺構と考えられる。区画内には同時期の土坑や柱穴等が分布している。SD519 は鍵形に曲がる不整形な溝状遺構で、北半部は東西方向に直線気味に延び、東端部で南方へ短く屈曲する。SD520 の北側には約 1.0 m隔て、同方向の SD520 が位置し、部分的に切り合っている。また、南半部では SK509 から延びる SD521 と切り合っている。検出状況から SD519 が先行し SD520・521 が後出する。SD519 と同形状の SD520 は SD519 が埋没後、屋敷地の新たな区画溝として掘削された溝跡と考えられる。検出長（東西溝約 14.5 m、南北溝 1.0 m）、幅 0.6 ～ 1.6 m、深さ約 0.2 m、主軸方位 N83° W を測る。主軸方位から、この溝は条里地割の方位に



第 43 図　SD519 ～ 521 断面図，出土遺物

揃えていることが解る。断面は浅い皿状を呈し、埋土は淡灰色系の砂質土である。

埋土からは土師器・陶磁器等が出土した。315 ～ 317 は陶器の椀、318 は備前の擂鉢、319 は土師器の甑である。出土遺物から SD519 は 18 世紀以降に埋没した区画溝と考えられる。



第 44 図　SX501 平・断面図

SD520（第 43 図）

Ⅴ区西半部で検出した近世屋敷地の外郭の北辺と東辺を画くする溝状遺構と考えられる。区画内には同時期の土坑や柱穴等が分布している。SD520 は鍵形に曲がる不整形な溝状遺構で、北半部は東西方向に直線気味に延び、東端部で南方へ直角気味に屈曲する。削平を受けたものと考えられ、残りはかなり悪い。SD520 の南側には約 1.0 m隔て、同方向の SD519 が位置し、部分的に切り合っている。検出状況から SD519 が先行し SD520 が後出する。同形状の SD519 は SD520 が埋没後、屋敷地の新たな区画溝として掘削された溝跡と考えられる。検出長（東西溝約 15.0 m、南北溝 5.5 m）、幅（東西溝 0.7 ～ 1.4 m、南北溝 0.3 ～ 0.6 m）、深さ約 0.25 m、主軸方位（東西溝 N81° W、南北溝 N4.5° E）を測る。主軸方位から、この溝は条里地割の方位に揃えていることが解る。断面は浅い皿状を呈し、埋土は淡灰色系の砂質土である。

埋土からは須恵器・土師器・陶磁器等が出土した。320 染付皿、321・322・323 陶器椀、324・325・326 は瓦質土器焙烙、327 は土師器の鍋、328 は残りの悪い板材片である。材質は同定結果によれば、ヒノキ科アスナロ属に分類される。出土遺物から SD520 は 19 世紀以降に埋没した区画溝と考えられる。

SD521（第 38・43 図）

Ⅴ区西半部、SD519・520 等で画された屋敷地内の北東隅に位置する SK509 から、区画溝 SD519 の東辺の溝跡を切り込み、南北方向へ延びる溝跡である。形状から、この溝跡も SD519・520 等と同様の近世屋敷地の東辺区画溝と考えられる。なお、SD521 は水溜め状の遺構である SK509 の上端部から延びており、SK509 の排水路の機能も伴うものと考えられる。検出長約 5.0 m、幅約 0.7 ～ 1.3 m、深さ約 0.45 m、主軸方位 N3.5° E を測る。断面は隅丸逆台形状を呈し、埋土は淡黄色砂質土である。

埋土からは瓦質土器・陶磁器・瓦・砥石等が出土した。329・330 は陶磁器、329 は磁器の皿、330 は陶器の椀、331・332 は瓦質土器の焙烙、333 は砂岩の砥石である。出土遺物から SD521 は 19 世紀以降

に埋没した区画溝と考えられる。

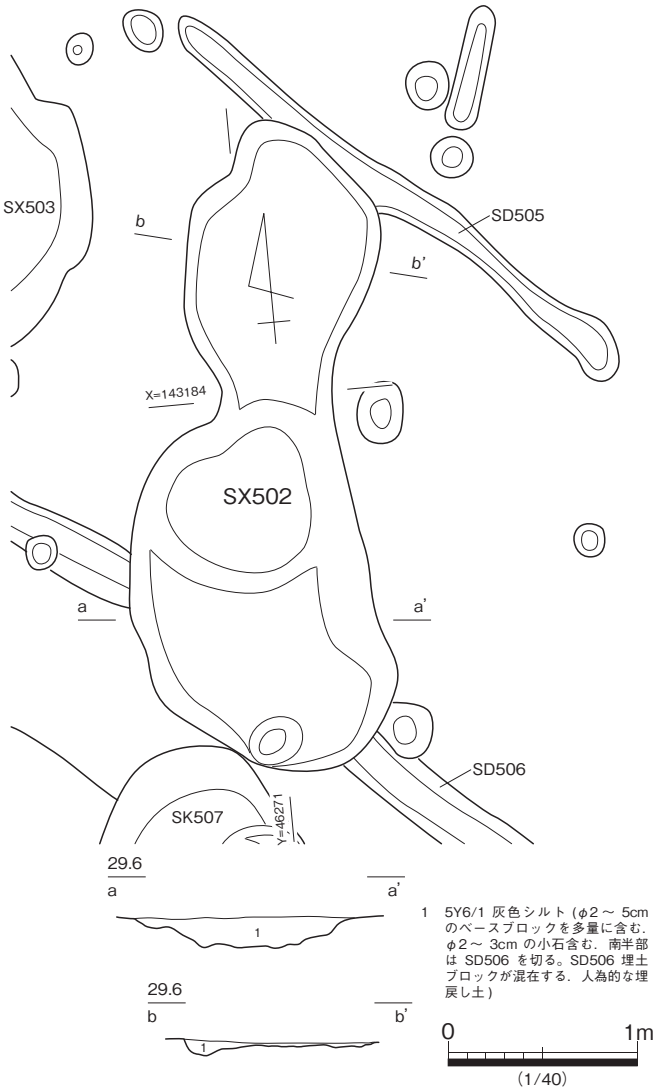
（4）不整形遺構

SX501（第 44 図）

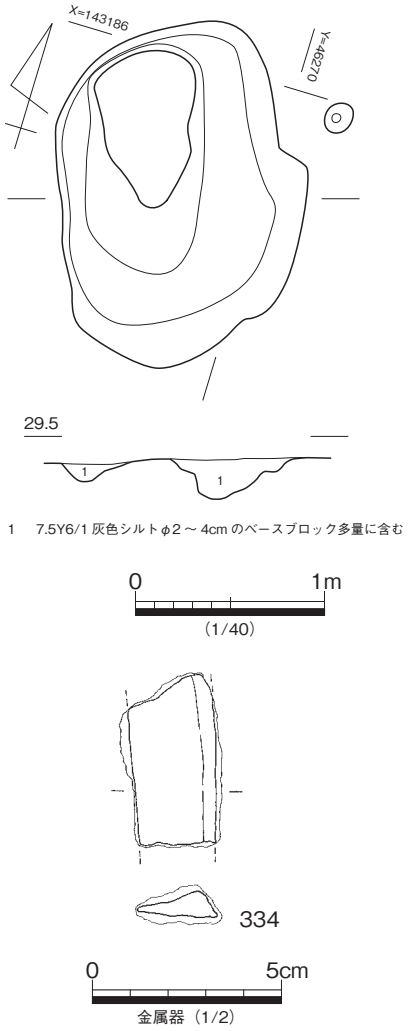
Ⅴ区東半部、SD502 の北側で検出した不整形な落ち込みである。平面は不整形な楕円形状を呈し、長径 2.6 m、短径 2.06 m、深さ 0.08 mを測る。断面は浅い皿状を呈し、埋土は単層で褐灰色シルトである。埋土からは土師器細片が数点出土しただけで、SX501 の時期判断には無理がある。

SX502（第 45 図）

Ⅴ区中央 SK508 の北、SX503 の東側で検出した不整形な落ち込みである。南半部では SD506 を切り込んでいる。平面は二つの楕円形状の落ち込みが重なった形状を呈し、底面の中央部分が凹んでいる。長径 3.44 m、短径 1.32 m、深さ 0.08 ～ 0.18 mを測る。断面は凹凸のある不整形な皿状を呈し、埋土は単層で灰色シルトである。埋土からは土師器・須恵器、近世瓦片等が出土した。



第 45 図　SX502 平・断面図



第 46 図　SX503 平・断面図，出土遺物

SX503（第 46 図）

Ⅴ区中央 SD506 の北、SX502 の西側で検出した不整形な落ち込み状の遺構である。形状は楕円形状を呈し、北半部中央に島状の高まりを残し、周囲を浅くて不整形な落ち込みが溝状に巡る。不整形な溝跡は、南半部は幅広で、北半部は極端に幅が狭い。長径 1.86 m、短径 1.36 m、南半部の溝幅は最大約 0.85 m、北半部の溝幅は最小約 0.05 m、深さ 0.1 ～ 0.22 mを測りかなり差がある。不整形な溝跡の断面は凹凸が著しく、埋土は単層で灰色シルトを呈する。

埋土からは染付椀､鉄製品等が少数出土した。334 は器種不明の鉄製品である。側縁には刃部状のエッジが認められる。SX503 は形状から推定して、人為的な遺構とは考え難い。

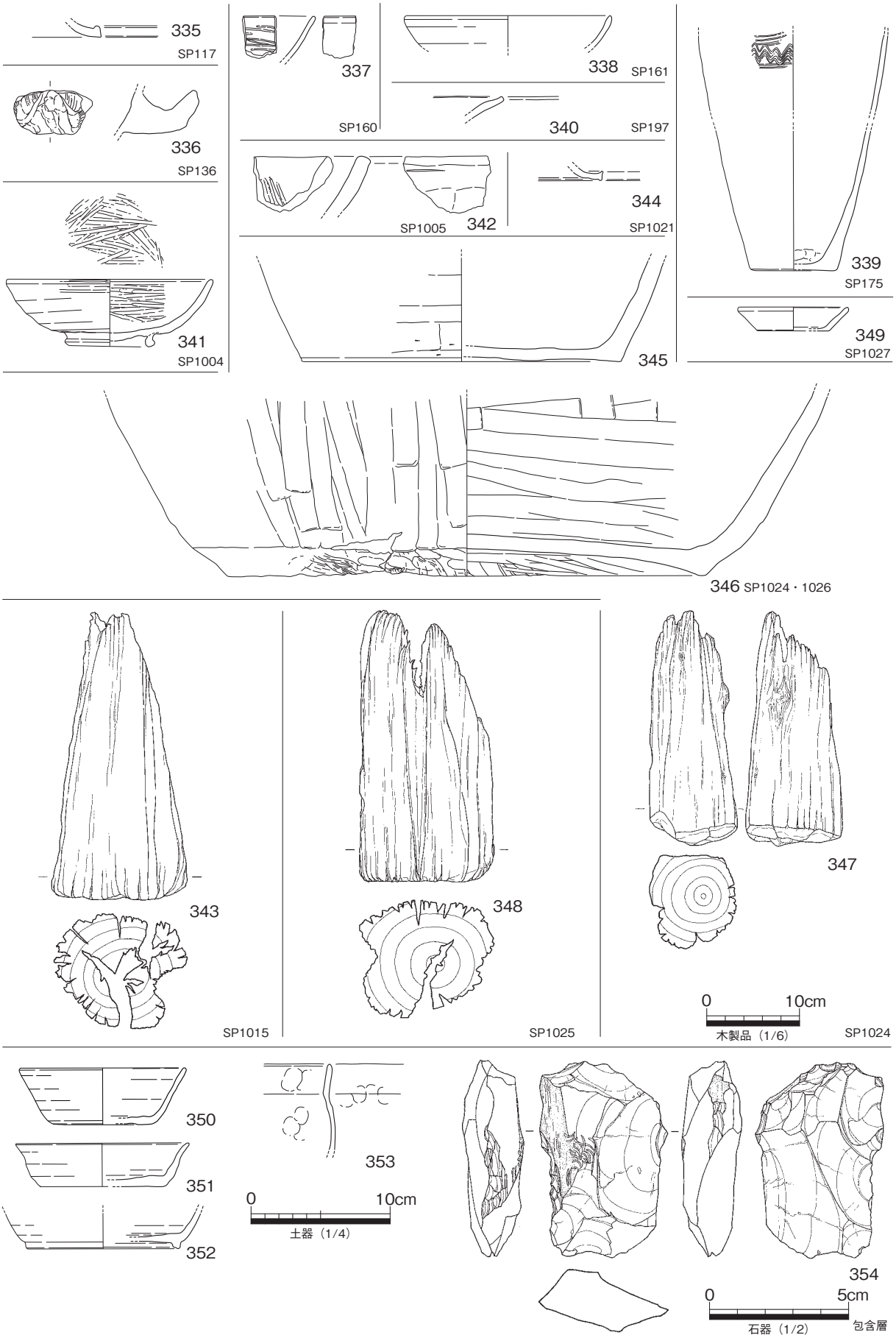
（5）柱穴・包含層出土遺物

Ⅴ区の主要な遺構・遺物については先に報告したが、次にその他の柱穴出土遺物と包含層出土遺物を報告する。なお、包含層出土遺物中には機械掘削・遺構検出・側溝掘削時等に出土した、個別の遺構に区分できない遺物までを含めている。

335 ～ 349 は柱穴から出土した遺物である。出土しているのは中世の土器が多いが、少数弥生土器や石器類が出土している。335 は SP117 から出土した 7 世紀頃の須恵器高杯の脚部片である。336 は SP136 から出土した土師器甕の把手である。337 は SP160 から出土した黒色土器椀の口縁部片で、338 は SP161 から出土した土師器椀の上半部である。340 は SP197 弥生土器甕の口縁部片である。339 は SP175 から出土した弥生時代中期前半の甕である。外面には櫛描波状文を顕著に残している。341 は SP1004 から出土した黒色土器の椀である。342 は SP1005 から出土した土師器擂鉢の口縁部片である。344 は SP1021 から出土した 7 世紀頃の須恵器高杯の脚部片である。349 は SP1027 から出土した小型の土師器杯である。345 は SP1024 から出土した須恵器甕の底部、346 は SP1024.1026 の二つに柱穴から出土した備前焼甕の底部である。

343・347・348 は柱穴から出土した円柱状の柱材である。出土地点として 343 は SP1015、347 は SP1024、348 は SP1025 から出土した。材質としては同定結果によれば、343・347・348 伴に、ブナ科クリ属クリに分類される。

350 ～ 354 は包含層出土の遺物の中で代表的な遺物である。350 土師器の杯、351 は須恵器の杯、352 は高台が付く 8 世紀後半頃の須恵器の杯、353 は西端部の包含層から出土した、6 世紀後半以降の製塩土器の口縁部片である。354 はサヌカイトの横長剥片石核である。側縁部を作業面にあて、交互剥離の手法で剥片剥離を行なっている。形状から旧石器に属する可能性が高い。



第 47 図　Ⅴ区柱穴，包含層出土遺物

３. Ⅵ区の調査

（１）掘立柱建物跡

SB601（第 48 図）

Ⅵ区東端部で検出した梁間 2 間、桁行 2 間の東西棟の掘立柱建物である。削平を受けているため、柱穴の残りは悪い。この建物は SB602 と SR601 と重複しており、SB601 と SB602 とは柱穴が切り合わないので前後関係は不明であるが、SB601 と SR601 は、SB601 の北東隅の柱穴を SR601 が切り込んでいるので、SB601 は SR601 より先行する建物と考えられる。2 間（3.1 m）× 2 間（4.0 m）、面積 12.4㎡、主軸方位 N62.0° W（N28.0° E）、柱間は梁間 1.5 ～ 1.6 m、桁行 1.8 ～ 2.1 mを測る。柱穴掘方は円形ないし不整円形を呈し、径 0.3 ～ 0.45 m、深さ 0.2 ～ 0.35 mを測る。

柱穴からは弥生土器・土師器片が少量出土している。355 は SP03 から出土した弥生時代後期後半頃の高杯の脚部片であるが、他の出土遺物から判断して混入品と考えられる。出土遺物が少ないため SB601 の時期判断については無理がある。

SB602（第 48 図）

Ⅵ区東端部で検出した梁間 1 間、桁行 2 間の南北棟の掘立柱建物である。北半部は削平を顕著に受けているので柱穴の残りは悪い。この建物は SB601 と SR601 と重複しており、SB601 とは柱穴が切り合わないため前後関係は不明である。SB602 と SR601 とは、SB602 の北東隅の柱穴を SR601 が切り込んでいるので、SB602 は SR601 より先行する建物と考えられる。1 間（3.0 m）× 3 間（5.1 m）、面積は 15.3㎡、主軸方位 N37.0° E、柱間は梁間 2.9 ～ 3.0 m、桁行 2.2 ～ 2.7 mを測る。柱穴掘方は円形ないし不整円形を呈し、径 0.2 ～ 0.5 m、深さ 0.05 ～ 0.4 mを測る。

柱穴から土師器・須恵器片が少量出土している。356 は SP03 から出土した 7 世紀前半頃の須恵器杯である。出土遺物から SB602 は 7 世紀前半以降の建物と考えられる。

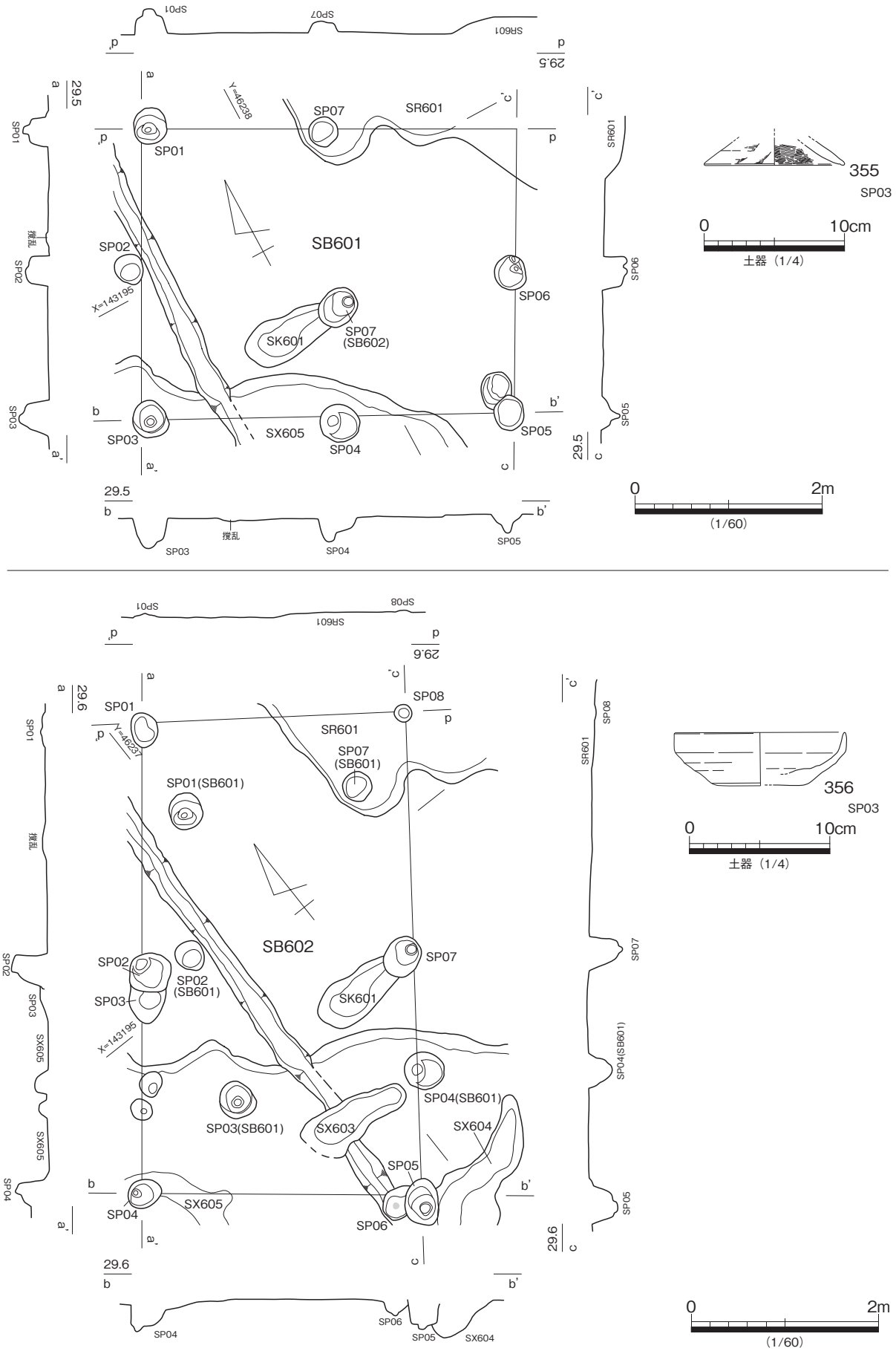
SB603（第 49 図）

Ⅵ区東端部で検出した梁間 2 間、桁行 2 間の南北棟の掘立柱建物である。西側柱列の西には、SB604 の東側柱列が隣接しており、両者は時期差があるものと考えられるが、柱穴が切り合わないため前後関係は不明である。北半部は削平を受けたのか、梁間の 1 穴を欠く。2 間（2.5 m）× 2 間（3.0 m）、面積 7.5 ㎡、主軸方位 N30.0° E、柱間は梁間 1.1 ～ 1.4 m、桁行 1.7 ～ 1.9 mを測る。柱穴掘方は円形ないし不整円形を呈し、径 0.2 ～ 0.35 m、深さ 0.15 ～ 0.3 mを測る。

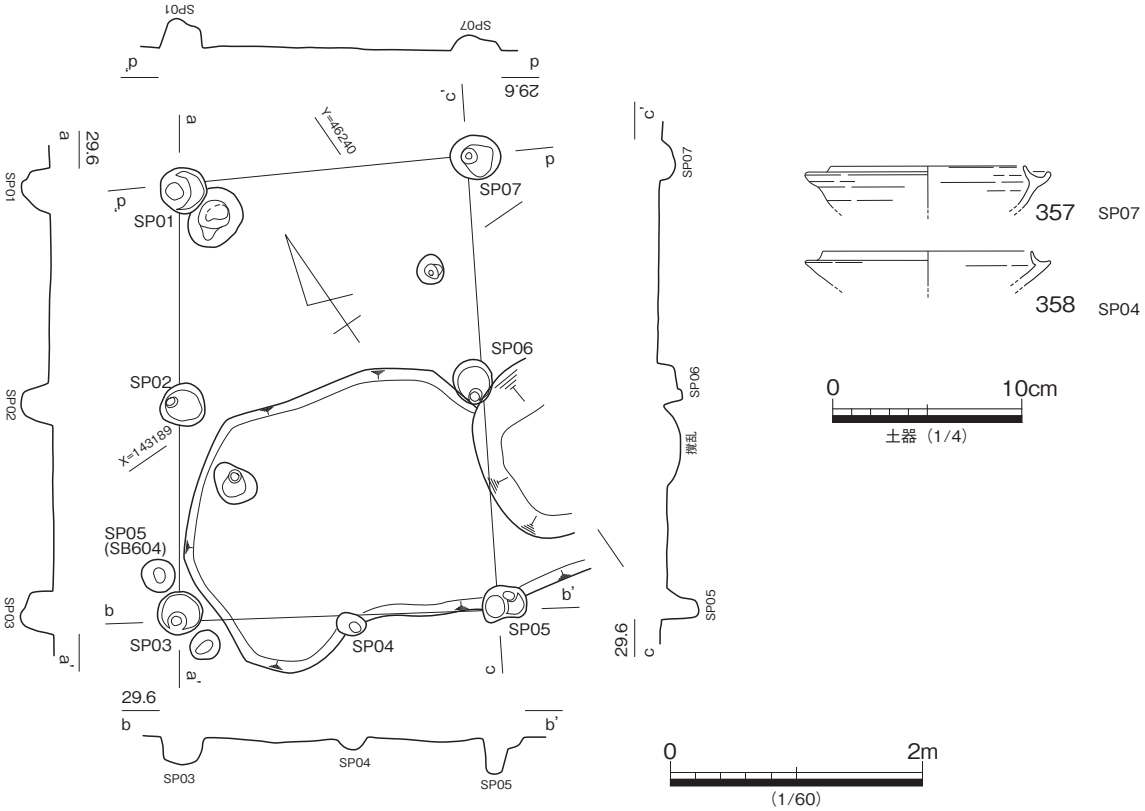
柱穴からは弥生土器・土師器・須恵器片が少量出土している。357・358 は SP04・07 から出土した 7 世紀初頭頃の須恵器の杯である。出土遺物より SB603 は 7 世紀初頭以降の建物と考えられる。

SB604（第 50 図）

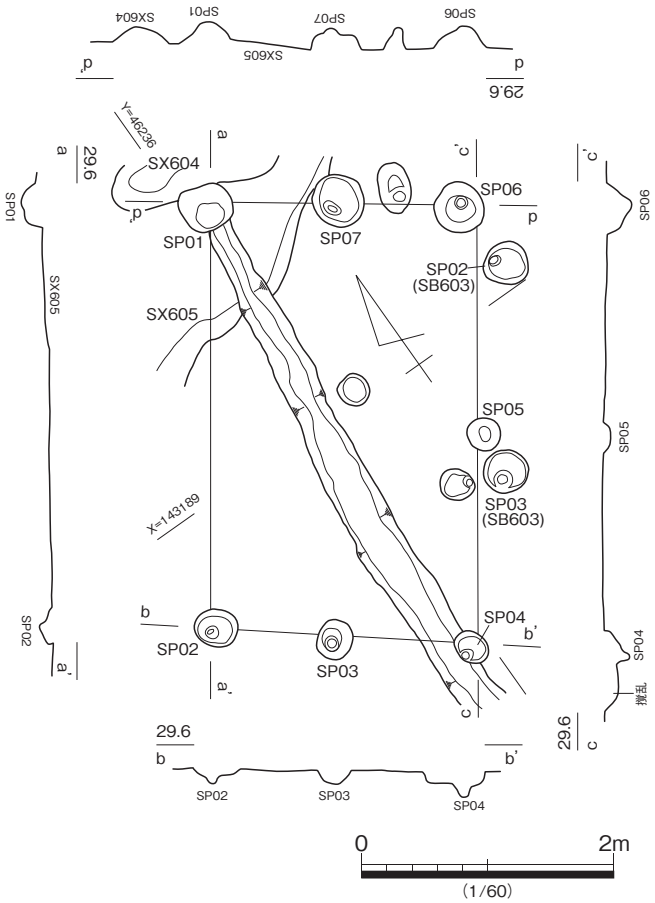
Ⅵ区東端部で検出した梁間 2 間、桁行 2 間の南北棟の掘立柱建物である。東側柱列の東には、SB603 の東側柱列が隣接しており、両者は時期差があるものと考えられるが、柱穴が切り合わないため前後関係は不明である。削平を受けたものと考えられ西側柱列の 1 穴を欠く。2 間（2.1 m）× 2 間（3.5 m）、面積 7.35㎡、主軸方位 N34.5° E、柱間は梁間 1.0 ～ 1.1 m、桁行 1.7 ～ 1.8 mを測る。柱穴掘方は円形ないしは不整円形を呈し、径 0.3 ～ 0.4 m、深さ 0.1 ～ 0.2 mを測る。



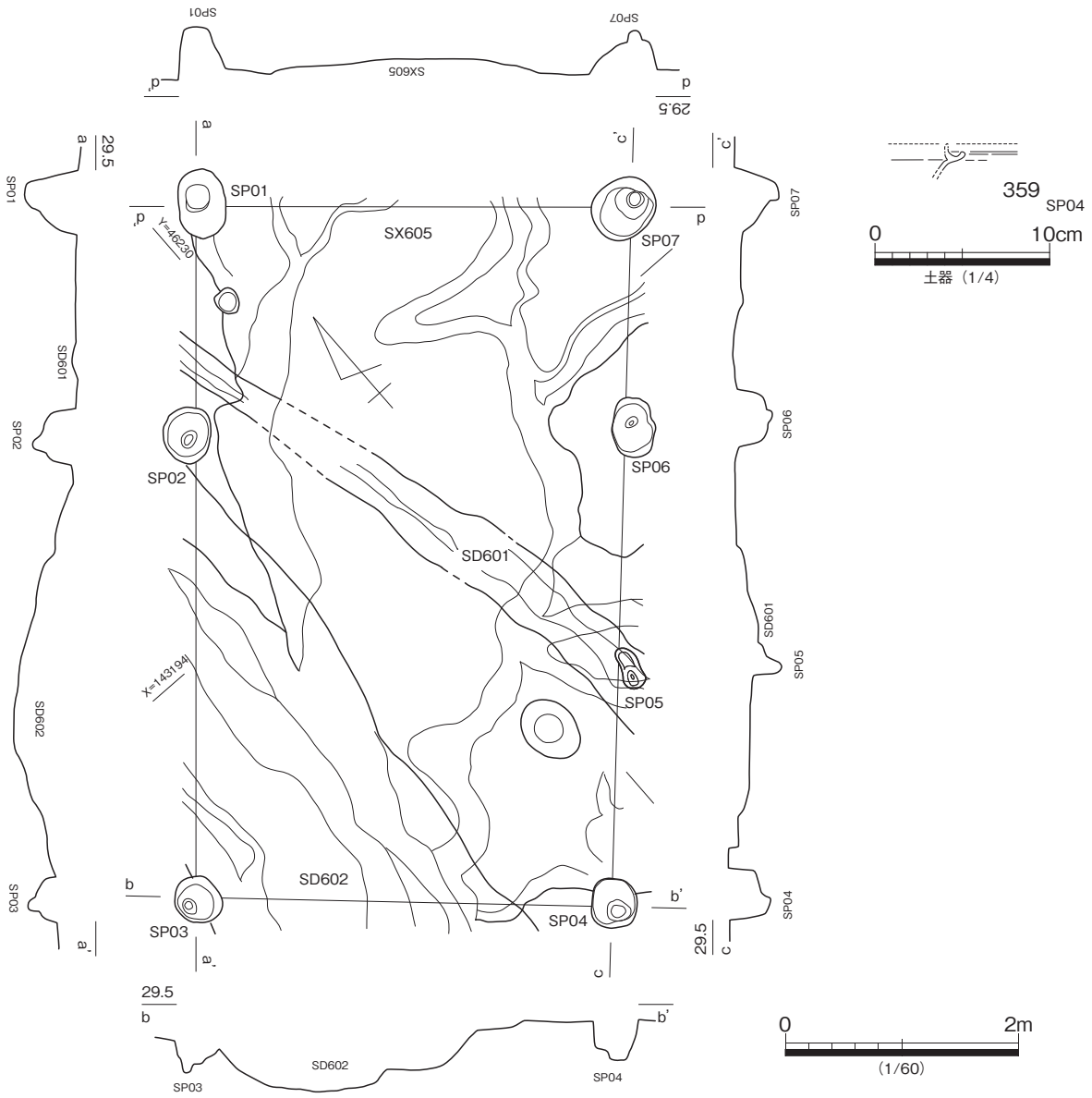
第 48 図　SB601・602 平・断面図，出土遺物



第 49 図　SB603 平・断面図，出土遺物



第 50 図　SB604 平・断面図



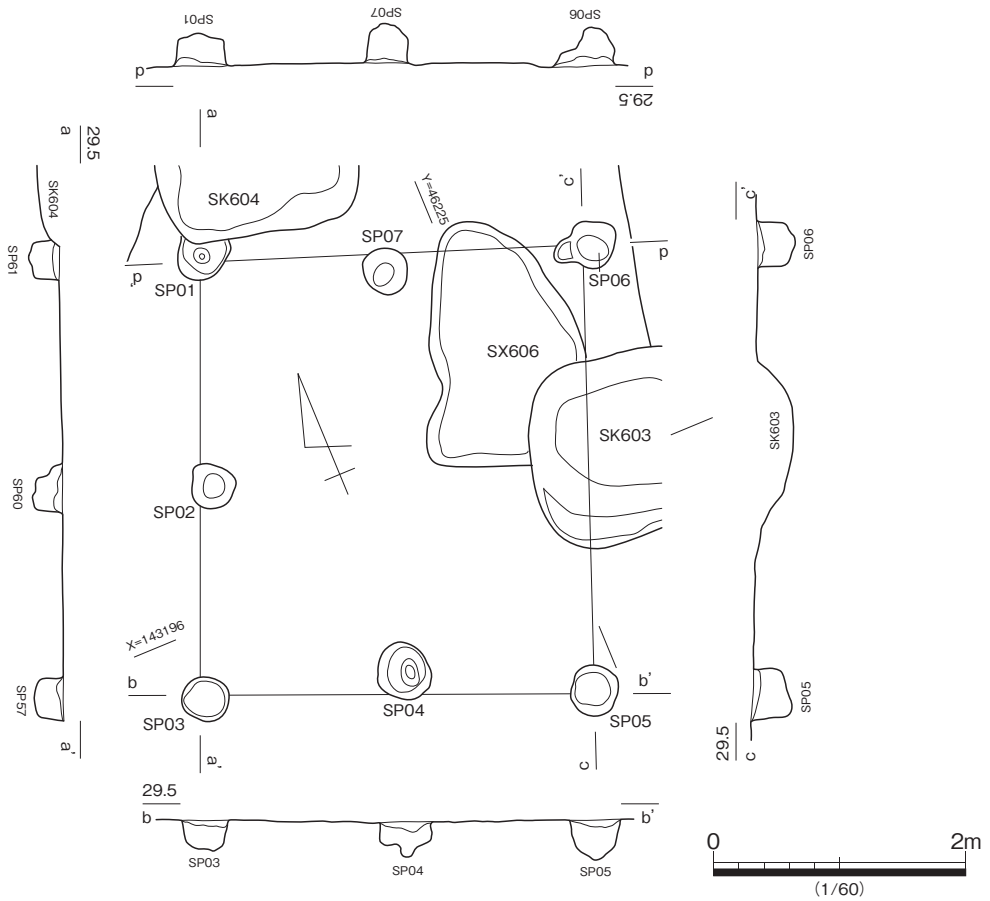
第 51 図　SB605 平・断面図，出土遺物

柱穴からは弥生土器・土師器片が少量出土した。出土遺物が少ないため SB604 の詳細な時期判断には無理があるが、古代の建物跡の可能性が高い。

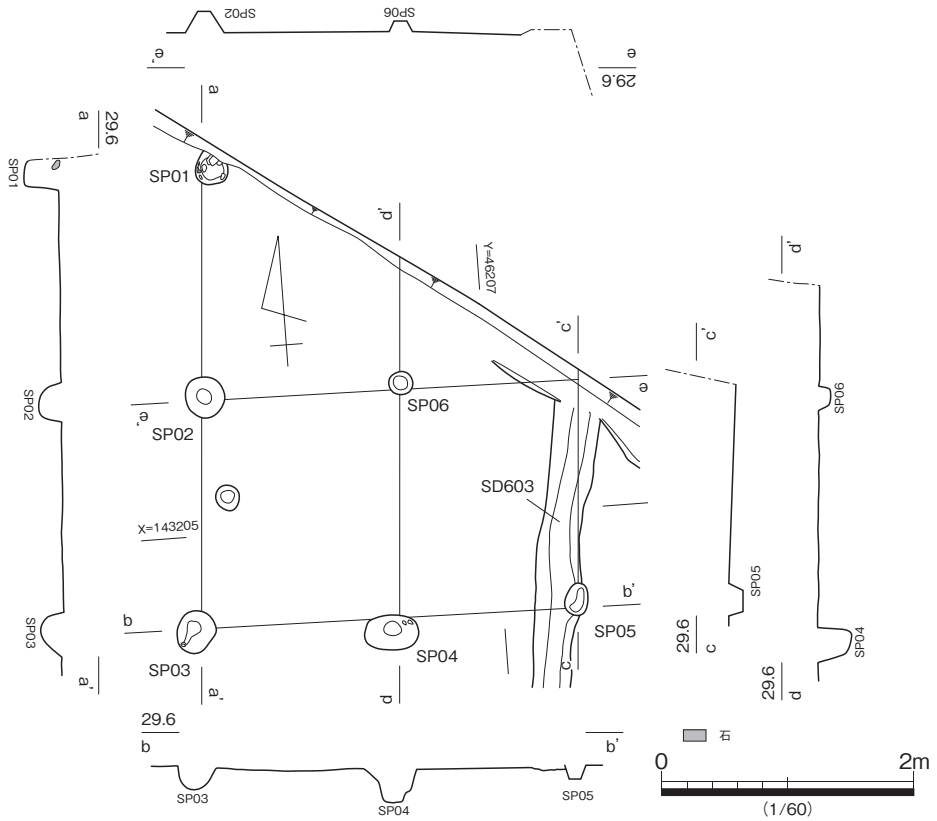
SB605（第 51 図）

Ⅵ区東半部で検出した梁間 1 間、桁行 3 間の南北棟の掘立柱建物である。この建物は SD601・602、SX601 等と重複し、切り合い関係から、SB604 は SD601･602 より先行し、SX601 より後出することが解る。1 間（3.7 m）× 2 間（6.0 m）、面積は 22.2㎡、主軸方位 N41.0° E を測る。柱間は梁間 3.6 ～ 3.7 m、桁行 1.9 ～ 2.2 m を測る。柱穴掘方は円形ないし不整楕円形を呈し、径 0.2 ～ 0.6 m、深さ 0.25 ～ 0.4 m を測る。

柱穴からは土師器・須恵器片が少量出土している。359 は SP04 から出土した、7 世紀初頭頃の須恵器杯の口縁部片である。出土遺物より SB605 は 7 世紀初頭以降の建物と考えられる。



第 52 図　SB606 平・断面図



第 53 図　SB607 平・断面図

SB606（第 52 図）

Ⅵ区中央で検出した梁間 2 間、桁行 2 間の南北棟の掘立柱建物である。この建物は SK603・604、SX606 等重複し、切り合い関係から SB606 は SK603・604 より先行することが解る。2 間（3.1 m）× 2 間（3.5 m）、面積は 10.85㎡、主軸方位 N21.0° E（69.0° W）を測る。柱間は梁間 1.5 ～ 1.6 m、桁行 1.7 ～ 1.8 mを測る。柱穴掘方は円形ないし不整円形を呈し、径 0.3 ～ 0.4 m、深さ 0.2 ～ 0.3 mを測る。

柱穴からは弥生土器・土師器片が少量出土した。出土遺物が少ないため SB606 の詳細な時期判断には無理があるが、概ね古代の建物跡の可能性が高い。

SB607（第 53 図）

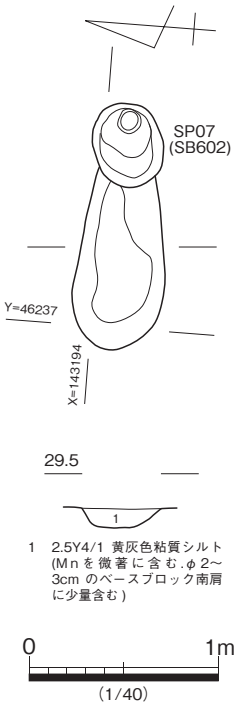
Ⅵ区東端部で検出した梁間 2 間、桁行 2 間の南北棟の総柱建物である。北半部は調査区より外れるため、全体の約 1/2 程度を検出した。建物は SD603 と重複し、切り合い関係から SB607 は SD603 より先行することが解る。2 間（3.0 m）× 2 間（3.85 m）以上、面積は 11.55㎡以上、主軸方位 N6.0° E を測る。柱間は梁間 1.4 ～ 1.6 m、桁行 1.8 mを測る。柱穴掘方は円形ないし不整楕円形を呈し、径 0.2 ～ 0.35 m、深さ 0.1 ～ 0.3 mを測る。

柱穴からは土師器片が少量出土した。出土遺物が少ないため SB607 の詳細な時期判断には無理があるが、概ね古代の建物跡の可能性が高い。

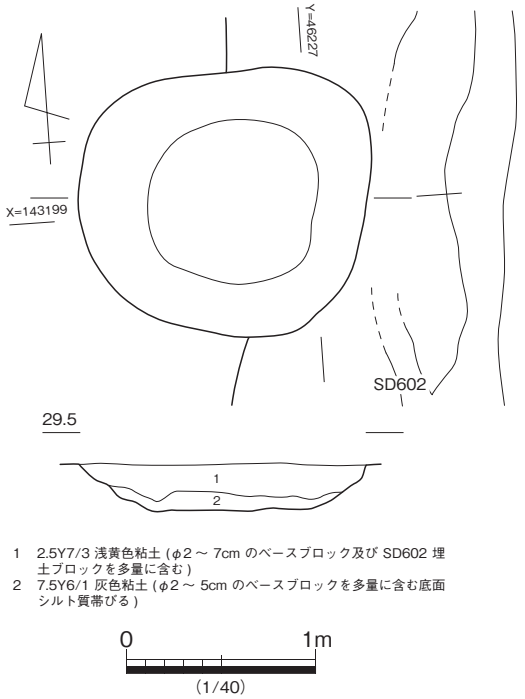
（2）土坑跡

SK601（第 54 図）

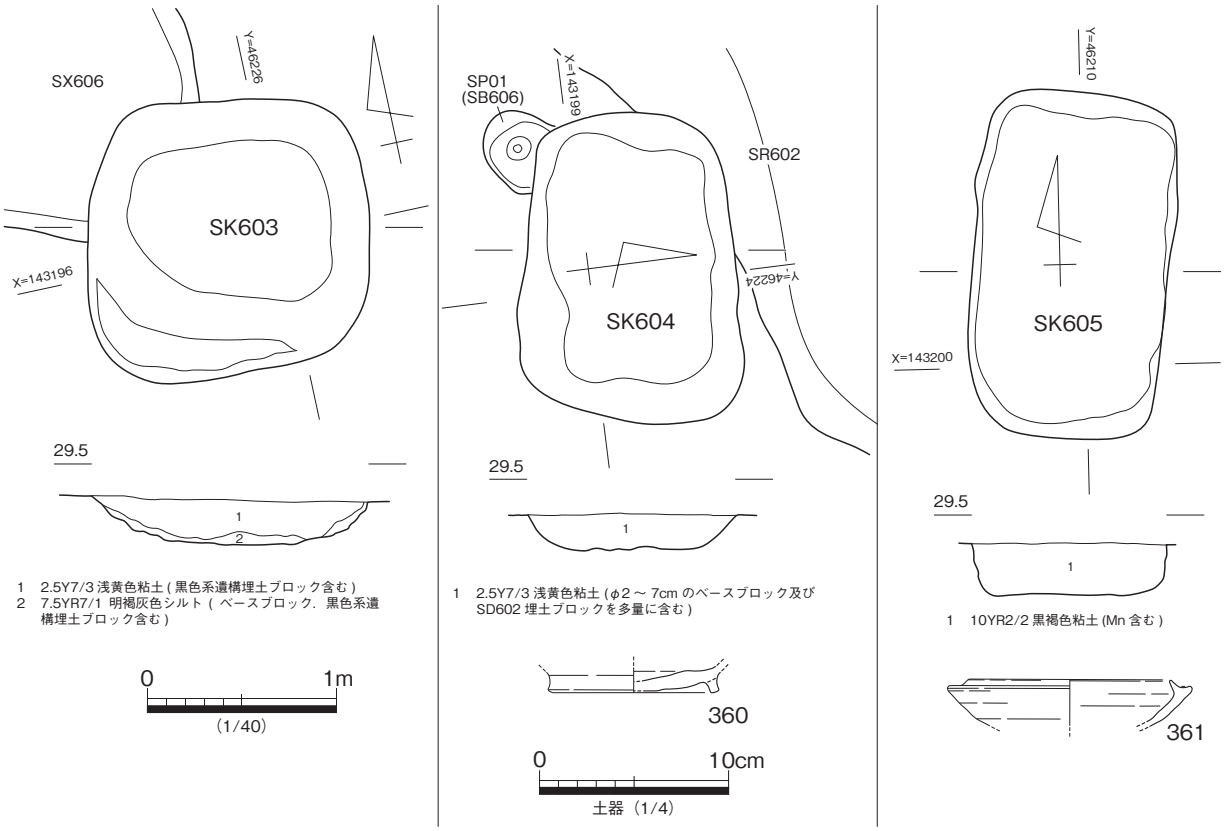
Ⅵ区東半部で検出した不整形な土坑である。東端部は SB602 の柱穴により切り込まれており、切り合い関係から SK601 は SB602 より先行することが解る。平面は不整形な楕円形状、断面は幅広な皿状を呈している。長径 1.3 m、短径 0.5 m、深さ 0.1 mを測る。埋土は黄灰色のシルトからなる。



第 54 図　SK601 平・断面図



第 55 図　SK602 平・断面図



第 56 図　SK603・604・605 平・断面図，出土遺物

埋土からは弥生土器・土師器の細片が数点出土した。出土遺物が少ないため SK601 の詳細な時期判断については無理がある。

SK602（第 55 図）

Ⅵ区中央の北壁際で検出した土坑である。東半部は南北に延びる SD602 を切り込んでおり、切り合い関係から SK602 は SD602 より後出することが解る。平面は不整円形、断面は幅広な U 字状を呈し、底面は比較的平坦である。長径 1.6 m、短径 1.3 m、深さ 0.26 mを測る。埋土上層は浅黄色粘土、下層は灰色粘土からなる。

埋土からは須恵器の細片が数点出土した。出土遺物が少ないため SK602 の詳細な時期判断については無理がある。

SK603（第 56 図）

Ⅵ区中央で検出した土坑である。東半部は南北に延びる SD602 を切り込んでおり、切り合い関係から SK604 は SD602 より後出することが解る。平面は隅丸方形状、断面は幅広な椀状を呈し、底面は比較的平坦である。長径 1.5 m、短径 1.5 m、深さ 0.24 m、主軸方位 N13° E を測る。埋土上層は浅黄色粘土、下層は明褐灰色シルトからなる。

埋土からは弥生土器・土師器の細片が数点出土した。出土遺物が少ないため SK603 の詳細な時期判断については無理がある。

SK604（第 56 図）

Ⅵ区中央で検出した土坑である。北西辺はSR602を切り込んでおり、切り合い関係からSK604はSR602より後出することが解る。平面は隅丸長方形状、断面は幅広なU字状を呈し、底面は比較的平坦である。長径1.66 m、短径1.2 m、深さ0.2 m、主軸方位N83° W（N7° E）を測る。埋土は浅黄色粘土からなる。

埋土からは弥生土器・須恵器の細片が数点出土した。360はSK604から出土した8世紀中頃の須恵器杯の高台部である。出土遺物からSK604は8世紀中頃以降の土坑であろう。

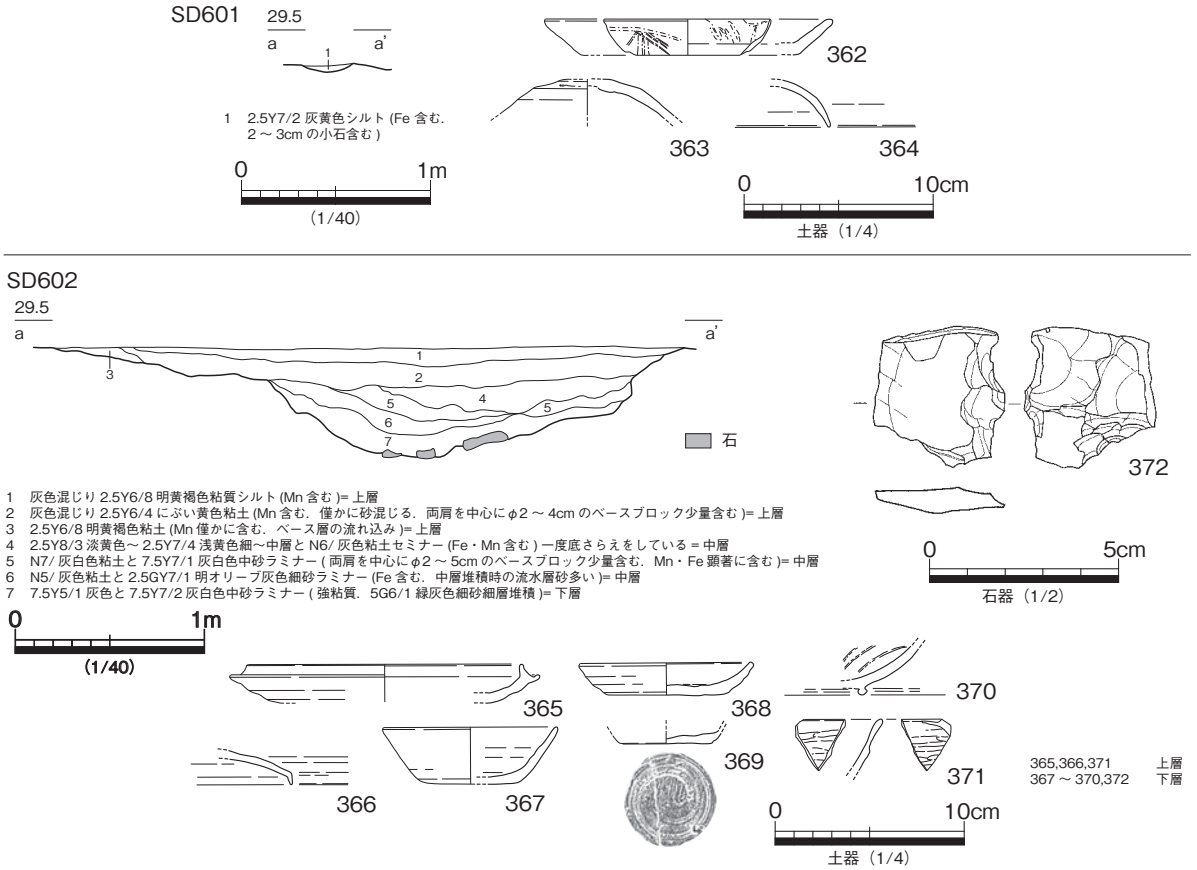
SK605（第 56 図）

Ⅵ区西半部で検出した土坑である。南東隅はSR602の西肩と接しているが、切り合い関係までには至っていない。平面は隅丸長方形状、断面は隅丸逆台形状を呈し、底面は比較的平坦である。長径1.9 m、短径1.08 m、深さ0.3 m、主軸方位N3° Eを測る。埋土は黒褐色粘土を呈し、埋土からは須恵器の細片が数点出土した。361はSK605から出土した7世紀初頭頃の須恵器の杯である。出土遺物からSK605は7世紀初頭以降の土坑であろう。

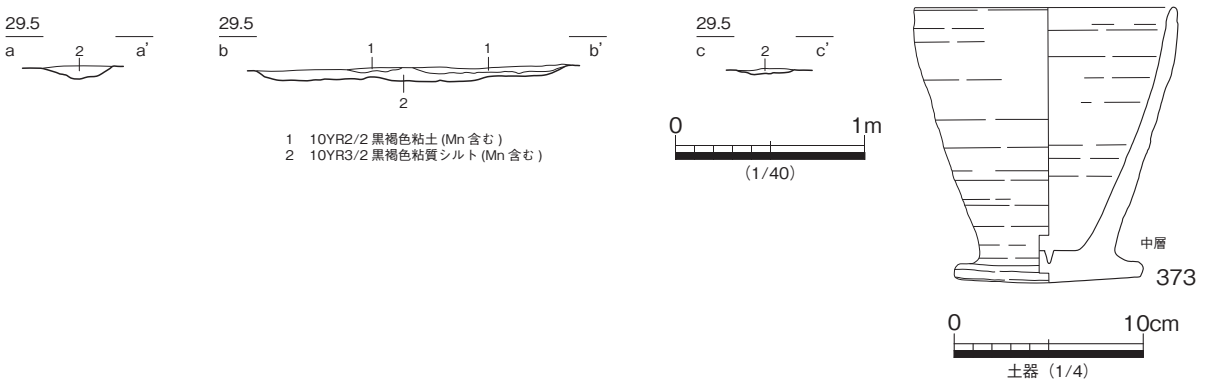
（3）溝状遺構

SD601（第 57 図）

Ⅵ区東半部で検出した南北方向へ直線気味に延びる溝状遺構である。北端部はSD602と合流し、南端部は北西方向に折曲がり調査区外へ延びる。溝中央部でSB605と重複し、切り合い関係からSD601



第 57 図　SD601・602 断面図，出土遺物



第 58 図　SD603 断面図，出土遺物

はSB605より後出することが解る。検出長 11.7 m、幅 0.26 m、深さ 0.03 mを測る。断面の形状は浅い皿状、埋土は灰黄色シルトを呈する。

埋土からは土師器・須恵器が出土した。362 は 8 世紀中頃の須恵器皿、363・364 は 6 世紀末～ 7 世紀初頭頃の須恵器杯蓋である。出土遺物から SD601 は 8 世紀中頃以降に埋没した溝状遺構と考えられる。

SD602（第 57・64 図）

Ⅵ区中央で検出した南北方向へ直線気味に延びる幅広は溝状遺構である。南北両端部は調査区外へ延びる。溝中央部で SB605、SK602・603 と重複し、切り合い関係から SK602・603 より先行し、SB605 より後出することが解る。検出長 13.5 m、幅 3.36 m、深さ 0.6 m、方位 N12.0° E を測る。断面の形状は上端がハ字状に開き、下半部は凹凸のある椀状を呈する。埋土は数層に分かれるが、概ね灰色系のシルトないし砂質土が主体を占める。

埋土からは土師器・須恵器・黒色土器・瓦器等が出土した。365・367 は須恵器の杯、366 は須恵器蓋の口縁部片で、これらは混入品と考えられる。368 は須恵器小皿、369 は土師器小皿の底部である。370 は黒色土器椀の下半部、371 は瓦器椀の口縁部片である。372 はサヌカイト製で、残りが悪い二次加工のある剥片で、混入品である。出土遺物から SD602 は 12 世紀以降に埋没した溝状遺構と考えられる。

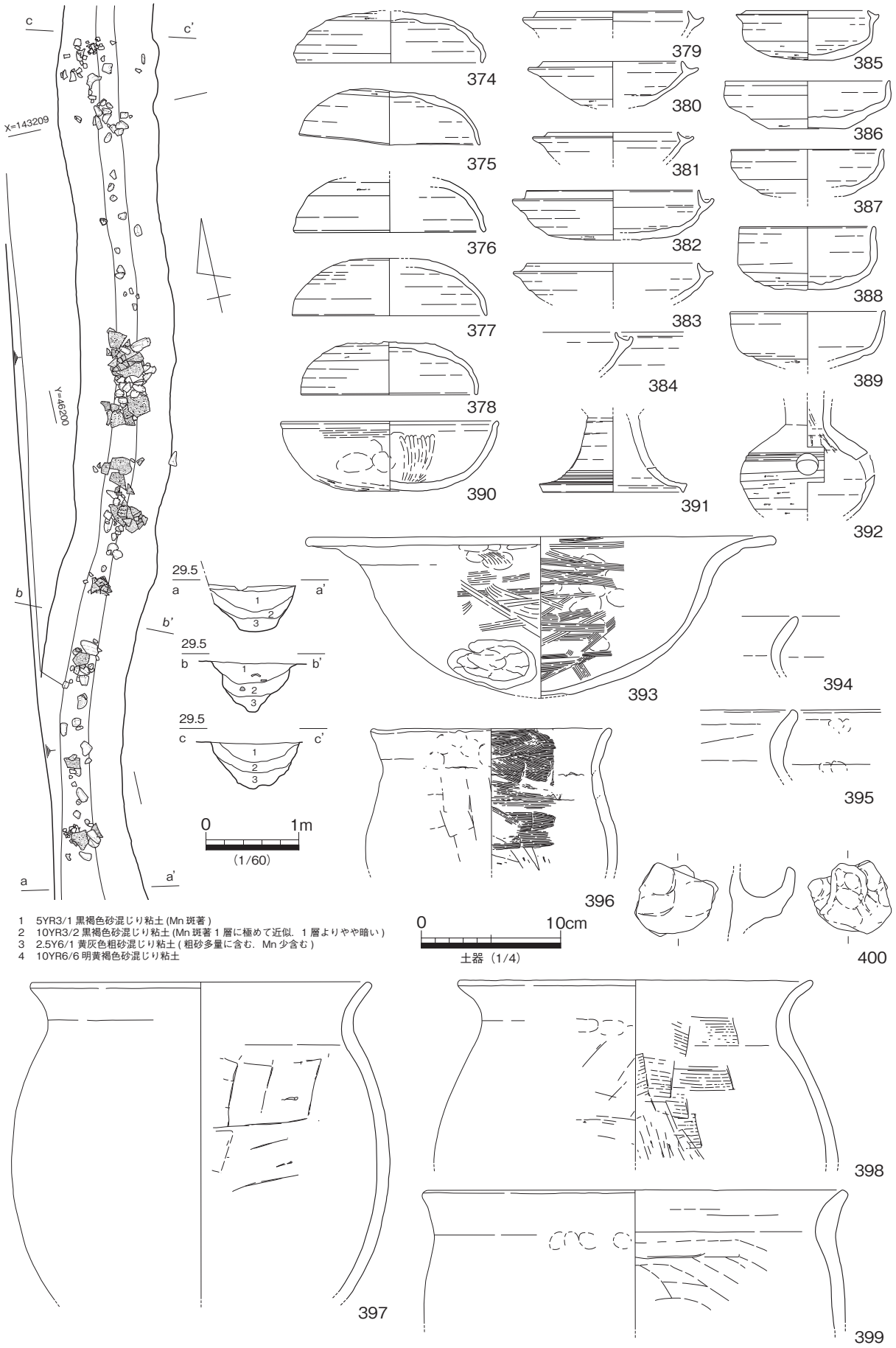
SD603（第 58 図）

Ⅵ区西半部で検出した南北方向へ延びる直線溝である。北端部は調査区外へ延び、南端部は SR604 に合流している。溝中央部で SK606 と重複するが、明瞭な切り合い関係は掴めていない。検出長 10.4 m、幅 0.3 ～ 0.38 m、深さ 0.02 ～ 0.08 m、方位 N7.0° E を測る。断面は浅い皿状を呈し、埋土は黒褐色シルトからなる。

埋土からは土師器・須恵器等が出土した。373 は 7 世紀前半頃の須恵質の擂鉢である。出土遺物が少なく時期判断が難しいが、SD603 は 7 世紀前半以降に埋没した溝状遺構と考えられる。

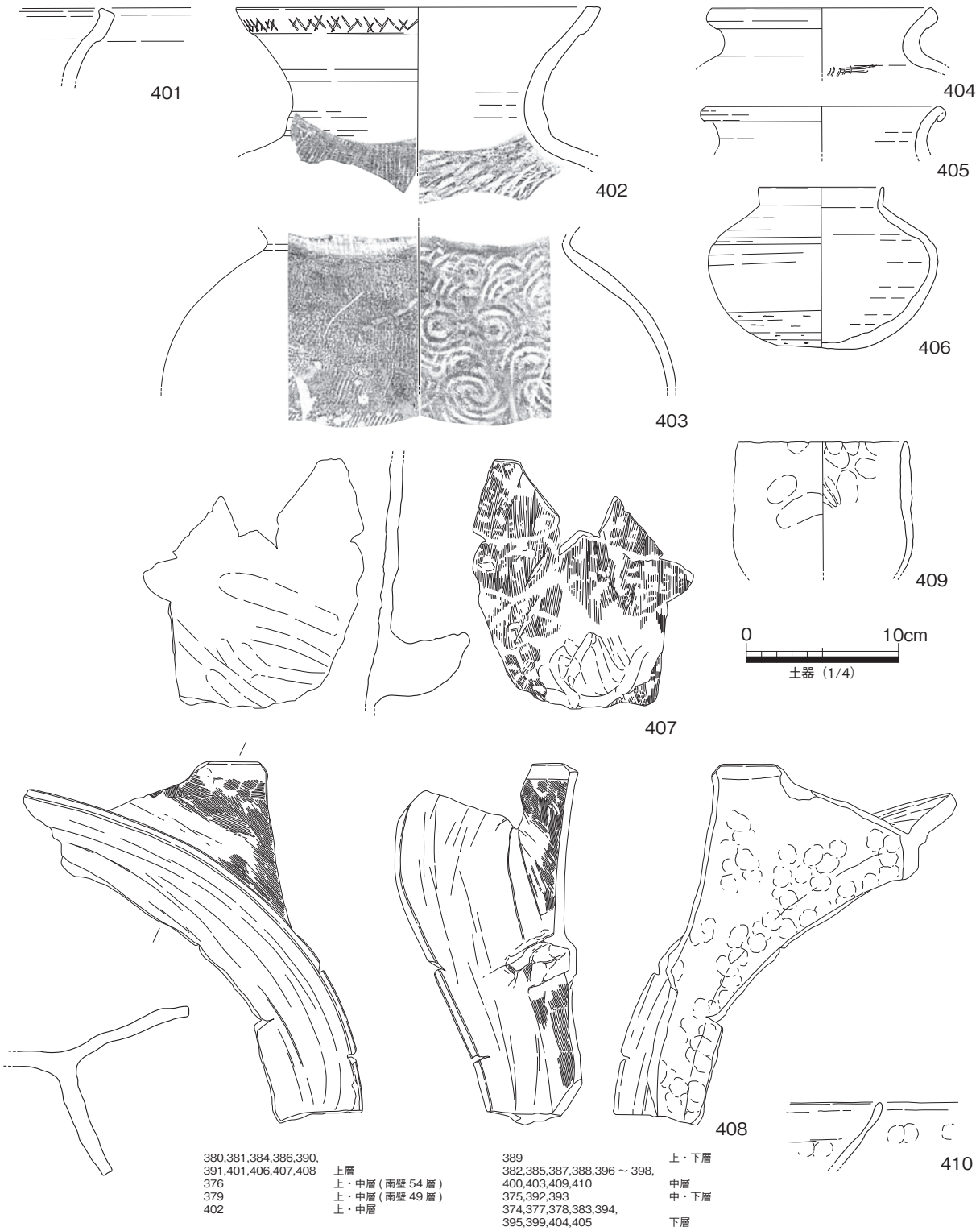
SD604（第 59・60・64 図）

Ⅵ区西端部で検出した若干湾曲気味に南北方向へ延びる直線溝で、南北両端部は調査区から外れる。検出長 12.4 m、幅 0.66 ～ 0.74 m、深さ 0.34 ～ 0.38 m、主軸方位 N11° E を測る。断面は椀状～不整逆台形状を呈し、埋土上層は黒褐色砂混じり粘土、下層は黄灰色砂混じり粘土からなる。



1　5YR3/1 黒褐色砂混じり粘土 (Mn 斑著)
2　10YR3/2 黒褐色砂混じり粘土 (Mn 斑著 1 層に極めて近似．1 層よりやや暗い)
3　2.5Y6/1 黄灰色粗砂混じり粘土 (粗砂多量に含む．Mn 少含む)
4　10YR6/6 明黄褐色砂混じり粘土

第 59 図　SD604 平・断面図，出土遺物（1）



第 60 図　SD604 出土遺物（2）

埋土からは多量の 7 世紀前半頃の土師器・須恵器が出土した。出土状況から比較的一括性の高い遺物と考えられる。374 ～ 378 は須恵器の杯蓋、379 ～ 389 は須恵器の杯身である。390 は土師器の杯である。391 は杯部を欠く須恵器高杯の脚部である。392 は口縁部を欠く瑳の体部である。393 は土師器の大型鍋である。394 ～ 400 は土師器甕の上半部である。口縁部は逆「ハ」字状に開き端部は丸く仕上げ

ている。401 ～ 403 は須恵器甕の上半部である。401・402 は口頸部で端部は肥厚し、402 の外面にはヘラ描文を施している。また、形状から 402・403 は同一個体の可能性がある。404・405 は須恵器壺の口縁部片、406 は須恵器短頸壺である。407 は土師器甑である。体部と把手の資料であるが、甑として分類できる数少ない土器である。408 は土師器竈の焚口片である。409 はコップ型の土師器製塩土器である。410 は弥生土器鉢の口縁部片で混入品である。

SD604 附近は条里地割の南北軸の坪界線が通る区域で、SD604 は坪界に概ね合致しており、条里地割に伴う溝跡の可能性が指摘できるが、この地域は 8 世紀後半以降に条里地割が施行された事例が数例あり、時期差がありすぎるため条里地割に伴う遺構としての認識には無理がある。ただ、今後の事例の増加と伴に再評価される可能性までは否定できない。

（4）不整形遺構

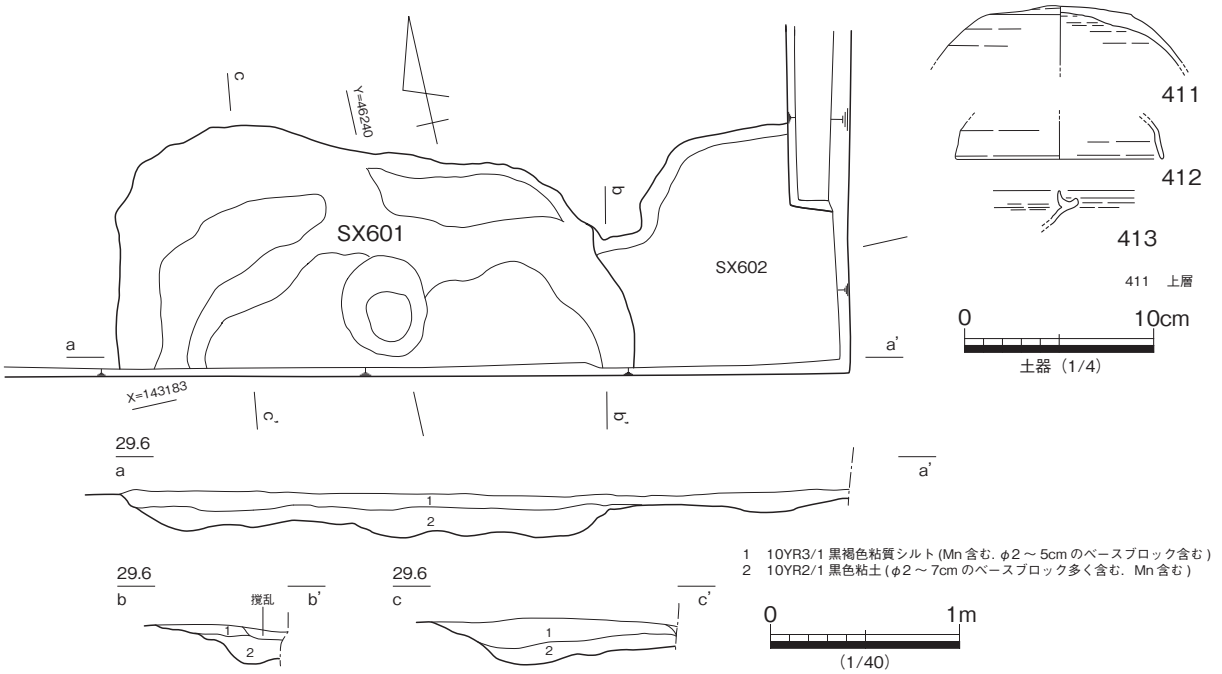
SX601（第 61・64 図）

Ⅵ区東端部の南壁際で検出した不整形な落ち込みである。東辺部は SX602 と重複している。南半部は調査区から外れるのため約 1/2 を検出した。長径 2.8 m、短径 1.4 m以上、深さ 0.14 ～ 0.24 mを測る。平面は隅丸方形状、断面は幅広の逆台形状を呈する。埋土は上下 2 層に分かれ、上層は黒褐色シルト、下層は黒色粘土からなる。

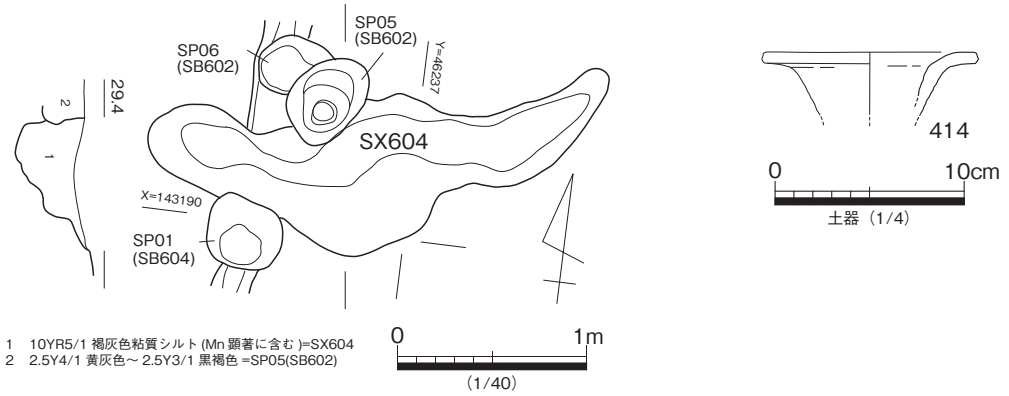
埋土からは弥生土器細片、須恵器片等が少量出土した。411 ～ 413 は 7 世紀初頭頃の須恵器杯蓋と杯身である。出土遺物から SX601 は 7 世紀初頭頃に埋没した遺構と考えられる。

SX604（第 62 図）

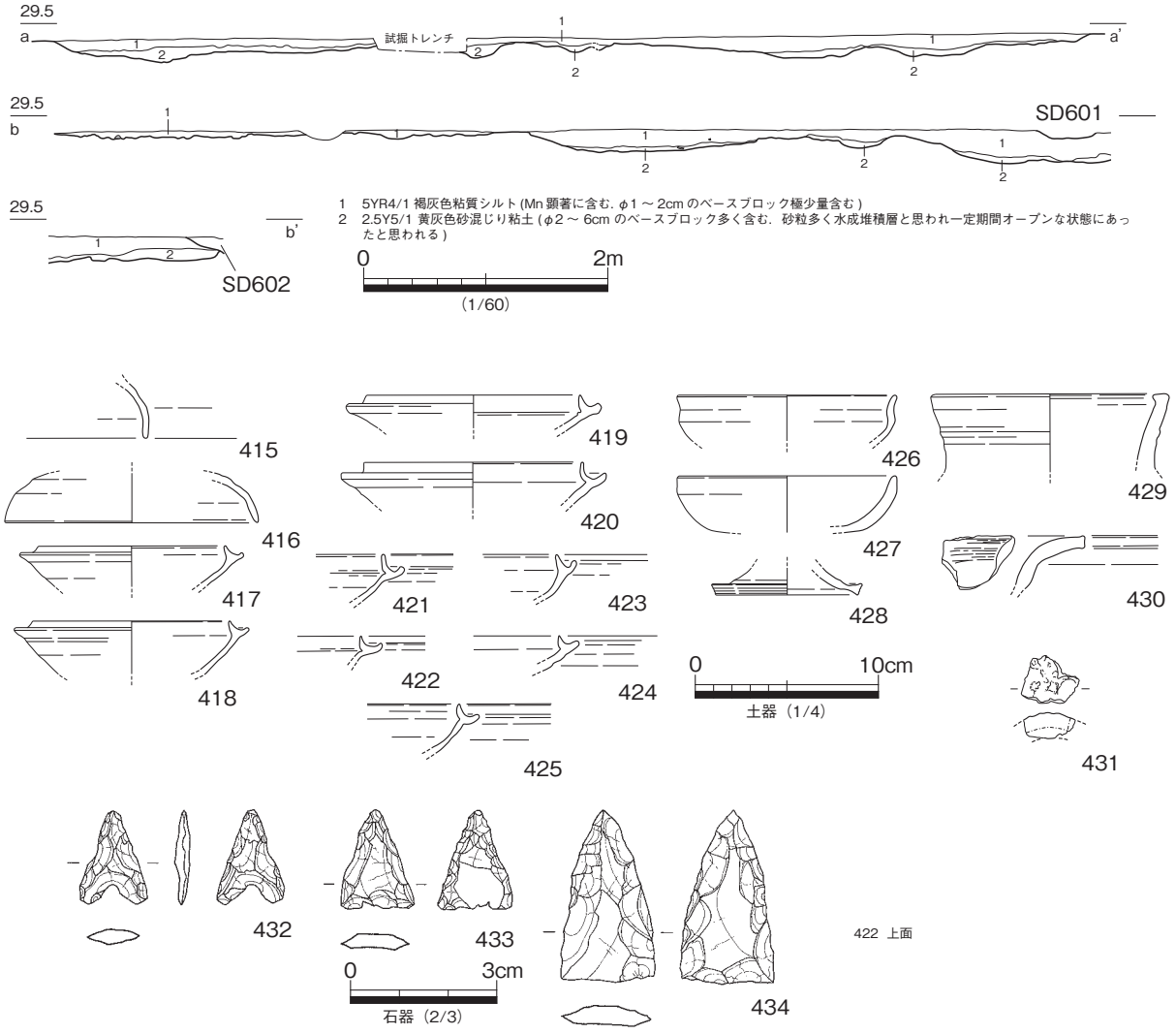
Ⅵ区東半部中央で検出した不整形な落ち込みである。SB602、SX605 等と重複している。検出状況より SX605 はこれらの遺構より先行する。長径 2.4 m、短径 0.8 m、深さ 0.32 mを測る。平面は不整形な



第 61 図　SX601 平・断面図，出土遺物



第 62 図　SX604 平・断面図，出土遺物



第 63 図　SX605 断面図，出土遺物

楕円形状、断面も不整形な逆台形状を呈し、埋土は褐灰色シルトからなる。

埋土からは弥生土器・土師器片が少量出土した。414 は弥生土器の壺である。出土遺物が少ないため SX604 の詳細な時期判断については無理がある。

SX605（第 63 図）

Ⅵ区東半部で検出した不整形で浅い落ち込みである。SB601・602・604・605、SD601・602 等と重複する。検出状況から SX605 とこれらの遺構より先行する。長径 9.7 m、短径 8.5 m、深さ約 0.4 mを測る。平面は凹凸が著しい不整形な形状を呈し、底面は長径 2.0 m前後の楕円形状の掘り込み随所に認められ、起伏が顕著である。断面は浅く、埋土は上下 2 層に分かれ、上層は褐灰色シルト、下層は黄灰色砂混じり粘土が平坦に堆積している。

埋土からは 7 世紀初頭頃の土師器・須恵器と石器等が出土した。415・416 は須恵器杯蓋、417 ～ 425 は須恵器杯身、426･427 は須恵器杯、428 は須恵器高杯の脚部片、429 は須恵器の直口壺の口縁部である。430 は土師器甕の口縁部片である。431 は比熱が著しい鞴の羽口片である。432 ～ 434 はサヌカイトの石鏃で混入品であろう。出土遺物から SX605 は 7 世紀初頭以降の時期が考えられる。

（5）自然河川

SR601（第 64・65 図）

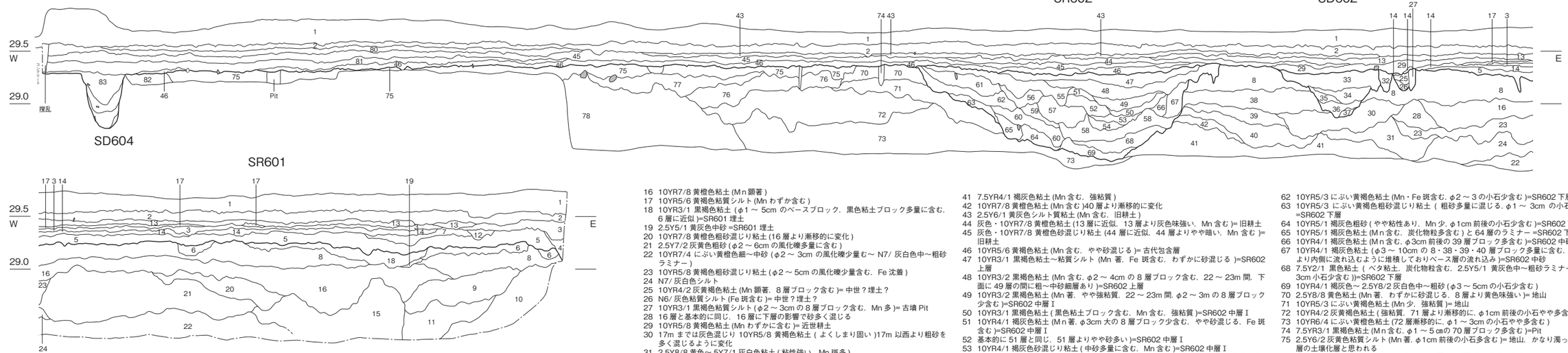
Ⅵ区東端部に所在する自然地形の浅い谷状の遺構である。SB601・602 と重複し、SR601 はこれらの遺構より後出する。検出長約 12.0 m、幅 3.2 ～ 4.5 m、深さ約 0.4 mを測る。平面は幅広で凹凸のある不整形な形状を呈し、北西方向へ向く。断面も凹凸のある不整形で浅い落ち込み状の形状を呈し、埋土は概ね上下二層に分かれ、上層は灰黄褐色粘土、下層は黒褐色粘土からなる。

堆積層からは 7 世紀初頭頃の土師器･須恵器等出土した。435 は須恵器杯蓋､436 ～ 443 は須恵器杯身、444･445 は須恵器杯、446 は須恵器瑳の口縁部である。447･448 は長脚 2 段透かしの須恵器高杯脚部で、おそらく同一個体であろう。449 は底部を欠く須恵器短頸壷である。450・451 は土師器甕の口縁部片である。452 は形状から推定して竈の底部片であろう。453 はﾐﾆﾁｭｱの須恵器壺、454 は鞴の羽口片である。455 はサヌカイトの楔形石器で混入品である。出土遺物から SR601 は 7 世紀初頭以降の埋没時期が考えられる。

SR602（第 64・66 ～ 74 図）

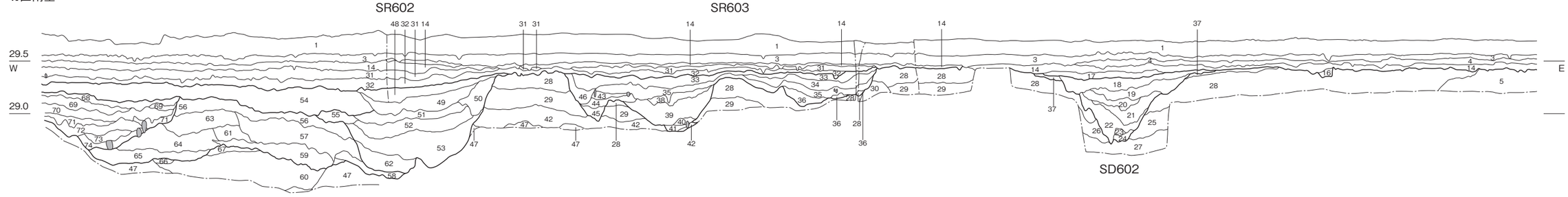
Ⅵ区中央から西半部にかけて所在する。調査区内を南西から北東方向にクランク状に蛇行しながら延びる自然河川である。調査区南端付近では SR603・604 等の流路に分かれるようであるが、大半が調査区から外れるため詳細は不明。発掘調査に際しては、河川の堆積が安定した段階で、その上面から人為的な溝を数条開削している可能性が考えられたが、その状況を明らかにするまでには至らなかった。検出長約 16.0 m、幅約 5.0 m（北端部）～ 8.0 m（南端部）、深さ約 0.8 mを測る。断面の形状は北端部では幅広な椀状、南端部では不整形な隅丸逆台形状を呈する。底面は旧流路の痕跡と考えられる凹凸が著しい。埋土は大別して上・中・下層の 3 層、細分して 6 層に区分し、遺物の取り上の基準とした。上層 : 黒褐色系粘土層で流路死滅後の自然堆積層にあたる。注目される遺物としては鉄鏃が 1 点や馬骨等が出土している。中層Ⅰ : 灰色系の砂～粘土層である。流路埋没後に人為的に再掘削された堆積状況を示し

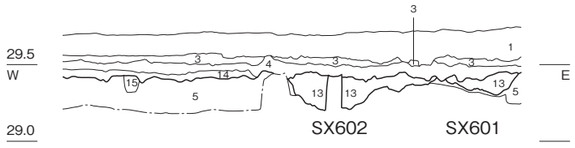
Ⅵ区北壁



Ⅵ区北壁
1　耕作土
2　7.5YR4/6 褐色 (Fe)= 床土
3　10YR6/8 明黄褐色粘質シルト (わずかに Mn 含む)= 旧床土
4　2.5Y6/1 黄灰色
5　10YR4/1 褐灰色粘土 (Mn 顕著に含む．φ2～3cmのベースブロック含む)=SR601 埋土
6　10YR5/1 褐灰色粘土 (わずかに砂含む．φ2～ 10cm のベースブロック多量に含む) =SR601 埋土
7　10YR6/1 褐灰色 (Mn 顕著に含む．基本的に 5 層と同質．上層の影響により変質)
8　2.5Y8/3 淡黄色シルト (Mn 顕著含む．よくしまり固い．2m 以西でやや砂混じる)= ベース
9　灰白色混じり 10YR6/8 明黄褐色粘土 (Mn 含む．8 層から漸移的に変化)
10　7.5Y7/1 灰白色砂礫 (φ3～ 10cm の風化礫含む)
11　10GY8/1 明緑灰色粘土 (よくしまり固い．9 層より漸移的に変化)
12　10YR7/2 にぶい黄橙色粘質シルト (上位に Mn 含む．中砂細層含む)
13　2.5Y7/2 灰黄色シルト (3 層ブロック状に含む)
14　2.5Y7/6 明黄褐色粘土 (Mn 含む)
15　2.5Y7/2 灰黄色・10G7/1 明緑灰色細砂．2.5Y6/6 明黄褐色粗砂．5PB6/1 青灰色中砂ラミナー
16　10YR7/8 黄橙色粘土 (Mn 顕著)
17　10YR5/6 黄褐色粘質シルト (Mn わずか含む)
18　10YR3/1 黒褐色粘土 (φ1～ 5cm のベースブロック．黒色粘土ブロック多量に含む．6 層に近似)=SR601 埋土
19　2.5Y5/1 黄灰色中砂 =SR601 埋土
20　10YR7/8 黄橙色粗砂混じり粘土 (16 層より漸移的に変化)
21　2.5Y7/2 灰黄色粗砂 (φ2～ 6cm の風化礫多量に含む)
22　10YR7/4 にぶい黄橙色細～中砂 (φ2～ 3cm の風化礫少量む～ N7/ 灰白色中～粗砂ラミナー)
23　10YR5/8 黄褐色粗砂混じり粘土 (φ2～ 5cm の風化礫少量含む．Fe 沈澱)
24　N7/ 灰白色シルト
25　10YR4/2 灰黄褐色粘土 (Mn 顕著．8 層ブロック含む)= 中世？埋土？
26　N6/ 灰色粘質シルト (Fe 斑含む)= 中世？埋土？
27　10YR3/1 黒褐色粘質シルト (φ2～ 3cm の 8 層ブロック含む．Mn 多)= 古墳 Pit
28　16 層と基本的に同じ．16 層に下層の影響で砂多く混じる
29　10YR5/8 黄褐色粘土 (Mn わずか含む)= 近世耕土
30　17m までは灰色混じり 10YR5/8 黄褐色粘土 (よくしまり固い)17m 以西より粗砂を多く混じるように変化
31　2.5Y8/8 黄色～ 5Y7/1 灰白色粘土 (粘性強い．Mn 斑多)
32　上位に N7/ 灰白色細砂質粘土 (下位に 8 層ブロック少量含む)
33　灰色混じり 10YR6/8 明黄褐色粘質シルト (Mn・Fe 斑含む)=SD602 上層
34　10YR6/1 褐灰色砂混じり・10YR8/2 灰白色細砂ラミナー =SD602 中層
35　10YR6/1 褐灰色粘土 (Fe・Mn 斑含む．粘性強い)=SD602 中層
36　2.5Y7/1 灰白色粘土・2.5Y7/2 灰黄色細～中砂ラミナー =SD602 下層
37　10YR8/6 黄橙色～ 10YR5/6 黄褐色中砂 =SD602 下層
38　2.5Y7/3 浅黄色砂質シルト (下位に 2.5Y6/2 灰黄色中～粗砂混じる)= 地山．8 層より漸移的に変化．Mn 斑含む
39　灰白色・2.5Y7/8 黄色砂混じり粘土 = 地山
40　灰白色・10YR7/8 黄橙色砂混じり粘土 (砂多量に含む．39 層より漸移的に変化)
41　7.5YR4/1 褐灰色粘土 (Mn 含む．強粘質)
42　10YR7/8 黄橙色粘土 (Mn 含む)40 層より漸移的に変化
43　2.5Y6/1 黄灰色シルト質粘土 (Mn 含む．旧耕土)
44　灰色・10YR7/8 黄橙色粘土 (13 層に近似．13 層より灰色味強い．Mn 含む)= 旧耕土
45　灰色・10YR7/8 黄橙色砂混じり粘土 (44 層に近似．44 層よりやや暗い．Mn 含む)= 旧耕土
46　10YR5/6 黄褐色粘土 (Mn 含む．やや砂混じる)= 古代包含層
47　10YR3/1 黒褐色粘土～粘質シルト (Mn 著．Fe 斑含む．わずかに砂混じる)=SR602 上層
48　10YR3/2 黒褐色粘土 (Mn 含む．φ2～ 4cm の 8 層ブロック含む．22～ 23m 間．下面に 49 層の間に粗～中砂細層あり)=SR602 上層
49　10YR3/2 黒褐色粘土 (Mn 著．やや強粘質．22～ 23m 間．φ2～ 3m の 8 層ブロック少含む)=SR602 中層Ⅰ
50　10YR3/1 黒褐色粘土 (黒色粘土ブロック含む．Mn 含む．強粘質)=SR602 中層Ⅰ
51　10YR4/1 褐灰色粘土 (Mn 著．φ3cm 大の 8 層ブロック少含む．やや砂混じる．Fe 斑含む)=SR602 中層Ⅰ
52　基本的に 51 層と同じ．51 層よりやや砂多い)=SR602 中層Ⅰ
53　10YR4/1 褐灰色砂混じり粘土 (中砂多量に含む．Mn 含む)=SR602 中層Ⅰ
54　10YR3/1 黒褐色粘土 (φ3～ 7cm の 41 層・42 層ブロック多量に含む．炭化物粒含む．Mn 少含む)=SR602 中層Ⅰ
55　7.5YR3/1 黒褐色～ 7.5YR2/1 黒色粘土 (Mn・Fe 斑著．φ1cm 前後の小石わずかに混じる)=SR602 上層
56　7.5YR3/1 黒褐色粘土 (Mn・Fe 斑著．55 層に近似)=SR602 上層
57　黒色混じり 7.5YR3/1 黒褐色粘土 (Mn・Fe 斑著)=SR602 中砂
58　10YR3/1 黒褐色粘土 (極細砂ラミナー状に含む．φ2～ 3cm 黒色粘土ブロック含む) =SR602 中砂
59　10YR4/1 褐灰色中砂混じり粘土 (Fe 沈澱．Mn 含む)=SR602 下層
60　59 層と基本的に同じ．59 層より砂多く混じる =SR602 下層
61　2.5Y4/2 暗灰黄色粘土 (Mn 著．Fe 斑含む．φ8cm の砂礫少含む)=SR602 下層
62　10YR5/3 にぶい黄褐色粘土 (Mn・Fe 斑含む．φ2～ 3 の小石少含む)=SR602 下層
63　10YR5/3 にぶい黄褐色粗砂混じり粘土 (粗砂多量に混じる．φ1 ～ 3cm の小石多含む) =SR602 下層
64　10YR5/1 褐灰色粗砂 (やや粘性あり．Mn 少．φ1cm 前後の小石少含む)=SR602 下層
65　10YR5/1 褐灰色粘土 (Mn 含む．炭化物粒多含む) と 64 層のラミナー =SR602 下層
66　10YR4/1 褐灰色粘土 (Mn 含む．φ3cm 前後の 39 層ブロック多含む)=SR602 中砂
67　10YR4/1 褐灰色粘土 (φ3～ 10cm の 8・38・39・40 層ブロック多量に含む．特に肩部より内側に流れ込むように堆積しておりベース層の流れ込み)=SR602 中砂
68　7.5Y2/1 黒色粘土 (ベタ粘土．炭化物粒含む．2.5Y5/1 黄灰色中～粗砂ラミナー (φ2～ 3cm 小石少含む)=SR602 下層
69　10YR4/1 褐灰色～ 2.5Y8/2 灰白色中～粗砂 (φ3～ 5cm の小石少含む)
70　2.5Y8/8 黄色粘土 (Mn 著．わずかに砂混じる．8 層より黄色味強い)= 地山
71　10YR5/3 にぶい黄褐色粘土 (Mn 少．強粘質)= 地山
72　10YR4/2 灰黄褐色粘土 (強粘質．71 層より漸移的に．φ1cm 前後の小石やや多含む)
73　10YR6/4 にぶい黄橙色粘土 (72 層漸移的に．φ1 ～ 3cm の小石やや多含む)
74　7.5YR3/1 黒褐色粘土 (Mn 含む．φ1 ～ 5 ㎝の 70 層ブロック多含む)=Pit
75　2.5Y6/2 灰黄色粘質シルト (Mn 著．φ1cm 前後の小石多含む)= 地山．かなり濁った感．76 層の土壌化層と思われる
76　2.5Y8/6 黄色砂混じり粘土 (Mn 含む．70 層より漸移的に変化に砂多くなる)= 地山
77　2.5Y6/3 にぶい黄色砂混じり粘土 (Mn 含む．75 層より漸移的に変化．φ1 ～ 3cm の小石少含む)= 地山
78　灰色混じり 2.5Y5/6 黄褐色砂礫 (φ2～ 15cm の砂岩礫．風化礫多含む)
79　2.5Y4/1 黄灰色砂混じり粘土 (Mn 含む)=SD 埋土
80　黄色混じり 2.5Y5/1 黄灰色～ 2.5Y4/1 黄灰色シルト (やや砂混じる．Mn 含む)= 旧耕土
81　灰色混じり 2.5Y6/8 明黄褐色粘土 (Mn 含む．45 層より黄味濃い)= 旧耕土
82　10YR5/1 褐灰色粗砂 (φ1 ～ 2cm の風化小石少含む)= 地山
83　N7/ 灰白色粗砂混じり粘土 (82 層と基本的に同じ．82 層より粘性強い．Fe 斑含む)= 地山

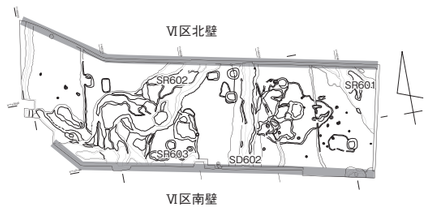
Ⅵ区南壁



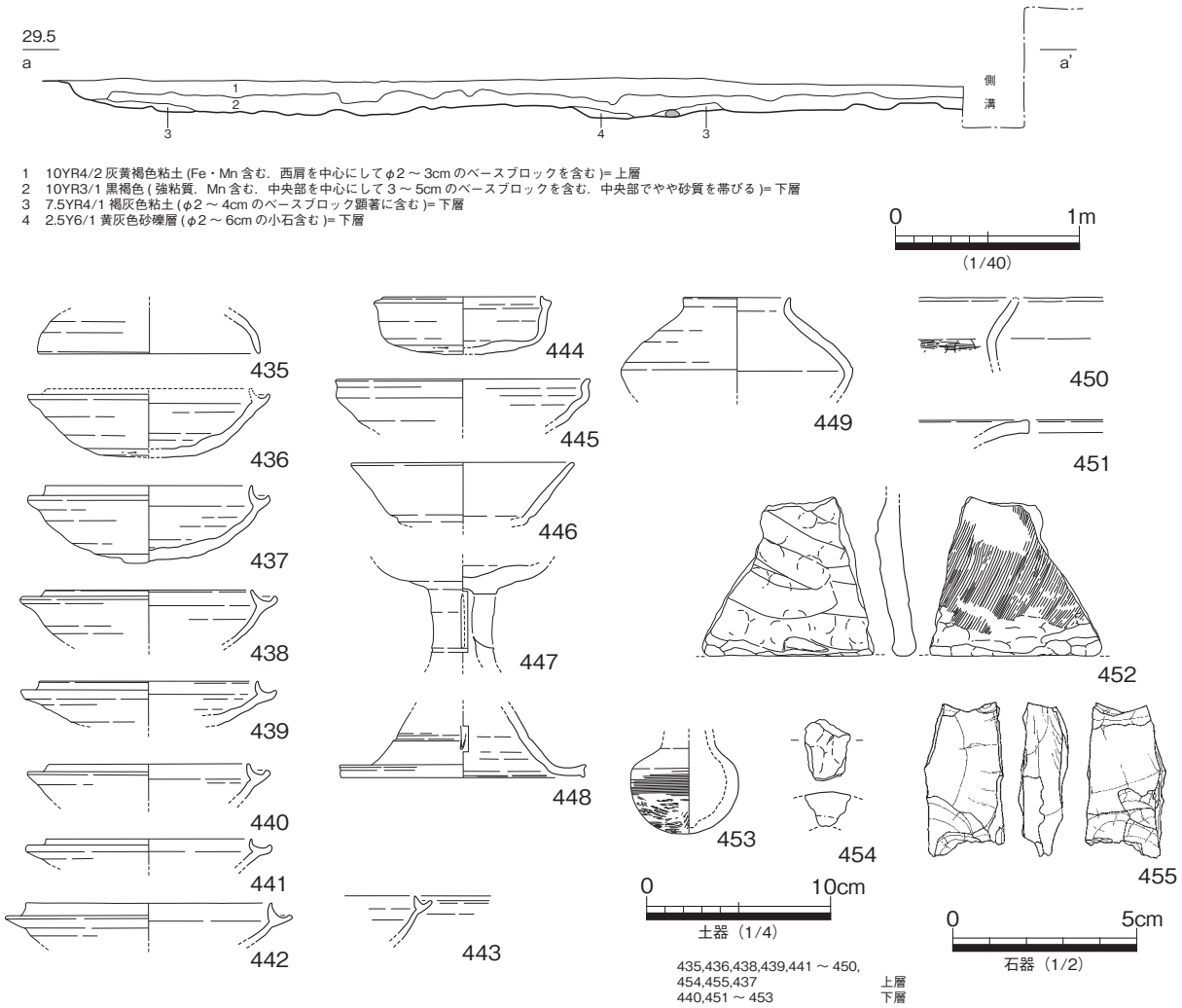


Ⅵ区南壁
1　耕作土
13　10YR2/1 黒色粘土 (φ2～ 7cm のベースブロック多く含む．Mn 含む)=SX601・602
14　黄味混じり 7.5Y7/1 灰白色粘土 (Mn 含む)= 床土？
15
16
17　2.5Y7/6 明黄褐色粘質シルト (Mn 含む)=SD602 上層
18　2.5Y6/4 にぶい黄色粘土 (Mn 含む)=SD602 上層
19　2.5Y6/1 黄灰色砂混じり粘土 (Mn・Fe 含む)=SD602 上層
20　N6/ 灰色粘土 (Fe・Mn 含む．細～中砂わずかにラミナー状に含む)=SD602 中層
21　N6/ 灰色粘土と 5Y8/3 淡黄色細砂ラミナー (Fe 含む．細砂層が多い)=SD602 中層
22　N6/ 灰色粘土 (5Y7/2 灰白色細～中砂ラミナー状にわずかに混じる．φ5～ 10cm の石含む) =SD602 下層
23　7.5Y8/3 淡黄色粗砂 (φ3 ～ 5cm の小石少量含む)=SD602 下層
24　10YR7/6 明黄褐色粗砂 =SD602 下層かベース層か判断つかない
25　黄橙色混じり 10YR7/1 灰白色シルト (Mn わずかに含む)= ベース
26　2.5Y4/2 暗灰黄色粗砂 (やや粘性あり)= ベース
27　5PB7/1 明青灰色中粗砂 = ベース
28　2.5Y7/4 浅黄色シルト質粘土 (Mn 含む)= ベース
29　2.5Y8/4 淡黄色シルト質粘土 (Mn 含む)= ベース．わずかに灰味強い
30　2.5Y7/4 浅黄色シルト (Mn 含む．φ3 ～ 4cm の小石微量含む)= ベース
31　2.5Y7/8 黄色粘土 (下位に部分的に粗砂の細層をはさむ．Mn 含む)= 古代包含層 8c
32　10YR4/1 褐灰色粘土 (Mn・Fe 顕著に含む)= 溝群上面包含層
33　10YR3/1 黒褐色粘土 (Mn 顕著．やや砂混じる)=SR603 上層 =SR602 最上層
34　2.5Y2/1 黒色粘土 (Mn 顕著)=SR603 上層
35　N4/ 灰色粘土 (Mn 含む．強粘質．炭化物焼土粒含む)=SR603 中層・SR602 中層
36　N4/ 灰色粘土 (Mn 含む．M 層φ2 ～ 5cm ブロック多量に含む)=SR603 下層
37
38　2.5Y4/1 黄灰色中砂．粘土ラミナー (Mn 含む)=SR603 下層Ⅰ
39　10Y5/1 灰色粘土 (部分的に砂混じる)=SR603 下層Ⅱ
40　7.5Y6/1 灰色中砂 =SR603 下層Ⅲ
41　10Y8/1 灰白色中～粗砂 =SR603 下層Ⅲ
42　N6/ 灰色粗砂 (Mn 含む．粘性あり)= ベース
43　N4/ 灰色中砂混じり粘土 (φ8 ～ 9cm の石含む)=SR603
44　2.5GY8/1 灰白色中～粗砂とⅠ層のラミナー (炭粒含む)=SR603
45　7.5Y5/1 灰色中砂混じりシルト =SR603
46　5Y4/1 灰色～ 2.5Y3/1 黒褐色粘質シルト (Mn 含む)=SR603
47　明黄褐色混じり 5PB7/1 明青灰色粘土 (強粘質．Fe 含む)= ベース
48　10YR3/4 暗褐色粘質シルト (Mn 顕著．白色粒含む．32 層に近似)
49　10YR4/1 褐灰色粘土 (強粘質．Mn 含む．炭粒多く含む)=SR602 最上層
50　10YR6/1 褐灰色砂混じり粘土 (ベース 28・29 層ブロック多量に含む)
51　7.5YR4/1 褐灰色砂混じり粘土 (Mn 含む．砂多く混じる)
52　2.5Y7/1 灰白色と 2.5Y5/1 黄灰色粘土 (強粘質．Mn 含む) のラミナー =SR602 中層Ⅱ
53　2.5Y7/1 灰白色細砂と 10YR4/1 褐灰色粘土 (強粘質．泥炭質)24 層程度に細分されるラミナー =SR602 下層Ⅰ
54　10YR2/3 黒褐色粘土 (Mn 顕著．まれに 3 ～ 6cm のベースブロック含む)=SR602 上層Ⅰ
55　7.5YR4/1 褐灰色粘土 (Mn 顕著．基本的には 51 層と同じ 54 層の影響で Mn 多く混じる) =SR602 上層Ⅰ
56　2.5Y4/1 黄灰色粘土 (強粘質．Mn･Fe 含む．基本的には 57 層と同じ 54 層の影響により変質か) =SR602 上層Ⅰ
57　5Y6/1 灰色粘質土 (強粘質．Mn・Fe 含む)=SR602 下層Ⅰ
58　10YR3/1 黒褐色粗砂 (粘土細層が介在)=SR602 下層Ⅲ
59　2.5Y7/1 灰白色細砂と 2.5Y6/1 黄灰色粘土 (炭化物多量に含む) ラミナー =SR602 下層Ⅲ
60　2.5GY8/1 灰白色中～粗砂 = ベース
61　5Y6/1 灰色粘質シルト (粘性強い．Fe・Mn 含む．57 層に近似)=SR602 下層Ⅱ
62　5Y8/1 ～ 7/2 灰白色細～中砂と 2.5Y4/1 黄灰色～ 2.5Y2/1 黒色粘土 (強粘質泥炭層) ラミナー =74 層と同一の可能性がある =SR602 下層Ⅱ=74 層と同一の可能性がある
63　10YR5/1 褐灰色砂混じり粘土 (Fe・Mn 含む)=57 層とほぼ同一
64　N7/ 灰白色粗砂と N6/ 灰色粘土ラミナー (砂は西半部で 7.5Y8/3 淡黄色)
65　2.5Y7/2 灰黄色砂礫 (φ0.5 ～ 1cm の小石多量に含む．64 層より漸移的に変化)
66　N6/ ～ N7/ 灰白粘土 (ややシル質おびる)
67　7.5GY8/1 明緑灰色シルト (よくしまりかたい)= ベース
68　褐色味 N5/ 灰粘土 (強粘質．Mn 含む)=SR603・04 中層粘土に近似 =51 層
69　10YR4/1 褐灰色粘質シルト (Mn 含む．炭粒多量含む．51 層に近似)
70　5Y8/1 灰白色・2.5Y6/8 明黄褐色中～粗砂 (土器多い)
71　2.5Y3/2 黒褐色粗砂混じり粘土 (70 層の影響で砂混入)
72　N3/ 暗灰色砂混じり粘土 (Mn 含む．φ2 ～ 7cm の 47 層ブロックわずか含む)
73　2.5Y7/2 灰黄色細～粗砂 (φ0.5 ～ 5cm の小石含む)
74　N4/ 灰色砂混じり粘土 (強粘質．砂混入少ない．φ2 ～ 4cm の 47 層ブロックわずかに含む)
51=68
52=69
65=58

0　5m
(縦 1/40・横 1/100)



第 64 図　Ⅵ区北・南壁土層断面図



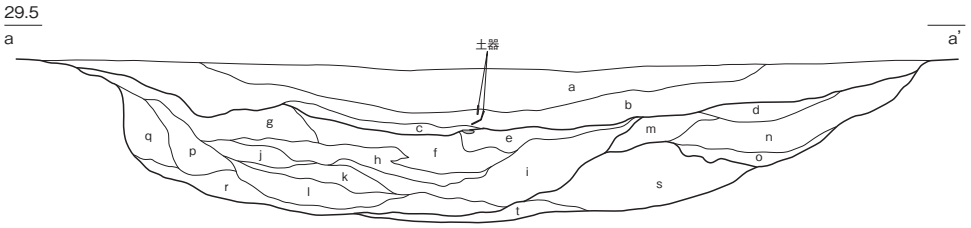
第 65 図　SR601 断面図，出土遺物

ており、当初この中層を人為的な溝跡として調査を進めたが、下層の遺物内容や流路方向から、自然河川と溝跡を明瞭に分離することはできず、途中で中層Ⅰと名称を変更した。中層Ⅱ : 中層Ⅰ同様に人為的な掘削後に堆積した土層である。下層Ⅰ : 黄色系粘土～シルトの水平堆積層である。出土遺物は極めて少ない。下層Ⅱ : 灰色系粘土・細砂～粗砂の厚 0.4 m以上のラミナー層である。活発な水流活動を示しており、弥生土器が少量出土した。下層Ⅲ : 黄色系の小礫混じりの粗砂層である。底面に張り付くような状況で弥生土器・石器が出土した。時期は前期末～中期初頭・中期中葉・後期後半の 3 時期あり、周辺にこの時期の集落跡が所在している可能性を示唆する。

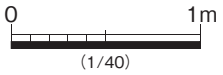
出土遺物の出土状況から推定して、SR602 は弥生時代後期後半以降には基になる流路が既に存在しており、7 世紀前半以降に本格的に埋没が開始し、完全に平坦化するのは古代前半頃と推定される。

SR602 出土土器（第 67 ～ 74 図）

SR602 からは多量の遺物が出土した。傾向として下層からは弥生中期・弥生時代後期後半～古墳時代前期の遺物が、中層～上層からは 6 世紀末～ 7 世紀書初頭頃の TK209・217 並行期の須恵器や、古代前半頃の土器が出土した。



a　7.5YR3/2 黒褐色粘土 (Mn 顕著．Fe. φ2 ～ 4cm のベースブロック少量含む)= 上層．a と b 近似
b　10YR4/3 にぶい黄褐色粘土 (Mn 顕著．Fe. φ1 ～ 2cm のベースブロック少量含む)= 上層．a と b 近似
c　10YR5/1 褐灰色粘土 (強粘質．わずかに Fe．上面に黒粘細層あり．中層に近似)= 上層
d　10YR5/2 灰黄褐色粘土 (ややシルト質．Fe・Mn 多い．n 層に近似)= 中層 3
e　10YR4/6 褐色粘土 (Fe・Mn 沈着．中央部で炭粒・焼土粒少量含む)= 中層 1
f　2.5Y5/1 黄灰色 (Fe・焼土塊・炭粒中央部に多く含む．φ2cm のベースブロック少．ブロック土の混入少ないが)= 中層 1
g　10YR4/6 褐色粘土 (Fe・Mn 顕著)= 中層 1
h　10YR4/1 褐灰色粘土 (Fe・j 層をブロック状に多く含む)= 中層 1
i　N3/ 暗灰色～ 2.5Y3/1 黒褐色粘土 (強粘質．上半部に Fe)= 中層 1
j　2.5Y7/1 灰白色中～粗砂 +2.5Y4/2 暗灰黄色粘土ラミナー = 中層 1
k　基本的に j 層と同じ．分層する必要なし = 中層 1
l　N3/ 暗灰色粘土 (強粘質)5Y8/3 淡黄色中砂ラミナー (粘土層中に炭化物含む)= 中層 1
m　5Y4/1 灰色粘土 (Fe・Mn 顕著．砂混じる)= 中層 3
n　2.5Y5/2 暗灰黄色 (シルト質．Fe・Mn 顕著．肩部分は砂多く混じる)= 中層 3
o　2.5Y5/1 黄灰色粘土 (強粘質．Fe 含む)= 中層 3
p　N5/ 灰色粘土 (よくしまる．Mn．炭化物細粒少含む)= 中層 2
q　10Y7/1 灰白色シルト (Fe・Mn)= ベース流れ込み = 中層 2
r　N4/ 灰色粘土と 5Y8/2 灰白色細～中砂ラミナー = 中層 2
s　5Y7/1 灰白色～ N3/ 暗灰色～ 5Y8/4 淡黄色細～中砂 +7.5Y6/1 灰色粘土 (Fe・Mn 含む) のラミナー = 下層
t　2.5Y6/8 明黄褐色粗砂 (φ2 ～ 5cm の風化礫多く含む)= 下層



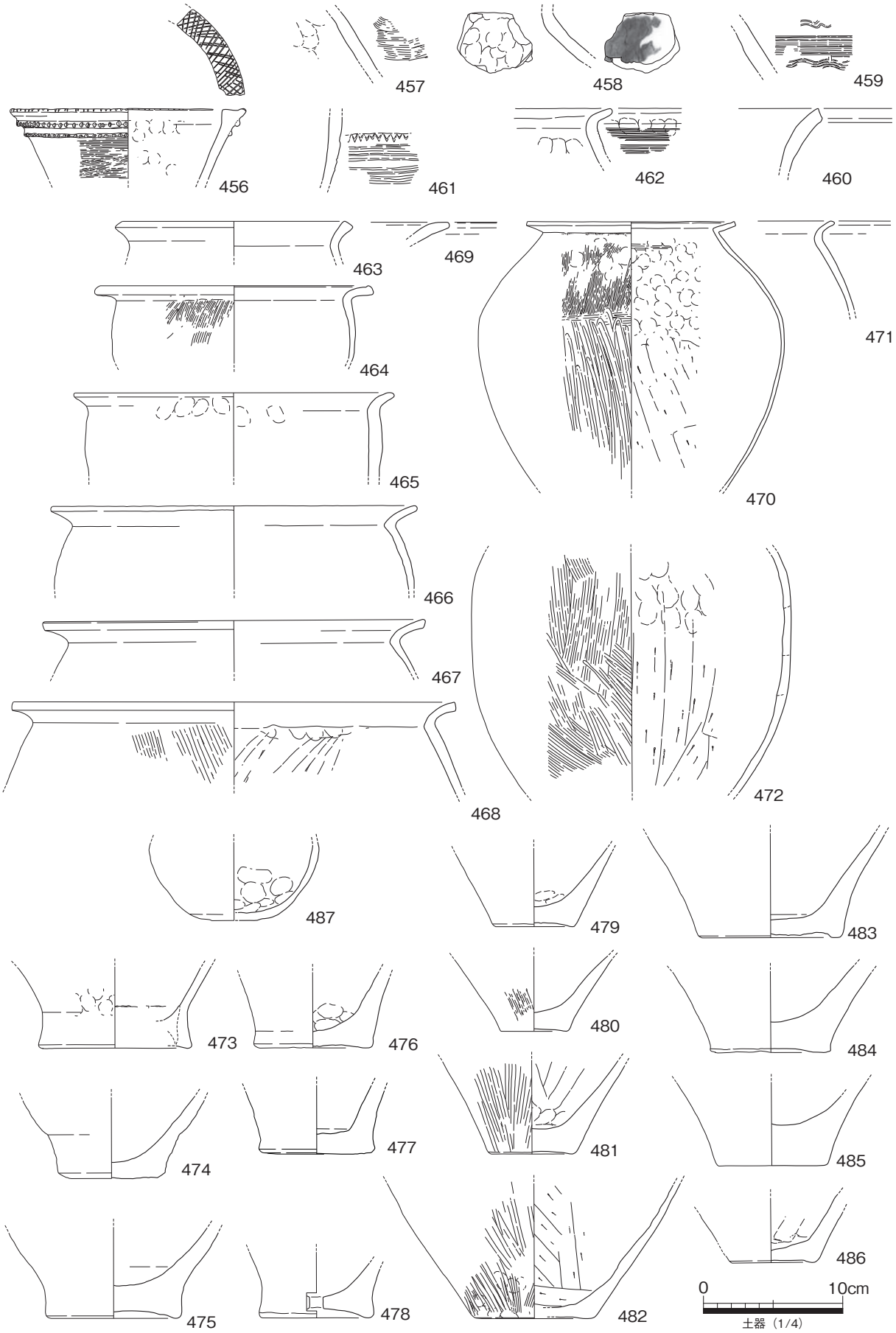
第 66 図　SR602 断面図

出土遺物を説明する都合上、弥生土器・土師器・須恵器・石器、その他の遺物の順で報告する。なお出土層位については、挿図の注記及び観察表を参照して頂きたい。

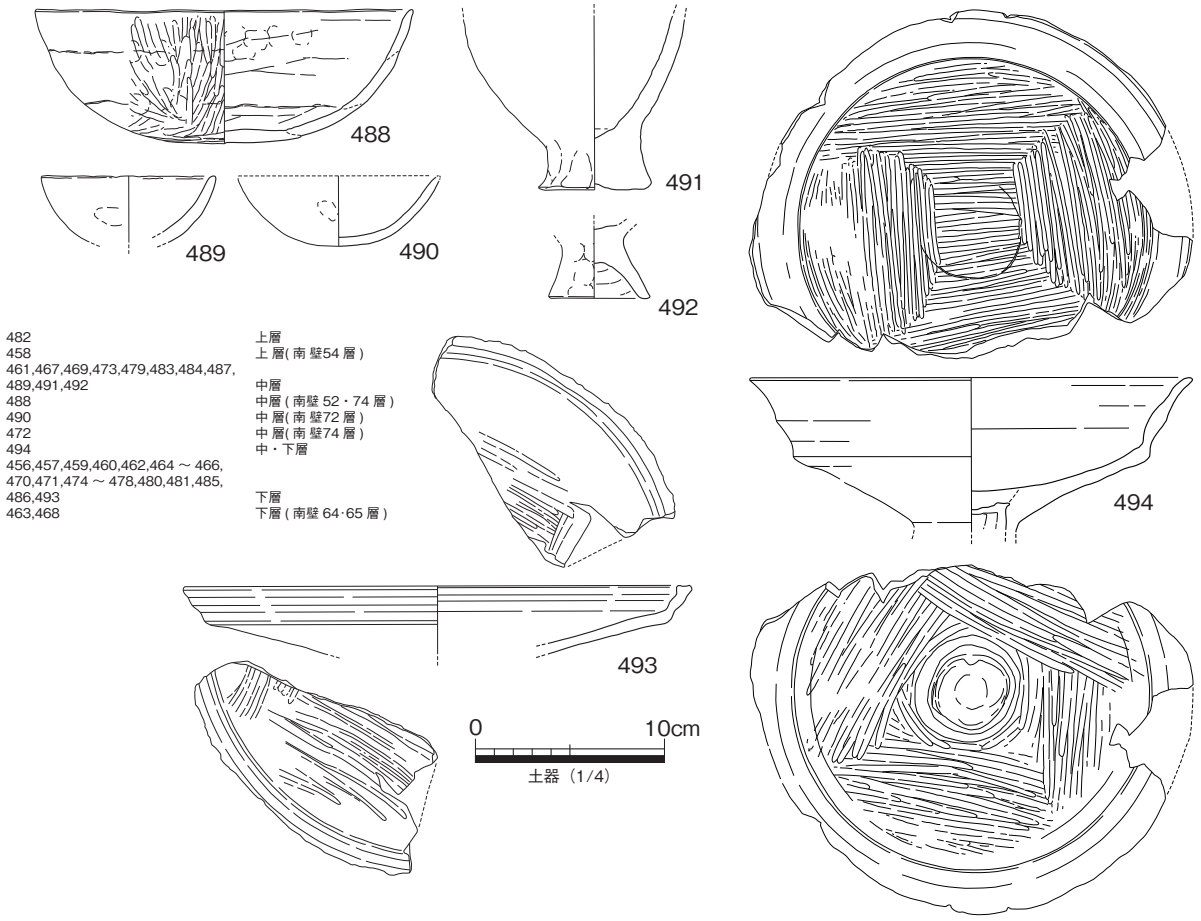
456 ～ 494 は弥生土器の資料である。456 ～ 462 は中期前半頃の壺片である。463 ～ 472 は甕の資料である。463 ～ 468 は中期中葉以降の甕口縁部片である。470 は後期後半以降の底部を欠く下川津 B 類甕に類似した土器である。473 ～ 486 は壺と甕の底部である。478 には穿孔が認められる事から、甑としての機能が考えられる。488 ～ 492 は鉢である。488 の外面にはヘラミガキが顕著に認められる。493・494 は高杯である。493 は後期初頭、494 は後期中頃の高杯の杯部である。

495 ～ 516 は古墳時代前期～古代の土師器の資料である。495 ～ 499 は高杯の資料である。495 は古墳時代前期前半の高杯である。500 ～ 513 は甕の資料である。500 は底部を欠く、古墳時代前期前半の土師器甕である。511・512 は甕の把手である。517 は形状から竈の基底部片と考えられる。515・516 は甑の上半部である。把手までは残っていないが、比較的残りの良い資料である。514 は古墳時代末以降のボール状の製塩土器である。内外面ともにオサエが顕著に残り、器壁は比熱を受け劣化している。518 は土製品の羽口片で、内外面伴に比熱が著しい。

519 ～ 590 は主に中～上層から出土した須恵器の資料である。6 世紀末～ 7 世紀書初頭の TK209・217 並行期の土器が主体を占める。519 ～ 534 は杯蓋である。天井部の調整としては、ヘラ切り後、回転ナデとの境に回転ヘラケズリを施している資料が多い。532 は天井部の外面には「×」印の線刻を施した杯蓋である。533 の口縁部には片口状の歪みが認められる。535 ～ 560 は杯身である。杯蓋同様、底部はヘラ切りとヘラ削りを併用している事例が多い。535 は TK10 並行期の杯身で、他は 6 世紀末～ 7 世紀書初頭の TK209・217 並行期の杯身である。561 ～ 567 は杯である。形状から数タイプに区分できる。568 ～ 576 は短脚の高杯である。577 は TK43 並行期の高杯である。578 は口縁部を欠く提瓶で、579 は横瓶の体部片である。580 ～ 582 は口縁部と底部を欠く短頸壺である。583・584 は壺の口縁部である。585 ～ 587 は甕の口縁部である。588 は甕の把手部である。590 は形状や外面のヘラケズリの状況等から土馬の脚部片と考えられる。土馬は県下でも事例が少なく希少な遺物である。



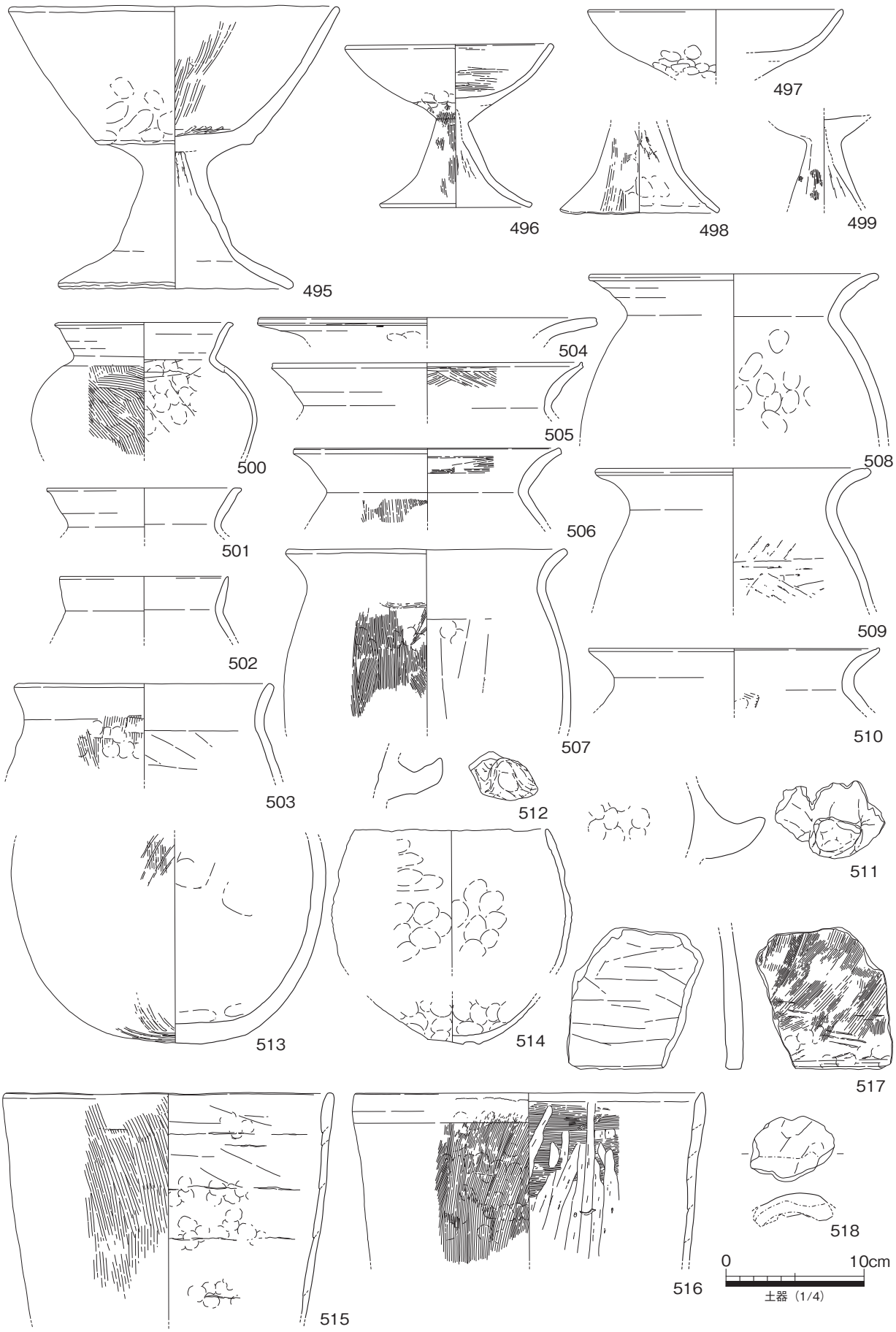
第 67 図　SR602 出土遺物（1）



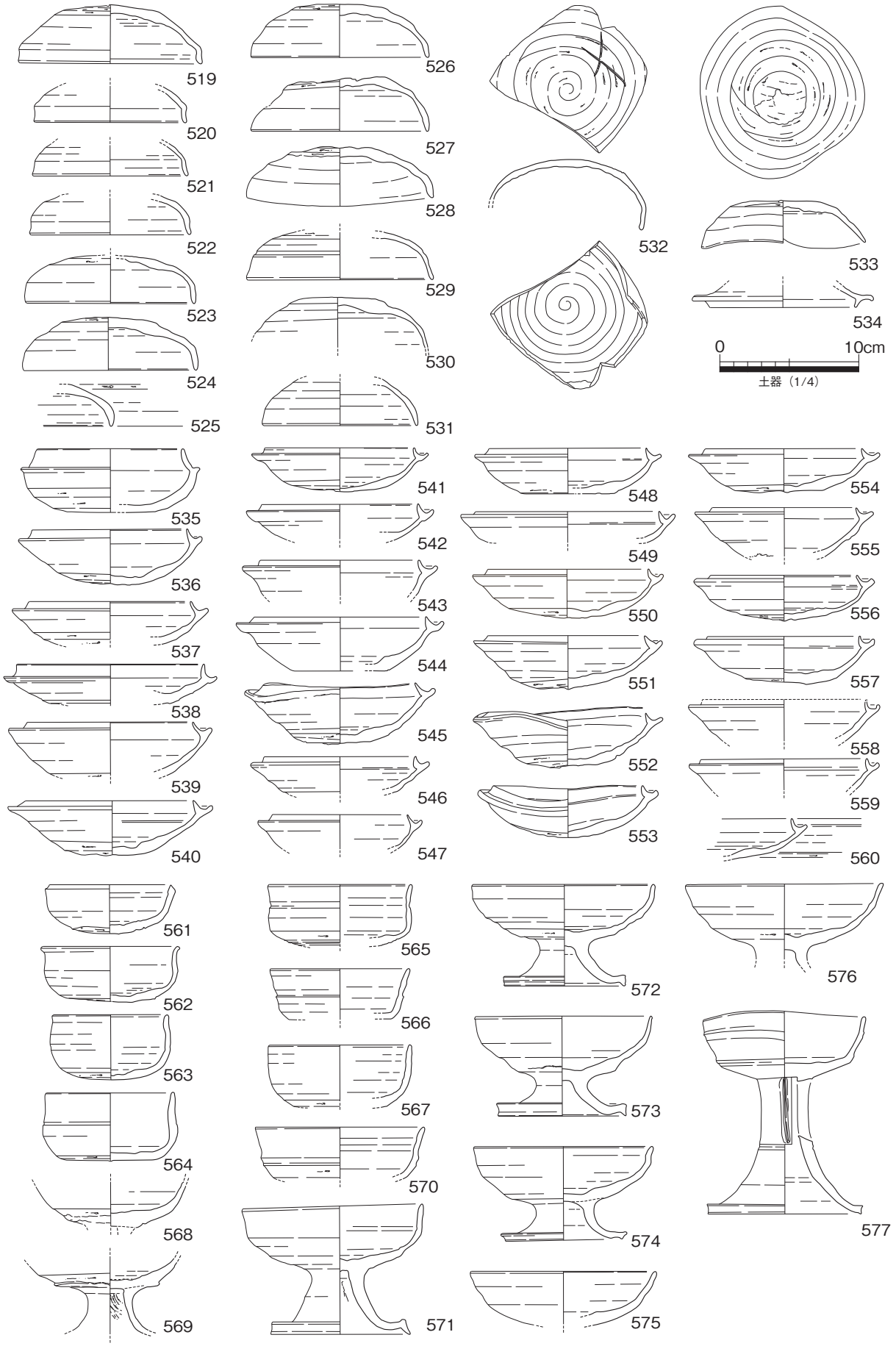
第 68 図　SR602 出土遺物（2）

SR602 出土石器・鉄器・木器等（第 72 ～ 74 図）

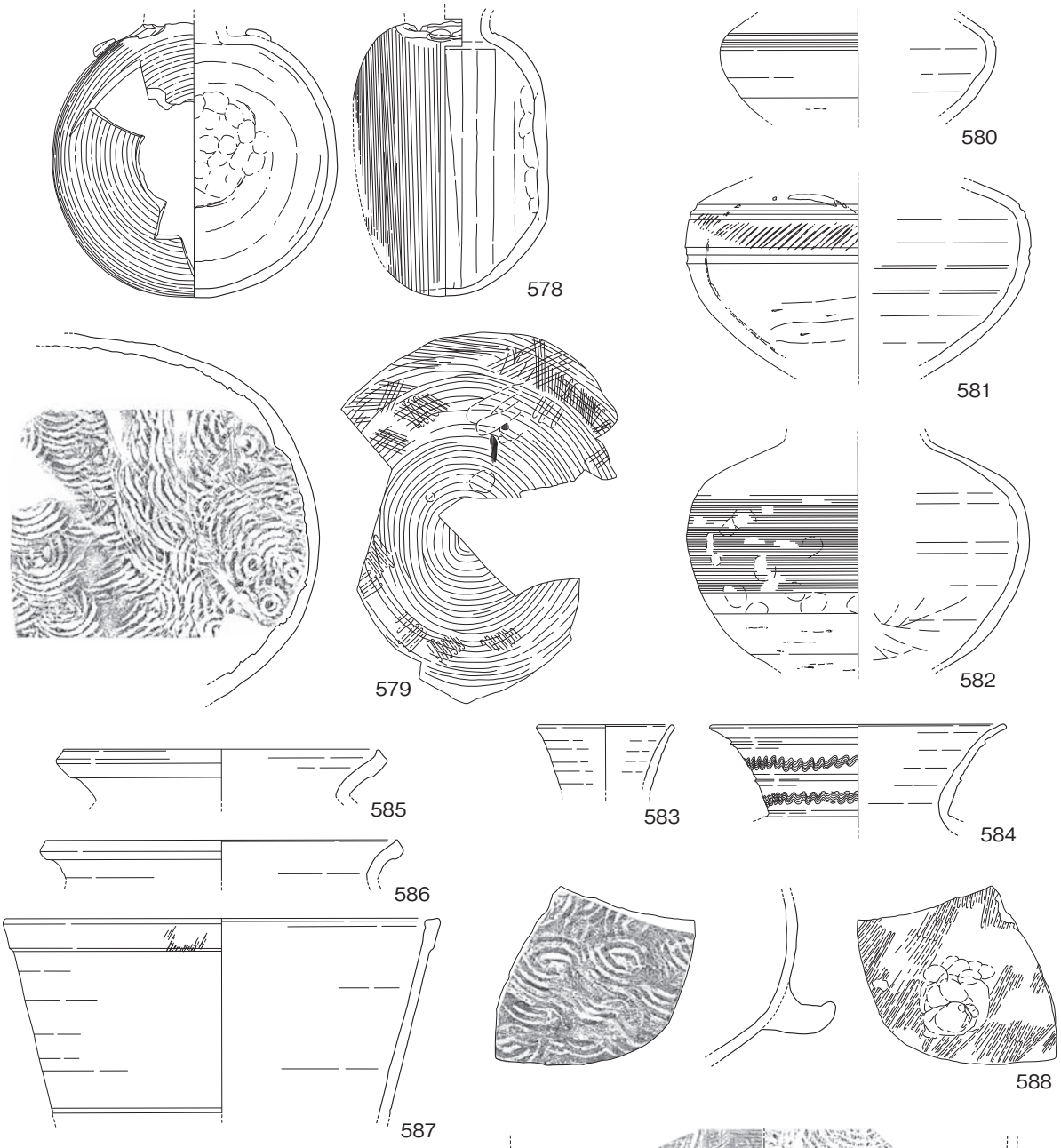
591 ～ 603 はサヌカイト製の石器類である。591 は有舌尖頭器である。比較的肉厚な横長剥片を素材に用い、両側縁部より調整を加えている。592 ～ 594 は石鏃である。593 は V 字状の形態をしており、縄文期の特徴を有する。595 は槍先形石器の未製品である。横長の大型剥片を素材にし、両側縁部から調整を加えている。596 は形状から石庖丁の未製品と考えられる。597 は形状から半裁状に 2 分割した石匙片と考えられる。598 は不整形は形状を呈する石器で、一応削器に分類したが他の器種で再検討する必要もある。599・600 は石鍬片である。601 ～ 603 は石核である。602 は長さ 19c m × 幅 11.2c m × 厚さ 8.0c m測る大型のサヌカイト分割礫を素材に用い。側縁の稜線上を交互剥離で剥片剥離を行っている石核である。器面に残る剥離痕は長さ 8.0 ～ 10.0c m × 幅 5.0 ～ 7.0c m程の比較的大型の剥離痕が主体を占めることから、602 は石核素材を生産した石核と考えられる。603 は厚さ 2.5c m程の肉厚な横長状の剥片を素材に用いた石核である。604 は形状から推定して、花崗岩製の敲き石と考えられる。605 は上層から出土した本遺跡唯一の鉄鏃である。606 は木製品の柱材で、断面の形状からミカン割材と考えられる。

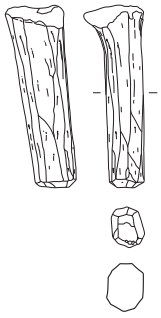


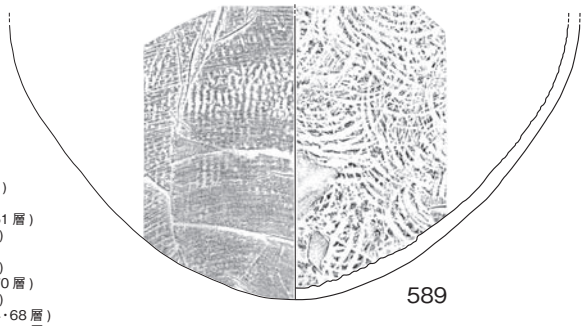
第 69 図　SR602 出土遺物（3）



第 70 図　SR602 出土遺物（4）

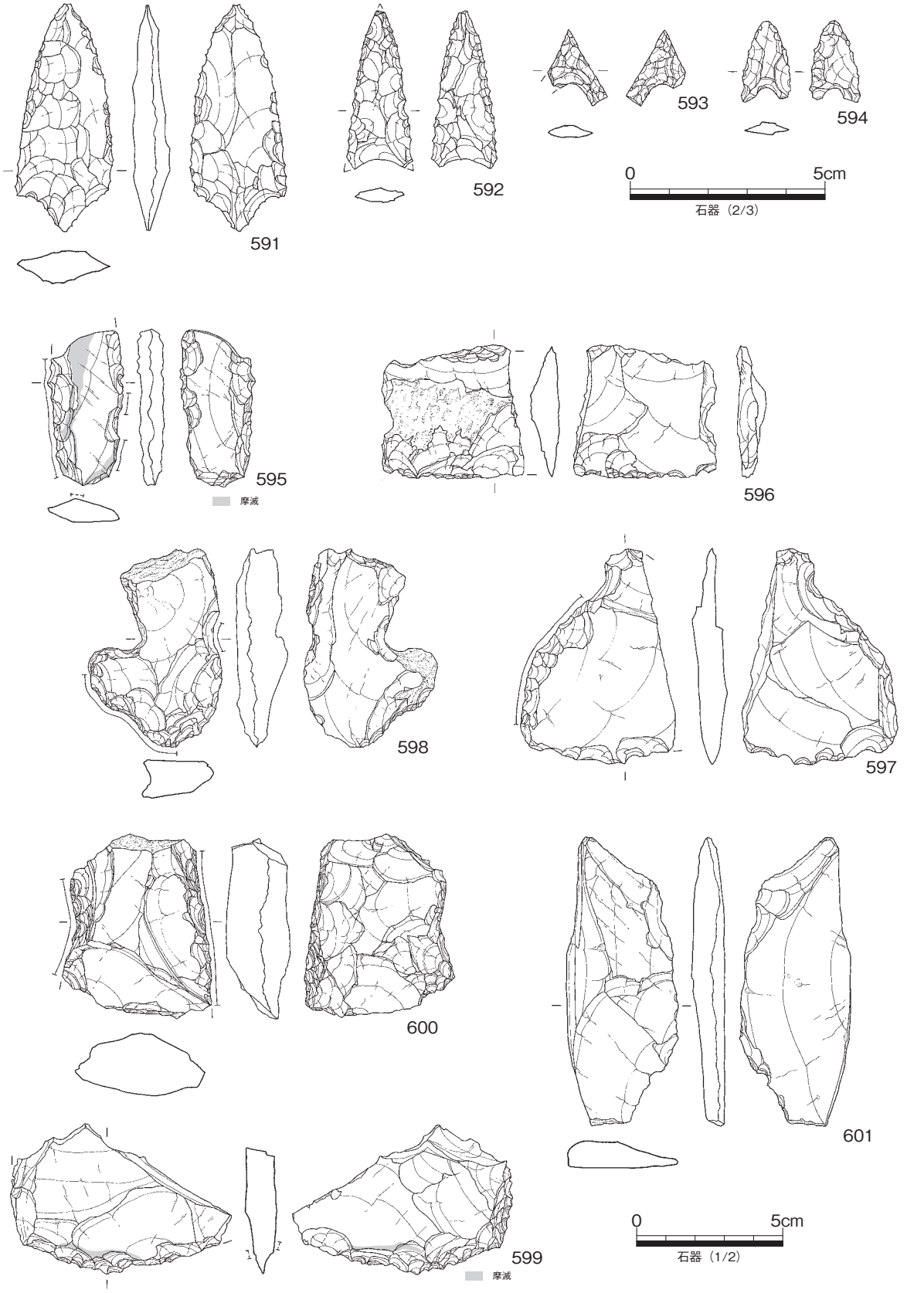






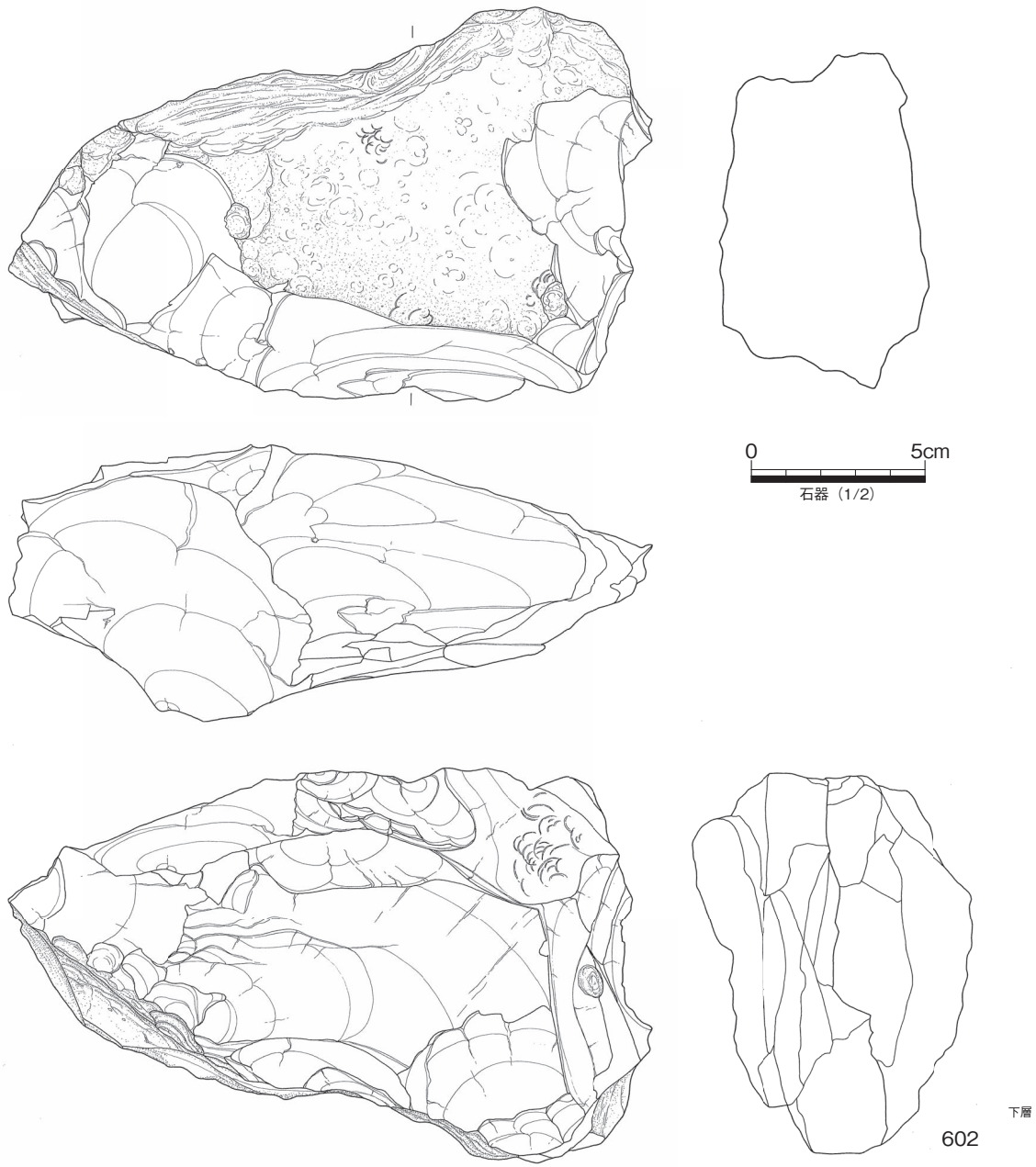
495,502,504,506,510, 516,518 ～ 520,525, 531,534,538,539,546, 549,551,556,560,566, 576,583	上層
517,586	上 層(南壁 54 層)
543	上 層(南壁 55 層)
547	上 層(南壁 49 層)
580	上層 (南壁 49・54 層)
524,526,529,577,581	上・中層
527	上・中層 (南壁 48・51 層)
530	上・中層 (南壁 52 層)
553	上 ・ 中(南 壁74 層)
555	上・中層 (南壁 72 層)
557	上・中層 (南壁 54・70 層)
567	上・中層 (南壁 51 層)
578	上・中層 (南壁 51・54・68 層)
579	上・中・下層 (南壁 51・70 層)
589	上・中層 (南壁 54・72 層)
496,500,503,505,507, 511 ～ 514,528,536, 541,545,552,554,562, 564,569,574,585,587	中層
533,540,561,563,588, 590	中 層(南壁 51 層)
572	中層 (南壁 52・68・72 層)
570	中層 (南壁 52・74 層)
521,537,575	中 層(南壁 52 層)
523	中 層(南壁 68 層)
550	中層 (南壁 68・69 層)
548	中 層(南 壁69 層)
584	中層 (南壁 70・72 層)
532,558,559,565,573	中層 (南壁 70 層)
497,499,508,509	中層 (南壁 72 層)
522,535	中 層(南 壁73 層)
515,544,582	中 層(南 壁74 層)
501,571	中・下層
498	下 層(南 壁53 層)

第 71 図　SR602 出土遺物（5）

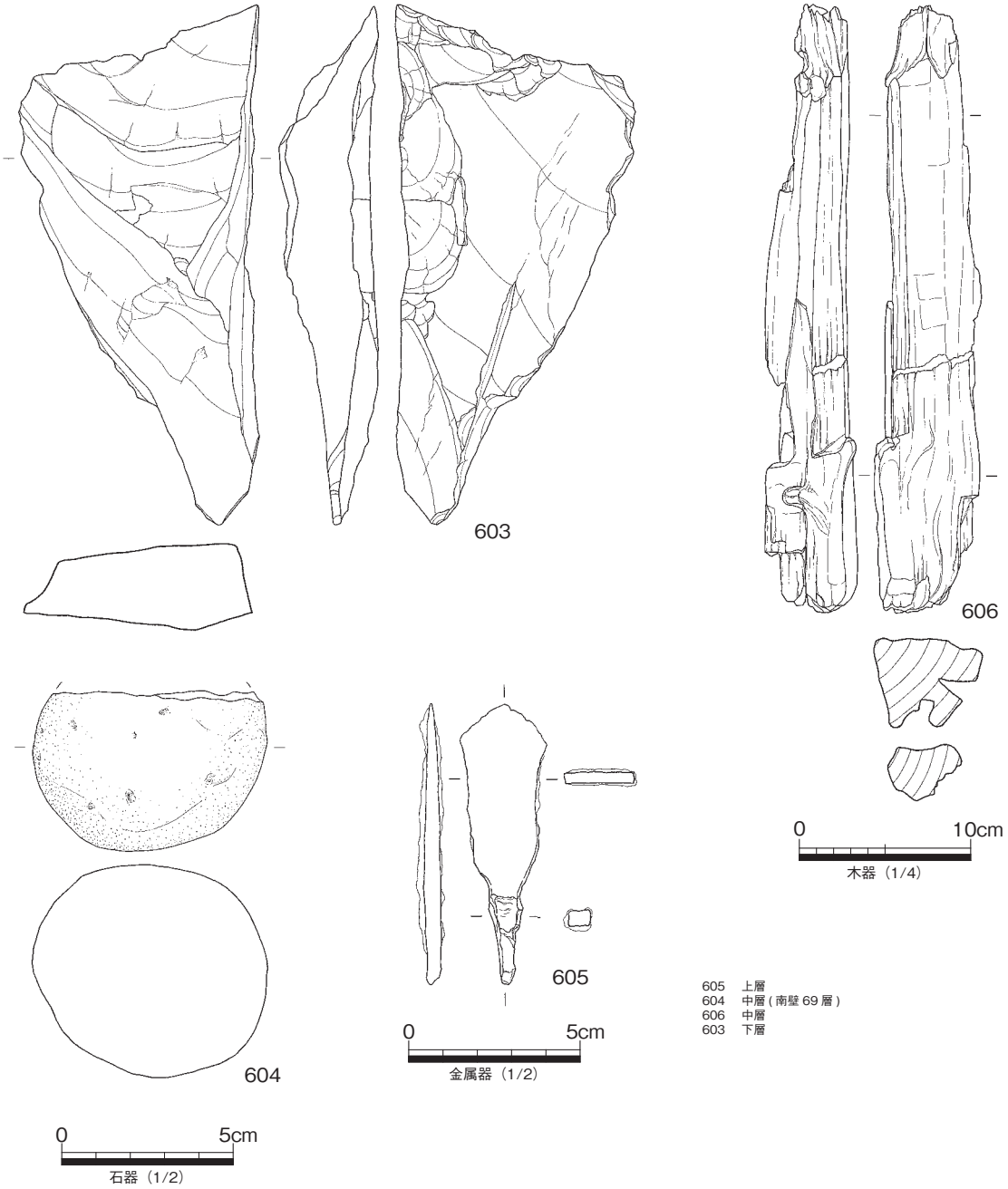


594,597	中層
600	中 層(南 壁69 層)
591,593,595,596,599,601	下層
598	下層 (南壁 64･65 層)

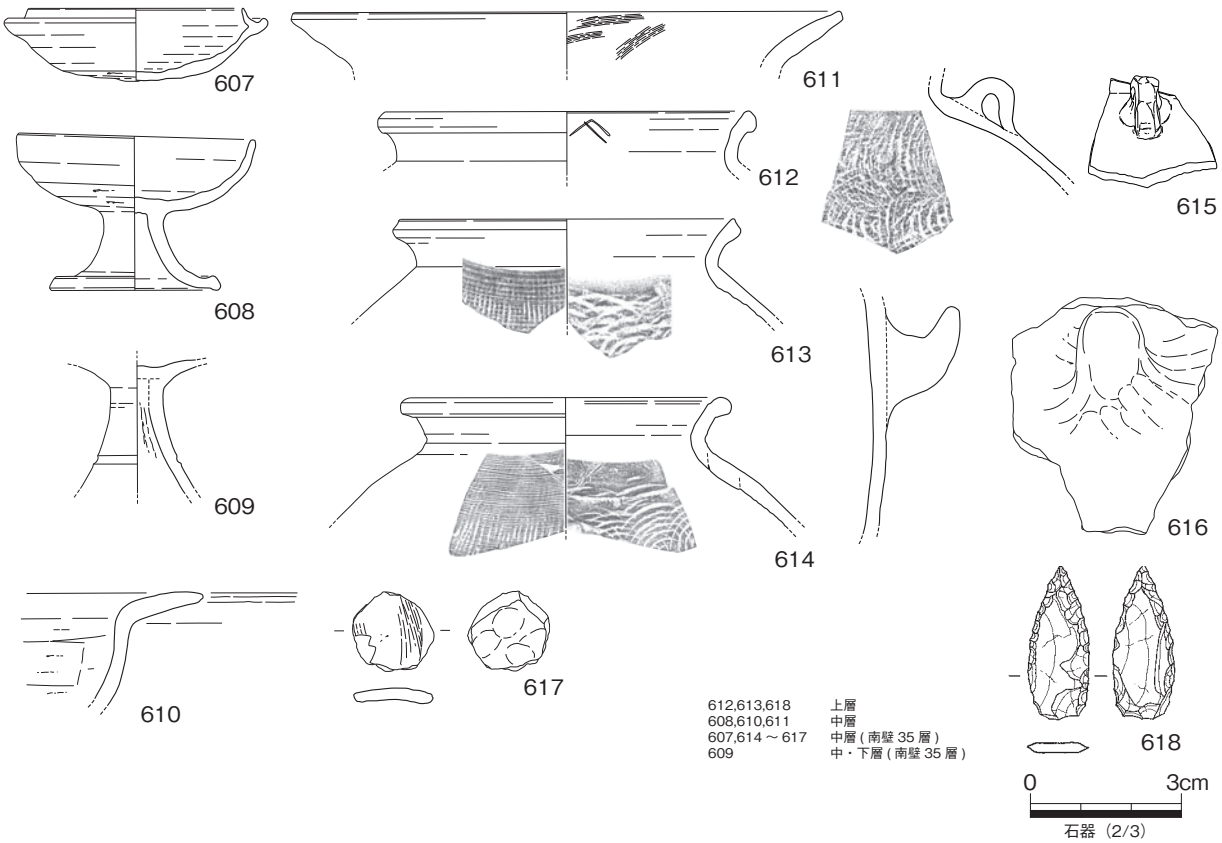
第 72 図　SR602 出土遺物（6）



第 73 図　SR602 出土遺物（7）



第 74 図　SR602 出土遺物（8）



第75図　SR603出土遺物

SR603（第64・75図）

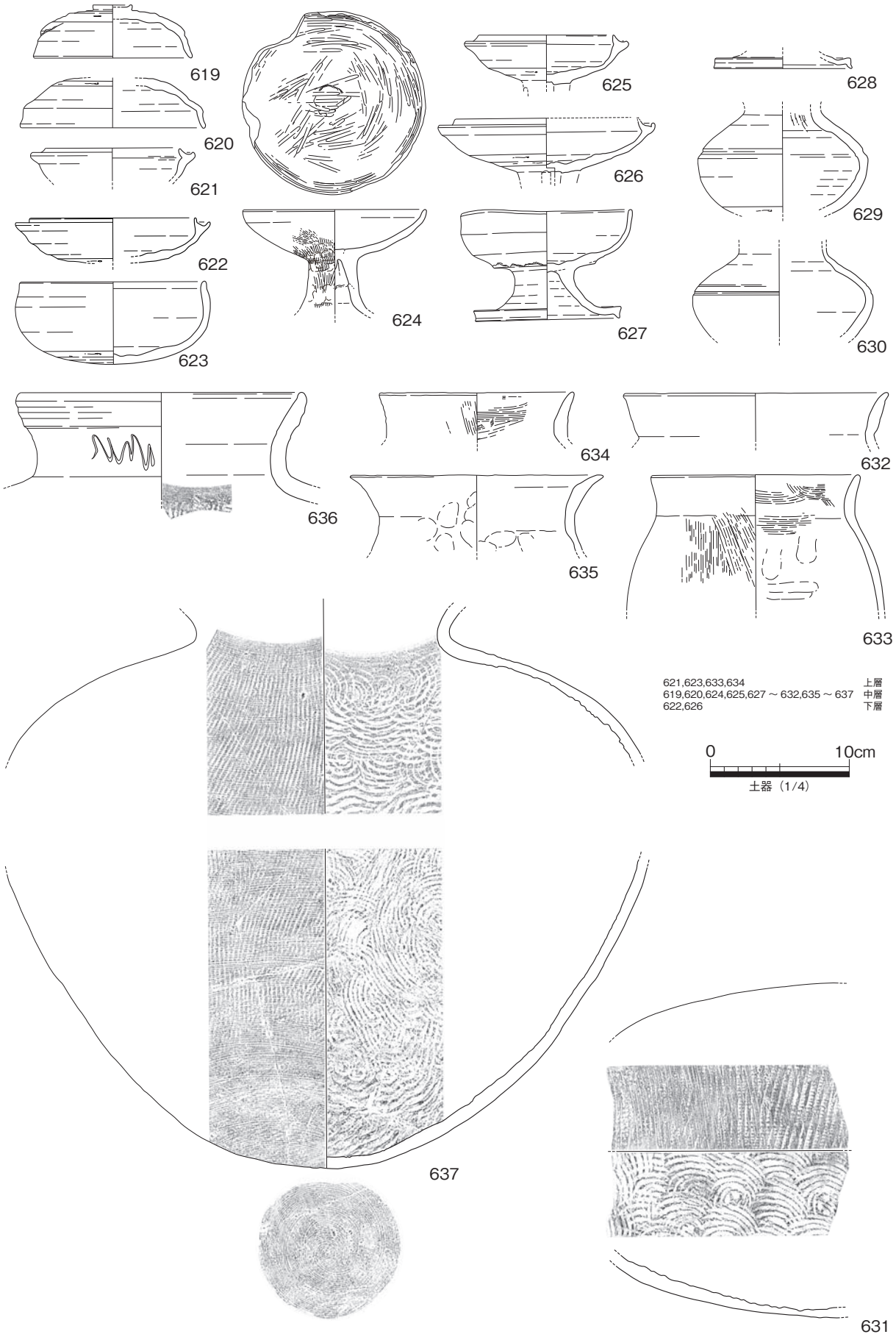
Ⅵ区中央に所在するSR602の南半部の東側で、SR602と重複する自然河川である。SR602との前後関係は南壁で見る限り不明瞭である。平面は不整形な形状で南から北西方向へ湾曲気味に蛇行するようである。また、SR602との境界は不明瞭である。断面の形状は南壁で見る限り東西二つの流路に分かれるようであるが、平面では不明瞭である。底面は不整形で凹凸が著しい。検出長約7.0 m、幅約5.8 m、深さ0.1～0.55 mを測る。埋土上位は黒色～灰色系粘土、下位は灰色系砂が主体を占める。

堆積層からは須恵器・土師器、石器等が出土した。607は6世紀末頃の須恵器杯身、608・609は7世紀前半の須恵器高杯である。610は土師器鍋の口縁部片、611は土師器甕の口縁部である。612は須恵器壺の口頸部にあたり、内面にはヘラ描で記号文を記している。613・614・615は須恵器甕で、615は耳付甕の肩部にあたる。616土師器甑の把手部、617は弥生土器転用の紡錘車の未製品である。618はサヌカイトの石鏃である。出土遺物からSR603は6世紀末～7世紀初頭頃に埋没した自然河川と考えられる。

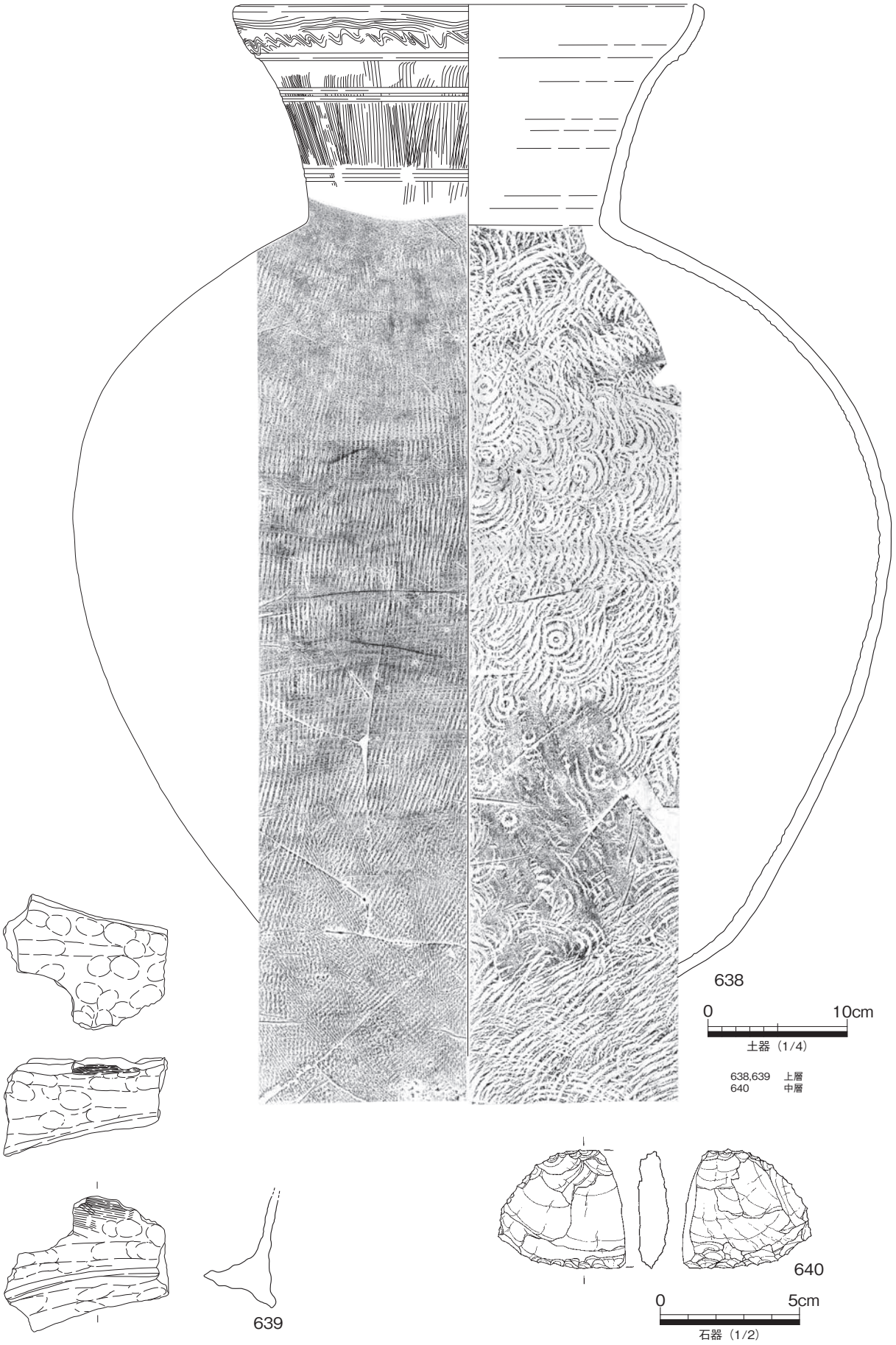
SR604（第64・76・77図）

Ⅵ区中央に所在するSR602の南半部の西側で、SR602と重複する自然河川である。SR602との前後関係は不明瞭である。底面は不整形で凹凸が著しい。検出長約6.0 m、幅約5.0 m、深さ約0.8 mを測る。

堆積層からは須恵器・土師器、石器等が出土した。619・620は須恵器杯蓋、619は天井部に摘まみの付くタイプである。621・622は須恵器杯身、623は須恵器の鉢である。624は土師器の高杯、625～628は須恵器の高杯で、625・626は脚部を欠く有蓋高杯である。629・630は須恵器の甕の体部、636・



第 76 図　SR604 出土遺物（1）



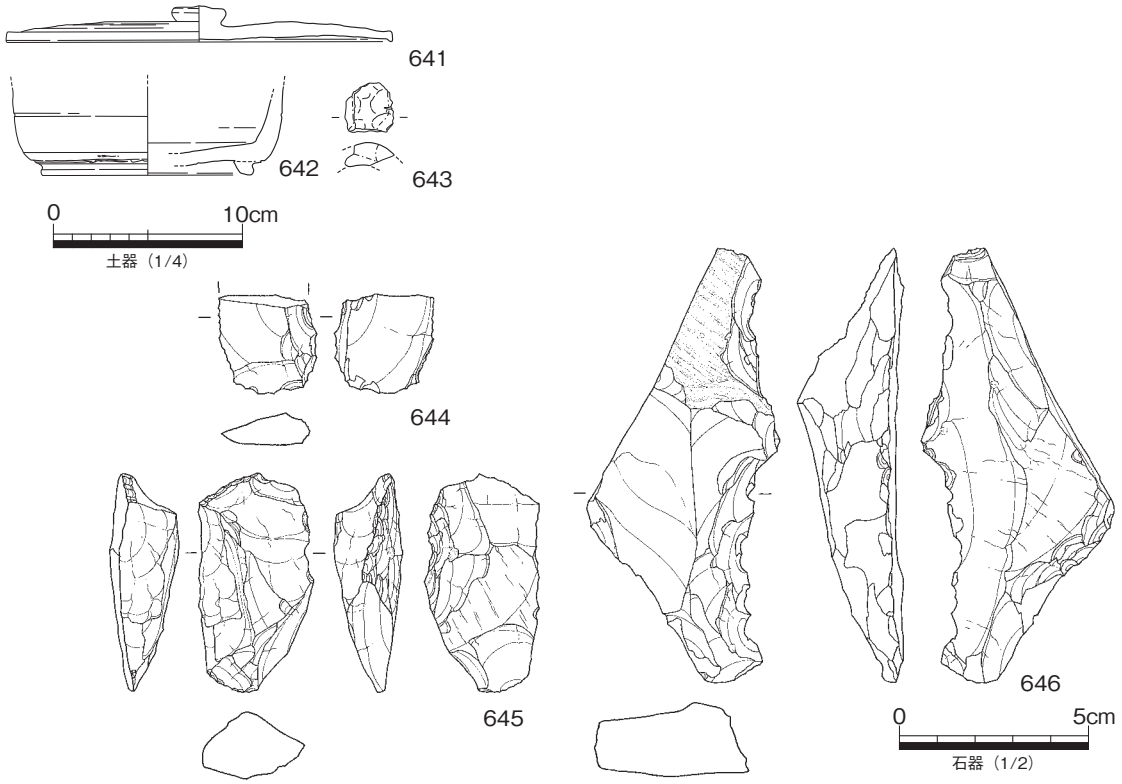
第 77 図　SR604 出土遺物（2）

637・638 は須恵器の甕である。636 は甕口頸部で、外面にはヘラ描で波状の記号文を施している。637 は口縁部と体部の一部を欠くが、比較的残りが良好な大甕である。638 は口縁部から底部まで揃っている比較的稀な大甕である。632 ～ 635 は土師器の甕の口縁部、631 は須恵器横瓶の体部片である。639 は土師器の竈片である。640 はサヌカイトの石庖丁に分類したが、削器とも考えられる。出土遺物から SR604 は 6 世紀後半～ 7 世紀初頭頃に埋没した自然河川と考えられる。

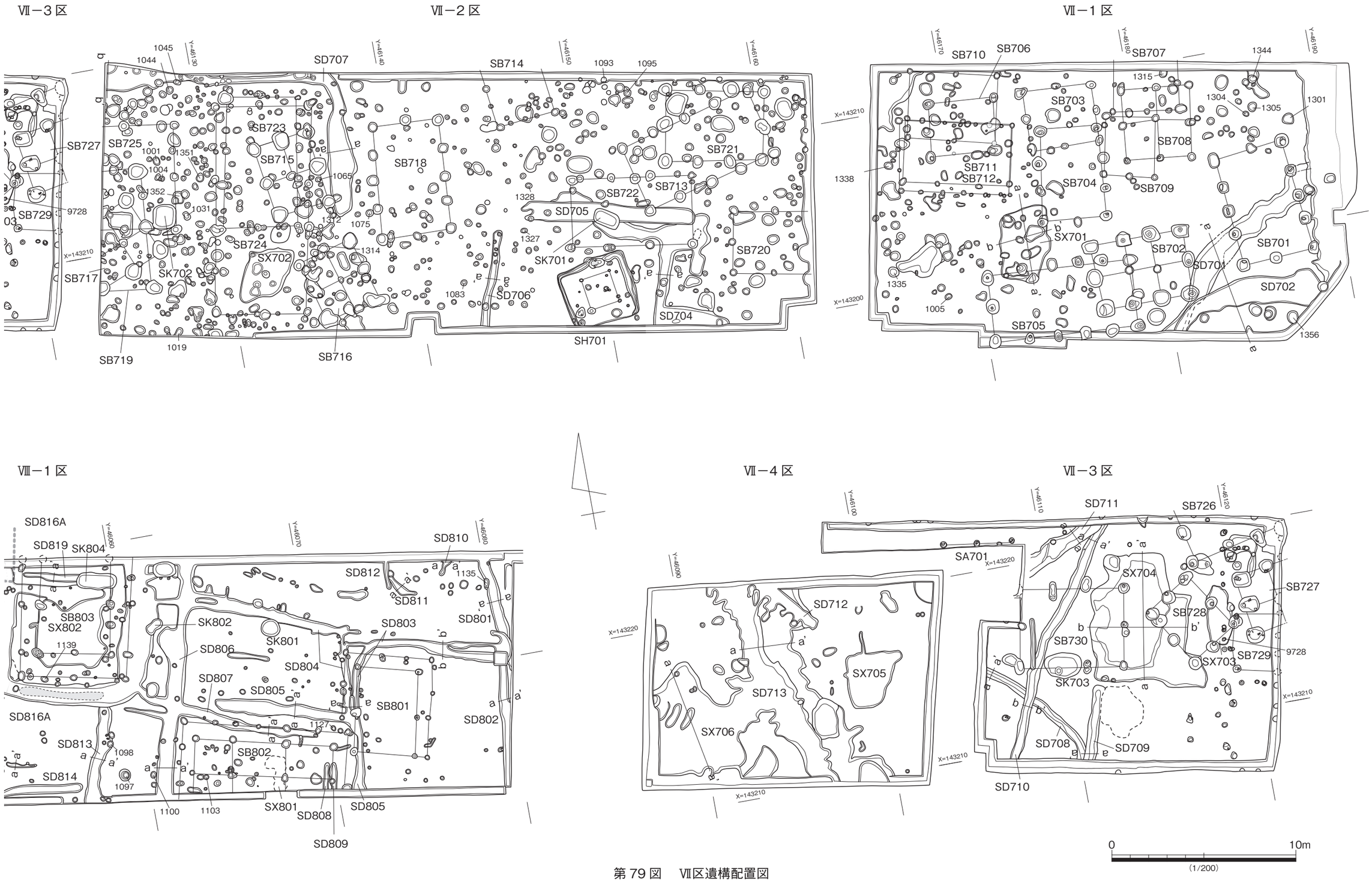
（6）包含層出土遺物

Ⅵ区の主要な遺構・遺物については先に報告したが、次に包含層出土遺物を報告する。なお、包含層出土遺物中には機械掘削・遺構検出・側溝掘削時等に出土した、個別の遺構に区分できない遺物までを含めている。

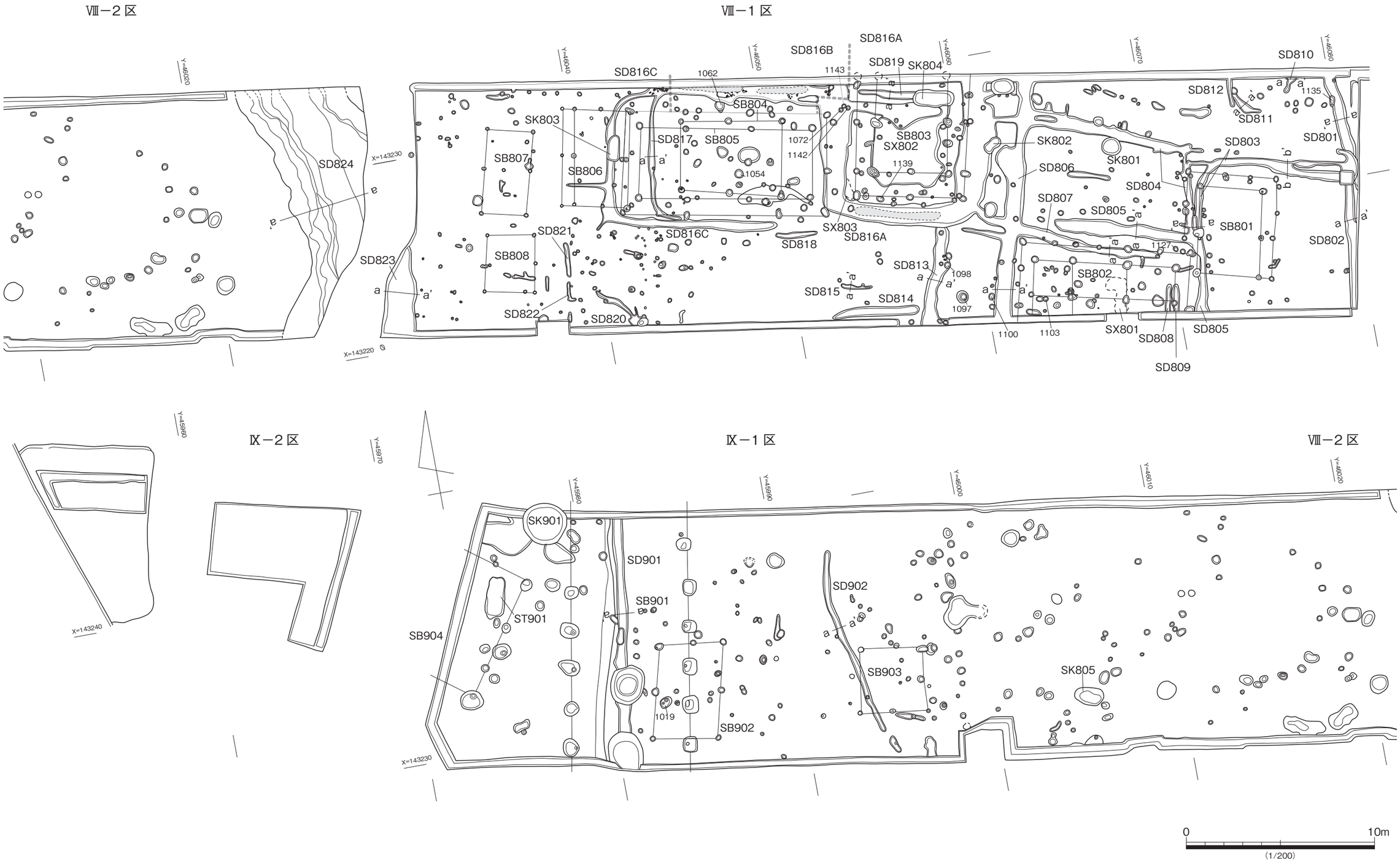
641 は 8 世紀頃の須恵器杯蓋、642 は口縁部を欠く 8 世紀中頃の須恵器杯身である。643 は鞴の羽口片である。表裏面とも比熱を顕著に受けている。644 はサヌカイトの横長状の剥片である。645 はかなり小型ではあるが、サヌカイトの交互剥離の横長剥片石核である。646 は大型の板状剥片を素材に用い、打面調整を顕著に施した横長剥片石核である。なお、646 は形状から旧石器の可能性がある。



第 78 図　Ⅵ区包含層出土遺物



第 79 図　Ⅶ区遺構配置図



第 80 図　Ⅷ・Ⅸ区遺構配置図

第５節　Ⅶ～Ⅸ区の調査

１.はじめに

Ⅶ・Ⅷ・Ⅸ区は調査区西半部の東部に位置し、延長約 241 ｍを測る調査区である。Ⅶ区～Ⅸ区は平坦な微高地が続き、微高地上には７世紀前半、12 ～ 13 世紀、近世以降等の集落跡が展開している。竪穴建物跡１棟、掘立柱建物跡 42 棟を確認した。大まかな傾向としては古代の建物が約６割、12 ～ 13 世紀の建物が約４割を占める。分布傾向としては古代の建物はⅦ－１～３区、Ⅸ－１区、12 ～ 13 世紀代の建物はⅦ－２、Ⅷ－１区に集中する傾向がある。

Ⅸ－１区では梁間６ｍ、桁行 13 ｍ以上、面積 78㎡以上の条里方向に向く南北棟 SB901 を確認している。遺物が極めて少量のため時期の判断に問題を残すが、検出状況から推定して古代の建物跡と考えられる。周辺に同時代の建物等の遺構が確認できないため、具体的な性格については不明瞭な点が多いが、先述した河川出土の墨書土器、土馬、鉄鏃、建築部材等を含め古代の兀塚遺跡の性格を推定するうえで極めて示唆的ある。

Ⅸ区は調査区西端部に位置し「古川」東岸の氾濫源にあたる区域である。そのため、Ⅷ区から延びる微高地は途切れる。遺構・遺物共に検出できなかったためトレンチで調査を終えた。

２.Ⅶ－１区の調査

（１）掘立柱建物跡

SB701（第 81 図）

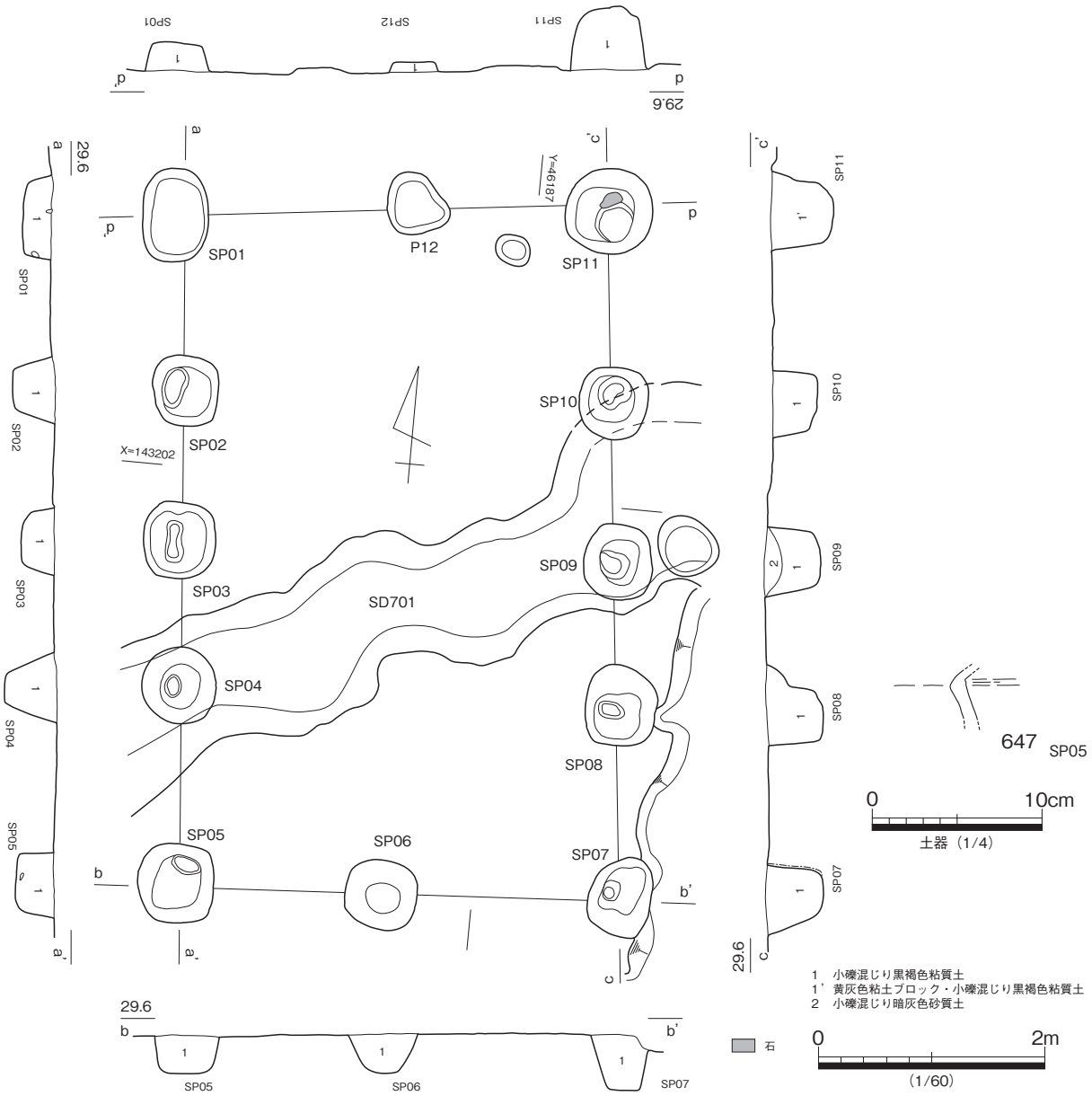
Ⅶ－１区東端部で検出した梁間２間、桁行４間の南北棟の建物である。建物は SD701 と重複し、切り合い関係から SB701 は SD701 より後出することが解る。２間（3.9 ｍ）× ４間（6.1 ｍ）、面積は 23.79㎡、主軸方位 N6.5° W を測る。柱間は梁間 1.65 ～ 2.1 ｍ、桁行 1.3 ～ 1.8 ｍを測る。柱穴掘方は不整円形～不整方形を呈し、径 0.55 ～ 0.7 ｍ、深さ 0.1 ～ 0.6 ｍを測る。柱穴埋土は小礫混じりの黒褐色粘質土が主体を占める。

柱穴からは土師器細片・須恵器片等が少量出土した。647 は SP05 から出土した土師器甕の肩部片である。SB701 の出土遺物中には７世紀代の須恵器杯が含まれており、７世紀以降の建物の可能性が高い。

SB702（第 82 図）

Ⅶ－１区中央の南半部で検出した梁間２間、桁行３間の東西棟の総柱建物である。建物は SB705 と重複し、柱穴の切り合い関係から SB702 は SB705 より先行する可能性がある。２間（3.6 ｍ）× ３間（5.1 ｍ）、面積は 18.36㎡、主軸方位 0° を測る。柱間は梁間 1.7 ～ 1.85 ｍ、桁行 1.4 ～ 1.9 ｍを測る。柱穴掘方は不整円形を呈し、側柱の柱穴径 0.7 ～ 1.0 ｍ、深さ約 0.45 ｍを測る。束柱の柱穴径約 0.45 ｍ、深さ 0.3 ～ 0.4 ｍを測る。柱穴埋土は黄色粘土ブロック・小礫混じり黒褐色粘質土からなる。

柱穴からは土師器・須恵器等が出土している。648・650・651 は須恵器である。648 は SP03 から出土した杯の口縁部片である。650 は SP06 から出土した７世紀初頭頃の甕の口縁部である。651 は SP02 から出土した壺の口縁部である。外面には櫛描波状文を顕著に施している。649・652・653 は土師器である。649 は SP08 から出土した高杯の脚部、652・653 は SP03、04・10 から出土した甕口縁部である。654 は SP01 から出土した瓦器椀の口縁部で混入品であろう。出土遺物から SB702 は７世紀初頭以降の



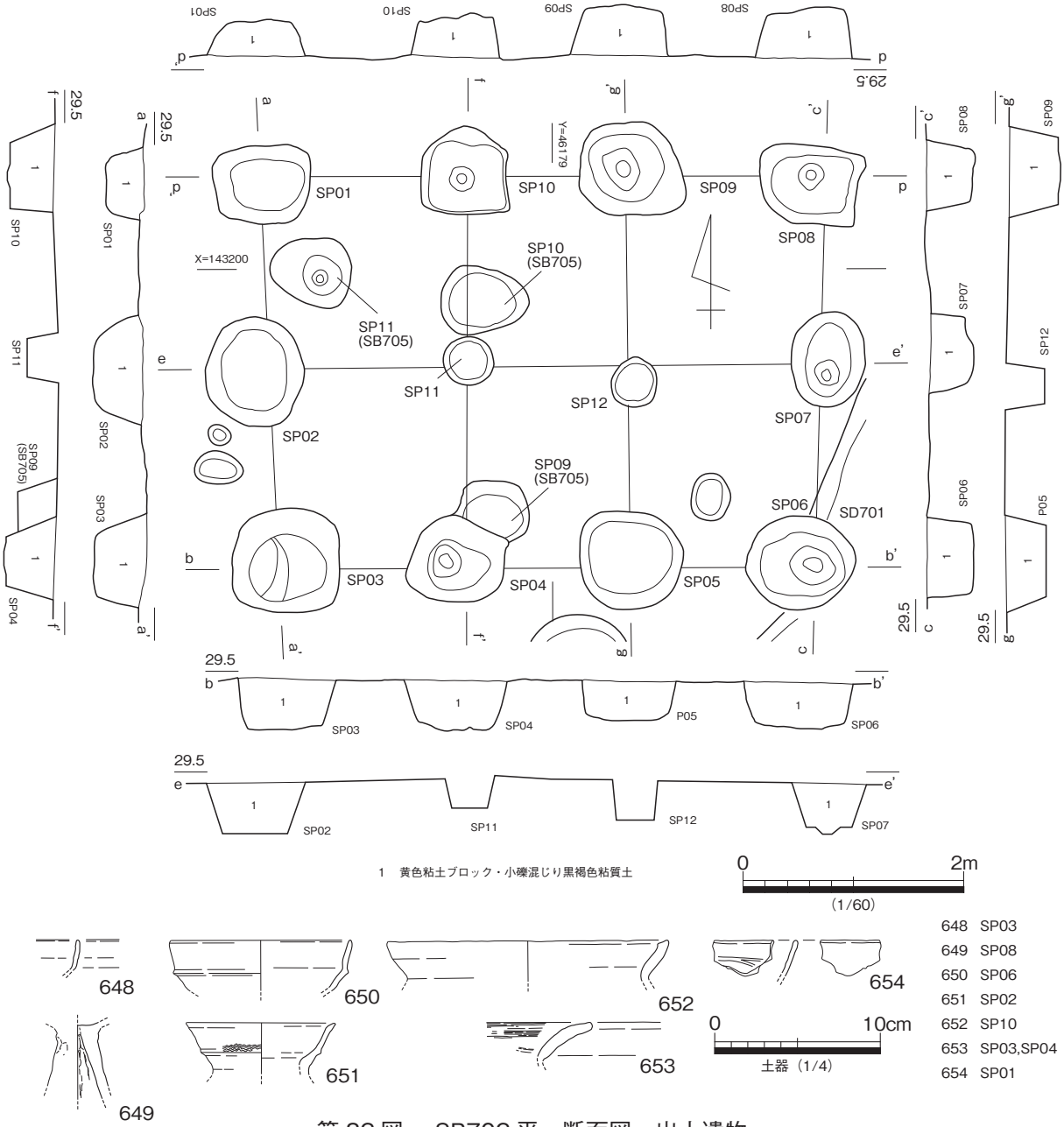
第 81 図　SB701 平・断面図，出土遺物

建物と考えられる。

SB703（第 83 図）

Ⅶ－１区中央の北半部で検出した梁間２間、桁行２間の東西棟の建物である。建物は SB704 と重複するが柱穴が切り合わない為､建物間の詳細な前後関係は不明である。２間（3.35 m）×２間（3.95 m）、面積は 12.35㎡､主軸方位 N85.0° W（5.0° E）を測る。柱間は梁間 1.45 ～ 1.8 m､桁行 1.8 ～ 2.0 mを測る。柱穴掘方は不整円形～不整楕円形を呈し、径 0.3 ～ 0.5 m、深さ 0.2 ～ 0.4 mを測る。埋土は小礫混じり暗灰褐色粘質土の単層である。

柱穴からは古代の土師器・須恵器片等が少量出土した。出土遺物が少ないため、SB703 の詳細な時期判断には無理があるが、検出状況や出土遺物から古代の建物と考えられる。

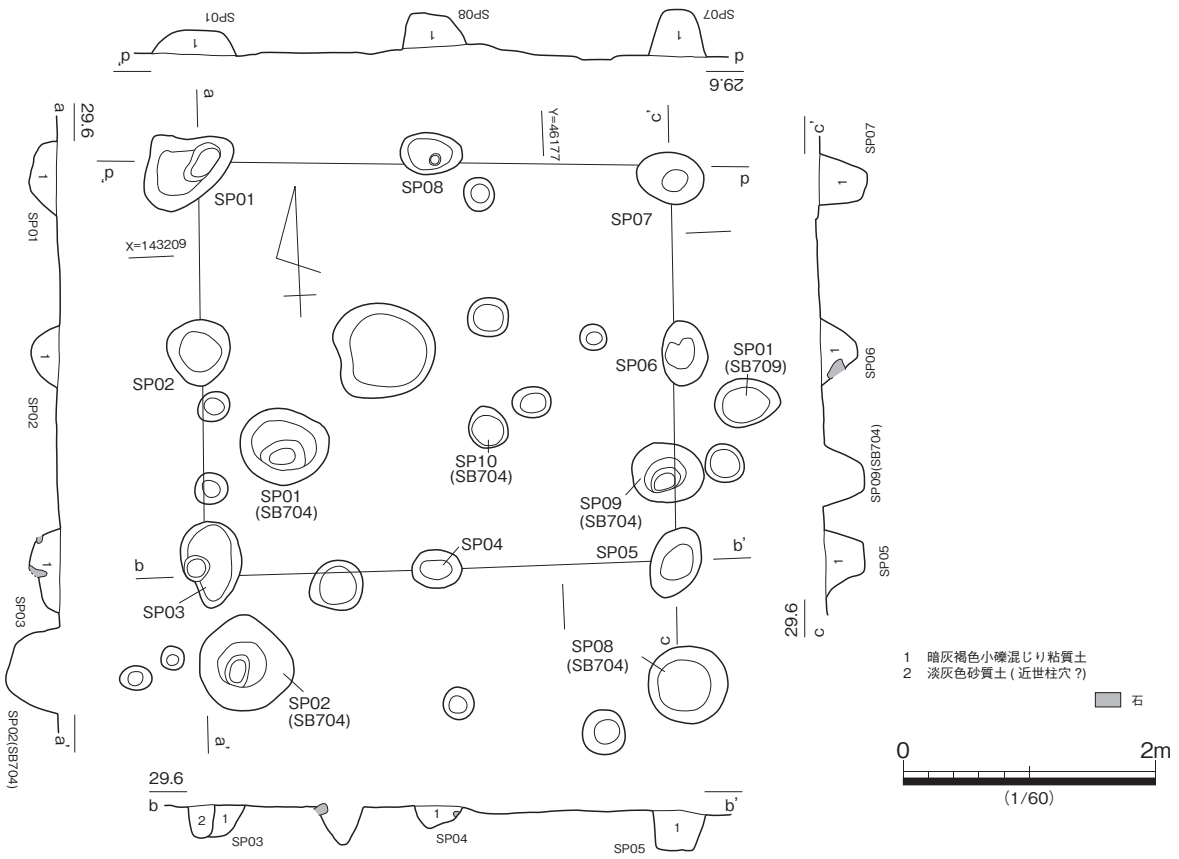


第 82 図　SB702 平・断面図，出土遺物

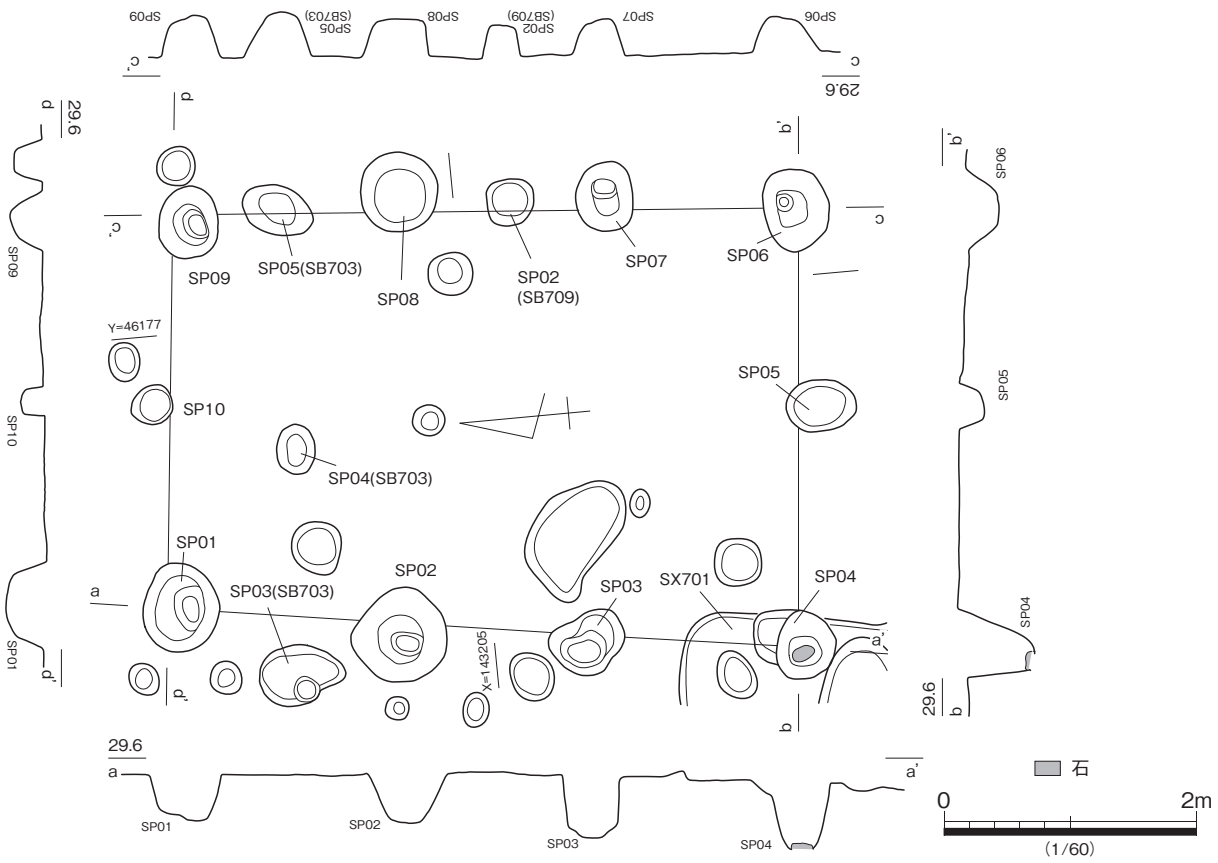
SB704（第 84 図）

Ⅶ－１区中央で検出した梁間２間、桁行３間の南北棟の建物である。建物は SB703 と重複するが柱穴が切り合わない為、建物間の詳細な前後関係は不明である。２間（3.5 m）×３間（5.05 m）、面積は 16.67㎡、主軸方位 N5.0° E を測る。柱間は梁間 1.5 ～ 1.9 m、桁行 1.5 ～ 1.9 mを測る。柱穴掘方は不整円形を呈し、径 0.55 ～ 0.7 m、深さ 0.2 ～ 0.5 mを測る。南西隅の SP04 では根石を検出した。

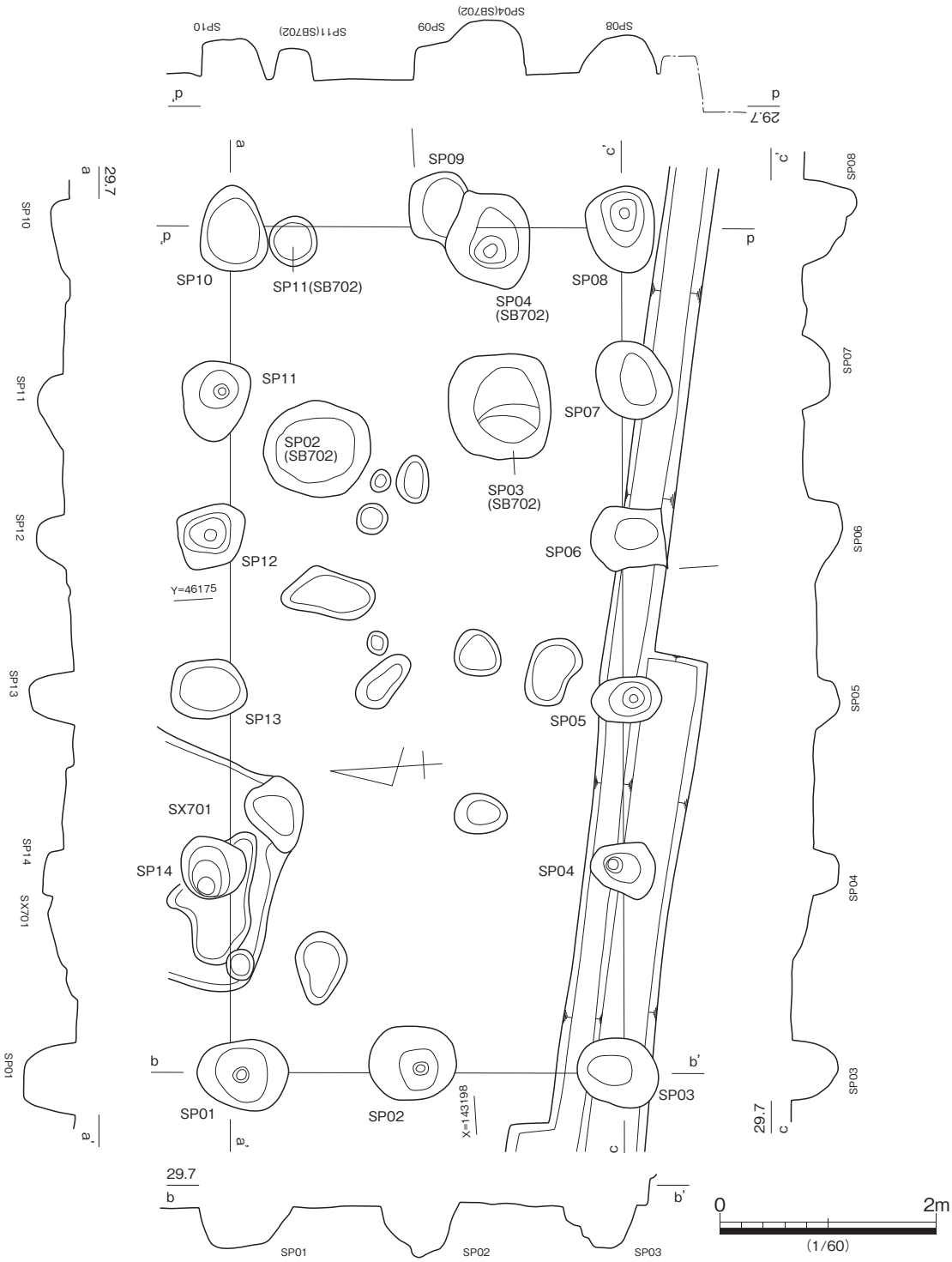
柱穴からは古代の土師器杯・須恵器杯・瑕等の細片が少量出土したが、図化できる遺物は抽出できなかった。遺物中には特に７世紀頃の遺物が目に付くことから、この建物は７世紀以降の建物の可能性が高い。



第 83 図　SB703 平・断面図



第 84 図　SB704 平・断面図

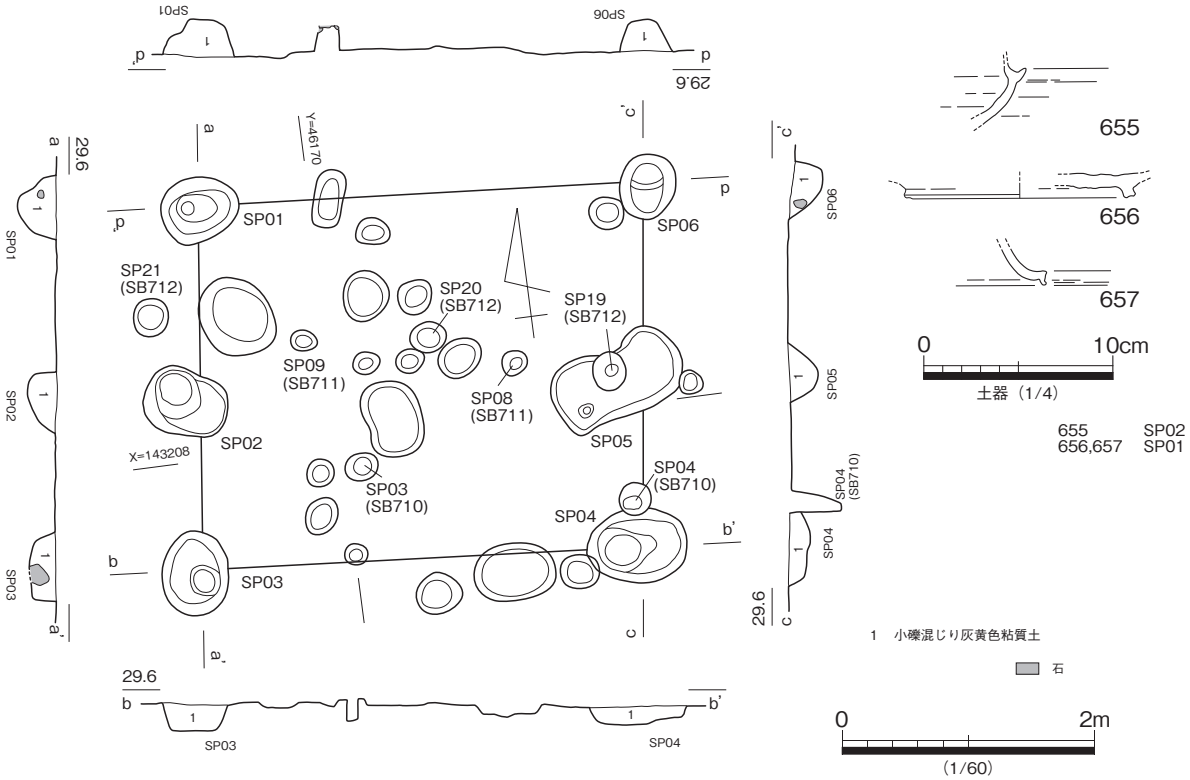


第 85 図　SB705 平・断面図

SB705（第 85 図）

Ⅶ－１区中央の南半部で検出した梁間２間、桁行５間の東西棟の建物である。建物は SB702 と重複し、柱穴の切り合い関係から SB705 は SB702 より後出する可能性がある。２間（3.65 m）× 5 間（7.9 m）、面積は 28.84㎡、主軸方位 N86.5° W（3.5° E）を測る。柱間は梁間 1.6 ～ 2.05 m、桁行 1.3 ～ 1.9 mを測る。柱穴掘方は不整円形～不整楕円形を呈し、径 0.4 ～ 0.8 m、深さ 0.2 ～ 0.5 mを測る。

柱穴からは弥生土器の細片や土師器片等が少量出土している。出土遺物が少ないため、SB705 の詳細



第 86 図　SB706 平・断面図，出土遺物

な時期判断には無理があるが、検出状況や出土遺物から古代の建物の可能性が高い。

SB706（第 86 図）

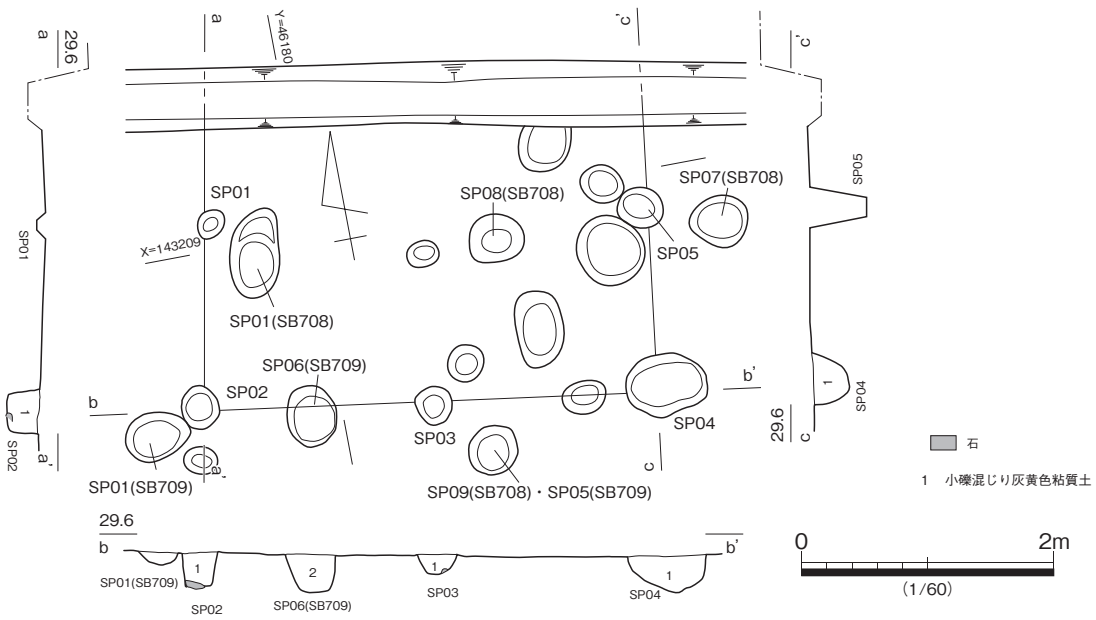
Ⅶ－１区西半部北寄りで検出した梁間２間、桁行１間の東西棟の建物である。建物は SB710・711・712 と重複し、切り合い関係から SB706 はこれらの建物より先行する。２間（2.9 m）×１間（3.35 m）、面積は 10.3㎡、主軸方位 N86.5° W（3.5° E）を測る。柱間は梁間 1.3 ～ 1.6 m、桁行 3.5 ～ 3.55 mを測る。柱穴掘方は不整円形を呈し、径 0.5 ～ 0.8 m、深さ 0.15 ～ 0.3 mを測る。柱穴埋土は小礫混じり灰黄色粘質土の単層である。

柱穴からは須恵器片が少量出土した。655 は SP02 から出土した７世紀初頭頃の須恵器杯身、656 は SP01 から出土した８世紀前半以降の須恵器高台付杯の底部、657 は SP01 から出土した７世紀前半頃の須恵器高杯の脚端部片である。出土遺物から SB706 は８世紀前半以降の建物の可能性が高い。

SB707（第 87 図）

Ⅶ－１区中央の北半部の北壁際で検出したため、北半部は調査区から外れ南半部の約 1/2 を検出した。梁間１間以上、桁行２間の東西棟の建物である。建物は SB708・709 と重複するが柱穴が切り合わない為、建物間の詳細な前後関係は不明である。１間（2.2 m）以上×２間（3.6 m）、面積は 7.92㎡以上、主軸方位 N8.5° E を測る。柱間は梁間 1.4 ～ 1.5 m、桁行 1.8 mを測る。柱穴掘方は円形～不整円形を呈し、径 0.2 ～ 0.7 m、深さ 0.15 ～ 0.5 mを測る。柱穴埋土は小礫混じり灰黄色粘質土の単層である。

柱穴からは土師器片が数点出土した。出土遺物が少ないため、SB707 の詳細な時期判断には無理があるが、検出状況などから古代の建物の可能性がある。



第 87 図　SB707 平・断面図

SB708（第 88 図）

Ⅶ－１区中央の北半部で検出した梁間２間、桁行２間の南北棟の総柱建物である。建物は SB707・709 と重複するが柱穴が切り合わない為、建物間の詳細な前後関係は不明である。２間（3.35 m）×２間（3.75 m）、面積は 13.87㎡、主軸方位 N7.5° E を測る。柱間は梁間 1.65 ～ 1.9 m、桁行 1.9 ～ 2.0 mを測る。柱穴掘方は不整円形～不整楕円形を呈し、径 0.3 ～ 0.7 m、深さ 0.15 ～ 0.5 mを測る。

柱穴からは土師器や古代の須恵器片が少量出土した。出土遺物が少ないため、SB708 の詳細な時期判断には無理があるが、検出状況などから古代の建物の可能性がある。

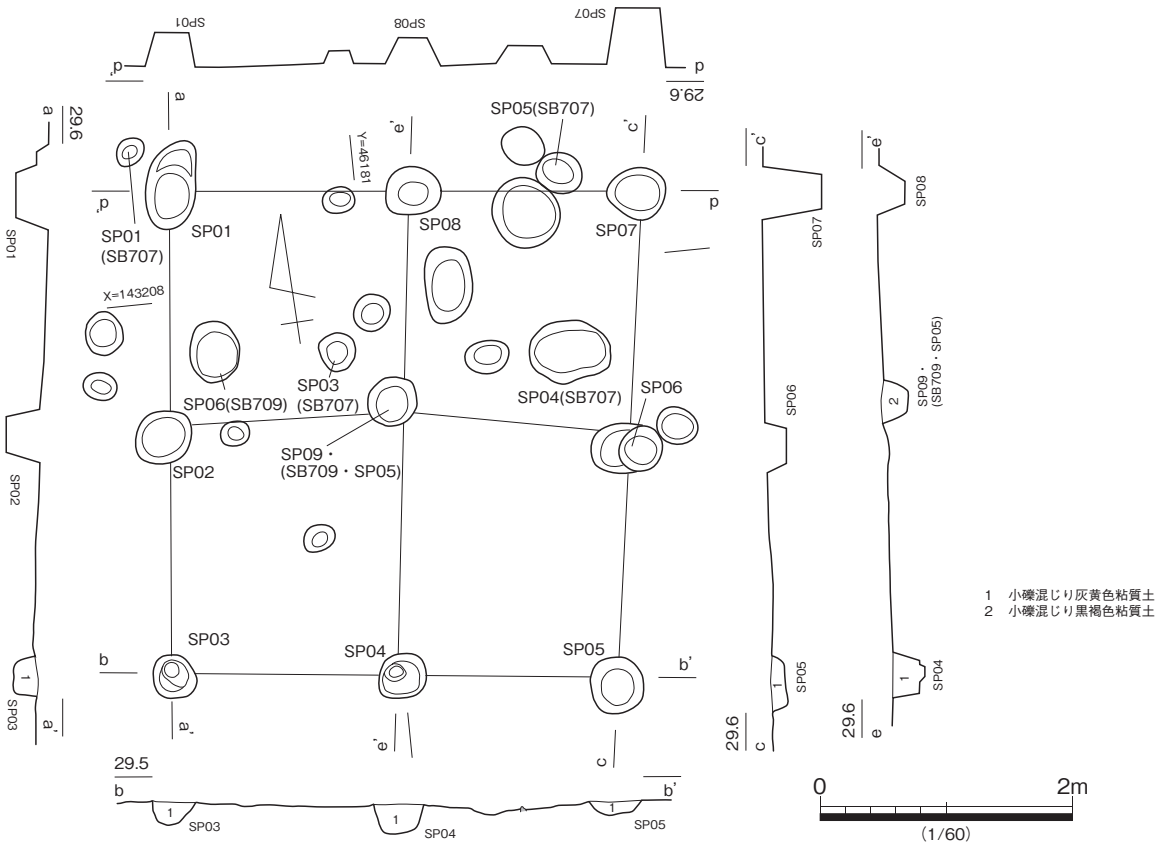
SB709（第 89 図）

Ⅶ－１区中央で検出した梁間２間、桁行１間の南北棟の建物である。北辺梁間の１柱穴を欠く。建物は SB708・707・703・704 と重複するが柱穴が切り合わない為、建物間の詳細な前後関係は不明である。２間（2.75 m）×１間（3.3 m）、面積は 9.08㎡、主軸方位 N11.5° E を測る。柱間は梁間 1.3 ～ 1.4 m、桁行 3.2 ～ 3.3 mを測る。柱穴掘方は円形～不整円形を呈し、径 0.35 ～ 0.5 m、深さ 0.15 ～ 0.2 mを測る。柱穴埋土は小礫混じり黒褐色粘質土の単層である。

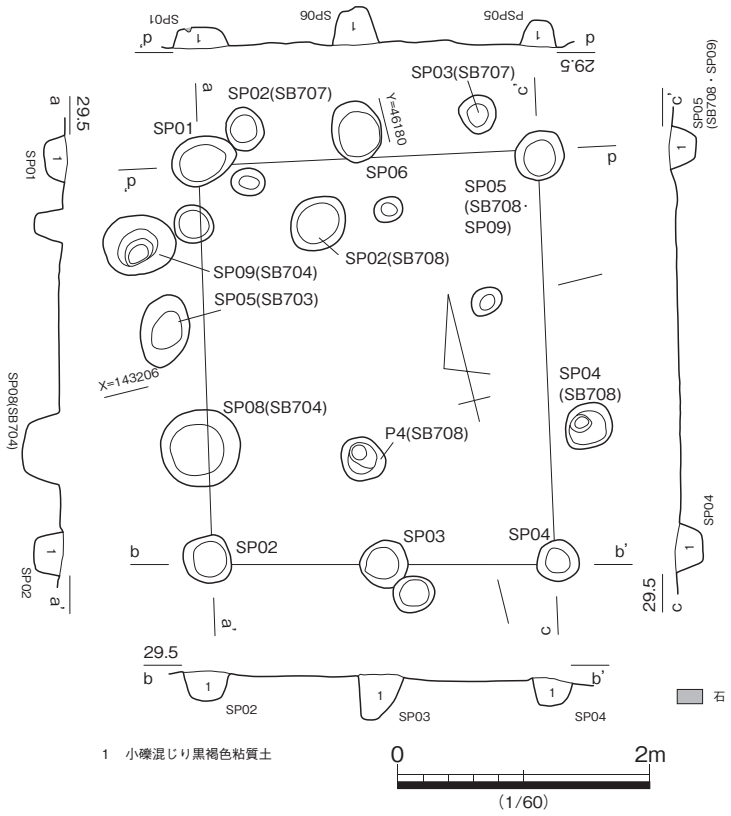
柱穴からは土師器片が数点出土した。出土遺物が少ないため、SB709 の詳細な時期判断には無理がある。

SB710（第 90 図）

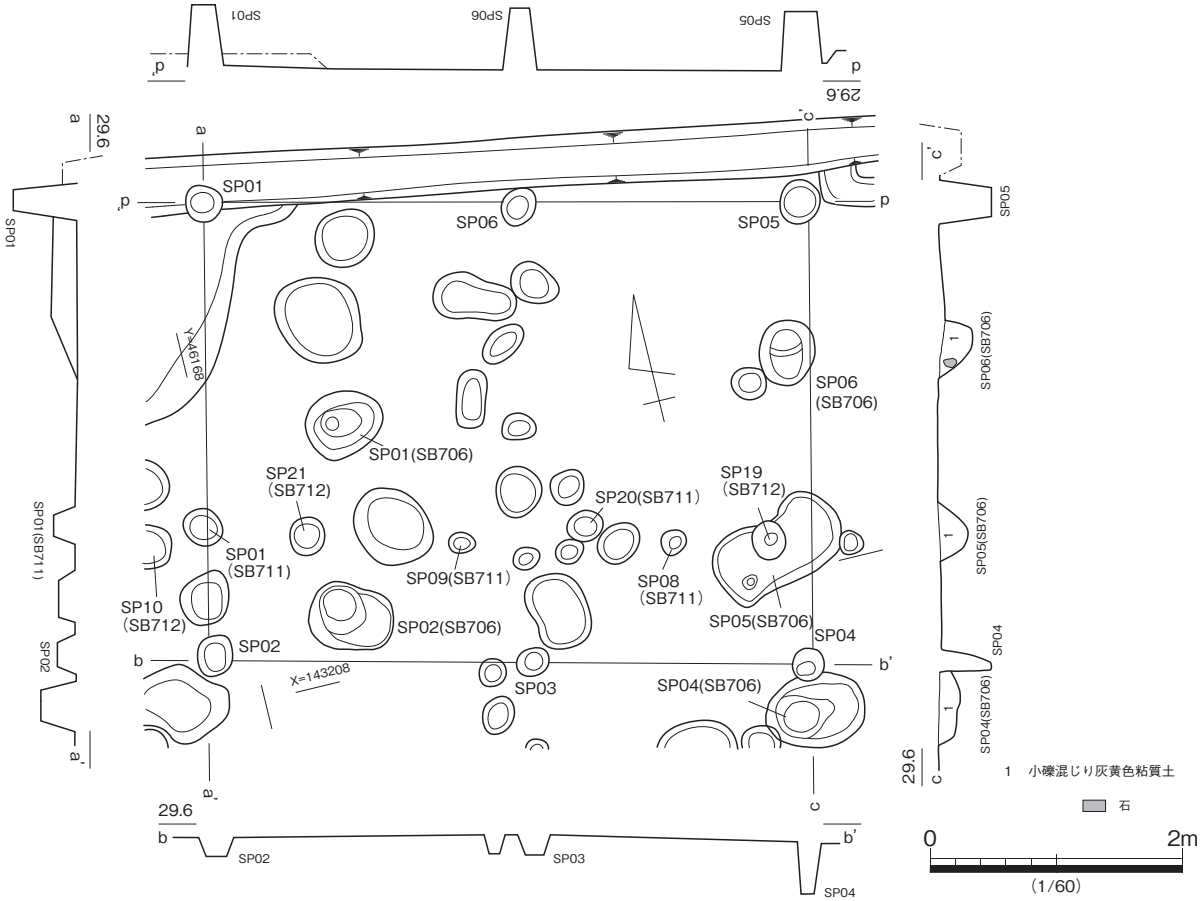
Ⅶ－１区西半部北壁際で検出した梁間１間、桁行２間の東西棟の建物である。建物は SB706・711・712 と重複し、切り合い関係から SB706 より後出することは確かであるが、SB711・712 とは柱穴が切り合わない為不明である。１間（3.9 m）×２間（4.8 m）、面積は 18.72㎡、主軸方位 N76.0° W（14.0° E）を測る。柱間は梁間 3.65 ～ 3.7 m、桁行 2.2 ～ 2.6 mを測る。柱穴掘方は円形を呈し、径 0.15 ～ 0.3 m、深さ 0.2 ～ 0.4 mを測る。柱穴埋土は小礫混じり灰黄色粘質土の単層である。



第 88 図　SB708 平・断面図



第 89 図　SB709 平・断面図



第 90 図　SB710 平・断面図

柱穴からは土師器・須恵器の細片が少量出土した。出土遺物が少ないため、SB710 の詳細な時期判断には無理があるが、検出状況から中世の建物と考えられる。

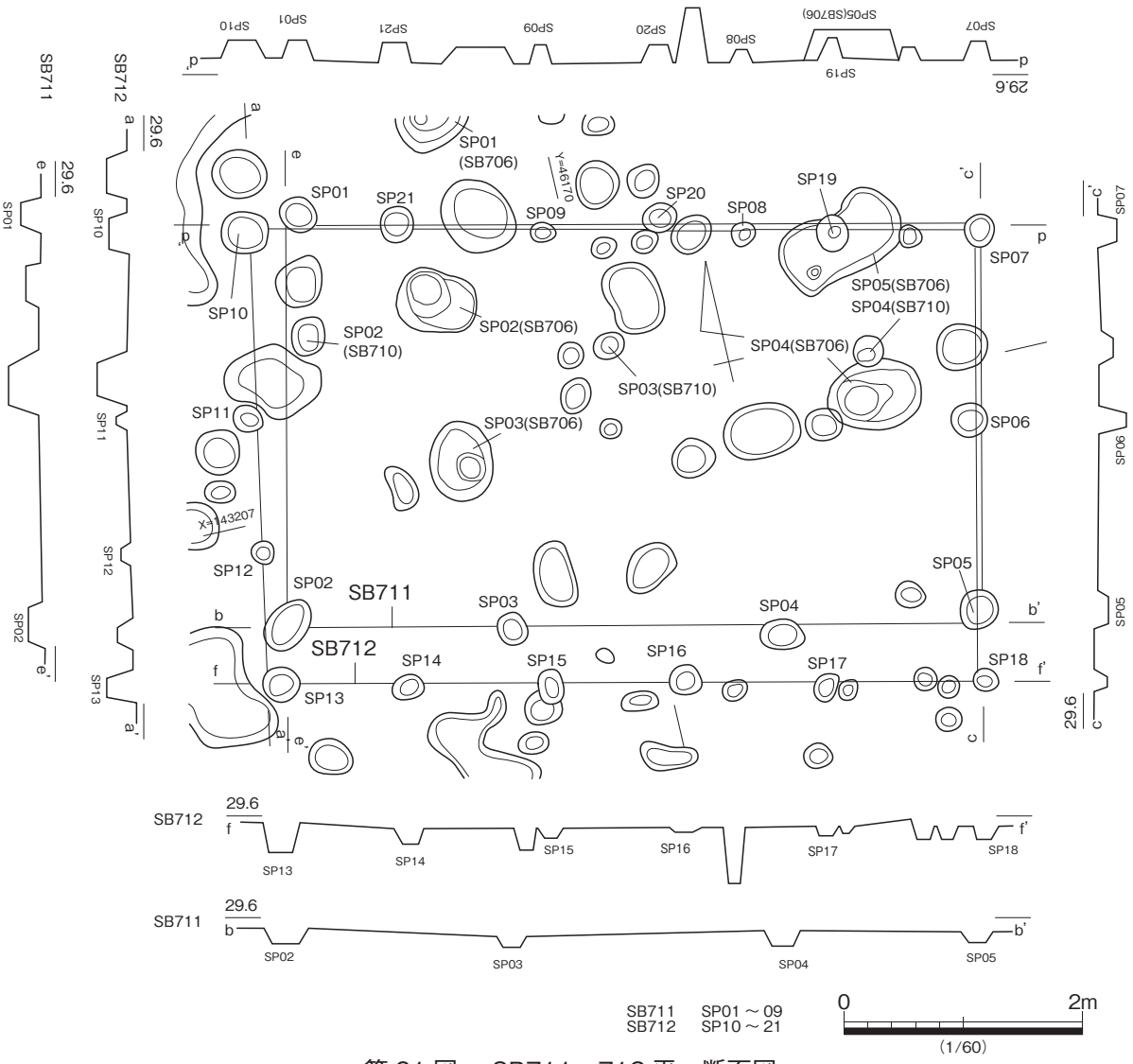
SB711（第 91 図）

Ⅶ－１区西端部で検出した梁間１間、桁行３間の東西棟の建物である。建物は SB706・710・712 と重複している。柱穴同士が切り合わない為､不明瞭な点が多いが SB706 より後出するようである。また、SB712 とは棟軸方向を合わせかなり隣接しており、SB711・712 は建替えの状況が現れている可能性が高い。１間（3.3 m）× 3 間（5.8 m）、面積は 19.14㎡、主軸方位 N76.0° W（14.0° E）を測る。柱間は梁間 3.3 ～ 3.4 m、桁行 1.7 ～ 2.3 mを測る。柱穴掘方は円形～楕円形を呈し、径 0.2 ～ 0.5 m、深さ 0.1 ～ 0.15 mを測る。

柱穴からは土師器・須恵器の細片が少量出土した。出土遺物が少ないため、SB711 の詳細な時期判断には無理があるが、検出状況から中世の建物と考えられる。

SB712（第 91 図）

Ⅶ－１区西端部で検出した梁間３間、桁行５間の東西棟の建物である。建物は SB706・710・711 と重複している。柱穴同士が切り合わない為､不明瞭な点が多いが､SB706 より後出するようである。また、先述したが SB712 とは棟軸方向を合わせかなり隣接しており、SB711・712 は建替えの状況現れている



第 91 図　SB711・712 平・断面図

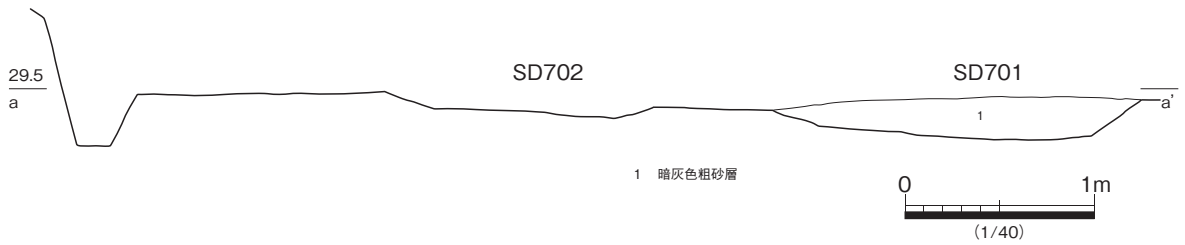
可能性が高い。3 間（4.8 m）× 5 間（5.9 m）、面積は 28.32㎡、主軸方位 N76.0° W（14.0° E）を測る。柱間は梁間 3.3 ～ 3.4 m、桁行 1.7 ～ 2.3 m を測る。柱穴掘方は円形を呈し、径 0.2 ～ 0.45 m、深さ 0.1 ～ 0.2 m を測る。

柱穴からは土師器・須恵器の細片が少量出土した。出土遺物が少ないため、SB712 の詳細な時期判断には無理があるが、検出状況から中世の建物と考えられる。

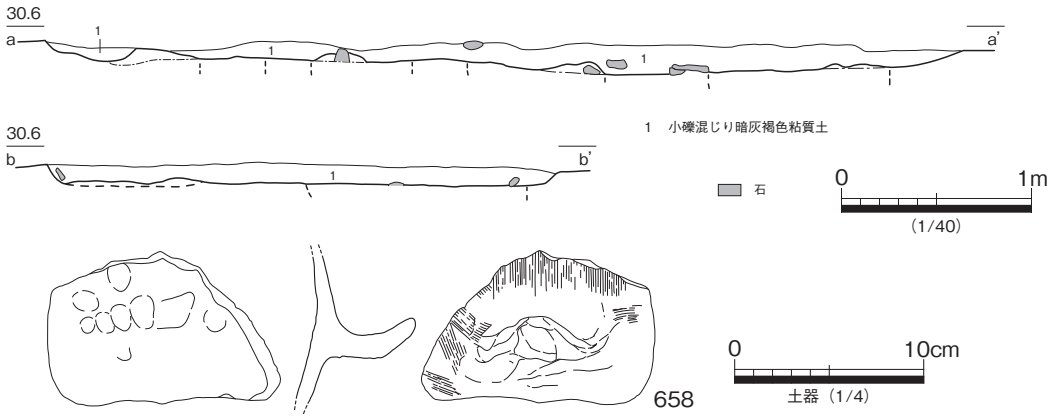
（2）溝状遺構

SD701（第 92 図）

Ⅶ－ 1 区東南部で検出した若干湾曲気味に北東方向へ延びる不整形で浅い溝状遺構である。南北両端部は調査区から外れる。SD702 と重複し、切り合い関係から SD701 は SD702 より先行する。検出長 11.5 m、幅 1.0 ～ 1.5 m、深さ約 0.2 m を測る。断面は椀状～逆三角形状を呈し、埋土は暗灰色粗砂層からなる。



第 92 図　SD701・702 断面図



第 93 図　SX701 断面図，出土遺物

SD702（第 92 図）

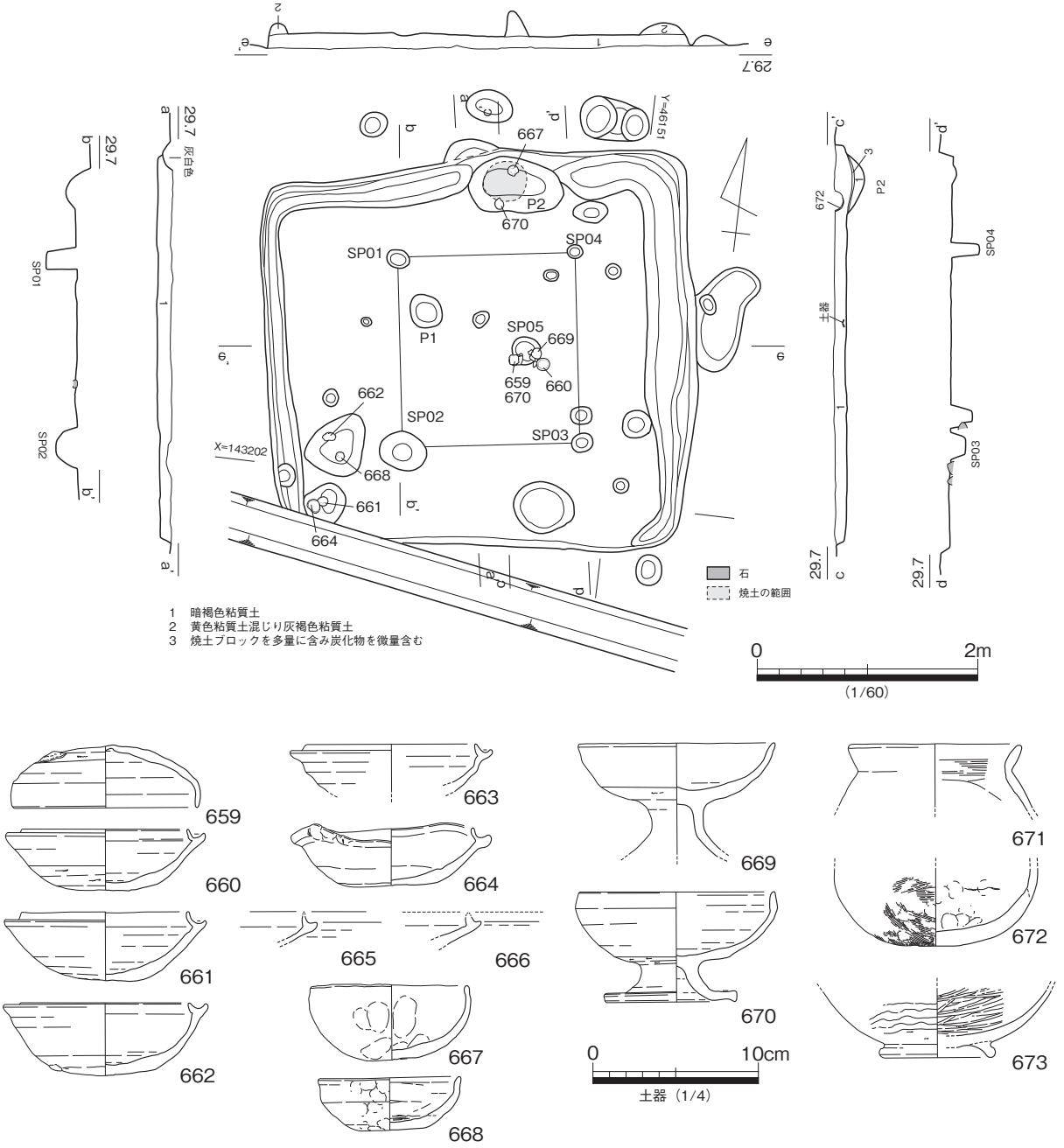
Ⅶ－１東南部で検出した若干湾曲気味に北東方向へ延びる溝状遺構である。南北両端部は調査区から外れる。SD701 と重複し、切り合い関係から SD702 は SD701 より後出する。検出長 8.5 m、幅 0.7 ～ 1.5 m、深さ約 0.1 mを測る。断面は浅い落ち込み状を呈する。

（３）不整形遺構

SX701（第 93 図）

Ⅶ－１西半部中央で検出した不整形な落ち込みである。SB704・705 と重複している。これらの建物の柱穴は、SX701 の底面で検出していることから、SX701 が SB704・705 より後出する可能性がある。長径約 4.3 m、短径約 2.6 m、深さ約 0.1 mを測る。平面は不整形な楕円形状、断面は浅い皿状を呈する。底面は比較的平坦であるが、複数の柱穴の切り込みが認められる。埋土は小礫混じり暗灰褐色粘質土からなる。

埋土からは土師器片が数点出土した。658 は土師器甕の把手である。出土遺物から SX701 は 7 ～ 8 世紀頃の時期が考えられる。



第 94 図　SH701 平・断面図，出土遺物

3．Ⅶ－２区の調査

（1）竪穴建物跡

SH701（第 94 図）

Ⅶ－２区東半部の南壁際で検出した方形の竪穴建物跡である。北には SB722 が隣接する。住居跡の平面形は方形状を呈し、長径 7.8 m、短径 7.0 m、深さ約 0.1 m、面積は 54.6㎡、主軸方位 N8.0° W を測る。床面上からは、壁溝、竈状遺構、主柱穴 4 基を検出した。壁溝は南辺を除く 3 辺の床面上の外周で検出した。壁溝は幅 0.3 ～ 0.6 m、深さ 0.1 mを測る。竈状遺構は北辺中央で確認した。平面は楕円形状を呈し、長径 0.9 m、短径 0.5 m、深さ 0.1 mを測る。断面は椀状を呈し、埋土は上下 2 層に分かれ、上層は黄色粘土混じり灰褐色粘質土、下層は焼土ブロックを多量に含んでいる。主柱穴と考えられる柱

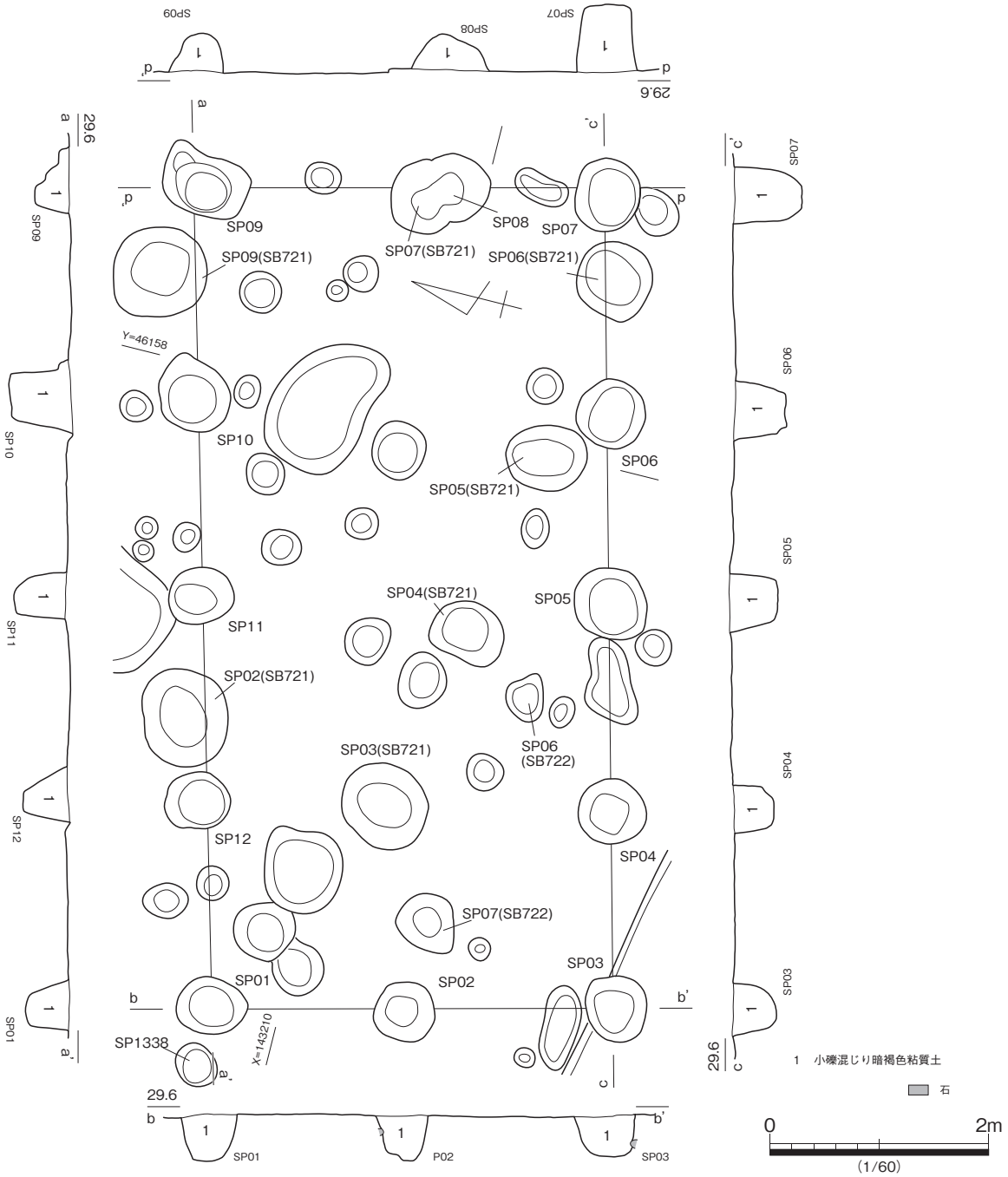
穴は、SP01 ～ 04 の 4 柱穴である。径約 0.15 ～ 0.4 m、深さ 0.2 ～ 0.3 mを測る。

埋土からは比較的一括性の高い須恵器・土師器が出土した。659 ～ 666 は須恵器、667 ～ 672 は土師器の資料である。659 は杯蓋、660 ～ 666 は 7 世紀初頭頃の杯身である。667・668 は土師器の杯である。669・670 は 7 世紀前半頃の須恵器と土師器の高杯、671・672 は土師器の小型甕である。673 は黒色土器の椀の底部で混入品である。出土遺物から SH701 は 7 世紀初頭頃の竪穴建物跡と考えられる。

（2）掘立柱建物跡

SB713（第 95 図）

Ⅶ－ 2 区東端部北で検出した梁間 2 間、桁行 4 間の東西棟の建物である。この建物は SB721・722 と



第 95 図　SB713 平・断面図

重複し、検出状況や切り合い関係からSB713はSB721・722より先行することが解る。2間（3.75 m）×4間（7.55 m）、面積は28.31㎡、主軸方位N75.0° E（15.0° W）を測る。柱間は梁間1.5～2.25 m、桁行1.8～2.1 mを測る。柱穴掘方は円形～不整円形を呈し、径0.55～0.7 m、深さ0.3～0.6 mを測る。柱穴埋土は小礫混じり暗褐色粘質土が主体を占める。

柱穴からは古代の土師器・須恵器片等が少量出土したが、図化できる遺物は抽出できなかった。出土した遺物の中でSP03・04からは、7世紀頃の須恵器タタキ甕の体部片が出土しているおり、この建物の時期を示唆する遺物と考えられる。

SB714（第96図）

Ⅶ－2区中央の北半部の北壁際で検出した。北半部は調査区から外れるため南半部の約1/2を検出した。梁間2間、桁行1間以上の南北棟の建物である。2間（3.25 m）×1間（2.7 m）以上、面積は8.78㎡以上、主軸方位N6.0° Wを測る。柱間は梁間1.6 m、桁行2.2 mを測る。柱穴掘方は円形を呈し、径0.25～0.45 m、深さ0.2～0.4 mを測る。

柱穴からは土師器・須恵器片が少量出土した。出土遺物が少ないため、SB714の詳細な時期判断には無理があるが、出土遺物中には古代の須恵器杯片が含まれており、この建物の時期を示唆する遺物と考えられる。

SB715（第97図）

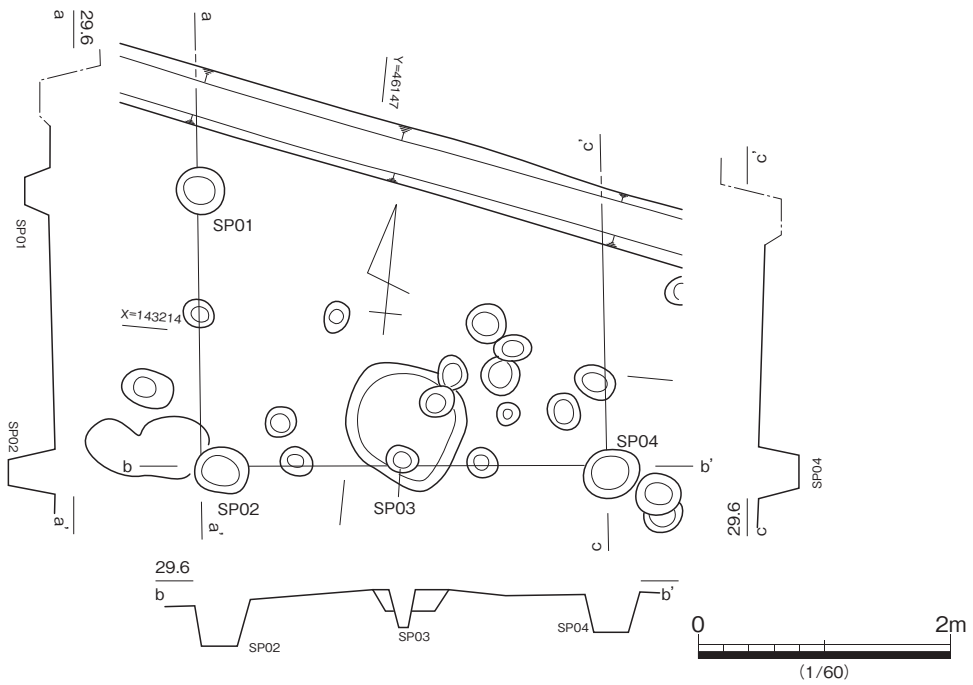
Ⅶ－2区西半部で検出した梁間2間、桁行2間の南北棟の総柱建物である。この建物はSB723・724、SD707と重複し、切り合い関係等からSB715はこれらの遺構より先行する可能性がある。2間（3.05 m）×2間（4.0 m）、面積は12.2㎡、主軸方位N8.0° Wを測る。柱間は梁間1.4～1.6 m、桁行1.9～2.1 mを測る。柱穴掘方は不整円形を呈し、側柱の柱穴径0.6～1.0 m、深さ約0.45 mを測る。束柱の柱穴径約0.45 m、深さ約0.2 mを測る。柱穴埋土は暗褐色粘質土からなる。

柱穴からは7世紀初頭頃の土師器・須恵器片等が少量出土している。674はSP07、675はSP06から出土した須恵器杯身の口縁部である。676はSP03から出土した土師器の杯片である。出土遺物からSB715は7世紀初頭以降の建物と考えられる。

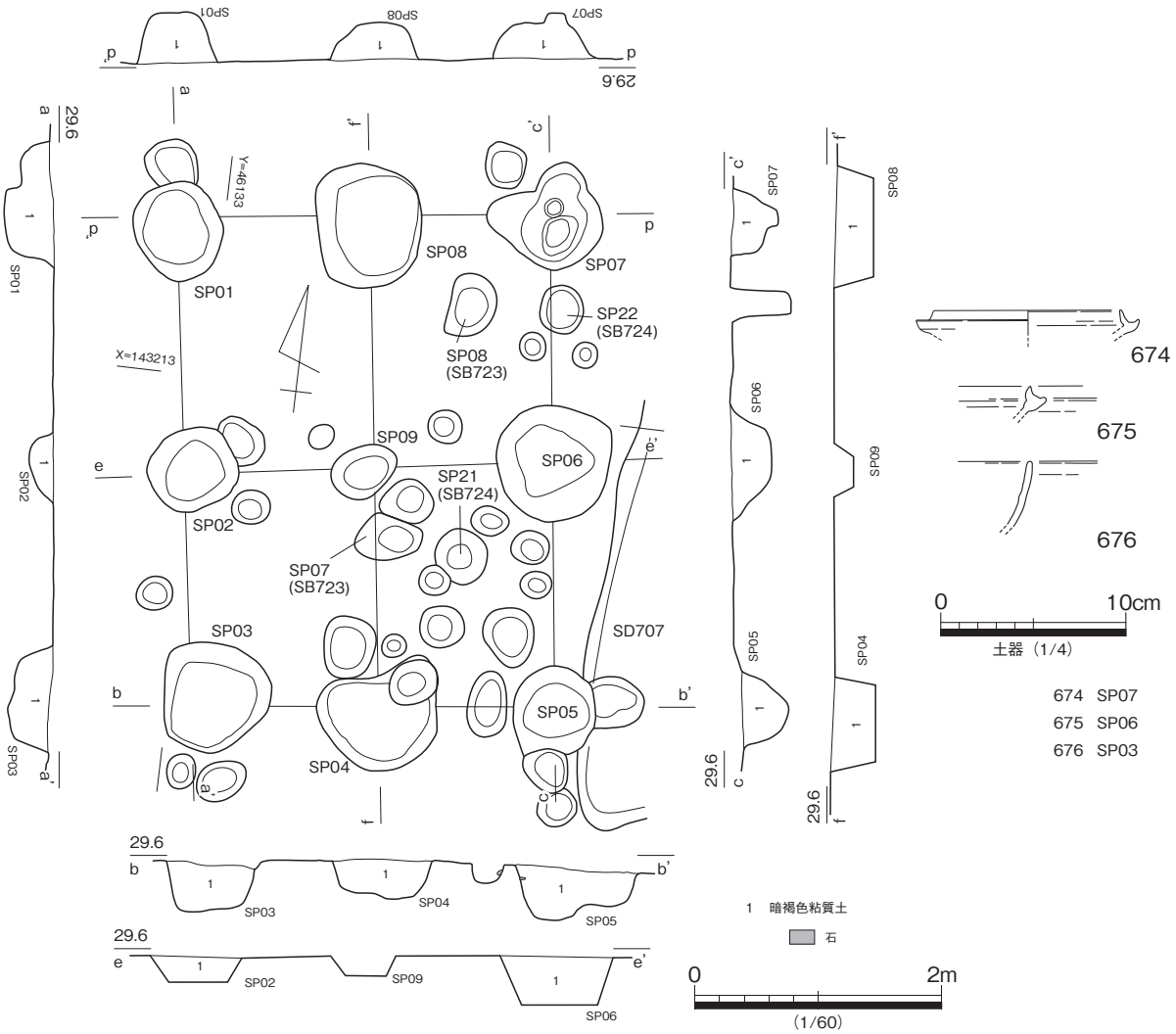
SB716（第98図）

Ⅶ－2区西半の南半部で検出した梁間2間、桁行2間の南北棟の総柱建物である。北に位置するSB715とは概ね棟方向を揃えていることから、同時期で同グループの総柱建物の可能性が高い。この建物はSB724と重複し、切り合い関係等からSB716はSB724より先行する。2間（3.15 m）×2間（3.6 m）、面積は11.34㎡、主軸方位N16.5° Wを測る。柱間は梁間1.5～1.65 m、桁行1.7～1.85 mを測る。柱穴掘方は主に不整円形を呈するが、南半部のSP03・04・06等は不整形な楕円形状を呈し、形状から推定して、本来抜き取り穴が重複していたものを、明瞭に掘り別けられていないものと考えられる。側柱の柱穴径0.5～1.4 m、深さ約0.25～0.7 mを測る。束柱の柱穴径約0.3 m、深さ約0.3 mを測る。柱穴埋土は主に礫混じり暗褐色粘質土からなる。

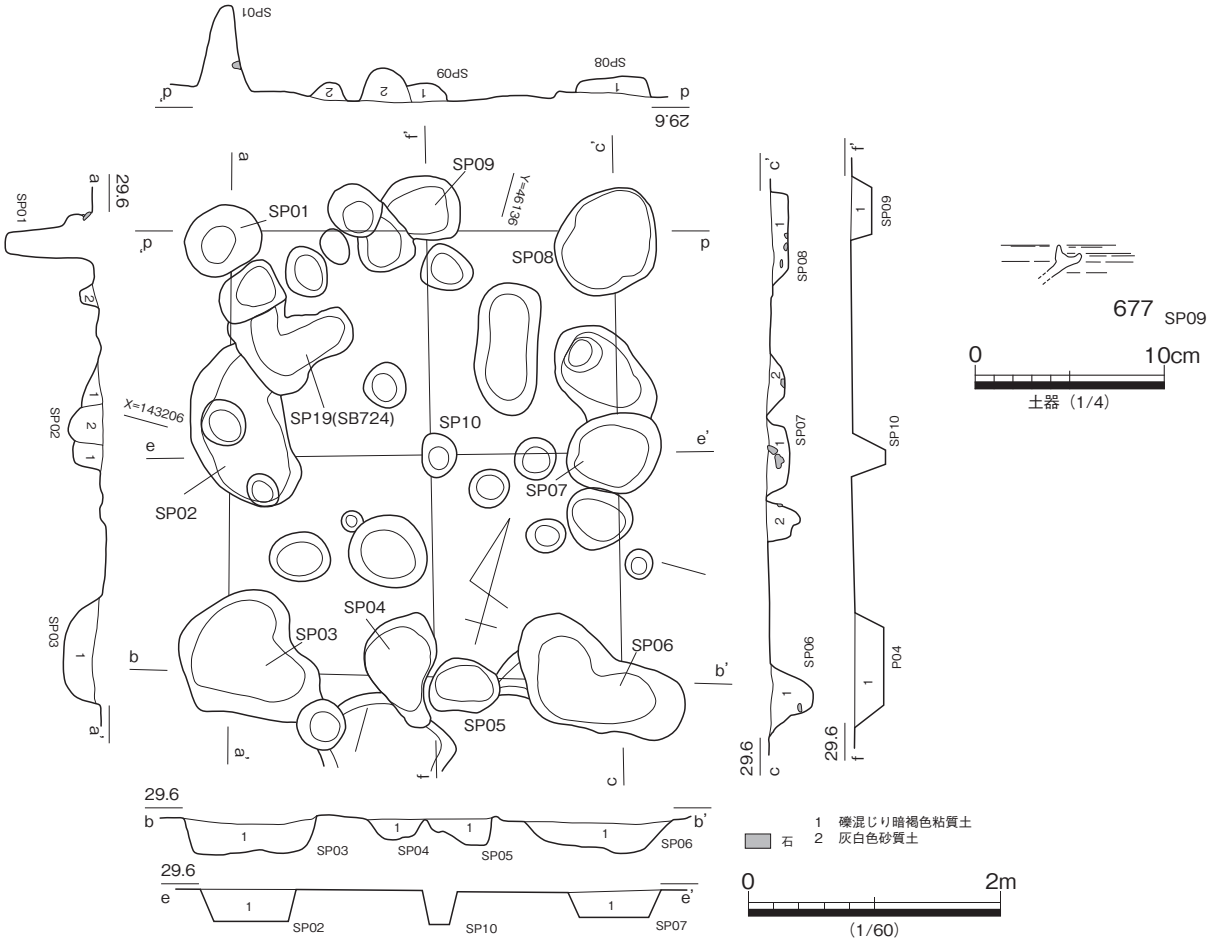
柱穴からは、須恵器片が少量出土した。677はSP09から出土した7世紀初頭頃の須恵器杯身の口縁部片であり、極少量であるがSB716の時期を示唆する遺物になる。



第 96 図　SB714 平・断面図



第 97 図　SB715 平・断面図，出土遺物



第 98 図　SB716 平・断面図，出土遺物

SB717（第 99 図）

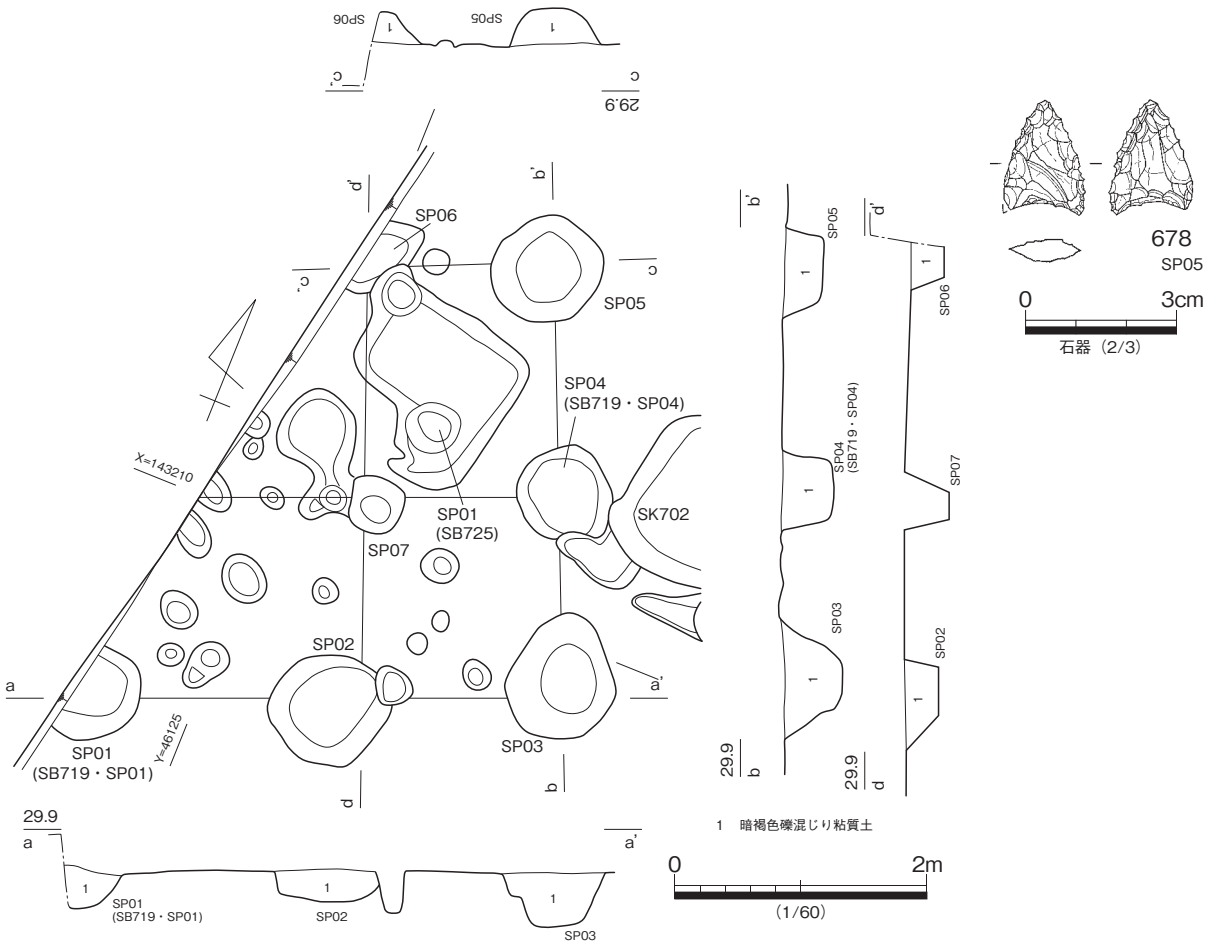
Ⅶ－２区西端部の西壁際で検出した。西半部は調査区から外れるため東半部の約 1/2 を検出した。梁間２間、桁行２間以上の東西棟の総柱建物である。この建物は SB719・725 と重複し、検出状況等から SB717 は SB719・725 より先行する。２間（3.5 m）×２間（3.9 m）以上、面積は 13.65㎡以上、主軸方位 N68.5° E（21.5° W）を測る。柱間は梁間 1.6 ～ 1.9 m、桁行 1.8 ～ 2.0 mを測る。柱穴掘方は不整形円形を呈し、側柱の柱穴径約 1.0 m、深さ 0.3 ～ 0.45 mを測る。東柱の柱穴径約 0.5 m、深さ約 0.4 mを測る。柱穴埋土は主に礫混じり暗褐色粘質土からなる。

柱穴からは土師器片と石器が１点出土している。678 は SP05 から出土したサヌカイトの凹基式石鏃である。出土遺物が少なく SB717 の詳細な時期判断には無理があるが、検出状況等から古代の建物跡と考えられる。

SB718（第 100 図）

Ⅶ－２区中央で検出した梁間２間、桁行４間の南北棟の建物である。２間（3.8 m）×４間（6.2 m）、面積は 23.56㎡、主軸方位 N4.0° E を測る。柱間は梁間 1.8 ～ 1.9 m、桁行 1.55 ～ 1.85 mを測る。柱穴掘方は不整円形方形を呈し､径 0.5 ～ 0.7 m､深さ 0.1 ～ 0.4 mを測る。柱穴埋土は暗褐色粘質土からなる。

柱穴からは７世紀前半頃の土師器細片・須恵器片等が少量出土した。679 は SP04 から出土した須恵



第 99 図　SB717 平・断面図，出土遺物

器杯の口縁部片である。680 は SP12 から出土した須恵器高杯の脚部である。

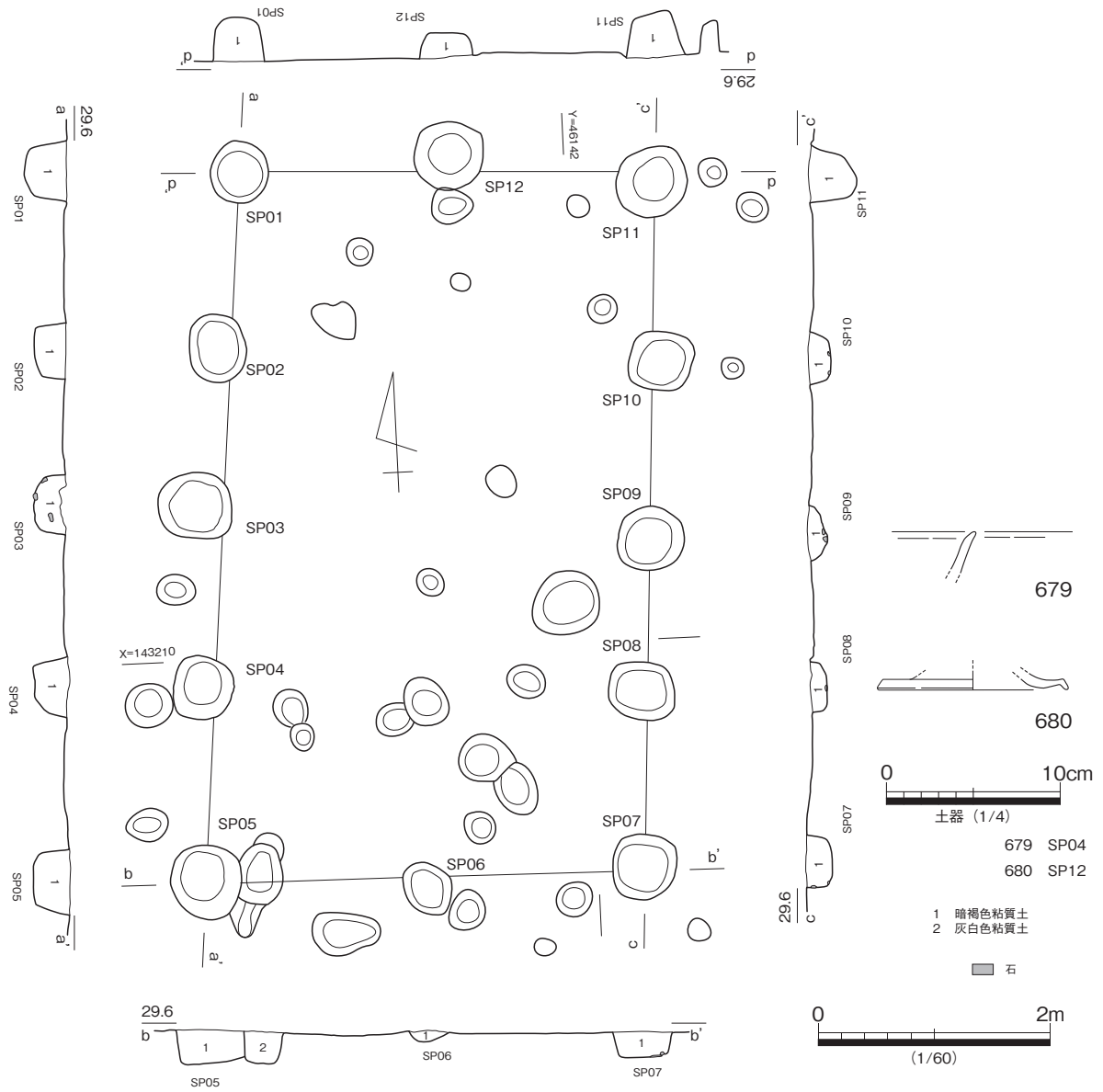
SB719（第 101 図）

Ⅶ－２区西端部の西壁際で検出した。西半部は調査区から外れるため東半部の約 1/2 を検出した。SB717・725 等と重複するが、柱穴が切り合わない為、前後関係は不明である。梁間 1 間以上、桁行 4 間の南北棟の建物である。1 間（3.0 m）以上× 4 間（6.7 m）、面積は 20.1㎡以上、主軸方位 N2.0° E を測る。柱間は梁間 3.0 m、桁行 1.5 ～ 1.7 mを測る。柱穴掘方は不整円形を呈し、径 0.3 ～ 1.05 m、深さ 0.2 ～ 0.4 mを測る。柱穴埋土は暗褐色粘質土からなる。

柱穴からは土師器・須恵器片が少量出土した。出土遺物が少ないため、SB719 の詳細な時期判断には無理があるが、検出状況等から古代の建物の可能性が高い。

SB720（第 102 図）

Ⅶ－２区東端部の東壁際で検出した。東半部は調査区から外れ西半部の約 1/2 を検出した。梁間 2 間、桁行 2 間以上の東西棟の建物である。2 間（3.35 m）× 2 間（4.4 m）以上、面積は 14.74㎡、主軸方位 N78.0° W（12.0° E）を測る。柱間は梁間 1.65 ～ 1.7 m、桁行 1.45 ～ 2.25 mを測る。柱穴掘方は円形を呈し、径 0.3 ～ 0.6 m、深さ 0.2 ～ 0.4 mを測る。



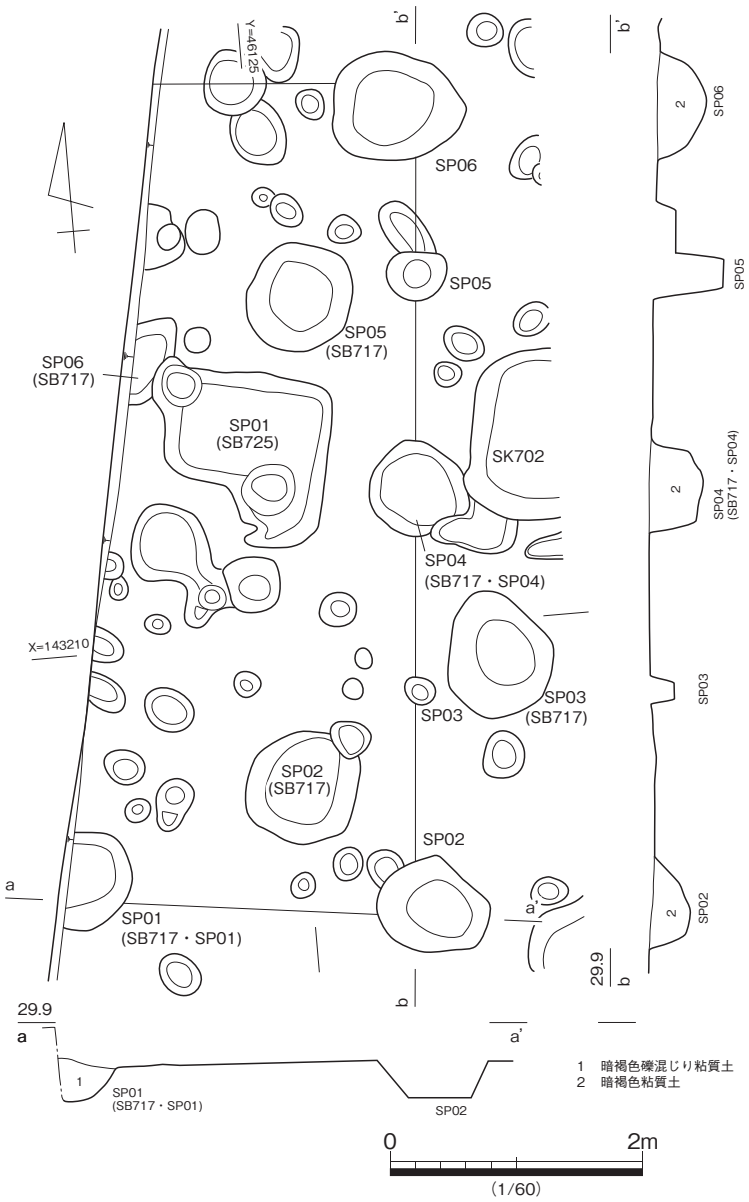
第 100 図　SB718 平・断面図，出土遺物

柱穴からは土師器・須恵器の細片が極微量出土した。出土遺物が少ないため、SB720 の詳細な時期判断には無理があるが、検出状況等から中世頃の建物の可能性がある。

SB721（第 102 図）

Ⅶ－２区東端部の北壁際で検出した梁間２間、桁行３間以上の東西棟の建物である。この建物は SB713 と重複し、柱穴の切り合い関係から SB721 は後出する。２間（3.9 m）×３間（5.3 m）、面積は 20.67㎡、主軸方位 N77.0° W（13° E）を測る。柱間は梁間 1.7 ～ 2.05 m、桁行 1.7 ～ 1.8 mを測る。柱穴掘方は円形～不整円形を呈し、径 0.6 ～ 0.9 m、深さ 0.2 ～ 0.45 mを測る。

柱穴からは土師器・須恵器片が少量出土した。681 は SP06 から出土した、7 世紀初頭頃の須恵器の杯身の口縁部片である。図化できる遺物が少なく時期判断が難しいが、検出状況や出土遺物から SB721 は 7 世紀初頭以降の建物跡と考えられる。

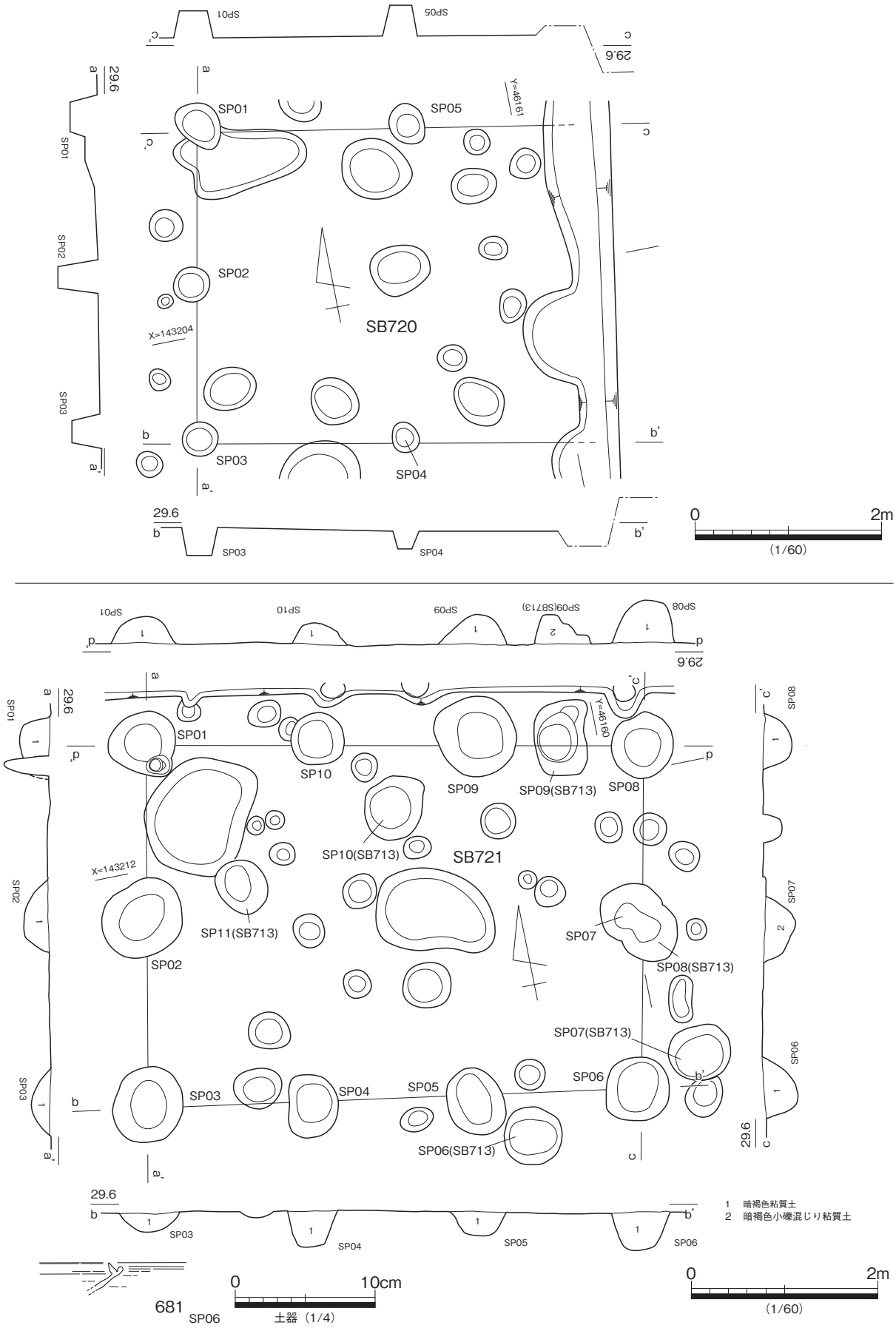


第 101 図　SB719 平・断面図

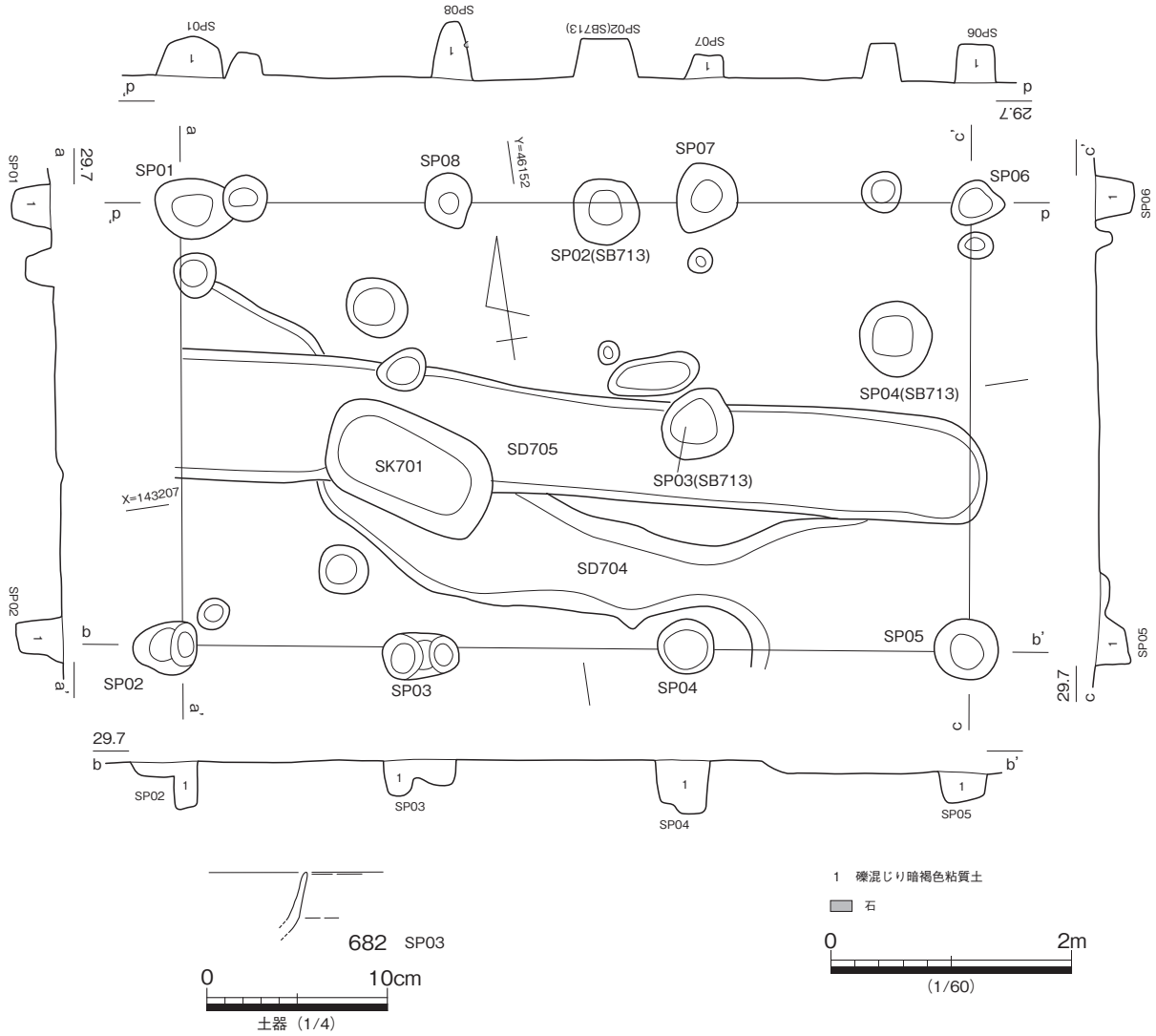
SB722（第 103 図）

Ⅶ－２区東半部で検出した梁間１間、桁行３間の東西棟の建物である。この建物は SB713、SD704・705 と重複するが、前後関係は不明瞭である。柱穴掘方は円形～楕円形状を呈し、径 0.4 ～ 0.7 m、深さ 0.25 ～ 0.45 mを測る。1 間（3.8 m）× 3 間（6.5 m）、面積は 24.7㎡、主軸方位 N81.0° W（9.0° E）を測る。柱間は梁間 3.7 ～ 3.8 m、桁行 2.0 ～ 2.3 mを測る。

柱穴からは 7 ～ 8 世紀頃の古代の土師器・須恵器片等が少量出土した。682 は SP03 から出土した土師器の杯片である。図化できる遺物が少なく時期判断が難しいが、検出状況や出土遺物から SB722 は 8 世紀頃の建物跡と考えられる。



第 102 図　SB720・721 平・断面図，出土遺物



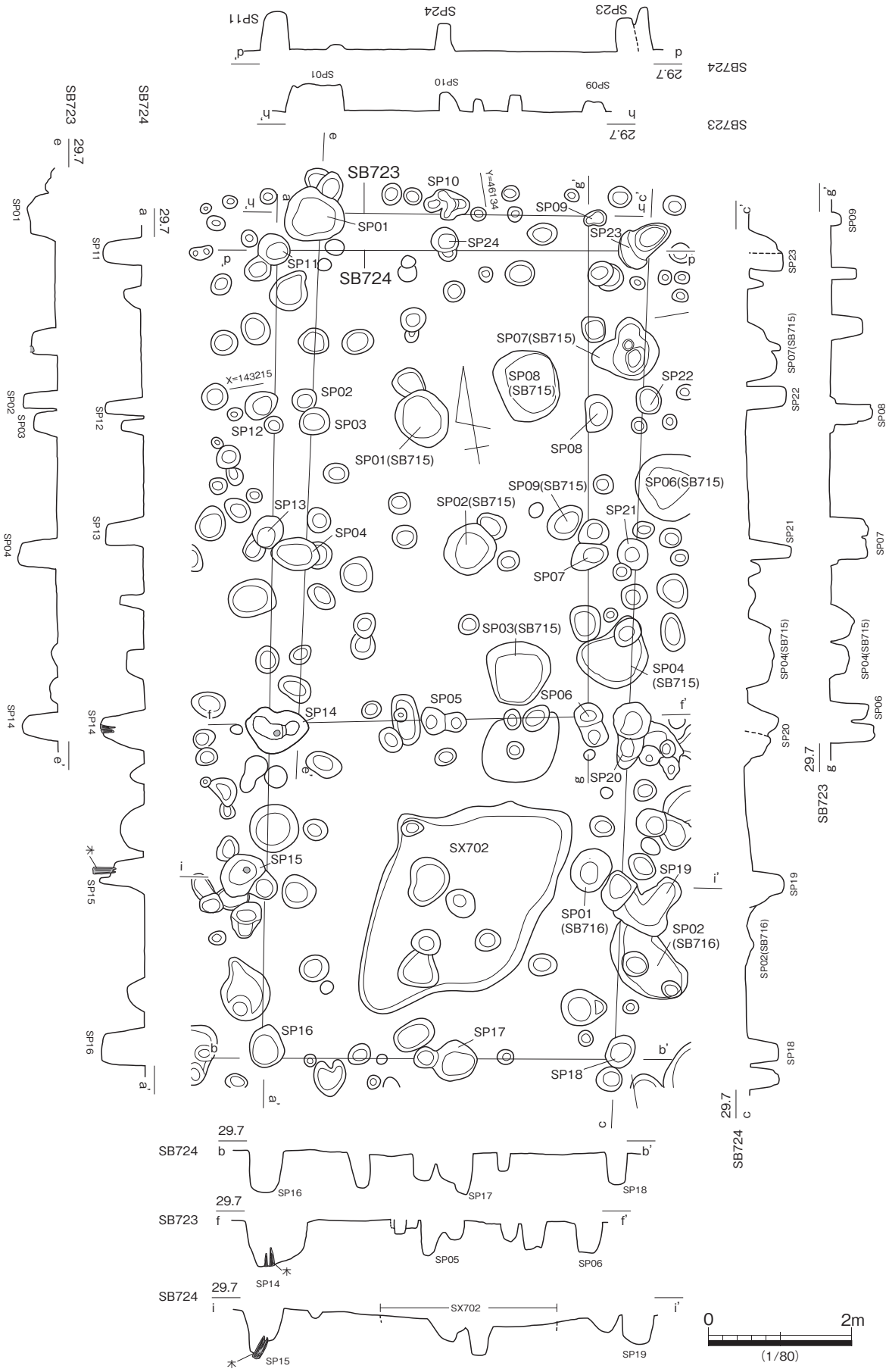
第 103 図　SB722 平・断面図，出土遺物

SB723（第 104・105 図）

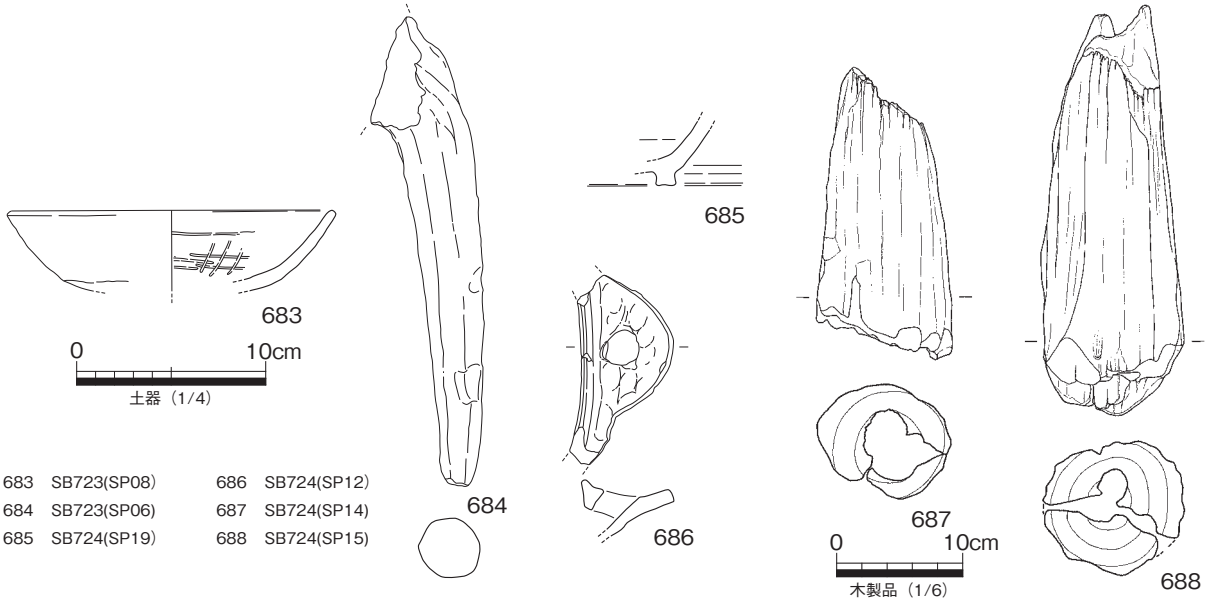
Ⅶ－２区西半部で検出した梁間２間、桁行３間の南北棟の建物である。外周には一回り大型の SB724 が棟方向を合わせて重複しており、SB723 と SB724 は建て替え等の関連があるものと考えられる。北辺と東辺には 1.0 ～ 1.55 m程離れて直角気味にクランクする SD707 が所在する。この溝状遺構跡は屋敷地の北辺と東辺を区画する区画溝と考えられ、その区画内に SB723・724・725 等は棟筋を揃えて配置している。

SB723 は SD707 のコーナー付近に位置する。この建物は SB715・724・SD707 と重複するが、明瞭な柱穴の切り合いが認められないため前後関係については不明瞭である。出土遺物等を加味すれば、少なくとも SB715 より後出する。２間（4.0 m）× 3 間（7.2 m）、面積は 28.8㎡、主軸方位 N9.5° E を測る。柱間は梁間 1.7 ～ 2.2 m、桁行 1.7 ～ 2.7 mを測る。柱穴掘方は不整楕円形を呈し、柱穴径 0.3 ～ 0.85 m、深さ約 0.2 ～ 0.7 mを測る。

柱穴からは土師器・須恵器片等が少量出土した。683 は SP08 から出土した底部を欠く黒色土器椀で、684 は足釜の脚部である。検出状況や出土遺物から SB723 は 12 世紀以降の建物跡と考えられる。



第 104 図　SB723・724 平・断面図



第 105 図　SB723・724 出土遺物

SB724（第 104・105 図）

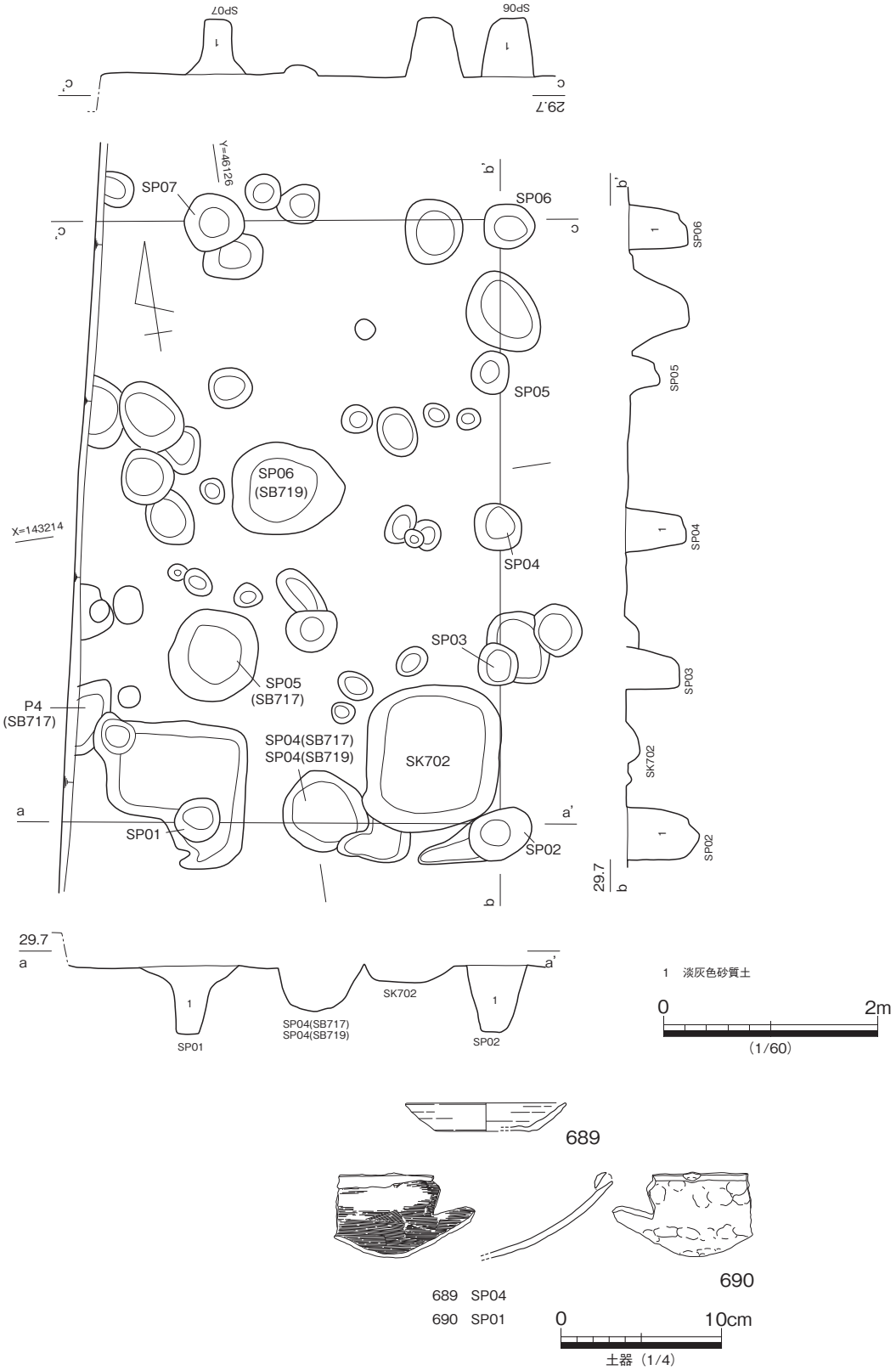
Ⅶ－２区西半部で検出した梁間２間、桁行５間の南北棟の建物である。先述したように、建物の内側にはSB723が棟方向を合わせて重複しており、SB723とSB724は建て替え等の関連があるものと考えられる。SB724はSD707のコーナー付近に位置する。この建物はSB715・723、SD707と重複するが、明瞭な柱穴の切り合いが認められないため前後関係については不明瞭である。出土遺物等を加味すれば、少なくともSB715より後出する。２間（5.2 m）×５間（11.3 m）、面積は58.7㎡、主軸方位N12.5°Eを測る。柱間は梁間1.7～2.0 m、桁行1.45～2.0 mを測る。柱穴掘方は不整円形～不整楕円形を呈し、柱穴径0.3～0.85 m、深さ約0.2～0.7 mを測る。なお、西側柱列のSP14・15からは柱材を検出した。

柱穴からは土師器･須恵器片等が少量出土した。685はSP19から出土した須恵器壺の高台部片である。686はSP12から出土した土師器鍋の把手である。687はSP14、688はSP15から出土した柱材である。検出状況や出土遺物からSB724は12世紀以降の建物跡と考えられる。

SB725（第 106 図）

Ⅶ－２区東端部で検出した梁間１間以上、桁行４間の南北棟の建物である。SB725の西半部は調査区から外れるため約1/2を検出した。この建物はSB717・719・725と重複するが、切り合い関係が不明瞭なため明確に前後関係を示せない。検出状況からこれらの遺構より後出する可能性が高い。2間（4.0 m）以上×２間（5.7 m）、面積は22.8㎡、主軸方位N8.0°Eを測る。柱間は梁間2.7～2.8 m、桁行2.85 mを測る。柱穴掘方は不整円形状を呈し、径0.4～0.6 m、深さ0.5～0.65 mを測る。

柱穴からは中世の土師器・須恵器片等が少量出土した。689はSP04から出土した土師器杯、690はSP01から出土した土師器焙烙片である。検出状況や出土遺物からSB725は14～15世紀頃の建物跡と考えられる。



第 106 図　SB725 平・断面図，出土遺物

（3）土坑跡

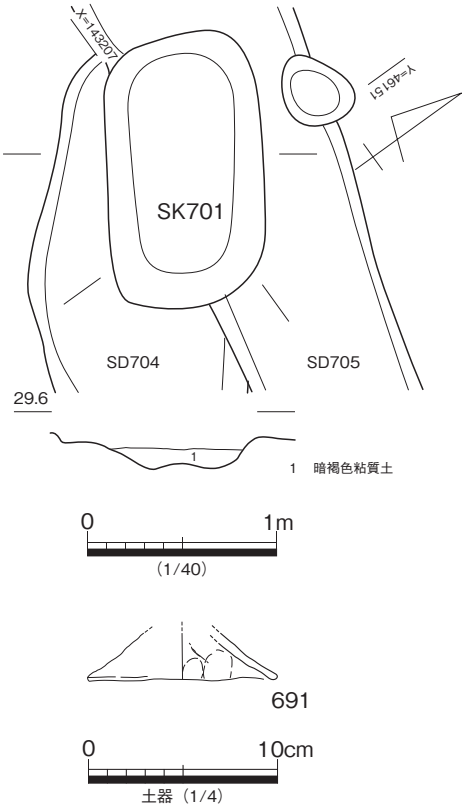
SK701（第 107 図）

Ⅶ－２区東半部で検出した土坑である。SB722、SD701・704 と重複しているが、この遺構は切り合い関係から最も後出する。平面は隅丸長方形状、断面は凹凸がある逆台形状を呈する。長径 1.45 m、短径 0.85 m、深さ 0.3 m、主軸方位 N54° W を測る。埋土は暗褐色粘質土を呈している。

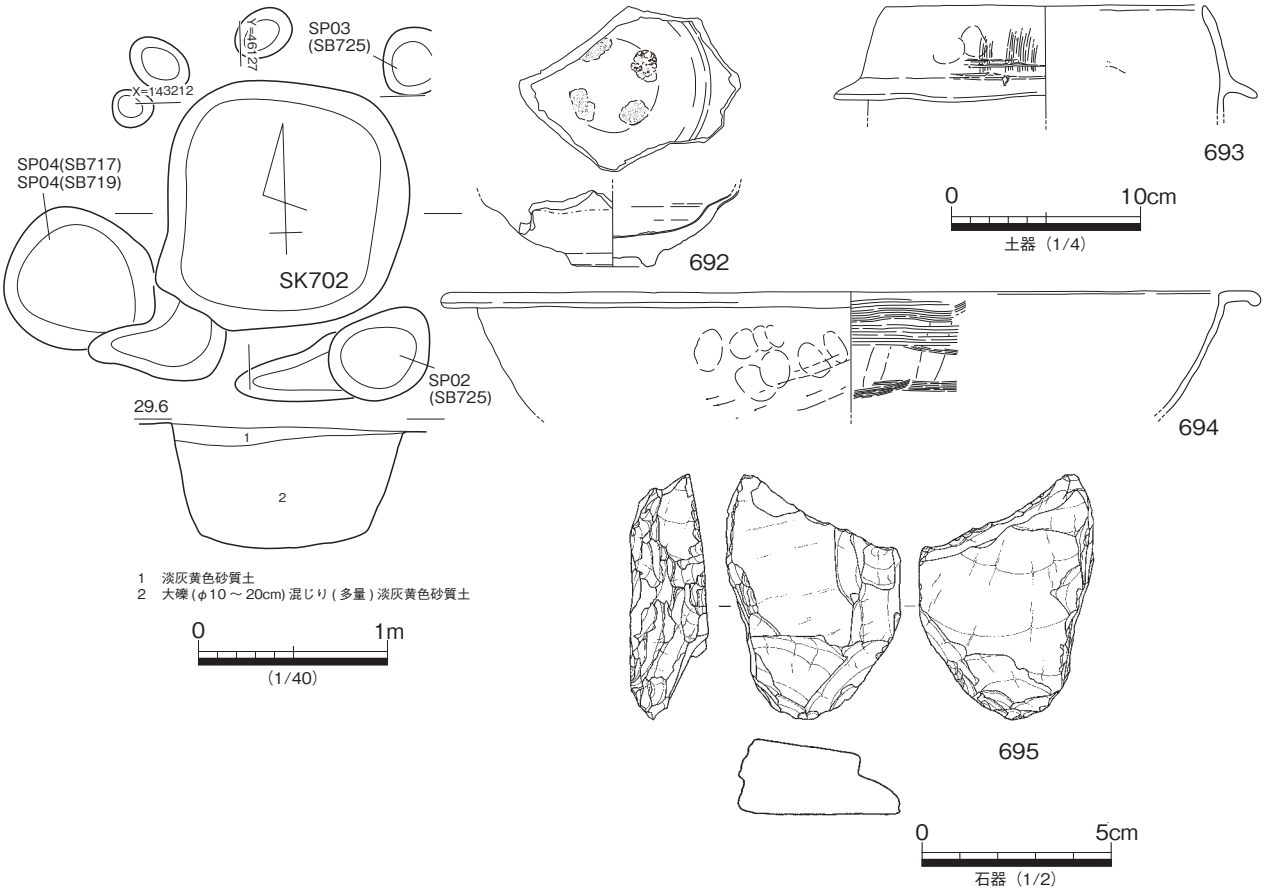
埋土からは土師器片が数点出土した。691 は SK701 から出土した土師器高杯脚部である。出土遺物が少なく詳細な時期判断には無理があるが、SK701 は古代に属する可能性がある。

SK702（第 108 図）

Ⅶ－２区西半部で検出した土坑である。SB725 の南東隅に位置し、SB717・719・725 等と重複しているが切り合わない為、前後関係は不明瞭である。平面は隅丸方形状、断面は逆台形状を呈する。長径 1.34 m、短径 1.34 m、深さ



第 107 図　SK701 平・断面図，出土遺物



第 108 図　SK702 平・断面図，出土遺物

0.66 m、主軸方位 N0° を測る。埋土は上層が淡灰黄色砂質土、下層は大礫混じり淡灰黄色砂質土からなる。

埋土からは土師器・陶磁器、石器等が数点出土した。694 は土師器の焙烙、692 は陶器の皿、693 は瓦質土器の羽釜、695 はサヌカイトの石核である。出土遺物から SK702 は近世以降の土坑と考えられる。

（4）溝状遺構

SD704（第 109 図）

Ⅶ－2 区東半部の SB720 の西側で検出した不整形な溝状遺構である。大まかにみて、北・南辺部は東西方法の不整形で短い溝状遺構が位置し、両溝を南北方向の短い直線溝が繋いでいる。形状から推定して、SB720 の雨落ち溝と考えられる。北辺溝 : 検出長約 8.5 m、幅 0.9 m、深さ 0.1 m、南辺溝 : 検出長約 4.0 m、幅 1.0 m以上、深さ 0.1 m、南北溝 : 検出長約 5.0 m、幅 0.58 m、深さ 0.12 mを測る。

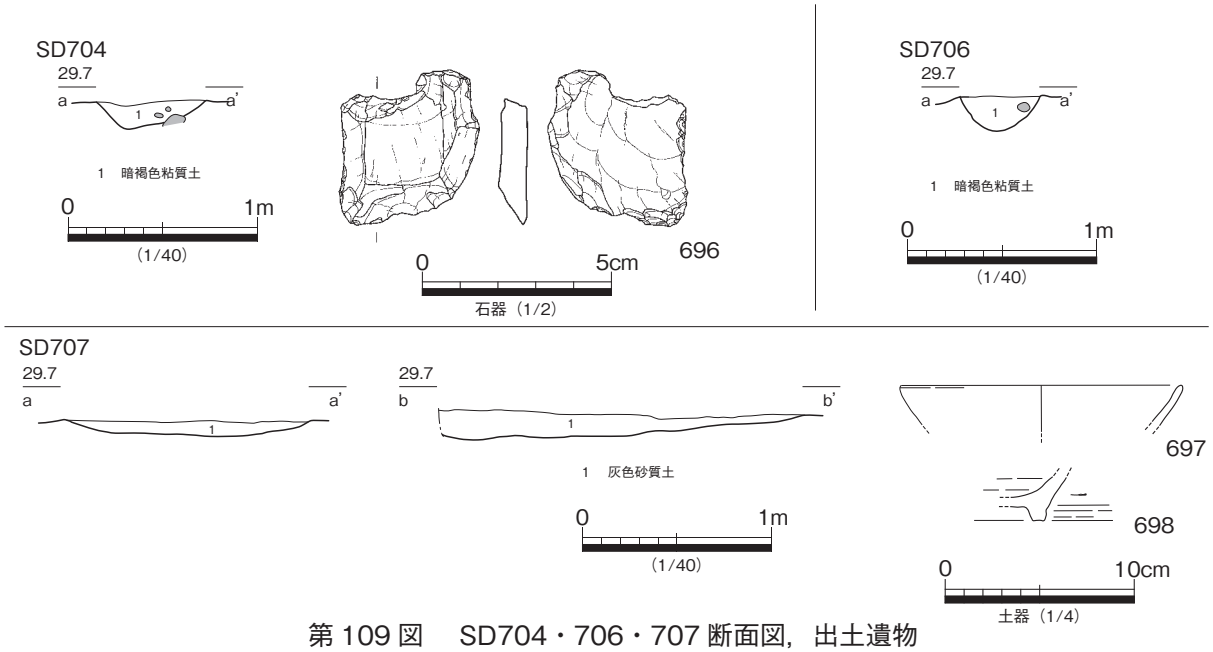
埋土からは土師器・須恵器片が少量出土した。696 はサヌカイトの調整ある剥片で混入品である。出土遺物が少なく、詳細な時期判断には無理があるが、SD704 は SB720 に係わる雨落溝の可能性があり、中世に属する溝跡と考えられる。

SD706（第 109 図）

Ⅶ－2 区中央南端部で検出した、直線状の溝跡である。SD704 の南北溝と向きを揃えている為、SD706 はこの溝跡と係わる溝の可能性がある。検出長 5.2 m、幅 0.42 m、深さ 0·2 m、方位 N18.0° E を測る。断面は椀状を呈し、埋土は暗褐色粘質土からなる。埋土からは時期判断ができる遺物は出土しなかった。

SD707（第 109 図）

Ⅶ－2 区北西端部で検出した屋敷地の東辺と北辺を区画する区画溝である。区画内に SB723・724・725 等が棟筋を揃えて配置しており、同時期の建物と考えられる。北辺溝は検出長 12.5 m、幅 0.3 ～ 1.3 m 以上、深さ 0.15 m、東辺溝は検出長 8.0 m、幅 0.6 ～ 1.6 m以上、深さ 0.15 m、主軸方位 N7.0° E を測る。埋土は灰色砂質土からなる。



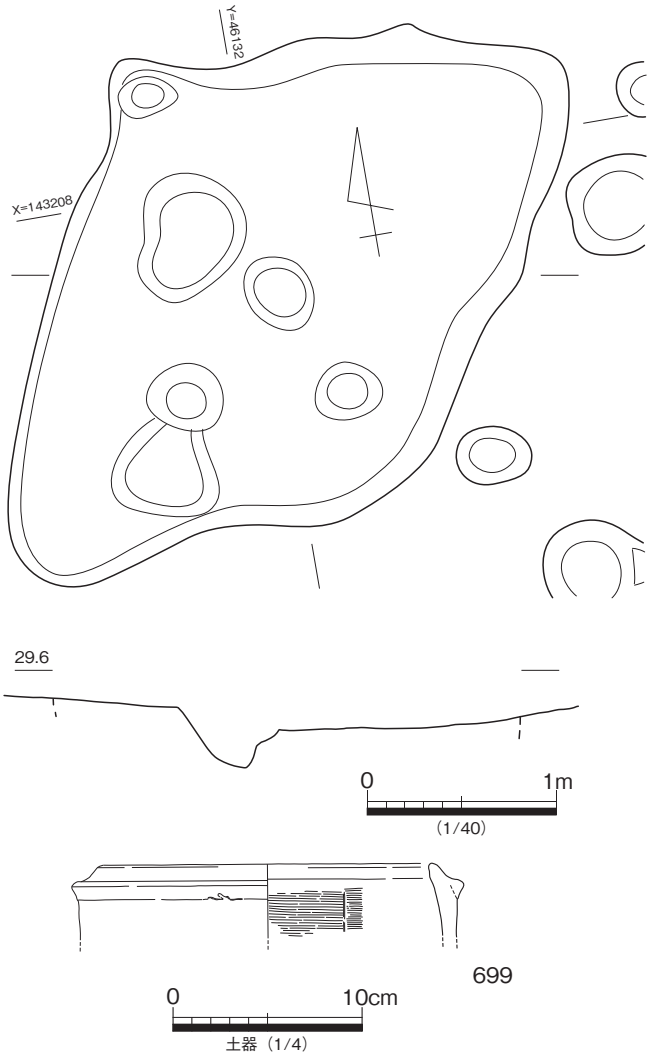
第 109 図　SD704・706・707 断面図，出土遺物

埋土からは土師器・須恵器・黒色土器・陶磁器片等が出土した。697 は黒色土器の椀、698 は須恵器の壺の底部片である。出土遺物及び検出状況から SD707 は、12 世紀以降の溝状遺構と考えられる。

（5）不整形遺構

SX702（第 110 図）

Ⅶ－2 区西半部の SB724 の床面上で検出した不整形な落ち込みである。検出長 3.9 m、幅 2.5 m、深さ 0.2 m を測る。断面は凹凸のある浅い皿状を呈し、埋土からは中世以降の土師器・須恵器・瓦質土器等が出土した。699 は足釜の口縁部片である。出土遺物及び検出状況より、SX702 は中世後半以降の時期が考えられる。



第 110 図　SX702 平・断面図，出土遺物

4. Ⅶ－3・4 区の調査

（1）掘立柱建物跡・柵列

SB726（第 111 図）

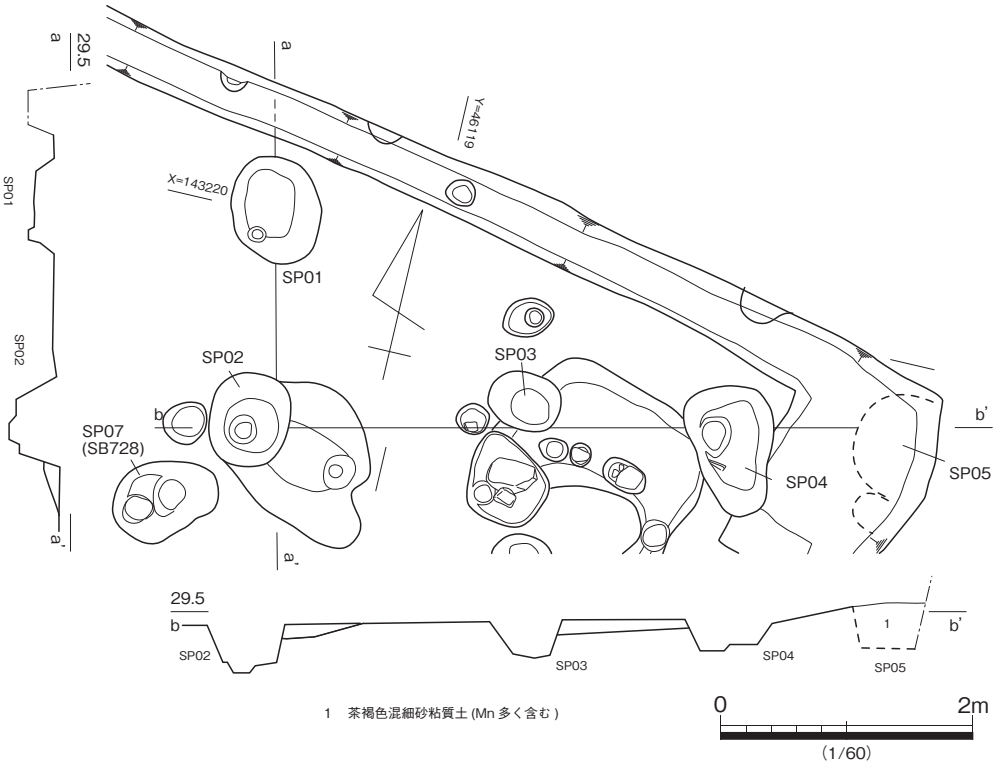
Ⅶ－3 区北東端部で検出した梁間 1 間以上、桁行 3 間以上の東西棟の建物である。SB726 の北半部は調査区から外れるため約 1/2 を検出した。この建物は SB727・728 等と隣接し、時期差があるものと考えられる。1 間（2.75 m）以上× 3 間（5.25 m）以上、面積は 14.44㎡以上、主軸方位 N76.0° E（24.0° W）を測る。柱間は梁間 1.75 m、桁行 1.5 ～ 2.0 m を測る。柱穴掘方は不整円形～不整楕円形状を呈し、径 0.6 ～ 1.05 m、深さ 0.2 ～ 0.4 m を測る。

柱穴からは土師器・須恵器片等が少量出土した。出土遺物が少ないため、SB726 の詳細な時期判断には無理があるが、検出状況や配置等から古代の建物と考えられる。

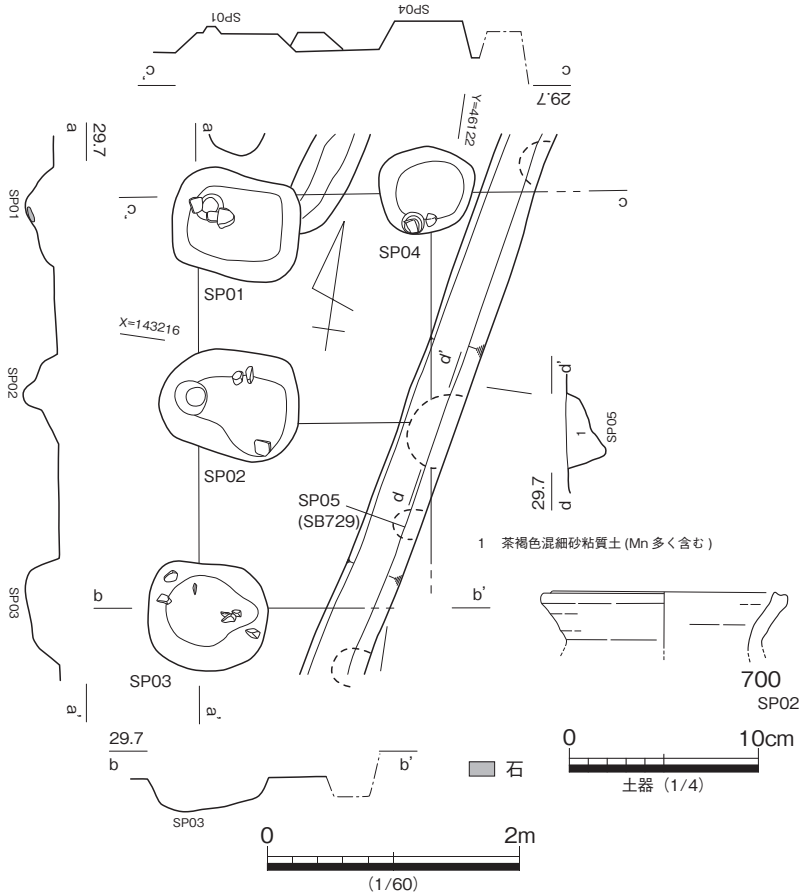
SB727（第 112 図）

Ⅶ－3 区北東端部で検出した梁間 2 間、桁行 1 間以上の東西棟の総柱建物である。SB727 の東半部は調査区から外れるため約 1/3 を検出した。この建物は SB729 と重複し、SB726・728・729 等と隣接する。これらの建物とは時期差があるものと考えられるが、柱穴が切り合わない為不明瞭である。2 間（3.3 m）× 1 間（2.7 m）以上、面積は 8.91㎡以上、主軸方位 N9.0° W を測る。柱間は梁間 1.6 ～ 1.7 m、桁行 1.5 ～ 1.8 m を測る。柱穴掘方は不整円形～不整楕円形状を呈し、径 0.6 ～ 1.05 m、深さ 0.2 ～ 0.4 m を測る。

柱穴からは土師器・須恵器片等が少量出土した。700 は SP02 から出土した須恵器壺の口頸部である。



第 111 図　SB726 平・断面図



第 112 図　SB727 平・断面図，出土遺物

出土遺物が少ないため、SB727 の詳細な時期判断には無理があるが、検出状況や配置等から古代の建物と考えられる。

SB728（第 113 図）

Ⅶ－３区東半部で検出した梁間２間、桁行２間の南北棟の建物である。この建物は SB729、SX703・704 等と重複している。切り合いから SB728 は SB729、SX703・704 等より先行する。２間（3.05 m）×２間（3.7 m）、面積は 11.29㎡、主軸方位 N36.0° W を測る。柱間は梁間 1.35 ～ 1.65 m、桁行 1.65 ～ 2.0 m を測る。柱穴掘方は不整円形状を呈し、径 0.6 ～ 0.9 m、深さ 0.3 ～ 0.5 mを測る。

柱穴からは土師器・須恵器片等が少量出土したが、図化できる遺物は抽出できなかった。出土遺物が少ないため、SB728 の詳細な時期判断には無理があるが、検出状況や配置等から古代の建物と考えられる。

SB729（第 114 図）

Ⅶ－３区東端部で検出した梁間１間、桁行１間以上の東西棟の建物である。この建物は SB727・729 等と重複している。検出状況から SB729 はこれらの建物より後出する。１間（3.05 m）×１間（2.4 m）以上、面積は 7.32㎡以上、主軸方位 N10.0° E を測る。柱間は梁間 3.05 m、桁行 2.35 ～ 2.4 mを測る。柱穴掘方は円形状を呈し、径 0.3 ～ 0.45 m、深さ 0.5 ～ 0.6 mを測る。

柱穴からは土師器・須恵器片等が少量出土した。出土遺物が少ないため、SB729 の詳細な時期判断には無理があるが、検出状況や配置等から中世の建物と考えられる。

SB730（第 115 図）

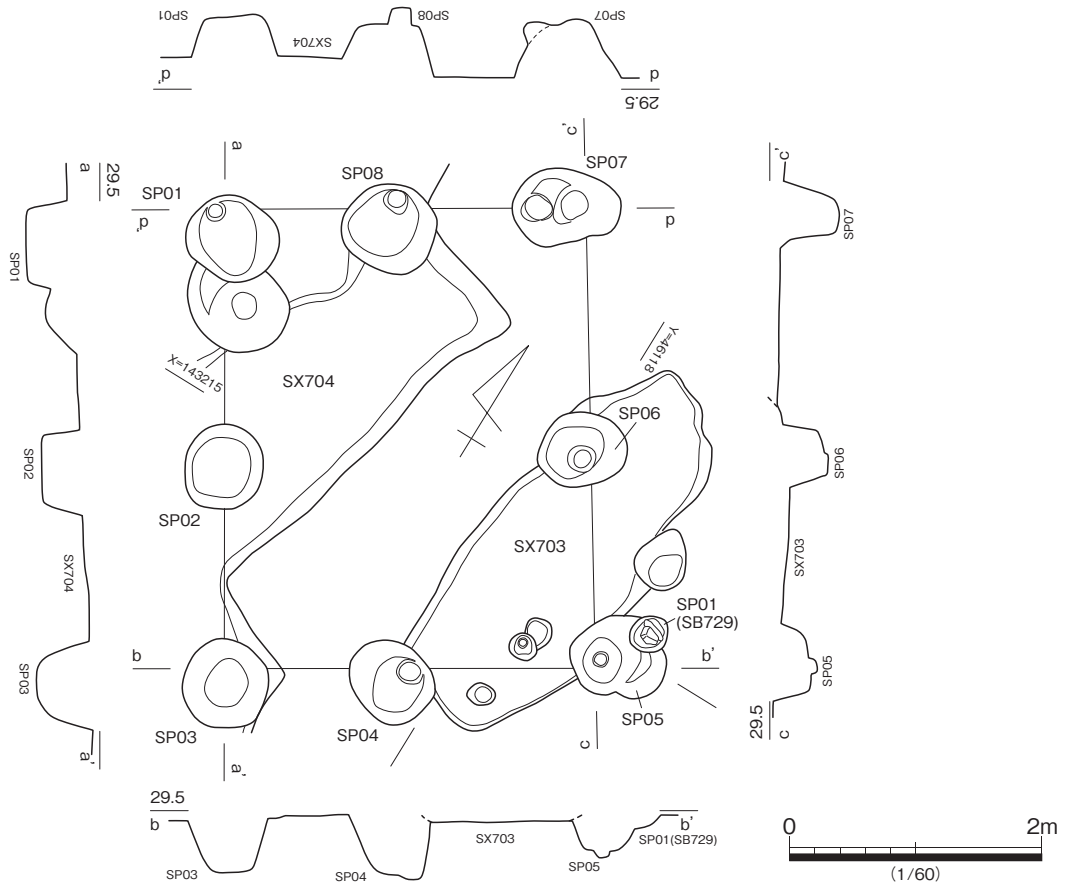
Ⅶ－３区中央部で検出した梁間２間、桁行３間の東西棟の建物である。この建物は SK703、SX704、SD710 等と重複している。検出状況から SK703 より後出し、SX704 より先行する。２間（4.3 m）×３間（5.7 m）、面積は 24.51㎡、主軸方位 N81.0° W（9.0° E）を測る。柱間は梁間 1.9 ～ 2.4 m、桁行 1.6 ～ 2.15 m を測る。柱穴掘方は円形～不整楕円形状を呈し、径 0.4 ～ 1.0 m、深さ 0.3 ～ 0.5 mを測る。

柱穴からは土師器・須恵器片等が少量出土した。出土遺物が少ないため、SB730 の詳細な時期判断には無理があるが、検出状況や配置等から古代の建物と考えられる。

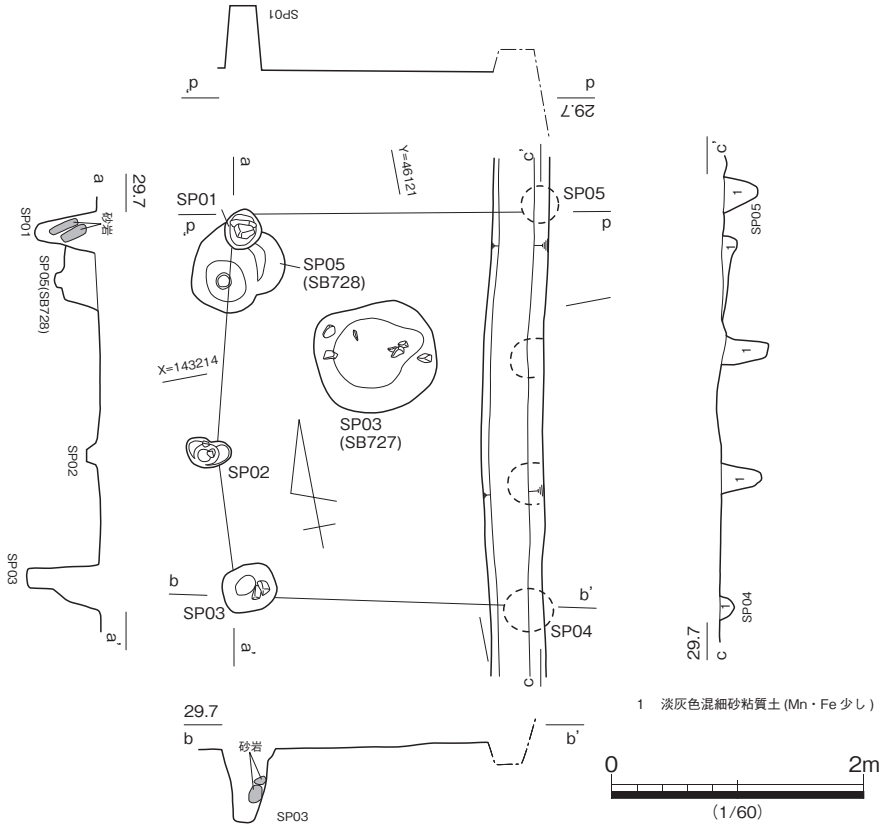
SA701（第 116 図）

Ⅶ－３区北西端部で検出した柱穴３基からなる２間の東西方向の柵列である。調査区の幅が狭いため形状は不明である。本来は南北棟の南辺ないしは北辺の梁間部分に相当する建物跡と考えられるが、根拠が乏しく柵列に区分した。２間（3.8 m）、面主軸方位 N8.0° E を測る。柱間は 1.8 ～ 2.0 m、柱穴掘方は円形を呈し、径 0.3 ～ 0.4 m、深さ約 0.1 mを測る。柱穴埋土は淡灰褐色混細砂質土からなる。

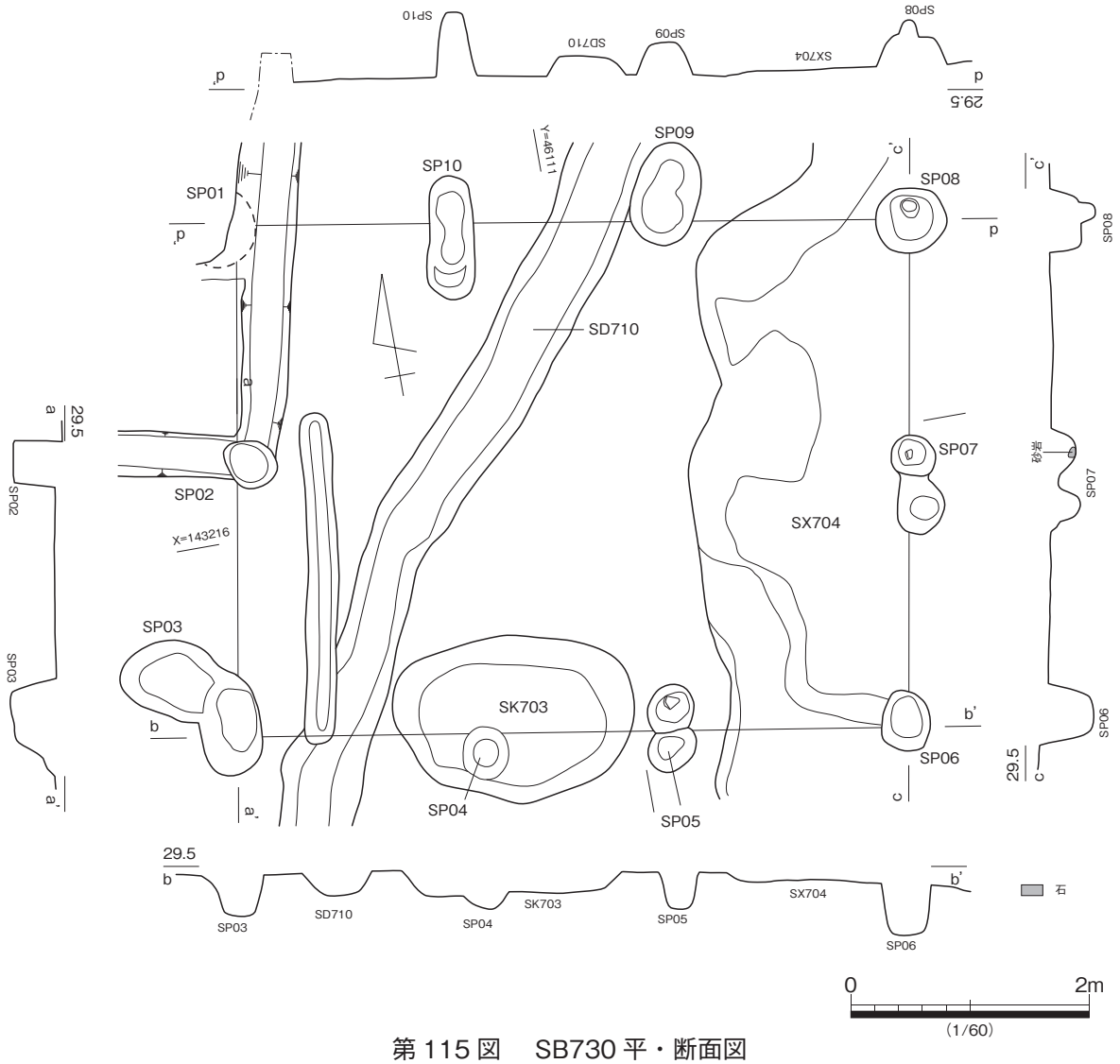
柱穴からは図化できる遺物は出土しなかった。出土遺物が少ないため、SA701 の詳細な時期判断には無理があるが、検出状況や配置等から中世の柵列と考えられる。



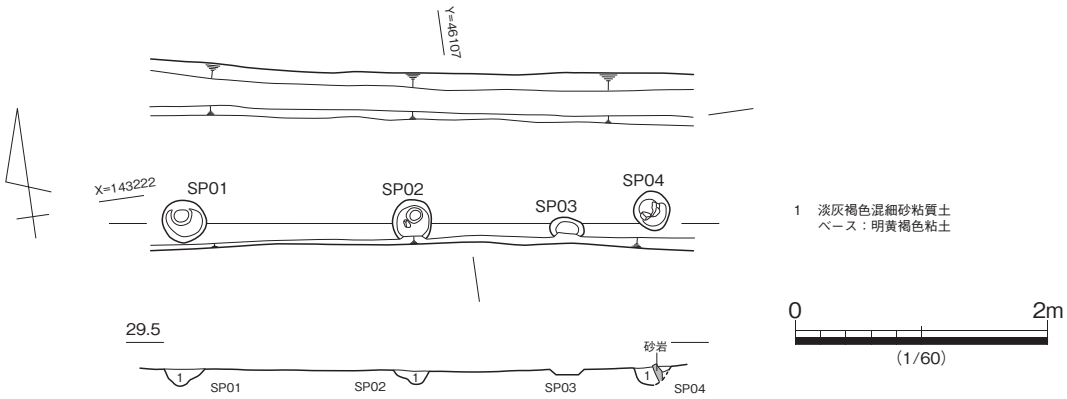
第 113 図　SB728 平・断面図



第 114 図　SB729 平・断面図



第 115 図　SB730 平・断面図

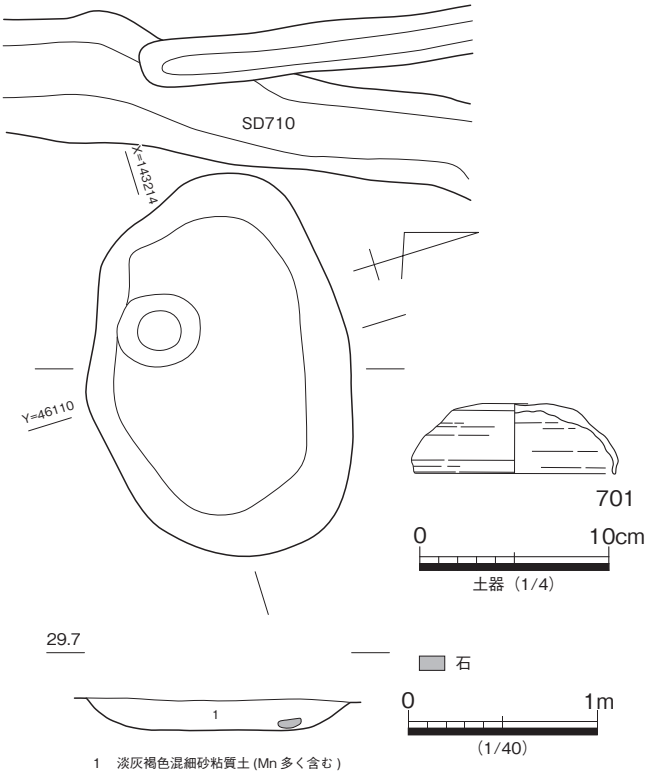


第 116 図　SA701 平・断面図

（2）土坑跡

SK703（第 117 図）

Ⅶ－3 区中央で検出した土坑である。この土坑は SB730 と重複している。平面は楕円形状、断面は皿状、底面は比較的平坦である。長径 0.22 m、短径 0.13 m、深さ 0.16 mを測る。埋土は淡褐灰色混細砂粘質土からなる。出土遺物としては、中世の土師器皿や古代の須恵器片が少量出土した。701 は須恵器の杯蓋であるが混入品であろう。



第 117 図　SK703 平・断面図，出土遺物

（3）溝状遺構

SD708（第 118 図）

Ⅶ－3 区南西端部で検出した若干湾曲気味に北西方向に延びる溝状遺構である。SD709・710 と重複し、これらの溝跡に切り込まれている。検出長約 7.0 m、幅約 0.5 m、深さ 0.2 mを測る。

埋土からは 6 世紀末～ 7 世紀初頭前後の土師器・須恵器等が出土したが、図化できる遺物は抽出できなかった。出土遺物及び SD709・710 との切り合い関係から、SD708 は 6 世紀末～ 7 世紀初頭頃の溝跡と考えられる。

SD709（第 118 図）

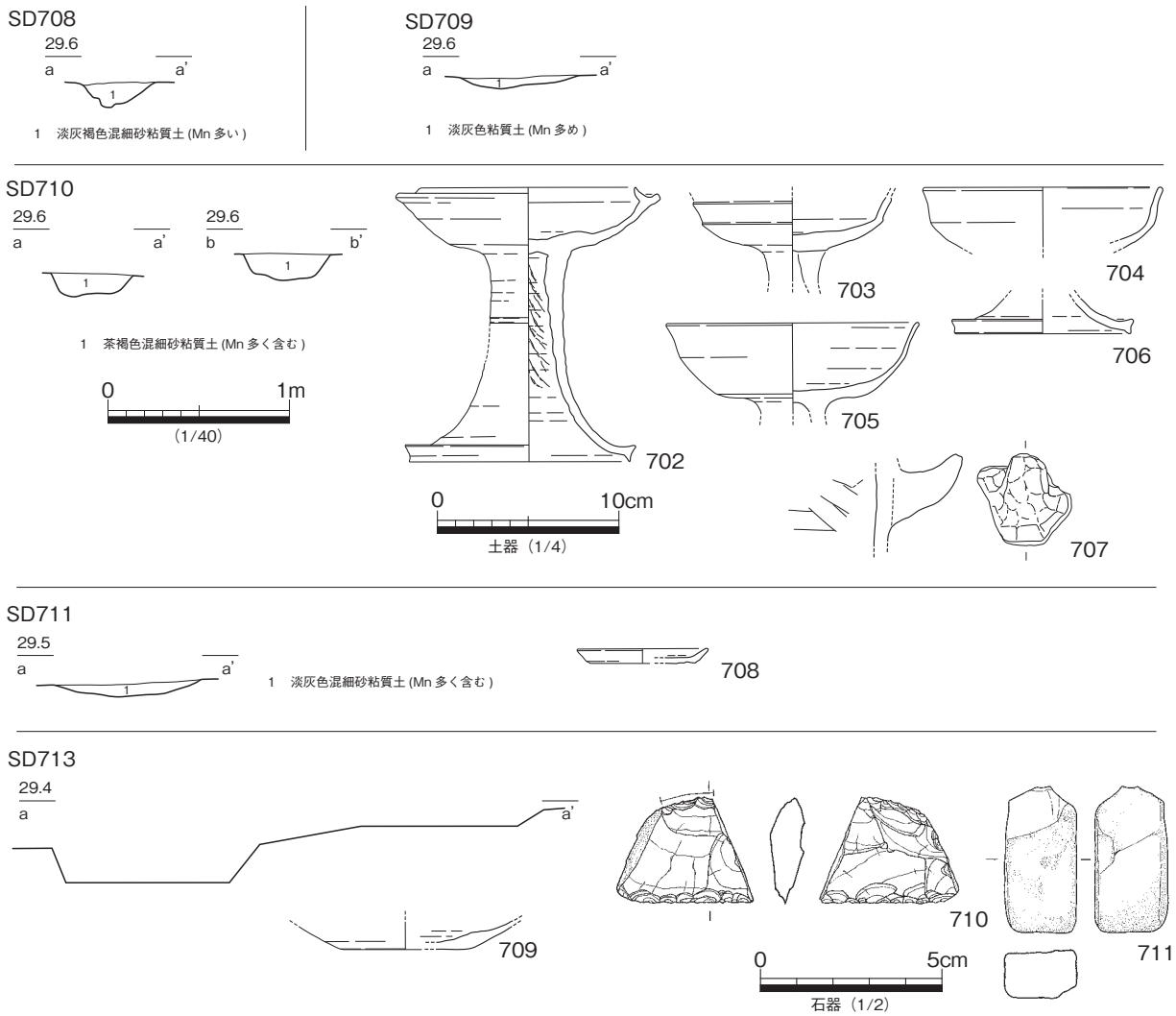
Ⅶ－3 区中央南端部で検出した条里方向に延びる溝状遺構である。SD708 と重複し、この溝跡を切り込んでいる。検出長 4.1 m、幅 0.66 m、深さ 0.06 m、方位 N7.0° E を測る。断面は皿状を呈し、埋土は淡灰色粘質土からなる。

埋土からは土師器片等が少量出土したが、図化できる遺物は抽出できなかった。出土遺物が少なく詳細な時期判断には無理があるが、配置等から SD709 は中世の溝跡と考えられる。

SD710（第 118 図）

Ⅶ－3 区中央で検出した条里方向気味に延びる溝状遺構である。SD708 と重複し、この溝跡を切り込んでいる。検出長 13.6 m、幅 0.48 ～ 0.5 m、深さ 0.12 ～ 0.14 m、方位 N24 ～ 36° E を測る。断面は不整逆台形状を呈し、埋土は茶褐色混細砂粘質土からなる。

埋土からは 7 世紀初頭前後の土師器・須恵器等が少量出土した。702 は 6 世紀末頃の TK209 並行期の須恵器長脚高杯、703 ～ 706 は TK217 並行期の須恵器高杯である。707 は土師器甕の把手片である。出土遺物から SD710 は 7 世紀初頭以降埋没した溝跡と考えられる。



第 118 図　SD708 ～ 711・713 断面図，出土遺物

SD711（第 118 図）

Ⅶ－ 3 区中央北端で検出した直線気味の溝状遺構である。SD710 と重複し、この溝は SD710 を切り込んでいる。検出長 4.8 m、幅 0.82 m、深さ 0.08 m、方位 N66.0° E を測る。断面は浅い皿状を呈し、埋土は砂混じり淡灰色粘質土からなる。

埋土からは土師器片が少量出土した。708 は 15 世紀以降の土師器小皿である。出土遺物から SD711 は中世後半に埋没した溝状遺構と考えられる。

SD713（第 118 図）

Ⅶ－ 4 区中央で検出した北西方向に延びる溝状遺構である。北端部では SD712 と部分的に交わっているが、切り合い等は不明である。形平面の形状は不整形で凹凸が顕著に認められる。検出長約 11.0 m、短径約 2.8 m以上、深さ 0.1 ～ 0.3 mを測る。形状から推定して人為的な遺構でない可能性がある。

埋土からは TK209 ～ 217 並行期の土師器・須恵器、石器片等が少量出土した。709 は須恵器杯身の底部片である。710 はサヌカイトの削器片である。711 は粘板岩製の砥石片である。出土遺物から 7 世紀初頭以降の遺構と考えられる。

（4）不整形遺構

SX704（第 119 図）

Ⅶ－3区中央で検出した不整形で浅い落ち込みである。SB728・730 等と重複し、これらの柱穴は底面上で検出した。長径 6.9 ～ 7.2 m、短径 3.4 ～ 6.2 m、深さ 0.14 ～ 0.24 mを測る。断面は浅い皿状を呈し、埋土は上下 2 層に分かれる。上層は淡灰褐色混細砂粘質土、下層は淡灰色粘質土からなる。

埋土からは中世以降の土師器・須恵器等が出土した。712 は土師器小皿、713 は土師器擂鉢、714・715 は足釜である。717 はサヌカイトの石鏃未製品で混入品であろう。716 は砂岩の凹み石片である。出土遺物より SX704 は中世後半以降の落ち込み状の遺構と考えられる。

SX706（第 120 図）

Ⅶ－4区の西南部で検出した不整形で幅広な落ち込みである。東端部では SD713 と部分的に交わっているが、切り合い等は不明である。長径 6.5 m、短径 4.7 m以上、深さ 0.1 ～ 0.3 mを測る。底面は凹凸が顕著である。埋土は 3 層に分かれ、上層から黄色ブロック混じり黒褐色粘質土、黒色粘質土、灰色粘質土などからなる。

埋土からは TK209 ～ 217 並行期の土師器・須恵器片等が出土した。718・719 は須恵器杯蓋、720・721 は須恵器高杯の脚部、722 は土師器鍋の上半部である。出土遺物より SX706 は 7 世紀初頭以降に埋没した遺構と考えられる。

（5）柱穴・包含層出土遺物

Ⅶ区の主要な遺構・遺物については先に報告したが、次にその他の柱穴出土遺物と包含層出土遺物を報告する。

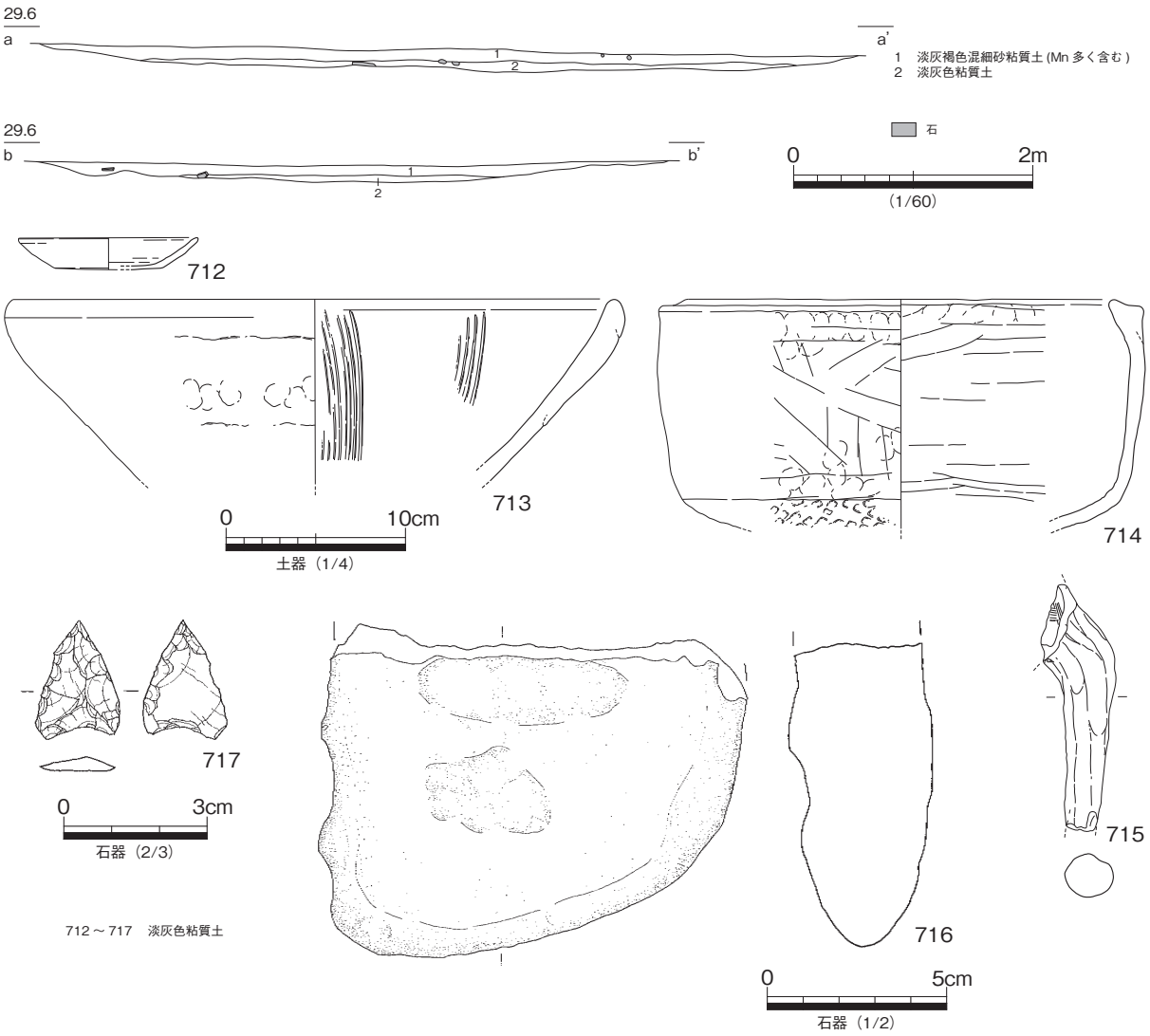
723 ～ 732 はⅦ－1区の柱穴から出土した遺物である。出土しているのは古代の須恵器が主であるが、少数弥生土器や石器類が出土している。

723 は SP1005 から出土した土師器鉢、725 は SP1304 から出土した土師器甕の口縁部片である。726 は SP1305、728 は SP1335 から出土した TK217 並行期の須恵器杯身の口縁部片である。727 は SP1315 から出土した弥生土器壺の口縁部片である。729 は SP1338 から出土した 8 世紀中頃の高台付須恵器杯である。

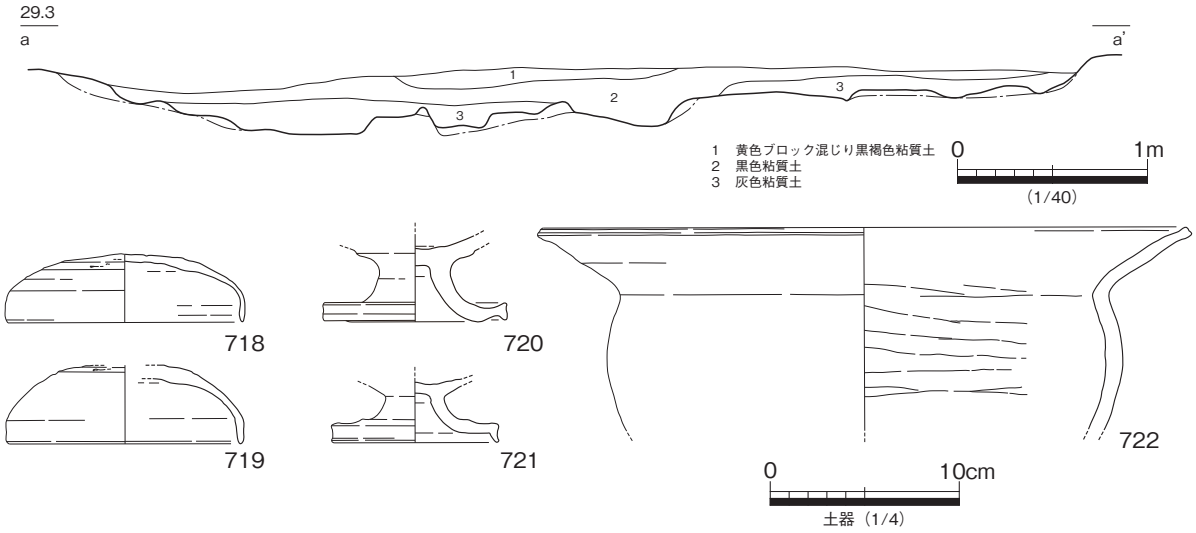
724 ～ 732 は弥生時代中期後半～後期前半頃の弥生土器である。724 は SP1301 から出土した壺底部、731・732 は SP1356 から出土した甕の底部である。

733 ～ 753 はⅦ－2区の柱穴から出土した遺物である。出土しているのは 12 世紀以降の中世土器が主体を占める。

733 は SP1001 から出土した 12 世紀頃の瓦器椀である。734・735 は SP1004 から出土した 14 世紀以降の土師器小皿、736 は SP1019 から出土した 8 世紀後半頃の須恵器杯蓋、737 は SP1031 から出土した 14・15 世紀以降の土師器小皿、738 は SP1044 から出土した土師器鉢、739 は SP1045 から出土した龍青窯跡系の青磁椀で、底部内面には「金玉満堂」の刻印が認められる。740 は SP1065 から出土した高台付須恵器杯片である。741 は SP1075 から出土した土師器小皿、742 は SP1083 から出土した土師質竈の焚口付近の小片と考えられる。743 は SP1093 から出土した黒色土器椀底部片である。744 は SP1095 から出土した土師器小皿、745 ～ 747 は SP1312 から出土した土師器小皿・杯と須恵器椀である。748



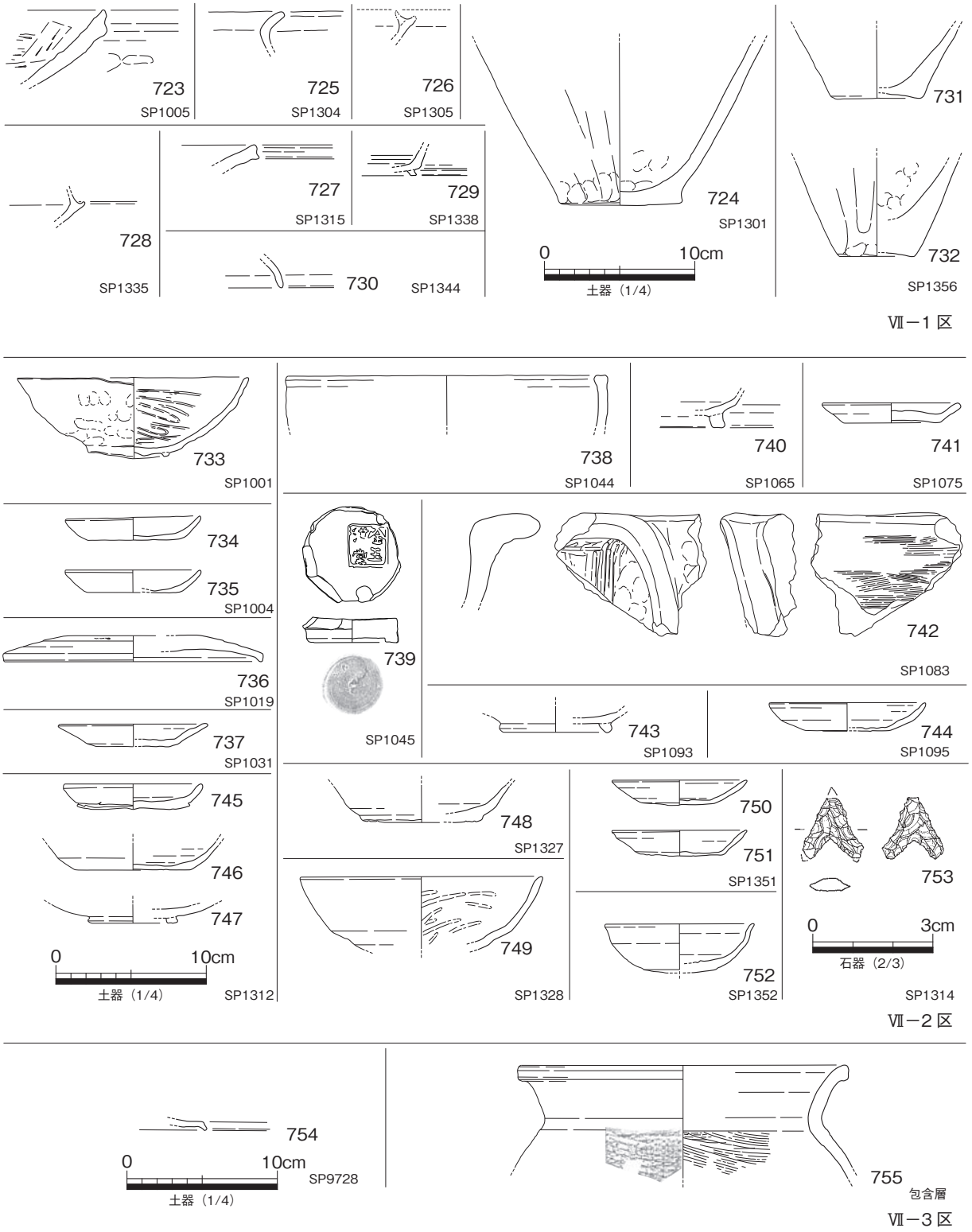
第 119 図　SX704 断面図，出土遺物



第 120 図　SX706 断面図，出土遺物

はSP1327から出土した土師器杯、749はSP1328から出土した土師器椀、750・751はSP1351から出土した土師器小皿、752はSP1352から出土した須恵器杯、753は唯一SP1314から出土したサヌカイト石鏃である。

754・755はⅦ－3区から出土遺物である。754はSP9728から出土した8～9世紀頃の須恵器杯蓋の



第121図　Ⅶ区柱穴，包含層出土遺物

口縁部片、755 は包含層から出土した須恵器甕の上半部である。

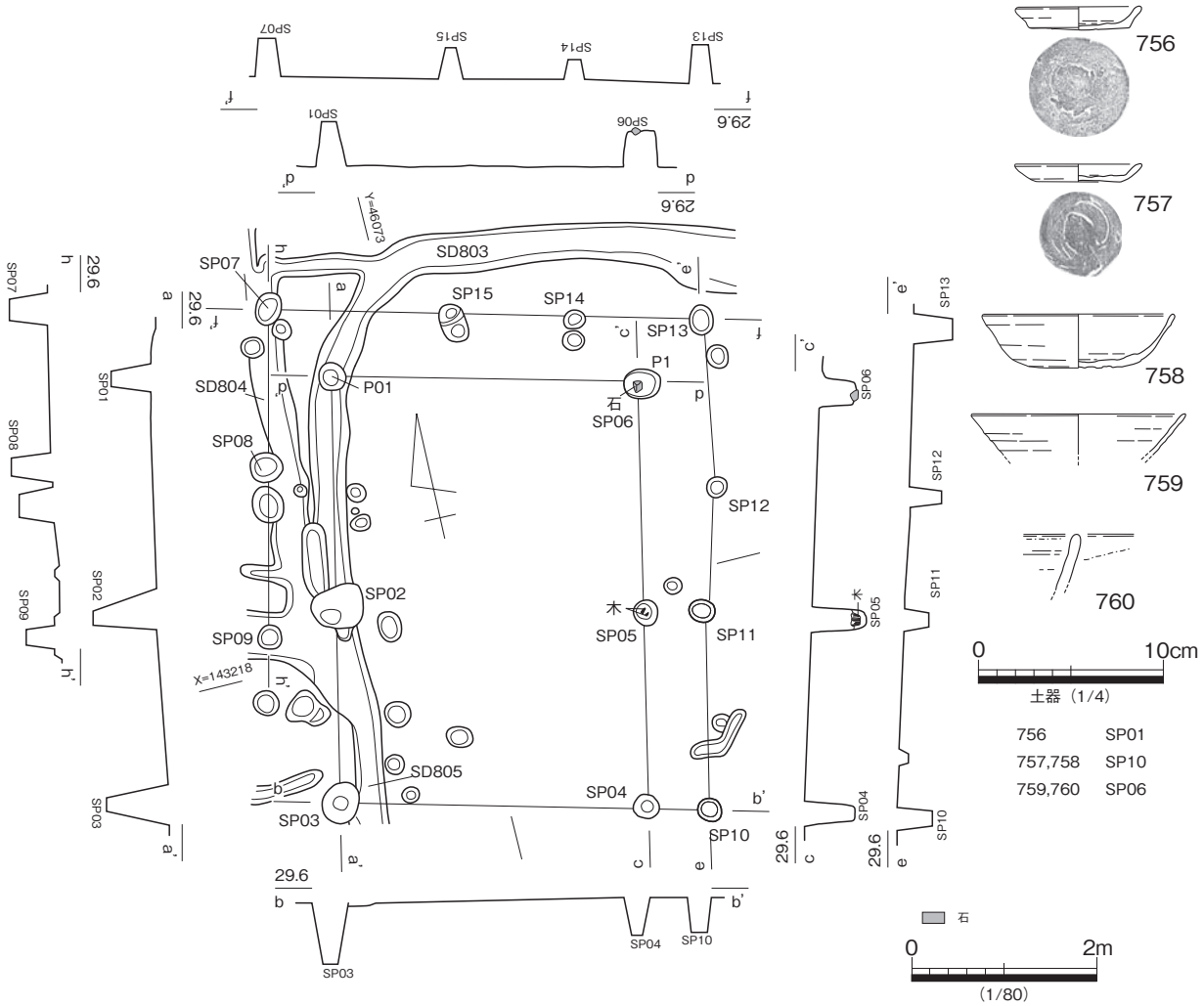
5．Ⅷ－１区の調査

（１）掘立柱建物跡

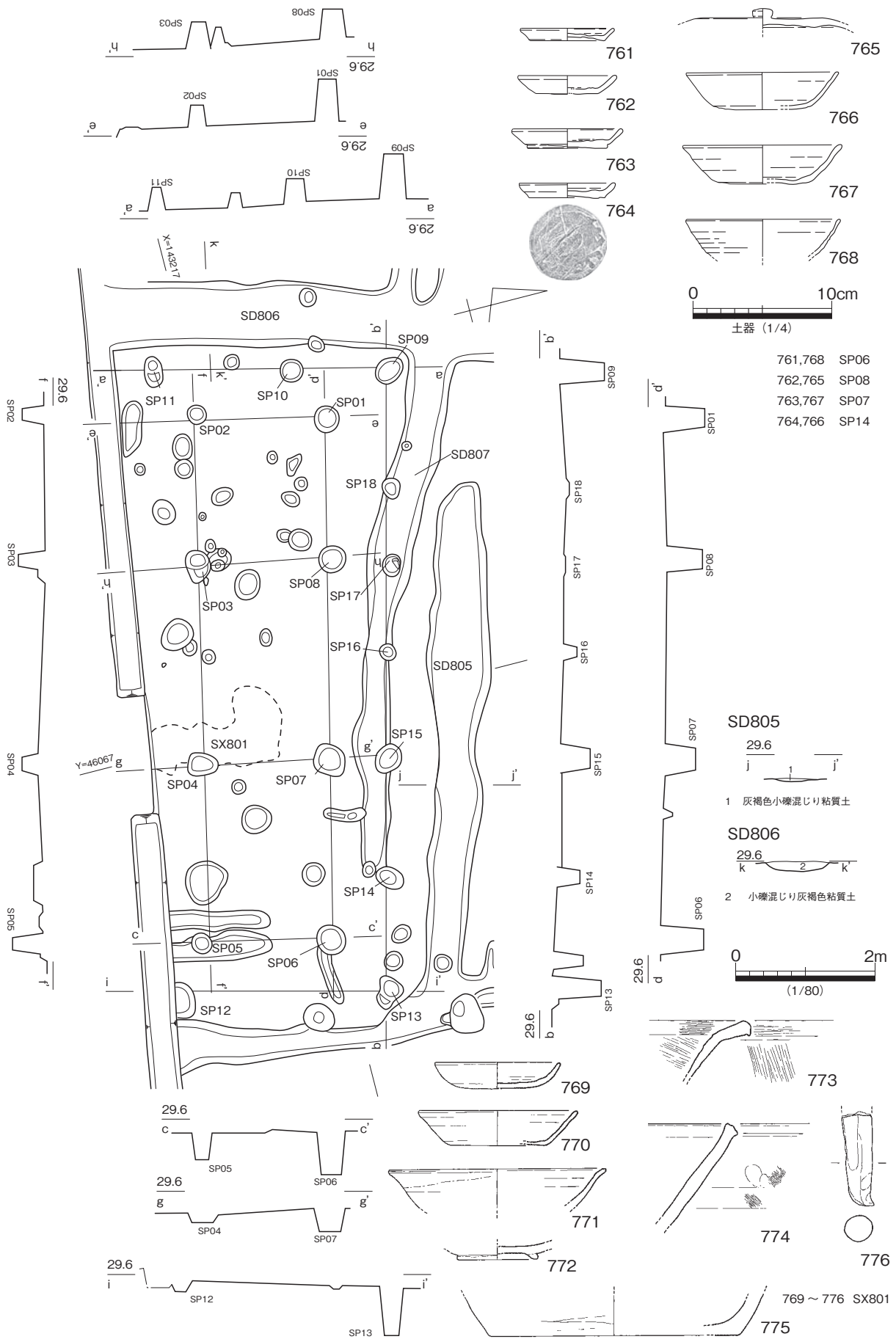
SB801（第 122 図）

Ⅷ－１区東半部で検出した梁間１間、桁行２間で南辺を除く３面に廂ないし縁側が備わる建物と考えられる。この建物は SD803・804・805 等と重複している。検出状況から SB801 はこれらの溝跡より先行する可能性が高い。１間（1.68 m）×２間（2.28 m）、面積は 3.83㎡、主軸方位 N12.0° E を測る。柱間は梁間 1.68 m、桁行 1.08 ～ 1.2 m を測る。柱穴掘方は円形状を呈し、径 0.2 ～ 0.45 m、深さ 0.35 ～ 0.5 m を測る。一部の柱穴底部には柱材及び根石を残している。なお廂は柱筋が悪く、1.5 ～ 2.2 m 間隔で配されており、身舎の柱筋に合致するものではない。そのため、縁側の可能性も指摘できる。

柱穴からは土師器・須恵器片等が少量出土した。756 は SP01 から出土した土師器小皿である。759・760 は SP06 から出土した土師器の杯の上半部と須恵器椀の口縁部片である。757・758 は SP10 から出土した土師器小皿と杯である。出土遺物や検出状況から SB801 は、12 ～ 13 世紀以降の建物跡と考えられる。



第 122 図　SB801 平・断面図，出土遺物



第 123 図　SB802，SD805・806，SX801 平・断面図，出土遺物

SB802（第 123 図）

Ⅷ－１区東半部の南壁際で検出した廂を備えた梁間１間以上、桁行３間の総柱建物で東西棟の建物跡である。南半部は調査区から外れるため約 1/2 を検出した。建物の外周には雨落溝と考えられる SD805・806 等が廂に隣接して検出した。また、この建物の北辺廂は SD807 と重複している。身舎は１間（3.0 m）以上×３間（7.46 m）、面積は 19.69㎡以上、主軸方位 N76.0° W（14.0° E）を測る。柱間は梁間 2.8 ～ 2.86 m、桁行 2.0 ～ 2.86 mを測る。柱穴掘方は円形～不整円形状を呈し、径 0.3 ～ 0.5 m、深さ 0.2 ～ 0.7 mを測り特に四隅の柱穴は深い。なお廂は柱筋が悪く、身舎の柱筋に精緻に合致するものではない。廂は３間（4.0 m）以上×６間（9.0 m）、主軸方位 N76.0° W（14.0° E）を測る。柱間は梁間 0.8 ～ 1.4 m、桁行 1.0 ～ 1.8 mを測る。

柱穴からは土師器・須恵器片が少量出土した。761 ～ 763 は土師器小皿である。761 は SP06、762 は SP08、763 は SP07 から出土した。764 は須恵器小皿で、SP14 から出土した。765 は SP08 から出土した８～９世紀頃の須恵器杯蓋の天井部である。766 は SP14、767 は SP07、768 は SP06 から出土した土師器杯である。

769 ～ 776 は床面中央で検出した不整形な落ち込みである SX801 からの出土遺物である。SX801 の上面には SB802 の柱穴が切り込んでおり、SB802 より先行する遺構であることは間違いない。そのため、これらの遺物は SB802 の上限期を推定する良資料である。

769・770 は土師器杯、771・772 は 12 世紀後半以降の須恵器椀である。２点に分かれているが本来同一個体であろう。773 は土師器鍋の口縁部片、774 は土師器鉢口縁部片、775 は須恵器鉢の底部である。776 は土師器足釜片である。

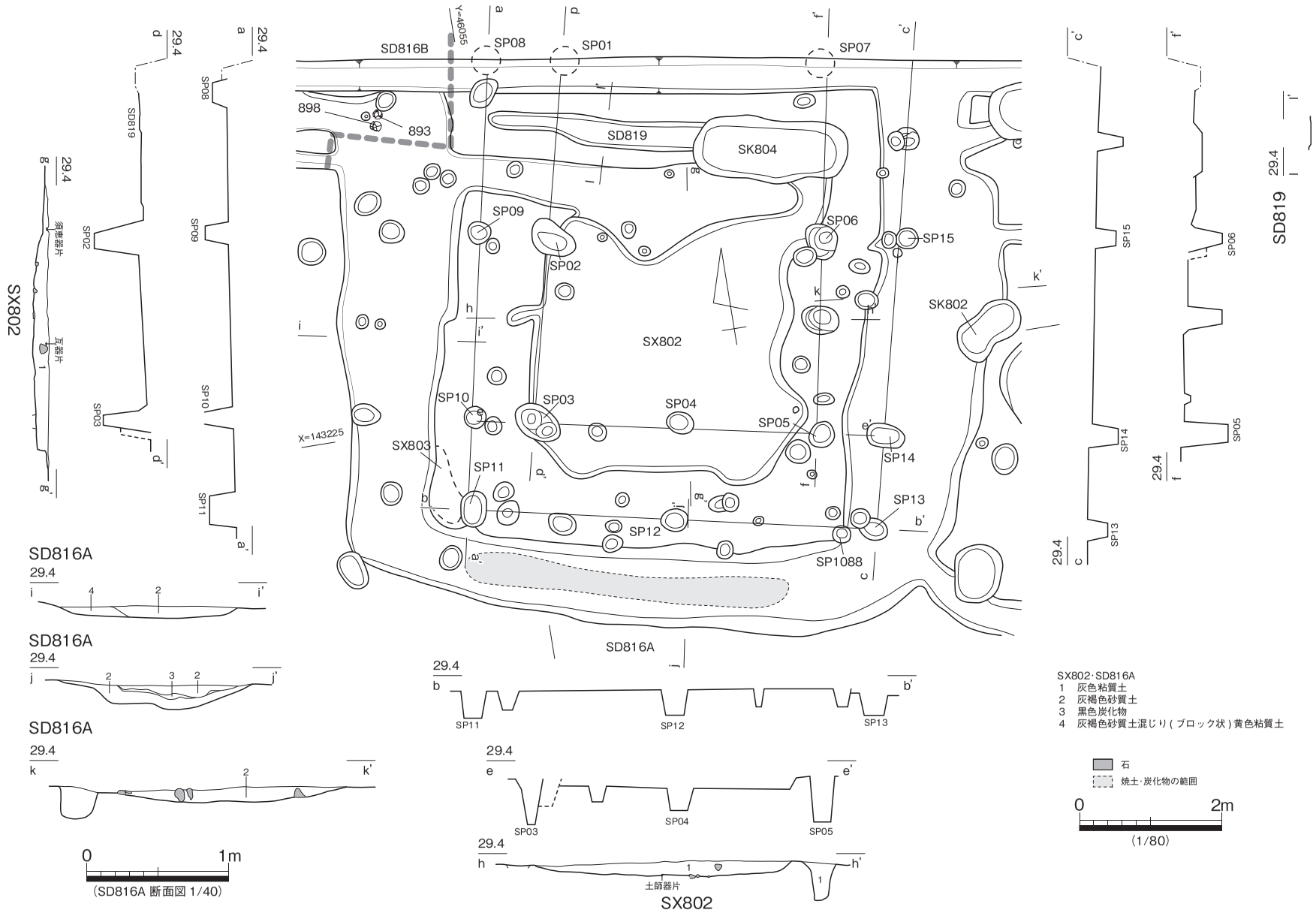
SB803（第 124・125 図）

Ⅷ－１区中央の北壁際で検出した廂を備えた梁間２間、桁行２間以上の南北棟の建物跡である。

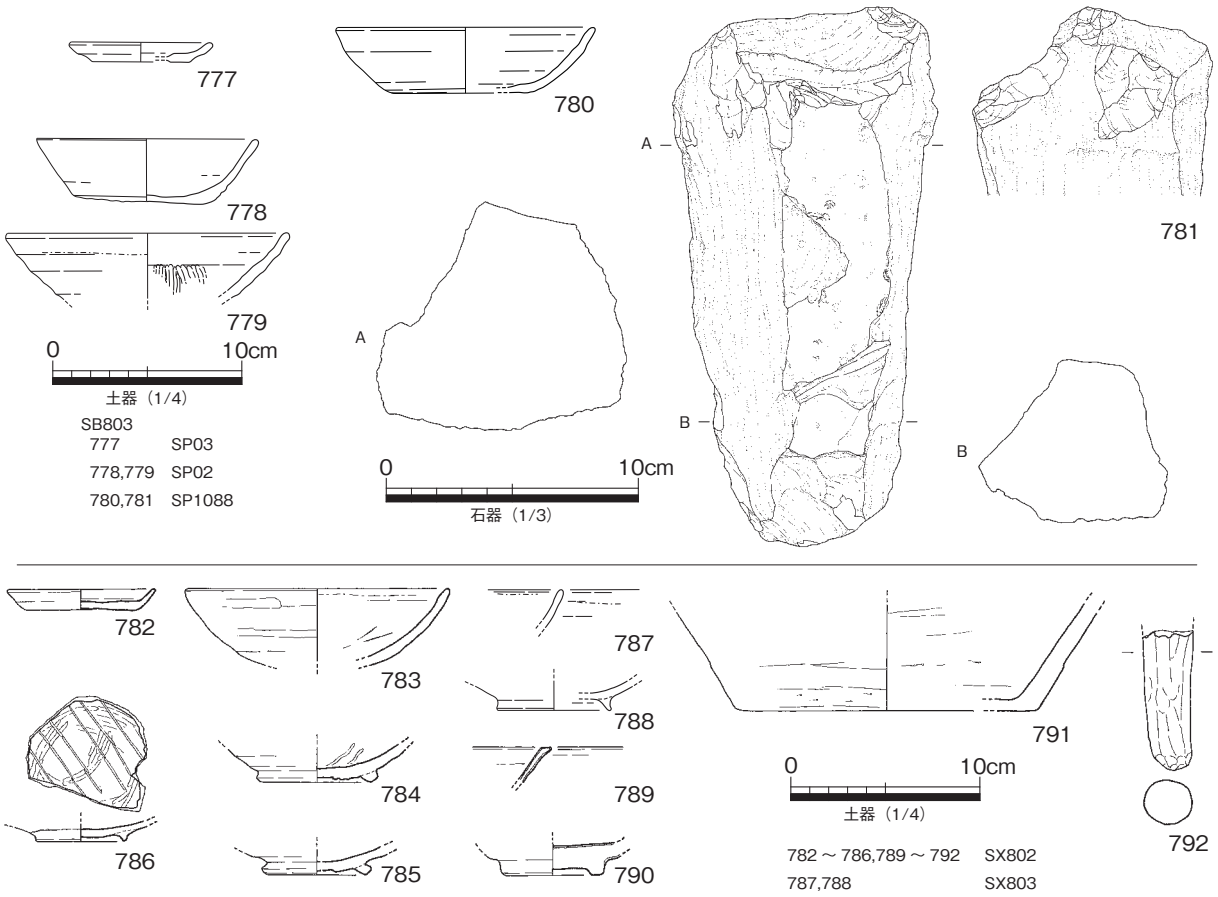
北半部は調査区から外れるため約 2/3 を検出した。廂は北半部を除き３辺で検出した。廂の外周には雨落溝と考えられる SD816A を検出した。また、この建物は SD819、SX802・803 等と重複している。特に SX802・803 は不整形で浅い落ち込みで、身舎の南半部の大部分を占めており、検出状況から建物を建てる際の整地層の可能性がある。２間（4.0 m）×２間（5.2 m）以上、面積は 20.8㎡以上、主軸方位 N11.0° E を測る。柱間は梁間 2.0 m、桁行 2.4 ～ 2.6 mを測る。柱穴掘方は円形～不整円形状を呈し、径 0.4 ～ 0.7 m、深さ 0.5 ～ 0.7 mを測り特に四隅の柱穴は深い。廂は２間（5.7 m）×３間（6.5 m）以上、主軸方位 N11.0° E を測る。柱間は梁間約 2.8 m、桁行 1.2 ～ 2.7 mを測る。

SB803 の時期を判断する遺物としては、柱穴や床面で検出した SX802、建物の周囲で検出した雨落溝 SD816 出土遺物などがある。柱穴からは土師器・須恵器、サヌカイト原石等が出土した。777 は SP03 から出土した土師器小皿、778・779 は SP02 から出土した須恵器の杯と椀である。780・781 は SP1088 から出土した土師器杯及びサヌカイトの原石素材である。781 は柱穴の詰石として使用されたサヌカイト原石素材と考えられるが、本来は石器の素材として搬入された可能性が高い。

SX802 は不整形な形状を呈し、長径 4.0 m、短径 3.9 m、深さ 0.1 mを測る。782 ～ 786・789 ～ 792 は SB803 の床面上で検出した土器で、SB803 の上限期を検討する上で重要な資料になる。782 は土師器小皿、783 は底部を欠く須恵器椀、784・785 は 12 世紀以降の須恵器椀の底部である。789 は白磁椀口縁部片、790 は青磁椀底部、791 は口縁部を欠く須恵器捏鉢、792 は土師器足釜の脚部片である。787・



第 124 図　SB803，SD816A・819，SX802 平・断面図



第 125 図　SB803，SX802・803 出土遺物

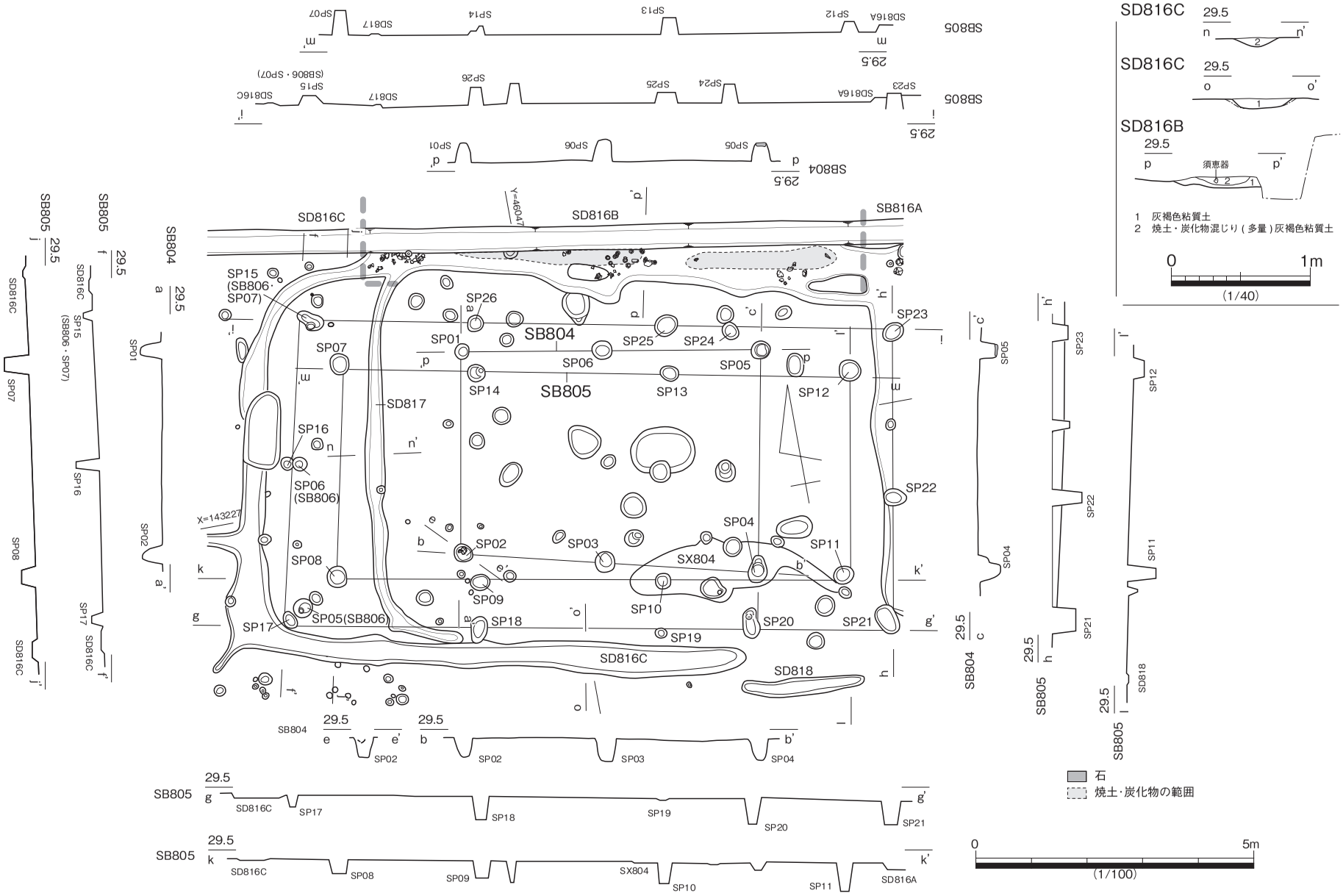
788 は SX803 から出土した土師器椀である。SB803 の柱穴や SX802・SX803 の出土遺物を総合して SB803 の時期を判断すれば、概ね 12 世紀後半以降の時期が考えられる。

SB804（第 126・127 図）

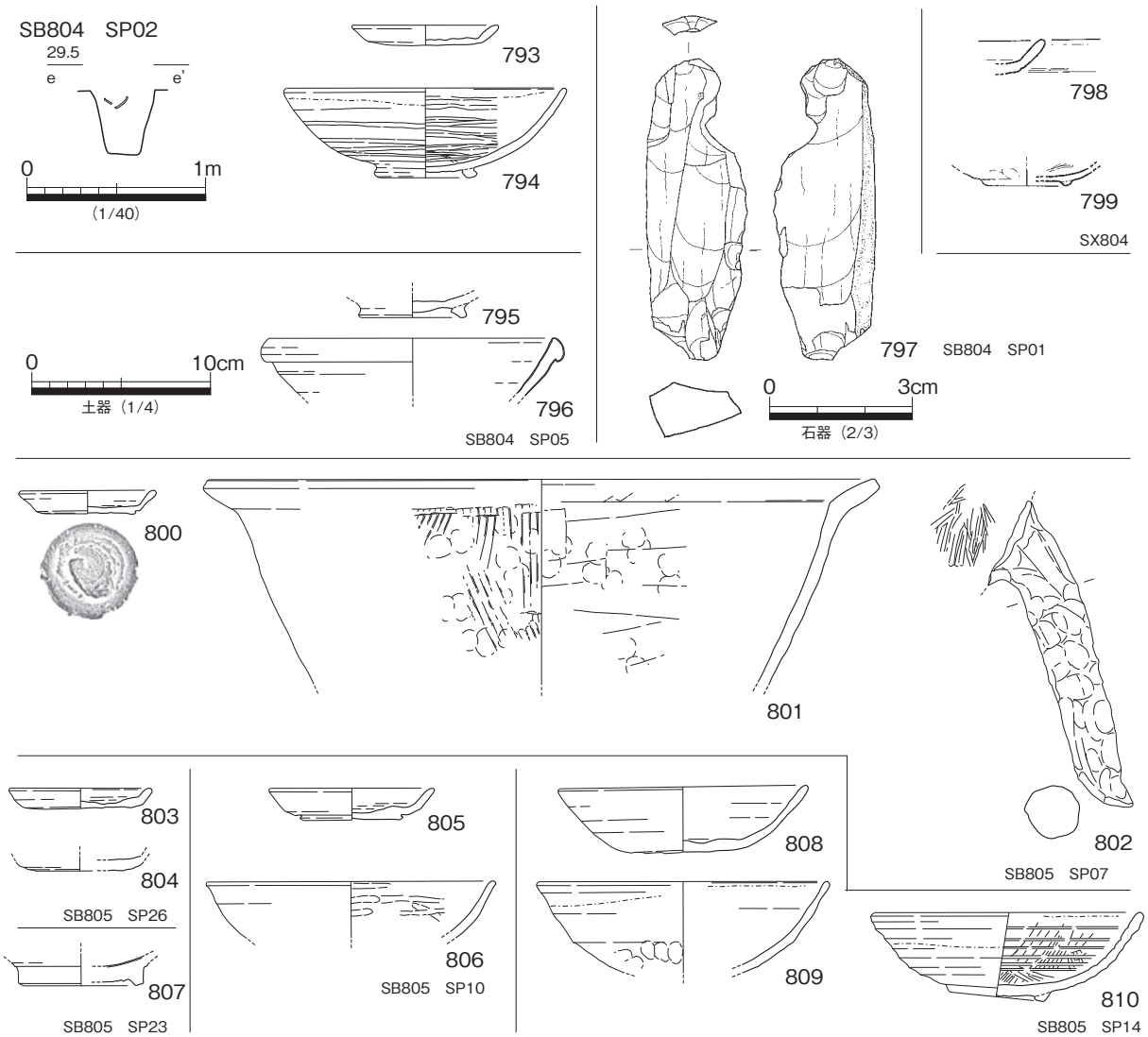
Ⅷ－１区西半部、SB803 の西側、SB806 の東側で検出した梁間 1 間、桁行 2 間の東西棟の建物跡である。この建物は SB805 と重複しているが、柱穴同士の切り合いが認められないため、遺構から前後関係を明らかにすることはできない。SB804 の外周にはこの建物の雨落溝と考えられる SD816・817 が隣接して検出した。1 間（4.0 m）× 2 間（5.4 m）、面積は 20.52㎡、主軸方位 N80.0° W（10.0° E）を測る。柱間は梁間 3.6 ～ 4.0 m、桁行 2.6 ～ 2.8 m を測る。柱穴は円形～不整円形を呈し、径 0.25 ～ 0.5 m、深さ約 0.4 m を測り、根石を据えた柱穴も認められる。

なお、SB804・805 の南東隅周辺には不整形で浅い落ち込み状の遺構 SX804 が所在し、SB804・805 の柱穴は SX804 を切り込んでおり、ここから出土する遺物は SB804・805 の上限期を推定する補足資料になる。また、SB804・805 の外周には雨落溝跡 SD816・817 が巡り、多量の遺物が出土しているが、雨落溝の遺物については次項で報告する。

柱穴からは土師器・須恵器・黒色土器・白磁、石器類等が出土した。793・794 は SP02 から出土した土師器小皿と 13 世紀前半以降の須恵器椀である。795・796 は SP05 から出土した黒色土器椀の高台部と白磁鉢の上半部である。797 は SP01 から出土したサヌカイト縦長剥片である。背面には先行して剥離された縦長状の剥片剥離痕を残し、側面部には平坦な素材面、打面には打面調整を顕著に残している。



第 126 図　SB804・805，SD816B・816C 平・断面図



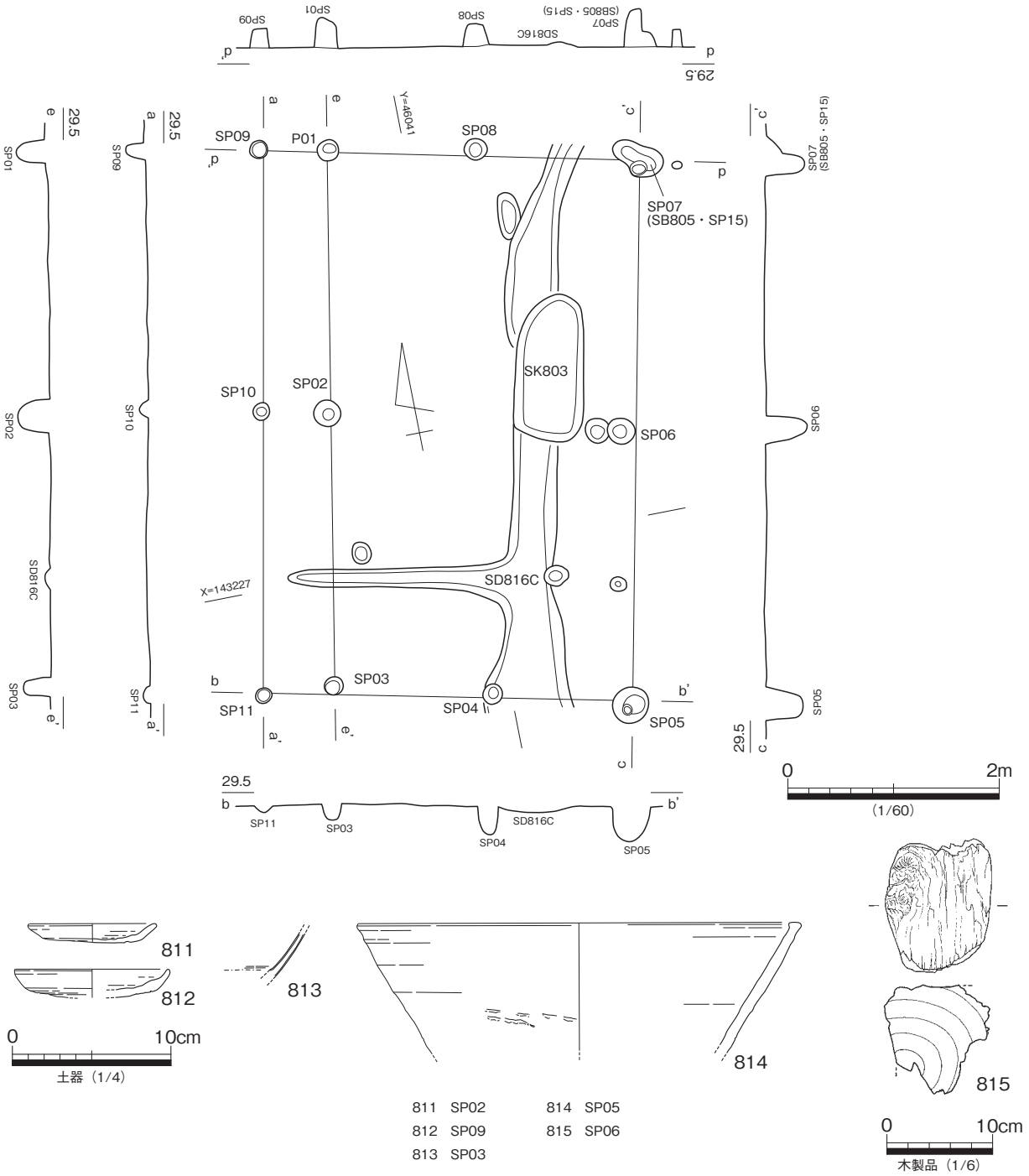
第 127 図　SB804・805 断面図，出土遺物

798・799 は SX804 から出土した土師器小皿と 13 世紀以降の瓦器椀底部である。出土遺物から SB804 は 13 世紀前半以降の時期が考えられる。

SB805（第 126・127 図）

Ⅷ－１区西半部、SB803 の西側、SB806 の東側で検出した廂を備えた梁間１間、桁行３間の東西棟の建物跡である。この建物は SB804 と重複しているが、柱穴同士の切り合いが認められないため、遺構から前後関係を明らかにすることはできない。廂は４面で検出した。廂の外周には雨落溝と考えられる SD816A･B･C を検出した。１間（3.8 m）×３間（9.2 m）、面積は 34.96㎡、主軸方位 N79.0° W（11.0° E）を測る。柱間は梁間 3.6 ～ 3.7 m、桁行 2.5 ～ 3.2 m を測る。廂は３間（5.4 m）×３間（10.8 m）以上、主軸方位 N78.5° W（N11.5° E）を測る。柱間は梁間約 1.3 ～ 2.5 m、桁行 3.0 ～ 3.5 m を測る。柱穴は円形を呈し、径 0.25 ～ 0.4 m、深さ約 0.2 ～ 0.5 m を測る。なお、SB804・805 の南東隅周辺には不整形で浅い落ち込み状の遺構 SX803 が所在し、SB804・805 の柱穴は SX803 を切り込んでおり、ここから出土する遺物は SB804・805 の上限期を推定する補足資料になる。また、SB804・805 の外周には雨落溝跡 SD816 が巡り多量の遺物が出土しているが、雨落溝の遺物については次項で報告する。

柱穴からは土師器・須恵器・瓦器等が出土した。800 ～ 802 は SP07 から出土した土師器小皿・鍋・足釜脚部である。803・804 は SP26 から出土した土師器小皿である。805・806 は SP10 から出土した土師器小皿と底部を欠く瓦器椀である。807 は SP23 から出土した白磁椀の高台部にあたり、削り出しの状況を顕著に残している。808 ～ 810 は SP14 から出土した土器である。808 が土師器杯、809・810 が須恵器椀である。798・799 は SX804 から出土した土師器小皿と 13 世紀以降の瓦器椀底部である。出土遺物から推定して SB805 は 13 世紀前半以降の時期が考えられる。

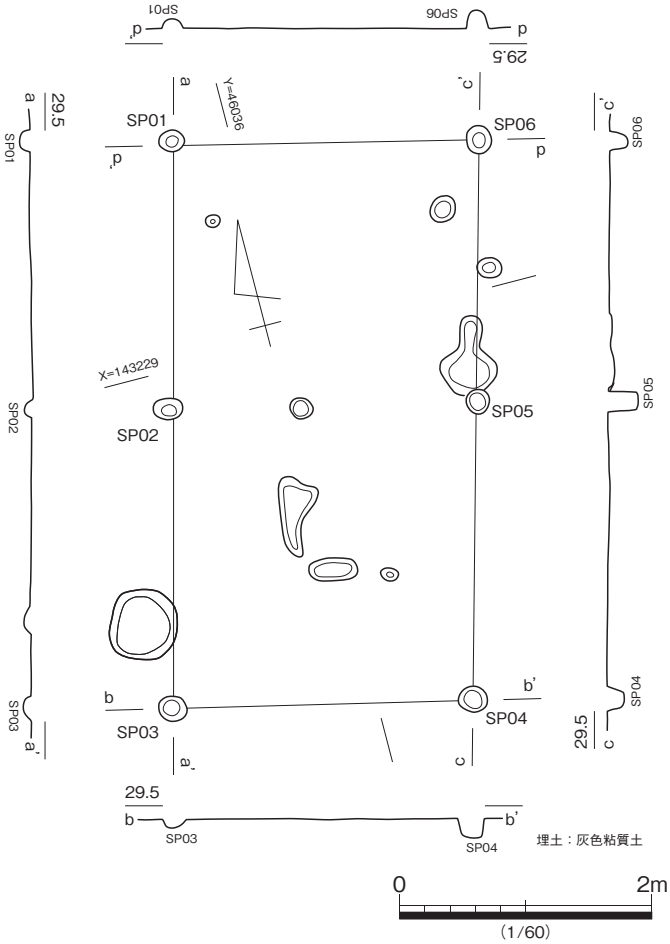


第 128 図　SB806 平・断面図，出土遺物

SB806（第 128 図）

Ⅷ－１区西半部で検出した梁間２間、桁行２間、西辺に廂を備えた南北棟の建物である。西には SB806、東には SB805 が隣接する。なお、SD816 と重複するが、切り合い関係については不明瞭である。２間（2.9 m）×２間（5.2 m）、面積は 15.08㎡、主軸方位 N11.0° E を測る。柱間は梁間 1.3 ～ 1.5 m、桁行 1.68 m～ 1.74 mを測る。柱穴掘方は円形～不整円形状を呈し、径 0.1 ～ 0.3 m、深さ 0.1 ～ 0.3 mを測る。

柱穴からは土師器・須恵器・磁器、柱材等が少量出土した。811 は SP02、812 は SP09 から出土した土師器小皿である。813 は SP03 から出土した白磁椀の体部片である。814 は SP05 から出土した底部を欠く須恵器捏鉢である。815 は SP06 から出土した柱材である。出土遺物から SB806 は 13 世紀後半以降の時期が考えられる。

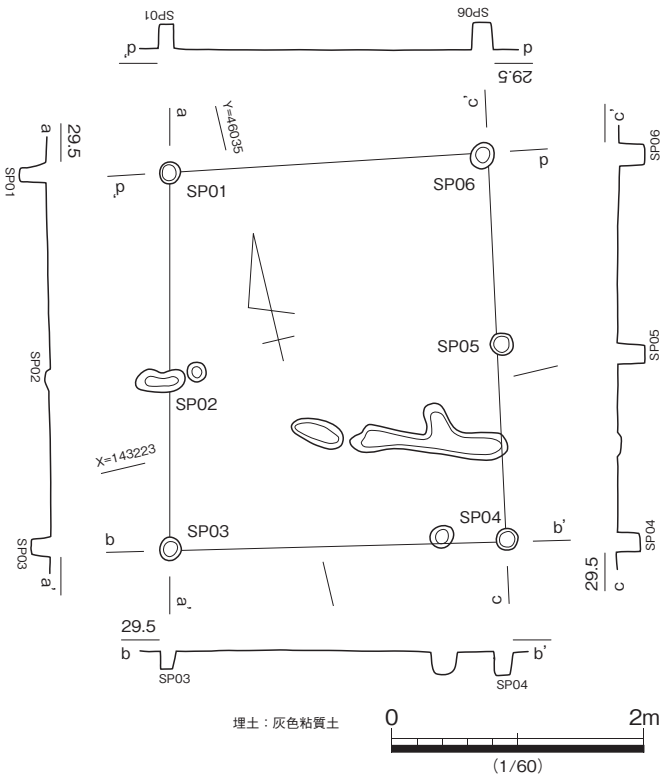


第 129 図　SB807 平・断面図

SB807（第 129 図）

Ⅷ－１区西端部で検出した梁間１間、桁行２間の南北棟である。南には SB808、東には SB806 が棟方向を合わせて隣接する。１間（2.45 m）×２間（4.4 m）、面積は 10.78㎡、主軸方位 N15.5° E を測る。柱間は梁間 2.4 m～ 2.45 m、桁行 2.1 ～ 2.4 m を測る。柱穴掘方は円形～楕円形状を呈し、径 0.2 m、深さ 0.1 ～ 0.2 mを測る。

柱穴からは古代の土師器・須恵器片等が少量出土したが、図化できる遺物は抽出できなかった。SB807 は周囲の SB806・808 等と向きを揃えて配置しており、これらの建物と類似した時期が考えられる。



第 130 図　SB808 平・断面図

SB808（第 130 図）

Ⅷ－１区西点部で検出した梁間１間、桁行２間の南北棟である。北には SB807 が

棟方向を合わせて隣接する。1 間（2.65 m）× 2 間（3.1 m）、面積は 8.21㎡、主軸方位 N10.0° E を測る。柱間は梁間 2.5 ～ 2.65 m、桁行 1.35 ～ 1.65 mを測る。柱穴掘方は円形～楕円形状を呈し、径 0.2 ～ 0.4 m、深さ 0.05 ～ 0.2 mを測る。

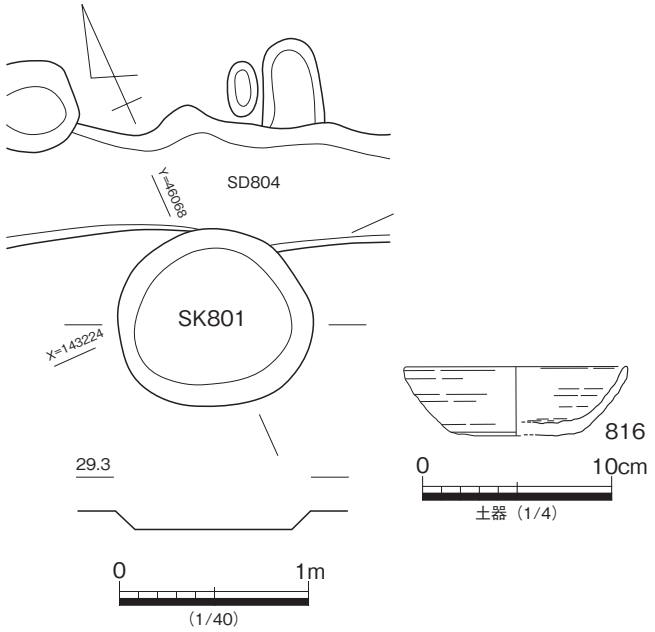
柱穴からは古代の土師器片等が数点出土したが、図化できる遺物は抽出できなかった。SB808 は周囲の SB806・807 等と向きを揃えて配置しており、これらの建物と類似した時期が考えられる。

（2）土坑跡

SK801（第 131 図）

Ⅷ－ 1 区東半部で検出した土坑である。この土坑は僅かに SD804 と重複している。平面は円形状、断面は浅い逆台形状、底面は比較的平坦である。長径 1.06 m、短径 0.92 m、深さ 0.1 mを測る。

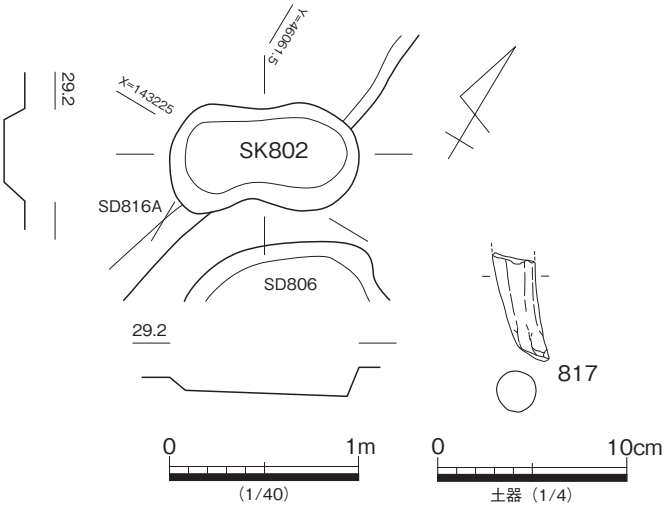
埋土からは土師器・須恵器・黒色土器片等が少量出土した。816 は SK801 から出土した須恵器杯である。出土遺物から SK801 は 12 世紀以降の時期が考えられる。



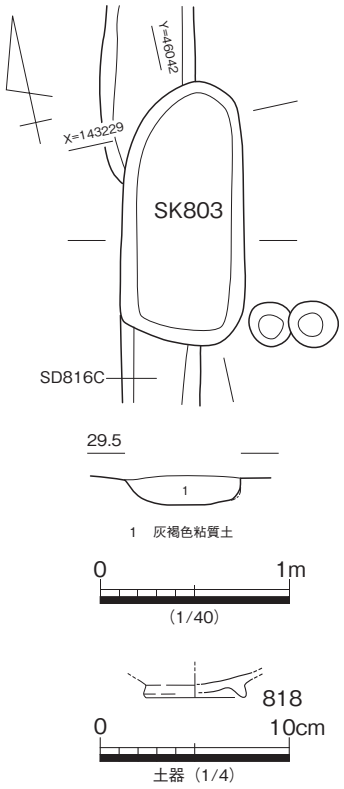
第 131 図　SK801 平・断面図，出土遺物

SK802（第 132 図）

Ⅷ－ 1 区中央で検出した SD816A と重複している土坑である。平面は楕円形状を呈し、断面は浅い逆台形状、底面は比較的



第 132 図　SK802 平・断面図，出土遺物



第 133 図　SK803 平・断面図，出土遺物

平坦である。長径 1.0 m、短径 0.6 m、深さ 0.1 mを測る。

埋土からは土師器・須恵器片が極少量出土した。817 は SK802 から出土した土師器足釜の脚部片である。出土遺物が少なく詳細な時期判断には無理があるが、概ね中世以降の時期が考えられる。

SK803（第 133 図）

Ⅷ－１区西半部の SD816B の上面を切り込んでいる土坑である。平面は楕円形状を呈し、断面は幅広で浅い U 字状を呈する。埋土は灰褐色粘質土からなり、長径 1.42 m、短径 0.66 m、深さ 0.16 mを測る。埋土からは土師器・須恵器・黒色土器・青磁片等が少量出土した。818 は 12 世紀前後の黒色土器椀の高台部である。

（３）溝状遺構

SD801（第 134 図）

Ⅷ－１区北東端部のコーナーで検出した真北方向に延びる溝状遺構である。南端部では SD803 に切り込まれている。検出長約 6.0 m、幅約 0.56、深さ 0.16 m、方位 N3.0° W を測る。断面は浅い椀状を呈し、上層は暗褐色粘質土、下層は灰色小礫混じり砂質土からなる。

埋土からは土師器・須恵器片が少量出土した。819 は底部を欠く土師器杯である。820 は口縁部を欠く須恵器椀である。出土遺物から SD801 は 12 ～ 13 世紀以降に埋没した溝状遺構と考えられる。

SD802（第 134 図）

Ⅷ－１区東端部で検出した真北気味に延びる直線溝である。北端部では SD803 に切り込まれているが、その延長に位置する SD801 とは、一時期共存する可能性もあるが詳細な関係は不明である。検出長 6.6 m、幅 0.56 m、深さ 0.08 m、方位 N7.0° E を測る。

埋土からは土師器・須恵器等が少量出土した。821 土師器杯、822 は須恵器椀の高台部片である。823 は下半部を欠く土師器足釜である。824 は土師器鍋の口縁部片である。出土遺物から SD802 は連続する SD801 同様、12 世紀以降に埋没した溝状遺構と考えられる。

SD803（第 134 図）

Ⅷ－１区で多数確認した建物の周囲を囲む雨落ち溝と考えられる溝状遺構の一つである。Ⅷ－１区東南部のコーナーに位置する。北辺と西辺を画する、東西溝と南北溝の一部を検出した。区画内には、西辺の南北溝に接する状態で SB801 を検出した。区画内には主体となる建物は確認できなかった。東端部では SD801・802、西端部では SD804・805 等重複するが、前後関係としては SD805 より先行し、SD801・802 から後出する。東西溝は東半部で二股に分かれる。検出長約 9.0 m、幅 0.4 ～ 0.7 m、深さ約 0.2 m、主軸方位 N76° W（N14.0E）を測る。南北溝は東西溝から湾曲し南北の軸線にいたる。南半部では SD805 に切り込まれている。検出長約 4.2 m、幅約 0.4 m、深さ約 0.2 mを測る。断面は浅い皿状を呈し、埋土は灰褐色小礫混じり粘質土からなる。

埋土からは須恵器片が少量出土した、825 は底部を欠く古代の須恵器杯であるが、おそらく混入品であろう。

SD804（第 134 図）

Ⅷ－１区で多数確認した建物の周囲を囲む雨落ち溝と考えられる溝状遺構の一つである。Ⅷ－１区東半部の先述した SD803 の南北溝と、調査区中央の SD806 の間で検出した区画溝である。雨落溝は四辺を画していると推定される。南北２辺の東西溝と東西２辺の南北溝を検出した。これらの区画溝のうち北・南辺を区画するのが SD804・807、東・西辺を画するのが、SD804・816A 等の溝跡である。区画内には数基の柱穴が分布しているが、削平によるものか、区画内には主体となる建物は確認できなかった。

SD804 東西溝 : 検出長約 9.5 m、幅 0.3 ～ 0.9 m、深さ 0.2 m、主軸方位 N68.0° W（N22.0E）を測る。SD804 南北溝は東西溝から屈曲し南北の軸線にいたる。南半部では SD805 に切り込まれている。検出長約 4.7 m、幅約 0.4 m、深さ約 0.2 mを測る。断面は浅い皿状を呈し、埋土は灰褐色小礫混じり粘質土からなる。

埋土からは須恵器片が少量出土した。826 は底部を欠く土師器杯、827 は土師器鍋の口縁部片である。

SD805（第 134 図）

Ⅷ－１区で多数確認した建物の周囲を囲む雨落ち溝と考えられる溝状遺構の一つである。推定される四辺の区画溝のうち、北辺東西溝と東・西２辺の南北溝を確認した。SD805 は北辺の東西溝と東辺の南北溝にあたる。区画内には廂を備えた SB802 の北半部を検出した。東西溝 : 検出長約 8.0 m、幅 0.5 ～ 0.9 m、深さ 0.04 m、主軸方位 N72.0° W（N18.0E）を測る。南北溝は東西溝から屈曲し南北の軸線にいたる。北半部では SD804 を切り込んでいるが明瞭な切り合いではない。検出長約 4.1 m、幅約 0.3 ～ 0.7 m、深さ約 0.1 mを測る。断面は浅い皿状を呈する。埋土は灰褐色小礫混じり粘質土からなる。

埋土からは土師器・須恵器片等が少量出土した。828・829 は土師器小皿、830 は土師器杯、831 は須恵器鉢、832 は土師器鍋の口縁部である。

SD806（第 134 図）

Ⅷ－１区中央で検出した条里地割方向に向いた比較的基準となる溝状遺構である。SD804・807 等と重複するが前後関係は明瞭ではない。検出長 13.3 m、幅 0.6 ～ 1.5 m、深さ 0.14 m、主軸方位 N16.0° E を測る。

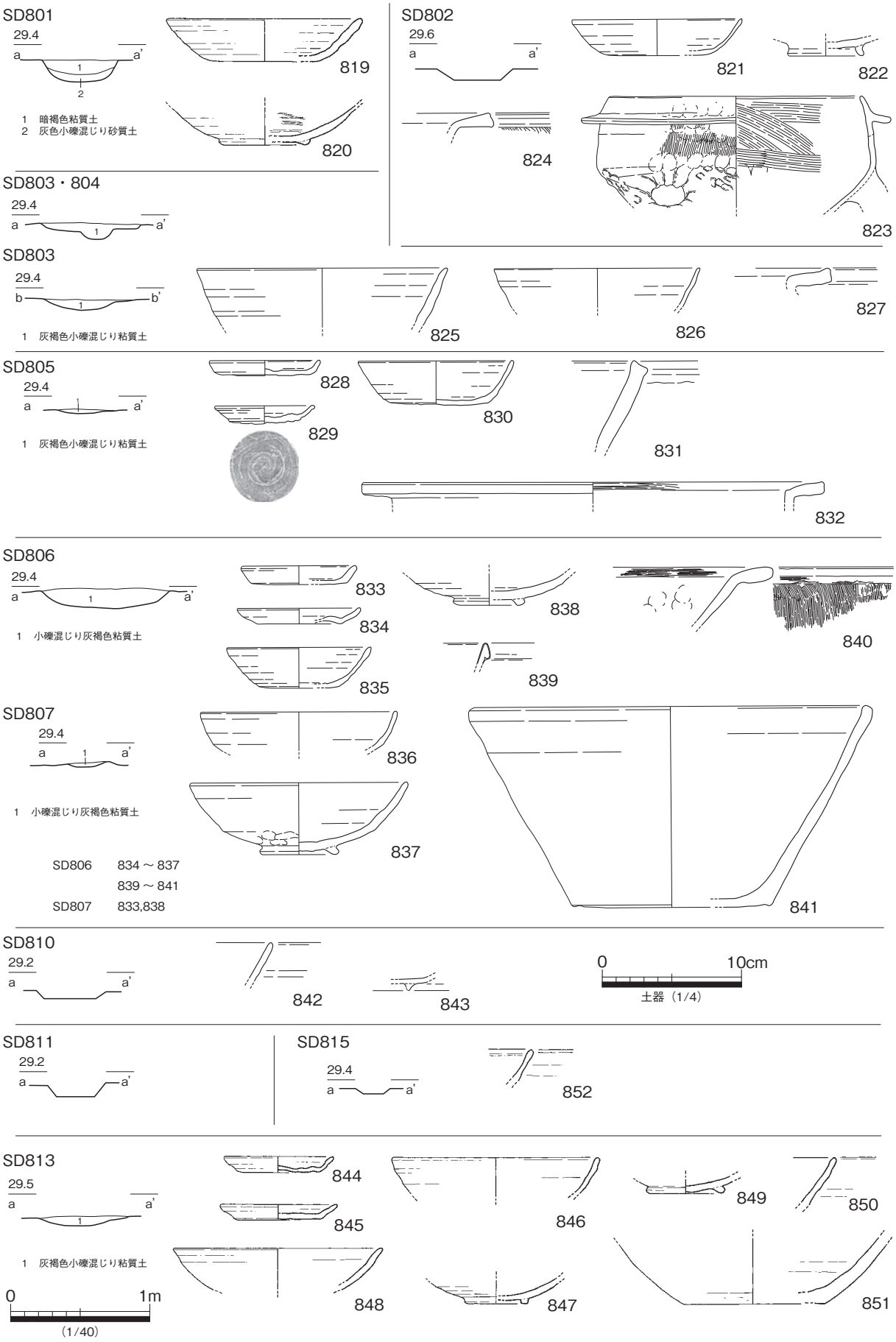
埋土からは土師器・須恵器・瓦器・陶磁器等が出土した。834 は須恵器小皿、835 は土師器杯である。836・837 土師器椀、839 は 12 世紀後半頃の白磁椀口縁部片である。840 は土師器鍋口縁部片、841 は須恵器捏鉢である。出土遺物から SD806 は 12 世紀後半以降に埋没した溝状遺構と考えられる。

SD807（第 134 図）

Ⅷ－１区で多数確認した建物の周囲を囲む雨落ち溝と考えられる溝状遺構の一つと考えられる。

推定される SD807 に係わる雨落溝としては、西辺の SD806、東辺の SD808・809、北辺の SD807 等の溝状遺構が考えられるが、これらの区画内には、雨落溝の対象となる遺構は確認できなかった。検出長約 10.0 m、幅約 0.3 ～ 0.5 m、深さ約 0.2 mを測る。断面は浅い皿状を呈する。埋土は灰褐色小礫混じり粘質土からなる。

埋土からは土師器・須恵器片等が少量出土した。833 は土師器小皿、838 は須恵器椀の底部である。出土遺物から SD807 は 12 世紀後半以降に埋没した溝状遺構と考えられる。



第 134 図　SD801 ～ 807・810・811・813・815 断面図，出土遺物

SD810（第 134 図）

Ⅷ－１区の北東端部の北壁際で検出した小規模な溝跡である。平面は不整形な形状で断面も浅い。検出長約 1.0 m、最大幅 0.5 m、深さ 0.08 mを測る。

埋土からは土師器・瓦器片等が少量出土した。842 は須恵器の杯口縁部片、843 はかなり退化した瓦器椀底部片である。出土遺物から SD810 は 13 世紀以降に埋没した溝状遺構と考えられる。

SD811（第 134 図）

Ⅷ－１区の SD810 の西側の北壁際で検出した小規模な溝跡である。西辺は SD812 が切り込んでいる。平面は不整形な形状で、断面も浅い。検出長約 1.8、最大幅 0.5 m、深さ 0.15 mを測る。埋土からは中世土師器の細片が数点出土したが、図化できる遺物はなかった。

SD813（第 134 図）

Ⅷ－１区中央の SD806 の西約 3.0 m隔てて検出した、条里地割方向に向いた比較的基準となる溝状遺構である。SD816 と重複し、切り合い関係からこの溝跡は SD816 より先行する。検出長 5.2 m、幅 0.68 m、深さ 0.08 m、主軸方位 N19.0° E を測る

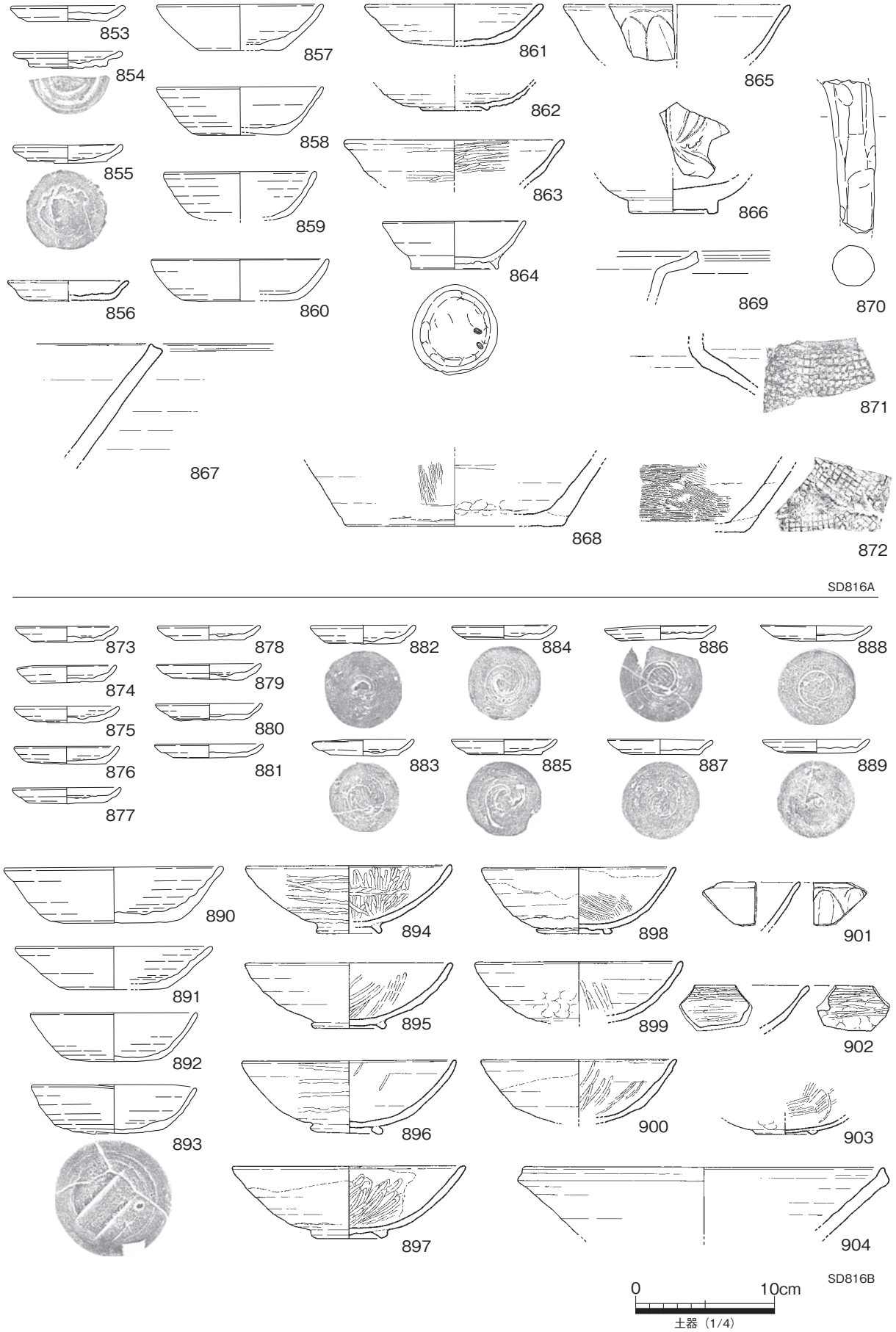
埋土からは土師器・須恵器・瓦器・瓦質土器等が少量出土した。844・845 は土師器と瓦質土器の小皿、846・847 は須恵器椀、848・849 は土師器椀、850 は瓦器椀口縁部片、851 は瓦質土器捏鉢である。椀の形状から SD813 は 12 世紀以降の時期が考えられる。

なお約 3.0 m東へ隔てた位置に同方向で同規模の SD806 が所在しているが、検出状況から推定して SD806 と SD813 は、相互に関連する遺構の可能性が高い。

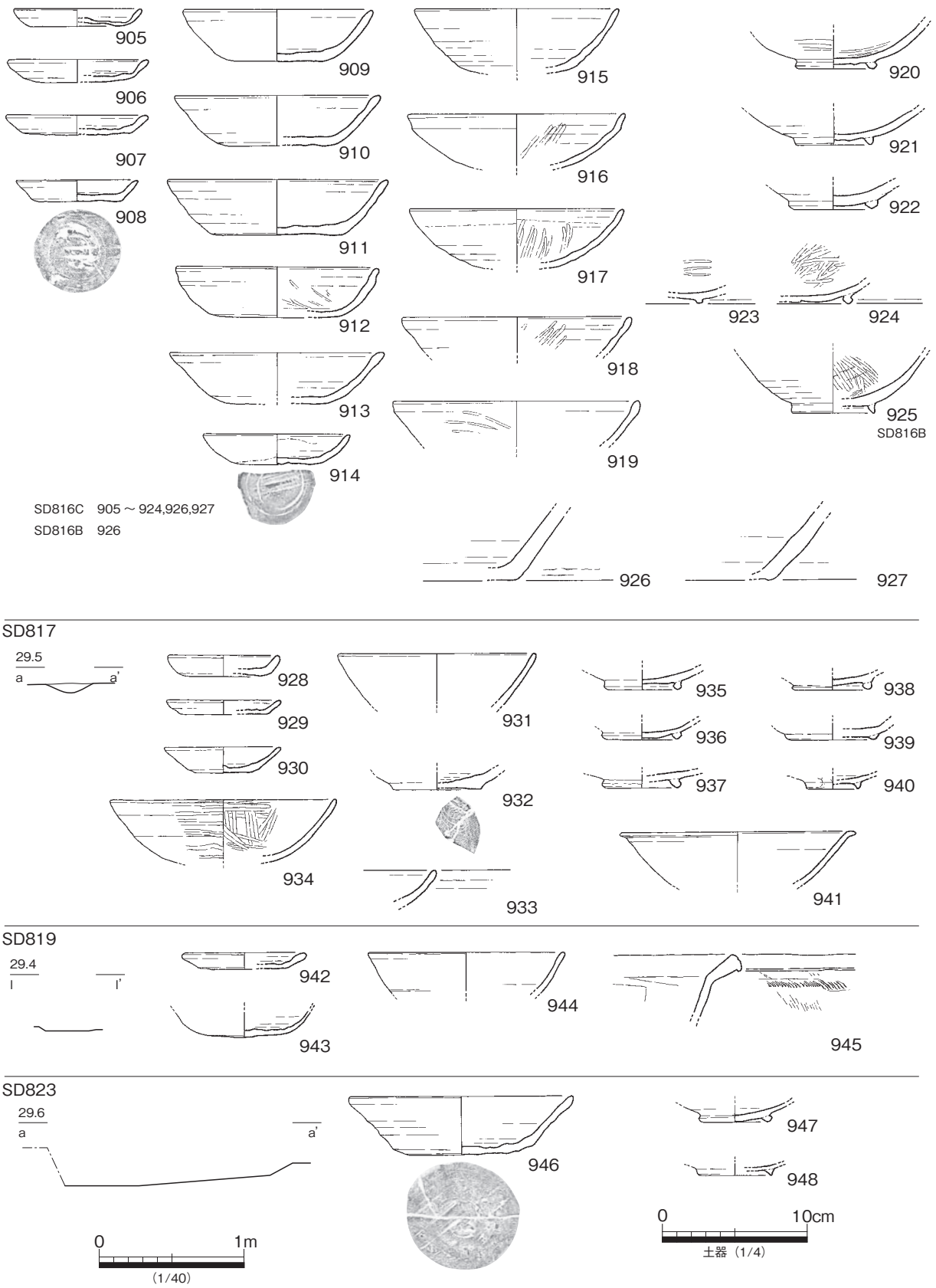
SD816（第 124・126・135 ～ 137 図）

Ⅷ－１区で多数確認した建物の周囲を囲む雨落ち溝と考えられる溝状遺構の一つで、Ⅷ－１区中央から西半部に位置する SB803･804･805 の外周を巡る雨落溝である。建物は東と西で２グループに分かれる。東方が SB803、西方が SB804・805 の２グループである。SD816 は、東西２グループの各外周を「口」字状に巡る。２グループ間を巡るため延長は長い。遺物出土状況の観察や堆積層の観察のため、便宜状東側の区画を SD816A、西側の区画を 816B・816C、合せて３区間に分けて報告することにする。

第 135 図　SD816B 遺物出土状況図



第 136 図　SD816A・B 出土遺物



第 137 図　SD816C・817・819・823 断面図，出土遺物

SD816A はSB803の東西辺と南辺を画する幅広の区画である。SD804・807・813等と重複し、切り合い関係からSD813より後出する。検出長約23.0 m、幅1.2 ～ 1.8 m、深さ0.1 ～ 0.15 m、主軸方位N10.5° Eを測る。断面の形状は浅い皿状を呈し、埋土は灰褐色砂質土が主であるが、南辺の東西溝の中間層からは焼土片・黒色炭化物が広範囲に出土した。

SD816A からは土師器・須恵器・瓦器・瓦質土器・青磁等が多量に出土した。傾向として南辺部からの出土が比較的多い。853 ～ 855は土師器小皿、856は須恵器小皿、857 ～ 860は土師器杯、861は須恵器杯、862は須恵器椀底部、863は瓦器椀上半部である。864は底に籾殻の跡が2粒程残る土師器椀、865・866は龍泉窯系の青磁椀で13世紀前半頃の土器である。867・868は須恵器と瓦質土器の捏鉢で、869は土師器鍋口縁部片、871・872は体部外面のタタキが顕著な須恵器甕片である。出土遺物から13世紀前半以降に埋没した溝状遺構と考えられる。

SD816B はSD816A から西へ屈曲する北辺の区画で、SB805の北辺の雨落溝と考えられる。なお、SB805の東辺はSD816A、西･南辺はSD816Cが画している。検出長約10.5 m、幅約1.0 m、深さ0.1 m、主軸方位N76.0W（N14.0° E）を測る。断面の形状は浅い皿状を呈し､埋土は灰褐色砂質土が主であるが､埋土中からは焼土片・黒色炭化物と伴に大量の遺物が広範囲に出土した。

SD816B からは土師器・須恵器・瓦器・青磁等が多量に出土した。873 ～ 889は土師器と須恵器の小皿である。882 ～ 889等ではヘラ切りの痕跡が顕著のため､拓本を載せた。890 ～ 893は土師器杯である。893の底部外面には板状圧痕を顕著に残す。894 ～ 900は須恵器椀である。902･903は瓦器椀片である。形状より12世紀後半以降の和泉型と推定される。901は青磁椀口縁部片で､外面には蓮弁を顕著に残す。904は底部を欠く須恵器捏鉢である。

SD816C はSD816B の西端から南へ屈曲した後、更に東に屈曲する区間で、SB805の西辺と南辺の雨落溝である。検出長約18.0 m、幅0.3 ～ 0.6 m、深さ0.1 m、主軸方位N77.0W（N13.0° E）を測る。断面の形状は浅い皿状を呈し、埋土は灰褐色砂質土が主であるが、埋土中からは焼土片・黒色炭化物と伴に大量の遺物が広範囲に出土した。

SD816C からは土師器・須恵器等が出土している。905 ～ 908は土師器小皿である。909 ～ 913は土師器杯、914は須恵器杯である。915は底部を欠く瓦器椀である。916 ～ 918は底部を欠く須恵器椀である。920 ～ 924は須恵器椀の底部である。919は底部を欠く黒色土器椀、925は口縁部を欠く土師器椀である。926は土師器、927は須恵器の捏鉢である。

SD816A ～ Cは、出土遺物から13世紀前半以降に埋没した溝跡の可能性が高い。

SD817（第137図）

Ⅷ－1区の区画溝SD806B・Cの西端を東西に分割する区画溝である。SB805と重複するSB804の雨落ち溝と考えられる。削平を受けたものと考えられ、残りは悪い。検出長約7.7 m、幅0.3 ～ 0.4 m、深さ0.1 m、主軸方位N9.5° Eを測る。

埋土からは土師器・須恵器・瓦器・白磁等が出土した。928・929は土師器小皿、930 ～ 932は須恵器と土師器の杯､933は土師器椀､934 ～ 938は須恵器椀､939･940は瓦器椀の底部片､941は白磁椀である。

SD815（第134図）

Ⅷ－1区中央の南寄で検出した東西方向で残りの悪い小規模な溝跡である。検出長1.7 m､幅0.26 m、

深さ 0.04 m、方位 N73.0° W を測る。埋土からは土師器・須恵器が少量出土した。852 は須恵器椀の口縁部片である。

SD819（第 137 図）

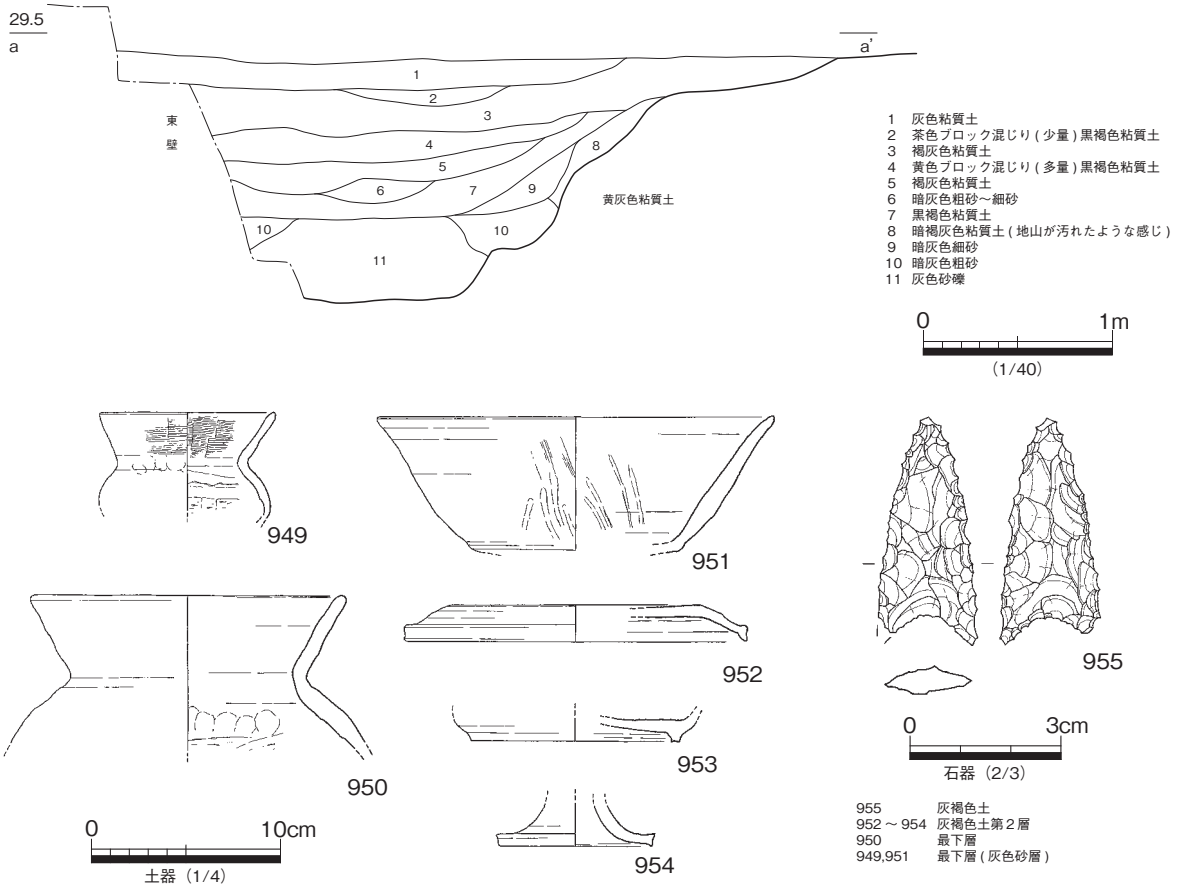
Ⅷ－１区中央北壁際で検出した東西方向の溝状遺構である。SB803 と重複しているが、切り合わない為、前後関係は不明瞭である。検出長 3.0 m、幅 0.4 m、深さ 0.02 m、方位 N75.0° W を測る。

埋土からは土師器・須恵器・瓦器が少量出土した。942 は土師器小皿、943・944 は土師器杯、945 は土師器鍋の口縁部片である。

SD823（第 137 図）

Ⅷ－１区の南西端部で検出した南北方向の幅広な溝跡である。調査区境で検出したため、全体の形状は不明瞭であるが、西隣の調査区Ⅷ－２区の SD824 の上面に至る溝状遺構と考えられる。検出長約 4.5 m、幅約 1.7 m、深さ約 0.26 m、主軸方位 N4.5° E を測る。

埋土からは土師器・須恵器・瓦器片等が少量出土した。946 は土師器杯、947・948 は須恵器と瓦器の椀底部片である。出土遺物から SD823 は 13 世紀初頭以降に埋没した溝跡と考えられる。



第 138 図　SD824 断面図，出土遺物

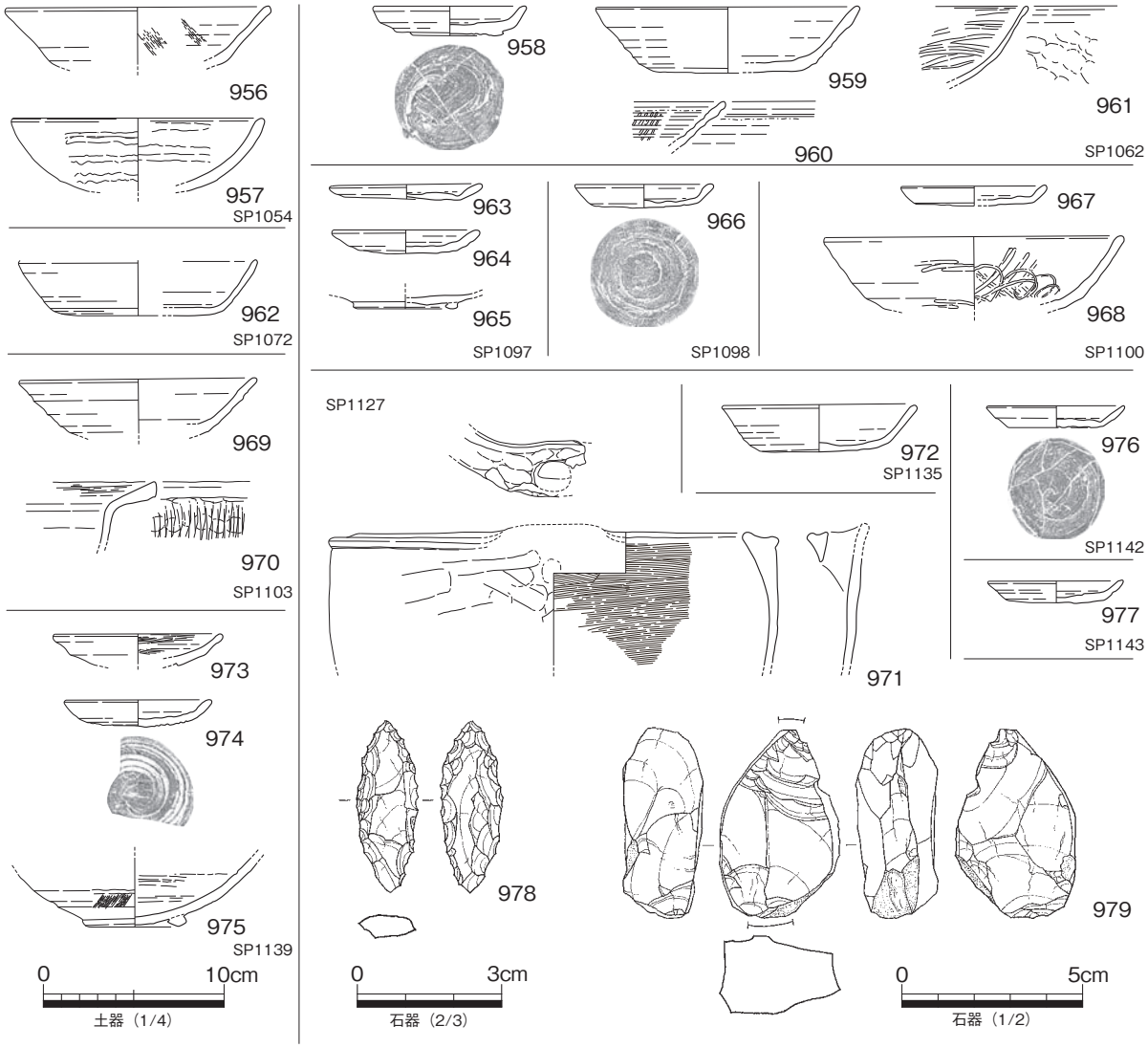
6．Ⅷ－２区の調査

（１）溝状遺構

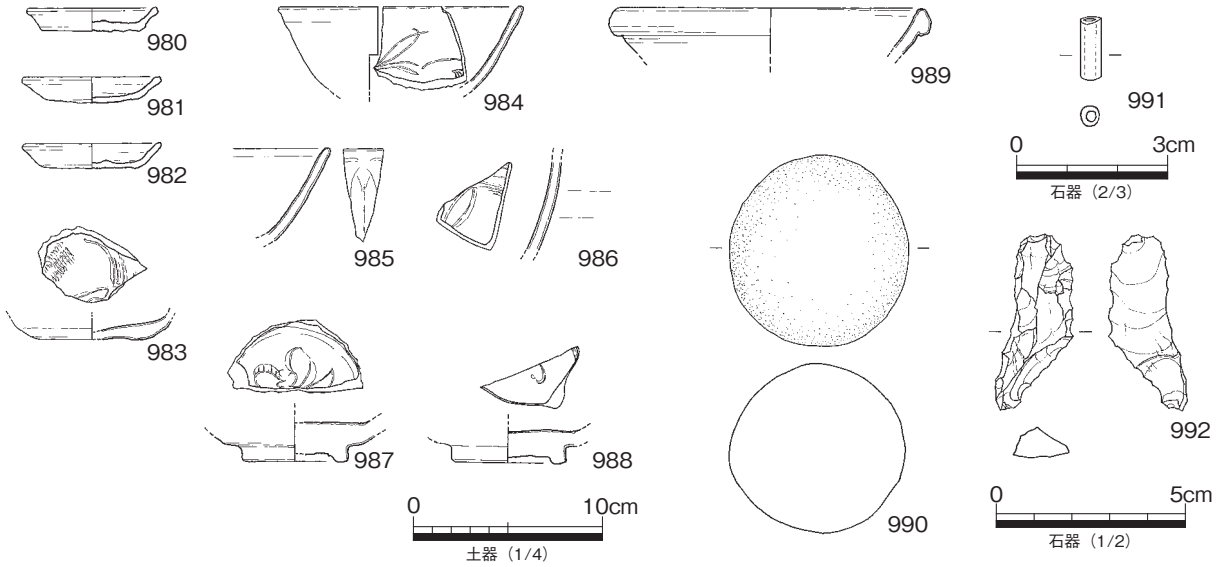
SD824（第 138 図）

Ⅷ－２区の東端部で検出した比較的大型の溝状遺構である。西に僅かに蛇行状に南北に延びる。平面は凹凸が顕著に認められる、断面の形状は、上端部は幅広で二段掘方の逆台形状を呈する。埋土は細分して 11 層に分けられるが、大別すれば上下２層に分けられる。上層は灰色～黒褐色系の粘質土が主で層厚 0.85 ｍを測る。下層は暗灰色系の砂～砂礫層が主で層厚 0.45 ｍを測る。検出長約 14.0 ｍ、幅 4.2 ｍ、深さ 1.28 ｍ、主軸方位 N17.0° W を測る。

下層からは古式土師器、上層からは７～８世紀後半頃の須恵器が多数出土している。949 ～ 951 は最下層から出土した古式土師器である。949・950 は土師器の小型丸底壺と甕、951 は脚部を欠く土師器高杯である。952 ～ 954 は上層から出土した７～８世紀後半頃の須恵器である。952・953 は須恵器杯蓋と杯身、954 は７世紀頃の須恵器高杯の脚部である。955 はサヌカイトの石鏃で優品である。おそらく下層から出土したものであろう。



第 139 図　Ⅷ区柱穴出土遺物



第 140 図　Ⅷ区包含層出土遺物

出土遺物のうえで、上層と下層で時期が異なることから、SD824 は古墳時代前期初頭頃に開削され、その後埋没していたものを、7 ～ 8 世紀後半頃に改修したものと考えられる。また、この溝跡は規模的な点で当地周辺の基幹水路の一つと考えられる。

（2）柱穴・包含層出土遺物

Ⅷ－ 1・2 区の主要な遺構・遺物については先に報告したが、次にその他の柱穴出土遺物と包含層出土遺物を報告する。

956 ～ 979 はⅧ－ 1 区の柱穴出土の遺物である。956・957 は SP1054 から出土した土師器杯・須恵器椀である。958・959 は SP1062 から出土した土師器小皿・杯、960 は須恵器椀口縁部片、961 は瓦器椀片である。962 は SP1072 から出土した土師器杯である。963 ～ 965 は SP1097 から出土した土師器小皿・瓦器椀の高台部である。966 は SP1098 から出土した土師器小皿、967・968 は SP1100 から出土した須恵器小皿、底部を欠く黒色土器椀である。椀の内面には円弧状の暗文が顕著に施されている。969・970 は SP1103 から出土した土師器杯・鍋で、971 は SP1127 から出土した土師器足釜である。972 は SP1135 から出土した土師器杯、973 ～ 975 は SP1139 から出土した瓦器小皿、土師器小皿、須恵器椀である。976 は SP1142 から出土した土師器小皿、977 は SP1143 から出土した須恵器小皿である。978・979 は SP1127 から出土したサヌカイトの石鏃及び楔形石器である。楔型石器は形状から推定して、他の石核の転用であろう。

980 ～ 992 はⅧ－ 1 区の包含層から出土した遺物の中で代表的なものを図化した。980 ～ 982 は土師器小皿である。983 は青磁皿の内面には猫描文が認められる。984 ～ 988 は青磁椀である。989 は 12 世紀頃の白磁椀の上端部である。991 は管玉で、この遺跡で唯一の遺物である。990 は花崗岩の丸石である。

992 はⅧ－ 2 区の包含層から出土した縦長状の剥片で、主要剥離面の上下両端部にツインバルブが認められることから、楔形石器の削片に分類した。

7．Ⅸ－１区の調査

（１）掘立柱建物跡

SB901（第 141 図）

Ⅸ－１区西半部で検出した梁間１間以上、桁行５間以上の南北棟の大型建物である。削平を受けたものと考えられ、全体的に柱穴の残りが悪い。西にはST901が位置し、東辺にはSB902と重複するが、柱穴が切り合わない為、前後関係は不明である。建物の形状等からおそらくSB901が先行するものと考えられる。１間（6.4 m）以上×４間（10.5 m）以上、面積は67.2㎡以上、主軸方位N9.5° Eを測る。柱間は梁間6.3～6.4 m、桁行2.0～2.1 mを測る。柱穴掘方は隅丸方形～不整円形状を呈し、径0.6～0.9 m、深さ0.2～0.5 mを測る。

梁間は約6.4 mを測り、梁間に柱穴が確認できない。南北両梁間周辺には、南北溝SD901や大型の土坑等がみられるため、これらの遺構が本来の梁間の柱穴を削平している可能性があるとしても、検出状況からその可能性は低い。そのため、桁行は調査区外へ更に延長するものと考えられる。なお、梁間が約6.4 mを測り、桁行の柱間が2.1 mを測るのであれば、梁間は３間を呈する可能性が高く、推定される建物構造は梁間３間（6.4 m）×桁行７間（14.7 m）、面積94.0㎡を測る大型の建物になる。

柱穴からは弥生土器・土師器片の細片等が極少量出土した。993は弥生土器の鉢口縁部片、994はサヌカイトの板状素材を基にした石核である。出土遺物が少なく時期判断には問題を残すが、SB901の南北の主軸線附近は条里地割の南北線が通る位置にあたり、建物の主軸方位も条里地割方向と合致していることから、SB901はこの地域に条里地割が施行された８世紀後半以降の建物の可能性が高い。

SB902（第 142 図）

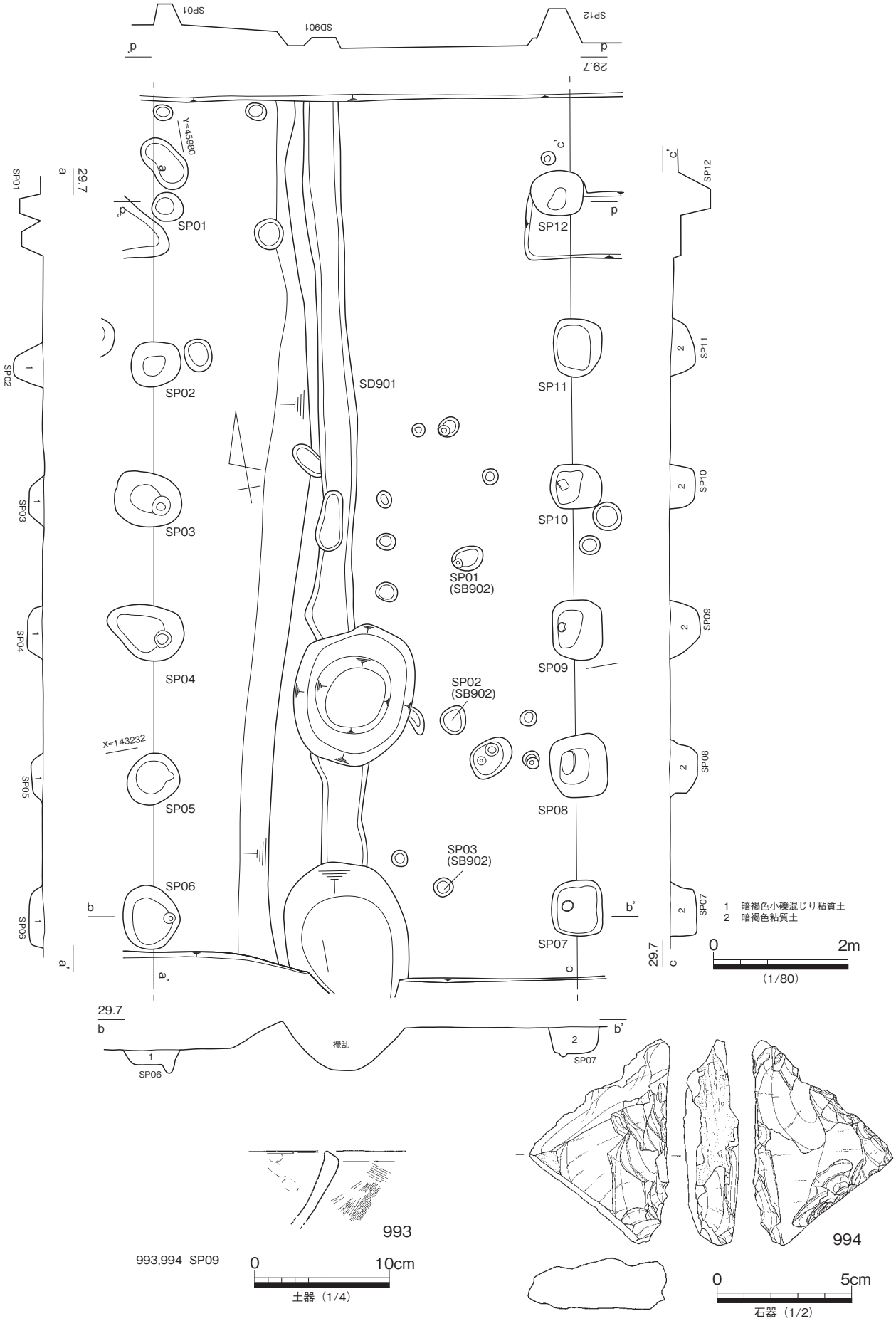
Ⅸ－１区中央南寄りで検出した梁間２間、桁行２間の南北棟の建物である。全体の形状として、僅かに南西方向へ斜行している。SB901と重複するが、柱穴が切り合わないため、検出状況からの前後関係は不明である。２間（3.45 m）×２間（5.15 m）、面積は17.77㎡、主軸方位N13.5° Eを測る。柱間は梁間1.45～2.0 m、桁行2.5～2.6 mを測る。柱穴からは中世土師器の細片が数点出土したが、図化できる遺物は抽出できなかった。

SB903（第 143 図）

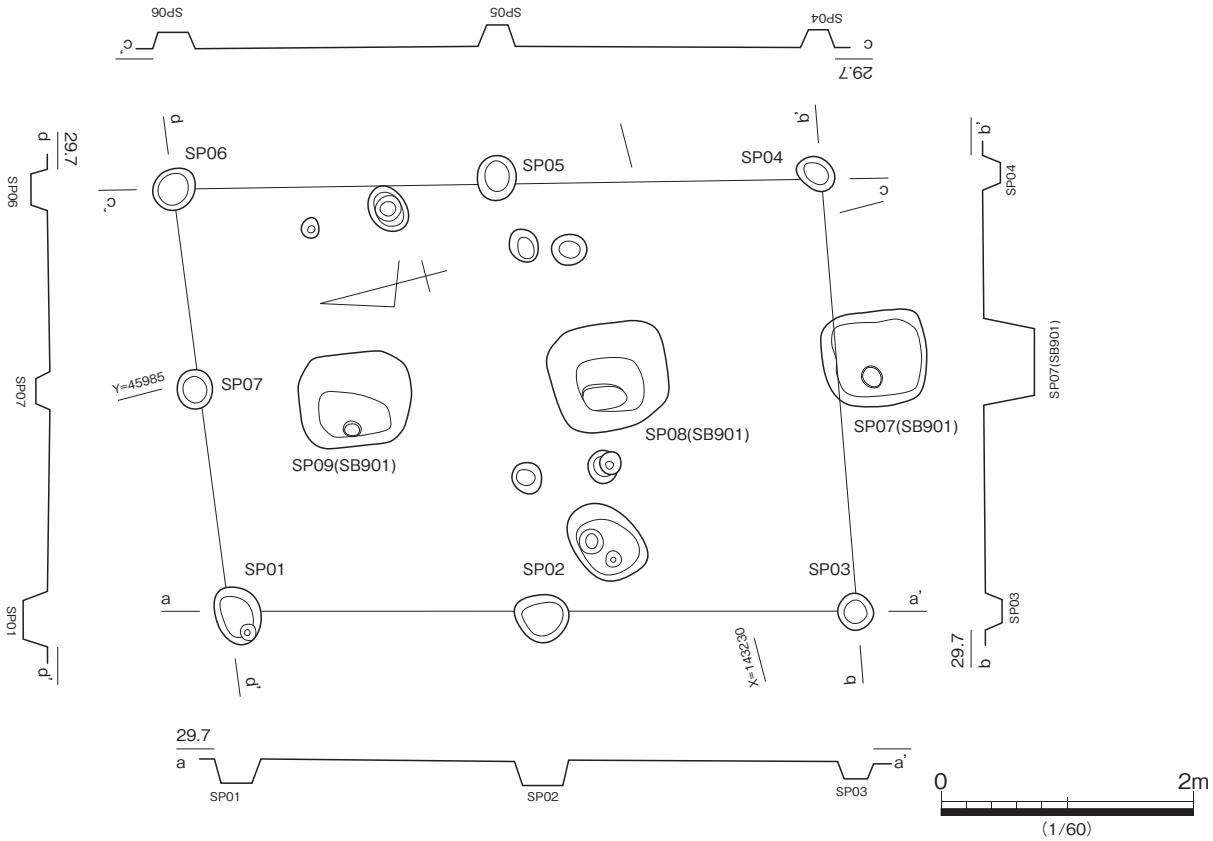
Ⅸ－１区南東端部で検出した梁間２間、桁行２間で小型で棟方向の判断ができない方型の建物である。２間（3.3 m）×２間（3.5 m）、面積は11.55㎡、主軸方位N15.5° Eを測る。柱間は梁間1.5 m～1.8 m、桁行1.5～1.8 mを測る。柱穴掘方は円形～楕円形状を呈し、径0.2～0.6 m、深さ0.2～0.3 mを測る。柱穴からは中世土師器の細片が数点出土したが、図化できる遺物は抽出できなかった。

SB904（第 144 図）

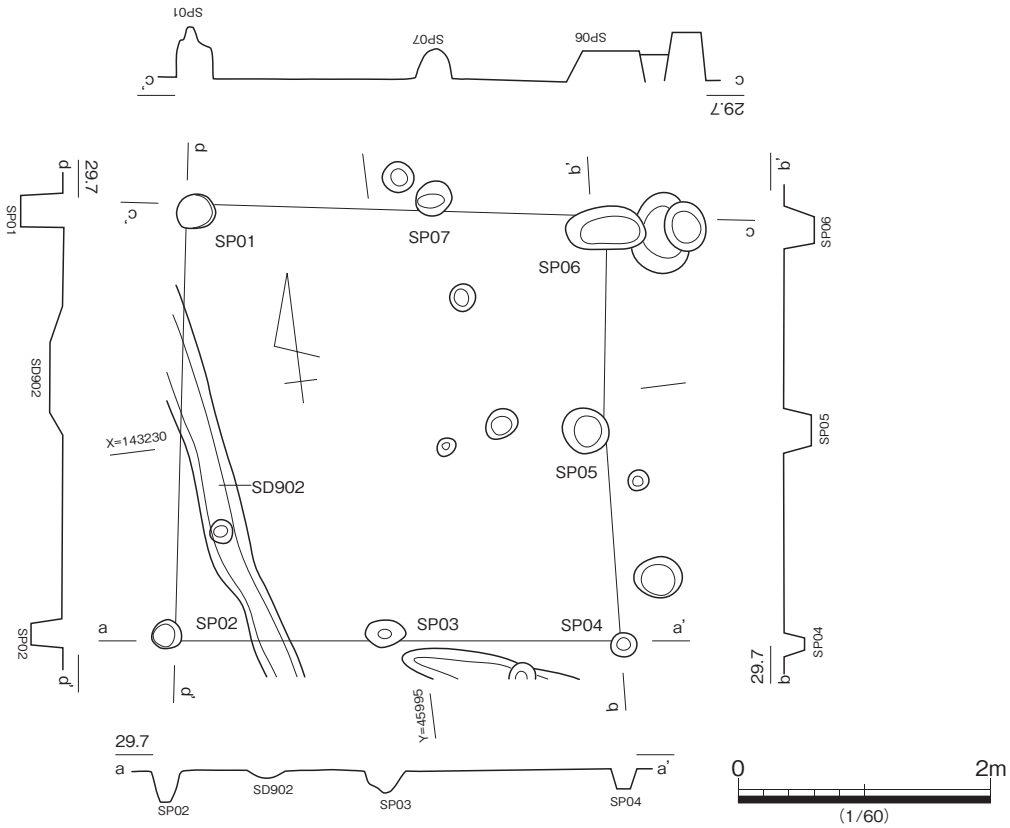
Ⅸ－１区西端部で検出した梁間１間以上、桁行３間の南北棟の建物である。１間（3.0 m）以上×２間（6.8 m）、面積は20.4㎡、主軸方位N34.5° Eを測る。柱間は梁間2.0 m、桁行1.6～2.7 mを測る。柱穴掘方は円形～楕円形状を呈し、径0.3～1.2 m、深さ0.2～0.6 mを測る。柱穴からは遺物が出土していないため時期判断には無理がある。



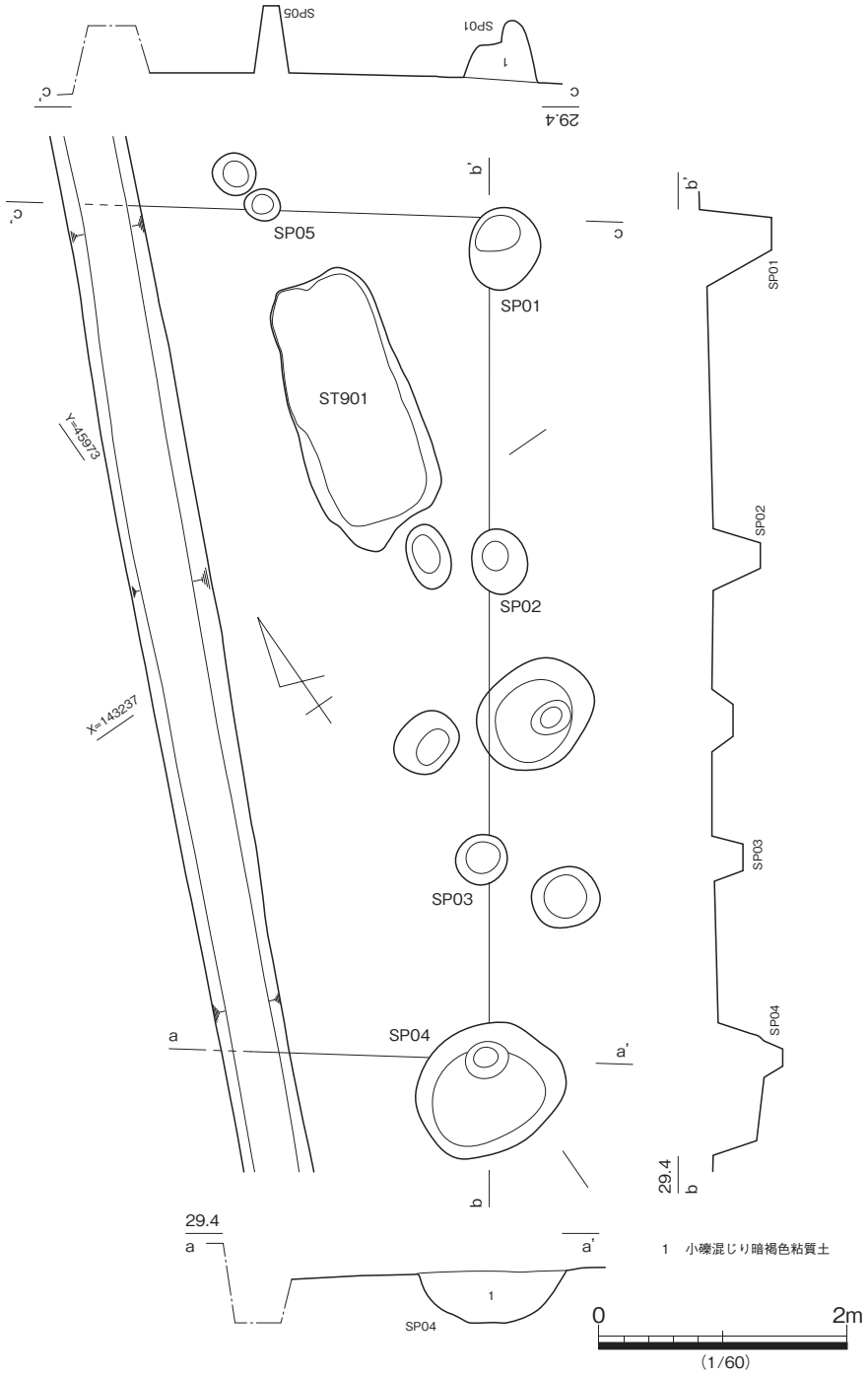
第 141 図　SB901 平・断面図，出土遺物



第 142 図　SB902 平・断面図



第 143 図　SB903 平・断面図



第 144 図　SB904 平・断面図

（2）土坑跡・土坑墓跡

SK901（第 145 図）

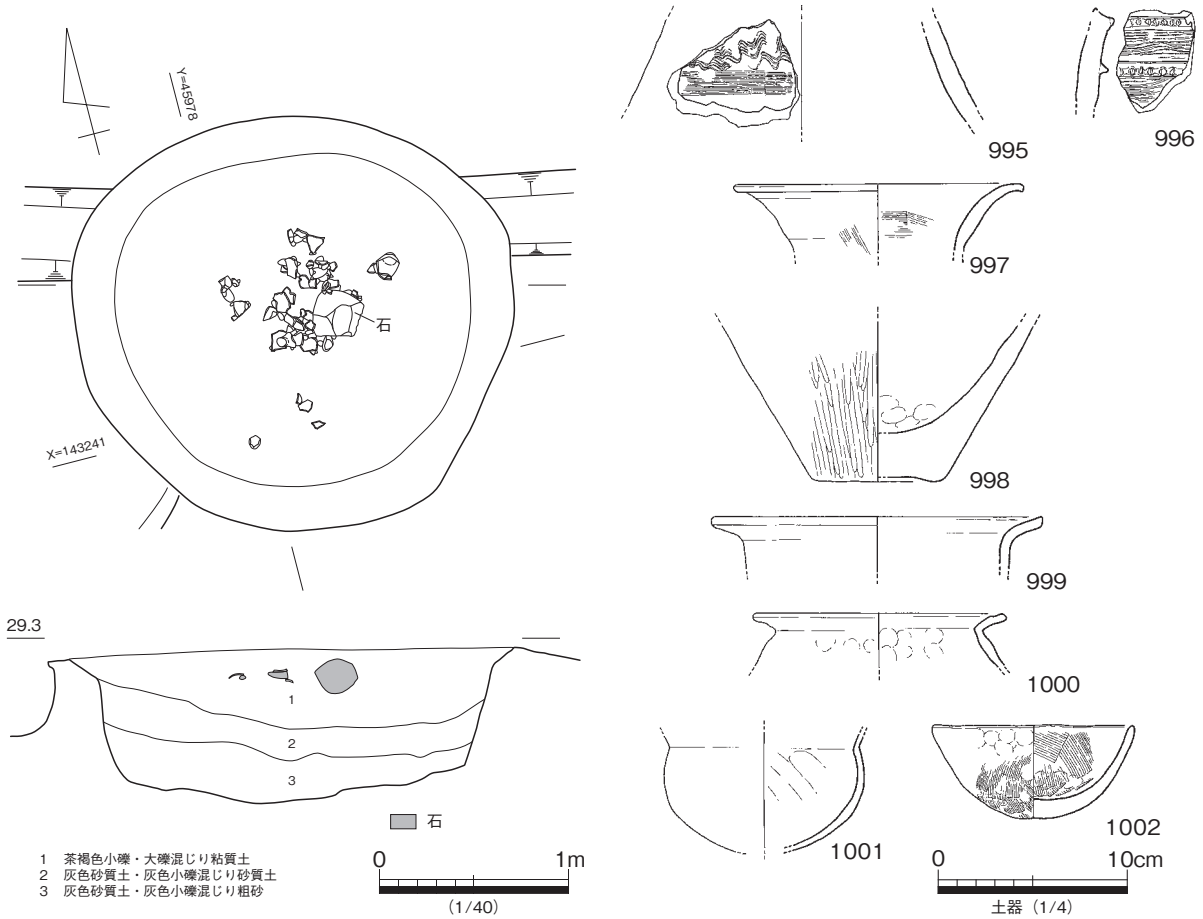
Ⅸ－１区北西端部で検出した土坑である。平面は円形状を呈し、断面は隅丸の逆台形状、底面は比較的平坦である。埋土上層は礫混じりの茶褐色系粘質土、下層は灰色系の砂質土、最下層は灰色系の粗砂からなる。長径 2.34 m、短径 2.2 m、深さ 0.8 mを測る。

埋土からは弥生土器が比較的多数出土したが、須恵器・陶磁器等も少量出土したため、いずれの時期の遺構か判断が難しい点もある。ただ、出土した弥生土器にはマメツした土器が含まれているため、この遺構は近世以降の可能性が高い。出土遺物の中で弥生土器の資料を報告する。995・996 は中期前半頃の壺、997 ～ 1002 は後期後半以降の土器である。997・998 壺の口縁部と底部、1000 は甕口縁部、1001 は口縁部を欠く小型丸底壺、1002 は小型の鉢である。

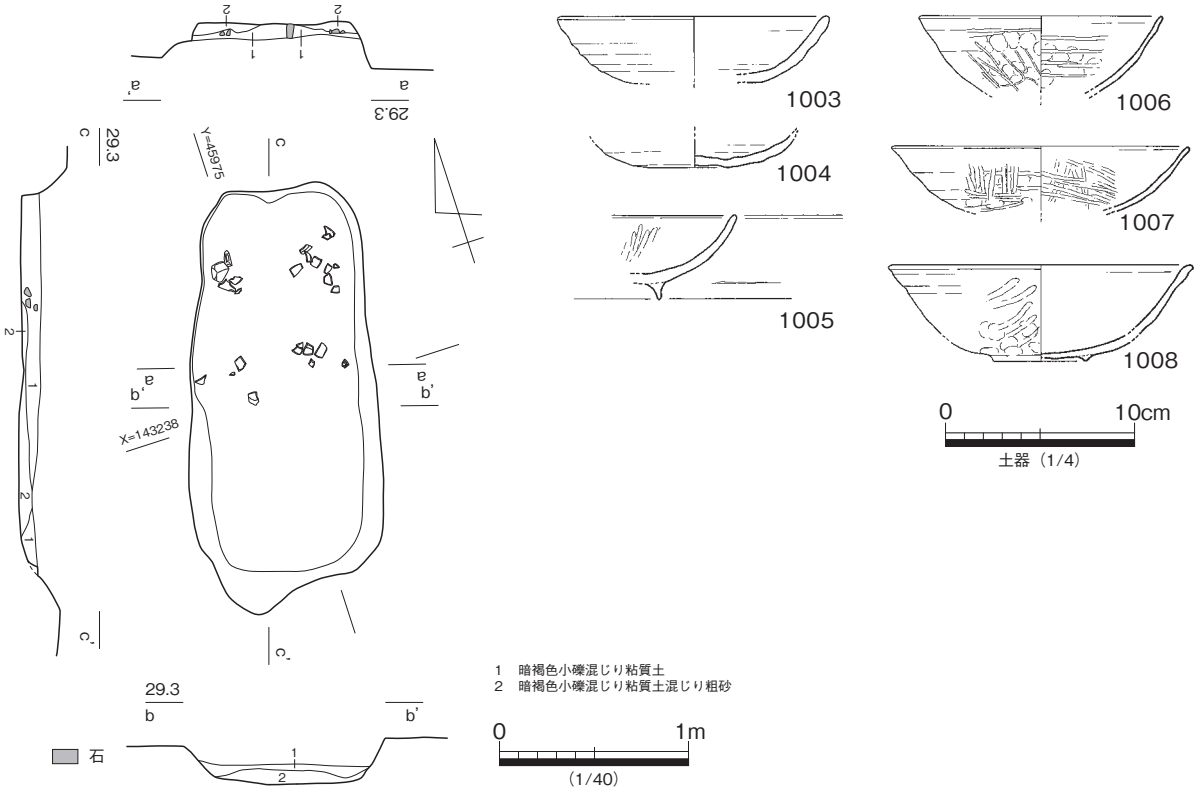
ST901（第 146 図）

Ⅸ－１区西端部で検出した中世の土坑墓である。平面は長楕円形状を呈し、断面は幅広の逆台形状、底面は比較的平坦である。埋土は上下 2 層に分かれ、上層は暗褐色礫混じり粘質土、下層は暗褐色礫混じり粗砂からなる。長径 2.3 m、短径 0.85 ～ 1.0 m、深さ 0.25 m、主軸方位 N18° E を測る。

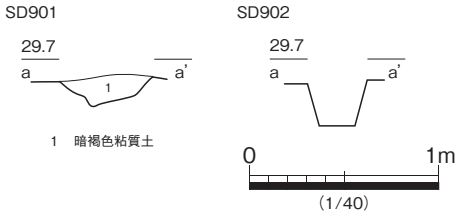
床面付近からは土師器・瓦器等が出土した。1003・1004 は土師器杯、1005 は土師器椀片である。1006 ～ 1008 は瓦器椀である。瓦器の形状等から ST901 は、12 世紀後半～ 13 世紀初頭頃の時期が考えられる。



第 145 図　SK901 平・断面図，出土遺物



第 146 図　ST901 平・断面図，出土遺物



第 147 図　SD901・902 断面図

（3）溝状遺構

SD901（第 147 図）

Ⅸ－1 区西半部で検出した南北方向の直線溝跡である。SB901 と重複し、おそらく SB901 より後出する。検出長 11.4 m、幅 0.5 m、深さ 0.16 m、方位 N8.5° E を測る。断面は不整形な形状を呈し、埋土は暗褐色粘質土からなる。埋土からは中世土師器の細片が数点出土したが、図化できる遺物は抽出できなかった。

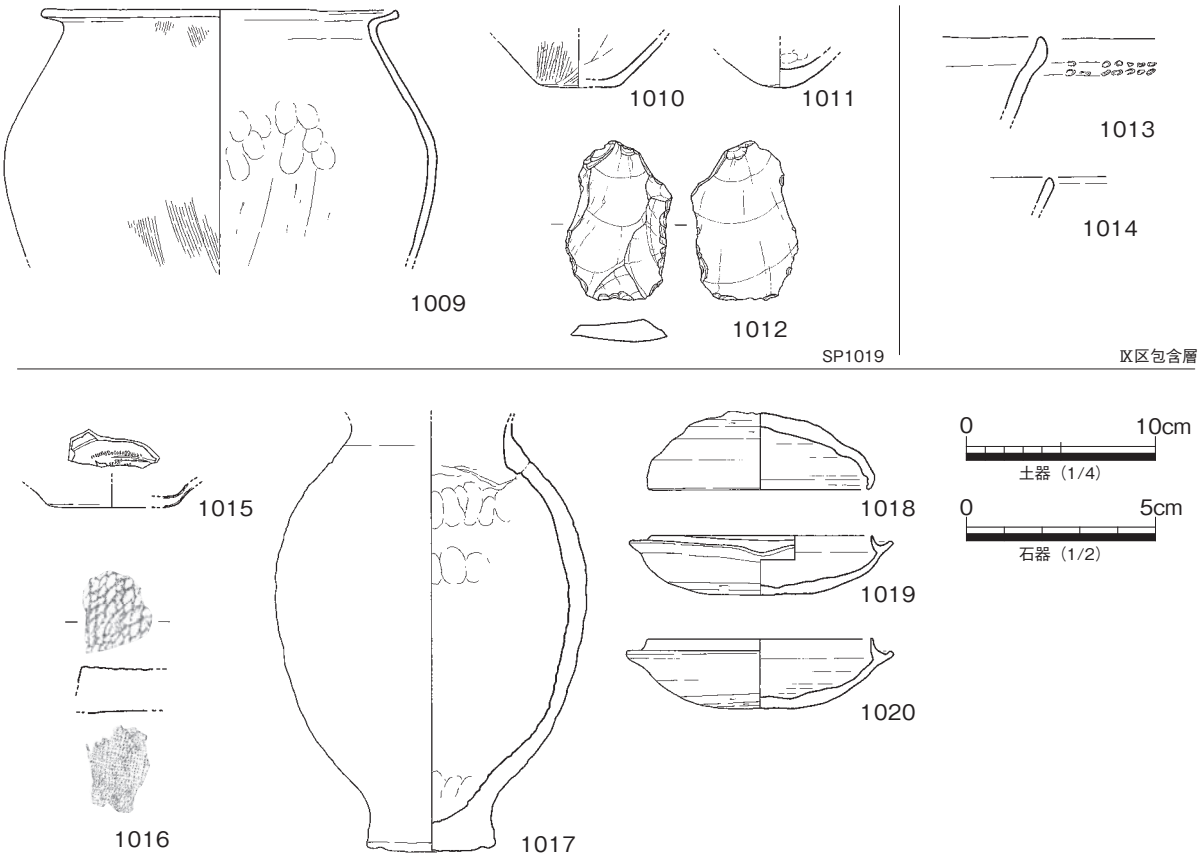
SD902（第 147 図）

Ⅸ－1 区東半部で検出した僅かに湾曲しながら南北方向へ延びる直線状の溝跡である。SB903 と重複し、おそらく SB903 より後出する。検出長約 10.1 m、幅 0.32 m、深さ 0.24 mを測る。埋土からは中世土師器の細片が数点出土したが、図化できる遺物は抽出できなかった。

（4）柱穴・包含層出土遺物

Ⅸ－1 区の主要な遺構・遺物については先に報告したが、次にその他の柱穴出土遺物と包含層出土遺物を報告する。

1009 ～ 1012 はⅨ－1 区の柱穴出土の遺物である。1009 ～ 1011 は SP1019 から出土した弥生土器甕である。1009 は形状から下川津 B 類甕に類似している。1012 は SP1019 から出土したサヌカイトの調



第 148 図　Ⅸ区柱穴，包含層出土遺物

整ある剥片である。縦長状の剥片を素材にし、側縁に微細な調整を施している。1013・1014 はⅨ区の包含層出土遺物である。1013 はの縄文土器の鉢片、1014・1015 は青磁の椀と皿、1016 は平瓦片である。内外面には縄目・布目圧痕が顕著に残す。1015 ～ 1020 は出土地点が不明な遺物の中で良資料を図化した。1017 は口縁部を欠く弥生時代中期後半頃の壺である。1018 ～ 1020 は TK217 並行期の須恵器杯蓋・杯身である。1019 の口縁部端部には僅かに窪みが認められ、片口の機能も考えられる。

8. Ⅸ－２区の調査

Ⅸ－２区は古川の氾濫源にあたりレベルもⅨ－１区に比べ約 1.0 m下がる。微高地上では、古代～中世の集落が広範囲に展開しているが、氾濫源にあたるⅨ－２区は、耕作土直下には細砂・粗砂層が広範囲に堆積しており、遺構・遺物伴に検出できなかったので部分調査で終えた。ただ、浅いトレンチ数本で調査を終えたため、下層からの遺物採集がなされていない。そのため、古川がいつ頃この微高地周辺に至ったのか問題を残すことになった。

（参考文献）
田辺　昭三　1966「陶邑古窯址群Ⅰ」平安学園考古学クラブ
金田　章裕　1988「条里と村落生活」『香川県史第１巻通史編原始・古代』四国新聞社
西村　尋文　1994「第４章　第２節　正箱遺跡における古代集落の展開」『県道山崎御厩線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　正箱遺跡・薬王寺遺跡』香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター
香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター　1994『県道山崎御厩線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　正箱遺跡・薬王寺遺跡』
香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団　1996『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第25冊　中間西井坪遺跡』
香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター　1996　平成７年度「兀塚遺跡」『県道関係埋蔵文化財発掘調査概報』
香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター　1997　平成８年度「兀塚遺跡」『県道関係埋蔵文化財発掘調査概報』
香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター　1998　平成９年度「兀塚遺跡」『県道・河川関係埋蔵文化財発掘調査概報』

第Ⅵ章　自然科学分析

第１節　兀塚遺跡における花粉、プラントオパール分析

川崎地質株式会社

１．はじめに

兀塚遺跡は、香川県高松市檀紙町兀塚と円座町佐古・川向にまたがって所在する。本報告は、香川県埋蔵文化財センターの委託により、同遺跡内Ⅱ区において検出されたSR203内の堆積物（8世紀末から9世紀）、Ⅲ区において検出された、SR302内の堆積物（弥生時代から12世紀以降）及びⅣ区SR401内の堆積物（7世紀前半から8世紀中頃）を対象に、埋積時における遺跡内及び周辺の古植生を推定する目的で行った花粉分析・プラント・オパール分析の調査報告書である。

試料番号	調査区	遺構名	分析項目	
			花粉	植物珪酸体
6	Ⅱ区	SR203　4層北壁30m	1	1
7	Ⅱ区	SR203　5層北壁30m	1	1
8	Ⅱ区	SR203　13層北壁30m	1	1
9	Ⅱ区	SR203　14層北壁30m	1	
10	Ⅱ区	SR203　15層北壁30m	1	
11	Ⅱ区	SR203　16層北壁30m	1	
12	Ⅱ区	SR203　18層北壁30m	1	1
13	Ⅲ区	SR302　南壁11層(南壁壁土壌ｻﾝﾌﾟﾙ1)	1	
14	Ⅲ区	SR302　南壁9層(南壁壁土壌ｻﾝﾌﾟﾙ2)	1	1
15	Ⅲ区	SR302　南壁8層(南壁壁土壌ｻﾝﾌﾟﾙ3)	1	1
16	Ⅲ区	SR302　南壁7層(南壁壁土壌ｻﾝﾌﾟﾙ4)	1	1
17	Ⅲ区	SR302　南壁6層(南壁壁土壌ｻﾝﾌﾟﾙ5)	1	1
18	Ⅲ区	SR302　南壁5層(南壁壁土壌ｻﾝﾌﾟﾙ6)	1	1
19	Ⅲ区	SR302　南壁4層(南壁壁土壌ｻﾝﾌﾟﾙ7)	1	
36	Ⅳ区	SR401　土壌ｻﾝﾌﾟﾙ北壁15層	1	1
37	Ⅳ区	SR401　土壌ｻﾝﾌﾟﾙ北壁18層	1	1
		合計	16	9
		計画数	16	9

２．試料について

Ⅱ区7試料、Ⅲ区7試料、Ⅳ区2試料の合計16試料の提供を受けた。

表１　微化石概査結果

調査区	試料№	地層	花　粉	炭	植物片	珪　藻	火山ｶﾞﾗｽ	ﾌﾟﾗﾝﾄ・ｵﾊﾟｰﾙ
Ⅱ	6	4	◎	△×	△	○	○	◎
	7	5	◎	△×	○	◎	△	○
	12	18	◎	△×	○	○	○	◎
	8	13	◎	△×	○	◎	○	◎
	9	14	◎	△×	△	◎	○	◎
	10	15	◎	△×	○	○	△	◎
	11	16	◎	△×	◎	○	◎	◎
Ⅲ	19	4	◎	△×	○	○	◎	○
	18	5	◎	△×	△	○	△	○
	17	6	◎	△×	△	○	○	◎
	16	7	◎	△×	○	○	△	◎
	15	8	◎	△	○	○	△	◎
	14	9	◎	○	○	◎	○	◎
	13	11	◎	○	△	○	○	◎
Ⅳ	37	18	◎	△×	△	△	○	◎
	36	15	◎	○	○	△	◎	◎

凡例　◎：十分な数量が検出できる　○：少ないが検出できる　△：非常に少ない
△×：極めてまれに検出できる　×：検出できない

３．分析方法及び分析結果

(1) 微化石概査

花粉分析用プレパラート、及び花粉分析処理残渣を用いた微化石の概査結果を、表１に示す（植物片、炭は花粉分析用プレパラートを観察した。珪藻、火山ガラス、植物珪酸体（プラント･オパール）は、花粉分析処理の残渣を観察した）。

(2) 花粉分析

分析処理の工程を図１のフローチャートに示した。プレパラートの観察･同定は、光学顕微鏡下で 400 倍を用いて実施した。また、イネ属（Oryza）の同定は、位相差顕微鏡下で 1000 倍を用いて実施した。

花粉分析では原則的に木本花粉総数が 200 粒以上になるまで同定を行い、同時に検出される草本・胞子化石の同定も行った。また、光学顕微鏡による検鏡（同定・計数）の後、中村（1977）にしたがってイネ属（Oryza）の同定を行い、イネ科をイネ属型､イネ科（不能）､イネ科（その他）に細分した。ここではイネ科 100 粒を基準としたが、イネ科の花粉の検出量が少なく、基準量に達していない試料もある。

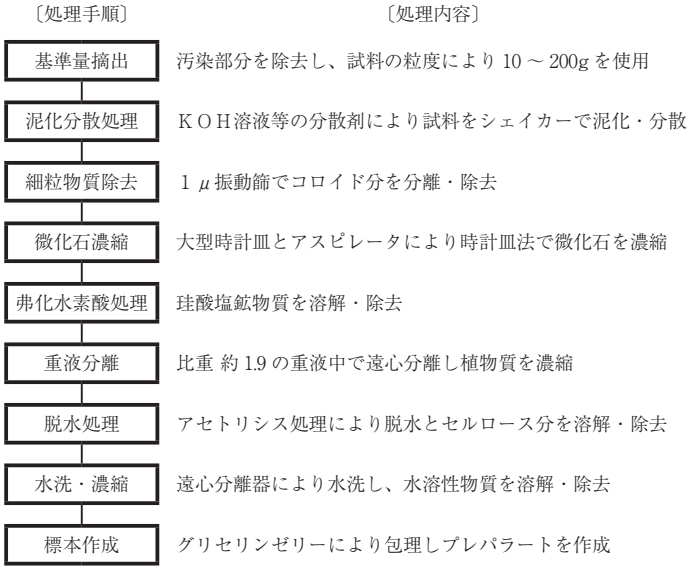


図１　花粉フローチャート

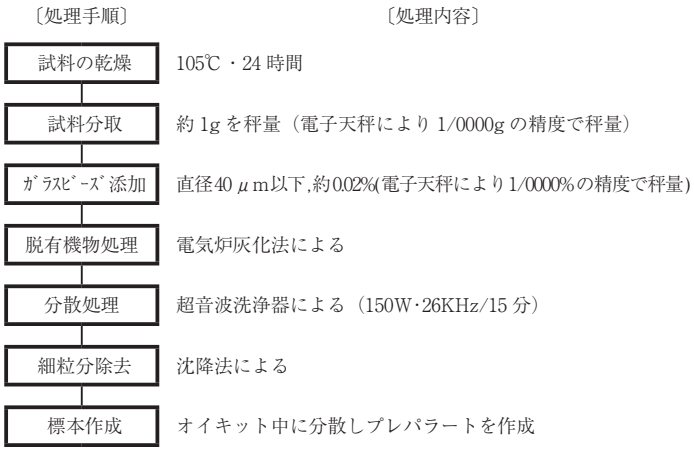


図２　プラント・オパール分析フローチャート

分析結果を図３～５の花粉ダイアグラムと表３に示す。「花粉ダイアグラム」の作成に当たり、木本花粉総数を基数として分類群ごとに百分率を算出し、木本花粉、草本・藤本花粉、胞子に分けてハッチを入れている。「総合ダイアグラム」では木本花粉を針葉樹花粉、広葉樹花粉に細分し、これらに草本・藤本花粉、胞子の総数を加えたものを基数として、分類群ごとに累積百分率として示した。「含有量」では、1g 当たりの換算重量を算出して示した。「イネ科花粉の細分」では、それぞれの分類群の割合を累積グラフで示した。

(3) プラント・オパール分析

分析処理の工程を図２のフローチャートに示した。プレパラートの観察・同定は、光学顕微鏡下で 400 倍を用いて行った。同定は表２に示す「栽培植物との対応が明らかな分類群」：当社分析レベル４について行い、計数は、ガラスビーズ個数が 300 以上になるまで行った。

分析結果を図６のプラント・オパールダイアグラムと表４に示す。ダイアグラムでは、検出密度（試料 1g あたりのガラスビーズ個数に､計数されたプラント･オパールとガラスビーズ個数の比率をかけて、

試料 1g 中のプラント・オパール個数を求めたもの。）をスペクトルで示している。

表２　同定・検鏡対象分類群 (同定分類群と推定母植物の関係)

同定レベル	コード	分類群	対応する栽培植物
1	1	イネ	イネ
3	3	イネ籾殻（穎の表皮細胞）	イネ
栽培植物との対応が明らかな分類群	21	ムギ類（穎の表皮細胞）	コムギ・オオムギ
	41	オヒシバ属（シコクビエ型）	シコクビエ
	61	キビ族型	ヒエ・アワ・キビ
	62	キビ属型	キビ
	64	ヒエ属型	ヒエ
	66	エノコログサ属型	アワ
	84	ウシクサ族Ｂ	サトウキビ
	91	モロコシ属型	モロコシ
	93	ジュズダマ属型	ハトムギ
4	11	サヤヌカグサ属	サヤヌカグサ・アシカキ
母植物との対応が明らかな分類群	13	マコモ属	マコモ
	31	ヨシ属	ヨシ
	33	ダンチク属	ダンチク
	35	ヌマガヤ属型	ヌマガヤ
	51	シバ属	シバ属
	71	トダシバ属	トダシバ属
	81	ススキ属型	ススキ属
	83	ウシクサ族Ａ	チガヤ属など
	201	メダケ節型	メダケ節
	203	ネザサ節型	ネザサ節
	205	チマキザサ節型	チマキザサ節・チシマザサ節
	207	ミヤコザサ節型	ミヤコザサ節
	209	マダケ属型	マダケ属
	350	カヤツリグサ科 (スゲ属など)	スゲ属
	390	シダ類	シダ類
	501	ブナ科 (シイ属)	シイ類
	503	ブナ科 (アカガシ亜属)	カシ類
	510	クスノキ科	バリバリノキなど (クスノキ以外)
	520	マンサク科 (イスノキ属)	イスノキ属
	530	アワブキ科	アワブキ科
	540	モクレン属型	モクレン属
	570	マツ科型	マツ科
	580	マツ属型	マツ属

４．耕作について

Ⅲ区の５層（試料 18）、７層（試料 16）は、現地観察で水田耕土とされていた。これらの層準では、イネのプラント・オパール検出密度が通常稲作耕土と見なされる 5000 粒 /g に及ばなかった。７層では 3200 粒 /g の小ピークが認められたが､5 層ではピークは認められなかった。イネ科の花粉も７層でピークを成すが、５層では明解なピークを認めることができなかった。またイネ属花粉の割合が、７層より上位でやや高くなっている。

これらのことから、５層、７層での耕作期間が比較的短期間であったか、耕作土表面が削平を受けていた可能性が示唆される。

一方、（Ⅱ、Ⅳ区含め）他の層準でもイネのプラント・オパールやイネ属花粉が少量ながら検出されている。主として上位層から生物擾乱によって混入した可能性が指摘できるが、遺構が検出されないものの水田耕作土であった可能性も指摘できる。

また、Ⅲ区７層、４層、Ⅳ区 18 層（試料 37）では少量であるがソバ属の花粉が検出され、これらの層を耕作土とした栽培が行われていた可能性が指摘できる（ソバは、イネの裏作として栽培される外、畦を利用して栽培されることもある。）。

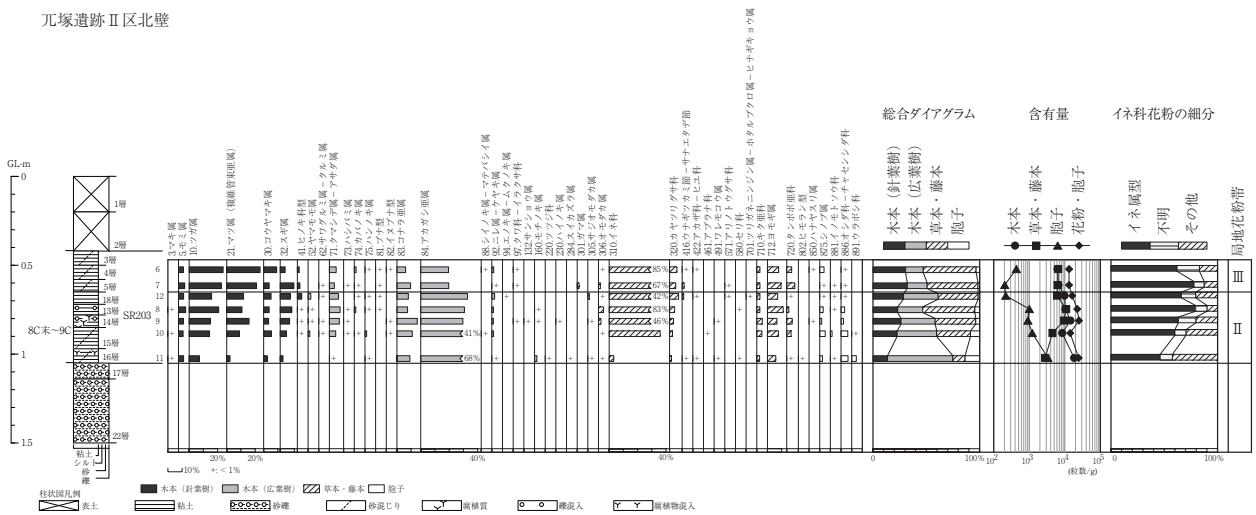


図３　Ⅱ区北壁の花粉ダイアグラム

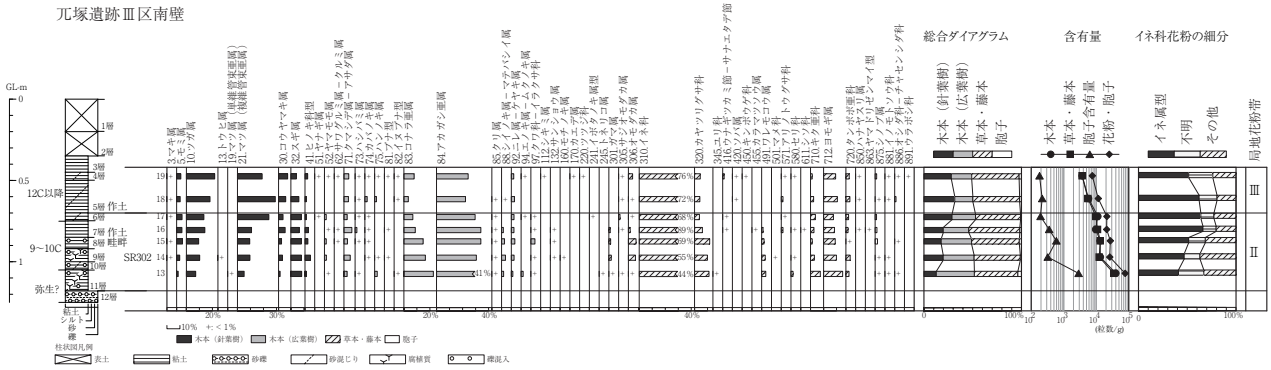


図４　Ⅲ区南壁の花粉ダイアグラム

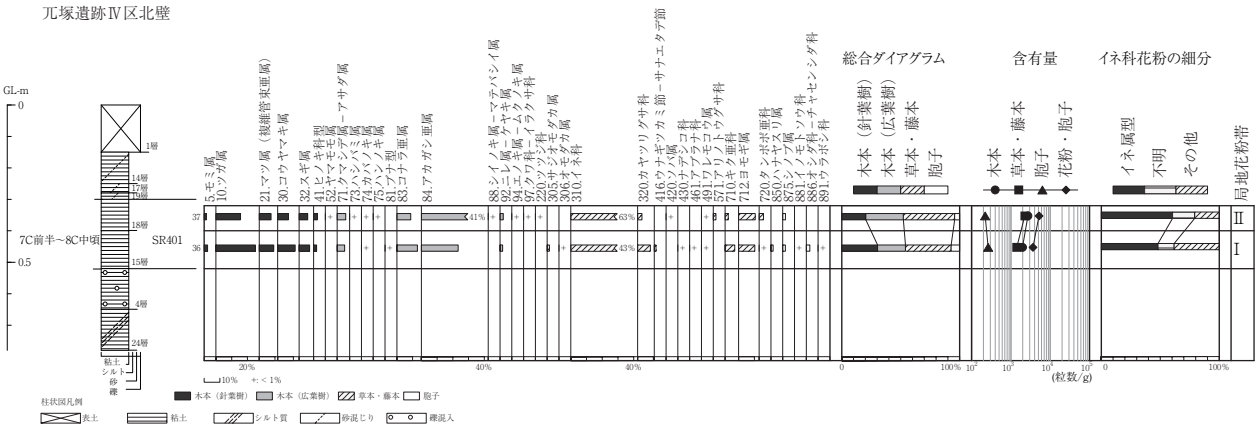


図５　Ⅳ区北壁の花粉ダイアグラム

5．花粉分帯

花粉分析結果を基に局地花粉帯を設定した。以下に、各局地花粉帯の記載を行う。また、時間経過を明解にするために、下位から上位に向かって記載を行った。

(1) Ⅰ帯（Ⅳ区試料 36）

ツガ属、アカガシ亜属が 25%、23%と他の種類に比べやや高く、マツ属（複維管束亜属）、コウヤマキ属、コナラ亜属がこれらに次ぐ。

(2) Ⅱ帯（Ⅱ区試料 11 ～ 12、Ⅲ区試料 13 ～ 17、Ⅳ区試料 37）

アカガシ亜属が 30％以上と卓越傾向にあるほか、ツガ属、マツ属（複維管束亜属）、コナラ亜属が 10 ～ 20％と他の種類に比べやや高い出現率を示す。

(3) Ⅱ帯（Ⅱ区試料 7、6、Ⅲ区試料 18、19）

ツガ属、マツ属（複維管束亜属）、アカガシ亜属が 20 ～ 30％程度と他の種類に比べやや高い出現率を示す。

6．古植生推定

設定した局地花粉帯ごとに、調査地近辺の古植生を推定する。

(1) Ⅰ帯（Ⅳ区試料 36）

①堆積時期

出土遺物から、7 世紀前半から 8 世紀中頃の植生を示していると考えられる。ほぼ同時期の花粉分析が東方 5km ほどの上東原遺跡で行われており、ツガ属、マツ属（複維管束亜属）、コウヤマキ属、コナラ亜属、アカガシ亜属などが特徴的に検出される点が類似する。

②近辺の低地植生

草本・藤本花粉、胞子の割合が 46％と比較的高率である。花粉化石の保存も良く、湿潤状態で堆積したと推定され、調査地近辺には湿原（あるいは水田）が広がっていたと考えられる。調査地近辺が湿原であったとすれば、サジオモダカ類、オモダカ類、ヨシ類、カヤツリグサ類などが繁茂していたと考えられる。これらの草本は一般に水田雑草としても認められることから、近辺が水田であった場合、水田内、あるいは水路内に繁茂していたと考えられる。また、やや乾燥した場所（水田であれば　畦畔）にはヨモギ類などのキク科やタデ科の草本が繁茂していたと考えられる。

③丘陵の植生

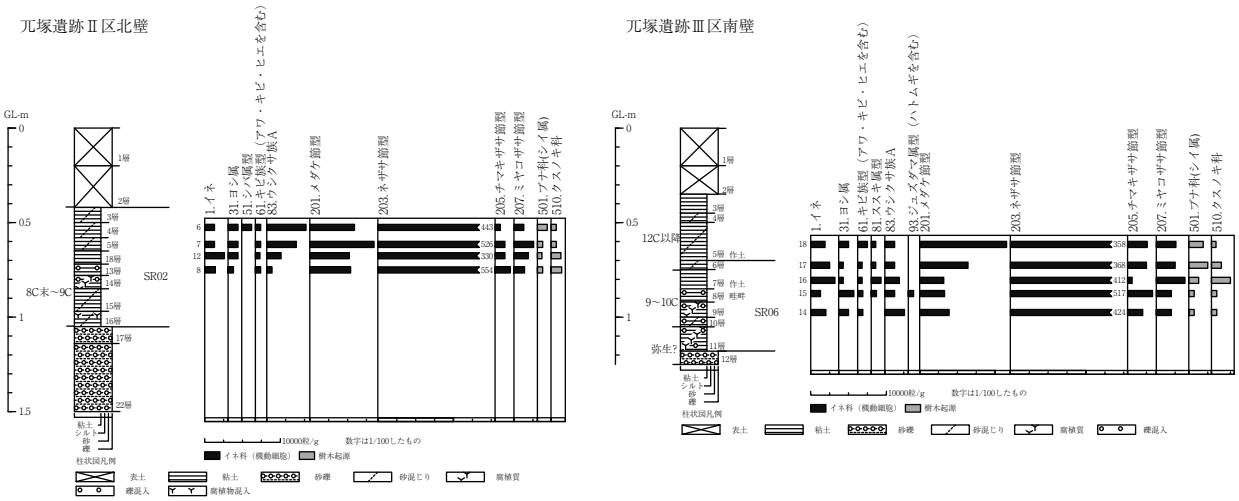


図６　Ⅱ区北壁、Ⅲ区南壁のプラントオパールダイアグラム

木本花粉の割合が比較的低く、検出された木本花粉の多くが周辺の丘陵から讃岐山脈にかけての広範な地域から飛来した可能性が高い。現存植生では、低地から山地にかけてアカガシ亜属などの常緑広葉樹を主とする照葉樹林（暖温帯林）が分布する。また山地高所では、針葉樹を主として、カシ類やブナ類を混淆する温帯針葉樹林（中間温帯林）が生育する傾向にある。更に高所では、ブナ、ミズナラを主とする落葉樹林（冷温帯林）へと移り変わっていく。

現存植生と得られた花粉化石群集から、調査地南方の讃岐山脈にはツガ属、マツ属（複維管束亜属）、コウヤマキ属などを主要素とする温帯針葉樹林が広く分布したと考えられる。さらに、カシ類を主要素とする照葉樹林が調査地北から西に続く丘陵（浄願寺山、袋山、六ッ目山、堂山）に、所によってナラ類を混淆して分布していたと考えられる。また、局所的にナラ類を主要素とするコナラ林が分布した可能性もある。

前述のように、温帯針葉樹林は照葉樹林より高所に位置するのが一般的であるが、しばしば暖温帯林中に混淆することが知られている。さらに、和歌山県新宮市「浮島」のスギ林のように、暖温帯林域の海岸近くに天然のスギ林が残る事象もある。このような事象と、現存植生が人為的攪乱による残存植生と捉えると、温帯針葉樹林が冷涼な気候を示すとは考えにくい。また多くの針葉樹種は、カシ類などの極相林要素の樹種に比べ、地形・土壌条件が劣悪な環境でも生育している。このように土地条件を加味して植生を推定すると、ツガ、コウヤマキ、アカマツなどを主とする温帯針葉樹林は、讃岐山脈のみではなく、調査地周辺の丘陵で照葉樹林に混淆していたり、地域のベースを成す「砂礫がちな扇状地堆積物」（高桑，1973）上にも生育していたりした可能性が高い。

(2) Ⅱ帯（Ⅱ区試料 11 ～ 12、Ⅲ区試料 13 ～ 17、Ⅳ区試料 37）

①堆積時期

出土遺物から、7 世紀前半から古代の植生を示していると考えられる。

Ⅱ区 11 層（試料 13）からは弥生時代の遺物が出土するが、花粉化石群集は上位に向かって連続的に変化する。更に前述上東原遺跡の分析結果と比較しても、花粉化石群集の違いが大きい。これらのことからⅢ区 11 層（試料 13）が、上位の試料からかけ離れた弥生時代に堆積した可能性は低い。

②近辺の低地植生

ほとんどの試料で草本・藤本花粉、胞子の割合が 50％を超える。Ⅰ帯同様に花粉化石の保存も良い。さらに微化石概査で珪藻化石が多量に含まれているなど、湿潤状態で堆積したと推定され、調査地近辺には湿原（あるいは水田）が広がっていたと考えられる。調査地近辺が湿原であったとすれば、サジオモダカ類、オモダカ類、ヨシ類、カヤツリグサ類、フサモ類（アリノトウグサ科）などが繁茂していたと考えられる。これらの草本は一般に水田雑草としても認められることから、近辺が水田であった場合、水田内、あるいは水路内に繁茂していたと考えられる。やや乾燥した場所（水田であれば畦畔）にはヨモギ類などのキク科やタデ科の草本のほか、プラント・オパールの検出されるネザサ類などが繁茂していたと考えられる。このほか、Ⅲ区ではワレモコウ属が特徴的に検出され、近辺で繁茂していたと考えられる。更にⅣ区 18 層（試料 37）ではソバ属花粉が検出され、近辺での畑作が指摘できる。

Ⅱ区 16 層（試料 11）では木本花粉の割合が高く、イネ科の花粉の出現率も低い。これらのことから、他の時期に比べ森林が近くに迫っていたと考えられ、近辺に水田が存在した可能性は低い。

③丘陵の植生

アカガシ亜属の花粉が高率を示すことから、周辺の丘陵には主にカシ類で代表される照葉樹林が分布していたと考えられる。照葉樹林の要素であるシイ属やクスノキ科のプラント・オパールも検出され、カシ類とともにこれらの樹種が生育していたと考えられる。一方、ツガ属、マツ属（複維管束亜属）、コウヤマキ属やコナラ亜属の割合も高く、これらの樹種が照葉樹林に混淆していた可能性や、局所的に林分を成していた可能性もある。コナラ類についても同様で、照葉樹林内のギャップに生育していたり、（二次植生としての）コナラ林を成していたりした可能性も考えられる。また針葉樹類の起源を、讃岐山脈の「中間温帯林」に求めることも可能である。

(3) Ⅲ帯（Ⅱ区試料 7、6、Ⅲ区試料 18、19）

①堆積時期

出土遺物から、8 世紀末から古代、中世にかけての植生を示していると考えられる。

②近辺の低地植生

他の時期同様に草本・藤本花粉、胞子の割合が 50％を超え、花粉化石の保存も良い。さらに微化石概査で珪藻化石が多量に含まれているなど、調査地近辺には湿原（あるいは水田）が広がっていたと考えられる。調査地近辺が湿原であったとすれば、サジオモダカ類、オモダカ類、ヨシ類、カヤツリグサ類、フサモ類（アリノトウグサ科）などが繁茂していたと考えられる。また、これらの草本は一般に水田雑草としても認められることから、近辺が水田であった場合、水田内、あるいは水路内に繁茂していたと考えられる。やや乾燥した場所（水田であれば畦畔）にはヨモギ類などのキク科やタデ科の草本のほか、プラント・オパールの検出されるネザサ類などが繁茂していたと考えられる。更にⅢ区 5 層（試料 18）、4 層（試料 19）ではソバ属花粉が検出され、近辺での畑作が指摘できる。

③丘陵の植生

アカガシ亜属の割合が減少し、マツ属（複維管束亜属）の割合が増加傾向を示す。同時に木本花粉の含有量が減少傾向にあり、周辺の丘陵で照葉樹林が伐採され、局所的にアカマツ林が広がった可能性が指摘できる。

7．まとめ

兀塚遺跡発掘調査に係る花粉分析、プラント・オパール分析の結果、以下の事柄が推定できた。

(1) Ⅲ区 7 層、5 層について、水田耕作土の可能性を論じた。イネのプラント･オパール検出密度は低く、稲作を断定するには至らなかった。ただし 7 層では、検出密度が小ピークを成すなど、稲作を示唆する結果は得られた。また、ソバ属花粉が検出される層準もあり、Ⅱ帯の時期以降、近辺でソバ栽培が行われた可能性が指摘できる。

(2) 花粉分析結果からⅠ～Ⅲ帯の局地花粉帯を設定し、出土遺物から局地花粉帯が示す時期を推定した。

(3) いずれの試料からも多量の花粉化石が検出され、湿地環境（自然環境下では湿原、人為環境では水田など）で堆積・保持されたことが明らかになった。

(4) 局地花粉帯の示す時期ごとに古植生を推定した。特筆すべき点は、以下の事柄である。

①分析層準のほとんどで稲作が行われていた（水田であった）可能性が指摘できる。ただし、Ⅱ区16層（試料11）ではイネ科の花粉の出現率が低いことから、水田であった可能性は低い。

②調査時期を通じて、周辺の丘陵はカシ類を主要素としてシイノキ属、クスノキ科を伴う照葉樹林で覆われていたと考えられる。一方、照葉樹林内にはツガ、コウヤマキ、アカマツなどの温帯針葉樹やコナラ類を混淆、あるいはこれらが小林分を形成していた可能性もある。またⅢ帯の時期には照葉樹林がやや縮小し、アカマツ林が拡大した可能性がある。

(引用文献)
高桑　礼（1973）．1/50,000 土地分類基本調査（地形分類図）「高松南部」，香川県.
中村　純（1977）稲作とイネ花粉．考古学と自然科学，10，21-29.

表 3-1 兀塚遺跡の花粉組成表

		Ⅱ区北壁							Ⅲ区南壁								
	試料Ｎｏ．	6	7	12	8	9	10	11	19	18	17	16	15	14	13	37	36
	地層	4	5	18	13	14	15	16	4	5	6	7	8	9	11	18	15
3 *Podocarpus*	マキ属				1 (0)		3 (1)	2 (1)	1 (0)	1 (0)	1 (0)		1 (0)	1 (0)			
5 *Abies*	モミ属	8 (3)	10 (4)	13 (4)	14 (5)	10 (3)	11 (3)	11 (4)	14 (3)	8 (3)	12 (4)	12 (4)	10 (4)	8 (2)	3 (1)	4 (1)	8 (2)
10 *Tsuga*	ツガ属	55 (24)	52 (23)	57 (16)	58 (21)	43 (15)	48 (14)	22 (7)	94 (22)	53 (18)	39 (13)	42 (14)	21 (9)	34 (10)	18 (7)	46 (16)	90 (25)
13 *Picea*	トウヒ属													2 (1)			
19 *Pinus (Haploxylon)*	マツ属（単維管束亜属）														1 (0)		
21 *Pinus (Diploxylon)*	マツ属（複維管束亜属）	54 (23)	48 (21)	43 (12)	30 (11)	45 (16)	30 (9)	7 (2)	82 (19)	85 (29)	70 (24)	32 (11)	21 (9)	32 (10)	13 (5)	22 (7)	33 (9)
30 *Sciadopitys*	コウヤマキ属	21 (9)	9 (4)	19 (5)	11 (4)	10 (3)	18 (5)	8 (3)	30 (7)	16 (5)	10 (3)	15 (5)	5 (2)	10 (3)	3 (1)	20 (7)	40 (11)
32 *Cryptomeria*	スギ属	8 (3)	22 (10)	26 (7)	23 (8)	19 (7)	15 (4)	6 (2)	18 (4)	18 (6)	23 (8)	19 (6)	18 (8)	27 (8)	21 (8)	16 (5)	24 (7)
41 Cupressaceae type	ヒノキ科型	3 (1)	4 (2)	11 (3)	2 (1)	2 (1)	2 (1)		9 (2)	3 (1)	3 (1)	8 (3)	5 (2)	14 (4)	3 (1)	7 (2)	7 (2)
51 *Salix*	ヤナギ属								1 (0)		1 (0)						
52 *Myrica*	ヤマモモ属			7 (2)	1 (0)	1 (0)	4 (1)		2 (0)		4 (1)	2 (1)	3 (1)	5 (2)	1 (0)	1 (0)	
62 *Pterocarya-Juglans*	サワグルミ属－クルミ属		1 (0)	2 (1)		1 (0)	1 (0)		3 (1)			1 (0)	2 (1)				
71 *Carpinus-Ostrya*	クマシデ属－アサダ属	11 (5)	8 (3)	23 (6)	21 (8)	20 (7)	15 (4)	3 (1)	16 (4)	10 (3)	7 (2)	18 (6)	6 (3)	16 (5)	6 (2)	16 (5)	17 (5)
73 *Corylus*	ハシバミ属		1 (0)		2 (1)	1 (0)	1 (0)		1 (0)	2 (1)	1 (0)	4 (1)	1 (0)		1 (0)	1 (0)	
74 *Betula*	カバノキ属	3 (1)	2 (1)	1 (0)	3 (1)		2 (1)		3 (1)	5 (2)	2 (1)	2 (1)	1 (0)	2 (1)		1 (0)	1 (0)
75 *Alnus*	ハンノキ属	1 (0)		2 (1)	2 (1)		4 (1)	3 (1)	3 (1)	4 (1)				3 (1)	5 (2)	1 (0)	
81 *Fagus crenata* type	ブナ型	1 (0)	2 (1)	2 (1)	1 (0)				1 (0)			1 (0)		1 (0)			2 (1)
82 *Fagus japonica* type	イヌブナ型	1 (0)				1 (0)	1 (0)		3 (1)	1 (0)					2 (1)		
83 *Quercus*	コナラ亜属	14 (6)	22 (10)	29 (8)	21 (8)	41 (14)	36 (11)	28 (9)	34 (8)	10 (3)	20 (7)	26 (9)	33 (15)	55 (17)	57 (23)	26 (9)	47 (13)
84 *Cyclobalanopsis*	アカガシ亜属	45 (20)	45 (20)	119 (33)	86 (31)	85 (30)	139 (41)	209 (68)	105 (24)	65 (22)	86 (30)	101 (34)	76 (34)	102 (31)	104 (41)	122 (41)	84 (23)
85 *Castanea*	クリ属									2 (1)	1 (0)	1 (0)	1 (0)	1 (0)	1 (0)	2 (1)	
88 *Castanopsis-Pasania*	シイノキ属－マテバシイ属	1 (0)					1 (0)			2 (1)		4 (1)	5 (2)	10 (3)	4 (2)	6 (2)	6 (2)
92 *Ulmus-Zelkova*	ニレ属－ケヤキ属	3 (1)	2 (1)	7 (2)	3 (1)	3 (1)	4 (1)	1 (0)	8 (2)	7 (2)	6 (2)	6 (2)	6 (3)	7 (2)	3 (1)	1 (0)	
94 *Celtis-Aphananthe*	エノキ属－ムクノキ属			1 (0)					1 (0)		1 (0)				4 (2)	1 (0)	
97 Moraceae-Urticaceae	クワ科－イラクサ科	1 (0)	1 (0)			1 (0)					2 (1)	2 (1)	7 (3)	1 (0)	1 (0)		
112 *Illicium*	シキミ属								1 (0)								
132 *Zanthoxylum*	サンショウ属					1 (0)						1 (0)	1 (0)	1 (0)			
160 *Ilex*	モチノキ属				1 (0)	1 (0)		5 (2)						1 (0)			
170 *Acer*	カエデ属								1 (0)								
220 Ericaceae	ツツジ科							1 (0)	1 (0)							1 (0)	
230 *Symplocos*	ハイノキ属					2 (1)											
241 Ligustrum type	イボタノキ属型										1 (0)						
245 *Fraxinus*	トネリコ属														1 (0)		
284 *Lonicera*	スイカズラ属							1 (0)									
301 *Typha*	ガマ属		3 (1)									3 (1)	3 (1)	6 (2)	1 (0)		
305 *Alisma*	サジオモダカ属			4 (1)		1 (0)		2 (1)	1 (0)	2 (1)	3 (1)	1 (0)			1 (0)		5 (1)
306 Sagittaria	オモダカ属	2 (1)	3 (1)	1 (0)	10 (4)	5 (2)	2 (1)	1 (0)	14 (3)	2 (1)	1 (0)	4 (1)	13 (6)	18 (5)	2 (1)		2 (1)
310 Gramineae	イネ科	195 (85)	154 (67)	151 (42)	232 (83)	131 (46)	120 (36)	10 (3)	327 (76)	211 (72)	197 (68)	263 (89)	153 (69)	183 (55)	110 (44)	185 (63)	153 (43)

表 3-2 兀塚遺跡の花粉組成表

		Ⅱ区北壁							Ⅲ区南壁								
	試料No	6	7	12	8	9	10	11	19	18	17	16	15	14	13	37	36
	地層	4	5	18	13	14	15	16	4	5	6	7	8	9	11	18	15
320 Cyperaceae	カヤツリグサ科	12 (5)	10 (4)	23 (6)	10 (4)	8 (3)	7 (2)	4 (1)	19 (4)	12 (4)	11 (4)	18 (6)	26 (12)	33 (10)	28 (11)	8 (3)	29 (8)
345 Liliaceae	ユリ科														1 (0)		
416 *Echinocaulon-Persicaria*	ウナギツカミ節－サナエタデ節	1 (0)	3 (1)	4 (1)				2 (1)	5 (1)		1 (0)	1 (0)					4 (1)
420 *Fagopyrum*	ソバ属								1 (0)	1 (0)						1 (0)	
422 Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科－ヒユ科	1 (0)		1 (0)				1 (0)									
430 Caryophyllaceae	ナデシコ科																1 (0)
450 Ranunculaceae	キンポウゲ科								1 (0)								
455 *Thalictrum*	カラマツソウ属											1 (0)					
461 Cruciferae	アブラナ科						1 (0)										1 (0)
491 *Sanguisorba*	ワレモコウ属					1 (0)		1 (0)				3 (1)	4 (2)	9 (3)	8 (3)	1 (0)	1 (0)
501 Leguminosae	マメ科													1 (0)			
571 Haloragaceae	アリノトウグサ科		2 (1)	1 (0)					2 (0)	4 (1)	1 (0)	4 (1)				5 (2)	
580 Umbelliferae	セリ科				1 (0)			1 (0)	2 (0)			1 (0)		2 (1)	4 (2)		
611 Lamiaceae	シソ科											1 (0)					
701 *Adeno.-Campanu.-Wahlenbergia*	ツリガネニンジン属－ホタルブクロ属－ヒナギキョウ属			1 (0)													
710 Carduoideae	キク亜科	5 (2)	5 (2)	8 (2)	6 (2)	11 (4)	12 (4)	6 (2)	6 (1)	7 (2)	11 (4)	8 (3)	3 (1)	10 (3)	19 (8)	6 (2)	22 (6)
712 *Artemisia*	ヨモギ属	18 (8)	22 (10)	26 (7)	31 (11)	19 (7)	26 (8)	18 (6)	40 (9)	31 (11)	22 (8)	25 (8)	20 (9)	33 (10)	37 (15)	31 (11)	37 (10)
720 *Cichorioideae*	タンポポ亜科	8 (3)	13 (6)	2 (1)	4 (1)	11 (4)	10 (3)	1 (0)	11 (3)	9 (3)	6 (2)	5 (2)	2 (1)	11 (3)	6 (2)	8 (3)	2 (1)
802 *Urostachys sieboldii* type	ヒモラン型							1 (0)									
850 *Ophioglossum*	ハナヤスリ属	1 (0)				1 (0)			1 (0)	2 (1)		1 (0)					5 (1)
863 *Osmunda cinnamomea* type	ヤマドリゼンマイ型											1 (0)					
875 *Davallia*	シノブ属	7 (3)	2 (1)	3 (1)	7 (3)	4 (1)	13 (4)	6 (2)	5 (1)	2 (1)	3 (1)	4 (1)	4 (2)	3 (1)	1 (0)	5 (2)	6 (2)
881 Pteridaceae	イノモトソウ科		1 (0)	1 (0)	2 (1)		4 (1)	1 (0)	3 (1)	1 (0)				2 (1)	1 (0)		1 (0)
886 Aspid.-Asple.	オシダ科－チャセンシダ科	2 (1)	2 (1)	2 (1)	7 (3)	5 (2)	16 (5)	15 (5)	4 (1)	3 (1)			1 (0)		1 (0)		8 (2)
891 Polypodiaceae	ウラボシ科						2 (1)	10 (3)	2 (0)								2 (1)
898 MONOLATE-TYPE-SPORE	単条溝胞子	2 (1)	1 (0)		2 (1)	2 (1)	4 (1)	12 (4)	2 (0)	2 (1)	1 (0)	2 (1)		1 (0)	3 (1)	5 (2)	7 (2)
899 TRILATE-TYPE-SPORE	三条溝胞子	4 (2)	1 (0)	2 (1)	9 (3)	6 (2)	9 (3)	11 (4)	4 (1)	1 (0)	1 (0)	3 (1)	5 (2)	2 (1)	12 (5)	14 (5)	19 (5)
木本（針葉樹）		149 (31)	145 (32)	169 (29)	139 (23)	129 (26)	127 (23)	56 (14)	248 (28)	184 (32)	158 (29)	128 (20)	81 (18)	128 (20)	62 (13)	115 (20)	202 (30)
木本（広葉樹）		81 (17)	84 (19)	193 (33)	141 (23)	158 (32)	208 (37)	251 (61)	184 (21)	108 (19)	132 (24)	169 (26)	142 (31)	205 (32)	190 (39)	179 (32)	157 (24)
草本・藤本		242 (50)	215 (48)	222 (38)	294 (49)	187 (38)	178 (32)	47 (11)	429 (49)	279 (48)	253 (46)	338 (52)	224 (49)	306 (47)	217 (45)	245 (44)	257 (39)
胞子		16 (3)	7 (2)	8 (1)	27 (4)	18 (4)	48 (9)	56 (14)	21 (2)	11 (2)	5 (1)	11 (2)	10 (2)	8 (1)	18 (4)	24 (4)	48 (7)
総数		488	451	592	601	492	561	410	882	582	548	646	457	647	487	563	664
312 Oryza type	イネ属型	62 (62)	81 (78)	68 (66)	89 (79)	69 (63)	63 (60)	24 (46)	54 (51)	64 (62)	62 (64)	68 (66)	54 (51)	52 (47)	41 (41)	61 (60)	49 (48)
313 *Gramineae (indistinct)*	イネ科（不明）	21 (21)	10 (10)	14 (14)	12 (11)	18 (17)	11 (10)	6 (12)	26 (25)	19 (18)	13 (13)	14 (14)	18 (17)	18 (16)	26 (26)	19 (19)	14 (14)
314 *Gramineae (others)*	イネ科（その他）	17 (17)	13 (13)	21 (20)	11 (10)	22 (20)	31 (30)	22 (42)	25 (24)	20 (19)	22 (23)	21 (20)	33 (31)	41 (37)	33 (33)	21 (21)	39 (38)
	イネ科総数	100	104	103	112	109	105	52	105	103	97	103	105	111	100	101	102
	含有量（粒数/g）	13,164	13,125	16,128	22,325	24,987	14,174	24,532	7,545	11,543	21,168	20,924	27,071	26,035	77,397	5,193	3,631

( )内は％

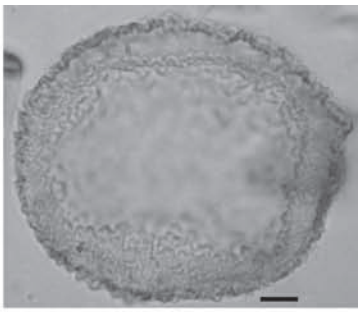
表 4 兀塚遺跡の植物珪酸体組成表

調査区	Ⅱ区北壁				Ⅲ区南壁				
試料Ｎｏ.	6	7	12	8	18	17	16	15	14
地層	4	5	18	13	5	6	7	8	9
1　イネ	2	2	4	2	3	4	5	2	3
	13	13	26	14	19	25	32	13	20
	0.38	0.39	0.76	0.4	0.56	0.75	0.93	0.39	0.58
31　ヨシ属	2	2	2	1	2	1	1	3	2
	13	13	13	7	13	6	6	20	13
	0.82	0.83	0.82	0.43	0.81	0.4	0.4	1.25	0.82
51　シバ属型	2								
	13								
61　キビ族型 (アワ・キビ・ヒエを含む)	1	1	1	1	2	1	1	1	1
	7	7	6	7	13	6	6	7	7
81　ススキ属型					1	1	2	1	
					6	6	13	7	
					0.08	0.08	0.16	0.08	
83　ウシクサ族 A	8	6	3	1	2	2	3	2	4
	52	39	19	7	13	13	19	13	26
93　ジュズダマ属型 (ハトムギを含む)								1	
								7	
201　メダケ節型	9	13	8	8	18	10	5	5	6
	59	85	52	54	115	64	32	33	39
	0.68	0.99	0.6	0.63	1.34	0.74	0.37	0.38	0.45
203　ネザサ節型	68	80	51	82	56	57	65	78	65
	443	526	330	554	358	363	412	517	424
	2.13	2.52	1.58	2.66	1.72	1.74	1.98	2.48	2.04
205　チマキザサ節型	1	2	2	3	4	4	1	5	3
	7	13	13	20	26	25	6	33	20
	0.05	0.1	0.1	0.15	0.19	0.19	0.05	0.25	0.15
207　ミヤコザサ節型	2	4	3	2	4	4	6	3	3
	13	26	19	14	26	25	38	20	20
	0.04	0.08	0.06	0.04	0.08	0.08	0.11	0.06	0.06
501　ブナ科（シイ属）	2	1	1	1	3	4	2	1	1
	13	7	6	7	19	25	13	7	7
510　クスノキ科	1	1	2	2	1	2	4	1	1
	7	7	13	14	6	13	25	7	7
プラント・オパール総数	98	112	77	103	96	90	95	103	89
カウントガラスビーズ数	459	458	464	449	469	470	474	451	463
カウント総数	557	570	541	552	565	560	569	554	552
試料重量 (× 0.0001g)	6984	6991	7010	7038	7019	7025	7001	7043	7022
ガラスビーズ重量 (× 0.0001g)	132	133	133	135	133	133	133	133	134

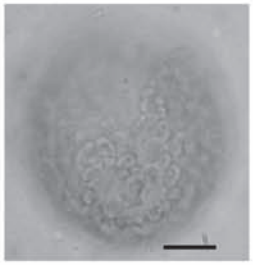
上段　検出粒数
中段　検出密度（単位；× 100 粒 /g）
下段　推定生産量（単位；kg /㎡・㎝）

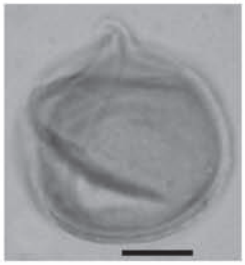
マキ属

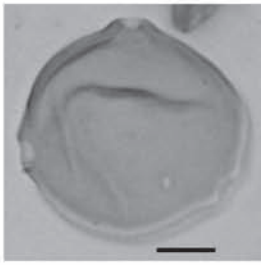
モミ属

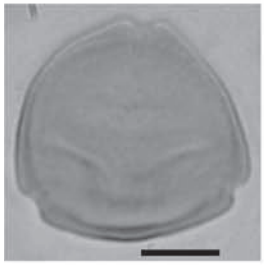

ツガ属

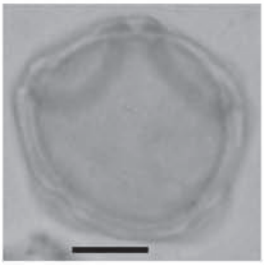
マツ属 (複維管束亜属)


コウヤマキ属


スギ属

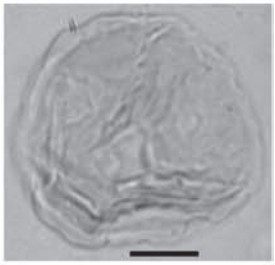

クマシデ属 - アサダ属

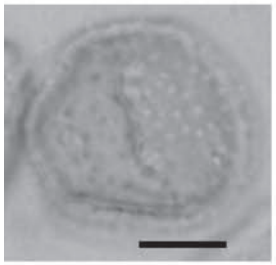

ハシバミ属

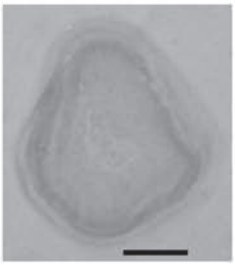

ハンノキ属

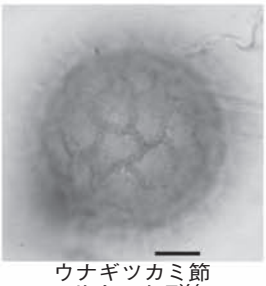
コナラ亜属

アカガシ亜属

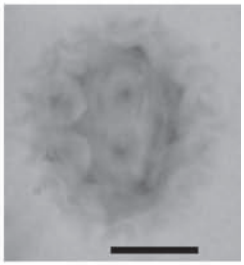

ニレ属 - ケヤキ属


オモダカ属

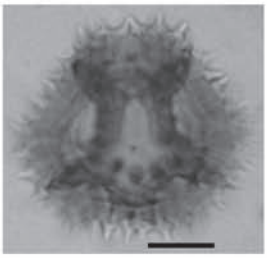

カヤツリグサ科

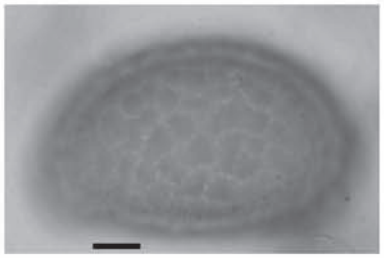

ウナギツカミ節
- サナエタデ節

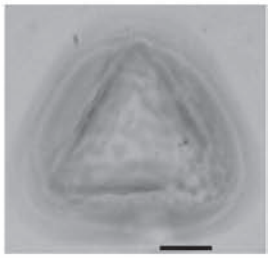
ソバ属


キク亜科

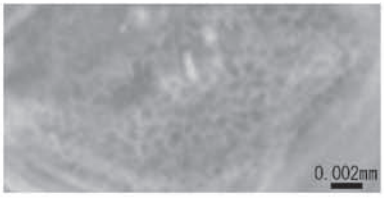
ヨモギ属


タンポポ亜科


シノブ属

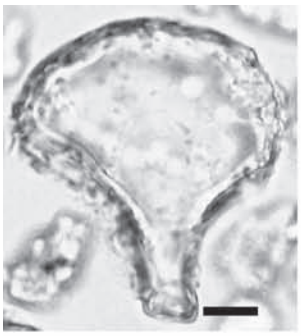

イノモトソウ属

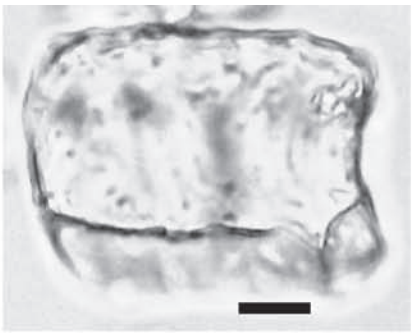
イネ属型



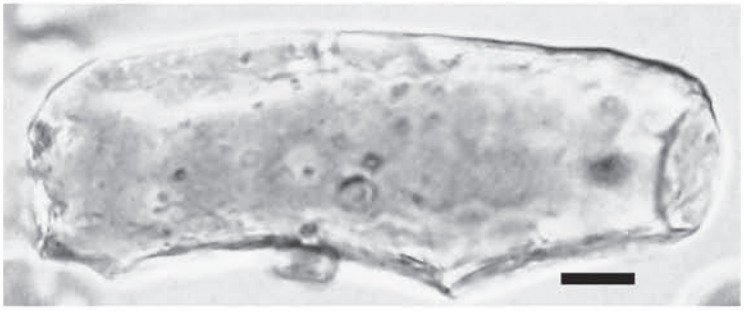
イネ属 (その他)

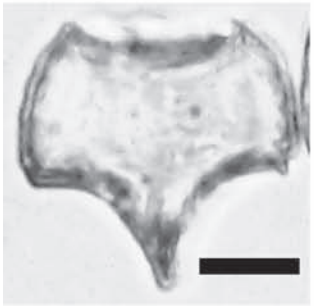
スケールはすべて 0.01㎜


イネ

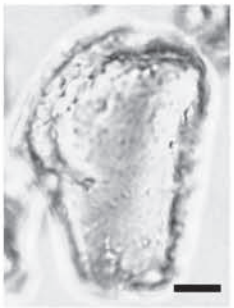

イネ (側面)

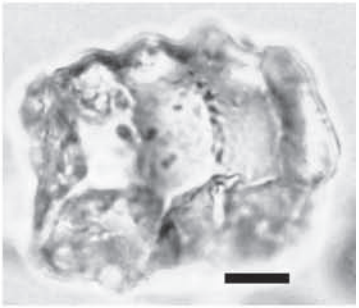
ヨシ属

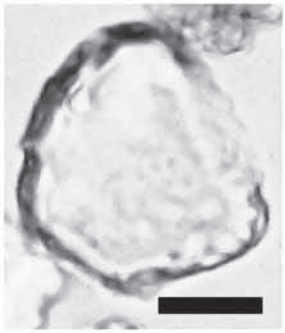

キビ族型

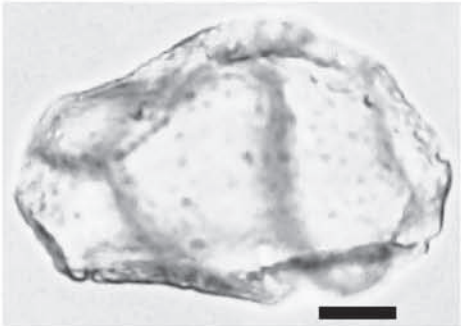

シバ属型

ススキ属型

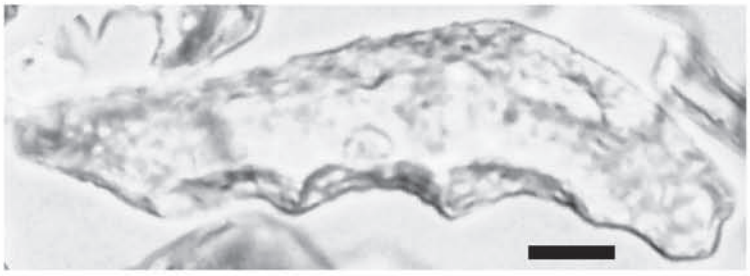

メダケ節型


ネザサ節型


ミヤコザサ節型


ブナ科 (シイ属)

チマキザサ節型


クスノキ科

スケールはすべて 0.01㎜

第２節　香川県兀塚遺跡出土木製品の樹種調査結果

（株）吉田生物研究所

1. 試料

試料は香川県兀塚遺跡から出土した建築部材７点、用途不明品５点の合計 12 点である。

2. 観察方法

剃刀で木口（横断面）、柾目（放射断面）、板目（接線断面）の各切片を採取し、永久プレパラートを作製した。このプレパラートを顕微鏡で観察して同定した。

3. 結果

樹種同定結果（針葉樹３種、広葉樹３種）の表と顕微鏡写真を示し、以下に各種の主な解剖学的特徴を記す。

１）ヒノキ科ヒノキ属（*Chamaecyparis sp.*）

（遺物 No.229,230）

（写真 No.229,230）

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行が急であった。樹脂細胞は晩材部に偏在している。柾目では放射組織の分野壁孔はヒノキ型で１分野に１～２個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。数珠状末端壁を持つ樹脂細胞がある。ヒノキ属はヒノキ、サワラがあり、本州 (福島以南)、四国、九州に分布する。

２）ヒノキ科アスナロ属（*Thujopsis sp.*）

（遺物 No.328）

（写真 No.328）

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は緩やかであった。樹脂細胞は晩材部に散在または接線配列である。柾目では放射組織の分野壁孔はヒノキ型からややスギ型で１分野に２～４個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。数珠状末端壁を持つ樹脂細胞がある。アスナロ属にはアスナロ（ヒバ、アテ）とヒノキアスナロ（ヒバ）があるが顕微鏡下では識別困難である。アスナロ属は本州、四国、九州に分布する。

３）コウヤマキ科コウヤマキ属コウヤマキ（*Sciadopitys verticillata Sieb. et Zucc.*）

（遺物 No.815）

（写真 No.815）

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行はやや緩やかで晩材部の幅は極めて　狭い。柾目では放射組織の分野壁孔は小型の窓状で１分野に１～２個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。コウヤマキは本州 (福島以南)、四国、九州 (宮崎まで) に分布する。

４）ブナ科コナラ属コナラ亜属クヌギ節（*Quercus subgen. Lepidobalanus Endlicher sect. Cerris*）

（遺物 No.606）

（写真 No.606）

環孔材である。木口では大道管（～ 430 μ m）が年輪界にそって１～数列並んで孔圏部を形成している。孔圏外では急に大きさを減じ、厚壁で円形の小道管が単独に放射方向に配列している。放射組織は単列放射組織と非常に幅の広い放射組織がある。柾目では道管は単穿孔と対列壁孔を有する。放射組織はすべて平伏細胞からなり同性である。道管放射組織間壁孔には柵状の壁孔が存在する。板目では多数の単列放射組織と肉眼でも見られる典型的な複合型の広放射組織が見られる。クヌギ節はクヌギ、アベマキがあり、本州 (岩手、山形以南)、四国、九州、琉球に分布する。

５）ブナ科コナラ属アカガシ亜属（*Quercus subgen. Cyclobalanopsis*）

（遺物 No.227,228）

（写真 No.227,228）

放射孔材である。木口では年輪に関係なくまちまちな大きさの道管（～ 200 μ m）が放射方向に配列する。軸方向柔細胞は接線方向に１～３細胞幅の独立帯状柔細胞をつくっている。放射組織は単列放射組織と非常に列数の広い放射組織がある。柾目では道管は単穿孔と多数の壁孔を有する。放射組織はおおむね平伏細胞からなり、時々上下縁辺に方形細胞が見られる。道管放射組織間壁孔は大型で柵状の壁孔が存在する。板目では多数の単列放射組織と放射柔細胞の塊の間に道管以外の軸方向要素が挟まれている集合型と複合型の中間となる型の広放射組織が見られる。アカガシ亜属はイチイガシ、アカガシ、シラカシ等があり、本州（宮城、新潟以南）、四国、九州、琉球に分布する。

６）ブナ科クリ属クリ（*Castanea crenata Sieb. et Zucc.*）

（遺物 No.343,347,348,687,688）

（写真 No.343,347,348,687,688）

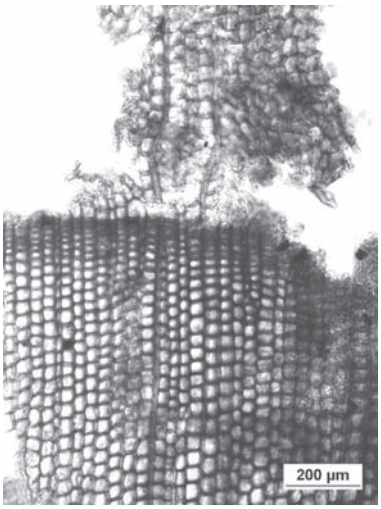
環孔材である。木口では円形ないし楕円形で大体単独の大道管（～ 500 μ m）が年輪にそって幅のかなり広い孔圏部を形成している。孔圏外は急に大きさを減じ薄壁で角張った小道管が単独あるいは２～３個集まって火炎状に配列している。柾目では道管は単穿孔と多数の有縁壁孔を有する。放射組織は大体において平伏細胞からなり同性である。板目では多数の単列放射組織が見られ、軸方向要素として道管、それを取り囲む短冊型柔細胞の連なり（ストランド）、軸方向要素の大部分を占める木繊維が見られる。クリは北海道（西南部）、本州、四国、九州に分布する。

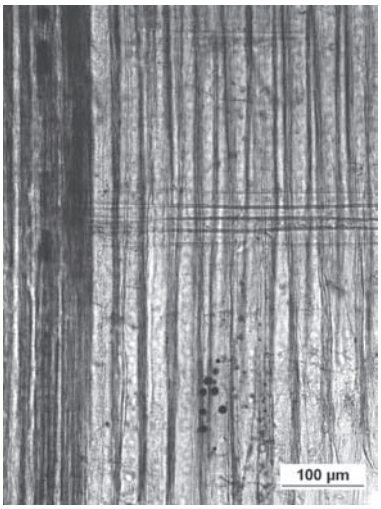
◆参考文献◆
林 昭三「日本産木材顕微鏡写真集」京都大学木質科学研究所（1991）
伊東隆夫「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ～Ⅴ」京都大学木質科学研究所（1999）
島地 謙・伊東隆夫「日本の遺跡出土木製品総覧」雄山閣出版（1988）
北村四郎・村田 源「原色日本植物図鑑木本編Ⅰ・Ⅱ」保育社（1979）
奈良国立文化財研究所「奈良国立文化財研究所 史料第 27 冊 木器集成図録 近畿古代篇」（1985）
奈良国立文化財研究所「奈良国立文化財研究所 史料第 36 冊 木器集成図録 近畿原始篇」（1993）

◆使用顕微鏡◆
Nikon DS-Fi1

兀塚遺跡出土木製品同定表表

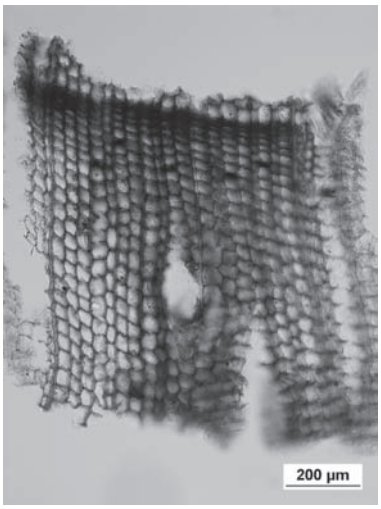
No.	品名	樹種
227	角材	ブナ科コナラ属アカガシ亜属
228	ミカン割材	ブナ科コナラ属アカガシ亜属
229	板材	ヒノキ科ヒノキ属
230	板材	ヒノキ科ヒノキ属
328	板材	ヒノキ科アスナロ属
343	柱材	ブナ科クリ属クリ
347	柱材	ブナ科クリ属クリ
348	柱材	ブナ科クリ属クリ
606	ミカン割材	ブナ科コナラ属コナラ亜属クヌギ節
687	柱材	ブナ科クリ属クリ
688	柱材	ブナ科クリ属クリ
815	柱根	コウヤマキ科コウヤマキ属コウヤマキ

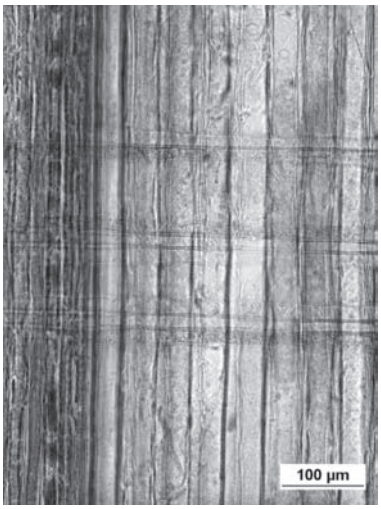




木口　　柾目　　板目

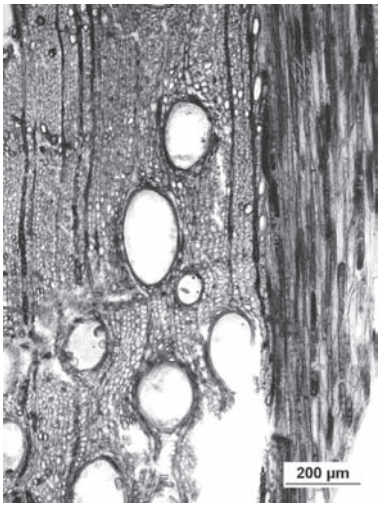
No-230　ヒノキ科ヒノキ属

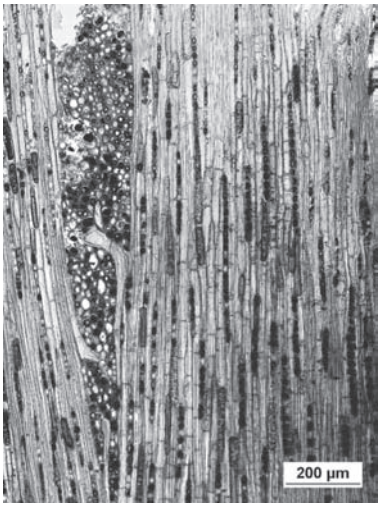




木口　　柾目　　板目

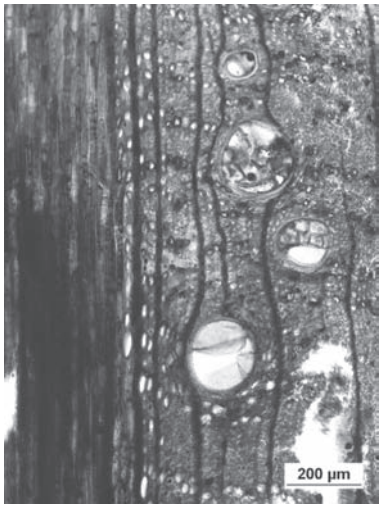
No-229　ヒノキ科ヒノキ属

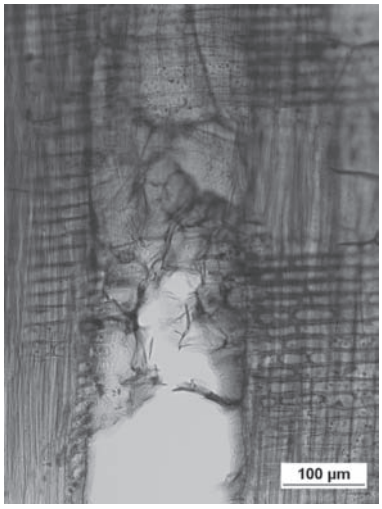


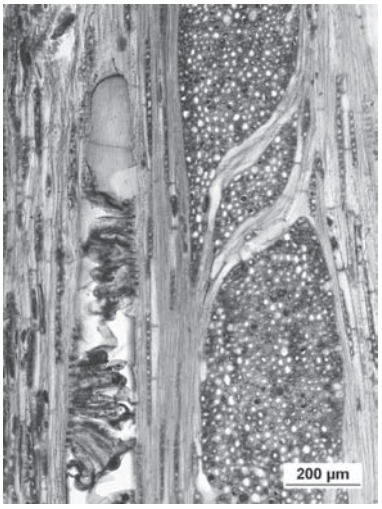


木口　　柾目　　板目

No-227　ブナ科コナラ属アカガシ亜属





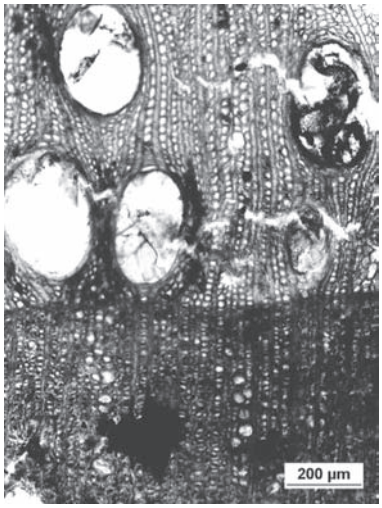


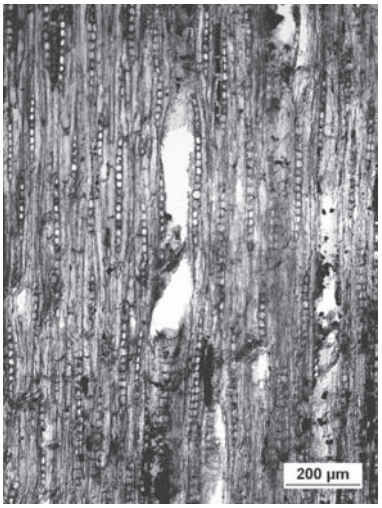
木口　　柾目　　板目

No-228　ブナ科コナラ属アカガシ亜属

木口　　柾目　　板目

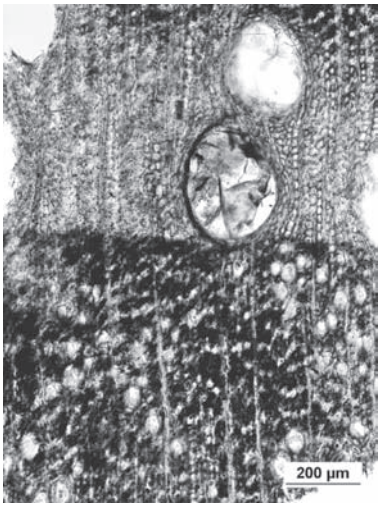
No-328　ヒノキ科アスナロ属





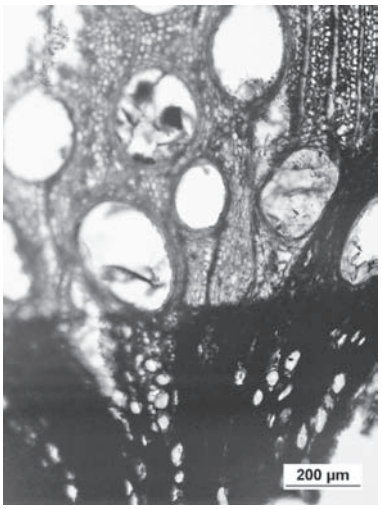
木口　　柾目　　板目

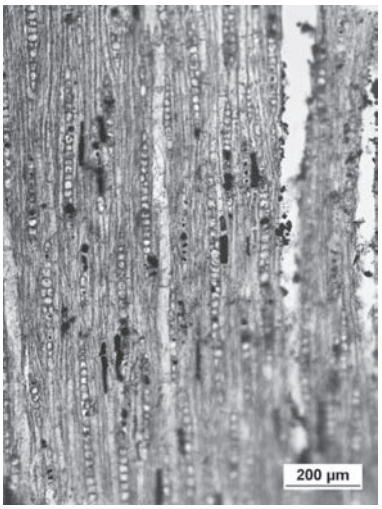
No-343　ブナ科クリ属クリ



木口　　柾目　　板目

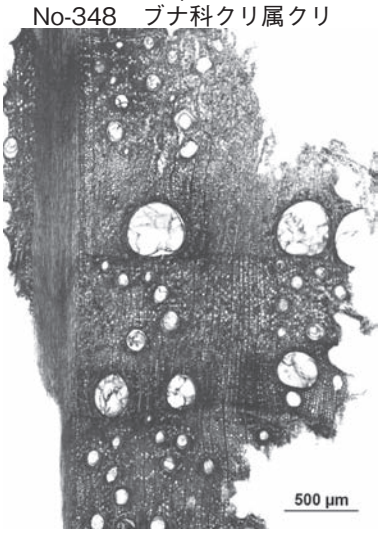
No-347　ブナ科クリ属クリ

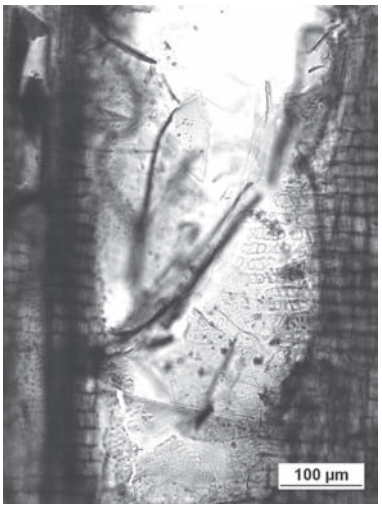


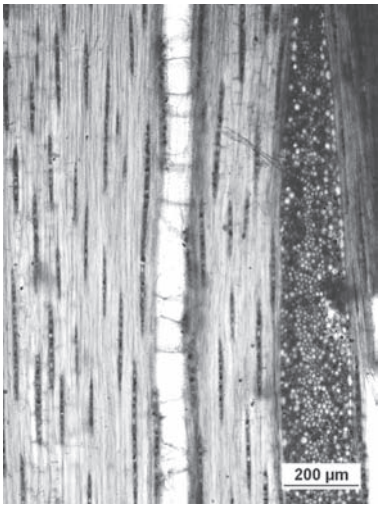


木口　　柾目　　板目

No-348　ブナ科クリ属クリ

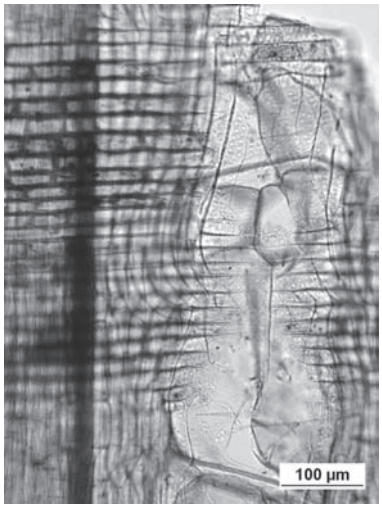






木口　　柾目　　板目

No-606　ブナ科コナラ属コナラ亜属クヌギ節

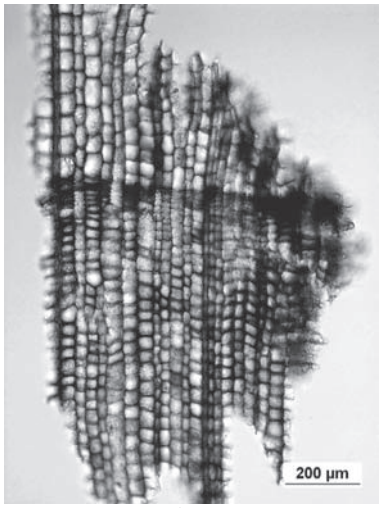


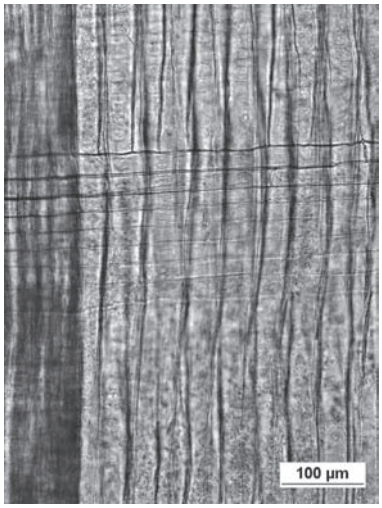
木口　　柾目　　板目

No-688　ブナ科クリ属クリ

木口　　柾目　　板目

No-687　ブナ科クリ属クリ





木口　　柾目　　板目

No-815 コウヤマキ科コウヤマキ属コウヤマキ

第３節　兀塚遺跡に係わる鍛冶関連遺物の金属学的分析業務委託

株式会社イビソク

１．はじめに

香川県埋蔵文化財センター殿より兀塚遺跡に係わる鍛冶関連遺物について、化学成分分析・顕微鏡組織観察を含む金属学的分析調査を依頼された。フイゴの羽口に付着した鉄滓６点の化学組成分析、マクロ及びミクロ組織観察、ビッカース断面硬度、ＥＰＭＡ分析などの分析結果ににもとづき材質、出発原料、製造工程上の位置づけなどを中心に調査した。その結果について報告する。

２．調査項目および試験・観察方法

(１) 調査項目

調査試料の記号、出土遺構・注記および調査項目を表１に示す。

(２) 調査方法

(ｉ) 重量計測、外観観察および金属探知調査

試料重量の計量は電子天秤を使用して行い、少数点２位以下で四捨五入した。各種試験用試料を採取する前に、試料の外観を mm 単位まであるスケールを同時に写し込みで撮影した。試料の出土位置や試料の種別等は提供された資料に準拠した。

着磁力調査については、直径 30mm のリング状フェライト磁石を使用し、6mm を１単位として 35cm の高さから吊した磁石が動きは始める位置を着磁度として数値で示した。遺物内の残存金属の有無は金属探知機（ＭＣ：metal checker）を用いて調査した。金属検知にあたっては参照標準として直径と高さを等しくした金属鉄円柱（1.5mm φ x1.5mmH、2.0mm φ x2.0mmH、5mm φ x5mmH、10mm φ x10mmH、16mm φ x16mmH、20mm φ x20mmH、30mm φ x30mmH）を使用し、これとの対比で金属鉄の大きさを判断した。

(ⅱ) 化学組成分析

化学組成分析は鉄鋼に関するＪＩＳ分析法に準じて行っている。

・全鉄（T.Fe）：三塩化チタン還元－二クロム酸カリウム滴定法。
・金属鉄 (M.Fe)：臭素メタノール分解－ EDTA 滴定法。
・酸化第一鉄 (FeO)：二クロム酸カリウム滴定法。
・酸化第二鉄 (Fe_2O_3)：計算。・化合水 (C.W.)：カールフィッシャー法。
・炭素 (C)、イオウ (S)：燃焼－赤外線吸収法。
・ライム (CaO)、酸化マグネシウム (MgO)、酸化マンガン (MnO)、酸化ナトリウム (Na_2O)、
　珪素 (Si)、マンガン (Mn)、リン (P)、銅 (Cu)、ニッケル (Ni)、コバルト（Co）、アルミニウム (Al)、
　ヴァナジュム (V)、チタン (Ti)：ICP 発光分光分析法。
・シリカ (SiO_2)、アルミナ (Al_2O_3)、酸化カルシウム (CaO)、酸化マグネシウム (MgO)、
　二酸化チタン (TiO_2)、酸化リン (P_2O_5)、酸化カリウム (K_2O)：ガラスビード蛍光Ｘ線分析法。
　但し CaO, MgO, MnO は含有量に応じて ICP 分析法またはガラスビード蛍光Ｘ線分析法を選択。
・酸化ナトリウム (Na_2O)：原子吸光法。

なお、鉄滓中成分は、16 成分（全鉄 T.Fe、金属鉄 M.Fe、酸化第一鉄 FeO、酸化第二鉄 Fe_2O_3、シリカ SiO_2、アルミナ Al_2O_3、ライム CaO、マグネシア MgO、酸化ナトリウム Na_2O、酸化カリウム K_2O、二酸化チタン TiO_2、酸化マンガン MnO、酸化リン P_2O_5、化合水 C.W.、炭素 C、ヴァナジウム V）を化学分析している。分析は各元素について分析し、酸化物に換算して表示している。

(ⅲ) マクロ組織及び顕微鏡組織観察

試料の一部を切り出し樹脂に埋め込み、細かい研磨剤などで研磨（鏡面仕上げ）する。炉壁・羽口・粘土などの鉱物性試料については顕微鏡で観察しながら代表的な鉱物組織などを観察し、その特徴から材質、用途、熱履歴などを判断する。滓関連資料も炉壁・羽口などと同様の観察を行うが特徴的鉱物組織から成分的な特徴に結びつけ製･精錬工程の判別､使用原料なども検討する。金属鉄はナイタール(5%硝酸アルコール液）で腐食後、顕微鏡で観察しながら代表的な断面組織を拡大して写真撮影し、顕微鏡組織および介在物（不純物、非金属鉱物）の存在状態等から製鉄・鍛冶工程の加工状況や材質を判断する。原則としてマクロ組織は実体顕微鏡（5 ～ 20 倍）で、ミクロ組織は顕微鏡で 100 倍および 400 倍でそれぞれ撮影する。

(ⅳ) ビッカース断面硬度

ビッカース硬度計を用いて硬度を測定する（JIS Z　2244)。鏡面仕上げした試料面に対面角 136° の四角錐ダイアモンド圧子を一定荷重､荷重時間 10 秒で押し込み､生じた圧痕の対角線の平均長さ d から、次式によって硬度を算出する。

ビッカース硬度（Hv）＝（荷重）/（圧痕の表面積）＝ 2 Psin（α /2）/ d 2(kg/mm2)

ここで、Hv はビッカース硬度、α は対面角で 136°、d は圧痕の対角線の平均長さ μm、P は荷重 gf である。本測定に当たっては組織の硬さを考慮して荷重は 100 gf としている。

(ⅴ) ＥＰＭＡ分析

真空中で試料面の直径 1 μm 程度の範囲に焦点をあて、高速度（5 ～ 30kV）の電子線を照射すると試料面から二次電子、反射電子、特性 X 線などが発生する。その特性Ｘ線の波長および強度を測定することにより､存在する元素の定性あるいは定量分析を行う｡電子線マイクロプローブＸ線アナライザー（ＥＰＭＡ）という。試料表面の微小部分（200 μm 程度以下の範囲）に存在する元素の濃度分布を測定できる。光学顕微鏡による視野（140 ～ 560 倍、500 μm）を同時観察できる。

３. 調査結果および考察

分析調査結果を図表にまとめて表 2 ～ 5、図 1 ～ 4 に示す。表 1 に調査試料と調査項目をまとめた。表 2 ～表 3 に試料の化学組成分析結果を、表 4 に硬度測定結果を、表 5 に調査結果のまとめをそれぞれ示した。

全試料の外観写真を図 5 ～ 10 に、試料の切断位置と切断写真を図 11 ～ 16 に、マクロ組織写真を図 17 に、顕微鏡組織写真を図 18 ～ 29 に、EPMA のポイント分析結果を図 30 ～ 35 に、マッピング分析結果を図 36 ～ 41 にそれぞれ示す。5. 参考には鉄滓関連鉱物の英文名、化学式などと鉄 - 炭素系状態図を示した。

以下、試料の番号順に述べる。

試料 No.1　鉄滓、着磁度：なし、メタル反応：なし

肉眼観察：外観写真を図 5 に、切断面写真を図 11 にそれぞれ示す。重量 5.3g、長さ 31.1mm、幅 24.8mm、厚さ 10.2mm。不整三角形をした扁平な鉄滓で軽い。酸化土砂に覆われて茶褐色を呈している。表面には 1 mm大の砂礫が付着している。試料のほぼ中央部分から分析試料を採取する。マクロ組織観察：20 倍の断面写真を図 17 に示す。鉄滓組織は殆んど見られず、ほぼ全体が銹化鉄の組織である。

顕微鏡組織観察：顕微鏡組織写真を図 18、19 に示す。ほぼ全域が銹化鉄の組織である。

化学組成分析：化学組成分析結果を表 2 ～ 3 に示す。全鉄 51.9% に対して金属鉄は 0.22%とわずかである。FeO は 1.64%、Fe_2O_3 は 72.1%、SiO_2 は 12.7％、Al_2O_3 は 2.0％、TiO_2 は 0.11％であり始発原料は砂鉄か否かは判断できない。FeO-Fe_2O_3-SiO_2 の 3 成分系に換算すると FeO は 1.9％、Fe_2O_3 は 83.4％、SiO_2 は 14.7％となる。図 1 の FeO-Fe_2O_3-SiO_2 系の平衡状態図ではヘマタイト領域（Hematite：Fe_2O_3）にあり平衡状態図上の位置は顕微鏡観察と一致する。

以上から本試料は銹化が内部にまで進行した鉄製品と見られる。

試料 No.2　鉄滓、着磁度：なし、メタル反応：なし

肉眼観察：外観写真を図 6 に、切断面写真を図 12 にそれぞれ示す。写真右側の滓が付着した痕跡が見られる試料を分析する。重量 10.5g、長さ 28.4mm、幅 27.3mm、厚さ 18.0mm。不整五角形で軽量感のあるフイゴの羽口に付着した鉄滓である。表面は約半分が胎土組織と見られる赤褐色を呈した部分で他は灰白色の部分である。滓そのものは黒色で破面は 1、破面で見ると気泡が多数観察される。着磁、メタル反応ともになし。黒色を呈した部分から分析試料を採取する。

マクロ組織観察：10 倍の断面写真を図 17 に示す。鉄滓組織は殆んど見られず、ほぼ全体が胎土の組織である。

顕微鏡組織観察：顕微鏡組織写真を図 20・21 に示す。胎土組織の中に僅かに存在するガラス組織に晶出した微細なマグネタイト（Magnetite：Fe_3O_4）組織が観察される。

化学組成分析：化学組成分析結果を表 2 ～ 3 に示す。胎土組織であり全鉄は 8.21% と僅かで、造滓成分が 87.1％を示す。FeO は 1.00%、Fe_2O_3 は 10.5%、SiO_2 は 67.5％、Al_2O_3 は 12.4％、TiO_2 は 0.44％であり始発原料は砂鉄か否かは判断できない。FeO-Fe_2O_3-SiO_2 の 3 成分系に換算すると FeO は 1.3%、Fe_2O_3 は 13.3％、SiO_2 は 85.5％となる。図 1 の FeO-Fe_2O_3-SiO_2 系の平衡状態図ではクリストバライト領域にあり平衡状態図上の位置は顕微鏡観察と一致しない。試料中の鉄滓部分が極めて僅かなため羽口の胎土で希釈されたためと見られる。図 2、3、4 は滓の成分的特徴から製鉄工程の生成位置等を検討する図である。図 2、3、4 で見ると本試料は炉壁付着滓の位置にある。

EPMA 分析：マグネタイト（Magnetite：Fe_3O_4）と見られる組織を EPMA で定量分析した結果を図 30 に示す。ポイント分析チャート 1 に示すように Fe_3O_4 が 87.1％、SiO_2 が 6.4％、Al_2O_3 が 2.6％、MgO が 1.6％、CaO が 0.9％、TiO_2 が 0.8％含まれるが、マグネタイトが主要な組織であることが確認される。面的に化学成分を分析したマッピング分析結果を 2 次電子線像（SE 像）とともに図 36 に示す。鉄（Fe）は化学式に示されるようにマグネタイト（Magnetite：Fe_3O_4）に存在している。ガラス質組織の部分には、珪酸質スラグの珪素（Si）やマグネシウム（Mg）やカルシウム（Ca）が現れている。本試料中に混入していた滓は成分的にもマグネタイトを主要鉱物としていることが明らかである。

ビッカース断面硬度：ビッカース硬度計を用いて断面硬度を測定した結果を表4に示す。マグネタイト（Magnetite：Fe_3O_4）組織と見られる部分の硬度はHv592を示した。
以上から本試料はガラス組織中に微細なマグネタイト組織が晶出した鉄滓が付着したフイゴの羽口片と思われる。

試料No.3　鉄滓、着磁度：なし、メタル反応：なし
肉眼観察：外観写真を図7に、切断面写真を図13にそれぞれ示す。重量5.8g、長さ26.0mm、幅16.3mm、厚さ16.1mm。不整四角形で軽量感のあるフイゴの羽口に付着した鉄滓である。表面は灰白色であるが局所的に赤褐色を呈した部分があり、下面側には1ｍｍ大の気泡が見られる。滓そのものは黒色で破面は4、破面で見ると気泡が多数観察され、多孔質である。着磁、メタル反応ともになし。黒色を呈した部分から分析試料を採取する。
マクロ組織観察：10倍の断面写真を図17に示す。鉄滓組織は殆んど見られず、ほぼ全体が胎土の組織である。
顕微鏡組織観察：顕微鏡組織写真を図22、23に示す。胎土組織の中に僅かに存在するガラス組織に晶出した微細なマグネタイト（Magnetite：Fe_3O_4）組織、及びファイヤライト(Fayalite：2FeO・SiO_2)組織などが観察される。
化学組成分析：化学組成分析結果を表2～3に示す。胎土組織であり全鉄は4.70%と僅かで、造滓成分が91.5％を示す。FeOは0.50%、Fe_2O_3は6.02%、SiO_2は72.5％、Al_2O_3は14.0％、TiO_2は0.45％であり始発原料は砂鉄か否かは判断できない。FeO-Fe_2O_3-SiO_2の3成分系に換算するとFeOは0.6%、Fe_2O_3は7.6%、SiO_2は91.7%となる。図1のFeO-Fe_2O_3-SiO_2系の平衡状態図ではクリストバライト領域にあり平衡状態図上の位置は顕微鏡観察と一致しない。試料中の鉄滓部分が極めて僅かなため羽口の胎土で希釈されたためと見られる。図2、3、4は滓の成分的特徴から製鉄工程の生成位置等を検討する図である。図2、3、4で見ると本試料は炉壁付着滓の位置にある。
EPMA分析：マグネタイト（Magnetite：Fe_3O_4）と見られる組織をEPMAで定量分析した結果を図31に示す。ポイント分析チャート2に示すようにFe_3O_4が91.0%、SiO_2が3.7%で、Al_2O_3が2.3%、MgOが1.1%、CaOが0.5%、MnOが0.6%、TiO_2が0.6%含まれるが、マグネタイトが主要な組織であることが確認される。面的に化学成分を分析したマッピング分析結果を2次電子線像（SE像）とともに図37に示す。鉄（Fe）は化学式に示されるようにマグネタイト（Magnetite：Fe_3O_4）、及びファイヤライト（Fayalite:2FeO･SiO_2）に存在している。ガラス質組織の部分には､珪酸質スラグの珪素（Si）やマグネシウム（Mg）やカルシウム（Ca）が現れている。本試料中に混入していた滓成分的にもマグネタイト、及びファイヤライトを主要鉱物としていることが明らかである。
ビッカース断面硬度：ビッカース硬度計を用いて断面硬度を測定した結果を表4に示す。マグネタイト（Magnetite：Fe_3O_4）組織と見られる部分の硬度はHv594を示した。
　以上から本試料はガラス組織中に微細なマグネタイト、及びファイヤライト組織が晶出した鉄滓が付着したフイゴの羽口片と思われる。

試料No.4　鉄滓、着磁度：なし、メタル反応：なし
肉眼観察：外観写真を図8に、切断面写真を図14にそれぞれ示す。重量10.5g、長さ30.6mm、幅

23.4mm、厚さ 16.7mm。内径がφ 25mm 程度をしたフイゴ羽口の破片に滓が付着した鉄滓で多孔質である。上面側は黄褐色、下面側は淡紫色を呈しており、1ｍｍ大の気泡が多数観察される。破面は 3、滓は黒色のガラス状を呈し、着磁、メタル反応ともになし。黒色を呈した部分から分析試料を採取する。

マクロ組織観察：10 倍の断面写真を図 17 に示す。鉄滓組織は殆んど見られず、ほぼ全体が胎土の組織である。

顕微鏡組織観察：顕微鏡組織写真を図 24、25 に示す。胎土組織の中に僅かに存在するガラス組織に晶出した微細なマグネタイト（Magnetite：Fe_3O_4）組織、及びファイヤライト (Fayalite：2FeO・SiO_2) 組織などが観察される。

化学組成分析：化学組成分析結果を表 2 ～ 3 に示す。胎土組織であり全鉄は 6.74% と僅かで、造滓成分が 88.8％を示す。FeO は 1.44%、Fe_2O_3 は 7.89%、SiO_2 は 67.3％、Al_2O_3 は 13.7％、TiO_2 は 0.49％であり始発原料は砂鉄か否かは判断できない。FeO-Fe_2O_3-SiO_2 の 3 成分系に換算すると FeO は 1.9%、Fe_2O_3 は 10.3%、SiO_2 は 87.8%となる。図 1 の FeO-Fe_2O_3-SiO_2 系の平衡状態図ではクリストバライト領域にあり平衡状態図上の位置は顕微鏡観察と一致しない。試料中の鉄滓部分が極めて僅かなため羽口の胎土で希釈されたためと見られる。図 2、3、4 は滓の成分的特徴から製鉄工程の生成位置等を検討する図である。図 2、3、4 で見ると本試料は炉壁付着滓の位置にある。

EPMA 分析：マグネタイト（Magnetite：Fe_3O_4）と見られる組織を EPMA で定量分析した結果を図 32 に示す。ポイント分析チャート 3 に示すように Fe_3O_4 が 75.3%、SiO_2 が 12.1％で、Al_2O_3 が 6.9%、MgO が 1.4％、CaO が 0.6％、MnO が 0.8％、TiO_2 が 1.3％含まれるが、マグネタイトが主要な組織であることが確認される。面的に化学成分を分析したマッピング分析結果を 2 次電子線像（SE 像）とともに図 38 に示す。鉄（Fe）は化学式に示されるようにマグネタイト（Magnetite：Fe_3O_4）、及びファイヤライト（Fayalite:2FeO·SiO_2）に存在している。ガラス質組織の部分には､珪酸質スラグの珪素（Si）やマグネシウム（Mg）やカルシウム（Ca）が現れている。本試料中に混入していた滓は成分的にもマグネタイトを主要鉱物としていることが明らかである。

ビッカース断面硬度：ビッカース硬度計を用いて断面硬度を測定した結果を表 4 に示す。マグネタイト（Magnetite：Fe_3O_4）組織と見られる部分の硬度は Hv601 を示した。

以上から本試料はガラス組織中に微細なマグネタイト、及びファイヤライト組織が晶出した鉄滓が付着したフイゴの羽口片と思われる。

試料 No.5　鉄滓、着磁度：2、メタル反応：なし

肉眼観察：観写真を図 9 に、切断面写真を図 15 にそれぞれ示す。試料は大小合わせて 8 個あったが最も大きい写真右下の試料を分析した。重量 13.2g、長さ 24.9mm、幅 22.5mm、厚さ 15.7mm。不整三角形をした栗のような形をした鉄滓の小片であるが緻密で重量感がある。表面は酸化土砂に覆われて茶褐色を呈しているが滓そのものは黒色である。破面は 3 で、4mm 大の穴があいている。着磁度は 2 でメタル反応はない。中央部分から分析試料を採取する。

マクロ組織観察：20 倍の断面写真を図 17 に示す。全面に白色繭玉状のウスタイト（Wustite:FeO）組織が見える。

顕微鏡組織観察：顕微鏡組織写真を図26､27に示す。全面に白色繭玉状のウスタイト（Wustite:FeO）組織、マグネタイト（Fe3O4）組織、及び背面にファイヤライト (Fayalite：2FeO・SiO_2) 組織が観察される。

化学組成分析：化学組成分析結果を表２～３に示した。全鉄 56.3% に対して金属鉄は 0.13％とわずかである。FeO は 58.3%、Fe_2O_3 は 15.5%、SiO_2 は 19.1 ％、Al_2O_3 は 2.60 ％、CaO は 1.13 ％、MgO は 0.29％、MnO は 0.05％、TiO_2 は 0.13％である。FeO-Fe_2O_3-SiO_2 の３成分系に換算すると FeO は 62.7％、Fe_2O_3 は 16.7％、SiO_2 は 20.6％となり図１の FeO-Fe_2O_3-SiO_2 系の平衡状態図ではウスタイト（Wustite:FeO）組織、ファイヤライト（Fayalite:2FeO･SiO_2）組織、及びマグネタイト（Fe_3O_4）組織の境界領域にあり顕微鏡観察結果と一致する。図２、３、４は滓の成分的特徴から製鉄工程の生成位置等を検討する図である。これら図における位置関係では本試料は砂鉄系鍛錬鍛冶滓Ｇｒ.の位置にあり、CaO、MgO、MnO 等が低いことなどからも始発原料は砂鉄の可能性が高いと判断される。

EPMA 分析：ウスタイト（Wustite:FeO）、及びファイヤライト (Fayalite：2FeO・SiO_2) と見られる組織を EPMA で定量分析した結果を図 33、34 に示す。ポイント分析チャート４にウスタイトと見られる組織を示す。FeO が 100％を示し、ウスタイトが主要な組織であることが確認される。ポイント分析チャート５にファイヤライトと見られる組織を示す。FeO が 55.8％、SiO_2 が 26.3％で、MgO が 0.4％、CaO が 17.5％含まれるが、ファイヤライトが主要な組織であることが確認される。面的に化学成分を分析したマッピング分析結果を２次電子線像（SE 像）とともに図 39、40 に示す。鉄（Fe）は化学式に示されるようにウスタイト（Wustite:FeO）、及びファイヤライト（Fayalite:2FeO･SiO_2）に存在している。ガラス質組織の部分には、珪酸質スラグの珪素（Si）やマグネシウム（Mg）やカルシウム（Ca）が現れている。本試料中に混入していた滓は成分的にもウスタイト、及びファイヤライトを主要鉱物としていることが明らかである。

ビッカース断面硬度：ビッカース硬度計を用いて断面硬度を測定した結果を表４に示す。ウスタイト（Wustite:FeO）組織と見られる部分の硬度は Hv486、ファイヤライト (Fayalite：2FeO・SiO_2) 組織と見られる部分の硬度は Hv668 をそれぞれ示した。

以上を総合すると、本試料は砂鉄を始発原料とする鉄素材の鍛錬鍛冶工程で生じた鉄滓と判断される。

試料 No.6　鉄滓、着磁度：なし、メタル反応：なし

肉眼観察：外観写真を図 10 に、切断面写真を図 16 にそれぞれ示す。重量 23.2g、長さ 57.3mm、幅 44.9mm、厚さ 18.7mm。上面には小山のような凸があるフイゴ羽口の破片に滓が付着した鉄滓で、上面には矩形の窪みがあり、下面側には褶曲模様が見られる。表面は灰白色を呈しているが、鉄滓が付着したと見られる部分は暗黄緑色を呈している。表面には軽石のようにブツブツとした小さな気泡が多数観察される。着磁、メタル反応はともになし。僅かに存在する黒色を呈した部分から分析試料を採取する。

マクロ組織観察：10 倍の断面写真を図 17 に示す。鉄滓組織は殆んど見られず、ほぼ全体が胎土の組織である。

顕微鏡組織観察：顕微鏡組織写真を図 28、29 に示す。胎土組織の中に僅かに存在するガラス組織に晶出した微細なマグネタイト組織が観察される。

化学組成分析：化学成組成析結果を表２～３に示す。胎土組織であり全鉄は 9.70% と僅かで、造滓成分が 85.2％を示す。FeO は 1.66%、Fe_2O_3 は 11.9%、SiO_2 は 66.9％、Al_2O_3 は 9.8％、TiO_2 は 0.44％であり始発原料は砂鉄か否かは判断できない。FeO-Fe_2O_3-SiO_2 の３成分系に換算すると FeO は 2.1％、Fe_2O_3 は 14.8％、SiO_2 は 83.2％となる。図１の FeO-Fe_2O_3-SiO_2 系の平衡状態図ではクリストバライト領域にあり平衡状態図上の位置は顕微鏡観察と一致しない。試料中の鉄滓部分が極めて僅かなため羽口

の胎土で希釈されたためと見られる。図 2、3、4 は滓の成分的特徴から製鉄工程の生成位置等を検討する図である。図 2、3、4 で見ると本試料は炉壁付着滓の位置にある。

EPMA 分析：マグネタイト（Magnetite：Fe_3O_4）と見られる組織を EPMA で定量分析した結果を図 35 に示す。ポイント分析チャート 6 に示すように Fe_3O_4 が 94.3％、SiO_2 が 0.4％で、Al_2O_3 が 3.0％、MgO が 1.2％、TiO_2 が 1.1％含まれるが、マグネタイトが主要な組織であることが確認される。面的に化学成分を分析したマッピング分析結果を 2 次電子線像（SE 像）とともに図 41 に示す。鉄（Fe）は化学式に示されるようにマグネタイト（Magnetite：Fe_3O_4）に存在している。ガラス質組織の部分には、珪酸質スラグの珪素（Si）やマグネシウム（Mg）やカルシウム（Ca）が現れている。本試料中に混入していた滓は成分的にもマグネタイトを主要鉱物としていることが明らかである。

ビッカース断面硬度：ビッカース硬度計を用いて断面硬度を測定した結果を表 4 に示す。マグネタイト（Magnetite：Fe_3O_4）組織と見られる部分の硬度は Hv605 を示した。

以上から本試料はガラス組織中に微細なマグネタイト組織が晶出した鉄滓が付着したフイゴの羽口片と思われる。

4．まとめ

兀塚遺跡から出土した鉄滓 6 点について材質、出発原料、製造工程上の位置づけなどを中心に調査した結果、No.1 は銹化が内部にまで進行した銹化鉄の小片、No.5 は砂鉄を始発原料とした鉄源の鍛錬鍛冶工程で生成した鉄滓、他の 4 点 (No.2,3,4,6) は、ガラス質組織の部分に微細なマグネタイト、及びファイヤライト組織が晶出した鉄滓が付着したフイゴの羽口と思われる。

5．参考

（1）鉄滓の顕微鏡組織について：鉄滓を構成する化合物結晶には、一般的に表 A1 のような鉱物組織がある。酸化鉄（Fe_2O_3、Fe_3O_4、FeO）、二酸化ケイ素（シリカ：SiO_2）、アルミナ（Al_2O_3）および二酸化チタン（TiO_2）を組み合せた化合物（固溶体）が多く、これら鉱物結晶は含有量にも依存するが、X線回折により検出され確認できる。鉄滓中の低融点化合物がガラス相（非晶質）を形成することがあり、X線回折では検出されない。

表Ａ１　鉄滓の顕微鏡鉱物組織とその観察状況

鉱物組織名（和）	鉱物名（英）	化学式	偏光顕微鏡観察状況
ヘマタイト	Hematite	α -Fe_2O_3	赤褐色～赤紫色
マーゲマイト	Maghemite	γ -Fe_2O_3	赤紫色～黒紫色
マグネタイト	Magnetite	Fe_3O_4	白青色、四角または多角盤状
ウスタイト	Wustite	FeO	灰白色、繭玉状または樹枝状
ファイヤライト	Fayalite	$2FeO \cdot SiO_2$	薄い青灰色、短冊状の長い結晶
ウルボスピネル	Ulvospinel	$2FeO \cdot TiO_2$	白色、四角～角形板状結晶
イルメナイト	Ilmenite	$FeO \cdot TiO_2$	白色、針状・棒状の長い結晶
シュードブルッカイト	Pseudobrookite	$FeO \cdot 2TiO_2$	白色、針状の結晶
ハロイサイト	Halloysite	$Al_2O_3 \cdot 2SiO_2 \cdot 2H_2O$	X 線で同定できたが組織は不明
ハーシナイト	Hercynite	$FeO \cdot Al_2O_3$	ウスタイト中に析出、ごま粒状。
アカゲナイト	Akagenite	β -FeOOH	X 線で同定できたが組織は不明
ゲーサイト	Goethite	α -FeOOH	白～黄色、リング状が多い。

（2）鉄 - 炭素系平衡状態図

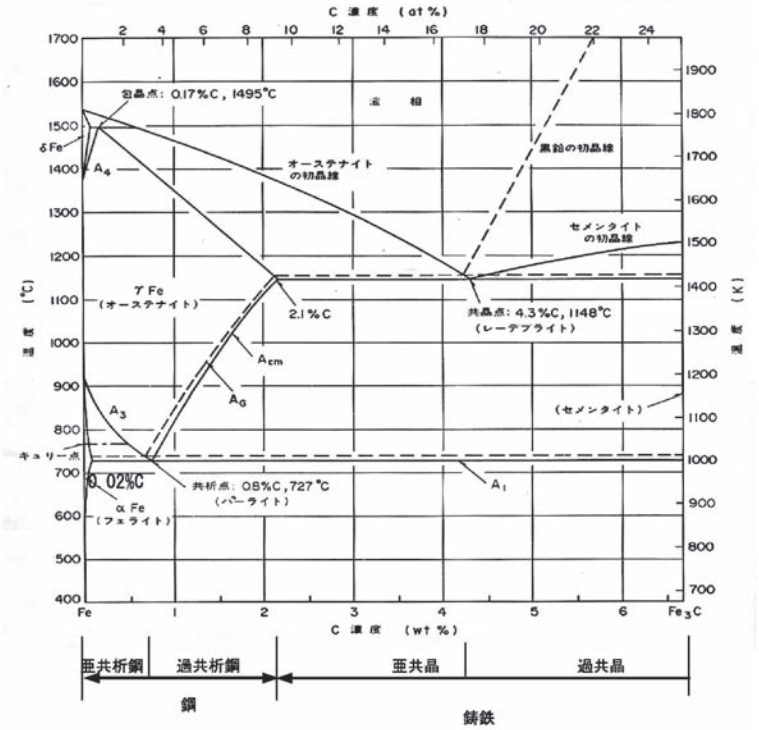


表１　調査試料と調査項目

試　料	調査区	遺　構　名	種　別	肉眼観察	マクロ組織観察	顕微鏡組織観察	化学組成分析		EPMA分析	ビッカース断面硬度
No.1	Ⅵ区	SR604	鉄滓	○	○	○	○	-	-	
No.2	Ⅵ区	SX605 北東	鉄滓	○	○	○	○	○	○	
No.3	Ⅵ区	SR601	鉄滓	○	○	○	○	○	○	
No.4	Ⅵ区	SR602 中央	鉄滓	○	○	○	○	○	○	
No.5	Ⅳ区	SR401 南	鉄滓	○	○	○	○	2 ○	2 ○	
No.6	Ⅷ－１区	SX804	鉄滓	○	○	○	○	○	○	

表２　鉄滓の化学組成分析結果（%）

試料	T. Fe	M. Fe	FeO	Fe_2O_3	SiO_2	Al_2O_3	CaO	MgO	K_2O	Na_2O	比率	
											FeO	Fe_2O_3
No.1	51.9	0.22	1.64	72.1	12.7	2.0	0.66	0.13	0.29	0.17	2.2	97.8
No.2	8.21	0.11	1.00	10.5	67.5	12.4	1.85	0.73	3.61	1.02	8.7	91.3
No.3	4.70	0.10	0.50	6.02	72.5	14.0	0.88	0.54	2.67	0.92	7.7	92.3
No.4	6.74	0.10	1.44	7.89	67.3	13.7	2.94	0.94	2.60	1.34	15.4	84.6
No.5	56.3	0.13	58.3	15.5	19.1	2.60	1.13	0.29	0.58	0.72	79.0	21.0
No.6	9.70	0.11	1.66	11.9	66.9	9.80	2.37	0.79	4.23	1.06	12.3	87.7

表３　鉄滓の化学組成分析結果（続き）（%）

試料	TiO_2	MnO	P_2O_5	C	化合水	V	TiO_2/T.Fe	MnO/TiO_2	造滓成分
No.1	0.11	0.30	0.273	0.60	8.81	＜0.001	0.002	2.7273	16.0
No.2	0.44	0.11	0.093	0.11	0.55	＜0.001	0.054	0.2500	87.1
No.3	0.45	0.06	0.059	0.19	1.09	＜0.001	0.096	0.1333	91.5
No.4	0.49	0.22	0.106	0.21	0.70	＜0.001	0.073	0.4490	88.8
No.5	0.13	0.05	0.171	0.11	1.16	＜0.001	0.002	0.3846	24.4
No.6	0.44	0.10	0.074	0.10	0.51	＜0.001	0.045	0.2273	85.2

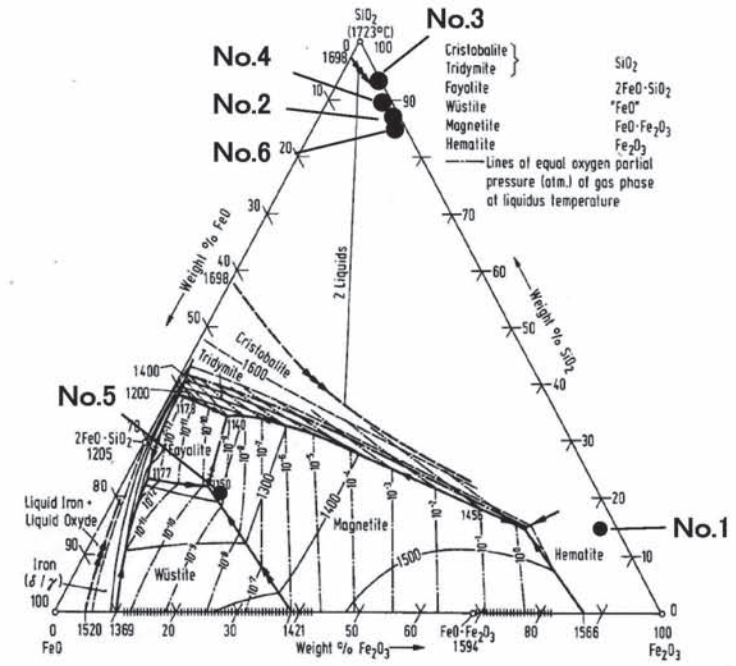
造滓成分 = SiO_2+ Al_2O_3+ CaO+ MgO+ Na_2O+ K_2O

表４　硬度試験結果

No.2	No.3	No.4	No.5		No.6
マグネタイト	マグネタイト	マグネタイト	ウスタイト	ファイヤライト	マグネタイト
592	594	601	486	668	605

表５　個別試料のまとめ

試料	注記番号	調査区	遺構名	種別	調査結果
No.1	D0415	Ⅵ区	SR604	鉄滓	銹化が内部にまで進行した鉄製品
No.2	X0095	Ⅵ区	SX605 北東	鉄滓	微細なマグネタイト組織が晶出した鉄滓が付着したフイゴの羽口片
No.3	R0581	Ⅵ区	SR601	鉄滓	微細なマグネタイト組織が晶出した鉄滓が付着したフイゴの羽口片
No.4	R0584	Ⅵ区	SR602 中央	鉄滓	微細なマグネタイト組織が晶出した鉄滓が付着したフイゴの羽口片
No.5	R0577	Ⅳ区	SR401 南	鉄滓	砂鉄を始発原料とする鉄素材の鍛錬鍛冶工程で生じた鉄滓
No.6	D1141	Ⅷ－１区	SX804	鉄滓	微細なマグネタイト組織が晶出した鉄滓が付着したフイゴの羽口片



FeO-Fe_2O_3-SiO_2 系状態図（by Osborn and Muan）:Slag Atlas
［ドイツ鉄鋼協会］(1981) [Verlag Stahleisen] Düsseldorf, Fig. 106, p,76

図１　FeO-Fe_2O_3-SiO_2 系鉄滓の平衡状態図

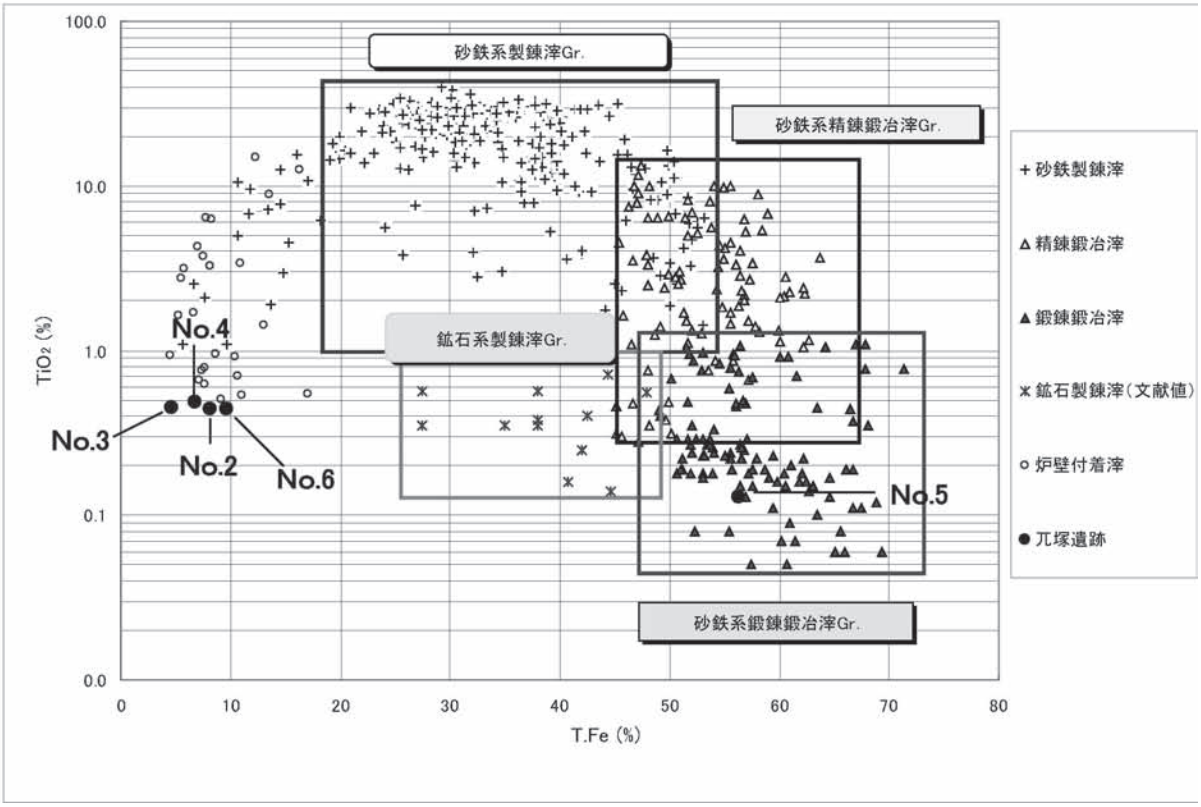


図２　製錬滓、精錬滓、及び鍛錬滓の分類

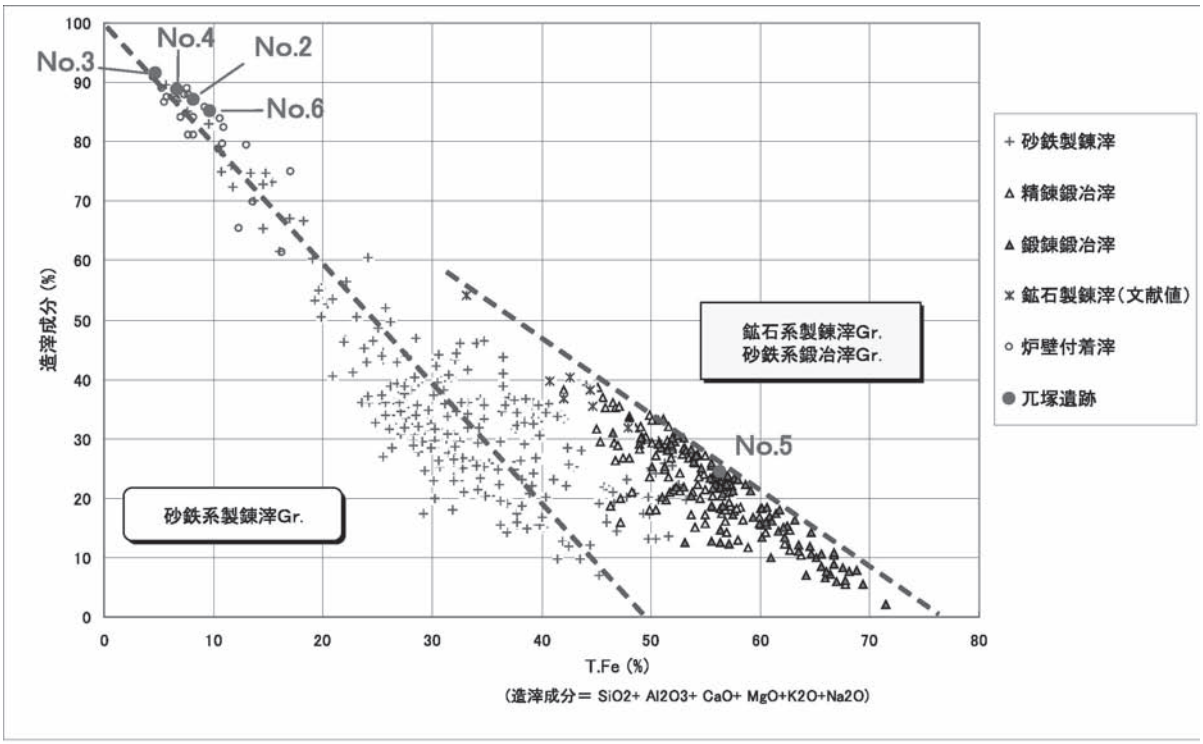


図３　製錬滓と鍛冶滓の分類

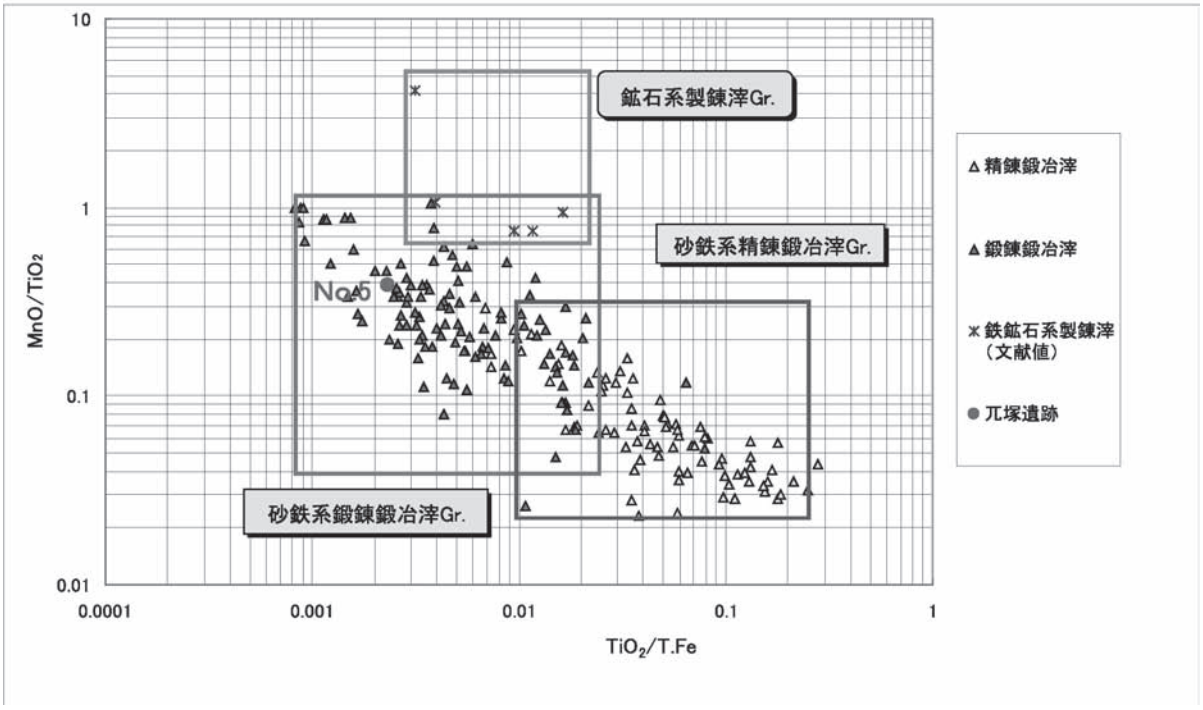


図４　精錬鍛冶滓と鍛錬鍛冶滓の分類

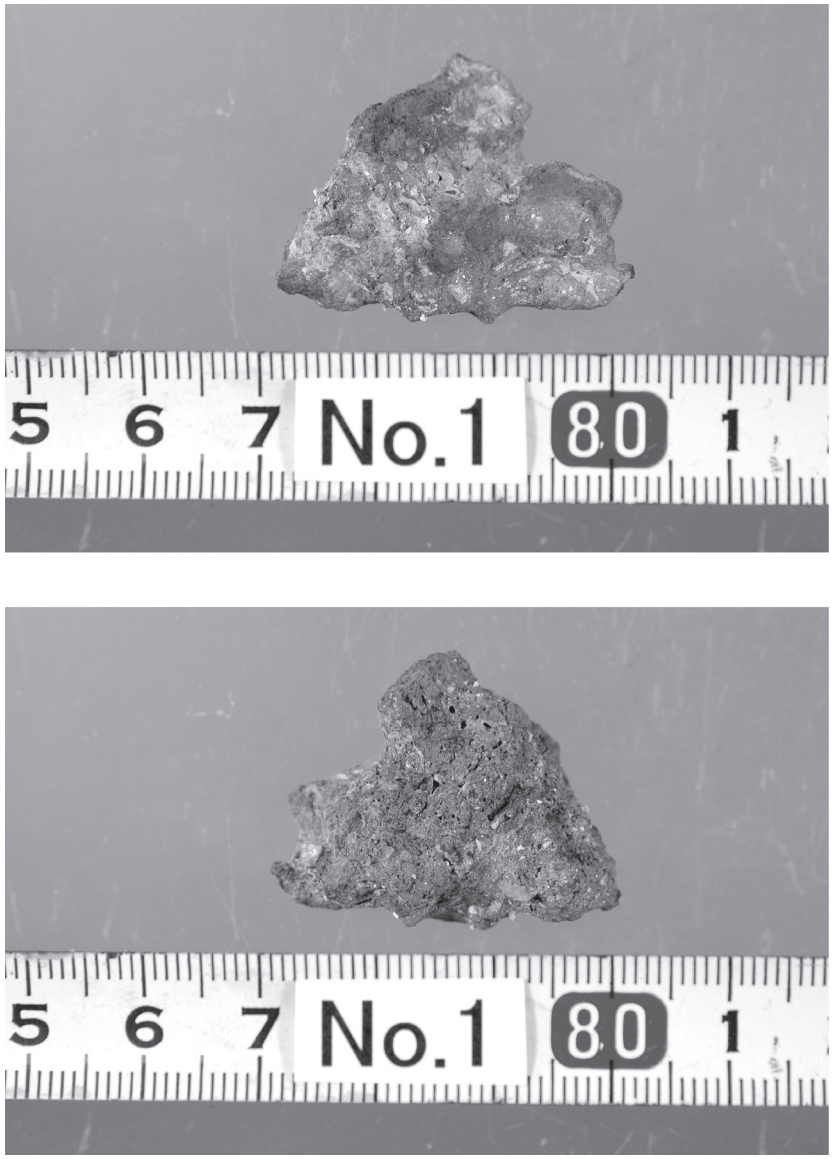


図５　外観写真　Ｎｏ.1

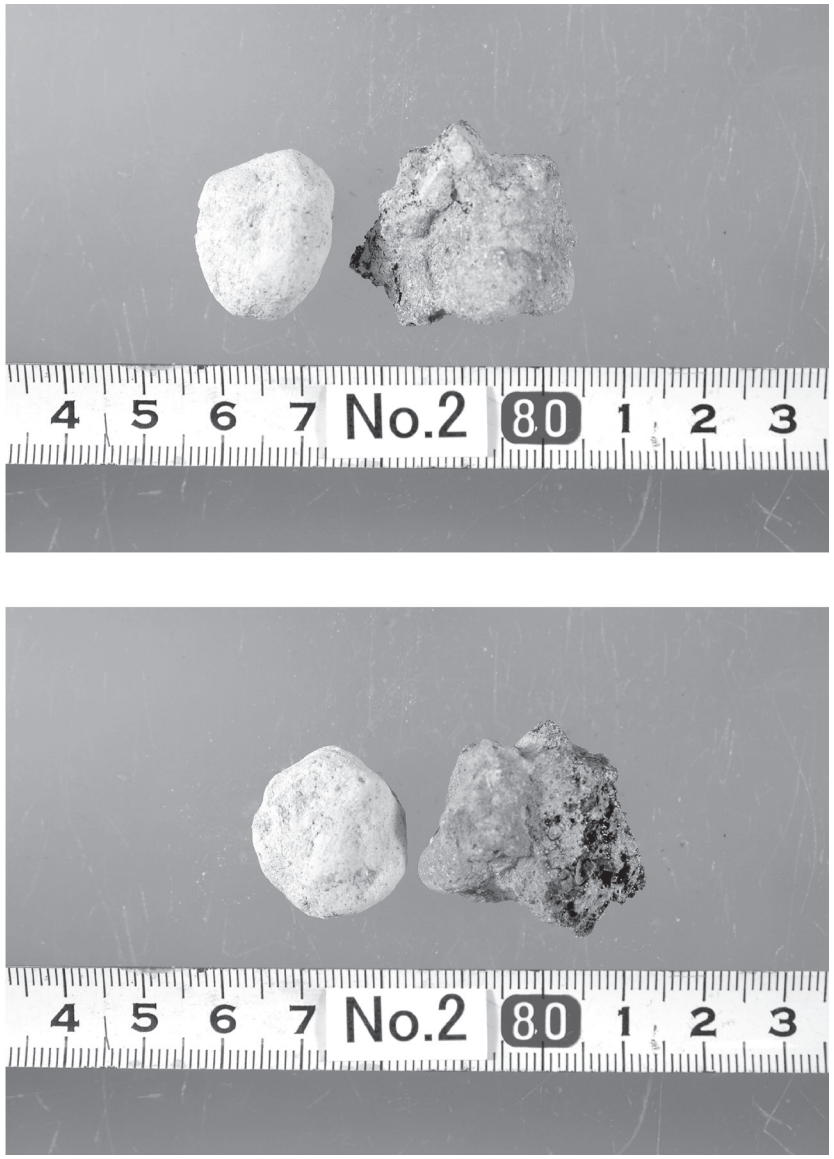


図６　外観写真　Ｎｏ.2

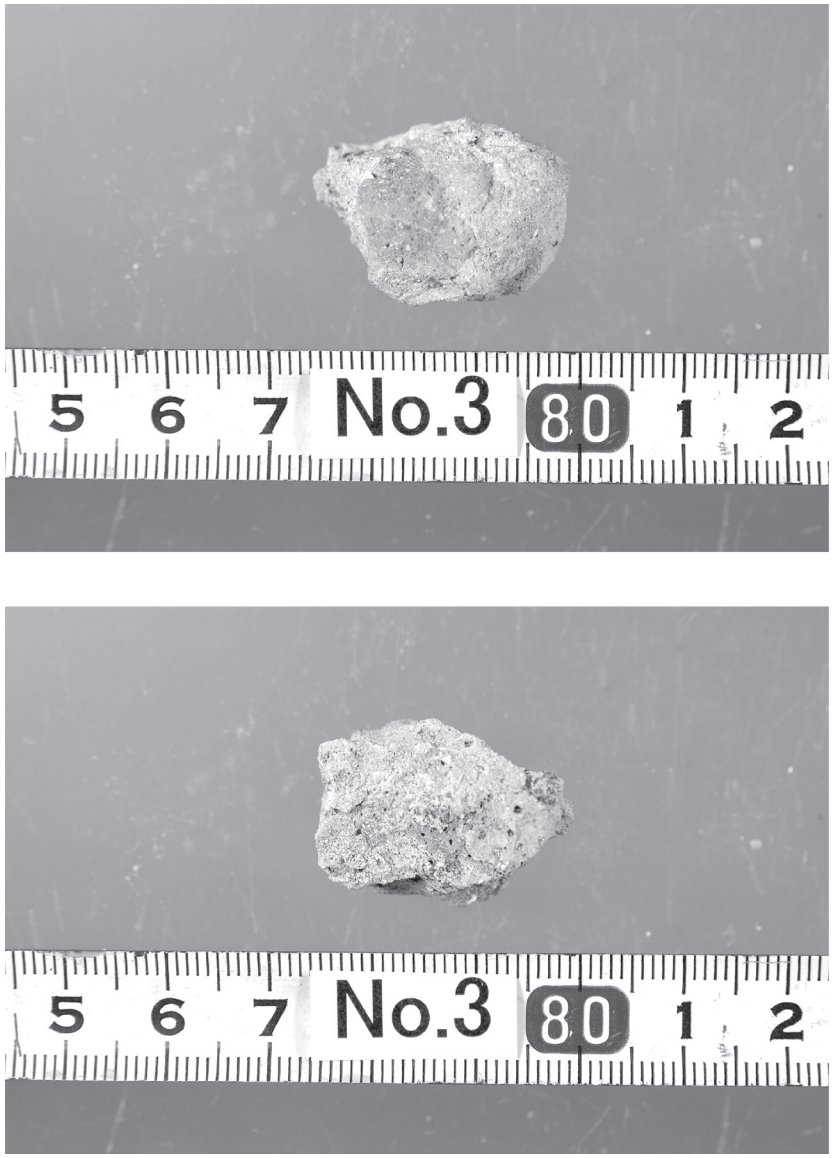


図７　外観写真　Ｎｏ.3

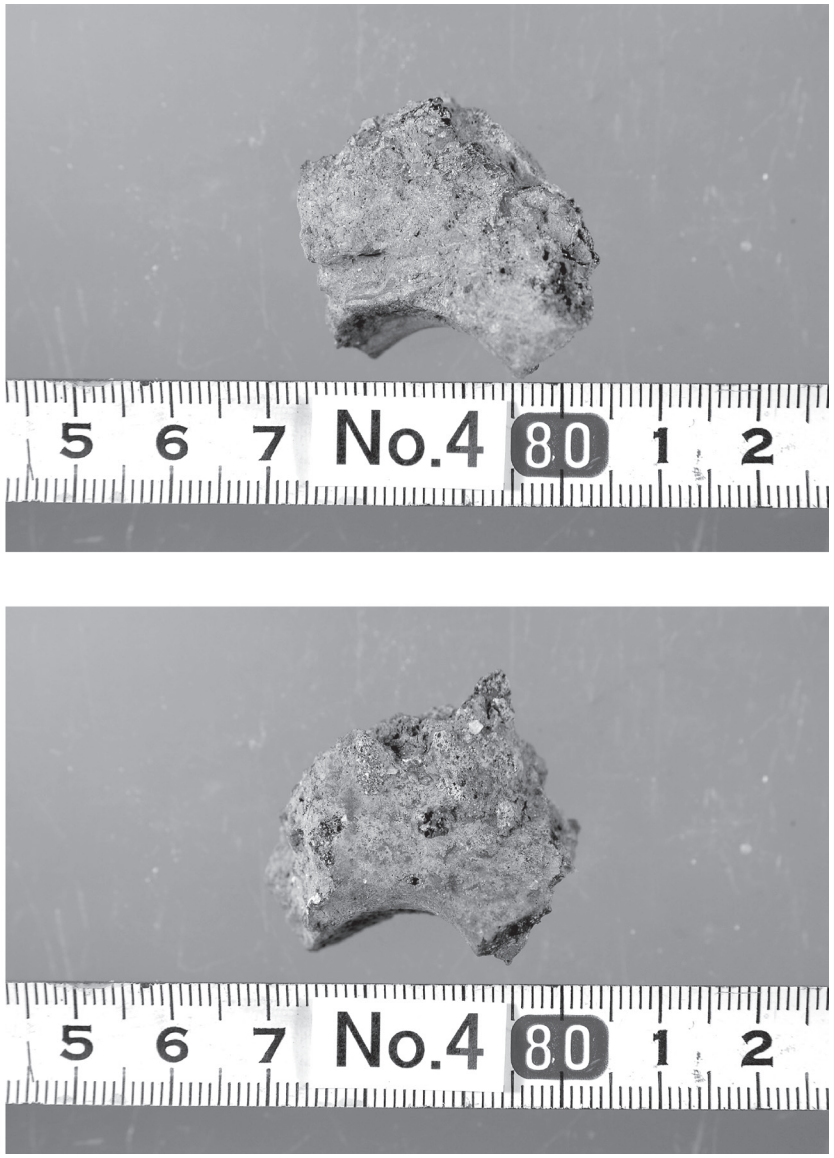


図８　外観写真　Ｎｏ.4

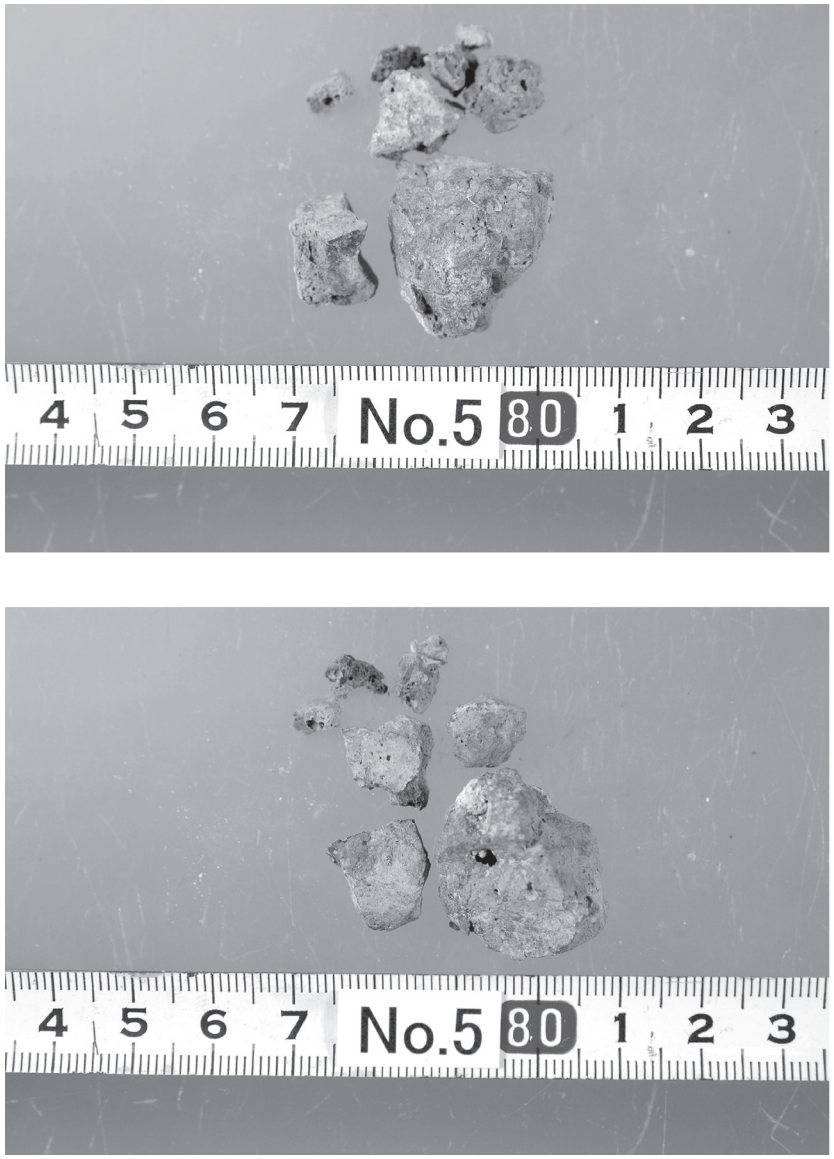


図９　外観写真　Ｎｏ.5

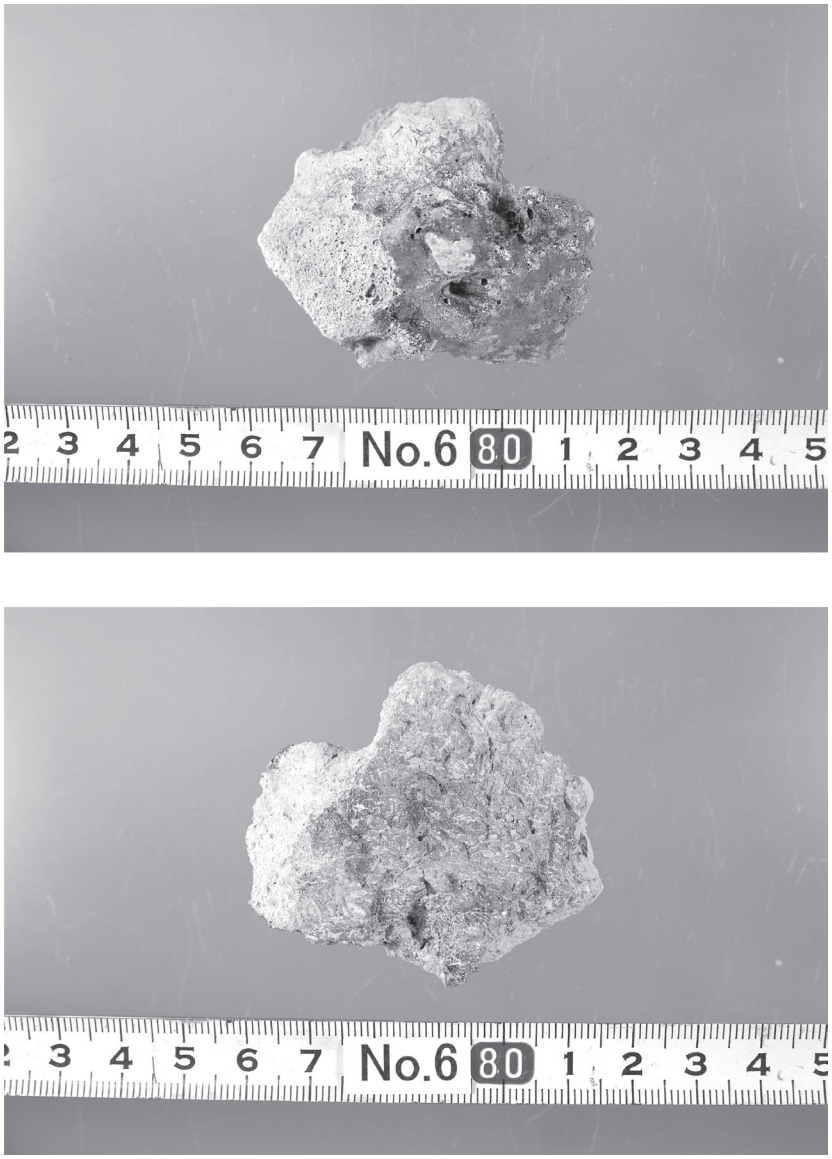


図10　外観写真　Ｎｏ.6

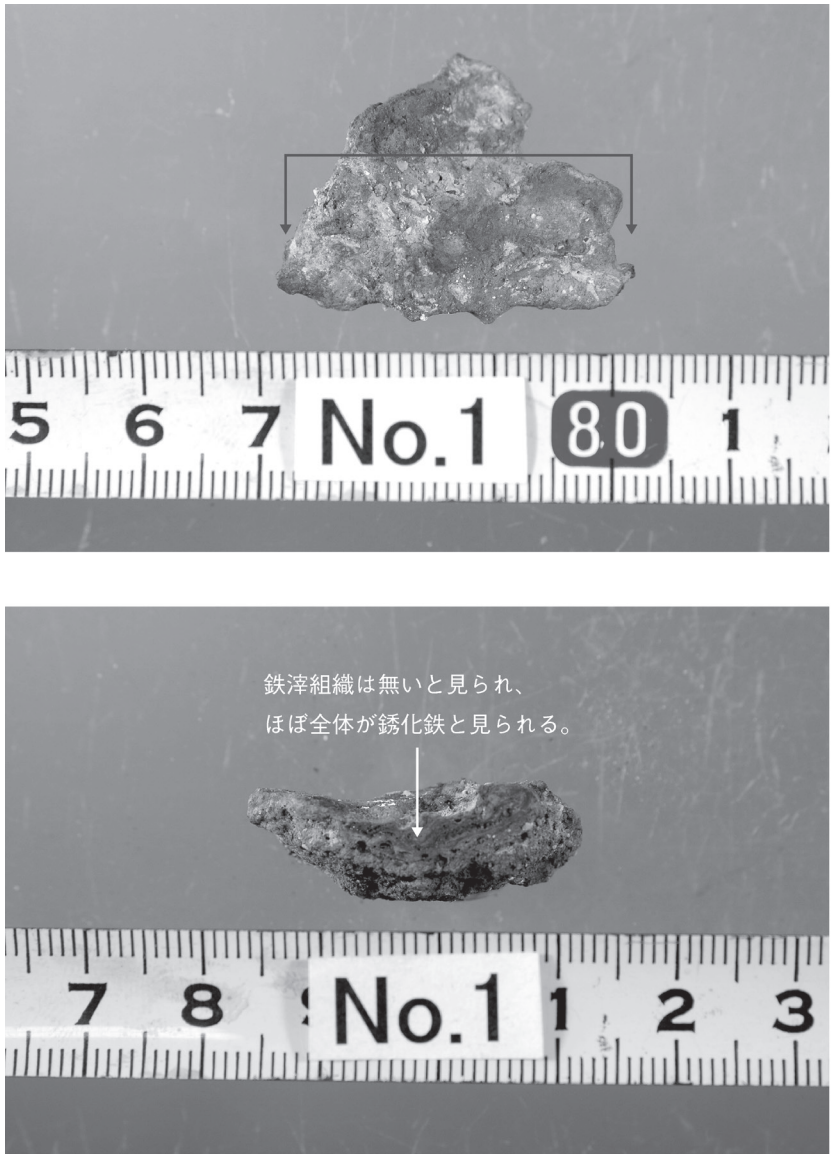


図 11　切断面写真　Ｎｏ.1

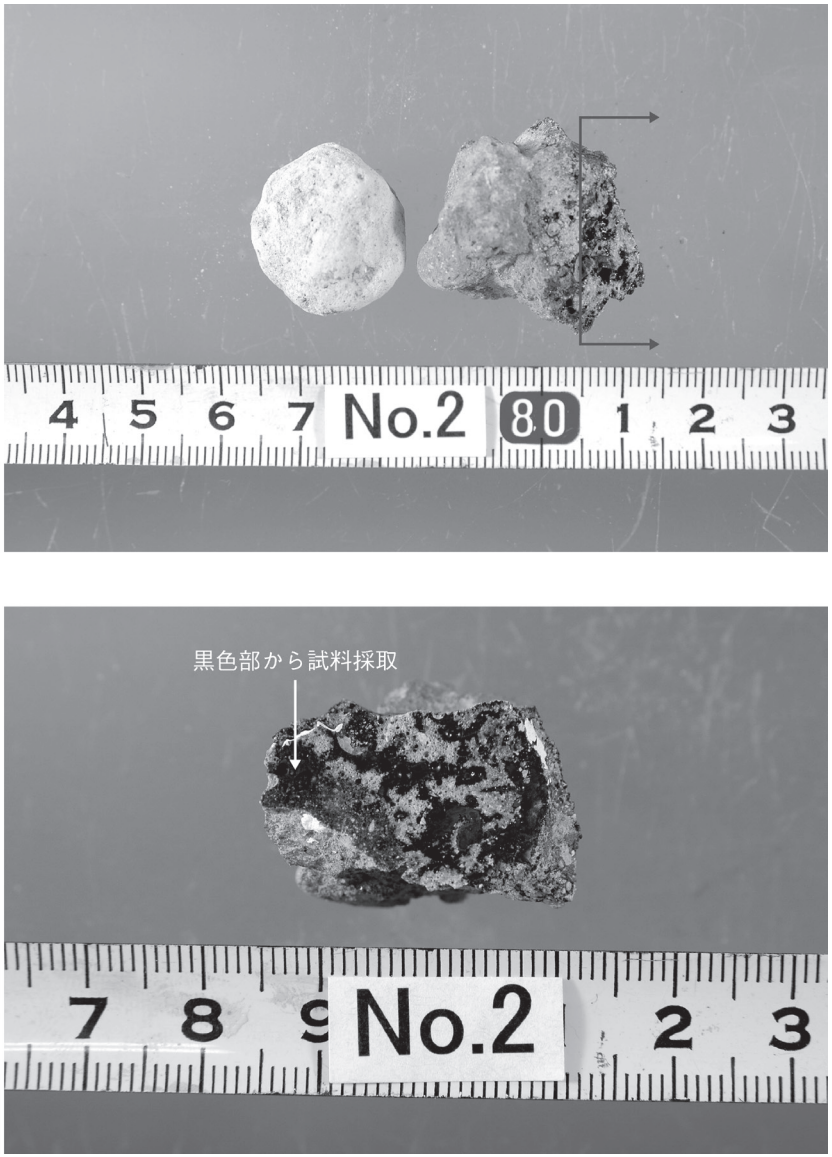


図 12　切断面写真　Ｎｏ.2

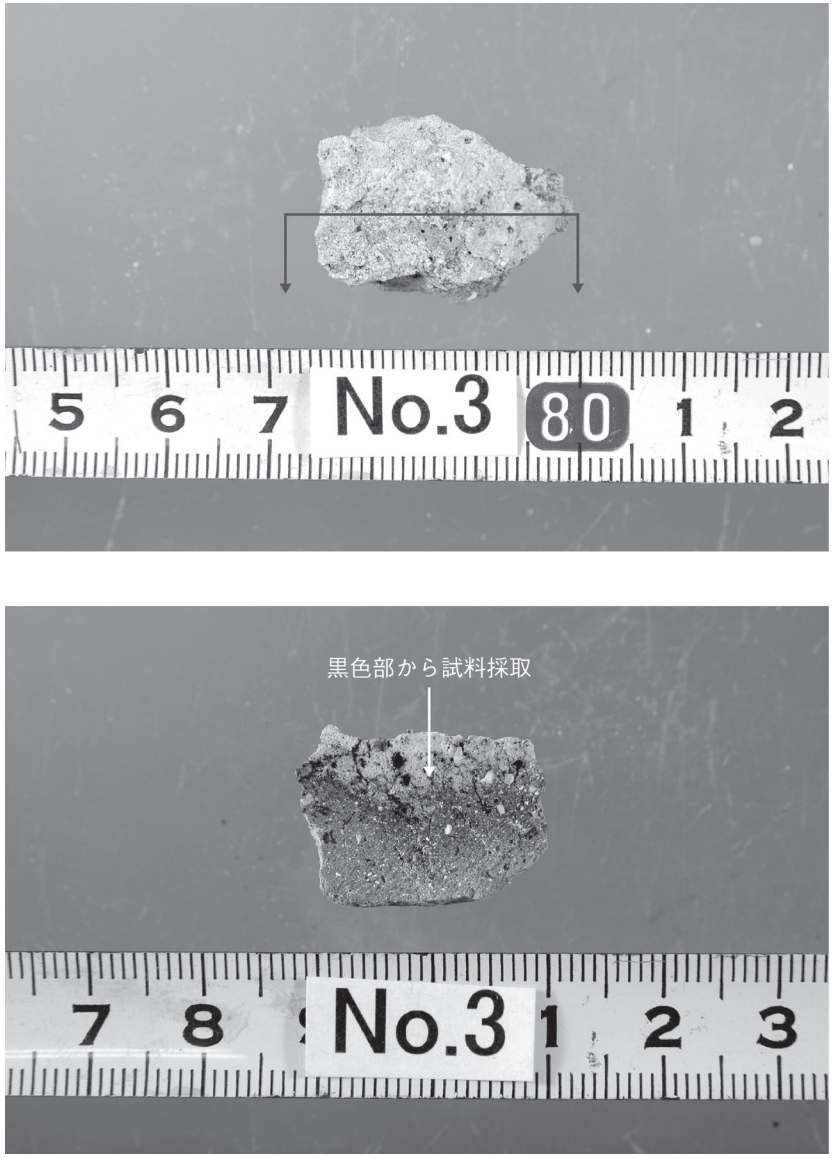


図 13　切断面写真　Ｎｏ.3

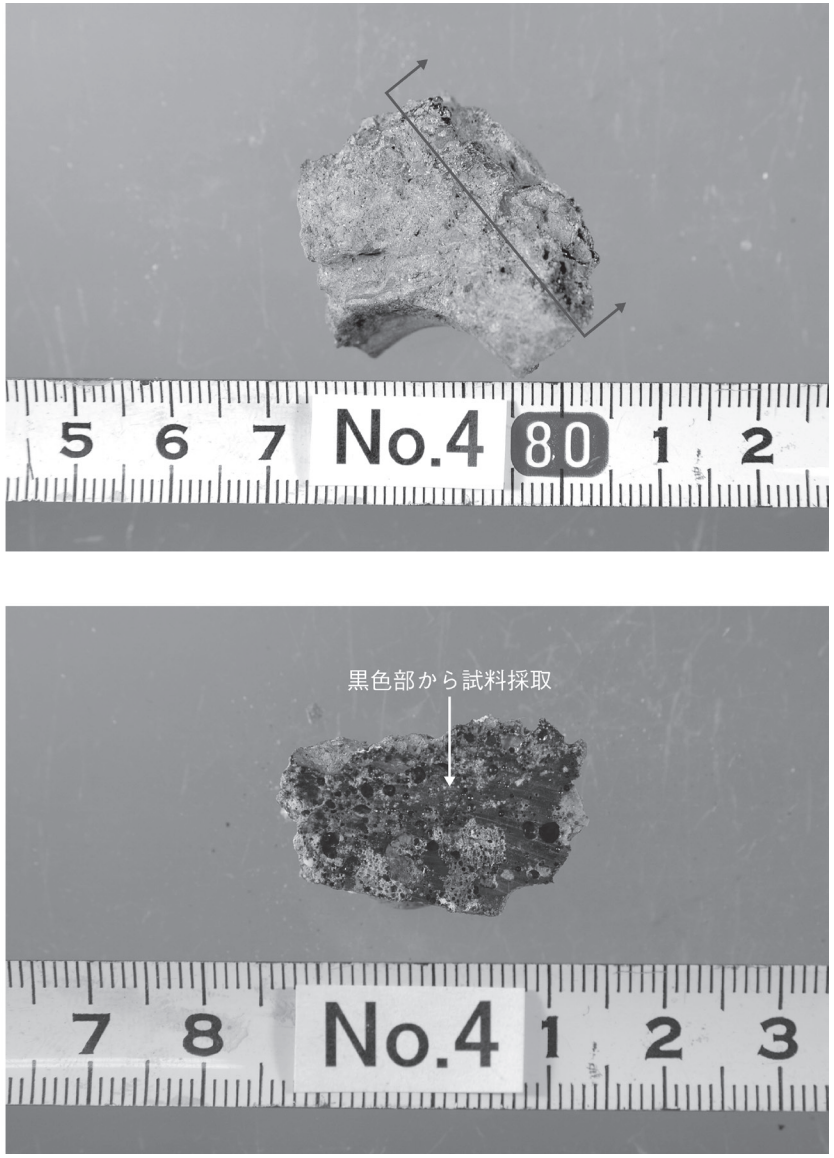


図 14　切断面写真　Ｎｏ.4

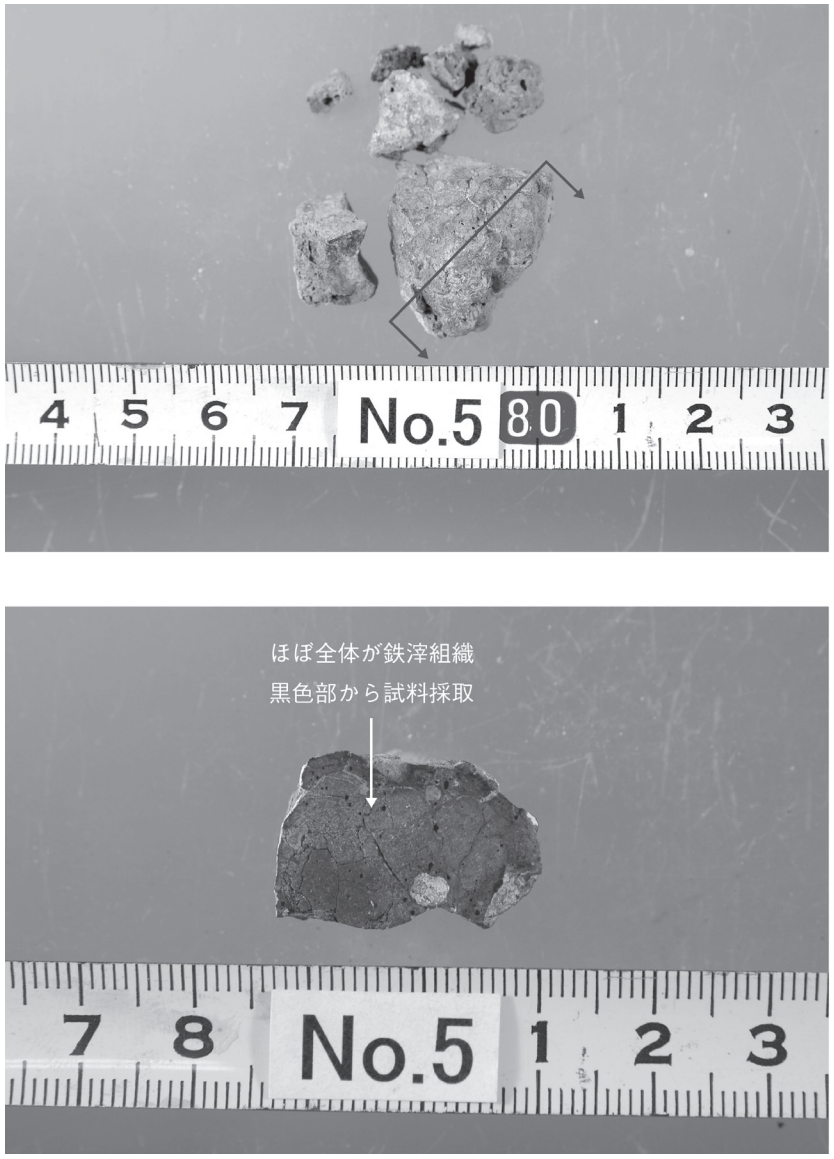


図 15　切断面写真　Ｎｏ .5

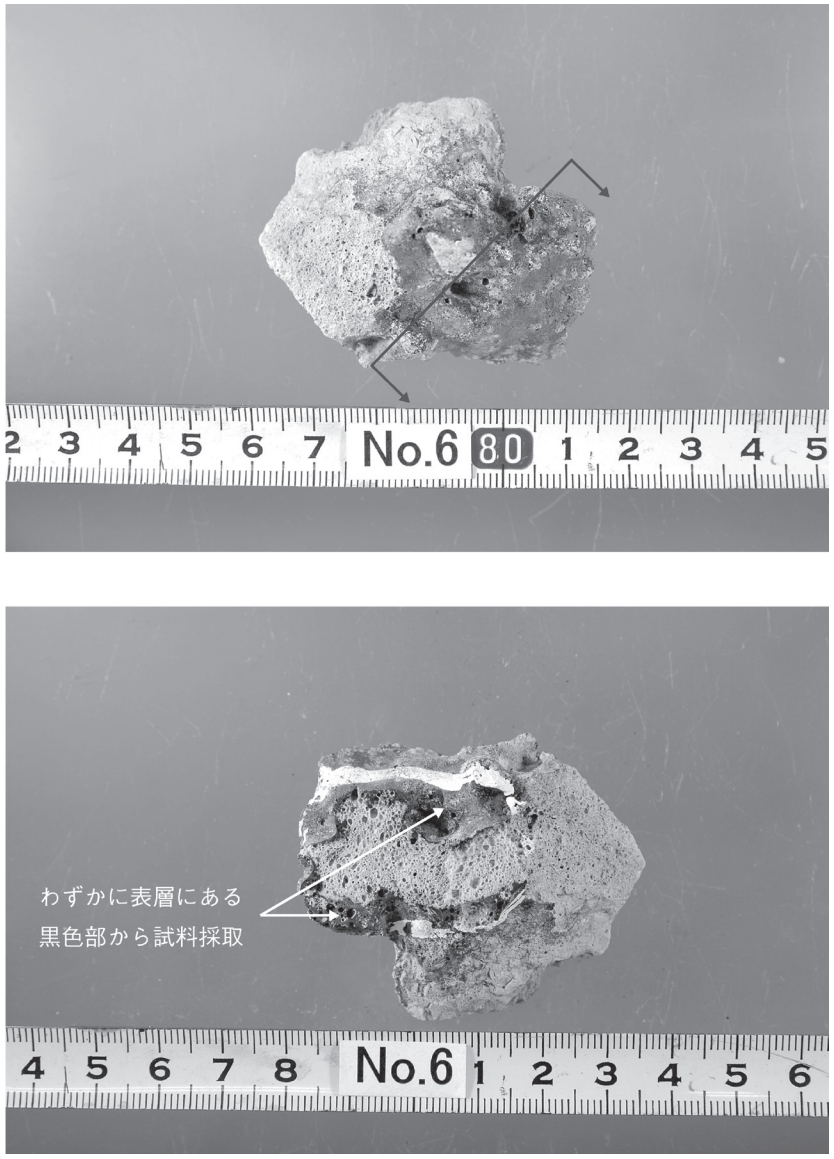
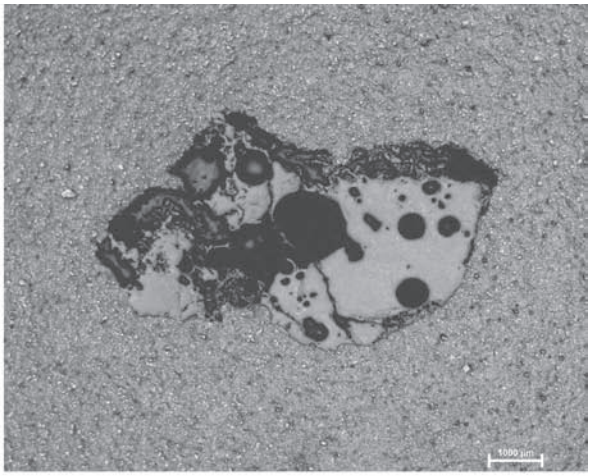
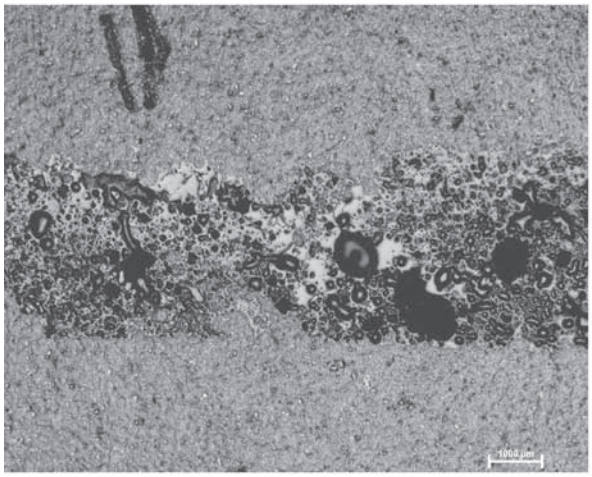


図 16　切断面写真　Ｎｏ .6

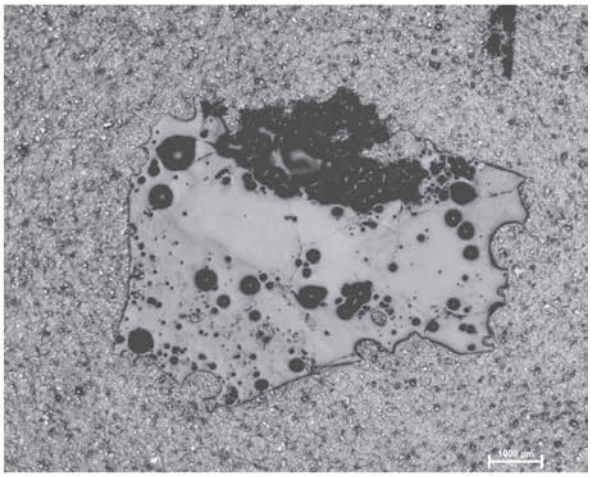
マクロ写真　No.1



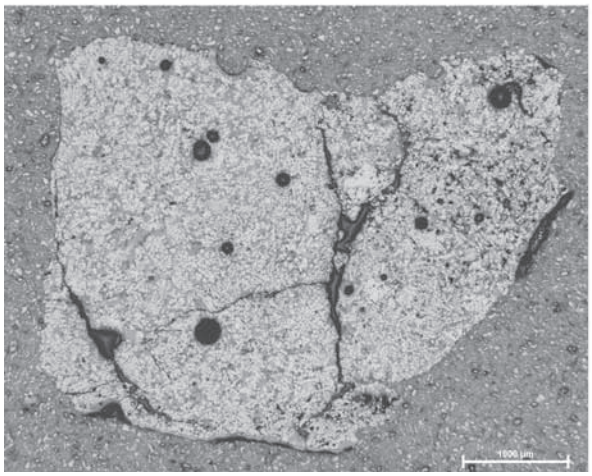
マクロ写真　No.2



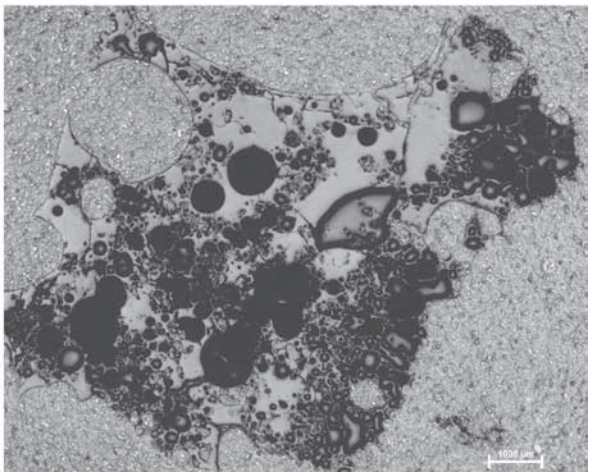
マクロ写真　No.3



マクロ写真　No.4

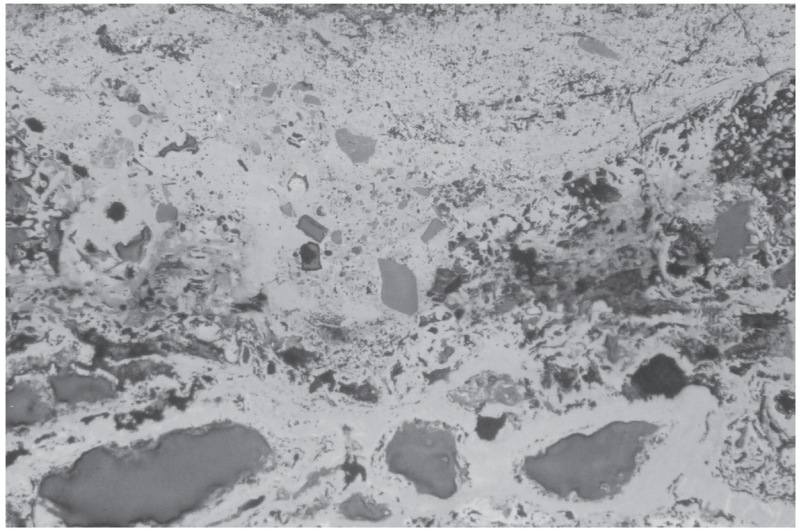


マクロ写真　No.5

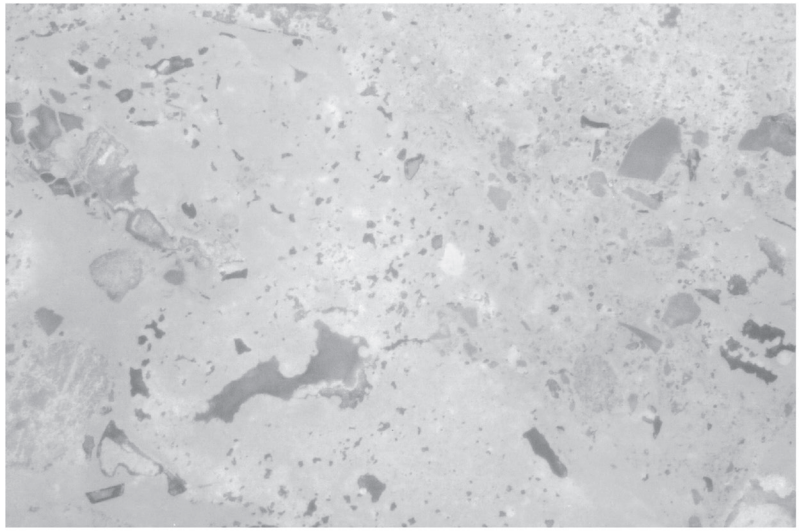


マクロ写真　No.6

図 17　マクロ写真No.１～６

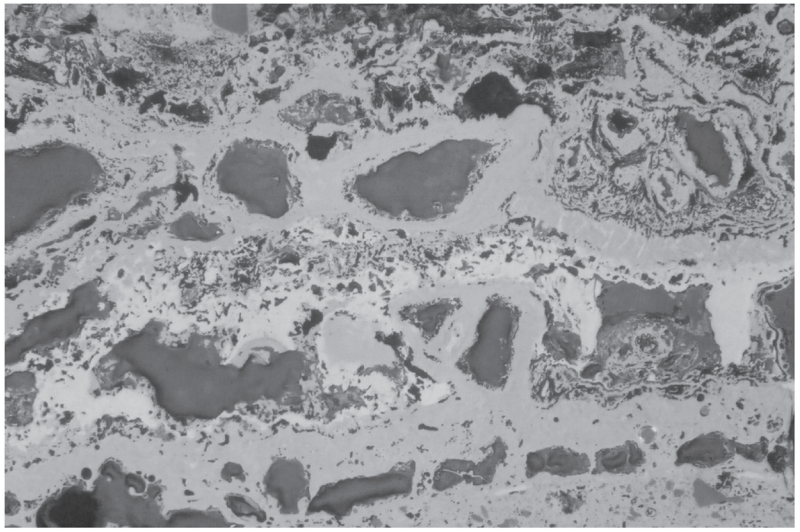


× 100

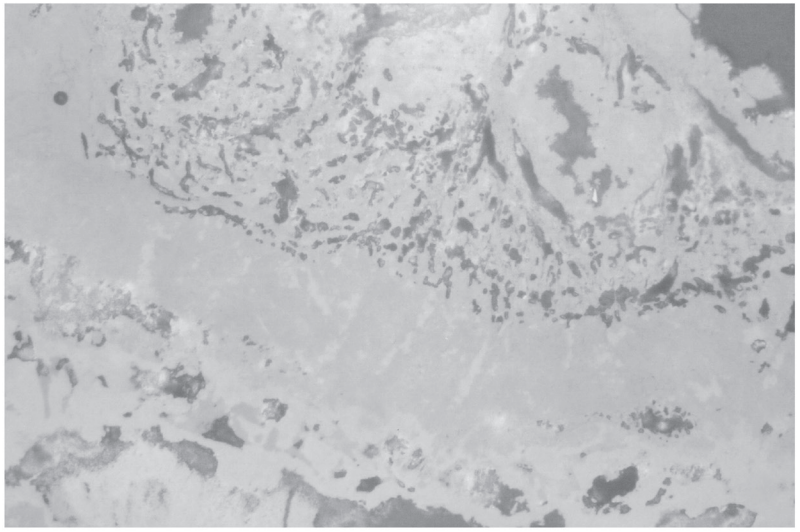


× 400

図 18　顕微鏡組織写真　No.1-1

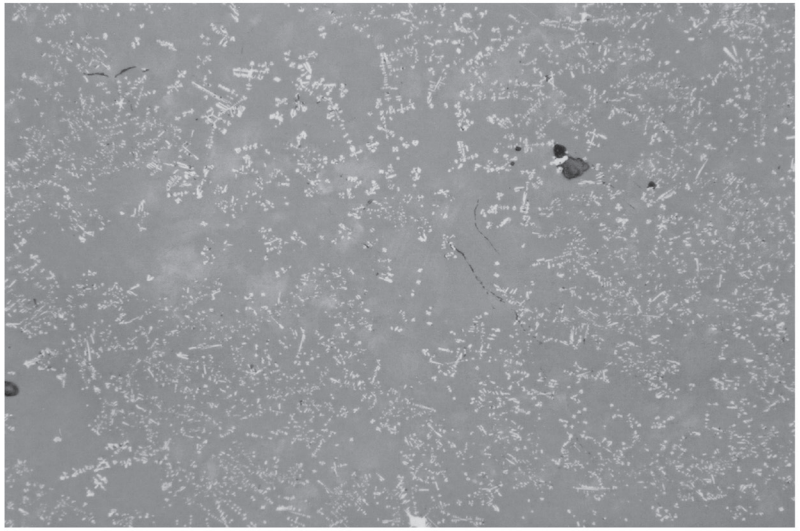


× 100

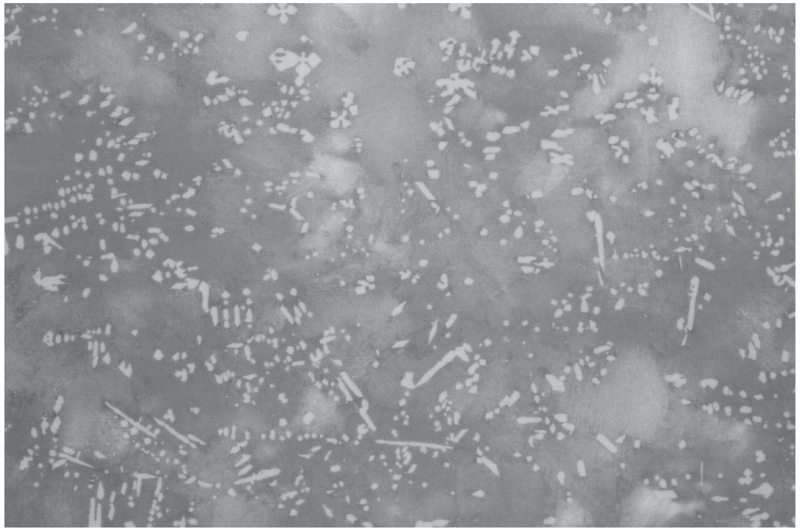


× 400

図 19　顕微鏡組織写真　No.1-2

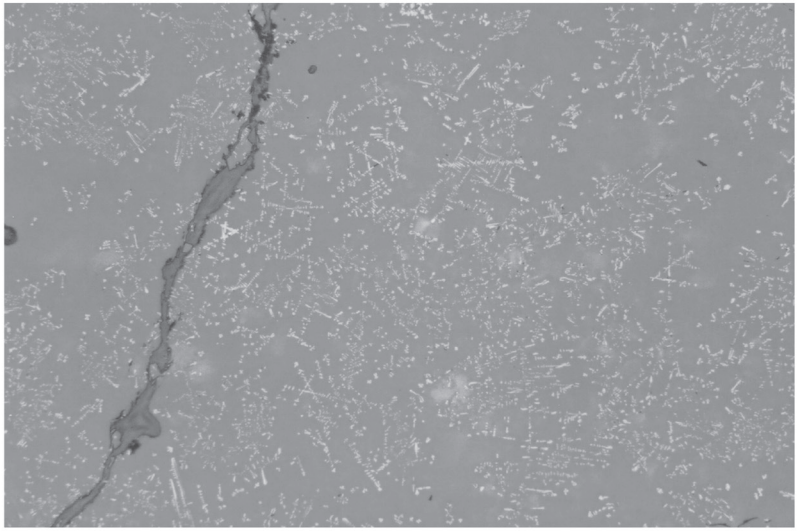


× 100

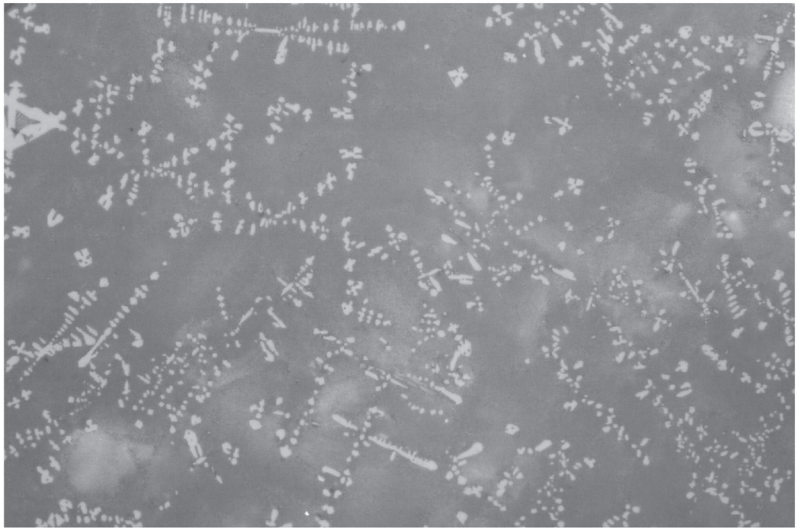


× 400

図 20　顕微鏡組織写真　No.2-1

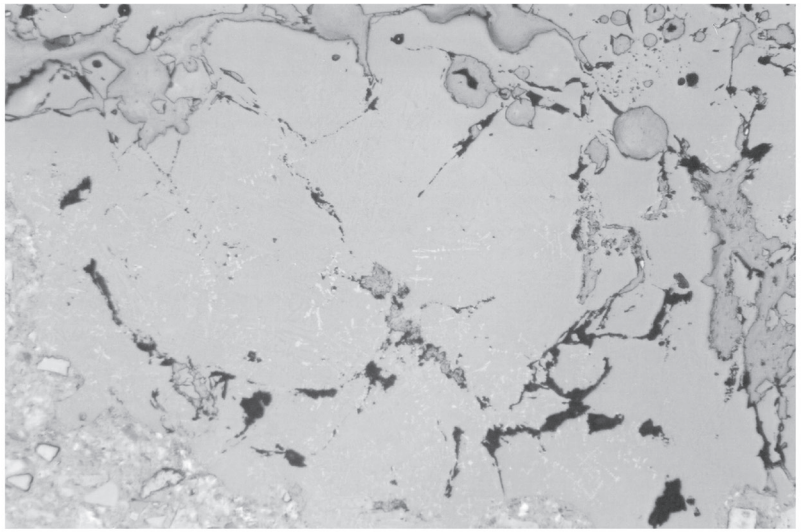


× 100

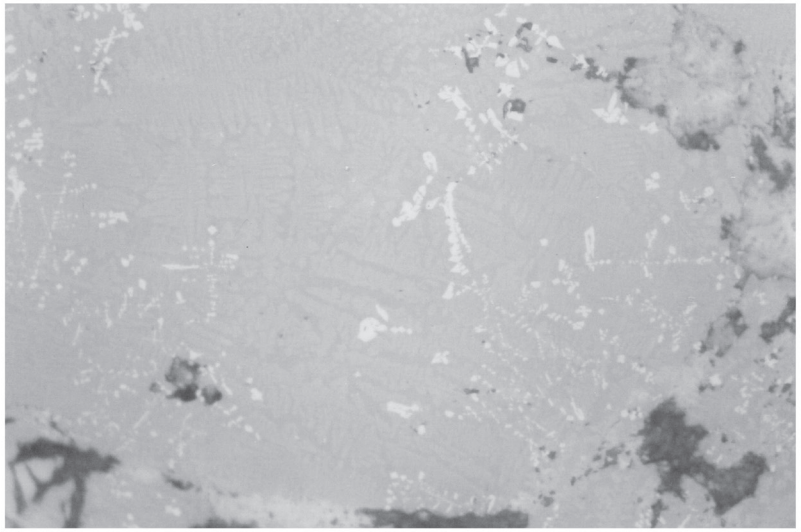


× 400

図 21　顕微鏡組織写真　No.2-2

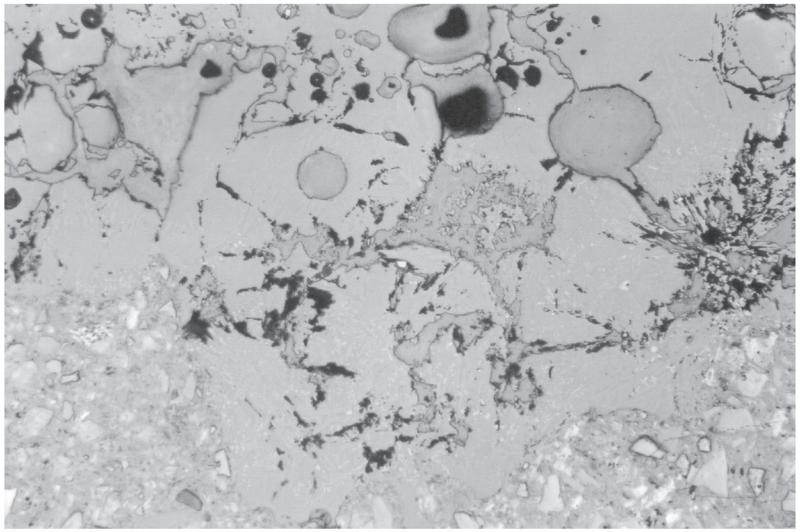


× 100

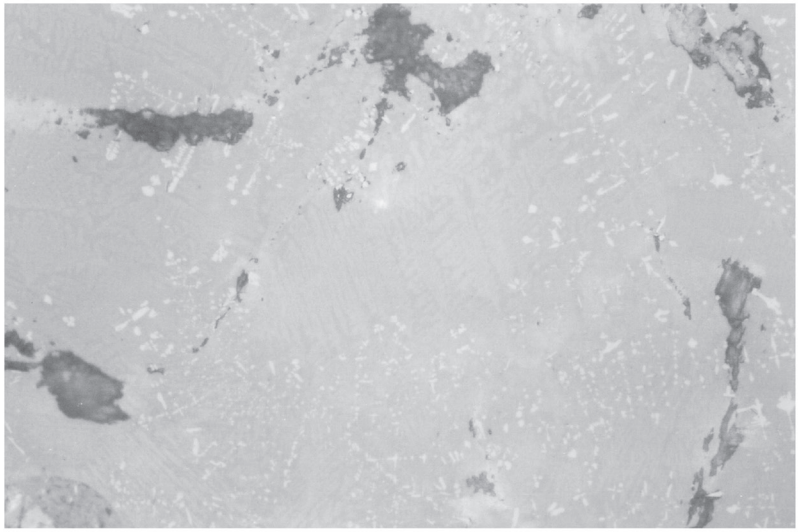


× 400

図 22　顕微鏡組織写真　No.3-1

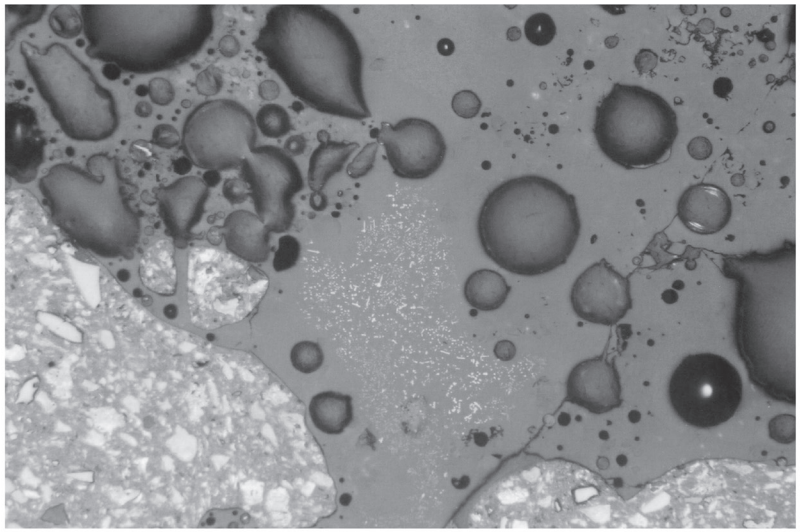


× 100

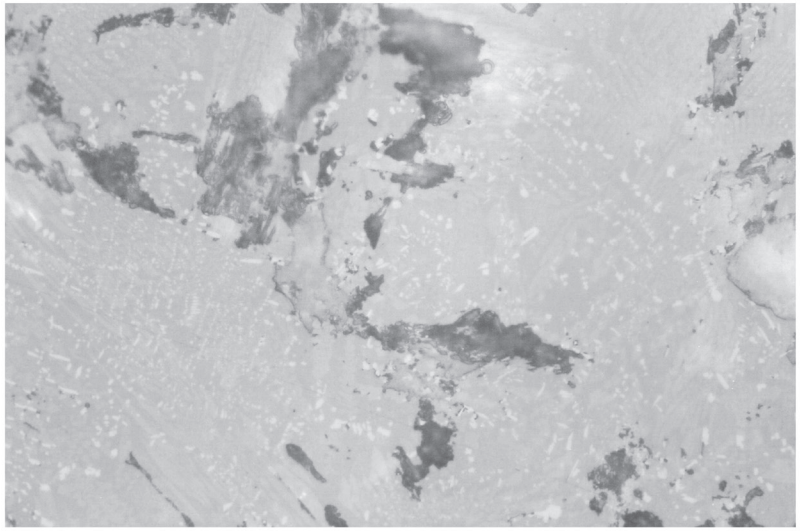


× 400

図 23　顕微鏡組織写真　No.3-2

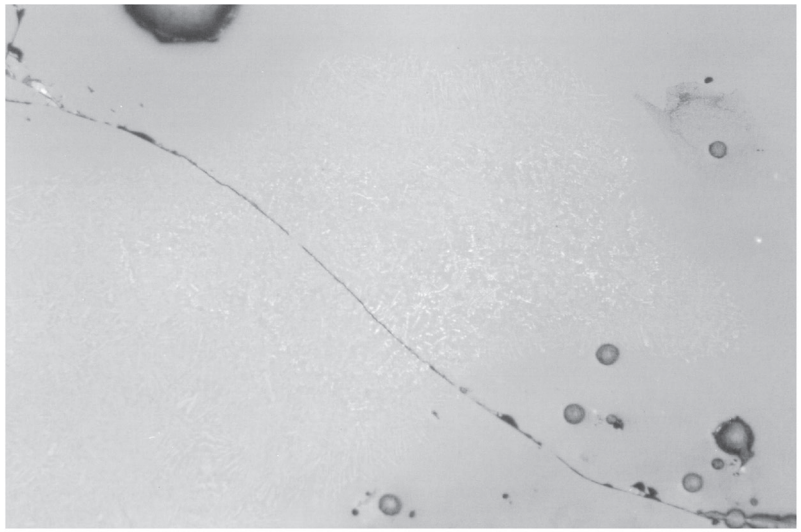


× 100

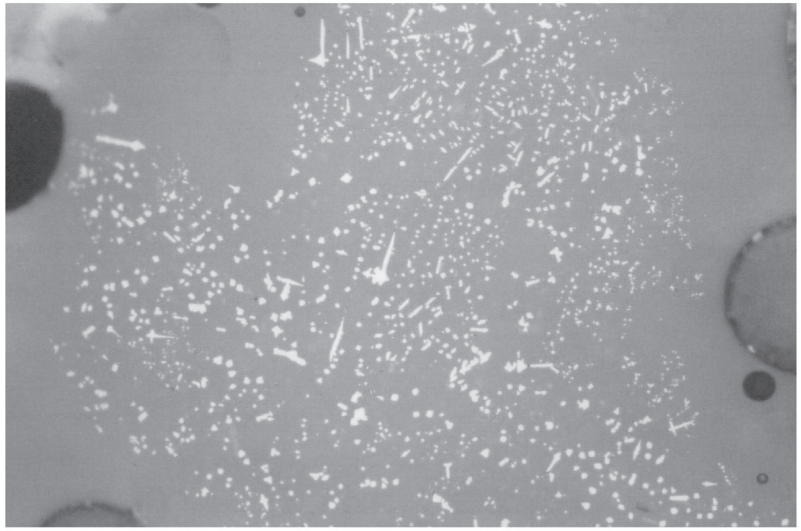


× 400

図 24　顕微鏡組織写真　No.4-1

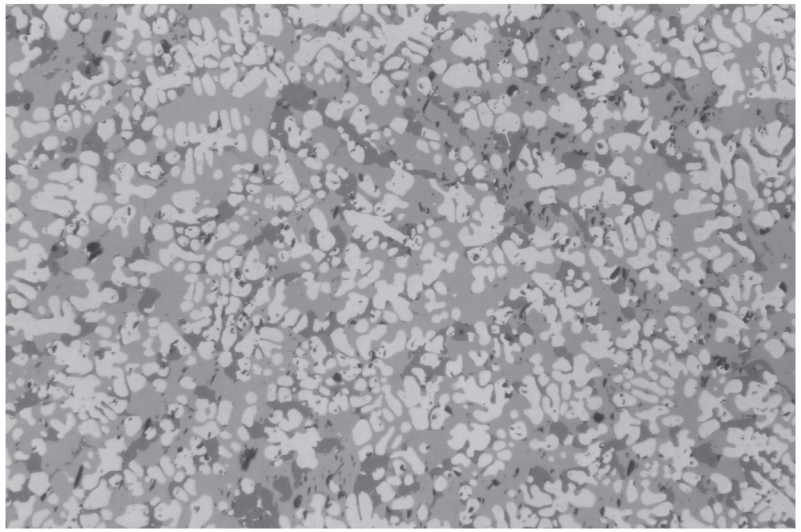


× 100

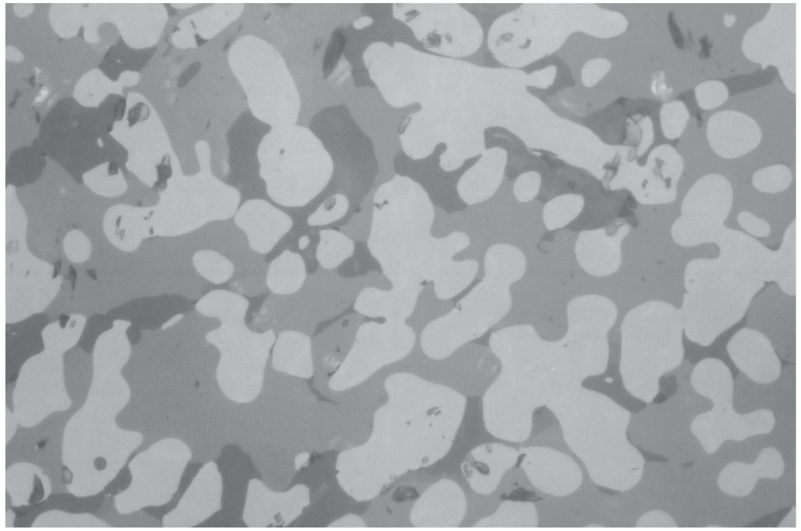


× 400

図 25　顕微鏡組織写真　No.4-2

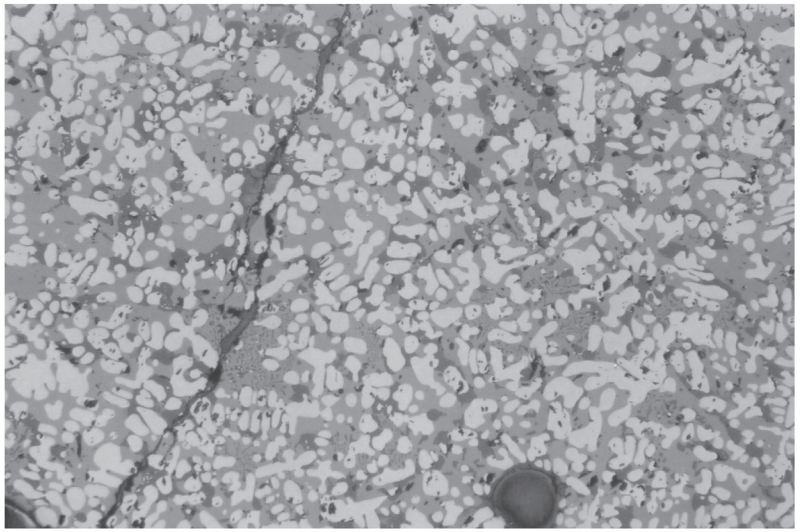


× 100

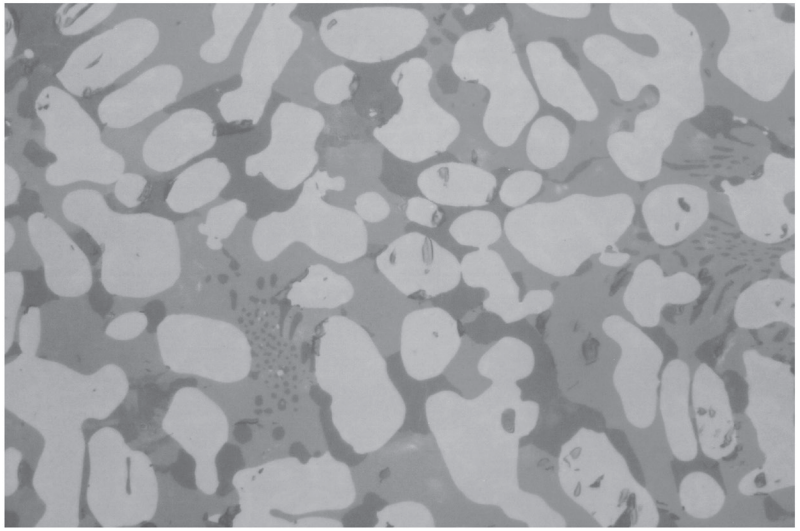


× 400

図 26　顕微鏡組織写真　No.5-1

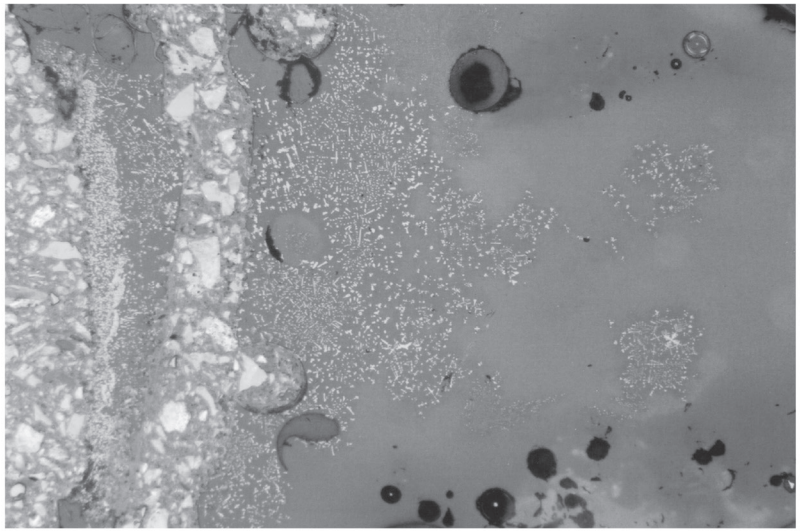


× 100

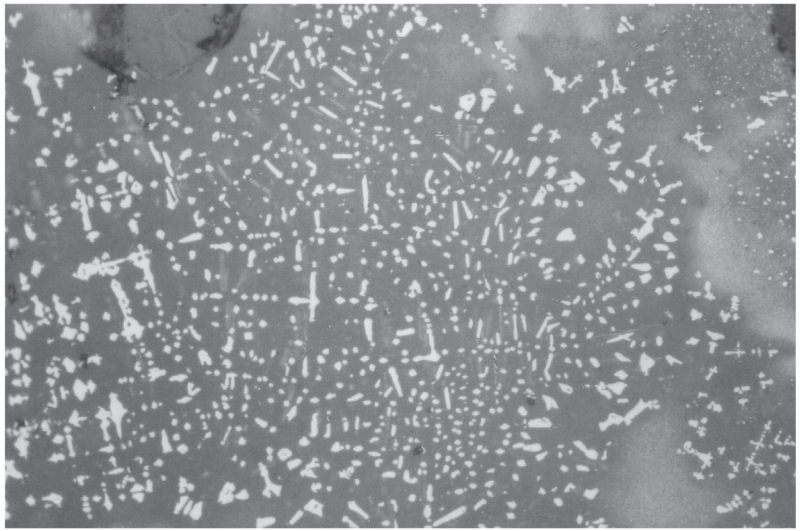


× 400

図 27　顕微鏡組織写真　No.5-2

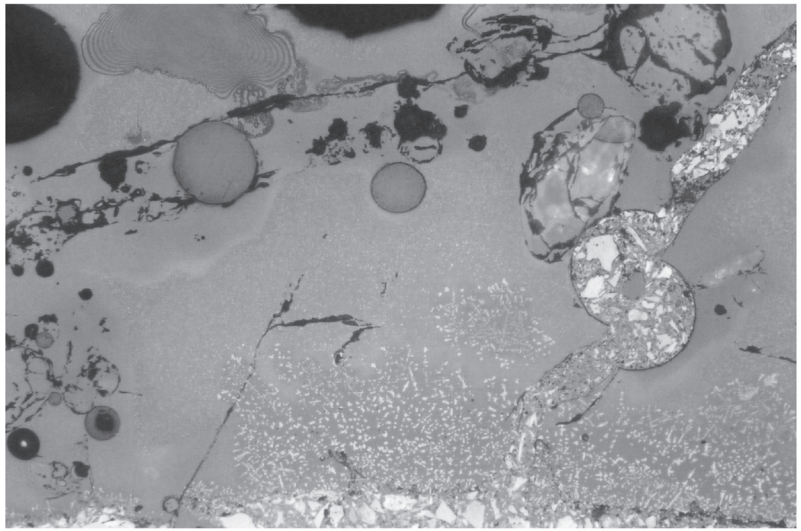


× 100

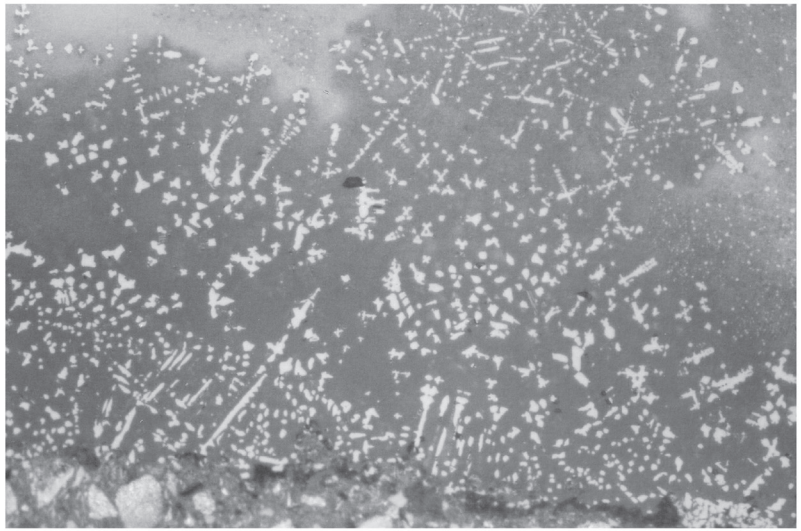


× 400

図 28　顕微鏡組織写真　No.6-1



× 100



× 400

図 29　顕微鏡組織写真　No.6-2

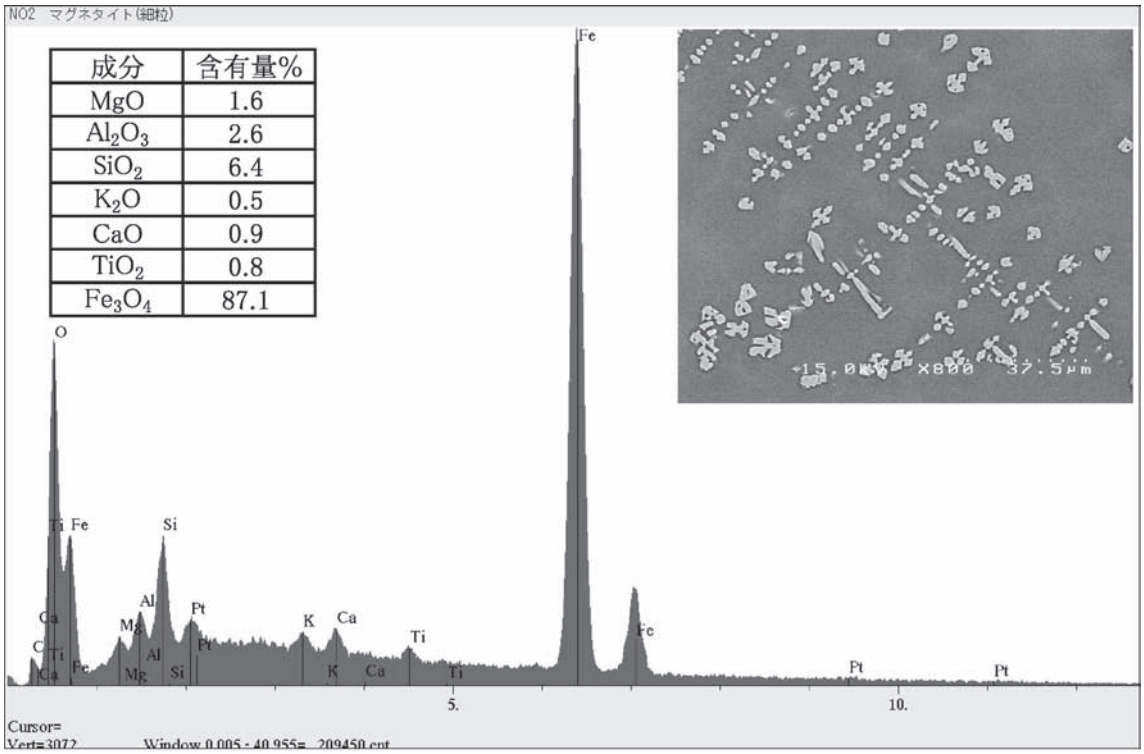


図 30　ポイント分析チャート１（No.2：マグネタイト（Magnetite：Fe_3O_4））

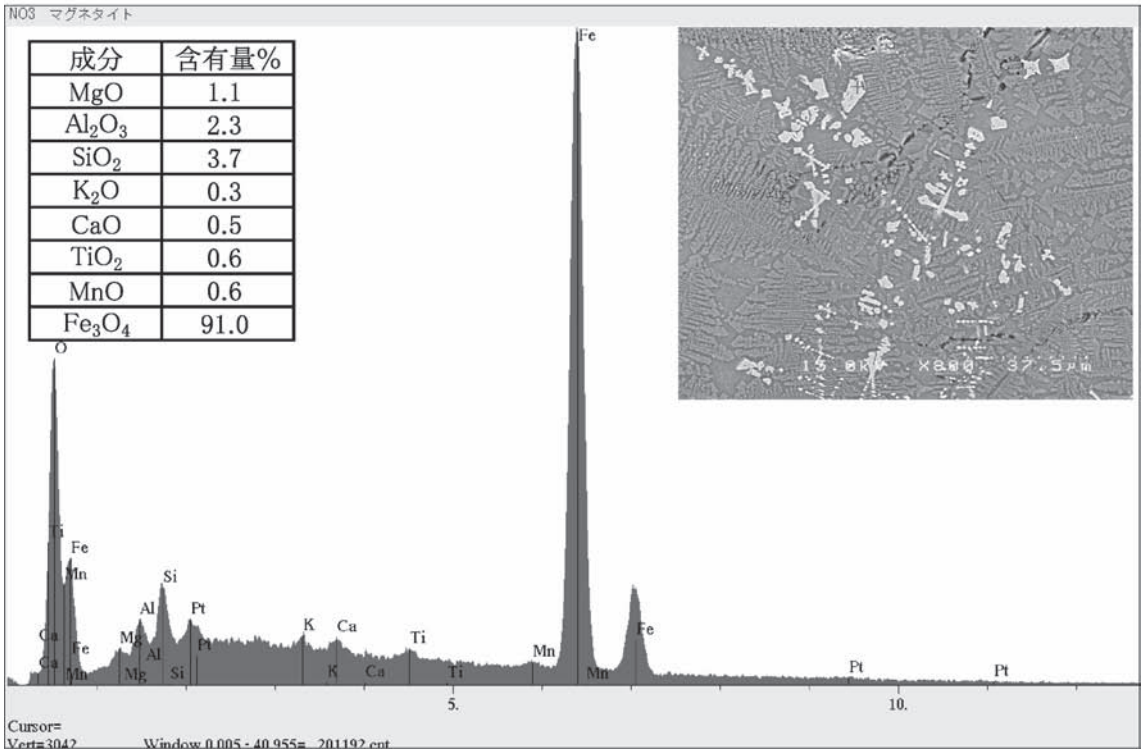
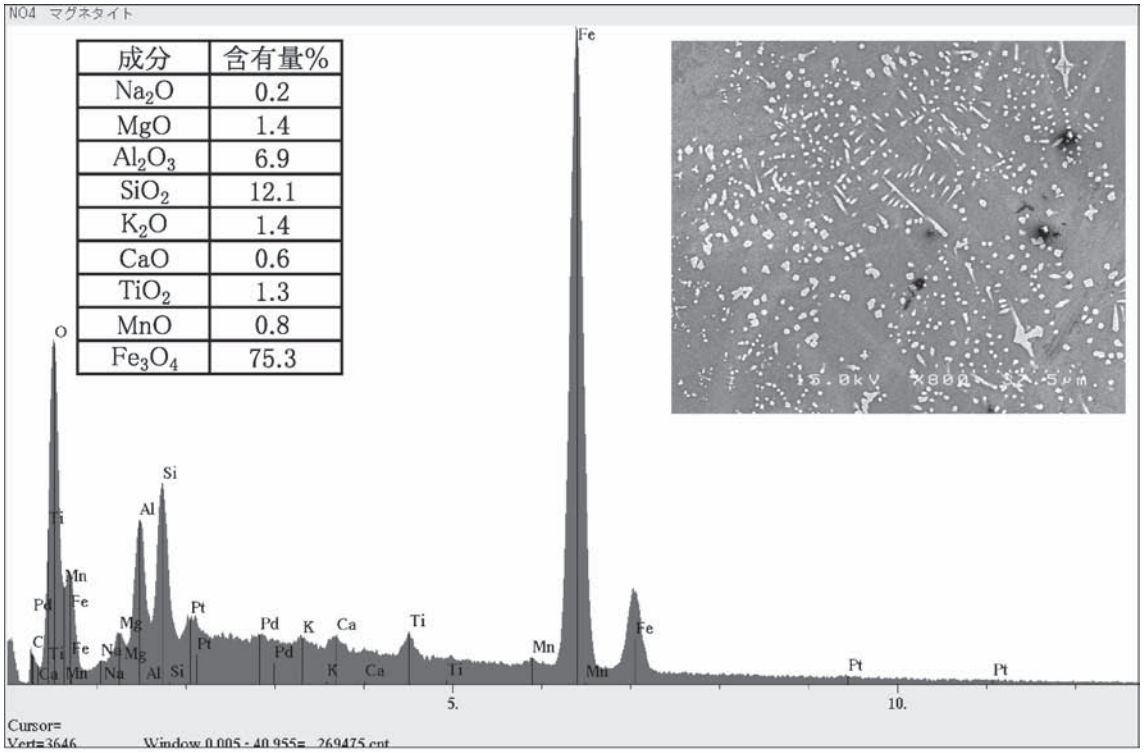
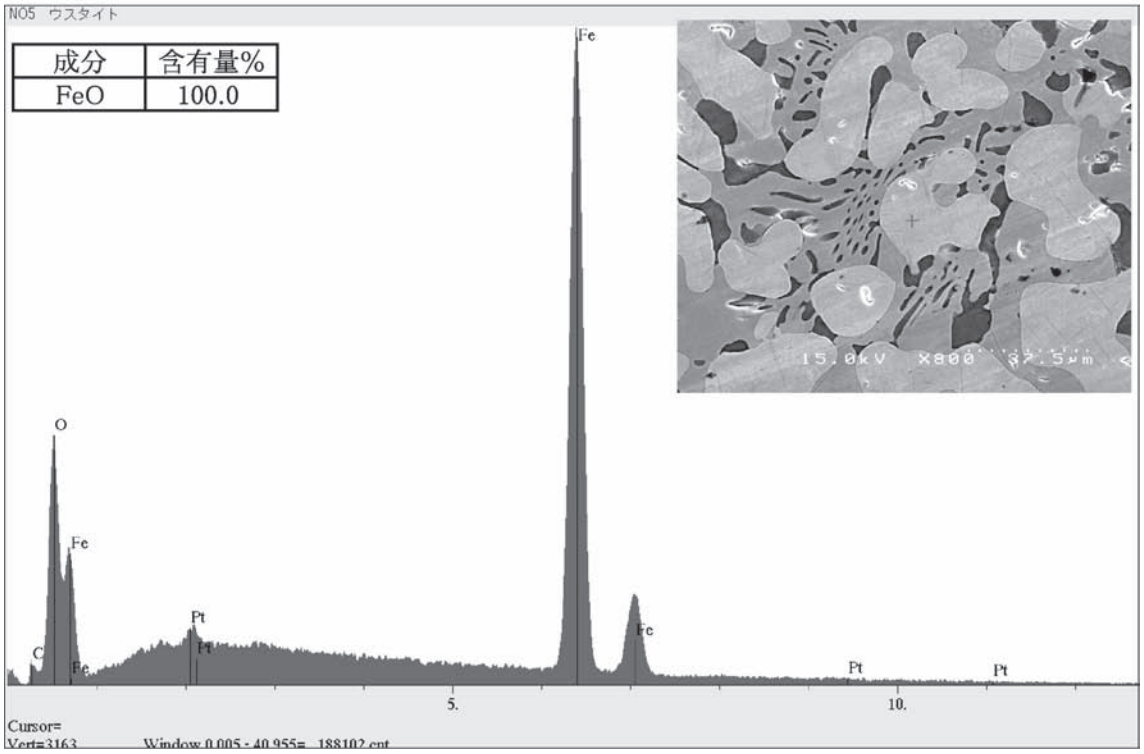


図 31　ポイント分析チャート２（No.3：マグネタイト（Magnetite：Fe_3O_4））



成分	含有量%
Na_2O	0.2
MgO	1.4
Al_2O_3	6.9
SiO_2	12.1
K_2O	1.4
CaO	0.6
TiO_2	1.3
MnO	0.8
Fe_3O_4	75.3

図 32　ポイント分析チャート 3（No.4：マグネタイト（Magnetite：Fe_3O_4））



成分	含有量%
FeO	100.0

図 33　ポイント分析チャート 4（No.5：ウスタイト（Wustite:FeO））

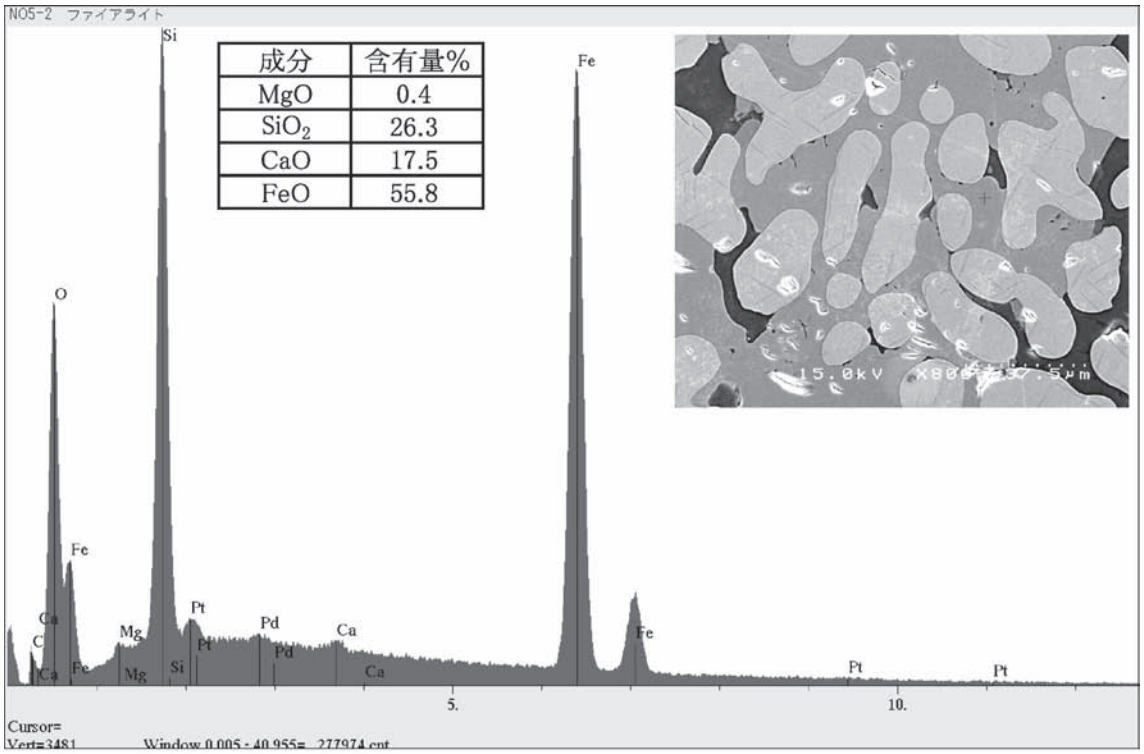


図 34　ポイント分析チャート 5（No.5：ファイヤライト Fayalite:2FeO·SiO_2））

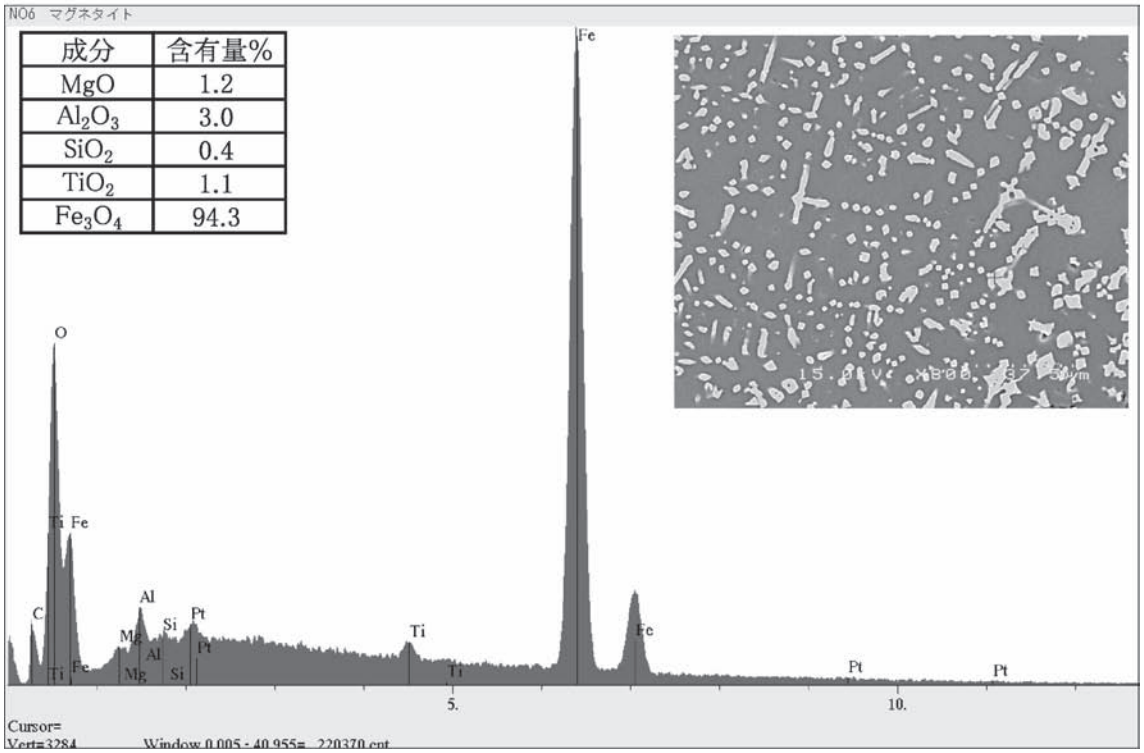
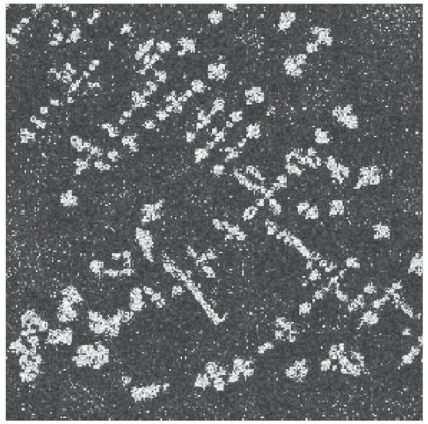
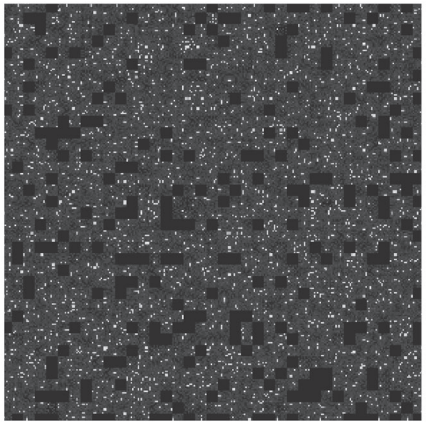
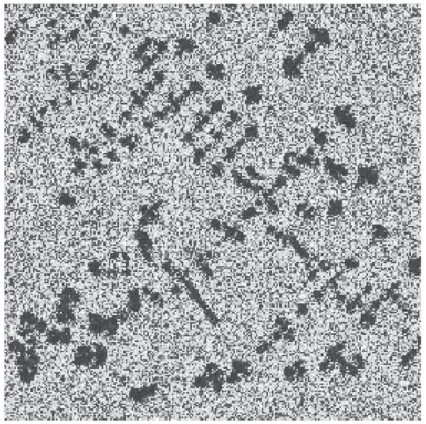


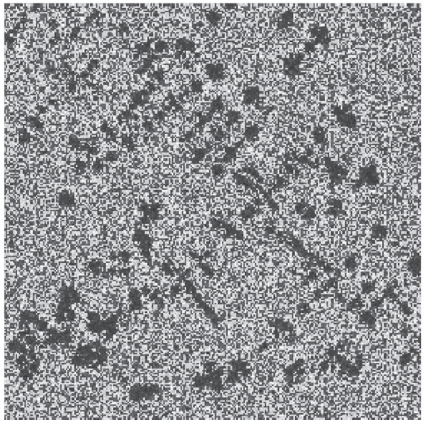
図 35　ポイント分析チャート 6（No.6：マグネタイト（Magnetite：Fe_3O_4））

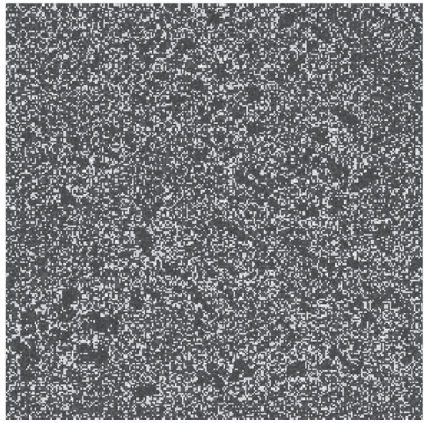
SE 像

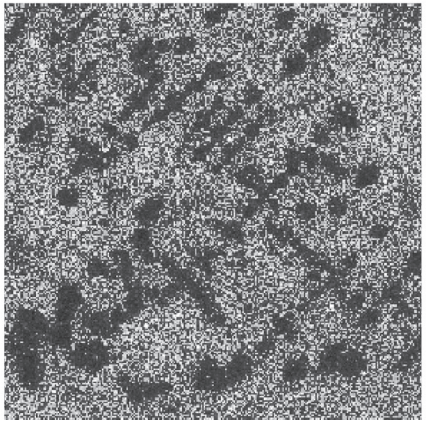

元素：Fe


元素：Ti


元素：Si


元素：Al


元素：K


元素：Ca

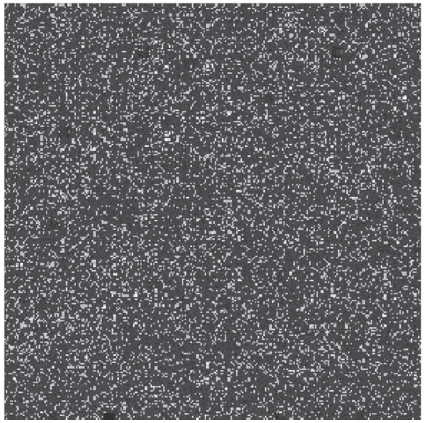

元素：O

図 36　マッピング分析結果 1　No.2　x 800

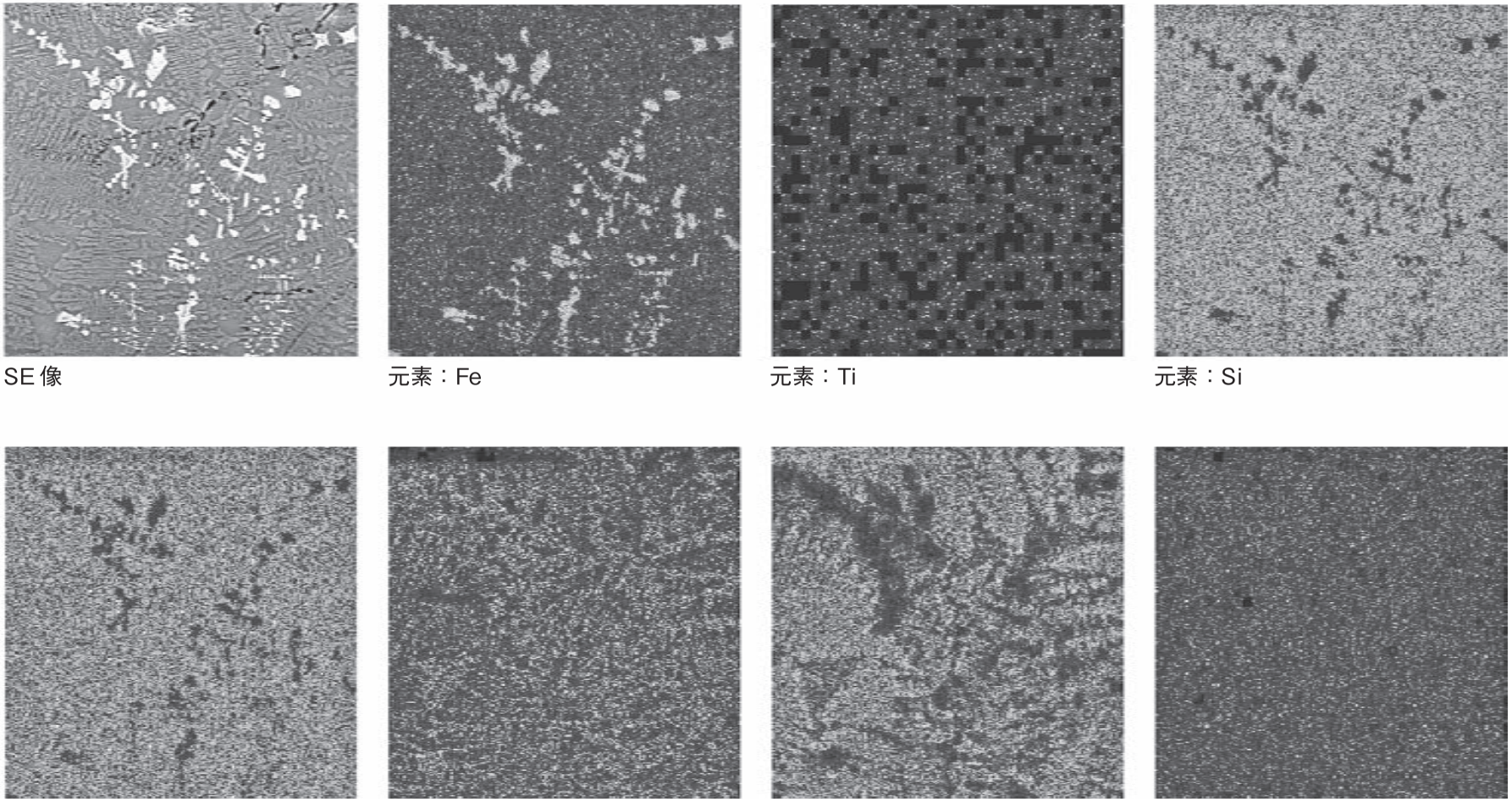


図 37　マッピング分析結果 2　No.3　x 800

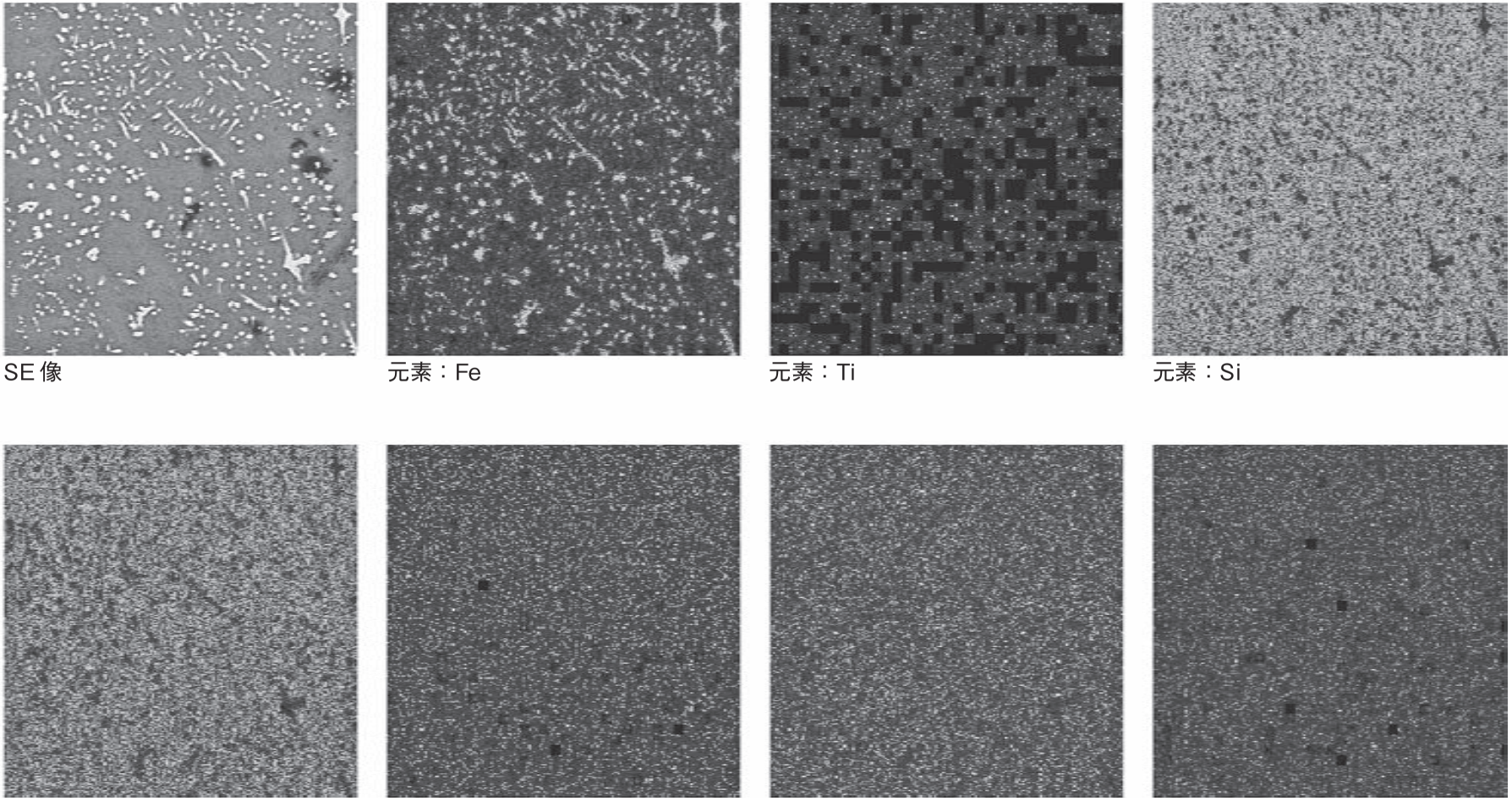


図 38　マッピング分析結果 3　No.4　x 800

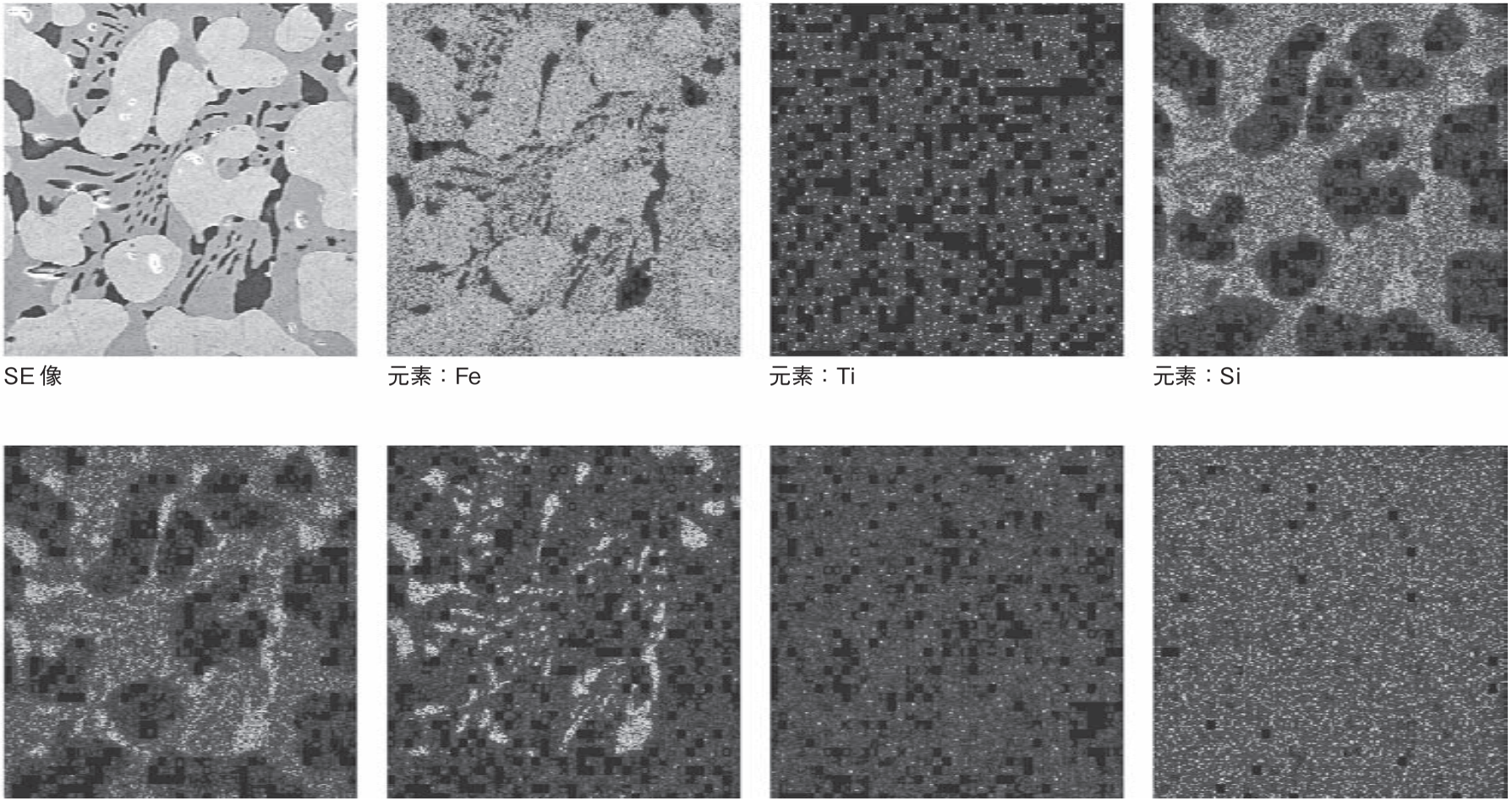
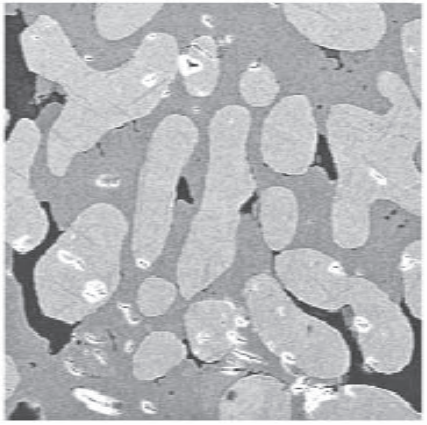
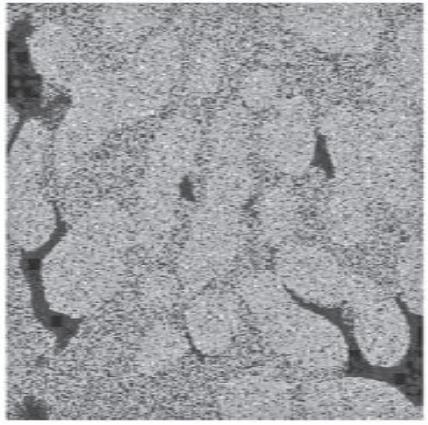


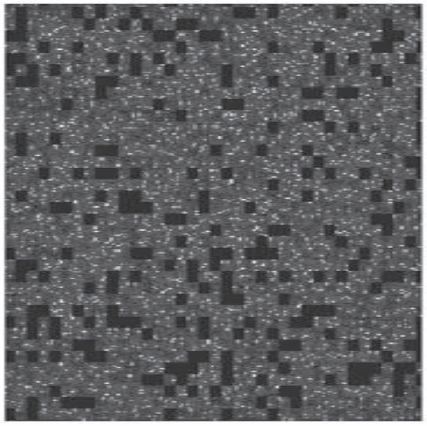
図 39　マッピング分析結果 4　No.5-1　x 800



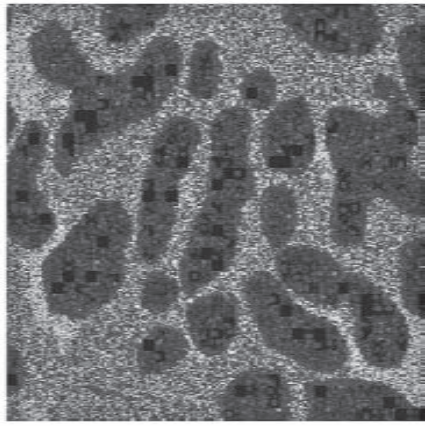
SE 像



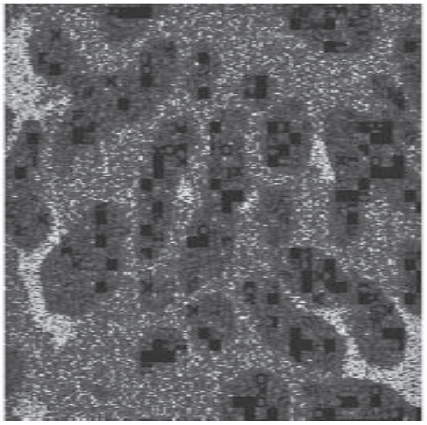
元素：Fe



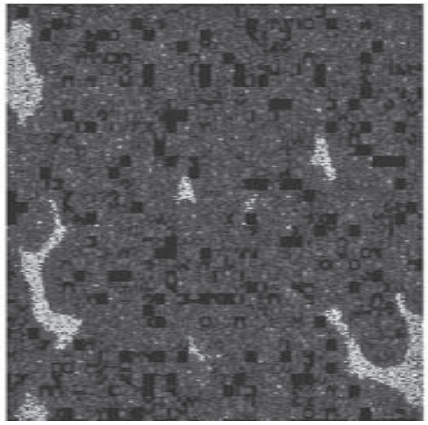
元素：Ti



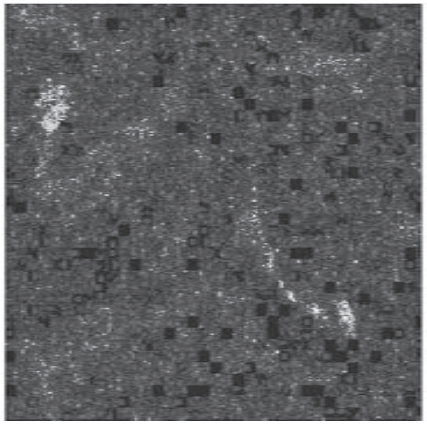
元素：Si



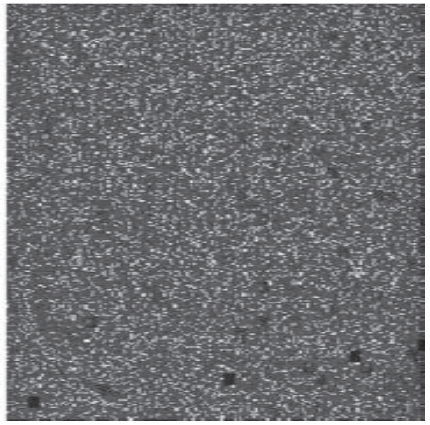
元素：Al



元素：K



元素：Ca



元素：O

図 40　マッピング分析結果 5　No.5-2　x 800

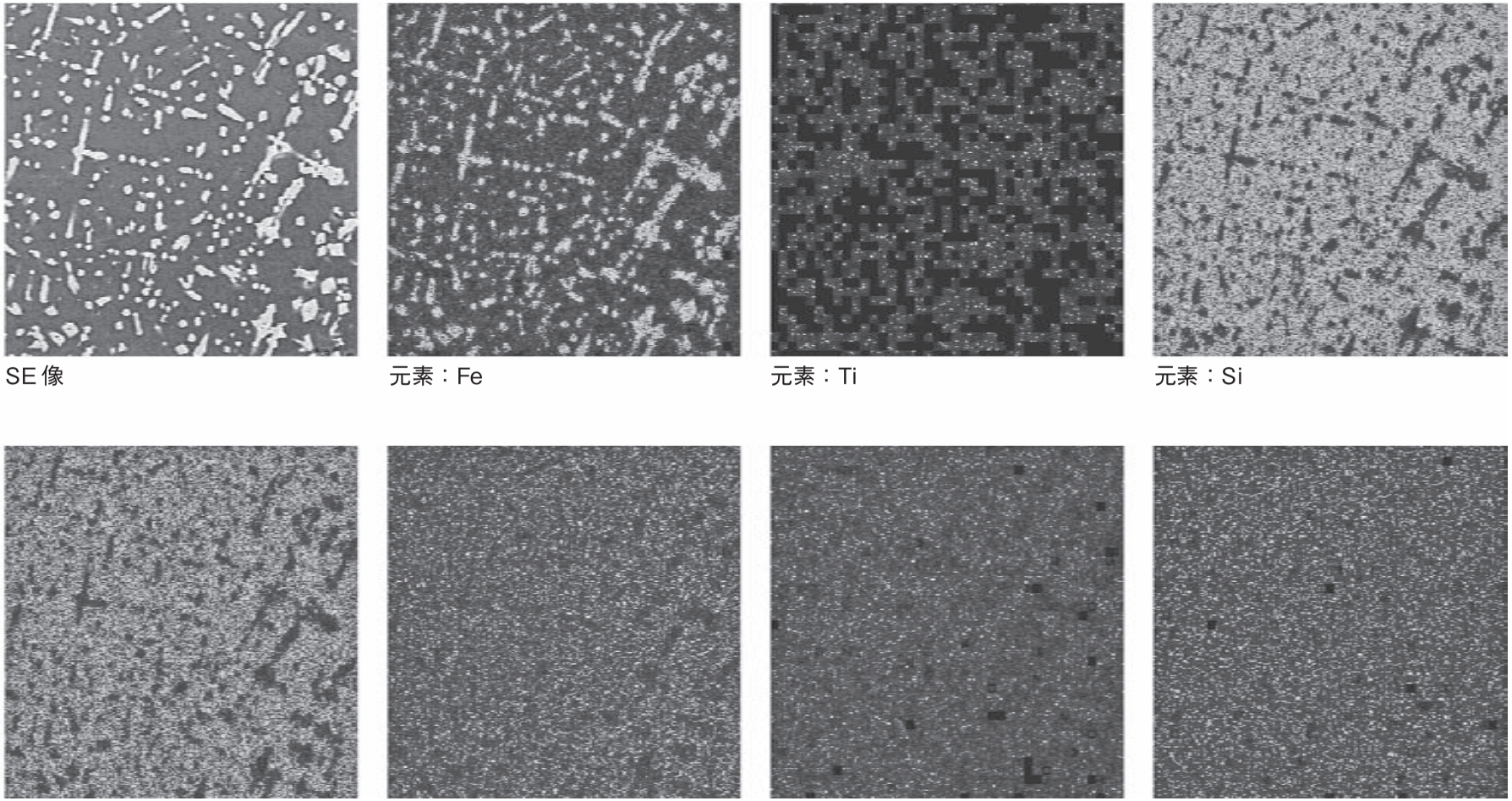


図 41　マッピング分析結果 6　No.6　x 800

第Ⅶ章　まとめ　－兀塚遺跡の歴史的変遷－

１．はじめに

前章までに兀塚遺跡の遺構・遺物の報告をしたが、記述した諸遺構の事実関係を整理し、兀塚遺跡の概要を時代順にまとめたい。前章までに報告した遺構・遺物を大まかに時代順に分ければ、①旧石器～縄文時代　②弥生時代　③古代前半　④中世前半　⑤近世以降の５時期に大別できる。次にこの区分をもとに兀塚遺跡の集落の動向について時代順に説明する。

２．旧石器～縄文時代

旧石器･縄文時代と考えられる石器が数点ある。主なものでは､有舌尖頭器（591）横長剥片石核（354･602・646）等があげられる。兀塚遺跡周辺では、第Ⅲ章第２節で触れたように、旧石器時代に係わる遺跡・遺物の資料は比較的豊富である。代表的な遺跡として中間西井坪遺跡・中間東井坪遺跡・正箱遺跡・中森遺跡等の資料がある。瀬戸内技法以降の特徴を留めた石器群を確認できる遺跡もあり、今後も隣接地の調査の際には注意を要する。

３．弥生時代

Ⅰ～Ⅵ区までの自然河川 SR301・302・401・602 からは少量ではあるが、河川の下位層を中心に弥生中期中葉～後期の土器・石器等が出土しており、これらの河川は弥生時代中期以降から埋没が始まり、７～８世紀頃には平坦化したようである。また、河川から弥生時代中～後期の土器が出土することは、調査区外の隣接地に同時期の集落が展開しているものと考えられるため、周辺域の今後の調査に期待される。

Ⅴ区では中期中葉頃の円形の周溝状遺構 ST501・502 を検出した。周溝状遺構の性格については、住居の外周を囲う周溝ないし円形周溝墓の可能性がある。ただ､周溝内は径 3.5 ～ 4.5 m程の範囲しかなく、住居が納まるとは考えられないため、円形周溝墓の可能性が高い。ただ、削平を受け主体部を欠くため若干の問題を残している。なお、ST501・502 周辺には周溝状遺構とも考えられる SD501・515 等の溝跡がある。これらの溝跡は湾曲した溝状遺構で、他遺構により大部分が壊されており、本来の形状については不明瞭な点が多い。仮に SD501・515 等が円形周溝墓の残骸であれば、Ⅴ区周辺域が当時の墓域として土地使用がなされていたことの補強資料になる。

４．古代前半

（１）集落の分布域

７～８世紀前半頃の比較的短期間の集落跡を確認した。集落はⅥ区～Ⅸ区までの広範囲な区域に広がる。住居跡は 32 棟の建物と１棟の竪穴建物を確認した。住居跡の分布を大まかに分ければ、集落Ⅰ～Ⅲに区分できる。集落ⅠはⅥ区の建物６棟、集落ⅡはⅥ・Ⅶ－１～３区の建物 23 棟と竪穴建物１棟、集落ⅢはⅨ－１区の大型建物１棟で構成され、分布状況から集落Ⅱ周辺が中心域であることが解る。

弥生時代以降開発が及んでいない地域に、古墳時代後期末～古代前半頃新たな集落が開始される事例は県下でも数多く確認できる現象で、これらの集落は在地の有力な豪族層の主導による、新たな農地開

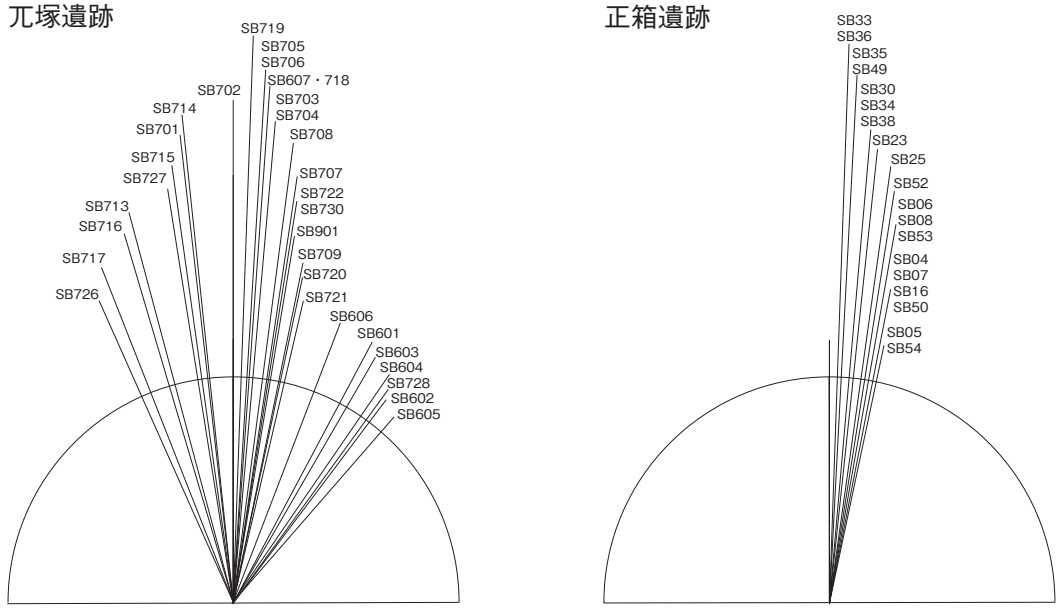
発を意図した集落の可能性が考えられており（註1）、7～8世紀前半の兀塚遺跡集落もその一例と考えられる。

（2）建物主軸方位・時期区分

建物からの出土遺物は少なく、時期判断が容易ではない。そのため、建物の主軸方位や他遺構との係わりを考慮したうえで時期判断の根拠にしたい。兀塚遺跡の建物主軸方位を分類すれば5グループに分けられる。各グループと建物相互の関係は第5表に記載した通りである。

第5表　兀塚遺跡古代Ⅰ～Ⅲ期建物主軸方位類型別一覧

主軸方位グループ	方位	建物	数	時期	類似遺構
①	N15～24° W	713・716・717・726	4	7C前半	
②	N 5～ 9° W	701・703・714・715・727	5	7C前半	SH701（N8° W）
③	N 0°	702	1	7C前半	
④	N 2～13° E	607・704・705・706・707・708・709・718・719・720・721・722・730・901	14	8C後半	SD403・404（N13° E）
⑤	N28～41° E	601・602・603・604・605・728	6	7C中頃～	
他		606	1		
合計			31		



第149図　兀塚遺跡・正箱遺跡建物主軸方位分布図

①～⑤グループの主軸方位の違いは時期差を表している可能性が高いが、各グループ内では出土遺物が少なく時期が解る建物は少ない。そのため、先述したように周辺の他遺構と他遺跡の事例を考慮したうえで、大まかながら時期判断を行うことにする。

①・③グループは各建物の出土遺物しか判断材料はないため、少量の出土遺物から概ね7世紀前半頃に推定したい。②グループの時期判断の補足資料として、竪穴建物SH701があげられる。SH701は7世紀前半の住居で、主軸方位はN8° Wを測り②グループに含まれる。そのため、②グループを7世紀前半頃と考える根拠の一つになる。次に④グループと条里地割の係わりに付いて触れる。当地周辺の条

第 150 図　兀塚遺跡遺構変遷図

里地割は北から10°前後東に振る方位で、周辺の調査事例から8世紀中頃以降に施行されたものと推定されている。条里地割の方位は同グループの範囲内に含まれるため、④グループは当地に条里地割が施行された後の建物群の可能性が高い。兀塚遺跡の北西に位置する正箱遺跡では、8世紀後半の建物を多数検出している（註2）。その主軸方位はN2～12°Eの範囲内に分布しており、兀塚遺跡の④グループの建物群の方位と類似している。また、兀塚遺跡のSD403・404は8世紀後半の条里地割の坪界溝と考えられる。主軸方位はN13°Eを測り④グループの方位に含まれるため、同グループが8世紀後半頃にあたる可能性を補強する根拠にあげられる。⑤グループは7世紀前半のSR601やSX605と重複し、それらの遺構が埋没した後に設置している。そのため、少なくとも7世紀中頃以降の時期が考えられるのであるが、下限については問題を残す。

先述したことを踏まえ、①～⑤グループの時期を整理する。①～③は更に細分される可能性も高いが、概ね7世紀前半頃と考えたい。④は8世紀後半頃、⑤は7世紀中頃以降の可能性が高い。なお、これらの時期区分も再考の必然性は高い。そのため、仮に①～③グループを古代Ⅰ期、⑤グループを古代Ⅱ期、④グループを古代Ⅲ期と仮称して各期の集落の動向を簡単に触れる。

（3）古代Ⅰ期

7世紀前半頃の住居としては、Ⅵ～Ⅶ区に広がる集落ⅠのSB607、集落Ⅱの701～703・713～717・726・727等の11棟の建物と竪穴建物SH701を中心にした集落である。主軸方位は①～③のグループにあたり方位にかなりバラつきがあるが、そうした不揃いな点が7世紀の建物の特徴である。建物配置から単一集団の可能性が高い建物群を抽出すれば、1群：SB701・702・703、2群：SH701・SB708・714、3群：SB715・716・717・727等の3グループに分けられるが、各建物間の配置など規格性は乏しく不揃な点が多い。3群は2間×2間の総柱建物だけで構成されることから、集落内でも公的な性格を備えている可能性がある。2群は竪穴建物跡SH701を含むことから、7世紀前半集落のなかでも比較的初期に配置されたグループの可能性が高い。

（4）古代Ⅱ期

7世紀中頃以降の建物としては、Ⅵ区のSR602の東側に隣接する集落ⅠのSB601～606の6棟と集落ⅡのSB728等がある。集落Ⅰと集落Ⅱとの間には自然河川SR602を挟み距離的に離れている。また、更に東方には複数の自然河川SR301～303・401等や溝群SD507～513等が展開するため、集落範囲は限られている。検出した建物は他の建物群と大きく主軸方位が異なり、北から28～41°東へ向く⑤グループに属する。SB601～606は7世紀前半のSR601やSX605と重複し、これらの遺構が埋没した後に建物が配置しているため、少なくとも7世紀中頃以降の時期が相当するものと考えられる。なお、SR601やSX605は、建物を設置するために意図的に埋戻されれた可能性が高い。つまり、集落Ⅰを形成した集団は、集落範囲の拡大を意図しており、新たな集落を形成するためにSR601やSX605等の荒地を整地した後に、SB601～606等の建物を配置した可能性が高い。

集落Ⅰの建物配置から単一集団の可能性が高い建物群を抽出すれば、4群：SB601・603、5群：SB602・604・605等の2グループに分けられる。

（5）古代Ⅲ期

8世紀後半の建物としては、集落ⅡのSB607・704～709・718～722・730・901等の14棟の建物があげられ、概ね7世紀前半の住居域と重複する。主軸方位では④グループにあたり、7世紀代に比べ画一的である。なお、先述した兀塚遺跡の北に位置する正箱遺跡では、8世紀後半の建物を多数検出している。同時期の兀塚遺跡の建物群と主軸方位や規模等で類似点も見出せることから、今後も比較検討が必要になる遺跡である。

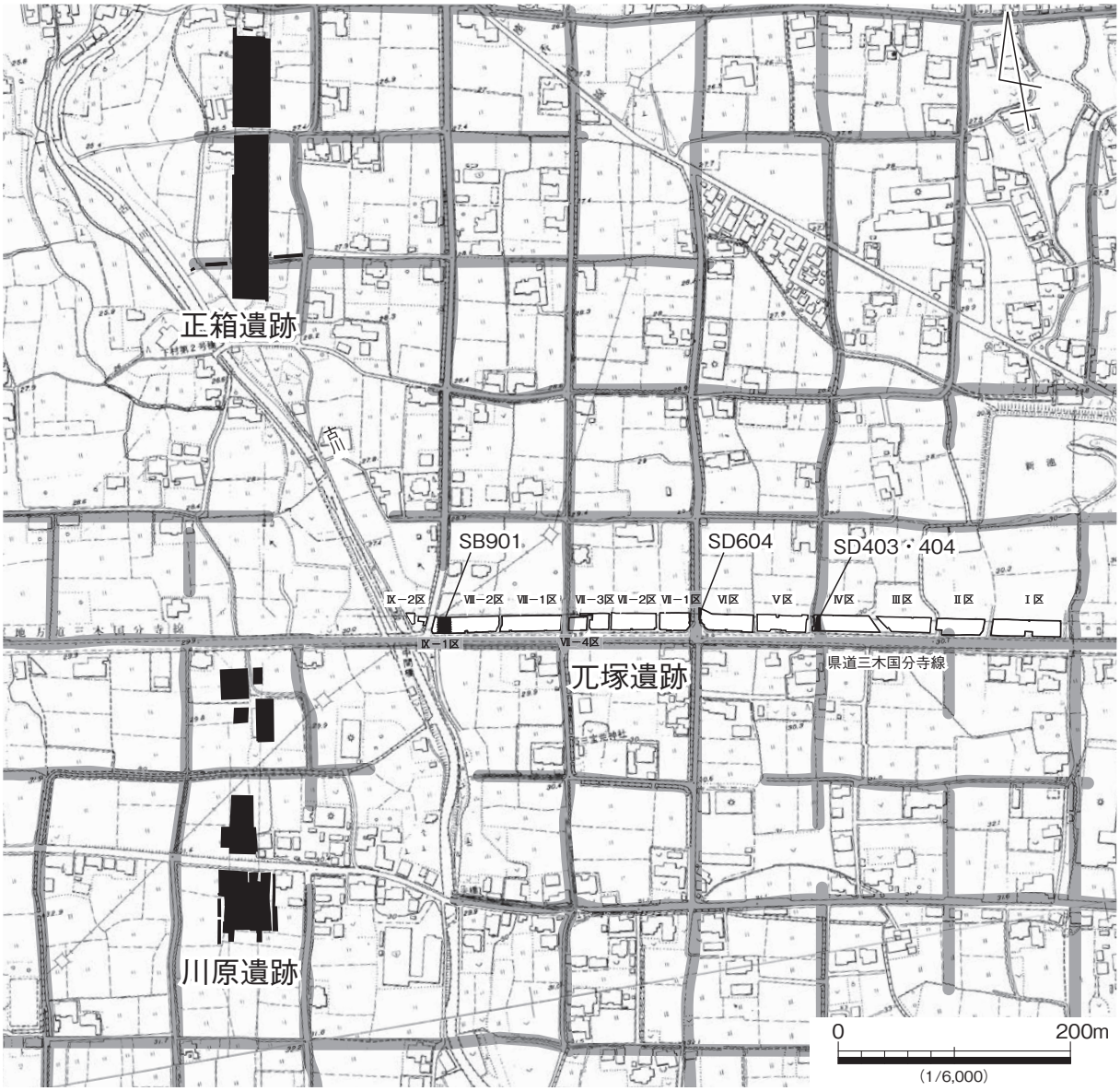
建物配置から単一集団の可能性が高い建物群を見出せば、比較的わかり易い一群として、6群：SB705・706・708　7群：721・722等があげられるが、不明瞭な建物も多い。

集落Ⅲの南北棟の大型建物SB901は、主軸方位や柱穴配置等からおそらくこの時期の建物であろう。なお、この建物は条里地割の東西・南北両坪界線の交点附近に隣接する大型建物である。SB901の南北の両梁間が調査区から外れるため、構造や規模等不明な点があるが、検出状況から推定して梁間3間（6.4m）×桁行7間（14.7m）、面積は94.0㎡を測る大型の建物が推定される。県内の8世紀代の建物で同クラスの建物はかなり限られており、公的な性格を考えざるをえないが、当時の官衙施設や有力豪族の屋敷地等は、方形ないし長方形状の敷地内に複数の建物を「L」や「コ」字に規格的に配置することが一般的であるが、調査区内にはSB901と対になるような建物はみあたらない。ただ、SB901から東方のⅧ－2区SD824までの約55mの区間は遺構密度も低く、推定される公的施設の広場としての空間利用がなされていた可能性がある。これらの状況から、SB901の関連施設は調査区外に考えざるをえないが、SB901の西側は古川の氾濫源にあたるため、西に配される可能性は低い。そのため、仮に調査区外に関連施設を推定した場合、SB901の南東か北東に東西棟が付設する「L」字ないし逆「L」型の建物配置が考えられる。

次に周辺の河川から検出した遺構や遺物について触れておく。まず、周辺の自然河川はこの時期にはほぼ埋没が終わるが、SR301・302の第2水田面（下層水田跡）が形成されるのは11～12世紀頃の古代後半～末頃であろう。注目できる出土遺物では、自然河川SR401からは墨書土器の須恵器杯（173）が出土している。須恵器杯（173）は底部外面の上部に「中」の記載がある。底部下部には、あと1～2字は記入できるスペースがあるが墨書は確認できない。「中」が何を意図した記述か判断が難しいが、一視点として兀塚遺跡は古代の「香川郡中間郷」に位置する。そのため、記載している「中」は、地名の「中間郷」を指す可能性が考えられる。また、SR602からは土馬の脚部（590）と考えられる土製品が出土している。土馬は祭具として県下でも出土例が少なく希少な資料である。古代の兀塚集落の集団が河川沿いで祭祀を行ったことが推測される。これらの資料やSB901は兀塚遺跡の集落の性格を考えるうえでは無視できない遺構・遺物であり、今後の隣接地の調査に期待される点が大きい。

（6）条里地割に伴う遺構

兀塚遺跡周辺では条里地割が比較的明瞭に残っている。兀塚遺跡の北西約300mに位置する正箱遺跡では、8世紀中葉の条里地割の南北の坪界溝を確認しており、この地域の条里地割を復元する際の基準線になっている。また、南西約200mに位置する川原遺跡は古代南海道の推定地に位置し、発掘調査の結果8世紀末以降の南海道の道路側溝の可能性が高い溝状遺構を検出している。両遺跡に挟まれた兀塚遺跡では条里地割に係わる可能性が高い2～3の遺構を確認している。次に、前項で紹介して説明が重複している遺構もあるが、条里地割に係わる可能性が高い遺構をあらためて紹介しておく。



第 151 図　兀塚遺跡周辺条里地割図

Ⅵ区 SD604 附近は条里地割の南北軸の坪界線が通る区域で、SD604 は坪界に概ね合致しており、条里地割に伴う溝跡の可能性が指摘できるが、SD604 は 7 世紀前半頃の溝跡である。兀塚遺跡周辺の地域は 8 世紀後半以降に条里地割が施行された正箱や川原遺跡の事例がある。それらの遺構と SD604 は時期差がありすぎて、この溝跡を直接条里地割に伴う遺構として評価はできないが、今後同種の資料が増加し再評価される可能性は否定できない。

Ⅳ区 SD403・404 は前後関係をもつ本来 1 条の溝跡で、SD604 から約 1 町東に位置し坪界に概ね合致しており、条里地割に伴う溝跡の可能性が高い。この溝は 8 世紀後半の溝跡で、時期的にも周辺事例と合致しており、条里地割に伴う溝跡と捉えられる。

Ⅸ区西端の SB901 はⅥ区 SD604 から約 2 町東に位置する大型建物で、周辺は条里地割の南北軸と東西軸の坪界の交点に位置し、SB901 は坪境に合致しており、坪界線に規制を受けた上で設置された建物と考えられる。先述したように、公的な性格を推定せざるを得ない大型建物であり、施設の構造や性格

については今後の調査に委ねる必要がある。

５．中世前半

７～８世紀の集落が廃絶後、新たに集落が再開するのは、中世前半の12世紀以降である。中世前半の集落は調査区西半部のⅦ～Ⅸ区に展開する。住居は掘立柱建物で構成され、屋敷地を画する区画溝や雨落溝を伴う建物跡等が確認できる。建物の主軸方位はN8～15.5°Ｅまでの振幅はあるが、概ね条里地割方向に揃えている。時期的には12～13世紀頃の中世前半の建物が中心を占めるが、中世後半の建物を少数含む。主な建物をあげれば、SB710・711・712・720・723・724・725・729・801・802・803・804・805・806・807・808・902・903等の合計18棟の建物があげられる。

集落の中心は微高地の中心にあたるⅦ－１～3、Ⅷ－１区、Ⅸ－１区に位置する。建物の分布域を古代集落からの連続で呼称すれば、Ⅶ－１～３区を集落Ⅳ、Ⅷ－１区を集落Ⅴ、Ⅸ－１区を集落Ⅵに分けられる。なお、Ⅲ区のSR301・302の第１水田面（上層水田跡）は、おそらく12～13世紀頃に形成された水田跡と考えられる。

集落Ⅳ（Ⅶ－１～３区）に含まれるのは、SB710・711・712・720・723・724・725等の建物があたる。Ⅶ－１区のSB710・711・712等は互いに重複しており時期差が考えられるが、遺物が少なく詳細な点は不明である。概ね12～13世紀の期間での建て替えが表れているものと考えられる。Ⅶ－２区の西半部に位置するSB723・724・725等の南北棟の一群は、逆「L」字型に曲がる雨落溝SD707が画する区画内に位置する。周辺には同時期の柱穴が多数分布し、本来はより多数の建物が時期を違えて重複していた可能性が高い。これらの建物の中でSB724は面積58.7㎡を測る比較的大型の建物で、グループの中心的建物と推定される。時期的にはSB723・724が12世紀以降の建物で、SB725は14～15世紀頃の時期が考えられる。

集落Ⅴ（Ⅷ－１区）では東西約50ｍの範囲内に８棟の建物が確認された。注目されるのは、雨落溝や廂を備えた12～13世紀の建物、SB802･803･804･805等が隣接して確認された点である。検出状況から中世集落西半部の中心地となっている。このグループと重複するSB801･806･807･808等は、出土遺物が少なく詳細な時期は不明であるが、先のグループより後出する13世紀後半頃の建物と推定される。

集落Ⅵ（Ⅸ－１区）に含まれるのは、Ⅸ－１区に所在するSB902・903の２棟である。約10ｍほど離れているが向きを揃え並行気味に配置しているため、同時期の建物の可能性が高い。なお、SB902北西約13ｍの地点には、唯一の中世土壙墓ST901が位置する。ST901の周辺は古川の氾濫源と微高地の境にある段丘崖の上端部周辺にあたり､段丘崖周辺が墓域として土地利用されていることが想定される。

６．近世

近世遺構としては、各調査区に散漫に分布しているが、Ⅴ－２区では18～19世紀頃の近世屋敷地の北辺と東辺を画する区画溝を検出した。区画内には多数の柱穴や井戸と考えられる大型土坑を検出したが、敷地内の建物を復元するまでには至らず、今後の検討課題となる。

７．おわりに

兀塚遺跡の歴史的変遷について簡単にまとめてみたが、書き漏らした点は多々ある。とくに、８世紀頃の兀塚遺跡の周辺に位置する正箱遺跡は先述したように当地周辺の８世紀以降の古代集落の代表格と

して、周辺集落で常に比較される遺跡である。また、兀塚遺跡の約 200 m南には条里地割の東西軸の余剰帯が認められ、古代南海道ルートに推定されている。このルート上で行なわれた川原遺跡の調査では、南海道の一部と考えられる８世紀後半頃の道路側溝を検出している(註3)。つまり、兀塚遺跡の古代Ⅲ期(8世紀後半）の段階では、遺跡の南に南海道が通っており、8 世紀後半頃は兀塚遺跡や正箱遺跡の集落の盛期とも重複するため、兀塚遺跡を含めた集落跡と南海道との係わりが今後も問題視されるのは確実であるが、詳細な点は今後の課題としたい。

（註）
(1) 広瀬　和雄　1986「中世の胎動」『岩波講座日本考古学 6―変化と画期―』岩波書店
(2) 西村　尋文　1994「第 4 章　第 2 節　正箱遺跡における古代集落の展開」『県道山崎御厩線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　正箱遺跡・薬王寺遺跡』香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター
(3) 森下　英治　2008「第 4 章川原遺跡」『県道円座香南線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第 2 冊　本郷遺跡・川原遺跡』香川県教育委員会

（参考文献）
金田　章裕　1988「条里と村落生活」『香川県史第 1 巻通史編原始・古代』四国新聞社
香川県教育委員会・(財) 香川県埋蔵文化財調査センター　1994『県道山崎御厩線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　正箱遺跡・薬王寺遺跡』
香川県教育委員会・(財) 香川県埋蔵文化財調査センター・建設省四国地方建設局　1995『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 3 冊　前田東・中村遺跡』
香川県教育委員会・(財) 香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団　1996『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 25 冊　中間西井坪遺跡』
香川県教育委員会・(財) 香川県埋蔵文化財調査センター　1996　平成 7 年度「兀塚遺跡」『県道関係埋蔵文化財発掘調査概報』
香川県教育委員会・(財) 香川県埋蔵文化財調査センター　1997　平成 8 年度「兀塚遺跡」『県道関係埋蔵文化財発掘調査概報』
香川県教育委員会・(財) 香川県埋蔵文化財調査センター　1998　平成 9 年度「兀塚遺跡、」『県道・河川関係埋蔵文化財発掘調査概報』
佐藤　竜馬　1998「讃岐における官衙関連遺跡と集落動向」『律令国家における地方官衙遺構研究の現状と課題』古代学協会四国支部第 12 回大会発表資料
香川県教育委員会　2003『香川県中世城館跡詳細分布調査報告』
香川県教育委員会・国土交通省四国地方整備局・日本道路公団　2004「中森遺跡」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第 53 冊』
西村　尋文　2011「第 4 章土地区画が語ること、第 5 章道が語ること」『讃岐国府の時代』香川県埋蔵文化財センター

第６表　兀塚遺跡掘立柱建物跡一覧

遺構名	調査区	棟向	主軸方位	主軸方位（調整）	構造・規模				面積（㎡）	柱間寸法		主軸方位グループ
					梁間（m）×桁行（m）	側柱	総柱	廂		梁間（m）	桁行（m）	
SB601	Ⅵ区	東西	N62° W	N28° E	2 間（3.1）× 2 間（4.0）	1			12.4	1.5 ～ 1.6	1.8 ～ 2.1	⑤
SB602	Ⅵ区	南北	N37° E		1 間（3.0）× 3 間（5.1）	1			15.3	2.9 ～ 3.0	2.2 ～ 2.7	⑤
SB603	Ⅵ区	南北	N30° E		2 間（2.5）× 2 間（3.0）	1			7.5	1.1 ～ 1.4	1.7 ～ 1.9	⑤
SB604	Ⅵ区	南北	N34.5° E		2 間（2.1）× 2 間（3.5）	1			7.35	1.0 ～ 1.1	1.7 ～ 1.8	⑤
SB605	Ⅵ区	南北	N41° E		1 間（3.7）× 3 間（6.0）	1			22.2	3.6 ～ 3.7	1.9 ～ 2.2	⑤
SB606	Ⅵ区	南北	N21° E	N69° W	2 間（3.1）× 2 間（3.5）	1			10.85	1.5 ～ 1.6	1.7 ～ 1.8	
SB607	Ⅵ区	南北	N4° E		2 間（3.0）× 2 間（3.85）以上		1		11.55 以上	1.4 ～ 1.6	1.8	④
SB701	Ⅶ－１区	南北	N6.5° W		2 間（3.9）× 4 間（6.1）	1			23.79	1.65 ～ 2.1	1.3 ～ 1.8	②
SB702	Ⅶ－１区	東西	0°		2 間（3.6）× 3 間（5.1）		1		18.36	1.7 ～ 1.85	1.4 ～ 1.9	③
SB703	Ⅶ－１区	東西	N85° W	N5° E	2 間（3.35）× 2 間（3.95）	1			12.35	1.45 ～ 1.8	1.8 ～ 2.0	②
SB704	Ⅶ－１区	南北	N5° E		2 間（3.5）× 3 間（5.05）	1			16.67 台形	1.5 ～ 1.9	1.5 ～ 1.9	④
SB705	Ⅶ－１区	東西	N86.5° W	N3.5° E	2 間（3.65）× 5 間（7.9）				28.84	1.6 ～ 2.05	1.3 ～ 1.9	④
SB706	Ⅶ－１区	東西	N86.5° W	N3.5° E	2 間（2.9）× 1 間（3.35）	1			10.3	1.3 ～ 1.6	3.5 ～ 3.55	④
SB707	Ⅶ－１区	東西	N8.5° E		1 間（2.2）以上× 2 間（3.6）		1		7.92	1.45 ～ 1.5	1.8	④
SB708	Ⅶ－１区	南北	N7.5° E		2 間（3.35）× 2 間（3.75）		1		13.87	1.65 ～ 1.9	1.9 ～ 2.0	④
SB709	Ⅶ－１区	南北	N11.5° E		2 間（2.75）× 1 間（3.3）	1			9.08	1.3 ～ 1.4	3.2 ～ 3.3	④
SB710	Ⅶ－１区	東西	N76° W	N14° E	1 間（3.9）× 2 間（4.8）	1			18.72	3.65 ～ 3.7	2.2 ～ 2.6	
SB711	Ⅶ－１区	東西	N76° W	N14° E	1 間（3.3）× 3 間（5.8）	1			19.14	3.3 ～ 3.4	1.7 ～ 2.3	
SB712	Ⅶ－１区	東西	N76° W	N14° E	3 間（4.8）× 5 間（5.9）	1			28.32	3.3 ～ 3.4	1.7 ～ 2.3	
SB713	Ⅶ－２区	東西	N75° E	N15° W	2 間（3.75）× 4 間（7.55）	1			28.31	1.5 ～ 2.25	1.8 ～ 2.1	①
SB714	Ⅶ－２区	南北	N6° W		2 間（3.25）× 1 間 (2.7）以上	1			8.78 以上	1.6	2.2	②
SB715	Ⅶ－２区	南北	N8° W		2 間（3.05）× 2 間（4.0）		1		12.2	1.4 ～ 1.6	1.9 ～ 2.1	②
SB716	Ⅶ－２区	南北	N16.5° W		2 間（3.15）× 2 間（3.6）		1		11.34	1.5 ～ 1.65	1.7 ～ 1.85	①
SB717	Ⅶ－２区	東西	N68.5° E	N21.5W	2 間（3.5）× 2 間（3.9）以上	1			13.65 以上	1.6 ～ 1.9	1.8 ～ 2.0	①
SB718	Ⅶ－２区	南北	N4° E		2 間 (3.8）× 4 間（6.2）	1			23.56	1.8 ～ 1.9	1.55 ～ 1.85	④
SB719	Ⅶ－２区	南北	N2° E		1 間（3.0）以上× 4 間（6.7）				20.1 以上	3.0	1.5 ～ 1.7	④
SB720	Ⅶ－２区	東西	N78° W	N12° E	2 間（3.35）× 2 間（4.4）以上	1			14.74	1.65 ～ 1.7	1.45 ～ 2.25	④
SB721	Ⅶ－２区	東西	N77° W	N13° E	2 間（3.9）× 3 間（5.3）	1			20.67	1.7 ～ 2.05	1.7 ～ 1.8	④
SB722	Ⅶ－２区	東西	N81° W	N9° E	1 間 (3.8）× 3 間（6.5）	1			24.7	3.7 ～ 3.8	2.0 ～ 2.3	④
SB723	Ⅶ－２区	南北	N9.5° E		2 間 (4.0）× 3 間（7.2）	1			28.8	1.7 ～ 2.2	1.7 ～ 2.7	
SB724	Ⅶ－２区	南北	N12.5° E		2 間（5.2）× 5 間（11.3）	1			58.7	1.7 ～ 2.0	1.45 ～ 2.0	
SB725	Ⅶ－２区	南北	N8° E		1 間 (4.0）以上× 2 間（5.7）	1			22.8	2.7 ～ 2.8	2.85	
SB726	Ⅶ－３区	東西	N76° E	N24° W	1 間（2.75）以上× 2 間（5.25）以上	1			14.44 以上	1.75	1.5 ～ 2.0	①
SB727	Ⅶ－３区	東西	N9° W		2 間（3.3）× 1 間（2.7）以上	1			8.91 以上	1.6 ～ 1.7	1.5 ～ 1.8	②
SB728	Ⅶ－３区	南北	N36° E		2 間（3.05）× 2 間（3.7）	1			11.29	1.35 ～ 1.65	1.65 ～ 2.0	⑤
SB729	Ⅶ－３区	南北	N10° E		1 間（2.4）× 2 間（3.05）以上	1			7.32 以上	2.35 ～ 2.4	1.1 ～ 1.8	
SB730	Ⅶ－３区	東西	N81° W	N9° E	2 間（4.3）× 3 間（5.7）	1			24.51	1.9 ～ 2.4	1.6 ～ 2.15	④
SB801	Ⅷ－１区	南北	N12° E		1 間 (1.68）× 2 間（2.28）	1		1	3.83	1.68	1.08 ～ 1.2	
SB802	Ⅷ－１区	東西	N76° W	N14° E	1 間 (3.0）× 3 間（7.46）		1	1	19.69	2.6 ～ 2.8	2.0 ～ 2.86	
SB803	Ⅷ－１区	南北	N11° E		2 間（4.0）× 2 間（5.2）以上	1		1	20.8 以上	2.0	2.4 ～ 2.6	
SB804	Ⅷ－１区	東西	N80° W	N10° E	1 間 (4.0）× 2 間（5.4）	1			20.52	3.6 ～ 4.0	2.6 ～ 2.8	
SB805	Ⅷ－１区	東西	N80° W	N10° E	1 間（3.8）× 3 間（9.2）	1		1	34.96	3.7 ～ 4.0	2.6 ～ 3.5	
SB806	Ⅷ－１区	南北	N10° E		2 間（2.9）× 2 間（5.2）	1		1	15.08	1.3 ～ 1.5	1.68 ～ 1.74	
SB807	Ⅷ－１区	南北	N15.5° E		1 間 (2.45）× 2 間（4.4）	1			10.78	2.4 ～ 2.45	2.1 ～ 2.4	
SB808	Ⅷ－１区	南北	N10° E		1 間 (2.65）× 2 間（3.1）	1			8.21	2.5 ～ 2.65	1.35 ～ 1.65	
SB901	Ⅸ－１区	南北	N9.5° E		1 間 (6.4）以上× 5 間（10.5）以上	1			67.2 以上	6.3 ～ 6.4	2.0 ～ 2.1	④
SB902	Ⅸ－１区	南北	N13.5° E		2 間 (3.45）× 2 間 (5.15)	1			17.77	1.45 ～ 2.0	2.5 ～ 2.6	
SB903	Ⅸ－１区	-	N15.5E		2 間 (3.3）× 2 間（3.5）	1			11.55	1.5 ～ 1.8	1.5 ～ 1.8	
SB904	Ⅸ－１区	南北	N36° E		1 間（1.9）以上× 3 間（6.8）	1			19.04	1.7 ～ 2.7	1.9	
合計						40	7	5				

※主軸方位（調整）：東西棟と南北棟の主軸方位を比較するため、東西棟の主軸方位を意図的に 90° 屈曲させた角度
　主軸方位グループ：古代の建物だけを分類

第７表　正箱遺跡掘立柱建物跡一覧

遺構名	主軸方位	主軸方位（調整）	構造・規模				面積（㎡）	時期		佐藤分類
			梁間（m）×桁行（m）	側柱	総柱	廂		Ⅰ期～Ⅵ期		
SB01	N80° W	N10° E	2(4.3) × 2(4.5)	1			19.35			
SB02	N8° E		1(3.7) × 3(5.7)	1			21.09	Ⅳ期	9 世紀	Ⅱ期
SB03	N78° W	N12° E	2(2.3) × 2(3.2)	1			7.36			
SB04	N11° E		2(3.7) × 3(5.3)	1			19.61	Ⅱ期	8 世紀中葉～ 8 世紀末	Ⅰ期
SB05	N78° W	N12° E	2(4.0) × 4(6.3)	1			25.20	Ⅰ期	8 世紀中葉～ 8 世紀末	Ⅰ期
SB06	N80° W	N10° E	2(3.4) × 3(5.9)	1			20.06	Ⅱ期	8 世紀中葉～ 8 世紀末	Ⅰ期
SB07	N11° E		2(3.8) × 4(6.5)	1			24.70	Ⅰ期	8 世紀中葉～ 8 世紀末	Ⅰ期
SB08	N10° E		2(4.0) × 4(5.6)	1			22.40	Ⅱ期	8 世紀中葉～ 8 世紀末	Ⅰ期
SB09	N86° W	N4° E	2(3.8) × 3(4.9) 以上	1			18.62	Ⅳ期	9 世紀	Ⅱ期
SB10	N13° E		2(3.1) × 2(3.6)		1	1	11.16			
SB11	N5° E		2(3.8) × 3(5.2)	1			19.76	Ⅴ期	9 世紀	Ⅱ期
SB12	N85° W	N5° E	2(3.6) × 2(3.7)	1			13.32	Ⅵ期		
SB13	N82° W	N8° E	2(4.2) × 3(5.5)	1			23.10	Ⅳ期	9 世紀	Ⅱ期
SB14	N82° W	N8° E	2(3.9) × 3(5.0)	1			19.50	Ⅵ期		
SB15	N4° E		2(4.0) × 5(8.1)	1			32.40	Ⅳ期	9 世紀	Ⅱ期
SB16	N79° W	N11° E	2(2.9) × 3(5.5)	1			15.95	Ⅰ期	8 世紀中葉～ 8 世紀末	Ⅰ期
SB17	N5° E		2(4.8) × 4(9.3)	1			44.64	Ⅴ期	9 世紀	Ⅱ期
SB18	N6° E		2(4.7) × 3(7.1)	1			33.37	Ⅴ期	9 世紀	Ⅱ期
SB19	N10° E		2(3.8) × 3(4.5)	1			17.10	Ⅳ期	9 世紀	Ⅱ期
SB20	N4° E		2(4.4) × 4(7.6)	1			33.44	Ⅳ期	9 世紀	Ⅱ期
SB21	N78° W	N12° E	2(3.6) × 2(4.3)	1			15.48	Ⅵ期	11 世紀以後	
SB22	N82° W	N8° E	2(4.4) × 4(7.7)	1			33.88	Ⅳ期	9 世紀	Ⅰ期
SB23	N84° W	N6° E	2(4.4) × 3(5.8)	1			25.52	Ⅰ期	8 世紀中葉～ 8 世紀末	Ⅰ期
SB24	N1° E		2(4.5) × 3(6.5)	1			29.25	Ⅴ期	9 世紀	Ⅱ期
SB25	N82° W	N8° E	1(4.7) × 4(7.7)	1			36.19	Ⅱ期	8 世紀中葉～ 8 世紀末	Ⅰ期
SB26	N82° W	N8° E	2(4.2) × 3(6.1)	1			25.62	Ⅵ期	11 世紀以後	
SB27	N4° E		1(3.5) × 2(4.0)	1			14.00	Ⅵ期	11 世紀以後	
SB28	N8° E		2(3.9) × 3(4.3)	1			16.77			Ⅱ期
SB29	N6° E		2(4.0) × 2(4.3)	1			17.20	Ⅵ期		
SB30	N5° E		2(3.9) × 3(4.9)		1	1	19.11	Ⅱ期	8 世紀中葉～ 8 世紀末	Ⅱ期
SB31	N85° W	N5° E	2(3.1) × 2(3.6)		1	1	11.16	Ⅳ期	9 世紀	Ⅱ期
SB32	N89° W	N1° E	2(4.4) × 3(4.9)	1			21.56	Ⅴ期	9 世紀	Ⅱ期
SB33	N2° E		2(4.37) × 3(4.6)	1			17.02	Ⅲ期	8 世紀中葉～ 8 世紀末	Ⅱ期
SB34	N5° E		2(4.38) × 3(4.7)	1			17.86	Ⅱ期	8 世紀中葉～ 8 世紀末	Ⅱ期
SB35	N3° E		2(4.36) × 3(5.4)	1			19.44	Ⅱ期	8 世紀中葉～ 8 世紀末	Ⅱ期
SB36	N88° E	N2° W	2(4.3) × 3(6.2)	1			26.66	Ⅲ期	8 世紀中葉～ 8 世紀末	Ⅱ期
SB37	N0°		2(3.6) × 3(5.3)	1			19.08			Ⅱ期
SB38	N85° W	N5° E	2(3.7) × 3(4.8)	1			17.76	Ⅱ期	8 世紀中葉～ 8 世紀末	
SB39	N85° W	N5° E	1(3.9) × 2(3.0)	1			11.70			
SB40	N88° E	N2° W	1(3.9) × 4(7.6)				29.64			
SB41	N85° E	N5° W	1(4.8) × 3(6.0)				28.80			
SB42	N85° E	N5° W	1(4.1) × 3(5.8)				23.78			
SB43	N9° E		1(3.3) × 2(3.7)				12.21			
SB44	N10° E		2(3.2) × 2(3.9)				12.48			
SB45	N3° E		- × 3(5.9)				-			
SB46	N3° E		- × 3(5.7)				-			
SB47	N8° E		- × 4(7.8)				-			
SB48	N11° E		- × 3(8.5)				-	Ⅵ期	11 世紀以後	
SB49	N3° E		1(2.1) × 4(7.5) 以上	1			15.75	Ⅲ期	8 世紀中葉～ 8 世紀末	Ⅱ期
SB50	N11° E		- × 3(5.3)				-	Ⅰ期	8 世紀中葉～ 8 世紀末	Ⅰ期

SB51	N6° E		- × 3(5.2)				-			Ⅰ期
SB52	N9° E		- × 2(2.8)				-	Ⅰ期	8 世紀中葉～ 8 世紀末	Ⅰ期
SB53	N10° E		- × 4(6.4)				-	Ⅰ期	8 世紀中葉～ 8 世紀末	Ⅰ期
SB54	N12° E		3(3.1) × 2(5.4) 以上	1			16.74	Ⅰ期	8 世紀中葉～ 8 世紀末	Ⅰ期
SB55	N12° E		2(2.3) × 1(2.5) 以上	1			57.50			
SB56	N75° W	N15° E	- × 2(2.6)				-			
SB57	N72° W	N18° E	- × 3(4.3)				-			
合計				39	3	3				

※主軸方位（調整）：東西棟と南北棟の主軸方位を比較するため、東西棟の主軸方位を意図的に 90° 屈曲させた角度

遺　物　観　察　表
遺構名新旧対照表

第８表　兀塚遺跡出土土器観察表（1）

報告番号	調査区	遺構名	層位等	種類	器種	調整		色調		胎土					法量 (cm)				残存率	備考
						外面	内面	外部	内部	石英・長石	赤色粒	角閃石	雲母	その他	口径	器高	底径	その他		
2	Ⅰ区	SD103		弥生土器	甕	ﾖｺﾅﾃﾞ、刻み目	ﾖｺﾅﾃﾞ	10YR7/4 にぶい黄橙	5Y3/1 オリーブ黒	中・並	中・少	-	-	-	-	-	-	-	破片	
3	Ⅱ区	SR201・202	中層	須恵器	蓋	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N5/ 灰	N5/ 灰	-	-	-	-	細・少	-	-	-	-	破片	
4	Ⅱ区	SR201・202	下層Ⅰ	須恵器	蓋	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N6/ 灰	N6/ 灰	-	-	-	-	細・少	(18.8)	-	-	-	1/8	
5	Ⅱ区	SR201・202	中層	須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N8/ 灰白	N8/ 灰白	-	-	-	-	細・少	-	-	-	-	破片	
6	Ⅱ区	SR201・202		須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ、ﾏﾒﾂ、回転ﾍﾗｷﾘ、ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ、ﾏﾒﾂ	N8/ 灰白	N8/ 灰白	-	-	-	-	中・少	-	-	(10.8)	-	3/8	焼成不良
7	Ⅱ区	SR201・202	下層Ⅰ・Ⅱ	須恵器	鉢	ﾏﾒﾂ	ﾏﾒﾂ	N8/ 灰白	N8/ 灰白	-	-	-	-	細・少	(17.4)	-	-	-	1/8	
8	Ⅱ区	SR201・202	中層	土師器	甕	ﾖｺﾅﾃﾞ	ﾖｺﾅﾃﾞ	7.5YR6/2 灰褐	7.5YR8/2 灰白	中・並	中・少	-	-	-	-	-	-	-	破片	
13	Ⅱ区	SR203	中層・下層Ⅰ	須恵器	蓋	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ、回転ﾅﾃﾞ	N5/ 灰	N5/ 灰	-	-	-	-	細・少	(12.6)	-	-	-	1/8	
14	Ⅱ区	SR203	中層	須恵器	蓋	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ	回転ﾅﾃﾞ	N7/ 灰白	N7/ 灰白	-	-	-	-	細・少	-	-	-	2.7	8/8	
15	Ⅱ区	SR203	中層	須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N8/ 灰白	N8/ 灰白	-	-	-	-	細・少	(14.4)	-	-	-	1/8	
16	Ⅱ区	SR203	上層	須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ（ﾏﾒﾂ）	回転ﾅﾃﾞ（ﾏﾒﾂ）	N8/ 灰白	N8/ 灰白						(14.6)	-	-	-	1/8	
17	Ⅱ区	SR203	中層	須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N6/ 灰	N5/ 灰	-	-	-	-	細・少	(15.8)	-	-	-	1/8	
18	Ⅱ区	SR203	最上層	磁器	椀	回転ﾅﾃﾞ後施釉	回転ﾅﾃﾞ後施釉	N8/ 灰白	N8/ 灰白	-	-	-	-	精緻	(13.4)	-	-	-	1/8	
19	Ⅱ区	SR203	最上層	陶器	椀	削り出し高台後施釉	回転ﾅﾃﾞ後施釉	7.5Y8/2 灰白	5Y7/2 灰白	-	-		-	精緻	-	-	(4.6)	-	4/8	
20	Ⅱ区	SR203	中層	土師器	鍋	ﾖｺﾅﾃﾞ	ﾊｹﾒ、ﾅﾃﾞ	5YR5/4 にぶい赤褐	7.5YR5/2 灰褐	中・多	-	-	-	-	-	-	-	-	破片	
26	Ⅲ区	SD301	上層	弥生土器	甕	ﾏﾒﾂ	指ｵｻｴ	2.5Y6/1 黄灰	2.5Y7/2 灰黄	粗・多	中・並	-	-	-	-	-	-	-	破片	
27	Ⅲ区	SD301	上層	弥生土器	甕	ﾏﾒﾂ	指ｵｻｴ後ﾅﾃﾞ	2.5Y7/2 灰黄	10YR7/2 にぶい黄橙	中・多	-	-	-	-	-	-	-	-	破片	
28	Ⅲ区	SR301	下層Ⅱ	弥生土器	壺	ﾖｺﾅﾃﾞ	ﾖｺﾅﾃﾞ	10YR7/2 にぶい黄橙	10YR8/2 灰白	中・並	-	-	-	-	(16)	-	-	-	1/8	
29	Ⅲ区	SR301	下層Ⅱ	弥生土器	高杯	ﾊｹﾒ、剥離	ﾊｹﾒ	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	細・並	-	-	-	-	-	-	(21.8)	-	1/8	
30	Ⅲ区	SR301	下層Ⅱ	弥生土器	ﾐﾆﾁｭｱ甕	指ｵｻｴ後ﾅﾃﾞ	指ｵｻｴ後ﾅﾃﾞ	2.5Y8/1 灰白	2.5Y7/1 灰白	細・少	-	-	-	-	3.9	4.8	1	-	6/8	
31	Ⅲ区	SR301	下層Ⅱ	弥生土器	ﾐﾆﾁｭｱ鉢	ﾅﾃﾞ、指ｵｻｴ	指ｵｻｴ	10YR8/2 灰白	10YR8/1 灰白	中・並	-	-	-	-	(4.8)	-	-	-	3/8	
32	Ⅲ区	SR302	下層Ⅱ	土師器	高杯	ﾍﾗﾐｶﾞｷ	ﾍﾗﾐｶﾞｷ	10YR7/2 にぶい黄橙	10YR8/2 灰白	中・少	-	-	-	-	-	-	-	-	6/8	
33	Ⅲ区	SR301	耕土	土師器	高杯	ﾏﾒﾂ	ﾏﾒﾂ	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	中・多	中・少	-	-	-	-	-	(10.8)	-	2/8	
34	Ⅲ区	SR301	下層Ⅰ	土師器	高杯	ﾏﾒﾂ	ﾖｺﾅﾃﾞ	10YR8/2 灰白	10YR7/2 にぶい黄橙	中・少	-	-	-	-	-	-	-	2.3	7/8	
35	Ⅲ区	SR301	下層Ⅱ	土師器	高杯	ﾏﾒﾂ、ﾖｺﾅﾃﾞ	ﾏﾒﾂ、指ｵｻｴ、ﾅﾃﾞ	2.5Y8/2 灰白	7.5YR8/4 浅黄橙	中・少	-	-	-	-	-	-	10.3	-	5/8	
36	Ⅲ区	SR301	下層Ⅰ	土師器	高杯	ﾏﾒﾂ、指ｵｻｴ、ﾖｺﾅﾃﾞ	ﾖｺﾅﾃﾞ	2.5YR6/6 橙	2.5Y8/2 灰白	中・少	-	-	-	-	-	-	-	2.4	3/8	
37	Ⅲ区	SR301	下層Ⅰ	土師器	高杯	ﾏﾒﾂ	ﾏﾒﾂ	5YR7/4 にぶい橙	7.5YR8/4 浅黄橙	中・並	-	-	-	-	-	-	-	-	3/8	
38	Ⅲ区	SR301	上層・中層Ⅰ	須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ、ﾍﾗｷﾘ後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N8/ 灰白	N8/ 灰白	-	-	-	-	細・少	(10)	2.5	(7.8)	-	1/8	
39	Ⅲ区	SR301	耕土層・上・中・下層	須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ、ﾍﾗｷﾘ、板状圧痕	回転ﾅﾃﾞ	2.5YR5/2 灰赤	N7/ 灰白	-	-	-	-	中・少	(10.6)	3.7	(9.6)	-	2/8	
40	Ⅲ区	SR301	中層Ⅰ	須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N7/ 灰白	N7/ 灰白	-	-	-	-	中・少	-	-	-	-	破片	
41	Ⅲ区	SR301	中層Ⅰ	須恵器	蓋	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	2.5Y7/1 灰白	10YR7/2 にぶい黄橙	-	-	-	-	中・少	-	-	-	-	破片	焼成不良

第９表　兀塚遺跡出土土器観察表（2）

報告番号	調査区	遺構名	層位等	種類	器種	調整		色調		胎土					法量 (cm)				残存率	備考
						外面	内面	外部	内部	石英・長石	赤色粒	角閃石	雲母	その他	口径	器高	底径	その他		
42	Ⅲ区	SR301	中層Ⅰ	須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N4/ 灰	N6/ 灰	-	-	-	-	細・少	-	-	-	-	破片	
43	Ⅲ区	SR301	中層Ⅰ	須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｷﾘ	回転ﾅﾃﾞ	N6/ 灰	N6/ 灰	-	-	-	-	中・少	-	-	(6.4)	-	2/8	内・外面火ﾀﾞｽｷ痕
44	Ⅲ区	SR301	下層Ⅰ	土師器	杯	ﾏﾒﾂ	ﾏﾒﾂ	2.5YR7/1 明赤灰	10R 赤橙	細・並	-	-	-	-	-	-	-	-	破片	内面赤色顔料付着か？
45	Ⅲ区	SR301	中層Ⅰ	須恵器	皿	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N8/ 灰白	N8/ 灰白	-	-	-	-	細・少	(15.45)	1.9	(11.6)	-	1/8	
46	Ⅲ区	SR301	中層Ⅰ	須恵器	皿	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｷﾘ後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	5Y8/1 灰白	5Y8/1 灰白	-	-	-	-	細・少	-	-	(11.4)	-	1/8	
47	Ⅲ区	SR301	中層Ⅰ	須恵器	皿	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｷﾘ後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N6/ 灰	N6/ 灰	-	-	-	-	細・少	(11.8)	1.6	(9)	-	1/8	
48	Ⅲ区	SR301	下層Ⅰ	土師器	椀	ﾏﾒﾂ	ﾏﾒﾂ	2.5Y8/2 灰白	10YR8/2 灰白	中・少	中・少	-	-	-	(16.4)	-	-	-	1/8	
49	Ⅲ区	SR301	中層Ⅰ	黒色土器	椀	回転ﾅﾃﾞ（ﾏﾒﾂ）	回転ﾅﾃﾞ（ﾏﾒﾂ）	2.5Y8/3 淡黄	N4/ 灰	中・少	-	-	-	-	-	-	(5.6)	-	1/8	黒色土器Ａ類
50	Ⅲ区	SR301	中層Ⅰ	黒色土器	椀	ﾏﾒﾂ	回転ﾅﾃﾞ後ﾍﾗﾐｶﾞｷ	2.5Y8/3 淡黄	N3/ 暗灰	中・少	中・少	-	-	-	-	-	-	-	1/8	黒色土器Ａ類
51	Ⅲ区	SR301	中層Ⅰ	瓦器	椀	ﾖｺﾅﾃﾞ、指ｵｻｴ	ﾍﾗﾐｶﾞｷ	N4/ 灰	N4/ 灰	-	-	-	-	中・少	-	-	5	-	5/8	
52	Ⅲ区	SR301	中層Ⅰ	須恵器	壺	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	2.5Y6/2 灰黄	2.5Y6/2 灰黄	-	-	-	-	中・多	(14.6)	-	-	-	1/8	内・外面自然釉付着
57	Ⅲ区	SR302	下層Ⅳ	縄文土器	浅鉢	ﾏﾒﾂ	ﾍﾗﾐｶﾞｷ	10YR6/2 灰黄褐	10YR7/2 にぶい黄橙	中・多	中・少	-	-	-	(21.3)	-	-	-	1/8	穿孔２残
58	Ⅲ区	SR302	下層Ⅳ	弥生土器	壺	ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾊｹﾒ	ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾏﾒﾂ	10YR5/2 灰黄褐	10YR5/2 灰黄褐	中・多	-	-	-	-	(8.7)	-	-	-	1/8	
59	Ⅲ区	SR302	下層Ⅳ	弥生土器	壺	刻み目（ﾏﾒﾂ）、ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾏﾒﾂ	ﾏﾒﾂ	10YR8/4 浅黄橙	10YR8/4 浅黄橙	中・少	-	-	-	-	(20)	-	-	-	1/8	
60	Ⅲ区	SR302	下層Ⅳ	弥生土器	甕	ﾏﾒﾂ	ﾏﾒﾂ、指ｵｻｴ	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR8/3 浅黄橙	中・少	-	-	-	-	-	-	-	-	破片	
61	Ⅲ区	SR302	下層Ⅳ	弥生土器	甕	指ｵｻｴ後ﾖｺﾅﾃﾞ	指ｵｻｴ後ﾖｺﾅﾃﾞ	10YR4/2 灰黄褐	10YR4/2 灰黄褐	中・並	-	-	-	-	-	-	-	-	破片	
62	Ⅲ区	SR302	下層Ⅳ	弥生土器	甕	ﾏﾒﾂ	指ｵｻｴ	2.5Y7/3 浅黄	2.5Y4/1 黄灰	中・多	-	-	-	-	-	-	5.9	-	6/8	
63	Ⅲ区	SR302	下層Ⅴ	弥生土器	甕	ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾅﾃﾞ	指ｵｻｴ	2.5Y4/1 黄灰	10YR6/4 にぶい黄橙	-	-	-	-	-	-	-	4.8	-	5/8	
64	Ⅲ区	SR302	下層Ⅱ	弥生土器	甕	指ｵｻｴ、ﾅﾃﾞ	ﾏﾒﾂ	2.5Y7/3 浅黄	2.5Y7/3 浅黄	中・並	-	-	-	-	-	-	4.7	-	8/8	
65	Ⅲ区	SR302	中層Ⅲ	弥生土器	甕	ﾏﾒﾂ	ﾏﾒﾂ	10YR6/2 灰黄褐	7.5YR6/4 にぶい橙	中・多	-	-	-	-	-	-	4.4	-	8/8	
66	Ⅲ区	SR302	下層Ⅳ	弥生土器	甕	ﾏﾒﾂ	-	10YR7/2 にぶい黄橙	-	中・多	-	-	-	-	-	-	5.1	-	7/8	
67	Ⅲ区	SR302	下層Ⅳ	土師器	高杯	ﾏﾒﾂ	ﾅﾃﾞ、指ｵｻｴ、ﾖｺﾅﾃﾞ	10YR8/4 浅黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	中・並	-	-	-	-	-	-	19	-	7/8	
68	Ⅲ区	SR302	下層Ⅳ	弥生土器	紡錘車	ﾍﾗﾐｶﾞｷ	ﾍﾗﾐｶﾞｷ	10YR6/2 灰黄褐	10YR6/2 灰黄褐	中・並	-	-	-	-	高さ 4	幅 4.4	厚さ 0.5	-	6/8	甕転用
69	Ⅲ区	SR302	中層Ⅱ	弥生土器	紡錘車未製品	ﾊｹﾒ	ﾏﾒﾂ	2.5Y7/2 灰黄	5YR6/6 橙	中・並	中・並	-	-	-	高さ 4	幅 4	厚さ 0.6	-	破片	甕転用
70	Ⅲ区	SR302	中層Ⅱ	須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N5/ 灰	N5/ 灰	-	-	-	-	細・少	-	-	-	-	破片	
71	Ⅲ区	SR302	下層Ⅱ（南壁９層）	須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ	回転ﾅﾃﾞ	7.5Y6/1 灰	N7/ 灰白	-	-	-	-	細・少	-	-	-	-	破片	
72	Ⅲ区	SR302	中層Ⅱ	須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｷﾘ後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N8/ 灰白	N8/ 灰白	-	-	-	-	細・少	-	-	9.4	-	4/8	内・外面火ﾀﾞｽｷ痕
73	Ⅲ区	SR302	中層Ⅱ	須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｷﾘ後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	5Y7/1 灰白	5Y7/1 灰白	-	-	-	-	細・少	-	-	(7)	-	1/8	
74	Ⅲ区	SR302	中層Ⅲ	須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｷﾘ	回転ﾅﾃﾞ	N8/ 灰白	N8/ 灰白	-	-	-	-	細・少	(13.6)	1.8	(10)	-	2/8	内・外面火ﾀﾞｽｷ痕

第 10 表　兀塚遺跡出土土器観察表（3）

報告番号	調査区	遺構名	層位等	種類	器種	調整		色調		胎土					法量 (cm)				残存率	備考
						外面	内面	外部	内部	石英・長石	赤色粒	角閃石	雲母	その他	口径	器高	底径	その他		
75	Ⅲ区	SR302	中層	須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｷﾘ後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	7.5Y7/1 灰白	7.5Y7/1 灰白	-	-	-	-	細・少	(13.8)	2	(10.6)	-	1/8	内・外面火ﾀﾞｽｷ痕
76	Ⅲ区	SR302	中層Ⅲ	須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N6/ 灰	N6/ 灰	-	-	-	-	中・少	-	-	-	-	破片	内・外面火ﾀﾞｽｷ痕
77	Ⅲ区	SR302	中層Ⅲ	須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N7/ 灰白	N7/ 灰白	-	-	-	-	細・少	-	-	-	-	破片	
78	Ⅲ区	SR302	耕土	須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N8/ 灰白	N8/ 灰白	-	-	-	-	細・少	-	-	-	-	破片	
79	Ⅲ区	SR302	中層Ⅱ	須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N7/ 灰白	N6/ 灰	-	-	-	-	細・少	-	-	-	-	破片	内・外面火ﾀﾞｽｷ痕
80	Ⅲ区	SR302	中層	須恵器	杯	ﾖｺﾅﾃﾞ	ﾖｺﾅﾃﾞ	N4/ 灰	N4/ 灰	-	-	-	-	細・少	-	-	-	-	破片	焼成不良
81	Ⅲ区	SR302	中層Ⅱ	須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N6/ 灰	N6/ 灰	-	-	-	-	細・少	(13.8)	-	-	-	1/8	内面火ﾀﾞｽｷ痕
82	Ⅲ区	SR302	中層Ⅱ	須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N8/ 灰白	N8/ 灰白	-	-	-	-	細・少	(13.4)	-	-	-	1/8	内・外面火ﾀﾞｽｷ痕
83	Ⅲ区	SR302	中層	須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N7/ 灰白	N7/ 灰白	-	-	-	-	細・少	(13.9)	-	-	-	1/8	
84	Ⅲ区	SR302	中層Ⅱ	須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	7.5Y6/1 灰	N7/ 灰白	-	-	-	-	中・少	-	-	(8)	-	1/8	
85	Ⅲ区	SR302	中層Ⅱ	須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｷﾘ	回転ﾅﾃﾞ	N7/ 灰白	N7/ 灰白	-	-	-	-	中・少	-	-	(7.9)	-	1/8	
86	Ⅲ区	SR302	中層Ⅲ	須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｹﾞｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N7/ 灰白	N7/ 灰白	-	-	-	-	中・少	-	-	(7.6)	-	2/8	内面火ﾀﾞｽｷ痕
87	Ⅲ区	SR302	中層Ⅱ	須恵器	杯	ﾍﾗｷﾘ後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N7/ 灰白	N7/ 灰白	-	-	-	-	中・少	-	-	(9.6)	-	2/8	
88	Ⅲ区	SR302	中層Ⅲ	土師器	椀	ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾏﾒﾂ	ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾏﾒﾂ	7.5YR8/2 灰白	7.5YR6/2 灰褐	中・少	-	-	-	-	-	-	-	-	破片	
89	Ⅲ区	SR302	中層Ⅱ	黒色土器	椀	ﾏﾒﾂ	ﾏﾒﾂ	2.5Y8/2 灰白	2.5Y4/1 黄灰	中・少	細・少	-	-	-	-	-	(6)	-	2/8	黒色土器Ａ類
90	Ⅲ区	SR302	中層Ⅱ	黒色土器	椀	ﾏﾒﾂ	回転ﾅﾃﾞ後ﾍﾗﾐｶﾞｷ	5YR8/1 灰白	7.5Y4/1 灰	中・少	-	-	細・少	-	-	-	(5.6)	-	1/8	黒色土器Ａ類
91	Ⅲ区	SR302	中層Ⅲ	須恵器	壺	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N8/ 灰白	N8/ 灰白	-	-	-	-	中・少	(6)	-	-	-	2/8	
92	Ⅲ区	SR302	中層Ⅰ	須恵器	壺	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ、指ﾅﾃﾞ	N6/ 灰	N8/ 灰白	-	-	-	-	中・少	-	-	(7.8)	-	3/8	
102	Ⅳ区	SD401		須恵器	蓋	回転ﾍﾗｹﾞｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ、回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N5/ 灰	N7/ 灰白	-	-	-	-	中・少	(20)	-	-	-	1/8	
103	Ⅳ区	SD401		須恵器	蓋	回転ﾅﾃﾞ（ﾏﾒﾂ）	回転ﾅﾃﾞ（ﾏﾒﾂ）	2.5Y6/1 黄灰	N6/ 灰	-	-	-	-	中・少	(22.3)	-	-	-	1/8	焼成不良
104	Ⅳ区	SD401		須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ、ﾍﾗｷﾘ後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N5/ 灰	N5/ 灰	-	-	-	-	中・少	(13.4)	2.2	(10.1)	-	1/8	
105	Ⅳ区	SD401		須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｹﾞｽﾞﾘ	回転ﾅﾃﾞ	N7/ 灰白	N7/ 灰白	-	-	-	-	中・微	(14.4)	-	-	-	1/8	
106	Ⅳ区	SD401		須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ、ﾍﾗｷﾘ後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	5B4/1 暗青灰	5PB5/1 青灰	-	-	-	-	中・少	(9.6)	3.6	(6.2)	-	2/8	
107	Ⅳ区	SD401		須恵器	甕	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N5/ 灰	5B4/1 暗青灰	-	-	-	-	中・少	(17.6)	-	-	-	2/8	
108	Ⅳ区	SD401		須恵器	壺	回転ﾍﾗｹﾞｽﾞﾘ、ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	N7/ 灰白	N8/ 灰白	-	-	-	-	細・微	-	-	(9.2)	-	3/8	重ね焼痕、内面自然釉・粘土付着
109	Ⅳ区	SD402		弥生土器	甕	ﾏﾒﾂ	ﾏﾒﾂ	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙	中・並	-	-	-	-	(13.8)	-	-	-	1/8	
110	Ⅳ区	SD403・404	上・下層	須恵器	皿	回転ﾅﾃﾞ、ﾍﾗｷﾘ後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N4/ 灰	N6/ 灰	-	-	-	-	中・多	(13.6)	1.8	(10.2)	-	1/8	
111	Ⅳ区	SD403	下層	須恵器	皿	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N8/ 灰白	5Y7/1 灰白	-	-	-	-	中・微	(15.4)	2	(12.6)	-	1/8	
112	Ⅳ区	SD403	下層	須恵器	皿	回転ﾅﾃﾞ、ﾍﾗｷﾘ後板ﾅﾃﾞ、ﾍﾗｹｽﾞﾘ	回転ﾅﾃﾞ、ﾅﾃﾞ	5Y7/1 灰白	7.5Y7/1 灰白	-	-	-	-	中・少	(18.2)	2.1	(14.8)	-	2/8	
113	Ⅳ区	SD403	上・下層	須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ、ﾍﾗｷﾘ後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ、仕上ﾅﾃﾞ	7.5Y5/1 灰	7.5Y7/1 灰白	-	-	-	-	細・少	-	-	(9.8)	-	1/8	
114	Ⅳ区	SD403	下層	須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ、ﾍﾗｷﾘ後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ、仕上ﾅﾃﾞ	N8/ 灰白	7.5Y6/1 灰	-	-	-	-	細・少	-	-	(11.4)	-	2/8	

第 11 表　兀塚遺跡出土土器観察表（4）

報告番号	調査区	遺構名	層位等	種類	器種	調整		色調		胎土					法量 (cm)				残存率	備考
						外面	内面	外部	内部	石英・長石	赤色粒	角閃石	雲母	その他	口径	器高	底径	その他		
115	Ⅳ区	SD403	下層	須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ、ﾍﾗｷﾘ後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ、仕上ﾅﾃﾞ	5PB7/1 明青灰	5PB7/1 明青灰	-	-	-	-	中・少	-	-	12	-	4/8	
116	Ⅳ区	SD403	下層	土師器	甕	ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾊｹﾒ	ﾊｹﾒ、ﾏﾒﾂ、板ﾅﾃﾞ	2.5Y6/2 灰黄	10YR7/4 にぶい黄橙	中・並	細・少	-	-	-	(26)	-	-	-	1/8	
117	Ⅳ区	SD403	下層	土師器	甕	ﾅﾃﾞ、ﾏﾒﾂ	ﾏﾒﾂ	2.5Y8/3 淡黄	10YR7/6 明黄褐	中・並	-	-	-	-	-	-	-	-	破片	
119	Ⅳ区	SD404	上層	須恵器	蓋	ﾏﾒﾂ	ﾏﾒﾂ	5Y8/1 灰白	2.5Y8/2 灰白	-	-	-	-	中・少	-	-	-	-	破片	焼成不良
120	Ⅳ区	SD404	上層	須恵器	蓋	回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ、回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N6/ 灰	N6/ 灰	-	-	-	-	細・少	(13.6)	-	-	-	1/8	
121	Ⅳ区	SD404		須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	2.5Y8/1 灰白	2.5Y8/1 灰白	-	-	-	-	細・微	-	-	-	-	破片	焼成不良
122	Ⅳ区	SD404	下層	須恵器	杯	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	N5/ 灰	N6/ 灰	-	-	-	-	細・少	-	-	(10.8)	-	1/8	
123	Ⅳ区	SD404	下層	土師器	甕	ﾏﾒﾂ	ﾏﾒﾂ	2.5Y8/4 淡黄	2.5Y8/4 淡黄	中・並	-	-	-	-	-	-	-	-	破片	
124	Ⅳ区	SD404	下層	土師器	甕	ﾏﾒﾂ	ﾏﾒﾂ	7.5YR6/6 橙	7.5YR7/4 にぶい橙	中・並	-	-	-	-	-	-	-	-	破片	
127	Ⅳ区	SD405		磁器	皿	削り出し高台後施釉	回転ﾅﾃﾞ後施釉	5B 明青灰 7/1、透明釉	N8/ 灰白	-	-	-	-	緻密	-	-	(8.2)	-	1/8	
128	Ⅳ区	SD405		陶器	椀	削り出し高台後施釉	回転ﾅﾃﾞ後施釉	10YR8/2 灰白	5YR6/4 にぶい橙	-	-	-	-	緻密	-	-	(4.8)	-	3/8	
129	Ⅳ区	SD405		陶器	椀	削り出し高台後施釉	回転ﾅﾃﾞ後施釉	2.5GY6/1 オリーブ灰	5Y7/1 灰白	-	-	-	-	緻密	-	-	(4.2)	-	1/8	
130	Ⅳ区	SD405		陶器	椀	回転ﾅﾃﾞ後施釉	回転ﾅﾃﾞ後施釉	2GY 灰白、2GY 灰	N7/ 灰白	-	-	-	-	緻密	-	-	-	-	破片	
131	Ⅳ区	SD405		瓦質土器	焙烙	回転ﾅﾃﾞ、指ｵｻｴ	回転ﾅﾃﾞ	10YR5/2 灰黄褐	10YR5/1 褐灰	細・少	-	-	-	-	(34.4)	-	-	-	1/8	
133	Ⅳ区	SR401	最下層 (南壁 28 層)	弥生土器	壺	ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾏﾒﾂ	指ﾅﾃﾞ	2.5Y6/2 灰黄	10YR5/1 褐灰	中・多	-	-	-	-	(13)	-	-	-	1/8	
134	Ⅳ区	SR401	最上層 (南壁 13 層)	弥生土器	壺	剥離	剥離	10YR8/8 黄橙	10YR8/2 灰白	中・並	中・並	-	-	-	-	-	-	-	破片	
135	Ⅳ区	SR401	最下層 (南壁 28 層)	弥生土器	壺	ﾍﾗﾐｶﾞｷ、指ﾅﾃﾞ	ﾏﾒﾂ、指ｵｻｴ	2.5Y8/3 淡黄	2.5Y5/1 黄灰	中・並	-	-	-	-	-	-	(8.8)	-	1/8	
136	Ⅳ区	SR401	下層 (北壁 15 層)	弥生土器	甕	ﾏﾒﾂ	ﾏﾒﾂ	10YR7/1 灰白	10YR7/3 にぶい黄橙	中・少	-	-	-	-	(27.2)	-	-	-	3/8	
137	Ⅳ区	SR401	最下層 (南壁 28 層)	弥生土器	甕	ﾍﾗﾐｶﾞｷ、ﾅﾃﾞ	板ﾅﾃﾞ	2.5Y7/1 灰白	2.5Y8/2 灰白	中・並	-	-	-	-	-	-	(5.8)	-	8/8	
138	Ⅳ区	SR401	下層 (南壁 22･29 ﾗﾐﾅ)	弥生土器	鉢	ﾅﾃﾞ、ﾏﾒﾂ	ﾍﾗﾐｶﾞｷ	10YR7/2 にぶい黄橙	10YR8/3 浅黄橙	細・少	中・少	-	-	-	(9.8)	-	-	-	1/8	
139	Ⅳ区	SR401	下層 (南壁 22･29 ﾗﾐﾅ)	須恵器	蓋	回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ、回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N5/ 灰	N4/ 灰	-	-	-	-	中・少	(12)	-	-	-	1/8	
140	Ⅳ区	SR401	最下層 (南壁 28 層)	須恵器	蓋	回転ﾅﾃﾞ、ﾍﾗｷﾘ後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N7/ 灰白	N7/ 灰白	-	-	-	-	中・少	10.8	4	5.2	-	4/8	
141	Ⅳ区	SR401	上・中層 (南壁 14･18 層)	須恵器	蓋	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ	回転ﾅﾃﾞ	N8/ 灰白	N8/ 灰白	-	-	-	-	中・少	11.6	4.3	6.5	-	6/8	
142	Ⅳ区	SR401	下層 (南壁 22 層)	須恵器	蓋	回転ﾅﾃﾞ、ﾍﾗｷﾘ後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N6/ 灰	N7/ 灰白	-	-	-	-	中・少	(13.2)	4	6.8	-	2/8	
143	Ⅳ区	SR401	下・最下層 (南壁 22・28 層)	須恵器	蓋	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｷﾘ後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾅﾃﾞ後仕上げﾅﾃﾞ	N7/ 灰白	N7/ 灰白	-	-	-	-	細・少	12.2	5	7.1	-	5/8	
144	Ⅳ区	SR401	下層 (南壁 22･29 ﾗﾐﾅ)	須恵器	蓋	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ後回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	5Y6/1 灰	5Y7/1 灰白	-	-	-	-	中・少	(12.6)	-	-	-	2/8	
145	Ⅳ区	SR401	上・下層 (南壁 18･22 層)	須恵器	蓋	回転ﾅﾃﾞ、ﾍﾗｹｽﾞﾘ	回転ﾅﾃﾞ	10YR6/1 褐灰	10YR6/1 褐灰	-	-	-	-	中・少	12	4.2	6.2	-	6/8	

第 12 表　兀塚遺跡出土土器観察表（5）

報告番号	調査区	遺構名	層位等	種類	器種	調整		色調		胎土					法量 (cm)				残存率	備考
						外面	内面	外部	内部	石英・長石	赤色粒	角閃石	雲母	その他	口径	器高	底径	その他		
146	Ⅳ区	SR401	上・中・下層（南壁 18・20・22 層）	須恵器	蓋	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ	回転ﾅﾃﾞ	N4/ 灰	N4/ 灰	-	-	-	-	細・少	(9)	-	-	-	3/8	
147	Ⅳ区	SR401	上層（南壁 18 層）	須恵器	蓋	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N5/ 灰	N5/ 灰	-	-	-	-	中・少	(10.8)	-	-	-	2/8	
148	Ⅳ区	SR401	最下層（南壁 28 層）	須恵器	蓋	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N7/ 灰白	N7/ 灰白	-	-	-	-	中・微	(9.2)	-	-	-	1/8	
149	Ⅳ区	SR401	最下層（南壁 28 層）	須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ、ﾍﾗｷﾘ後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ、仕上げﾅﾃﾞ	N6/ 灰	N5/ 灰	-	-	-	-	中・少	10.4	-	-	-	4/8	
150	Ⅳ区	SR401	上・中層（南壁 18･20 層）	須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ	回転ﾅﾃﾞ	N7/ 灰白	N7/ 灰白	-	-	-	-	中・少	(12)	3.5	(3.8)	-	3/8	
151	Ⅳ区	SR401	最下層（南壁 28 層）	須恵器	杯	ﾍﾗｷﾘ、回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ、回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ、仕上げﾅﾃﾞ	5B6/1 青灰	5B6/1 青灰	-	-	-	-	細・多	12.6	4.7	8	-	5/8	
152	Ⅳ区	SR401	最上・上層（南壁 13・18 層）	須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	5Y8/1 灰白	5Y8/1 灰白	-	-	-	-	細・少	(10.8)	-	-	-	1/8	
153	Ⅳ区	SR401	中層（南壁 20 層）	須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N6/ 灰	N5/ 灰	-	-	-	-	中・少	-	-	-	-	破片	
154	Ⅳ区	SR401	上層（南壁 18 層）	須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N8/ 灰白	N8/ 灰白	-	-	-	-	細・微	-	-	-	-	破片	自然釉付着
155	Ⅳ区	SR401	上層（南壁 18 層）	須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	2.5Y7/1 灰白	N6/ 灰	-	-	-	-	細・少	8.4	-	-	-	4/8	
156	Ⅳ区	SR401	最上層（南壁 16 層）	須恵器	蓋	回転ﾅﾃﾞ、ﾍﾗｷﾘ後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	5B5/1 青灰	5B6/1 青灰	-	-	-	-	中・少	(13.4)	-	-	-	1/8	
157	Ⅳ区	SR401	最上層（南壁 13 層）	須恵器	蓋	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ	回転ﾅﾃﾞ	N7/ 灰白	N7/ 灰白	-	-	-	-	無	(14.2)	1.5	11.4	-	1/8	
158	Ⅳ区	SR401	最上層（南壁 17 層）	須恵器	蓋	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ	回転ﾅﾃﾞ、ﾅﾃﾞ	N4/ 灰	5B5/1 青灰	-	-	-	-	細・少	(15.8)	-	-	-	2/8	
159	Ⅳ区	SR401	最上層（南壁 17 層）	須恵器	蓋	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｷﾘ後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾅﾃﾞ後仕上げﾅﾃﾞ	N7/ 灰白	N7/ 灰白	-	-	-	-	中・少	(15.2)	1.9	-	-	3/8	
160	Ⅳ区	SR401	最上層（南壁 16 層）	須恵器	蓋	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	10Y6/1 灰	N6/ 灰	-	-	-	-	中・少	(17.2)	-	-	-	1/8	
161	Ⅳ区	SR401	最上層（南壁 17 層）	須恵器	蓋	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾅﾃﾞ後仕上げﾅﾃﾞ	N6/ 灰	N6/ 灰	-	-	-	-	細・少	(17.6)	-	-	-	1/8	
162	Ⅳ区	SR401	最上層（南壁 17 層）	須恵器	蓋	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ後回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ、ﾅﾃﾞ	N7/ 灰白	N8/ 灰白	-	-	-	-	中・少	(18.2)	-	-	-	1/8	
163	Ⅳ区	SR401	最上層（南壁 17 層）	須恵器	蓋	ﾍﾗｷﾘ後ﾅﾃﾞ、回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ、仕上げﾅﾃﾞ	7.5Y5/1 灰	7.5Y4/1 灰	-	-	-	-	中・少	(18.8)	-	-	-	1/8	
164	Ⅳ区	SR401	最上層（南壁 17 層）	須恵器	蓋	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ	回転ﾅﾃﾞ	N5/ 灰	N7/ 灰白	-	-	-	-	細・少	(19.6)	-	-	-	1/8	
165	Ⅳ区	SR401	最上層（北壁 18 層）	須恵器	蓋	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ	回転ﾅﾃﾞ	N5/ 灰	N5/ 灰	-	-	-	-	細・多	(20.6)	-	-	-	2/8	
166	Ⅳ区	SR401	上層（南壁 21 層）	須恵器	蓋	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	5B3/1 暗青灰	5B4/1 暗青灰	-	-	-	-	細・微	(24.6)	-	-	-	1/8	
167	Ⅳ区	SR401	最上層（南壁 17 層）	須恵器	蓋	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ	回転ﾅﾃﾞ	N7/ 灰白	2.5Y8/1 灰白	-	-	-	-	中・少	(26.4)	1.7	-	-	1/8	自然釉付着
168	Ⅳ区	SR401	中層（南壁 20 層）	須恵器	蓋	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N5/ 灰	N5/ 灰	-	-	-	-	細・少	-	-	-	-	破片	焼成不良
169	Ⅳ区	SR401	最上層（南壁 17 層）	須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ、ﾅﾃﾞ	N6/ 灰	N5/ 灰	-	-	-	-	細・少	-	-	(12.2)	-	1/8	

第 13 表　兀塚遺跡出土土器観察表（6）

報告番号	調査区	遺構名	層位等	種類	器種	調整		色調		胎土					法量 (cm)				残存率	備考
						外面	内面	外部	内部	石英・長石	赤色粒	角閃石	雲母	その他	口径	器高	底径	その他		
170	Ⅳ区	SR401	最上層 (南壁 17 層)	須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｷﾘ	ﾏﾒﾂ	5Y7/1 灰白	5Y8/1 灰白	-	-	-	-	細・多	-	-	(14.8)	-	1/8	焼成不良
171	Ⅳ区	SR401	最上・上層 (南壁 17・21 層)	須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｷﾘ後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾅﾃﾞ後仕上げﾅﾃﾞ	N5/ 灰	N5/ 灰	-	-	-	-	細・少	(11.8)	4.2	(9)	-	2/8	
172	Ⅳ区	SR401	上層 (南壁 21 層)	須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ、ﾍﾗｷﾘ後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ、仕上げﾅﾃﾞ	N6/ 灰	N6/ 灰	-	-	-	-	細・微	(10)	-	-	-	2/8	
173	Ⅳ区	SR401	最上層 (南壁 17 層)	須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ、ﾍﾗｷﾘ後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ後仕上げﾅﾃﾞ	N7/ 灰白	N7/ 灰白	-	-	-	-	中・少	-	-	(9.4)	-	1/8	墨書土器 [中]
174	Ⅳ区	SR401	最上層 (北壁 18 層)	須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ、ﾍﾗｷﾘ後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N7/ 灰白	N6/ 灰	-	-	-	-	細・微	-	-	(10)	-	2/8	
175	Ⅳ区	SR401	上層 (南壁 21 層)	須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｷﾘ後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	10R5/1 赤灰	N4/ 灰	-	-	-	-	細・微	(8.8)	-	-	-	1/8	焼成不良
176	Ⅳ区	SR401	最上層 (南壁 13 層)	須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ、ﾍﾗｷﾘ後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N6/ 灰	N7/ 灰白	-	-	-	-	細・微	(12.6)	3.1	(9.4)	-	2/8	
177	Ⅳ区	SR401	最上層 (南壁 16 層)	須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ、ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	7.5Y7/1 灰白	7.5Y7/1 灰白	-	-	-	-	細・微	(13.2)	3.5	(9)	-	1/8	
178	Ⅳ区	SR401	最上層 (南壁 17 層)	須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾅﾃﾞ後仕上げﾅﾃﾞ	7.5Y5/1 灰	N7/ 灰白	-	-	-	-	中・少	(14.2)	3.5	(11.4)	-	2/8	
179	Ⅳ区	SR401	最上層 (南壁 16 層)	須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｷﾘ	回転ﾅﾃﾞ	N6/ 灰	N6/ 灰	-	-	-	-	細・少	(13.8)	3	(9)	-	2/8	
180	Ⅳ区	SR401	最上層 (南壁 17 層)	須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ、ﾍﾗｷﾘ後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ、仕上げﾅﾃﾞ	N4/ 灰	N5/ 灰	-	-	-	-	中・多	(16.2)	3.3	(12.7)	-	3/8	
181	Ⅳ区	SR401	下層 (北壁 15 層)	須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N5/ 灰	N5/ 灰	-	-	-	-	中・少	(17)	-	-	-	1/8	
182	Ⅳ区	SR401	最上層 (南壁 16 層)	須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	7.5Y7/1 灰白	N7/ 灰白	-	-	-	-	細・少	(11.5)	-	-	-	1/8	内・外面火ﾀﾞｽｷ痕
183	Ⅳ区	SR401	上層 (南壁 21 層)	須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N8/ 灰白	N8/ 灰白	-	-	-	-	細・少	-	-	-	-	1/8	
184	Ⅳ区	SR401	上層 (南壁 21 層)	須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	7.5Y6/1 灰	5Y6/1 灰	-	-	-	-	細・少	(13.9)	-	-	-	2/8	
185	Ⅳ区	SR401	最上層 (南壁 17 層)	須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ、ﾏﾒﾂ	回転ﾅﾃﾞ、ﾏﾒﾂ	N8/ 灰白	N8/ 灰白	-	-	-	-	細・少	-	-	-	-	破片	
186	Ⅳ区	SR401	最上層 (南壁 17 層)	須恵器	皿	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N8/ 灰白	N8/ 灰白	-	-	-	-	中・少	(16.6)	-	-	-	1/8	
187	Ⅳ区	SR401	最上層 (南壁 13 層)	須恵器	皿	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｷﾘ後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾅﾃﾞ後仕上げﾅﾃﾞ	N7/ 灰白	N8/ 灰白	-	-	-	-	細・少	(15.6)	2.2	(11.3)	-	1/8	墨書土器
188	Ⅳ区	SR401	最下層 (南壁 28 層)	須恵器	高杯	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ、回転ﾅﾃﾞ	仕上げﾅﾃﾞ、回転ﾅﾃﾞ	N8/ 灰白	N8/ 灰白	-	-	-	-	中・少	12.1	6.8	9	-	5/8	
189	Ⅳ区	SR401	下層 (南壁 22 層)	須恵器	高杯	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N8/ 灰白	N6/ 灰	-	-	-	-	中・少	-	-	(9)	-	2/8	焼成不良
190	Ⅳ区	SR401	最上層 (南壁 17 層)	須恵器	高杯	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N7/ 灰白	5Y6/1 灰	-	-	-	-	中・多	(11.8)	-	-	-	1/8	焼成不良
191	Ⅳ区	SR401	下・最下層 (南壁 22・28 層)	須恵器	高杯	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ	回転ﾅﾃﾞ	N6/ 灰	N5/ 灰	-	-	-	-	細・微	-	-	-	-	破片	全体に歪み有
192	Ⅳ区	SR401	最下層 (南壁 28 層)	須恵器	鉢	回転ﾅﾃﾞ、ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ	回転ﾅﾃﾞ、仕上げﾅﾃﾞ	N4/ 灰	N5/ 灰	-	-	-	-	中・少	(15)	-	-	-	2/8	
193	Ⅳ区	SR401	下・最下層 (南壁 22・28 層)	須恵器	鉢	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾅﾃﾞ後仕上げﾅﾃﾞ	N7/ 灰白	N7/ 灰白	-	-	-	-	中・少	(18.4)	7.6	(14.8)	-	1/8	

第 14 表　兀塚遺跡出土土器観察表（7）

報告番号	調査区	遺構名	層位等	種類	器種	調整		色調		胎土					法量 (cm)				残存率	備考
						外面	内面	外部	内部	石英・長石	赤色粒	角閃石	雲母	その他	口径	器高	底径	その他		
194	Ⅳ区	SR401	上層 (南壁 21 層)	土師器	小型平底鉢	ﾅﾃﾞ、ﾀﾀｷ後ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ、ﾊｹﾒ、ﾅﾃﾞ	10YR8/3 浅黄橙	5YR6/6 橙	中・並	-	-	-	-	(12.6)	-	-	-	2/8	韓式系
195	Ⅳ区	SR401	上層 (南壁 21 層)	須恵器	甕	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N8/ 灰白	N7/ 灰白	-	-	-	-	中・少	(17)	-	-	-	1/8	
196	Ⅳ区	SR401	最上層 (南壁 13 層)	須恵器	甕	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N4/ 灰	N5/ 灰	-	-	-	-	細・少	-	-	-	-	破片	
197	Ⅳ区	SR401	上・下・最下層 (南壁 18・22・28 層)	須恵器	甕	回転ﾅﾃﾞ、ﾀﾀｷ後ｶｷ目	回転ﾅﾃﾞ、同心円	N7/ 灰白	N7/ 灰白					中・少	(18.7)	-	-	-	1/8	
198	Ⅳ区	SR401	最下層 (南壁 28 層)	須恵器	壺	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	5Y8/1 灰白	5Y6/1 灰	-	-	-	-	細・微	(15)	-	-	-	1/8	ﾍﾗ記号
199	Ⅳ区	SR401	上層 (南壁 21 層)	土師器	甕	ﾏﾒﾂ	ﾏﾒﾂ	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/2 にぶい黄橙	中・並	-	-	-	-	(23)	-	-	-	1/8	
200	Ⅳ区	SR401	最上層 (南壁 13 層)	土師器	甕	ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾏﾒﾂ	ﾖｺﾅﾃﾞ	2.5Y8/4 淡黄	10YR7/6 明黄褐	中・並	-	-	-	-	(14.2)	-	-	-	1/8	
201	Ⅳ区	SR401	上層 (南壁 21 層)	土師器	甕	ﾏﾒﾂ、ﾖｺﾅﾃﾞ	ﾏﾒﾂ	2.5Y7/2 灰黄	5YR6/6 橙	中・並	-	-	-	-	-	-	-	-	破片	
202	Ⅳ区	SR401	下層 (北壁 15 層)	土師器	甕	ﾅﾃﾞ	ﾏﾒﾂ	10YR8/4 浅黄橙	2.5Y8/2 灰白	中・並	-	-	-	-	-	-	-	-	破片	
203	Ⅳ区	SR401	最上層 (南壁 17 層)	土師器	甕	ﾅﾃﾞ、ﾊｹﾒ	ﾏﾒﾂ、ﾊｹﾒ	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR8/6 浅黄橙	中・多	中・並	-	-	-	-	-	-	-	破片	
204	Ⅳ区	SR401	最上層 (南壁 17 層)	土師器	甕	ﾊｹﾒ、指ｵｻｴ後ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	10YR6/3 にぶい黄橙	7.5YR5/4 にぶい褐	中・多	細・少	-	-	-	-	-	-	-	破片	
205	Ⅳ区	SR401	上層 (南壁 18 層)	土師器	竈	指ﾅﾃﾞ	指ﾅﾃﾞ	2.5Y8/2 灰白	10YR6/6 明黄褐	中・多	-	-	-	-	-	-	-	-	破片	
206	Ⅳ区	SR401	最上層 (北壁 18 層)	土師器	飯蛸壺	指ｵｻｴ	指ｵｻｴ、ﾏﾒﾂ	7.5YR7/6 橙	10YR8/1 灰白	中・並	-	-	-	-	-	-	-	-	破片	
207	Ⅳ区	SR401	最上層 (南壁 17 層)	土師器	土錘	ﾅﾃﾞ		5Y8/1 灰白	2.5Y7/3 浅黄	細・少	-	-	-	-	高さ 3	幅 2.8	厚さ 1.3	-	4/8	両面穿孔
231	Ⅴ区	SK508		土師器	杯	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｷﾘ後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	2.5Y4/1 黄灰	2.5Y8/2 灰白	中・少	-	-	-	-	-	-	(8.5)	-	2/8	
232	Ⅴ区	SK508		黒色土器	椀	回転ﾅﾃﾞ、剥離	ﾍﾗﾐｶﾞｷ	10YR7/2 にぶい黄橙	10YR2/1 黒	細・少	-	-	-	-	-	-	-	-	破片	黒色土器 A 類
233	Ⅴ区	SK509		染付	皿	削り出し高台後施釉	回転ﾅﾃﾞ後施釉	5B3/1 暗青灰	N8/ 灰白	-	-	-	-	精緻	(14.4)	3.5	(8.2)	-	2/8	
234	Ⅴ区	SK509		瓦質土器	焙烙	ﾖｺﾅﾃﾞ、指ｵｻｴ後ﾅﾃﾞ	ﾊｹﾒ	2.5Y7/2 灰黄	2.5Y7/1 灰白	-	-	-	-	細・少	(35.6)	-	-	-	1/8	2 個 1 対穴
235	Ⅴ区	SK509		瓦質土器	焙烙	指ﾅﾃﾞ、指ｵｻｴ	ﾊｹﾒ	10YR3/1 黒褐	10YR5/2 灰黄褐	細・少	-	-	-	-	(36.2)	-	-	-	1/8	
236	Ⅴ区	SK509		瓦質土器	焙烙	ﾅﾃﾞ、指ｵｻｴ	ﾊｹﾒ	10YR4/1 褐灰	2.5Y4/1 黄灰	細・少	-	-	-	-	-	-	-	-	破片	
237	Ⅴ区	SK509		瓦質土器	焙烙	指ｵｻｴ後ﾖｺﾅﾃﾞ、指ｵｻｴ後ﾅﾃﾞ	ﾊｹﾒ	10YR3/2 黒褐	10YR5/2 灰黄褐	細・少	-	-	-	-	(41)	-	-	-	1/8	穿孔 2 残
238	Ⅴ区	SK509		土師器	風呂釜	指ｵｻｴ後ﾅﾃﾞ、ﾅﾃﾞ	指ｵｻｴ後ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾅﾃﾞ	10YR2/2 黒褐	10YR6/3 にぶい黄橙	中・並	-	-	中・少	-	-	-	50.3	-	7/8	外面ｽｽ付着
243	Ⅴ区	SK510		染付	皿	削り出し高台後施釉	回転ﾅﾃﾞ後施釉	10Y6/2 オリーブ灰	7.5Y8/1 灰白	-	-	-	-	精緻	10	3.1	4	-	7/8	外面貫入
244	Ⅴ区	SK510		染付	皿	削り出し高台後施釉	回転ﾅﾃﾞ後施釉	10Y8/1 灰白	10Y8/1 灰白	-	-	-	-	精緻	(13)	3.5	(7.2)	-	2/8	
245	Ⅴ区	SK510		陶器	椀	削り出し高台後施釉	回転ﾅﾃﾞ後施釉	2.5GY4 灰白、2.5GY8 灰白	7.5YR5/1 褐灰	-	-	-	-	精緻	-	-	4.4	-	4/8	

第 15 表　兀塚遺跡出土土器観察表（8）

報告番号	調査区	遺構名	層位等	種類	器種	調整		色調		胎土					法量 (cm)				残存率	備考
						外面	内面	外部	内部	石英・長石	赤色粒	角閃石	雲母	その他	口径	器高	底径	その他		
246	V区	SK510		陶器	椀	削り出し高台	回転ﾅﾃﾞ後施釉	2.5Y8/2 灰白	2.5Y8/2 灰白	-	-	-	-	精緻	-	-	3.4	-	5/8	
247	V区	SK510		陶器	椀	削り出し高台後施釉	回転ﾅﾃﾞ後施釉	10YR3/4 暗褐	5Y8/2 灰白	-	-	-	-	精緻	(9)	5	(4)	-	2/8	
248	V区	SK510		陶器	椀	削り出し高台後施釉	回転ﾅﾃﾞ後施釉	10YR4/4 褐	7.5Y7/2 灰白	-	-	-	-	精緻	9.7	5.35	4	-	8/8	重ね焼痕
249	V区	SK510		陶器	椀	削り出し高台後施釉	回転ﾅﾃﾞ後施釉	7.5YR3/4 暗褐	5Y8/1 灰白	-	-	-	-	精緻	(10)	6	(4.2)	-	1/8	
250	V区	SK510		陶器	椀	削り出し高台	回転ﾅﾃﾞ	5YR4/3 にぶい赤褐	5YR4/3 にぶい赤褐	-	-	-	-	精緻	-	-	5.4	-	5/8	外面釉の滴付着
251	V区	SK510		備前	擂鉢	回転ﾅﾃﾞ、ﾍﾗｷﾘ後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ、卸目	7.5YR3/2 黒褐 自然釉	7.5R4/1 暗赤灰	-	-	-	-	細・少	32.4	10.3	15.1	-	7/8	内・外面自然釉付着
254	V区	SK511		陶器	鉢	ﾅﾃﾞ、施釉	施釉	2.5Y5/4 黄褐	2.5Y4/4 オリーブ褐	-	-	-	-	精緻	-	-	-	-	破片	自然釉付着
255	V区	SK511		陶器	壺	施釉	回転ﾅﾃﾞ	5Y7/1 灰白	2.5Y7/2 灰黄	-	-	-	-	精緻	-	-	(7)	-	3/8	
256	V区	SK511		土師器	蓋	指ｵｻｴ後ﾖｺﾅﾃﾞ、指ｵｻｴ後指ﾅﾃﾞ、板ﾅﾃﾞ後ﾅﾃﾞ	指ｵｻｴ後ﾖｺﾅﾃﾞ	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	中・少	中・少	-	-	-	(14.3)	2.4	(8.8)	-	2/8	
257	V区	SK512		土師器	杯	ﾏﾒﾂ	指ﾅﾃﾞ	7.5YR6/4 にぶい橙	10YR7/4 にぶい黄橙	細・少	-	-	-	-	-	-	-	-	破片	
258	V区	ST501		弥生土器	甕	ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾏﾒﾂ	剥離、板ﾅﾃﾞ、ﾍﾗｹｽﾞﾘ	10YR8/2 灰白	2.5Y7/1 灰白	中・多	-	-	-	-	-	-	-	-	破片	
259	V区	ST501		弥生土器	鉢	ﾏﾒﾂ	ﾅﾃﾞ、指ｵｻｴ	10YR7/2 にぶい黄橙	5YR8/2 灰白	中・多	-	-	-	-	-	-	-	-	破片	
261	V区	ST502		弥生土器	甕	ﾍﾗﾐｶﾞｷ、指ﾅﾃﾞ	ﾏﾒﾂ、ﾅﾃﾞ後ﾍﾗﾐｶﾞｷ、指ｵｻｴ	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/2 にぶい黄橙	中・多	-	-	-	-	-	-	4.8	-	7/8	外面黒斑有、穿孔(2 穴 1 対)
263	V区	SD502		須恵器	甕	回転ﾅﾃﾞ、ﾀﾀｷ後ｶｷ目	回転ﾅﾃﾞ、同心円	N7/ 灰白	N7/ 灰白	-	-	-	-	少・微	(22.4)	-	-	-	3/8	
265	V区	SD504		須恵器	蓋	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	5PB5/1 青灰	5PB5/1 青灰	-	-	-	-	細・少	-	-	-	-	破片	
266	V区	SD504		須恵器	蓋	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ	回転ﾅﾃﾞ	2.5Y8/1 灰白	2.5Y8/1 灰白	-	-	-	-	中・少	(14.2)	-	-	-	2/8	焼成不良
267	V区	SD504	上・下層	須恵器	壺	ﾅﾃﾞ、回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ	回転ﾅﾃﾞ	N7/ 灰白	N7/ 灰白	-	-	-	-	細・多	-	-	-	-	5/8	沈線 4 条
268	V区	SD504		土師器	杯	ﾏﾒﾂ、ﾍﾗﾐｶﾞｷ	ﾅﾃﾞ後暗文	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	細・少	中・少	-	-	-	(14.8)	-	-	-	1/8	
269	V区	SD507		須恵器	蓋	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ、ﾍﾗｷﾘ後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N5/ 灰	N7/ 灰白	-	-	-	-	中・少	(11.7)	4.1	(6.6)	-	3/8	
270	V区	SD507		須恵器	高杯	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ	回転ﾅﾃﾞ	N7/ 灰白	N7/ 灰白	-	-	-	-	中・少	-	-	-	-	8/8	
271	V区	SD508		須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾅﾃﾞ後ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｷﾘ後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ、仕上げﾅﾃﾞ	N7/ 灰白	N8/ 灰白	-	-	-	-	中・少	(11.6)	-	-	-	1/8	焼成不良
272	V区	SD508		須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｷﾘ後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ、仕上げﾅﾃﾞ	N6/ 灰	5PB7/1 明青灰	-	-	-	-	細・少	9.7	3.1	-	-	4/8	全体に歪み有
273	V区	SD509		須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ、ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ、仕上げﾅﾃﾞ	5B6/1 青灰	5B6/1 青灰	-	-	-	-	中・少	(11.2)	3.9	(5.1)	-	3/8	
274	V区	SD509		須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N6/ 灰	N5/ 灰	-	-	-	-	中・少	(13.2)	-	-	-	1/8	
275	V区	SD509		須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ、ﾍﾗｷﾘ後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ、仕上げﾅﾃﾞ	N7/ 灰白	N7/ 灰白	-	-	-	-	中・少	14.4	4.6	9.2	-	7/8	
276	V区	SD510	上層	須恵器	皿	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N8/ 灰白	N7/ 灰白	-	-	-	-	細・微	(17)	2	(13.4)	-	2/8	
277	V区	SD510	下層	須恵器	蓋	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	7.5Y5/2 灰オリーブ	N7/ 灰白	-	-	-	-	細・微	-	-	-	-	破片	外面自然釉付着

第 16 表　兀塚遺跡出土土器観察表（9）

報告番号	調査区	遺構名	層位等	種類	器種	調整		色調		胎土					法量 (cm)				残存率	備考
						外面	内面	外部	内部	石英・長石	赤色粒	角閃石	雲母	その他	口径	器高	底径	その他		
278	V区	SD510	上層	須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N7/ 灰白	N7/ 灰白	-	-	-	-	細・微	-	-	-	-	破片	
279	V区	SD510	中層	須恵器	杯	ﾅﾃﾞ、ﾏﾒﾂ	ﾅﾃﾞ、ﾏﾒﾂ	10YR8/4 浅黄橙	10YR8/4 浅黄橙	-	-	-	-	中・並	(12.2)	-	-	-	3/8	
280	V区	SD510	上層	須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ、ﾍﾗｷﾘ後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ、ﾅﾃﾞ	2.5Y8/1 灰白	2.5Y7/1 灰白	-	-	-	-	細・多	-	-	(9.4)	-	1/8	
281	V区	SD510		須恵器	甕	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	7.5Y6/1 灰	2.5Y6/1 黄灰	-	-	-	-	細・少	-	-	-	-	破片	
282	V区	SD510	下層	須恵器	甕	ﾀﾀｷ後ﾅﾃﾞ	同心円	7.5Y5/1 灰	7.5Y5/1 灰	-	-	-	-	中・少	-	-	-	-	4/8	自然釉付着、底部に杯片・窯壁付着
283	V区	SD510	上層	土師器	甕	ﾅﾃﾞ、ﾊｹﾒ	ﾅﾃﾞ	2.5Y7/8 黄	2.5Y7/4 浅黄	中・並	-	-	-	-	-	-	-	-	破片	
284	V区	SD510	上層	土師器	甕	ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾊｹﾒ	ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾊｹﾒ	10YR7/4 にぶい黄橙	2.5Y7/3 浅黄	中・多	-	-	-	-	(14.5)	-	-	-	1/8	
286	V区	SD513		弥生土器	壺	ﾍﾗﾐｶﾞｷ	板ﾅﾃﾞ	10YR6/3 にぶい黄橙	10YR6/3 にぶい黄橙	中・多	-	-	-	-	-	-	(7.6)	-	2/8	
287	V区	SD513	合流部	弥生土器	甕	ﾏﾒﾂ	ﾏﾒﾂ	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/4 浅黄橙	中・多	-	-	-	-	-	-	(8.2)	-	3/8	
288	V区	SD512		須恵器	鉢	回転ﾅﾃﾞ、ﾍﾗｷﾘ後ﾅﾃﾞ、ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ、ﾅﾃﾞ	N7/ 灰白	N7/ 灰白	-	-	-	-	中・少	-	-	11.1	-	8/8	
289	V区	SD504	下層	須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ、ﾍﾗｷﾘ後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N6/ 灰	N6/ 灰	-	-	-	-	中・多	(9.5)	3.9	(5.3)	-	1/8	内面付着物有
290	V区	SD509・513	合流部	須恵器	蓋	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N6/ 灰	N6/ 灰	-	-	-	-	細・少	-	-	-	-	破片	
291	V区	SD509・513	合流部	須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ、ﾍﾗｷﾘ	回転ﾅﾃﾞ、仕上げﾅﾃﾞ	5YR5/2 灰褐	N7/ 灰白	-	-	-	-	細・少	(11.1)	3.4	(7.8)	-	2/8	別個体付着、外面自然釉付着
292	V区	SD509・513	合流部	須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	5B6/1 青灰	N8/ 灰白	-	-	-	-	細・少	(12.4)	-	-	-	1/8	
293	V区	SD509・513	合流部	須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｷﾘ後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	2.5Y8/1 灰白	2.5Y8/1 灰白	-	-	-	-	細・微	-	-	(6.2)	-	2/8	
294	V区	SD509・513	合流部	須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ、ﾍﾗｷﾘ	回転ﾅﾃﾞ、仕上げﾅﾃﾞ	7.5YR7/4 にぶい橙	5YR6/6 橙	-	-	-	-	中・少	-	-	(7.2)	-	2/8	焼成不良
295	V区	SD509・513	合流部	須恵器	高杯	回転ﾅﾃﾞ後ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ、回転ﾅﾃﾞ、当て具痕	5Y7/1 灰白	5Y7/1 灰白	-	-	-	-	細・少	-	-	-	4.8	4/8	
296	V区	SD509・513	合流部	須恵器	甕	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	2.5Y7/1 灰白	5Y6/1 灰	-	-	-	-	中・少	(14.5)	-	-	-	1/8	外面自然釉付着
297	V区	SD509・513	合流部	土師器	甕	ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾊｹﾒ後ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾊｹﾒ	ﾊｹﾒ	10YR7/3 にぶい黄橙	2.5Y7/3 浅黄	中・並	-	-	-	-	(20.6)	-	-	-	1/8	
298	V区	SD508・509	合流部	須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N6/ 灰	N8/ 灰白	-	-	-	-	細・少	(9.4)	-	-	-	1/8	
299	V区	SD508・509	合流部	須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N8/ 灰白	N8/ 灰白	-	-	-	-	細・少	(11)	-	-	-	1/8	焼成不良
300	V区	SD508・509・513	合流部	須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ	回転ﾅﾃﾞ	5Y8/1 灰白	5Y8/1 灰白	-	-	-	-	中・少	(11.8)	2.1	(10)	-	1/8	焼成不良
301	V区	SD508・509・513		須恵器	短頸壺	回転ﾅﾃﾞ、ﾀﾀｷ後ｶｷ目	回転ﾅﾃﾞ、同心円後ﾅﾃﾞ消し	N6/ 灰	N6/ 灰	-	-	-	-	細・微	14.6	-	-	-	4/8	沈線 1 条、把手 3 方向 (2 残)
302	V区	SD515		弥生土器	甕	ﾏﾒﾂ	ﾏﾒﾂ	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	中・多	細・少	-	-	-	-	-	-	-	破片	
303	V区	SD516	北部	須恵器	蓋	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N8/ 灰白	N7/ 灰白	-	-	-	-	細・微	(11.4)	-	-	-	1/8	
304	V区	SD516	北部	須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N6/ 灰	N8/ 灰白	-	-	-	-	細・少	-	-	-	-	破片	
305	V区	SD516	北部	須恵器	特殊扁壺	ﾊｹﾒ後ﾅﾃﾞ、ﾍﾗｹｽﾞﾘ	ﾅﾃﾞ、ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ	N6/ 灰	N6/ 灰	-	-	-	-	中・少	-	-	-	4	破片	櫛描沈線、線刻
306	V区	SD517	上層	須恵器	蓋	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	5PB6/1 青灰	5PB7/1 明青灰	-	-	-	-	細・微	-	-	-	-	破片	
307	V区	SD517	下層	須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N7/ 灰白	N7/ 灰白	-	-	-	-	細・微	-	-	-	-	破片	
308	V区	SD517	下層	須恵器	皿	回転ﾅﾃﾞ、ﾍﾗｷﾘ後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N5/ 灰	N5/ 灰	-	-	-	-	細・微	-	-	-	-	破片	

第 17 表　兀塚遺跡出土土器観察表（10）

報告番号	調査区	遺構名	層位等	種類	器種	調整		色調		胎土					法量 (cm)				残存率	備考
						外面	内面	外部	内部	石英・長石	赤色粒	角閃石	雲母	その他	口径	器高	底径	その他		
309	V区	SD517	下層	黒色土器	椀	ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾏﾒﾂ	ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾍﾗﾐｶﾞｷ	10YR7/2 にぶい黄橙	2.5Y3/1 黒褐	細・少	-	-	-	-	-	-	-	-	破片	黒色土器 A 類
310	V区	SD517	下層	陶器	椀	回転ﾅﾃﾞ、施釉	回転ﾅﾃﾞ、施釉	5Y7/2 灰白	7.5Y4/2 灰オリーブ	-	-	-	-	精緻	-	-	-	-	破片	
311	V区	SD517	下層	須恵器	甕	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N7/ 灰白	N8/ 灰白	-	-	-	-	中・微	(25)	-	-	-	1/8	
312	V区	SD517	上層	須恵器	甕	回転ﾅﾃﾞ、ﾀﾀｷ後ｶｷ目	回転ﾅﾃﾞ、同心円	N6/ 灰	N7/ 灰白	-	-	-	-	細・少	(24.2)	-	-	-	1/8	
314	V区	SD518		須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ	回転ﾅﾃﾞ	N6/ 灰	N6/ 灰	-	-	-	-	細・少	(14.4)	-	-	-	1/8	
315	V区	SD519		陶器	椀	削り出し高台後施釉	回転ﾅﾃﾞ後施釉	2.5GY7/1 明オリーブ灰	N7/ 灰白	-	-	-	-	精緻	9.7	6.7	4.6	-	8/8	
316	V区	SD519		陶器	椀	削り出し高台後施釉	回転ﾅﾃﾞ後施釉	7.5Y6/1 灰	N6/ 灰	-	-	-	-	精緻	(10)	6.7	(4.2)	-	2/8	内・外面貫入
317	V区	SD519		陶器	椀	削り出し高台後施釉	回転ﾅﾃﾞ後施釉	10R3/6 暗赤	5Y8/2 灰白	-	-	-	-	精緻	(9.8)	5.4	(3.6)	-	2/8	トチン痕
318	V区	SD519		備前	擂鉢	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ、ﾍﾗｷﾘ後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ、卸目後ﾅﾃﾞ、卸目	2.5YR6/6 橙	2.5YR6/6 橙	-	-	-	-	中・少	(28.6)	12.4	(14.2)	-	3/8	
319	V区	SD519		土師器	甑	ﾅﾃﾞ、指ｵｻｴ、ﾅﾃﾞ、ﾊｹﾒ	ﾅﾃﾞ、指ｵｻｴ、指ﾅﾃﾞ、板ﾅﾃﾞ、当て具痕	7.5YR7/6 橙	7.5YR4/2 灰褐	中・多	細・少	-	-	-	(27.8)	-	-	-	3/8	
320	V区	SD520	中層	染付	皿	削り出し高台後施釉	回転ﾅﾃﾞ後施釉	5B6/1 青灰	N8/ 灰白	-	-	-	-	精緻	(13.9)	3.4	(8.2)	-	1/8	
321	V区	SD520	上層	陶器	椀	削り出し高台後施釉	回転ﾅﾃﾞ後施釉付着	5YR4/1 褐灰・透明釉	N8/ 灰白	-	-	-	-	精緻	(9.4)	5.4	(4.3)	-	2/8	
322	V区	SD520	下層	陶器	椀	施釉	施釉	10YR4/3 にぶい黄褐	5Y7/2 灰白	-	-	-	-	精緻	(10.8)	-	-	-	1/8	
323	V区	SD520	上・中層	陶器	椀	施釉	施釉	5Y7/2 灰白	5Y7/2 灰白	-	-	-	-	細・微	(9.8)	-	-	-	2/8	内・外面貫入
324	V区	SD520	下層	瓦質土器	焙烙	指ｵｻｴ	ﾅﾃﾞ	7.5YR3/1 黒褐	7.5YR5/2 灰褐	細・少	-	-	-	-	(32.2)	-	-	-	1/8	
325	V区	SD520	上・中層	瓦質土器	焙烙	指ｵｻｴ、板ﾅﾃﾞ	指ﾅﾃﾞ	10YR5/2 灰黄褐	10YR6/2 灰黄褐	細・少	-	-	-	-	(30)	-	-	-	1/8	
326	V区	SD520	下層	瓦質土器	焙烙	ﾖｺﾅﾃﾞ、指ｵｻｴ	指ｵｻｴ	5Y4/1 灰	5Y4/1 灰	中・少	-	-	-	-	(45.4)	-	-	-	1/8	穿孔 1 残
327	V区	SD520	上層	土師器	鍋	指ｵｻｴ後ﾖｺﾅﾃﾞ、指ｵｻｴ、指ｵｻｴ後板ﾅﾃﾞ	指ｵｻｴ後ﾖｺﾅﾃﾞ、板ﾅﾃﾞ	10YR6/2 灰黄褐	10YR6/2 灰黄褐	細・微	-	-	-	-	(11.4)	7	-	-	3/8	耳状突起現存 1
329	V区	SD521		磁器	皿	削り出し高台後施釉	施釉後蛇の目釉剥ぎ	5GY8/1 灰白	2.5Y8/2 灰白	-	-	-	-	精緻	12.4	3.9	4	-	6/8	内面粘土付着、重ね焼痕
330	V区	SD521		陶器	椀	削り出し高台後施釉	回転ﾅﾃﾞ後施釉	7.5YR2/2 黒褐	10YR8/2 灰白	-	-	-	-	精緻	(9.2)	5.6	(3.8)	-	3/8	
331	V区	SD521		瓦質土器	焙烙	ﾖｺﾅﾃﾞ、指ｵｻｴ	ﾖｺﾅﾃﾞ、板ﾅﾃﾞ	5Y3/1 オリーブ黒	5Y3/1 オリーブ黒	細・並	-	-	-	-	(34.8)	-	-	-	1/8	穿孔部半欠
332	V区	SD521		瓦質土器	焙烙	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	10Y2/1 黒	10YR7/3 にぶい黄橙	細・少	-	-	細・少	-	(42.6)	-	-	-	1/8	穿孔 2 残
335	V区	SP117		須恵器	高杯	回転ﾅﾃﾞ（ﾏﾒﾂ）	回転ﾅﾃﾞ（ﾏﾒﾂ）	7.5Y7/1 灰白	7.5Y7/1 灰白	-	-	-	-	細・少	-	-	-	-	破片	
336	V区	SP136		土師器	甕	ﾊｹﾒ、指ｵｻｴ	ﾅﾃﾞ	2.5Y7/2 灰黄	5YR6/8 橙	中・並	-	-	-	-	-	-	-	-	破片	
337	V区	SP160		黒色土器	椀	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ後ﾍﾗﾐｶﾞｷ	10YR2/1 黒	10YR2/1 黒	細・少	-	-	-	-	-	-	-	-	破片	黒色土器 A 類
338	V区	SP161		土師器	椀	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	細・少	-	-	-	-	(14.6)	-	-	-	1/8	
339	V区	SP175		弥生土器	甕	ﾏﾒﾂ、ﾅﾃﾞ	ﾏﾒﾂ、指ｵｻｴ	2.5Y8/2 灰白	2.5Y3/1 黒褐	中・並	-	-	-	-	-	-	5.6	-	8/8	櫛描波状紋
340	V区	SP197		弥生土器	甕	ﾏﾒﾂ	ﾏﾒﾂ	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR5/2 灰黄褐	中・並	-	-	-	-	-	-	-	-	破片	

第 18 表　兀塚遺跡出土土器観察表（11）

報告番号	調査区	遺構名	層位等	種類	器種	調整		色調		胎土					法量 (cm)				残存率	備考
						外面	内面	外部	内部	石英・長石	赤色粒	角閃石	雲母	その他	口径	器高	底径	その他		
341	Ⅴ区	SP1004		黒色土器	椀	回転ﾅﾃﾞ、ﾍﾗｷﾘ	回転ﾅﾃﾞ後ﾍﾗﾐｶﾞｷ	2.5Y8/1 灰白	5Y4/1 灰	中・少	-	-	-	-	(14.7)	4.8	(5.6)	-	2/8	黒色土器 A 類
342	Ⅴ区	SP1005		土師器	擂鉢	ﾅﾃﾞ、板ﾅﾃﾞ	ﾖｺﾅﾃﾞ	7.5YR8/1 灰白	7.5YR7/1 明褐灰	細・並	-	-	-	-	-	-	-	-	破片	
344	Ⅴ区	SP1021		須恵器	高杯	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N7/ 灰白	N6/ 灰	-	-	-	-	細・少	-	-	-	-	破片	
345	Ⅴ区	SP1024		須恵器	甕	回転ﾅﾃﾞ、ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ、ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N4/ 灰	N4/ 灰	-	-	-	-	細・少	-	-	(23)	-	1/8	内・外面自然釉付着
346	Ⅴ区	SP1024・SP1026		備前	甕	板ﾅﾃﾞ、ﾅﾃﾞ、板ﾅﾃﾞ	板ﾅﾃﾞ、ﾊｹﾒ	2.5YR5/4 にぶい赤褐	5YR4/2 灰褐	-	-	-	-	中・多	-	-	(34)	-	3/8	
349	Ⅴ区	SP1027		土師器	杯	回転ﾅﾃﾞ、ﾍﾗｷﾘ後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	5YR6/6 橙	7.5YR7/6 橙	-	細・少	-	-	-	(7.8)	1.7	(5)	-	1/8	
350	Ⅴ区	包含層		土師器	杯	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｷﾘ	回転ﾅﾃﾞ	5YR7/6 橙	7.5YR8/3 浅黄橙	中・少	-	-	-	-	(11.8)	4.1	(7.2)	-	1/8	
351	Ⅴ区	包含層		須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｷﾘ後板状圧痕	回転ﾅﾃﾞ	N6/ 灰	N6/ 灰	-	-	-	-	細・少	(12.4)	3.3	(9)	-	2/8	
352	Ⅴ区	包含層		須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｷﾘ	回転ﾅﾃﾞ	N6/ 灰	N7/ 灰白	-	-	-	-	細・少	-	-	(10.8)	-	1/8	外面自然釉付着
353	Ⅴ区	包含層		土師器	製塩土器	ﾖｺﾅﾃﾞ、指ｵｻｴ後ﾅﾃﾞ	指ｵｻｴ	7.5YR5/4 にぶい褐	10YR4/1 褐灰	中・多	-	-	-	-	-	-	-	-	破片	
355	Ⅵ区	SB601(SP03)		弥生土器	高杯	ﾊｹﾒ	ﾊｹﾒ	7.5YR8/4 浅黄橙	7.5YR8/4 浅黄橙	中・少	-	-	-	-	-	-	(9.8)	-	1/8	
356	Ⅵ区	SB602(SP03)		須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N7/ 灰白	N8/ 灰白	-	-	-	-	中・少	12	3.7	7	-	4/8	
357	Ⅵ区	SB603(SP07)		須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N6/ 灰	N6/ 灰	-	-	-	-	中・少	(10.2)	-	-	-	1/8	
358	Ⅵ区	SB603(SP04)		須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/4 にぶい橙	-	-	-	-	細・少	(11)	-	-	-	1/8	
359	Ⅵ区	SB605(SP04)		須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N6/ 灰	N6/ 灰	-	-	-	-	細・少	-	-	-	-	破片	
360	Ⅵ区	SK604		須恵器	杯	回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ	回転ﾅﾃﾞ	N7/ 灰白	N8/ 灰白	-	-	-	-	細・少	-	-	(8.6)	-	3/8	
361	Ⅵ区	SK605		須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	5Y8/1 灰白	5Y8/1 灰白	-	-	-	-	細・少	(10.6)	-	-	-	1/8	焼成不良
362	Ⅵ区	SD601		須恵器	皿	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N6/ 灰	N6/ 灰	-	-	-	-	中・少	(15.1)	1.8	(11.2)	-	2/8	火ﾀﾞｽｷ痕
363	Ⅵ区	SD601		須恵器	蓋	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N7/ 灰白	N7/ 灰白	-	-	-	-	細・少	-	-	-	-	破片	
364	Ⅵ区	SD601		須恵器	蓋	回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ、回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N6/ 灰	N5/ 灰	-	-	-	-	中・多	-	-	-	-	2/8	
365	Ⅵ区	SD602	上層	須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N7/ 灰白	N8/ 灰白	-	-	-	-	中・少	(14.4)	-	-	-	1/8	
366	Ⅵ区	SD602	上層	須恵器	蓋	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N5/ 灰	N7/ 灰白	-	-	-	-	細・無	-	-	-	-	破片	
367	Ⅵ区	SD602	下層	須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｷﾘ	回転ﾅﾃﾞ	N8/ 灰白	N8/ 灰白	細・多	細・少	-	-	-	(9.2)	-	-	-	1/8	
368	Ⅵ区	SD602	下層	須恵器	小皿	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｷﾘ後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾅﾃﾞ後仕上げﾅﾃﾞ	N8/ 灰白	N8/ 灰白	-	-	-	-	中・少	(9)	1.7	(6.2)	-	3/8	焼成不良
369	Ⅵ区	SD602	下層	土師器	小皿	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｷﾘ後板状圧痕	回転ﾅﾃﾞ	2.5Y8/2 灰白	2.5Y8/1 灰白	中・少	中・少	-	-	-	-	-	4.6	-	8/8	
370	Ⅵ区	SD602	下層	黒色土器	椀	回転ﾅﾃﾞ、ﾍﾗｷﾘ後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ後ﾍﾗﾐｶﾞｷ	2.5Y7/1 灰白	10YR7/1 灰白	中・並	-	-	-	-	-	-	-	-	破片	
371	Ⅵ区	SD602	上層	瓦器	椀	回転ﾅﾃﾞ後ﾍﾗﾐｶﾞｷ	回転ﾅﾃﾞ後ﾍﾗﾐｶﾞｷ	N4/ 灰	N4/ 灰	-	-	-	-	細・少	-	-	-	-	破片	和泉型
373	Ⅵ区	SD603	中層	須恵器	擂鉢	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	5Y6/1 灰	N7/ 灰白	-	-	-	-	中・少	(13.6)	14.5	(9.5)	-	1/8	
374	Ⅵ区	SD604	下層	須恵器	蓋	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ	回転ﾅﾃﾞ	N7/ 灰白	N7/ 灰白	-	-	-	-	細・少	(13.3)	-	-	-	2/8	

第 19 表　兀塚遺跡出土土器観察表（12）

報告番号	調査区	遺構名	層位等	種類	器種	調整		色調		胎土					法量 (cm)				残存率	備考
						外面	内面	外部	内部	石英・長石	赤色粒	角閃石	雲母	その他	口径	器高	底径	その他		
375	Ⅵ区	SD604	中・下層	須恵器	蓋	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ、回転ﾍﾗｷﾘ後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾅﾃﾞ後仕上げﾅﾃﾞ	N6/ 灰	N6/ 灰	-	-	-	-	細・少	12.9	3.9	7.8	-	6/8	口径歪み有 (12.1 ～ 12.9)
376	Ⅵ区	SD604	上・中層 (南壁 54 層)	須恵器	蓋	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ	回転ﾅﾃﾞ	5Y5/1 灰	N6/ 灰	-	-	-	-	細・微	(13.6)	-	11.6	-	3/8	
377	Ⅵ区	SD604	下層	須恵器	蓋	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｷﾘ	回転ﾅﾃﾞ	10YR4/1 褐灰	10YR6/1 褐灰	-	-	-	-	中・多	(13.9)	4.1	8.2	-	1/8	
378	Ⅵ区	SD604	下層	須恵器	蓋	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｷﾘ後回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ、回転ﾍﾗｷﾘ後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾅﾃﾞ後仕上げﾅﾃﾞ	N7/ 灰白	N7/ 灰白	-	-	-	-	細・少	12.5	3.8	10.7	-	8/8	
379	Ⅵ区	SD604	上・中層 (南壁 49 層)	須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N5/ 灰	N6/ 灰	-	-	-	-	細・少	10.8	-	-	-	4/8	
380	Ⅵ区	SD604	上層	須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ、回転ﾍﾗｷﾘ	回転ﾅﾃﾞ	N7/ 灰白	N7/ 灰白	-	-	-	-	中・少	(10)	-	-	-	1/8	
381	Ⅵ区	SD604	上層	須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N6/ 灰	N6/ 灰	-	-	-	-	細・少	(10.1)	-	-	-	1/8	
382	Ⅵ区	SD604	中層	須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ、回転ﾍﾗｷﾘ	回転ﾅﾃﾞ	N7/ 灰白	N5/ 灰	-	-	-	-	細・少	(12.4)	3.6	(9.4)	-	2/8	
383	Ⅵ区	SD604	下層	須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N7/ 灰白	N7/ 灰白	-	-	-	-	細・少	(11.2)	-	-	-	1/8	
384	Ⅵ区	SD604	上層	須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N7/ 灰白	N7/ 灰白	-	-	-	-	中・少	-	-	-	-	破片	
385	Ⅵ区	SD604	中層	須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ	回転ﾅﾃﾞ	N6/ 灰	N7/ 灰白	-	-	-	-	中・少	8.7	4.5	9.1	-	6/8	
386	Ⅵ区	SD604	上層	須恵器	杯	回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ、回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N6/ 灰	N6/ 灰	-	-	-	-	細・少	11.8	3.4	5.7	-	5/8	
387	Ⅵ区	SD604	中層	須恵器	杯	回転ﾍﾗｷﾘ、回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N7/ 灰白	N7/ 灰白	-	-	-	-	細・少	(10.8)	-	-	-	2/8	
388	Ⅵ区	SD604	中層	須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ	回転ﾅﾃﾞ	5Y7/1 灰白	N8/ 灰白	-	-	-	-	細・少	9.6	4.6	9	-	8/8	
389	Ⅵ区	SD604	上・下層	須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ	回転ﾅﾃﾞ	N7/ 灰白	N7/ 灰白	-	-	-	-	中・少	(10.8)	-	-	-	3/8	
390	Ⅵ区	SD604	上層	土師器	杯	ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾍﾗﾐｶﾞｷ、指ｵｻｴ、ﾅﾃﾞ、ﾍﾗｹｽﾞﾘ	ﾖｺﾅﾃﾞ、指ｵｻｴ、ﾍﾗｹｽﾞﾘ、ﾅﾃﾞ	5YR6/6 橙	7.5YR6/4 にぶい橙	中・並	中・並	-	-	-	(15.4)	5	(4.6)	-	2/8	
391	Ⅵ区	SD604	上層	須恵器	高杯	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N6/ 灰	N6/ 灰	-	-	-	-	細・少	-	-	(10)	-	2/8	透かし穴 2 残
392	Ⅵ区	SD604	中・下層	須恵器	瑳	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ	回転ﾅﾃﾞ	N7/ 灰白	N7/ 灰白	-	-	-	-	細・少	-	-	-	9.6	6/8	沈線 2 条、穿孔 1 残
393	Ⅵ区	SD604	中・下層	土師器	鍋	指ｵｻｴ後ﾖｺﾅﾃﾞ、指ｵｻｴ後ﾊｹﾒ	ﾊｹﾒ、指ｵｻｴ後ﾊｹﾒ	7.5YR8/3 浅黄橙	7.5YR8/4 浅黄橙	中・並	中・少	-	-	-	(33.4)	11.6	-	-	3/8	焼成破裂痕有
394	Ⅵ区	SD604	下層	土師器	甕	ﾏﾒﾂ	ﾏﾒﾂ	5YR5/6 明赤褐	5YR5/6 明赤褐	中・多	中・並	-	-	-	-	-	-	-	破片	
395	Ⅵ区	SD604	下層	土師器	甕	指ｵｻｴ後ﾖｺﾅﾃﾞ	板ﾅﾃﾞ	7.5YR7/4 にぶい橙	10YR8/3 浅黄橙	中・並	中・並	-	-	-	-	-	-	-	破片	
396	Ⅵ区	SD604	中層	土師器	甕	指ｵｻｴ後ﾅﾃﾞ、板ﾅﾃﾞ	ﾊｹﾒ、ﾍﾗｹｽﾞﾘ	10YR6/2 灰黄褐	10YR5/2 灰黄褐	中・並	-	-	中・多	-	(16.8)	-	-	-	2/8	一部分歪み有
397	Ⅵ区	SD604	中層	土師器	甕	ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾏﾒﾂ	ﾖｺﾅﾃﾞ、板ﾅﾃﾞ、ﾅﾃﾞ	10YR6/3 にぶい黄橙	2.5Y8/2 灰白	中・並	-	-	-	-	(24)	-	-	-	1/8	
398	Ⅵ区	SD604	中層	土師器	甕	ﾖｺﾅﾃﾞ、指ｵｻｴ、板ﾅﾃﾞ後ﾅﾃﾞ	ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾊｹﾒ後ﾍﾗｹｽﾞﾘ	10YR7/2 にぶい黄橙	10YR7/2 にぶい黄橙	中・多	-	-	-	-	(25.2)	-	-	-	1/8	
399	Ⅵ区	SD604	下層	土師器	甕	ﾖｺﾅﾃﾞ、指ｵｻｴ、ﾖｺﾅﾃﾞ	ﾖｺﾅﾃﾞ、板ﾅﾃﾞ	10YR8/4 浅黄橙	10YR8/2 灰白	中・並	-	-	-	-	(29.8)	-	-	-	2/8	

第 20 表　兀塚遺跡出土土器観察表（13）

報告番号	調査区	遺構名	層位等	種類	器種	調整		色調		胎土					法量 (cm)				残存率	備考
						外面	内面	外部	内部	石英・長石	赤色粒	角閃石	雲母	その他	口径	器高	底径	その他		
400	Ⅵ区	SD604	中層	土師器	甕	指ｵｻｴ	指ｵｻｴ	7.5YR8/4 浅黄橙	2.5Y8/4 淡黄	中・並	中・少	-	-	-	-	-	-	-	破片	
401	Ⅵ区	SD604	上層	須恵器	甕	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N6/ 灰	N7/ 灰白 -	-	-	-	-	中・少	-	-	-	-	破片	
402	Ⅵ区	SD604	上・中層	須恵器	甕	回転ﾅﾃﾞ、ﾊｹﾒ	回転ﾅﾃﾞ、ﾀﾀｷ	10YR8/4 浅黄橙	2.5Y8/1 灰白	-	-	-	-	中・多	24	-	-	-	5/8	ﾍﾗ描文
403	Ⅵ区	SD604	中層	須恵器	甕	ﾀﾀｷ	同心円	N4/ 灰	5Y8/1 灰白	-	-	-	-	無	-	-	-	20.4 (32)	1/8	焼成不良
404	Ⅵ区	SD604	下層	須恵器	壺	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ、ﾀﾀｷ	N8/ 灰白	N8/ 灰白	-	-	-	-	細・少	(14.2)	-	-	-	2/8	焼成不良
405	Ⅵ区	SD604	下層	須恵器	壺	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N7/ 灰白	N7/ 灰白	-	-	-	-	細・少	(15)	-	-	-	1/8	
406	Ⅵ区	SD604	上層	須恵器	短頸壺	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ	回転ﾅﾃﾞ	N6/ 灰	N6/ 灰	-	-	-	-	細・少	8.1	10.5	12.7	-	6/8	
407	Ⅵ区	SD604	上層	土師器	甑	ﾊｹﾒ、指ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ、ﾏﾒﾂ	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	中・並	中・並	-	-	-	-	-	-	-	8/8	
408	Ⅵ区	SD604	上層	土師器	竈	板ﾅﾃﾞ、指ﾅﾃﾞ、ﾊｹﾒ、ﾖｺﾅﾃﾞ	ﾖｺﾅﾃﾞ、指ﾅﾃﾞ	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	中・多	-	-	-	-	-	-	-	-	破片	
409	Ⅵ区	SD604	中層	土師器	製塩土器	ﾏﾒﾂ、指ｵｻｴ、ﾅﾃﾞ	ﾏﾒﾂ、指ｵｻｴ、ﾅﾃﾞ	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR5/4 にぶい褐	中・並	-	-	-	-	(11)	-	-	-	1/8	
410	Ⅵ区	SD604	中層	弥生土器	鉢	ﾖｺﾅﾃﾞ、指ｵｻｴ後ﾅﾃﾞ	ﾖｺﾅﾃﾞ、板ﾅﾃﾞ、指ｵｻｴ	2.5Y5/1 黄灰	10YR5/3 にぶい黄褐	中・並	-	-	中・多	-	-	-	-	-	破片	
411	Ⅵ区	SX601	上層	須恵器	蓋	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｷﾘ	回転ﾅﾃﾞ	N7/ 灰白	5PB6/1 青灰	-	-	-	-	細・少	-	-	7.5	-	8/8	
412	Ⅵ区	SX601		須恵器	蓋	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N5/ 灰	N6/ 灰	-	-	-	-	細・少	(10.9)	-	-	-	1/8	
413	Ⅵ区	SX601		須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N6/ 灰	N7/ 灰白	-	-	-	-	細・少	-	-	-	-	破片	
414	Ⅵ区	SX604		弥生土器	壺	ﾏﾒﾂ、ﾖｺﾅﾃﾞ	ﾏﾒﾂ	7.5YR6/4 にぶい橙	5YR6/6 橙	中・多	-	-	-	-	(11)	-	-	-	1/8	
415	Ⅵ区	SX605		須恵器	蓋	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N7/ 灰白	N7/ 灰白	-	-	-	-	細・少	-	-	-	-	破片	
416	Ⅵ区	SX605		須恵器	蓋	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N7/ 灰白	N7/ 灰白	-	-	-	-	細・少	(13.8)	-	-	-	1/8	
417	Ⅵ区	SX605		須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N7/ 灰白	N7/ 灰白	-	-	-	-	細・少	(10.2)	-	-	-	1/8	
418	Ⅵ区	SX605		須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N6/ 灰	N7/ 灰白	-	-	-	-	細・少	(10)	-	-	-	2/8	外面自然釉付着
419	Ⅵ区	SX605		須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N6/ 灰	N7/ 灰白	-	-	-	-	細・少	(12.2)	-	-	-	1/8	
420	Ⅵ区	SX605		須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N6/ 灰	N7/ 灰白	-	-	-	-	細・少	(9.6)	-	-	-	1/8	
421	Ⅵ区	SX605		須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N6/ 灰	N7/ 灰白	-	-	-	-	細・少	-	-	-	-	破片	
422	Ⅵ区	SX605	上面	須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N6/ 灰	N6/ 灰	-	-	-	-	細・少	-	-	-	-	破片	
423	Ⅵ区	SX605		須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N8/ 灰白	N8/ 灰白	-	-	-	-	細・少	-	-	-	-	破片	
424	Ⅵ区	SX605		須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N7/ 灰白	N7/ 灰白	-	-	-	-	細・少	-	-	-	-	破片	
425	Ⅵ区	SX605		須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N6/ 灰	N7/ 灰白	-	-	-	-	細・少	-	-	-	-	1/8	
426	Ⅵ区	SX605		須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N7/ 灰白	N7/ 灰白	-	-	-	-	細・少	(11.8)	-	-	-	1/8	
427	Ⅵ区	SX605		須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	5Y8/1 灰白	2.5Y8/2 灰白	-	-	-	-	中・並	(11.8)	-	-	-	1/8	
428	Ⅵ区	SX605		須恵器	高杯	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N8/ 灰白	N8/ 灰白	-	-	-	-	細・少	-	-	(7.7)	-	1/8	
429	Ⅵ区	SX605		須恵器	壷	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N7/ 灰白	N8/ 灰白	-	-	-	-	細・少	(12.8)	-	-	-	1/8	
430	Ⅵ区	SX605		土師器	甕	ﾖｺﾅﾃﾞ	ﾖｺﾅﾃﾞ後ﾊｹﾒ	10YR6/1 褐灰	7.5YR7/8 黄橙	中・並	-	-	-	-	-	-	-	-	破片	
431	Ⅵ区	SX605		土製品	羽口	ﾅﾃﾞ	ﾏﾒﾂ	N7/ 灰白	5YR6/8 橙	中・少	-	-	-	-	-	-	-	-	破片	焼土
435	Ⅵ区	SR601	上層	須恵器	蓋	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	5Y8/1 灰白	5Y8/1 灰白	-	-	-	-	細・少	(11.9)	-	-	-	1/8	
436	Ⅵ区	SR601	上層	須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ、回転ﾍﾗｷﾘ後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N7/ 灰白	N8/ 灰白	-	-	-	-	中・少	-	-	(7)	-	1/8	
437	Ⅵ区	SR601	上層・上面精査	須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｷﾘ	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾅﾃﾞ後仕上げﾅﾃﾞ	7.5Y6/1 灰	N8/ 灰白	-	-	-	-	中・微	(11.2)	4.2	(6)	-	3/8	

第 21 表　兀塚遺跡出土土器観察表（14）

報告番号	調査区	遺構名	層位等	種類	器種	調整		色調		胎土					法量 (cm)				残存率	備考
						外面	内面	外部	内部	石英・長石	赤色粒	角閃石	雲母	その他	口径	器高	底径	その他		
438	Ⅵ区	SR601	上層	須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N6/ 灰	N7/ 灰白	-	-	-	-	細・少	(11.2)	-	-	-	1/8	
439	Ⅵ区	SR601	上層	須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N7/ 灰白	N8/ 灰白	-	-	-	-	細・少	(11.8)	-	-	-	1/8	
440	Ⅵ区	SR601	下層	須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N8/ 灰白	N8/ 灰白	-	-	-	-	中・少	(108)	-	-	-	1/8	
441	Ⅵ区	SR601	上層	須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N7/ 灰白	N5/ 灰	-	-	-	-	細・微	(11)	-	-	-	1/8	
442	Ⅵ区	SR601	上層	須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N7/ 灰白	N7/ 灰白	-	-	-	-	細・少	(13.2)	-	-	-	1/8	
443	Ⅵ区	SR601	上層	須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N6/ 灰	N6/ 灰	-	-	-	-	細・少	-	-	-	-	破片	
444	Ⅵ区	SR601	上層	須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ	回転ﾅﾃﾞ、仕上げﾅﾃﾞ	N7/ 灰白	N6/ 灰	-	-	-	-	中・微	8.6	-	5.3	-	4/8	
445	Ⅵ区	SR601	上層	須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N6/ 灰	N6/ 灰	-	-	-	-	細・少	(13.6)	-	-	-	1/8	
446	Ⅵ区	SR601	上層	須恵器	瓶	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N8/ 灰白	2.5Y8/1 灰白	-	-	-	-	細・微	(12)	-	-	-	1/8	自然釉付着
447	Ⅵ区	SR601	上層	須恵器	高杯	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N8/ 灰白	N7/ 灰白	-	-	-	-	細・微	-	-	-	3.8	4/8	
448	Ⅵ区	SR601	上層	須恵器	高杯	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N7/ 灰白	N7/ 灰白	-	-	-	-	細・少	(13.2)	-	-	-	1/8	透かし穴 1
449	Ⅵ区	SR601	上層	須恵器	短頸壺	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	7.5Y5/1 灰	N7/ 灰白	-	-	-	-	細・少	(5.7)	-	-	-	1/8	
450	Ⅵ区	SR601	上層	土師器	甕	ﾖｺﾅﾃﾞ	ﾖｺﾅﾃﾞ、指ｵｻｴ後ﾊｹﾒ	2.5YR6/6 橙	10YR7/2 にぶい黄橙	中・並	-	-	-	-	-	-	-	-	破片	
451	Ⅵ区	SR601	下層	土師器	甕	ﾖｺﾅﾃﾞ	ﾏﾒﾂ	7.5YR8/4 浅黄橙	7.5YR8/3 浅黄橙	中・少 -	-	-	-	-	-	-	-	-	破片	
452	Ⅵ区	SR601	下層	土師器	竈	ﾊｹﾒ、指ｵｻｴ後ﾅﾃﾞ	板ﾅﾃﾞ、指ｵｻｴ	10YR8/4 浅黄橙	10YR7/2 にぶい黄橙	中・多 -	-	-	-	-	-	-	-	-	破片	
453	Ⅵ区	SR601	下層	須恵器	ミニチュア壺	ﾅﾃﾞ、ｶｷ目、ﾀﾀｷ後ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	N7/ 灰白	N7/ 灰白	-	-	-	-	中・少	-	-	-	5.9	4/8	
454	Ⅵ区	SR601	上層	土製品	羽口	指ｵｻｴ後ﾅﾃﾞ	ﾏﾒﾂ	N7/ 灰白	5YR6/8 橙	中・少	-	-	-	-	-	-	-	-	破片	
456	Ⅵ区	SR602	下層	弥生土器	壺	格子目、刻み目、ﾊｹﾒ	指ｵｻｴ後ﾅﾃﾞ	2.5Y6/2 灰黄	7.5Y3/1 オリーブ黒	粗・少	-	-	-	-	(16.8)	-	-	-	1/8	張り付け凸帯
457	Ⅵ区	SR602	下層	弥生土器	壺	ﾅﾃﾞ	指ｵｻｴ	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	中・多	-	-	-	-	-	-	-	-	破片	櫛描文
458	Ⅵ区	SR602	上層 (南壁 54 層)	弥生土器	壺	ﾅﾃﾞ	指ｵｻｴ	10YR6/3 にぶい黄橙	10YR6/4 にぶい黄橙	中・多	中・少	-	-	-	-	-	-	-	破片	付着物あり
459	Ⅵ区	SR602	下層	弥生土器	壺	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	7.5YR8/4 浅黄橙	7.5YR8/4 浅黄橙	中・並	-	-	-	-	-	-	-	-	破片	波状文、櫛描文
460	Ⅵ区	SR602	下層	弥生土器	壺	ﾖｺﾅﾃﾞ	ﾖｺﾅﾃﾞ	7.5YR8/4 浅黄橙	7.5YR8/4 浅黄橙	中・多	中・少	-	-	-	-	-	-	-	破片	
461	Ⅵ区	SR602	中層	弥生土器	壺	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	2.5Y7/3 浅黄	2.5Y3/1 黒褐	中・並	-	-	-	-	-	-	-	-	破片	刺突文、櫛描
462	Ⅵ区	SR602	下層	弥生土器	壺	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ、ﾏﾒﾂ	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	中・並	-	-	-	-	-	-	-	-	破片	櫛描直線文
463	Ⅵ区	SR602	下層 (南壁 64･65 層)	弥生土器	甕	ﾖｺﾅﾃﾞ	ﾖｺﾅﾃﾞ	2.5YR6/8 橙	2.5YR6/8 橙	中・並	-	-	-	-	(16)	-	-	-	1/8	
464	Ⅵ区	SR602	下層	弥生土器	甕	ﾏﾒﾂ、ﾊｹ、ﾏﾒﾂ	ﾏﾒﾂ	2.5YR5/6 明赤褐	7.5YR5/6 明褐	中・並	中・少	-	-	-	(19.2)	-	-	-	1/8	
465	Ⅵ区	SR602	下層	弥生土器	甕	ﾏﾒﾂ、指ｵｻｴ、ﾖｺﾅﾃﾞ	ﾖｺﾅﾃﾞ	5YR4/2 灰褐	10YR6/3 にぶい黄橙	中・並	中・少	-	-	-	(22.8)	-	-	-	1/8	
466	Ⅵ区	SR602	下層	弥生土器	甕	ﾏﾒﾂ	ﾏﾒﾂ	5YR5/4 にぶい赤褐	7.5YR5/2 灰褐	中・並	-	-	-	-	(26)	-	-	-	1/8	
467	Ⅵ区	SR602	中層	弥生土器	甕	ﾏﾒﾂ	ﾏﾒﾂ	5YR6/6 橙	5YR6/4 にぶい橙	粗・多	中・多	-	-	-	(27.2)	-	-	-	1/8	
468	Ⅵ区	SR602	下層 (南壁 64･65 層)	弥生土器	甕	ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾊｹﾒ	ﾖｺﾅﾃﾞ、板ﾅﾃﾞ	7.5YR4/6 褐	7.5YR6/6 橙	中・多	細・少	-	中・少	-	(31.8)	-	-	-	2/8	
469	Ⅵ区	SR602	中層	弥生土器	甕	ﾏﾒﾂ	ﾏﾒﾂ	2.5YR6/6 橙	5YR7/6 橙	-	中・並	-	-	-	-	-	-	-	破片	
470	Ⅵ区	SR602	下層	弥生土器	甕	ﾖｺﾅﾃﾞ、指ｵｻｴ後ﾊｹﾒ、ﾍﾗﾐｶﾞｷ	ﾖｺﾅﾃﾞ、指ｵｻｴ後ﾊｹﾒ	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR7/4 にぶい橙	中・多	中・並	-	中・少	-	(14.8)	-	-	-	1/8	下川津 B 類

第 22 表　兀塚遺跡出土土器観察表（15）

報告番号	調査区	遺構名	層位等	種類	器種	調整		色調		胎土					法量 (cm)				残存率	備考
						外面	内面	外部	内部	石英・長石	赤色粒	角閃石	雲母	その他	口径	器高	底径	その他		
471	Ⅵ区	SR602	下層	弥生土器	甕	ﾏﾒﾂ	ﾏﾒﾂ	7.5YR8/4 浅黄橙	7.5YR8/4 浅黄橙	中・多	中・多	-	-	-	-	-	-	-	破片	
472	Ⅵ区	SR602	中層 (南壁 74 層)	弥生土器	甕	ﾊｹﾒ後ﾍﾗﾐｶﾞｷﾞ	指ｵｻｴ、ﾍﾗｹｽﾞﾘ	7.5YR6/2 灰褐	10YR7/2 にぶい黄橙	中・多	-	-	-	-	-	-	-	-	破片	
473	Ⅵ区	SR602	中層	弥生土器	壺	指ｵｻｴ後ﾅﾃﾞ、ﾅﾃﾞ	指ｵｻｴ後ﾅﾃﾞ	2.5Y7/2 灰黄	2.5Y7/2 灰黄	中・並	中・少	-	-	-	-	-	(10.4)	-	1/8	
474	Ⅵ区	SR602	下層	弥生土器	壺	ﾏﾒﾂ、ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	2.5Y7/2 灰黄	7.5YR6/6 橙	中・多	中・少	-	-	-	-	-	6.3	-	5/8	
475	Ⅵ区	SR602	下層	弥生土器	甕	ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	5YR7/3 にぶい橙	10YR6/1 褐灰	中・多	-	-	-	-	-	-	(9)	-	3/8	
476	Ⅵ区	SR602	下層	弥生土器	甕	ﾏﾒﾂ	ﾏﾒﾂ、指ｵｻｴ	10YR7/3 にぶい黄橙	7.5YR6/4 にぶい橙	中・多	中・少	-	細・少	-	-	-	7.8	-	8/8	
477	Ⅵ区	SR602	下層	弥生土器	甕	ﾏﾒﾂ	ﾏﾒﾂ	7.5YR7/4 にぶい橙	10YR7/4 にぶい黄橙	中・多	中・並	-	-	-	-	-	7.8	-	4/8	
478	Ⅵ区	SR602	下層	弥生土器	甕	ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	5YR7/6 橙	5YR5/8 明赤褐	粗・多	-	-	-	-	-	-	8	-	8/8	底部に穿孔有
479	Ⅵ区	SR602	中層	弥生土器	甕	ﾏﾒﾂ	ﾏﾒﾂ、指ｵｻｴ	5YR7/4 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙	中・並	中・並	-	-	-	-	-	5.7	-	8/8	
480	Ⅵ区	SR602	下層	弥生土器	甕	ﾊｹﾒ、ﾅﾃﾞ	ﾏﾒﾂ	2.5Y7/1 灰白	2.5Y7/6 明黄褐	中・多	細・並	-	-	-	-	-	(4.8)	-	3/8	
481	Ⅵ区	SR602	下層	弥生土器	甕	ﾍﾗﾐｶﾞｷ、ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	2.5Y7/2 灰黄	10YR7/3 にぶい黄橙	中・多	中・少	-	-	-	-	-	5.8	-	4/8	
482	Ⅵ区	SR602	上層	弥生土器	甕	ﾊｹﾒ後ﾍﾗﾐｶﾞｷ、指ｵｻｴ後ﾅﾃﾞ	ﾍﾗｹｽﾞﾘ	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR5/2 灰褐	細・少	-	細・多	-	-	-	-	(8.5)	-	3/8	下川津 B 類
483	Ⅵ区	SR602	中層	弥生土器	甕	ﾏﾒﾂ	ﾏﾒﾂ	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR6/2 灰黄褐	中・多	中・並	-	-	-	-	-	9.8	-	6/8	
484	Ⅵ区	SR602	中層	弥生土器	壺	ﾏﾒﾂ	ﾅﾃﾞ	10YR6/4 にぶい黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙	中・多	粗・並	-	-	-	-	-	8	-	8/8	
485	Ⅵ区	SR602	下層	弥生土器	壺	ﾏﾒﾂ	ﾏﾒﾂ	2.5Y5/2 暗灰黄	2.5Y7/2 灰黄	粗・多	粗・並	-	-	-	-	-	7.8	-	7/8	
486	Ⅵ区	SR602	下層	弥生土器	甕	ﾏﾒﾂ、ﾅﾃﾞ	板ﾅﾃﾞ	7.5YR7/8 黄橙	7.5YR8/2 灰白	中・並	中・少	-	-	-	-	-	5.9	-	8/8	
487	Ⅵ区	SR602	中層	弥生土器	壺	ﾏﾒﾂ	ﾅﾃﾞ、指ｵｻｴ	7.5YR7/6 橙	10YR7/4 にぶい黄橙	中・並	-	-	細・少	-	-	-	(3.2)	-	2/8	
488	Ⅵ区	SR602	中層 (南壁 52・74 層)	弥生土器	鉢	ﾖｺﾅﾃﾞ、指ｵｻｴ後ﾍﾗﾐｶﾞｷ	ﾖｺﾅﾃﾞ、指ｵｻｴ後ﾅﾃﾞ	10YR6/3 にぶい黄橙	2.5Y3/1 黒褐	中・多	-	-	-	-	(19.8)	7	(6)	-	1/8	
489	Ⅵ区	SR602	中層	弥生土器	鉢	ﾏﾒﾂ、指ｵｻｴ、ﾏﾒﾂ	ﾏﾒﾂ	10YR6/3 にぶい黄橙	2.5YR6/6 橙	中・並	細・少	-	-	-	(9.2)	-	-	-	2/8	
490	Ⅵ区	SR602	中層 (南壁 72 層)	弥生土器	鉢	ﾏﾒﾂ、指ｵｻｴ、ﾏﾒﾂ	ﾏﾒﾂ	2.5Y8/2 灰白	10YR7/3 にぶい黄橙	細・少	細・少	-	-	-	10.6	3.6	2.4	-	6/8	
491	Ⅵ区	SR602	中層	弥生土器	鉢	ﾅﾃﾞ、指ｵｻｴ、ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	10YR8/2 灰白	10YR8/3 浅黄橙	中・多	中・少	-	-	-	-	-	5	-	8/8	付着物有
492	Ⅵ区	SR602	中層	弥生土器	鉢	指ｵｻｴ後ﾅﾃﾞ	ﾏﾒﾂ、ﾍﾗｹｽﾞﾘ	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	中・多	細・少	-	-	-	-	-	5	-	8/8	
493	Ⅵ区	SR602	下層	弥生土器	高杯	ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾍﾗﾐｶﾞｷ	ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾍﾗﾐｶﾞｷ	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙	中・少	中・少	-	細・少	-	(26.8)	-	-	-	2/8	下川津 B 類
494	Ⅵ区	SR602	中・下層	弥生土器	高杯	ﾖｺﾅﾃﾞ後ﾍﾗﾐｶﾞｷ、ﾍﾗﾐｶﾞｷ	ﾖｺﾅﾃﾞ後ﾍﾗﾐｶﾞｷ、ﾍﾗﾐｶﾞｷ・板ﾅﾃﾞ	10YR6/3 にぶい黄橙	10YR6/3 にぶい黄橙	中・多	-	細・並	細・多	-	23.2	-	-	-	4/8	下川津 B 類
495	Ⅵ区	SR602	上層	土師器	高杯	ﾖｺﾅﾃﾞ、指ｵｻｴ後ﾅﾃﾞ、ﾅﾃﾞ	ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾍﾗﾐｶﾞｷ、ﾅﾃﾞ	7.5YR8/4 浅黄橙	7.5YR8/2 灰白	細・少	-	-	-	-	23.7	23	17	-	4/8	
496	Ⅵ区	SR602	中層	土師器	高杯	剥落、指ｵｻｴ、ﾊｹﾒ (ﾏﾒﾂ)	ﾍﾗﾐｶﾞｷ、ﾏﾒﾂ	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR8/3 浅黄橙	中・並	-	-	-	-	(14.8)	11.8	(10.6)	-	3/8	
497	Ⅵ区	SR602	中層 (南壁 72 層)	土師器	高杯	ﾖｺﾅﾃﾞ、指ｵｻｴ	ﾖｺﾅﾃﾞ	5YR8/3 淡橙	5YR7/6 橙	中・少	-	-	-	-	(18.2)	-	-	-	1/8	
498	Ⅵ区	SR602	下層 (南壁 53 層)	土師器	高杯	指ｵｻｴ後ﾊｹﾒ	ﾅﾃﾞ	2.5Y8/2 灰白	2.5Y8/2 灰白	-	細・少	-	-	-	-	-	(11.4)	-	2/8	

第 23 表　兀塚遺跡出土土器観察表（16）

報告番号	調査区	遺構名	層位等	種類	器種	調整		色調		胎土					法量 (cm)				残存率	備考
						外面	内面	外部	内部	石英・長石	赤色粒	角閃石	雲母	その他	口径	器高	底径	その他		
499	Ⅵ区	SR602	中層 (南壁 72 層)	土師器	高杯	ﾅﾃﾞ、縦ﾅﾃﾞ後ﾊｹﾒ	ﾅﾃﾞ	10YR8/2 灰白	2.5Y8/1 灰白	細・少	-	-	-	-	-	-	-	2.5	8/8	
500	Ⅵ区	SR602	中層	土師器	甕	ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾊｹﾒ	ﾖｺﾅﾃﾞ、指ｵｻｴ後ﾅﾃﾞ	10YR6/3 にぶい黄橙	10YR6/3 にぶい黄橙	中・並	細・少	中・少	細・並	-	12.2	-	-	-	6/8	
501	Ⅵ区	SR602	中・下層	土師器	甕	ﾖｺﾅﾃﾞ	ﾖｺﾅﾃﾞ	2.5Y8/2 灰白	2.5Y7/2 灰黄	細・並	-	-	中・少	-	14	-	-	-	4/8	
502	Ⅵ区	SR602	上層	土師器	甕	ﾏﾒﾂ	ﾏﾒﾂ	7.5YR7/4 にぶい橙	5YR5/4 にぶい赤褐	中・並	中・並	-	-	-	(12.2)	-	-	-	3/8	
503	Ⅵ区	SR602	中層	土師器	甕	ﾖｺﾅﾃﾞ、指ｵｻｴ後ﾊｹﾒ	ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾅﾃﾞ	2.5Y7/2 灰黄	2.5Y7/2 灰黄	中・並	-	-	-	-	(18)	-	-	-	1/8	
504	Ⅵ区	SR602	上層	土師器	甕	ﾖｺﾅﾃﾞ、指ｵｻｴ	指ﾅﾃﾞ	7.5YR7/4 にぶい橙	10YR7/4 にぶい黄橙	細・少	-	-	-	-	(24.2)	-	-	-	1/8	
505	Ⅵ区	SR602	中層	土師器	甕	ﾖｺﾅﾃﾞ	ﾖｺﾅﾃﾞ後ﾊｹﾒ	10YR7/2 にぶい黄橙	7.5YR8/3 浅黄橙	中・少	-	-	-	-	(22.4)	-	-	-	1/8	
506	Ⅵ区	SR602	上層	土師器	甕	ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾊｹﾒ	ﾊｹﾒ、ﾖｺﾅﾃﾞ	10YR8/2 灰白	5YR6/6 橙	中・少	-	-	-	-	(19)	-	-	-	3/8	
507	Ⅵ区	SR602	中層	土師器	甕	ﾖｺﾅﾃﾞ、指ｵｻｴ後ﾊｹﾒ	ﾖｺﾅﾃﾞ、板ﾅﾃﾞ	10YR4/2 灰黄褐	2.5Y7/2 灰黄	中・並	-	-	-	-	(20)	-	-	-	1/8	
508	Ⅵ区	SR602	中層 (南壁 72 層)	土師器	甕	ﾖｺﾅﾃﾞ	ﾖｺﾅﾃﾞ、指ｵｻｴ	7.5YR6/4 にぶい橙	10YR6/3 にぶい黄橙	中・並	-	-	-	-	(20.6)	-	-	-	2/8	
509	Ⅵ区	SR602	中層 (南壁 72 層)	土師器	甕	ﾖｺﾅﾃﾞ、指ｵｻｴ後ﾖｺﾅﾃﾞ	ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾍﾗｹｽﾞﾘ	10YR6/4 にぶい黄橙	10YR6/2 灰黄褐	中・並	-	-	-	-	20	-	-	-	4/8	
510	Ⅵ区	SR602	上層	土師器	甕	ﾅﾃﾞ、ﾏﾒﾂ	ﾅﾃﾞ (ﾏﾒﾂ)、ﾅﾃﾞ、ﾊｹﾒ、指ｵｻｴ	10YR8/3 浅黄橙	7.5YR7/4 にぶい橙	中・並	中・少	-	-	-	(21.1)	-	-	-	1/8	
511	Ⅵ区	SR602	中層	土師器	甕	指ﾅﾃﾞ	指ｵｻｴ	2.5Y6/2 灰黄	2.5Y6/2 灰黄	中・並	-	-	-	-	-	-	-	-	8/8	
512	Ⅵ区	SR602	中層	土師器	甕	指ｵｻｴ	ﾅﾃﾞ	2.5Y8/1 灰白	2.5Y8/1 灰白	細・少	細・少	-	-	-	-	-	-	-	破片	
513	Ⅵ区	SR602	中層	土師器	甕	ﾊｹﾒ後ﾐｶﾞｷ、ﾏﾒﾂ、ﾐｶﾞｷ	ﾅﾃﾞ、指ｵｻｴ	2.5Y8/4 淡黄	2.5Y7/2 灰黄	中・並	-	-	-	-	-	-	-	-	8/8	
514	Ⅵ区	SR602	中層	土師器	製塩土器	指ｵｻｴ、ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ、指ｵｻｴ	2.5YR6/6 橙	7.5YR6/3 にぶい褐	中・並	-	-	中・少	-	14	-	-	-	4/8	外面被燃
515	Ⅵ区	SR602	中層 (南壁 74 層)	土師器	甑	ﾊｹﾒ	指ｵｻｴ後ﾅﾃﾞ、ﾏﾒﾂ	10YR8/4 浅黄橙	10YR8/4 浅黄橙	粗・多	粗・多	-	-	-	(23.2)	-	-	-	1/8	
516	Ⅵ区	SR602	上層	土師器	甑	ﾖｺﾅﾃﾞ、指ｵｻｴ後ﾊｹﾒ	ﾊｹﾒ後ﾍﾗｹｽﾞﾘ	10YR8/2 灰白	10YR7/2 にぶい黄橙	中・並	-	-	-	-	(25)	-	-	-	3/8	
517	Ⅵ区	SR602	上層 (南壁 54 層)	土師器	竈	ﾀﾀｷ後指ｵｻｴ後ﾊｹﾒ	板ﾅﾃﾞ、ﾅﾃﾞ	2.5Y8/2 灰白	2.5Y7/1 灰白	中・多	-	-	-	-	-	-	-	-	破片	
518	Ⅵ区	SR602	上層	土製品	羽口	ﾅﾃﾞ	ﾏﾒﾂ	5YR7/6 橙	5YR7/6 橙	中・並	-	-	-	-	-	-	-	-	破片	
519	Ⅵ区	SR602	上層	須恵器	蓋	回転ﾍﾗｷﾘ、回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ、回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N6/ 灰	N7/ 灰白	-	-	-	-	中・少	12	4.2	7.9	-	7/8	
520	Ⅵ区	SR602	上層	須恵器	蓋	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	5Y7/1 灰白	5Y8/1 灰白	-	-	-	-	細・少	(12)	-	-	-	2/8	
521	Ⅵ区	SR602	中層 (南壁 52 層)	須恵器	蓋	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	2.5Y7/1 灰白	2.5Y8/1 灰白	-	-	-	-	中・少	(11)	-	-	-	1/8	
522	Ⅵ区	SR602	中層 (南壁 73 層)	須恵器	蓋	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N6/ 灰	N7/ 灰白	-	-	-	-	細・少	(11.4)	-	-	-	2/8	
523	Ⅵ区	SR602	中層 (南壁 68 層)	須恵器	蓋	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ	回転ﾅﾃﾞ	N6/ 灰	N6/ 灰	-	-	-	-	細・少	12	-	-	-	4/8	
524	Ⅵ区	SR602	上・中層	須恵器	蓋	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N7/ 灰白	N8/ 灰白	-	-	-	-	中・少	12.4	3.8	6.8	-	7/8	
525	Ⅵ区	SR602	上層	須恵器	蓋	回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ、回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N6/ 灰	N6/ 灰	-	-	-	-	中・少	-	-	-	-	1/8	
526	Ⅵ区	SR602	上・中層	須恵器	蓋	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾅﾃﾞ後仕上げﾅﾃﾞ	N7/ 灰白	N6/ 灰	-	-	-	-	中・少	12.6	3.8	7	-	7/8	

第 24 表　兀塚遺跡出土土器観察表（17）

報告番号	調査区	遺構名	層位等	種類	器種	調整		色調		胎土					法量 (cm)				残存率	備考
						外面	内面	外部	内部	石英・長石	赤色粒	角閃石	雲母	その他	口径	器高	底径	その他		
527	Ⅵ区	SR602	上・中層 (南壁 48･51 層)	須恵器	蓋	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ、ﾍﾗｷﾘ	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾅﾃﾞ後仕上げﾅﾃﾞ	N6/ 灰	N8/ 灰白	-	-	-	-	細・少	(11.3)	3.7	(8.2)	-	3/8	
528	Ⅵ区	SR602	中層	須恵器	蓋	回転ﾅﾃﾞ、ﾍﾗｷﾘ	回転ﾅﾃﾞ	N6/ 灰	N6/ 灰	-	-	-	-	中・少	13.4	4.2	7.5	-	8/8	歪み有
529	Ⅵ区	SR602	上・中層	須恵器	蓋	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ	回転ﾅﾃﾞ	5PB6/1 青灰	5PB7/1 明青灰	-	-	-	-	中・少	(13.4)	-	-	-	2/8	
530	Ⅵ区	SR602	上・中層 (南壁 52 層)	須恵器	蓋	ﾍﾗｷﾘ、回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	5Y7/1 灰白	N7/ 灰白	-	-	-	-	中・少	-	-	7	-	4/8	自然釉付着
531	Ⅵ区	SR602	上層	須恵器	蓋	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N6/ 灰	N7/ 灰白	-	-	-	-	中・少	(11)	-	-	-	1/8	
532	Ⅵ区	SR602	中層 (南壁 70 層)	須恵器	蓋	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ	回転ﾅﾃﾞ	N7/ 灰白	N7/ 灰白	-	-	-	-	細・少	-	-	-	-	4/8	外面ﾍﾗ記号
533	Ⅵ区	SR602	中層 (南壁 51 層)	須恵器	蓋	ﾍﾗｷﾘ、回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ、回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N3/ 暗灰	N7/ 灰白	-	-	-	-	粗・少	11.9	3.4	7.6	-	8/8	口径歪み有 (11.9 ～ 12.6)
534	Ⅵ区	SR602	上層	須恵器	蓋	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N7/ 灰白	N6/ 灰	-	-	-	-	細・微	(9.2)	-	-	-	1/8	
535	Ⅵ区	SR602	中層 (南壁 73 層)	須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ、回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ後仕上げﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾅﾃﾞ後仕上げﾅﾃﾞ	N6/ 灰	N6/ 灰	-	-	-	-	中・少	10.4	4.6	12	-	4/8	
536	Ⅵ区	SR602	中層	須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ、ﾍﾗｷﾘ	回転ﾅﾃﾞ	N6/ 灰	N7/ 灰白	-	-	-	-	中・少	11.1	3.9	7.7	-	8/8	
537	Ⅵ区	SR602	中層 (南壁 52 層)	須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ	回転ﾅﾃﾞ	N7/ 灰白	N7/ 灰白	-	-	-	-	中・少	(11.6)	-	-	-	2/8	
538	Ⅵ区	SR602	上層	須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ	回転ﾅﾃﾞ	N5/ 灰	N6/ 灰	-	-	-	-	中・少	(15.5)	-	-	-	1/8	
539	Ⅵ区	SR602	上層	須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ	回転ﾅﾃﾞ	N7/ 灰白	N7/ 灰白	-	-	-	-	細・少	(12)	-	-	-	3/8	
540	Ⅵ区	SR602	中層 (南壁 51 層)	須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ、回転ﾍﾗｷﾘ	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾅﾃﾞ後仕上げﾅﾃﾞ	N8/ 灰白	N8/ 灰白	-	-	-	-	中・多	12	3.7	8.2	14.7	8/8	
541	Ⅵ区	SR602	中層	須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ、回転ﾍﾗｷﾘ	回転ﾅﾃﾞ	N7/ 灰白	N7/ 灰白	-	-	-	-	細・少	10.7	3.1	8.4	-	8/8	
542	Ⅵ区	SR602		須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N8/ 灰白	7.5Y7/1 灰白	-	-	-	-	細・少	(11.2)	-	-	-	2/8	
543	Ⅵ区	SR602	上層 (南壁 55 層)	須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N6/ 灰	N6/ 灰	-	-	-	-	細・少	(6.4)	-	-	-	1/8	
544	Ⅵ区	SR602	中層 (南壁 74 層)	須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｷﾘ	回転ﾅﾃﾞ	5Y8/1 灰白	N8/ 灰白	-	-	-	-	細・少	(12.4)	-	-	-	1/8	
545	Ⅵ区	SR602	中層	須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｷﾘ後回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾅﾃﾞ後仕上げﾅﾃﾞ	N7/ 灰白	5Y7/1 灰白	-	-	-	-	細・少	10.4	4.4	7.2	-	8/8	重ね焼痕、口径歪み有 (10.4 ～ 11.6)
546	Ⅵ区	SR602	上層	須恵器	杯	回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ、回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N7/ 灰白	N7/ 灰白	-	-	-	-	細・少	(10.8)	-	-	-	1/8	
547	Ⅵ区	SR602	上層 (南壁 49 層)	須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N5/ 灰	N6/ 灰	-	-	-	-	細・微	(9.8)	-	-	-	2/8	
548	Ⅵ区	SR602	中層 (南壁 69 層)	須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ、ﾍﾗｷﾘ後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N6/ 灰	N7/ 灰白	-	-	-	-	細・少	(11.3)	3.3	(6.7)	-	3/8	
549	Ⅵ区	SR602	上層	須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	5B7/1 明青灰	5B7/1 明青灰	-	-	-	-	細・少	(13.2)	-	-	-	1/8	
550	Ⅵ区	SR602	中層 (南壁 68・69 層)	須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ	回転ﾅﾃﾞ	N7/ 灰白	N7/ 灰白	-	-	-	-	細・少	11.6	3.5	8.2	-	4/8	
551	Ⅵ区	SR602	上層	須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｷﾘ	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾅﾃﾞ後仕上ﾅﾃﾞ	N7/ 灰白	N7/ 灰白	-	-	-	-	中・少	11.3	3.8	7.5	-	7/8	

第 25 表　兀塚遺跡出土土器観察表（18）

報告番号	調査区	遺構名	層位等	種類	器種	調整		色調		胎土					法量 (cm)				残存率	備考
						外面	内面	外部	内部	石英・長石	赤色粒	角閃石	雲母	その他	口径	器高	底径	その他		
552	Ⅵ区	SR602	中層	須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｷﾘ後回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ	回転ﾅﾃﾞ	N8/ 灰白	N8/ 灰白	-	-	-	-	中・少	11.4	4	7.8	-	8/8	口径歪み有 (10.3 ～ 12.1)
553	Ⅵ区	SR602	上・中 (南壁 74 層)	須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾅﾃﾞ後仕上げﾅﾃﾞ	5Y6/1 灰	N7/ 灰白	-	-	-	-	細・少	(10.2)	3.5	(8.4)	-	3/8	
554	Ⅵ区	SR602	中層	須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｷﾘ	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾅﾃﾞ後仕上げﾅﾃﾞ	N8/ 灰白	N8/ 灰白	-	-	-	-	中・少	11.3	3.1	8	13.8	8/8	
555	Ⅵ区	SR602	上・中層 (南壁 72 層)	須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ、ﾍﾗｷﾘ	回転ﾅﾃﾞ	N6/ 灰	N7/ 灰白	-	-	-	-	中・少	10.4	-	-	-	4/8	
556	Ⅵ区	SR602	上層	須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ、回転ﾍﾗｷﾘ	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾅﾃﾞ後仕上げﾅﾃﾞ	N6/ 灰	N7/ 灰白	-	-	-	-	細・少	(10.5)	3.3	(6.2)	-	3/8	
557	Ⅵ区	SR602	上・中層 (南壁 54･70 層)	須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ	回転ﾅﾃﾞ	N7/ 灰白	N7/ 灰白	-	-	-	-	細・微	11	3.3	6.6	-	7/8	
558	Ⅵ区	SR602	中層 (南壁 70 層)	須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N6/ 灰	N7/ 灰白	-	-	-	-	細・少	(11.8)	-	-	-	1/8	
559	Ⅵ区	SR602	中層 (南壁 70 層)	須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N4/ 灰	5PB7/1 明青灰	-	-	-	-	中・少	(12)	-	-	-	1/8	
560	Ⅵ区	SR602	上層	須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ	回転ﾅﾃﾞ	N6/ 灰	5PB6/1 青灰	-	-	-	-	中・少	-	-	-	-	1/8	
561	Ⅵ区	SR602	中層 (南壁 51 層)	須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ	回転ﾅﾃﾞ	N7/ 灰白	N8/ 灰白	-	-	-	-	細・少	8.7	3.5	5	-	8/8	
562	Ⅵ区	SR602	中層	須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｷﾘ	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾅﾃﾞ後仕上げﾅﾃﾞ	N7/ 灰白	N7/ 灰白	-	-	-	-	細・少	9.7	5	6.4	-	4/8	
563	Ⅵ区	SR602	中層 (南壁 51 層)	須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ	回転ﾅﾃﾞ	N7/ 灰白	N8/ 灰白	-	-	-	-	細・少	8.4	4.6	6.4	-	4/8	
564	Ⅵ区	SR602	中層	須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ	回転ﾅﾃﾞ	5PB3/1 暗青灰	5PB3/1 暗青灰	-	-	-	-	中・少	9.2	4.8	7.8	-	4/8	
565	Ⅵ区	SR602	中層 (南壁 70 層)	須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ	回転ﾅﾃﾞ	N7/ 灰白	N7/ 灰白	-	-	-	-	細・少	(10.2)	-	-	-	2/8	
566	Ⅵ区	SR602	上層	須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ、ﾍﾗｷﾘ後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N6/ 灰	N6/ 灰	-	-	-	-	細・少	(9.9)	-	-	-	1/8	
567	Ⅵ区	SR602	上・中層 (南壁 51 層)	須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ	回転ﾅﾃﾞ	N6/ 灰	N7/ 灰白	-	-	-	-	細・少	(10.1)	-	-	-	1/8	
568	Ⅵ区	SR602		須恵器	高杯	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ、ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N7/ 灰白	N7/ 灰白	-	-	-	-	中・多	-	-	-	4	5/8	
569	Ⅵ区	SR602	中層	須恵器	高杯	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ、回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾅﾃﾞ後仕上げﾅﾃﾞ、剥落	N5/ 灰	N5/ 灰	-	-	-	-	細・少	-	-	-	3.2	8/8	
570	Ⅵ区	SR602	中層 (南壁 52・74 層)	須恵器	高杯	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ	回転ﾅﾃﾞ	N5/ 灰	5BG4/1 暗青灰	-	-	-	-	細・少	(12.2)	-	-	-	2/8	
571	Ⅵ区	SR602	中・下層	須恵器	高杯	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾅﾃﾞ後仕上げﾅﾃﾞ	N6/ 灰	N6/ 灰	-	-	-	-	細・少	12.8	9.2	10	-	7/8	
572	Ⅵ区	SR602	中層 (南壁 52・68・72 層)	須恵器	高杯	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ、回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾅﾃﾞ後仕上げﾅﾃﾞ	N7/ 灰白	N6/ 灰	-	-	-	-	細・少	12.9	7.3	8.5	-	6/8	
573	Ⅵ区	SR602	中層 (南壁 70 層)	須恵器	高杯	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ後回転ﾅﾃﾞ、回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N8/ 灰白	N7/ 灰白	-	-	-	-	細・少	12.4	7.2	9.2	-	8/8	焼成不良
574	Ⅵ区	SR602	中層	須恵器	高杯	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾅﾃﾞ後仕上げﾅﾃﾞ	N8/ 灰白	N8/ 灰白	-	-	-	-	細・少	12.8	6.7	8.4	-	6/8	

第 26 表　兀塚遺跡出土土器観察表（19）

報告番号	調査区	遺構名	層位等	種類	器種	調整		色調		胎土					法量 (cm)				残存率	備考
						外面	内面	外部	内部	石英・長石	赤色粒	角閃石	雲母	その他	口径	器高	底径	その他		
575	Ⅵ区	SR602	中層 (南壁 52 層)	須恵器	高杯	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	7.5Y8/1 灰白	N7/ 灰白	-	-	-	-	細・少	(13.2)	-	-	-	1/8	
576	Ⅵ区	SR602	上層	須恵器	高杯	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ	回転ﾅﾃﾞ	N8/ 灰白	N8/ 灰白	-	-	-	-	細・少	14.1	-	-	-	8/8	
577	Ⅵ区	SR602	上・中層	須恵器	高杯	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	5Y7/1 灰白	5Y8/1 灰白	-	-	-	-	細・少	11.7	14.1	11	-	7/8	透かし穴 2、内・外面自然釉付着
578	Ⅵ区	SR602	上・中層 (南壁 51・54・68 層)	須恵器	提瓶	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ、ﾍﾗｷﾘ後ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ	ﾖｺﾅﾃﾞ、回転ﾅﾃﾞ、貼付け後指ｵｻｴ、回転ﾅﾃﾞ	N7/ 灰白	N7/ 灰白	-	-	-	-	細・少	5.2	-	-	-	6/8	
579	Ⅵ区	SR602	上・中・下層 (南壁 51・70 層)	須恵器	横瓶	ﾀﾀｷ後ｶｷ目	同心円	N8/ 灰白	N8/ 灰白	-	-	-	-	細・少	-	-	-	-	4/8	
580	Ⅵ区	SR602	上層 (南壁 49・54 層)	須恵器	短頸壺	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ	5Y5/1 灰	N7/ 灰白	-	-	-	-	中・少	-	-	-	16.4	2/8	沈線 (1 ～ 2 条)
581	Ⅵ区	SR602	上・中層	須恵器	短頸壺	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N6/ 灰	7.5Y6/1 灰	-	-	-	-	粗・多	-	-	-	20.4	2/8	重ね焼痕、斜行文
582	Ⅵ区	SR602	中層 (南壁 74 層)	須恵器	短頸壺	回転ﾅﾃﾞ、指ｵｻｴ、回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ	回転ﾅﾃﾞ、指ﾅﾃﾞ	N8/ 灰白	N8/ 灰白	-	-	-	-	細・少	-	-	-	20.4	4/8	櫛描文
583	Ⅵ区	SR602	上層	須恵器	壺	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N7/ 灰白	N7/ 灰白	-	-	-	-	細・少	(8)	-	-	-	2/8	
584	Ⅵ区	SR602	中層 (南壁 70・72 層)	須恵器	壺	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N6/ 灰	N6/ 灰	-	-	-	-	細・少	(17.2)	-	-	-	2/8	波状文
585	Ⅵ区	SR602	中層	須恵器	甕	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N6/ 灰	N7/ 灰白	-	-	-	-	中・少	(18.6)	-	-	-	3/8	
586	Ⅵ区	SR602	上層 (南壁 54 層)	須恵器	甕	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N8/ 灰白	10YR8/1 灰白	-	-	-	-	細・少	(20.8)	-	-	-	1/8	
587	Ⅵ区	SR602	中層	須恵器	甕	ﾊｹﾒ、回転ﾅﾃﾞ	ﾊｹﾒ、回転ﾅﾃﾞ	5Y4/1 灰	5Y4/1 灰	-	-	-	-	中・少	(25.6)	-	-	-	1/8	沈線 1 条
588	Ⅵ区	SR602	中層 (南壁 51 層)	須恵器	甕	ﾀﾀｷ、指ｵｻｴ・ﾅﾃﾞ、ﾀﾀｷ	同心円	N8/ 灰白	2.5Y8/2 灰白	-	-	-	-	中・少	-	-	-	-	破片	
589	Ⅵ区	SR602	上・中層 (南壁 54・72 層)	須恵器	甕	ﾀﾀｷ後ｶｷ目	同心円	2.5Y7/1 灰白	2.5Y7/1 灰白	-	-	-	-	細・少	-	-	-	-	2/8	
590	Ⅵ区	SR602	中層 (南壁 51 層)	須恵質	土馬	ﾍﾗｹｽﾞﾘ	-	N6/ 灰	N6/ 灰	-	-	-	-	細・少	高さ 9.6	幅 3	厚さ 2.5	-	8/8	脚部片
607	Ⅵ区	SR603	中層 (南壁 35 層)	須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｷﾘ	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾅﾃﾞ後仕上げﾅﾃﾞ	N6/ 灰	N7/ 灰白	-	-	-	-	中・多	11.3	3.8	7.8	-	7/8	
608	Ⅵ区	SR603	中層	須恵器	高杯	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾅﾃﾞ後仕上げﾅﾃﾞ	N5/ 灰	N6/ 灰	-	-	-	-	中・多	12.4	8.1	8.8	-	8/8	
609	Ⅵ区	SR603	中・下層 (南壁 35 層)	須恵器	高杯	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	5PB7/1 明青灰	5PB5/1 青灰	-	-	-	-	細・少	-	-	-	2.8	8/8	
610	Ⅵ区	SR603	中層	土師器	鍋	ﾖｺﾅﾃﾞ	ﾖｺﾅﾃﾞ、板ﾅﾃﾞ	7.5YR7/4 にぶい橙	10YR7/3 にぶい黄橙	細・多	-	-	-	-	-	-	-	-	破片	
611	Ⅵ区	SR603	中層	土師器	甕	ﾖｺﾅﾃﾞ	ﾊｹﾒ	2.5Y7/2 灰黄	2.5Y7/3 浅黄	中・並	中・並	-	-	-	(28.8)	-	-	-	1/8	
612	Ⅵ区	SR603	上層	須恵器	壺	回転ﾅﾃﾞ、ｶｷ目	回転ﾅﾃﾞ	N8/ 灰白	N8/ 灰白	-	-	-	-	細・多	(19.2)	-	-	-	1/8	内面ﾍﾗ描きで記号文
613	Ⅵ区	SR603	上層	須恵器	甕	回転ﾅﾃﾞ、ﾀﾀｷ後ｶｷ目	回転ﾅﾃﾞ、同心円	5Y8/1 灰白	5Y8/1 灰白	-	-	-	-	細・少	(17.8)	-	-	-	1/8	
614	Ⅵ区	SR603	中層 (南壁 35 層)	須恵器	甕	回転ﾅﾃﾞ、ﾊｹﾒ、ｶｷ目、ﾀﾀｷ	回転ﾅﾃﾞ、同心円	N6/ 灰	N6/ 灰	-	-	-	-	細・少	(16.4)	-	-	-	3/8	
615	Ⅵ区	SR603	中層 (南壁 35 層)	須恵器	甕	回転ﾅﾃﾞ後ﾀﾀｷ後ｶｷ目、ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ、同心円	N8/ 灰白	N8/ 灰白	-	-	-	-	細・少	-	-	-	-	8/8	外面自然釉付着
616	Ⅵ区	SR603	中層 (南壁 35 層)	土師器	甑	指ﾅﾃﾞ、ﾏﾒﾂ、指ｵｻｴ、ﾅﾃﾞ、ﾖｺﾅﾃﾞ	ﾖｺﾅﾃﾞ	2.5Y7/1 灰白	2.5Y7/2 灰黄	中・並	-	-	-	-	-	-	-	-	破片	

第 27 表　兀塚遺跡出土土器観察表（20）

報告番号	調査区	遺構名	層位等	種類	器種	調整		色調		胎土					法量 (cm)				残存率	備考
						外面	内面	外部	内部	石英・長石	赤色粒	角閃石	雲母	その他	口径	器高	底径	その他		
617	Ⅵ区	SR603	中層 (南壁 35 層)	弥生土器	紡錘車未製品	ﾊｹﾒ	指ｵｻｴ	10YR5/2 灰黄褐	10YR6/3 にぶい黄橙	中・並	-	-	-	-	高さ 4.2	幅 4.9	厚さ 0.6	-	破片	
619	Ⅵ区	SR604	中層	須恵器	蓋	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ	回転ﾅﾃﾞ	N5/ 灰	N6/ 灰	-	-	-	-	中・少	(11.2)	3.8	-	ﾂﾏﾐ 2.8	3/8	
620	Ⅵ区	SR604	中層	須恵器	蓋	ﾍﾗｷﾘ、回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ、回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N6/ 灰	N6/ 灰	-	-	-	-	細・少	(13.2)	-	-	-	2/8	
621	Ⅵ区	SR604	上層	須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N7/ 灰白	N7/ 灰白	-	-	-	-	中・少	9.6	-	-	-	4/8	
622	Ⅵ区	SR604	下層	須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ	回転ﾅﾃﾞ	N7/ 灰白	N7/ 灰白	-	-	-	-	細・少	(11.8)	-	-	-	1/8	
623	Ⅵ区	SR604	上層	須恵器	鉢	回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ、回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N6/ 灰	N6/ 灰	-	-	-	-	中・多	13.4	5.9	10	-	4/8	
624	Ⅵ区	SR604	中層	土師器	高杯	ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾊｹﾒ、指ｵｻｴ後ﾊｹﾒ	ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾍﾗﾐｶﾞｷ	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/4 にぶい橙	中・並	中・並	-	-	-	13	-	-	-	7/8	
625	Ⅵ区	SR604	中層	須恵器	高杯	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾅﾃﾞ後仕上げﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ	N6/ 灰	N6/ 灰	-	-	-	-	中・少	9.6	-	-	-	4/8	透かし穴 2
626	Ⅵ区	SR604	下層	須恵器	高杯	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ	回転ﾅﾃﾞ	N7/ 灰白	N7/ 灰白	-	-	-	-	中・少	13	-	-	-	8/8	透かし穴 2
627	Ⅵ区	SR604	中層	須恵器	高杯	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ後回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	2.5Y8/1 灰白	2.5Y8/1 灰白	-	-	-	-	中・少	12.2	7.9	10.3	-	8/8	口縁部歪み有
628	Ⅵ区	SR604	中層	須恵器	高杯	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	5Y6/1 灰	5Y7/1 灰白	-	-	-	-	細・少	-	-	(9.9)	-	1/8	
629	Ⅵ区	SR604	中層	須恵器	瓶	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ	回転ﾅﾃﾞ	N7/ 灰白	N8/ 灰白	-	-	-	-	細・少	-	-	-	12.2	3/8	
630	Ⅵ区	SR604	中層	須恵器	瓶	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	5Y6/1 灰	N8/ 灰白	-	-	-	-	中・少	-	-	-	13.2	3/8	
631	Ⅵ区	SR604	中層	須恵器	横瓶	ﾀﾀｷ後ｶｷ目	当て具痕	N7/ 灰白	N7/ 灰白	-	-	-	-	細・少	-	-	-	-	破片	
632	Ⅵ区	SR604	中層	土師器	甕	ﾖｺﾅﾃﾞ	ﾖｺﾅﾃﾞ	5YR6/8 橙	10YR8/3 浅黄橙	中・並	-	-	-	-	18.8	-	-	-	5/8	
633	Ⅵ区	SR604	上層	土師器	甕	ﾅﾃﾞ、ﾊｹﾒ	ﾊｹﾒ、指ｵｻｴ後ﾅﾃﾞ	7.5YR6/4 にぶい橙	10YR5/2 灰黄褐	粗・多	-	-	細・少	-	15	-	-	-	4/8	
634	Ⅵ区	SR604	上層	土師器	甕	ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾊｹﾒ、指ｵｻｴ	ﾊｹﾒ	5YR5/4 にぶい赤褐	10YR6/2 灰黄褐	中・並	-	-	-	-	(13.8)	-	-	-	3/8	
635	Ⅵ区	SR604	中層	土師器	甕	ﾖｺﾅﾃﾞ、指ｵｻｴ	ﾖｺﾅﾃﾞ、指ｵｻｴ	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR7/4 にぶい橙	中・並	中・少	-	-	-	(18)	-	-	-	1/8	
636	Ⅵ区	SR604	中層	須恵器	甕	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ、当て具痕	7.5Y4/1 灰	N6/ 灰	-	-	-	-	中・少	(20.2)	-	-	-	1/8	内・外面自然釉付着、外面ﾍﾗ描き波状文
637	Ⅵ区	SR604	中層	須恵器	甕	回転ﾅﾃﾞ、ｶｷ目後ﾀﾀｷ、ｶｷ目	回転ﾅﾃﾞ、ﾀﾀｷ	N5/ 灰	N5/ 灰	-	-	-	-	中・少	-	-	-	-	1/8	底部の 3/8
638	Ⅵ区	SR604	上層	須恵器	甕	ﾊｹﾒ、ﾀﾀｷ・ｶｷ目	回転ﾅﾃﾞ、同心円	N6/ 灰	N7/ 灰白	-	-	-	-	無	32.7	75.3	-	-	7/8	波状文、沈線、外面自然釉付着
639	Ⅵ区	SR604	上層	土師器	竈	ﾅﾃﾞ、指ｵｻｴ後ﾅﾃﾞ、ﾊｹﾒ	ﾅﾃﾞ、指ｵｻｴ後ﾅﾃﾞ	10YR8/2 灰白	7.5YR8/4 浅黄橙	中・並	中・少	-	-	-	-	-	-	-	破片	
641	Ⅵ区	包含層		須恵器	蓋	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ、回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ後仕上げﾅﾃﾞ	N7/ 灰白	N7/ 灰白	-	-	-	-	細・少	(20.3)	1.9	-	ﾂﾏﾐ (2.8)	1/8	
642	Ⅵ区	包含層		須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ	回転ﾅﾃﾞ	N6/ 灰	N6/ 灰	-	-	-	-	中・少	-	-	(11)	-	1/8	
643	Ⅵ区	包含層		土製品	羽口	ﾅﾃﾞ	ﾏﾒﾂ	N7/ 灰白	5YR6/8 橙	細・並	-	-	-	-	-	-	-	-	破片	
647	Ⅶ－１区	SB701(SP05)		土師器	甕	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	7.5YR6/4 にぶい橙	5YR5/4 にぶい赤褐	細・多	-	-	細・並	-	-	-	-	-	破片	

第 28 表　兀塚遺跡出土土器観察表（21）

報告番号	調査区	遺構名	層位等	種類	器種	調整		色調		胎土					法量 (cm)				残存率	備考
						外面	内面	外部	内部	石英・長石	赤色粒	角閃石	雲母	その他	口径	器高	底径	その他		
648	Ⅶ－１区	SB702(SP03)		須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	2.5Y8/1 灰白	2.5Y8/1 灰白	-	-	-	-	細・少	-	-	-	-	破片	
649	Ⅶ－１区	SB702(SP08)		土師器	高杯	指ｵｻｴ、ﾅﾃﾞ	しぼり目	7.5YR8/6 浅黄橙	7.5YR7/6 橙	中・少	-	-	-	-	-	-	-	2.4	1/8	
650	Ⅶ－１区	SB702(SP06)		須恵器	甕	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N6/ 灰	N6/ 灰	-	-	-	-	細・少	(10.8)	-	-	-	1/8	
651	Ⅶ－１区	SB702(SP02)		須恵器	壺	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N5/ 灰	10YR5/1 褐灰	-	-	-	-	細・少	(8.8)	-	-	6.6	1/8	内面自然釉付着、波状文
652	Ⅶ－１区	SB702(SP10)		土師器	甕	ﾖｺﾅﾃﾞ	ﾖｺﾅﾃﾞ	10YR7/4 にぶい黄橙	2.5Y8/2 灰白	中・少	-	-	細・少	-	(16.8)	-	-	-	1/8	
653	Ⅶ－１区	SB702(SP03)		土師器	甕	ﾖｺﾅﾃﾞ	ﾊｹﾒ	7.5YR7/4 にぶい橙	5YR6/6 橙	中・少	-	-	-	-	-	-	-	-	破片	
654	Ⅶ－１区	SB702(SP01)		瓦器	椀	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N4/ 灰	N4/ 灰	中・少	-	-	-	-	-	-	-	-	1/8	
655	Ⅶ－１区	SB706(SP02)		須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N6/ 灰	N6/ 灰	-	-	-	-	細・少	-	-	-	-	破片	
656	Ⅶ－１区	SB706(SP01)		須恵器	杯	回転ﾍﾗｷﾘ	回転ﾅﾃﾞ後仕上げﾅﾃﾞ	N6/ 灰	N7/ 灰白	-	-	-	-	細・少	-	-	(12.2)	-	1/8	
657	Ⅶ－１区	SB706(SP01)		須恵器	高杯	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N7/ 灰白	2.5GY6/1 オリーブ灰	-	-	-	-	中・少	-	-	-	-	破片	
658	Ⅶ－１区	SX701		土師器	甕	ﾊｹﾒ、ﾅﾃﾞ、指ｵｻｴ	ｵｻｴ、ﾅﾃﾞ	10YR8/1 灰白	10YR8/3 浅黄橙	中・並	中・多	-	-	-	-	-	-	-	破片	
659	Ⅶ－２区	SH701		須恵器	蓋	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ、回転ﾍﾗｷﾘ後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾅﾃﾞ後仕上げﾅﾃﾞ	N7/ 灰白	N7/ 灰白	-	-	-	-	中・少	11	3.7	7.7	-	7/8	
660	Ⅶ－２区	SH701		須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ、回転ﾍﾗｷﾘ後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾅﾃﾞ後仕上げﾅﾃﾞ	N6/ 灰	N7/ 灰白	-	-	-	-	細・少	10	3.7	9.1	-	8/8	
661	Ⅶ－２区	SH701		須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ、回転ﾍﾗｷﾘ	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾅﾃﾞ後仕上げﾅﾃﾞ	N7/ 灰白	N8/ 灰白	-	-	-	-	細・少	10	4.1	7	-	8/8	口径歪み有 (10 ～ 10.5)
662	Ⅶ－２区	SH701		須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ、回転ﾍﾗｷﾘ	回転ﾅﾃﾞ	N7/ 灰白	N7/ 灰白	-	-	-	-	細・少	10.2	4.4	6.6	-	8/8	
663	Ⅶ－２区	SH701		須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	2.5Y7/1 灰白	N8/ 灰白	-	-	-	-	中・少	(10.2)	-	-	-	1/8	
664	Ⅶ－２区	SH701		須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｷﾘ後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N7/ 灰白	N7/ 灰白	-	-	-	-	中・少	11.9	3.4	6.3	-	8/8	
665	Ⅶ－２区	SH701		須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N7/ 灰白	N7/ 灰白	-	-	-	-	中・少	-	-	-	-	破片	
666	Ⅶ－２区	SH701		須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N7/ 灰白	N7/ 灰白	-	-	-	-	中・少	-	-	-	-	破片	
667	Ⅶ－２区	SH701		土師器	杯	ﾖｺﾅﾃﾞ、指ｵｻｴ後ﾅﾃﾞ	ﾖｺﾅﾃﾞ、指ｵｻｴ後ﾅﾃﾞ	7.5YR8/6 浅黄橙	7.5YR8/6 浅黄橙	中・少	中・少	-	-	-	9.4	4.6	3.4	-	7/8	
668	Ⅶ－２区	SH701		土師器	杯	ﾖｺﾅﾃﾞ、指ｵｻｴ後ﾅﾃﾞ	ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾊｹﾒ後ﾅﾃﾞ	7.5YR7/6 橙	7.5YR7/6 橙	中・並	細・小	-	-	-	8.4	3.2	3.8	-	4/8	
669	Ⅶ－２区	SH701		土師器	高杯	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ、回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	2.5Y8/3 淡黄	2.5Y8/2 灰白	中・少	中・少	-	-	-	-	-	-	-	3/8	
670	Ⅶ－２区	SH701		須恵器	高杯	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ、回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾅﾃﾞ後仕上げﾅﾃﾞ	2.5Y8/2 灰白	5Y7/1 灰白	-	-	-	-	細・少	11.7	6.6	7.7	-	8/8	焼成不良
671	Ⅶ－２区	SH701		土師器	甕	ﾖｺﾅﾃﾞ、指ｵｻｴ後ﾅﾃﾞ、ﾅﾃﾞ	ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾊｹﾒ、板ﾅﾃﾞ	10YR7/3 にぶい黄橙	2.5YR6/8 橙	中・並	-	-	-	-	(10.2)	-	-	-	1/8	
672	Ⅶ－２区	SH701		土師器	甕	ﾊｹﾒ、指ｵｻｴ後ﾊｹﾒ	指ｵｻｴ	5YR7/6 橙	10YR8/3 浅黄橙	中・並	粗・少	-	-	-	-	-	8.6	-	7/8	
673	Ⅶ－２区	SH701(P1)		黒色土器	椀	回転ﾅﾃﾞ後ﾍﾗﾐｶﾞｷ、回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ後ﾍﾗﾐｶﾞｷ	2.5Y8/2 灰白	2.5Y4/1 黄灰	細・並	-	-	-	-	-	-	(6.2)	-	2/8	
674	Ⅶ－２区	SB715(SP07)		須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	10Y6/1 灰	10Y6/1 灰	-	-	-	-	細・少	(10)	-	-	-	1/8	

第 29 表　兀塚遺跡出土土器観察表（22）

報告番号	調査区	遺構名	層位等	種類	器種	調整		色調		胎土					法量 (cm)				残存率	備考
						外面	内面	外部	内部	石英・長石	赤色粒	角閃石	雲母	その他	口径	器高	底径	その他		
675	Ⅶ－２区	SB715(SP06)		須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N5/ 灰	N7/ 灰白	-	-	-	-	無	-	-	-	-	破片	
676	Ⅶ－２区	SB715(SP03)		土師器	杯	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	5Y4/1 灰	N4/ 灰	中・並	-	-	-	-	-	-	-	-	破片	
677	Ⅶ－２区	SB716(SP09)		須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N6/ 灰	N6/ 灰	-	-	-	-	細・少	-	-	-	-	破片	
679	Ⅶ－２区	SB718(SP04)		須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	7.5Y7/1 灰白	7.5Y7/1 灰白	-	-	-	-	細・少	-	-	-	-	破片	
680	Ⅶ－２区	SB718SP12)		須恵器	高杯	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	7.5Y6/1 灰	7.5Y7/1 灰白	-	-	-	-	細・少	-	-	(10.9)	-	1/8	
681	Ⅶ－２区	SB721(SP06)		須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N6/ 灰	N6/ 灰	-	-	-	-	細・少	-	-	-	-	破片	
682	Ⅶ－１区	SB722(SP03)		土師器	杯	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ	回転ﾅﾃﾞ	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR8/4 浅黄橙	中・並	中・少	-	-	-	-	-	-	-	破片	
683	Ⅶ－２区	SB723(SP08)		黒色土器	椀	ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾅﾃﾞ	ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾍﾗﾐｶﾞｷ	2.5Y7/2 灰黄	2.5Y4/1 黄灰	中・並	-	-	-	-	(14.6)	-	-	-	1/8	黒色土器 A 類
684	Ⅶ－２区	SB723(SP06)		土師器	足釜	指ﾅﾃﾞ	指ﾅﾃﾞ	10YR8/4 浅黄橙	10YR7/2 にぶい黄橙	中・並	中・少	-	-	-	-	-	-	-	8/8	
685	Ⅶ－２区	SB724(SP19)		須恵器	壺	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ後回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N5/ 灰	N7/ 灰白	-	-	-	-	中・少	-	-	-	-	破片	外面自然釉付着
686	Ⅶ－２区	SB724(SP12)		土師器	鍋	指ｵｻｴ後ﾅﾃﾞ	指ｵｻｴ後ﾅﾃﾞ	5YR6/6 橙	7.5YR6/6 橙	中・並	細・少	-	-	-	-	-	-	-	破片	穿孔
689	Ⅶ－２区	SB725(SP04)		土師器	杯	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｷﾘ	回転ﾅﾃﾞ	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	中・少	中・少	-	-	-	(9.8)	1.7	(6)	-	1/8	
690	Ⅶ－２区	SB725(SP01)		土師器	焙烙	指ｵｻｴ	ﾊｹﾒ	2.5Y3/1 黒褐	10YR5/2 灰黄褐	中・並	-	中・少	-	-	-	-	-	-	破片	穴１残
691	Ⅶ－２区	SK701		土師器	高杯	ﾏﾒﾂ	指ｵｻｴ	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR8/1 灰白	中・並	中・少	-	-	-	(9.8)	-	-	-	1/8	
692	Ⅶ－２区	SK702		陶器	皿	削り出し高台後施釉	回転ﾅﾃﾞ後施釉、胎土目積	5Y7/1 灰白	7.5YR7/4 にぶい橙	-	-	-	-	精緻	-	-	3.6	-	8/8	
693	Ⅶ－２区	SK702		瓦質土器	羽釜	ﾖｺﾅﾃﾞ、指ｵｻｴ後ﾊｹ櫛状工具による直線状の痕跡、ﾖｺﾅﾃﾞ	ﾖｺﾅﾃﾞ	10YR5/1 褐灰	2.5Y6/1 黄灰	-	-	-	-	細・少	(16.9)	-	-	-	1/8	
694	Ⅶ－２区	SK702		土師器	焙烙	ﾖｺﾅﾃﾞ、指ｵｻｴ後ﾅﾃﾞ、ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	指ｵｻｴ後ﾊｹﾒ	10YR3/2 黒褐	7.5YR5/3 にぶい褐	中・少	-	-	-	-	(42.4)	-	-	-	1/8	
697	Ⅶ－２区	SD707		黒色土器	椀	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	5YR7/3 にぶい橙	5YR5/2 灰褐	中・少	中・少	-	-	-	(14.8)	-	-	-	1/8	黒色土器 A 類
698	Ⅶ－２区	SD707		須恵器	壺	回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ	回転ﾅﾃﾞ	N5/ 灰	N5/ 灰	-	-	-	-	中・少	-	-	-	-	破片	
699	Ⅶ－２区	SX702		土師器	足釜	ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾅﾃﾞ	ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾊｹﾒ	2.5Y7/1 灰白	2.5Y6/1 黄灰	中・少	中・少	-	-	-	17.3	-	-	-	1/8	
700	Ⅶ－３区	SB727(SP02)		須恵器	壺	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N6/ 灰	N6/ 灰	-	-	-	-	細・少	(11.2)	-	-	-	1/8	
701	Ⅶ－３区	SK703	茶褐色粘質土	須恵器	蓋	回転ﾍﾗｷﾘ、回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N7/ 灰白	N7/ 灰白	-	-	-	-	中・少	(10.4)	3.7	-3	-	2/8	
702	Ⅶ－３区	SD710		須恵器	高杯	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｷﾘ後ﾅﾃﾞ、回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	5Y8/1 灰白	5Y8/1 灰白	-	-	-	-	中・少	(11.8)	16	(12.2)	-	2/8	
703	Ⅶ－３区	SD710		須恵器	高杯	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	7.5Y6/1 灰	N6/ 灰	-	-	-	-	中・少	-	-	-	3.6	8/8	透かし穴２
704	Ⅶ－３区	SD710	茶褐色粘質土	須恵器	高杯	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	2.5Y8/2 灰白	2.5Y8/1 灰白	-	-	-	-	細・少	(13)	-	-	-	1/8	焼成不良
705	Ⅶ－３区	SD710		須恵器	高杯	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ後回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ	回転ﾅﾃﾞ	2.5Y8/2 灰白	2.5Y8/2 灰白	-	-	-	-	細・少	13.8	-	-	-	8/8	焼成不良
706	Ⅶ－３区	SD710		須恵器	高杯	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	2.5Y8/1 灰白	2.5Y8/1 灰白	-	-	-	-	細・少	-	-	(9.6)	-	3/8	
707	Ⅶ－３区	SD710	茶褐色粘質土	土師器	甕	指ｵｻｴ後ﾅﾃﾞ、板ﾅﾃﾞ	板ﾅﾃﾞ	10YR8/4 浅黄橙	10YR8/4 浅黄橙	中・並	-	-	-	-	-	-	-	-	8/8	
708	Ⅶ－３区	SD711	淡灰色粘質土	土師器	小皿	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｷﾘ	回転ﾅﾃﾞ	5YR7/4 にぶい橙	5YR7/4 にぶい橙	細・少	-	-	-	-	(7.2)	0.8	(5.8)	-	1/8	

第 30 表　兀塚遺跡出土土器観察表（23）

報告番号	調査区	遺構名	層位等	種類	器種	調整		色調		胎土					法量 (cm)				残存率	備考
						外面	内面	外部	内部	石英・長石	赤色粒	角閃石	雲母	その他	口径	器高	底径	その他		
709	Ⅶ－４区	SD713		須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｷﾘ	回転ﾅﾃﾞ	N6/ 灰	N7/ 灰白	-	-	-	-	中・少	-	-	(7)	-	2/8	
712	Ⅶ－３区	SX704	淡灰色粘質土	土師器	小皿	回転ﾅﾃﾞ、ﾍﾗｷﾘ	回転ﾅﾃﾞ	2.5Y8/1 灰白	2.5Y8/1 灰白	中・並	-	-	-	-	(9.8)	1.8	(6)	-	1/8	
713	Ⅶ－３区	SX704	淡灰色粘質土	土師器	擂鉢	ﾖｺﾅﾃﾞ、指ｵｻｴ後ﾅﾃﾞ	卸目	2.5Y4/1 黄灰	2.5Y4/1 黄灰	中・多	-	-	-	-	(33.6)	-	-	-	2/8	
714	Ⅶ－３区	SX704	淡灰色粘質土	土師器	足釜	ﾖｺﾅﾃﾞ、板ﾅﾃﾞ、格子目ﾀﾀｷ	ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾅﾃﾞ	7.5YR4/3 褐	7.5YR6/4 にぶい橙	粗・少	中・少	-	-	-	(23.7)	-	-	-	1/8	
715	Ⅶ－３区	SX704	淡灰色粘質土	土師器	足釜	指ﾅﾃﾞ、ﾏﾒﾂ	ﾏﾒﾂ	2.5Y8/1 灰白	2.5Y8/1 灰白	中・少	-	-	-	-	-	-	-	-	7/8	
718	Ⅶ－４区	SX706		須恵器	蓋	回転ﾍﾗｷﾘ後ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ、回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ、仕上げﾅﾃﾞ	2.5Y7/1 灰白	10YR7/6 明黄褐	-	-	-	-	中・多	12.4	3.6	6.5	-	4/8	
719	Ⅶ－４区	SX706	西壁	須恵器	蓋	ﾍﾗｹｽﾞﾘ、回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N7/ 灰白	N7/ 灰白	-	-	-	-	中・少	(12.2)	4	-7.2	-	3/8	
720	Ⅶ－４区	SX706		須恵器	高杯	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N8/ 灰白	N8/ 灰白	-	-	-	-	細・少	-	-	6.9	-	6/8	
721	Ⅶ－４区	SX706		須恵器	高杯	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	2.5Y6/1 黄灰	2.5Y7/1 灰白	-	-	-	-	中・多	-	-	8.6	-	4/8	
722	Ⅶ－４区	SX706		土師器	鍋	ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾏﾒﾂ	ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾅﾃﾞ	7.5YR8/2 灰白	7.5YR7/4 にぶい橙	中・多	細・並	-	-	-	(34)	-	-	-	1/8	
723	Ⅶ－１区	SP1005		土師器	鉢	ﾖｺﾅﾃﾞ、指ｵｻｴ、ﾏﾒﾂ	ﾖｺﾅﾃﾞ、板ﾅﾃﾞ	10YR8/4 浅黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	中・並	-	-	-	-	-	-	-	-	破片	
724	Ⅶ－１区	SP1301		弥生土器	壺	ﾏﾒﾂ、指ｵｻｴ後板ﾅﾃﾞ、ﾅﾃﾞ	ﾏﾒﾂ	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR7/2 にぶい黄橙	中・多	-	-	-	-	-	-	8	-	8/8	
725	Ⅶ－１区	SP1304		土師器	甕	ﾖｺﾅﾃﾞ（ﾏﾒﾂ）	ﾖｺﾅﾃﾞ（ﾏﾒﾂ）	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙	中・並	-	-	-	-	-	-	-	-	破片	
726	Ⅶ－１区	SP1305		須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N6/ 灰	N7/ 灰白	-	-	-	-	細・少	-	-	-	-	破片	
727	Ⅶ－１区	SP1315		弥生土器	壺	ﾖｺﾅﾃﾞ	ﾖｺﾅﾃﾞ	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR4/2 灰黄褐	中・並	中・並	-	-	-	-	-	-	-	破片	
728	Ⅶ－１区	SP1335		須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N5/ 灰	N5/ 灰	-	-	-	-	細・少	-	-	-	-	破片	
729	Ⅶ－１区	SP1338		須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ	回転ﾅﾃﾞ	N6/ 灰	N5/ 灰	-	-	-	-	細・少	-	-	-	-	破片	
730	Ⅶ－１区	SP1344		須恵器	蓋	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	7.5Y7/1 灰白	7.5Y7/1 灰白	-	-	-	-	細・少	-	-	-	-	破片	
731	Ⅶ－１区	SP1356		弥生土器	甕	ﾏﾒﾂ	ﾏﾒﾂ	2.5Y8/4 淡黄	10YR8/3 浅黄橙	中・並	中・並	-	-	-	-	-	5.5	-	4/8	
732	Ⅶ－１区	SP1356		弥生土器	甕	ﾅﾃﾞ（ﾏﾒﾂ）、ﾅﾃﾞ	指ｵｻｴ	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	中・並	粗・多	-	-	-	-	-	(5)	-	2/8	
733	Ⅶ－２区	SP1001		瓦器	椀	ﾖｺﾅﾃﾞ、指ｵｻｴ、指ｵｻｴ	ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾍﾗﾐｶﾞｷ	N4/ 灰	N3/ 暗灰	-	-	-	-	-	15.3	5.4	5	-	6/8	
734	Ⅶ－２区	SP1004		土師器	小皿	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｷﾘ	回転ﾅﾃﾞ	2.5Y8/2 灰白	10YR8/3 浅黄橙	中・並	細・並	-	-	-	8.9	1.5	5.5	-	8/8	
735	Ⅶ－２区	SP1004		土師器	小皿	回転ﾅﾃﾞ、ﾍﾗｷﾘ（ﾍﾗｵｺｼ痕あり）	回転ﾅﾃﾞ	2.5Y8/1 灰白	10YR8/4 浅黄橙	中・並	-	-	-	-	9	1.5	6	-	4/8	
736	Ⅶ－２区	SP1019		須恵器	蓋	回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ、回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N4/ 灰	N5/ 灰	-	-	-	-	中・多	(17)	-	-	-	1/8	
737	Ⅶ－２区	SP1031		土師器	小皿	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｷﾘ後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	10YR8/2 灰白	10YR8/3 浅黄橙	-	細・並	-	-	-	(9.2)	1.5	(6)	-	2/8	
738	Ⅶ－２区	SP1044		土師器	鉢	ﾖｺﾅﾃﾞ	ﾖｺﾅﾃﾞ	7.5YR8/4 浅黄橙	7.5YR8/3 浅黄橙	中・少	中・少	-	-	-	(21)	-	-	-	1/8	
739	Ⅶ－２区	SP1045		青磁	椀	削り出し高台後ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｷﾘ	施釉	5Y7/1 灰白	5Y6/2 灰オリーブ	-	-	-	-	無	-	-	5.8	-	8/8	「金玉満堂」

第 31 表　兀塚遺跡出土土器観察表（24）

報告番号	調査区	遺構名	層位等	種類	器種	調整		色調		胎土					法量 (cm)				残存率	備考
						外面	内面	外部	内部	石英・長石	赤色粒	角閃石	雲母	その他	口径	器高	底径	その他		
740	Ⅶ－２区	SP1065		須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｷﾘ後回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N5/ 灰	N5/ 灰	-	-	-	-	中・少	-	-	-	-	破片	
741	Ⅶ－２区	SP1075		土師器	小皿	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｷﾘ	回転ﾅﾃﾞ	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	中・並	中・並	-	-	-	7.7	1.1	5.4	-	7/8	
742	Ⅶ－２区	SP1083		土師器	竈	ﾅﾃﾞ、ﾊｹﾒ	ﾊｹﾒ	7.5YR6/4 にぶい橙	10YR3/1 黒褐	中・多	-	-	中・多	-	-	-	-	-	破片	
743	Ⅶ－２区	SP1093		黒色土器	椀	ﾅﾃﾞ	ﾏﾒﾂ	25YR8/2 灰白	7.5Y4/1 灰	中・少	-	-	-	-	-	-	(6)	-	1/8	黒色土器 A 類
744	Ⅶ－２区	SP1095		土師器	小皿	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｷﾘ	回転ﾅﾃﾞ	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR8/4 浅黄橙	細・少	細・少	-	-	-	(8.9)	1.6	(4.9)	-	1/8	
745	Ⅶ－２区	SP1312		土師器	小皿	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｷﾘ、圧痕か？	回転ﾅﾃﾞ	10YR6/4 にぶい黄橙	10YR6/4 にぶい黄橙	中・並	-	-	-	-	7.6	1.4	6.4	-	5/8	
746	Ⅶ－２区	SP1312		土師器	杯	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｷﾘ後板状圧痕	回転ﾅﾃﾞ	7.5YR7/2 明褐灰	7.5YR7/2 明褐灰	細・並	細・少	-	-	-	-	-	(7.8)	-	2/8	
747	Ⅶ－２区	SP1312		須恵器	椀	回転ﾅﾃﾞ	剥離、回転ﾅﾃﾞ	2.5Y8/1 灰白	2.5Y8/1 灰白	-	-	-	-	中・少	-	-	(5.4)	-	1/8	
748	Ⅶ－２区	SP1327		土師器	杯	ﾏﾒﾂ、ﾍﾗｷﾘ	回転ﾅﾃﾞ	10YR8/4 浅黄橙	10YR8/4 浅黄橙	細・少	中・並	-	-	-	-	-	(7.8)	-	3/8	
749	Ⅶ－２区	SP1328		土師器	椀	回転ﾅﾃﾞ、ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ後ﾍﾗﾐｶﾞｷ	10YR8/2 灰白	10YR7/1 灰白	細・少	-	-	細・並	-	(16)	-	-	-	2/8	黒色土器 A 類
750	Ⅶ－２区	SP1351		土師器	小皿	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｷﾘ (板状圧痕)	回転ﾅﾃﾞ	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	中・並	中・少	-	-	-	8.8	1.7	4.9	-	7/8	
751	Ⅶ－２区	SP1351		土師器	小皿	回転ﾅﾃﾞ、ﾍﾗｷﾘ (板状圧痕)	回転ﾅﾃﾞ	7.5YR8/4 浅黄橙	7.5YR8/4 浅黄橙	中・少	中・並	-	-	-	9	1.7	5.7	-	8/8	
752	Ⅶ－２区	SP1352		須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ、ﾍﾗｷﾘ後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N5/ 灰	N6/ 灰	-	-	-	-	中・少	(9.8)	3.25	(4.8)	-	2/8	
754	Ⅶ－３区	SP9728		須恵器	蓋	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N6/ 灰	N6/ 灰	-	-	-	-	細・少	-	-	-	-	破片	
755	Ⅶ－３区	包含層		須恵器	甕	回転ﾅﾃﾞ、格子目ﾀﾀｷ	回転ﾅﾃﾞ、板ﾅﾃﾞかﾊｹﾒか？	N6/ 灰	N6/ 灰	-	-	-	-	中・少	(21.5)	-	-	-	1/8	
756	Ⅷ－１区	SB801(SP01)		土師器	小皿	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｷﾘ	回転ﾅﾃﾞ	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	中・並	-	-	-	-	6.6	1.2	5.5	-	8/8	
757	Ⅷ－１区	SB801(SP10)		土師器	小皿	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｷﾘ後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	7.5YR8/3 浅黄橙	7.5YR8/3 浅黄橙	中・並	-	-	-	-	6.8	1	4.3	-	7/8	
758	Ⅷ－１区	SB801(SP10)		土師器	杯	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾅﾃﾞ後仕上げﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｷﾘ後ﾅﾃﾞ	2.5Y8/2 灰白	10YR8/2 灰白	中・並	中・少	-	-	-	(10.2)	2.9	(7)	-	2/8	
759	Ⅷ－１区	SB801(SP06)		土師器	杯	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	2.5Y8/2 灰白	2.5Y8/2 灰白	中・少	-	-	-	-	(11.4)	-	-	-	3/8	
760	Ⅷ－１区	SB801(SP06)		須恵器	椀	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N8/ 灰白	N8/ 灰白	-	-	-	-	細・並	-	-	-	-	破片	
761	Ⅷ－１区	SB802(SP06)		土師器	小皿	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｷﾘ後板状圧痕	回転ﾅﾃﾞ	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/4 にぶい橙	中・少	細・並	-	-	-	(6.6)	0.9	(5.4)	-	3/8	
762	Ⅷ－１区	SB802(SP08)		土師器	小皿	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｷﾘ後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	10YR8/3 浅黄橙	2.5Y8/3 淡黄	中・並	-	-	-	-	(7)	1.3	(4.6)	-	3/8	
763	Ⅷ－１区	SB802(SP07)		土師器	小皿	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｷﾘ	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾅﾃﾞ後仕上げﾅﾃﾞ	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	中・少	細・少	-	-	-	(7.8)	1.4	(6)	-	2/8	
764	Ⅷ－１区	SB802(SP14)		須恵器	小皿	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｷﾘ (板状圧痕)	回転ﾅﾃﾞ後仕上げﾅﾃﾞ	7.5YR8/3 浅黄橙	7.5YR8/3 浅黄橙	-	-	-	-	細・少	6.9	1	5.5	-	8/8	
765	Ⅷ－１区	SB802(SP08)		須恵器	蓋	ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ、回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N6/ 灰	N7/ 灰白	-	-	-	-	細・少	-	-	-	1.5	8/8	
766	Ⅷ－１区	SB802(SP14)		土師器	杯	回転ﾅﾃﾞ、ﾍﾗｷﾘ後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	10YR8/2 灰白	2.5Y8/3 淡黄	粗・少	中・並 -	-	-	-	11	2.7	7	-	4/8	
767	Ⅷ－１区	SB802(SP07)		土師器	杯	回転ﾅﾃﾞ、無調整粗なﾍﾗｹｽﾞﾘ、ﾍﾗｷﾘ	回転ﾅﾃﾞ	2.5Y8/1 灰白	10YR8/2 灰白	細・多	-	-	-	-	(11.4)	2.8	(4.7)	-	1/8	
768	Ⅷ－１区	SB802(SP06)		土師器	杯	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	2.5Y7/1 灰白	2.5Y7/1 灰白	細・並	-	-	-	-	(11)	-	-	-	1/8	

第 32 表　兀塚遺跡出土土器観察表（25）

報告番号	調査区	遺構名	層位等	種類	器種	調整		色調		胎土					法量 (cm)				残存率	備考
						外面	内面	外部	内部	石英・長石	赤色粒	角閃石	雲母	その他	口径	器高	底径	その他		
769	Ⅷ－１区	SX801		土師器	杯	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｷﾘ後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	5YR8/4 淡橙	5YR8/2 灰白	中・並	-	-	-	-	(9)	1.8	-	-	2/8	
770	Ⅷ－１区	SX801		土師器	杯	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｷﾘ後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	2.5Y8/2 灰白	2.5Y8/1 灰白	中・並	-	-	-	-	(11.6)	2.5	(7)	-	1/8	
771	Ⅷ－１区	SX801		須恵器	椀	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N7/ 灰白	N7/ 灰白	-	-	-	-	無	(15.6)	-	-	-	1/8	外側重ね焼痕
772	Ⅷ－１区	SX801		須恵器	椀	回転ﾅﾃﾞ、ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｷﾘ後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	5Y8/1 灰白	5Y8/1 灰白	-	-	-	-	中・少	-	-	(5.6)	-	1/8	
773	Ⅷ－１区	SX801		土師器	鍋	ﾊｹﾒ、ﾅﾃﾞ、ﾊｹﾒ	ﾊｹﾒ	2.5YR7/6 橙	5YR8/4 淡橙	中・並	-	-	-	-	-	-	-	-	破片	
774	Ⅷ－１区	SX801		土師器	鉢	回転ﾅﾃﾞ、指ｵｻｴ、ﾊｹﾒ	回転ﾅﾃﾞ	N4/ 灰	7.5Y8/1 灰白	中・並	-	-	-	-	-	-	-	-	破片	
775	Ⅷ－１区	SX801		須恵器	鉢	回転ﾅﾃﾞ、板ﾅﾃﾞ、ﾍﾗｷﾘ後ﾅﾃﾞ	ﾏﾒﾂ	N6/ 灰	5Y7/1 灰白	-	-	-	-	無	-	-	(18.25)	-	1/8	
776	Ⅷ－１区	SX801		土師器	足釜	ﾅﾃﾞ、指ｵｻｴ		10YR7/2 にぶい黄橙	10YR5/2 灰黄褐	中・並	-	-	-	-	-	-	-	-	破片	
777	Ⅷ－１区	SB803(SP03)		土師器	小皿	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｷﾘ後板状圧痕	回転ﾅﾃﾞ	10YR6/2 灰黄褐	10YR4/1 褐灰	中・少	-	-	-	-	(7.4)	1	(5.2)	-	2/8	内・外面スス付着
778	Ⅷ－１区	SB803(SP02)		須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｷﾘ	回転ﾅﾃﾞ後仕上げﾅﾃﾞ	2.5YR7/6 橙	10R6/4 にぶい赤橙	-	-	-	-	中・少	11.6	3.3	7.6	-	7/8	
779	Ⅷ－１区	SB803(SP02)		須恵器	椀	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ後ﾍﾗﾐｶﾞｷ	N8/ 灰白	N4/ 灰	-	-	-	-	細・少	(14.8)	-	-	-	2/8	
780	Ⅷ－１区	SP1088		土師器	杯	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｷﾘ	回転ﾅﾃﾞ	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	細・並	細・少	-	-	-	13.5	3.5	4.3	-	6/8	
782	Ⅷ－１区	SX802		土師器	小皿	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｷﾘ後板状圧痕	回転ﾅﾃﾞ	7.5YR7/6 橙	7.5YR6/6 橙	中・並	-	-	-	-	7.8	1.1	5.7	-	4/8	
783	Ⅷ－１区	SX802		須恵器	椀	回転ﾅﾃﾞ、ﾍﾗﾐｶﾞｷ、ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ、ﾍﾗﾐｶﾞｷ、ﾅﾃﾞ、工具痕	N8/ 灰白	N8/ 灰白	-	-	-	-	中・多	(14)	-	-	-	1/8	
784	Ⅷ－１区	SX802		須恵器	椀	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｷﾘ	ﾍﾗﾐｶﾞｷ	N8/ 灰白	N8/ 灰白	-	-	-	-	中・少	-	-	(5.8)	-	3/8	
785	Ⅷ－１区	SX802		須恵器	椀	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	N6/ 灰	N8/ 灰白	-	-	-	-	細・少	-	-	(5.2)	-	3/8	
786	Ⅷ－１区	SX802		瓦器	椀	回転ﾅﾃﾞ、ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ後ﾍﾗﾐｶﾞｷ、暗文	N5/ 灰	N5/ 灰	-	-	-	-	細・少	-	-	4.8	-	4/8	
787	Ⅷ－１区	SX803		土師器	椀	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	5Y7/1 灰白	5Y7/1 灰白	-	-	-	-	細・少	-	-	-	-	破片	
788	Ⅷ－１区	SX803		土師器	椀	ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	中・並	-	-	-	-	-	-	(5.8)	-	1/8	
789	Ⅷ－１区	SX802		白磁	椀	回転ﾅﾃﾞ後施釉	回転ﾅﾃﾞ後施釉	7.5Y8/1 灰白	5Y8/2 灰白	-	-	-	-	細・少	-	-	-	-	破片	
790	Ⅷ－１区	SX802		青磁	椀	削り出し高台後施釉	施釉	2.5GY6/1 オリーブ灰	N7/ 灰白	-	-	-	-	無	-	-	(5.4)	高台内 4	1/8	
791	Ⅷ－１区	SX802		須恵器	捏鉢	回転ﾅﾃﾞ、ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ、ﾍﾗｷﾘ後ﾅﾃﾞ	板ﾅﾃﾞ、ﾍﾗｹｽﾞﾘ、ﾅﾃﾞ	N8/ 灰白	N6/ 灰	-	-	-	-	中・少	-	-	(16)	-	1/8	
792	Ⅷ－１区	SX802		土師器	足釜	指ｵｻｴ後ﾅﾃﾞ	-	10YR4/2 灰黄褐	-	細・少	-	-	-	-	-	-	-	-	破片	
793	Ⅷ－１区	SB804(SP02)		土師器	小皿	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｷﾘ、板状圧痕	回転ﾅﾃﾞ	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	中・少	-	-	-	-	8.2	1.1	6	-	4/8	
794	Ⅷ－１区	SB804(SP02)		須恵器	椀	回転ﾅﾃﾞ後ﾍﾗﾐｶﾞｷ、ﾅﾃﾞ後ﾍﾗﾐｶﾞｷ	回転ﾅﾃﾞ後ﾍﾗﾐｶﾞｷ	N8/ 灰白	N8/ 灰白	-	-	-	-	細・少	15.5	5	4.7	-	4/8	重ね焼痕
795	Ⅷ－１区	SB804(SP05)		黒色土器	椀	回転ﾍﾗｷﾘ	回転ﾅﾃﾞ後仕上げﾅﾃﾞ	2.5Y8/2 灰白	N3/ 暗灰	中・並	-	-	-	-	-	-	(5.6)	-	1/8	黒色土器 A 類
796	Ⅷ－１区	SB804(SP05)		白磁	鉢	回転ﾅﾃﾞ後施釉	回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ後施釉	5Y7/2 灰白	7.5Y8/1 灰白	-	-	-	-	精緻	(16)	-	-	-	1/8	
798	Ⅷ－１区	SX804		土師器	小皿	回転ﾅﾃﾞ、ﾍﾗｷﾘ	回転ﾅﾃﾞ	2.5YR6/4 にぶい橙	2.5YR7/6 橙	-	細・並	-	-	-	-	-	-	-	破片	

第 33 表　兀塚遺跡出土土器観察表（26）

報告番号	調査区	遺構名	層位等	種類	器種	調整		色調		胎土					法量 (cm)				残存率	備考
						外面	内面	外部	内部	石英・長石	赤色粒	角閃石	雲母	その他	口径	器高	底径	その他		
799	Ⅷ－１区	SX804		瓦器	椀	指ｵｻｴ	ﾐｶﾞｷ	N4/ 灰	10Y5/1 灰	細・少	-	-	-	-	-	-	(4.6)	-	1/8	
800	Ⅷ－１区	SB805(SP07)		土師器	小皿	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｷﾘ	回転ﾅﾃﾞ	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/4 にぶい橙	細・並	細・多	-	-	-	7.4	1.3	5.9	-	8/8	
801	Ⅷ－１区	SB805(SP07)		土師器	鍋	ﾖｺﾅﾃﾞ、指ｵｻｴ後ﾊｹﾒ	ﾖｺﾅﾃﾞ、指ｵｻｴ後ﾊｹﾒ	10YR7/2 にぶい黄橙	10YR7/2 にぶい黄橙	中・並	中・少	-	-	-	(37.2)	-	-	-	1/8	
802	Ⅷ－１区	SB805(SP07)		土師器	足釜	指ﾅﾃﾞ、指ｵｻｴ	ﾊｹﾒ	7.5YR6/6 橙	7.5YR4/1 褐灰	中・並	-	-	-	-	-	-	-	-	破片	
803	Ⅷ－１区	SB805(SP26)		土師器	小皿	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｷﾘ、板状圧痕回転ﾍﾗｷﾘ後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	10YR8/4 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	中・少	-	-	-	-	7.8	1.1	6.5	-	5/8	
804	Ⅷ－１区	SB805(SP26)		土師器	小皿	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｷﾘ	回転ﾅﾃﾞ	25YR8/3 淡橙	10YR8/3 浅黄橙	中・並	-	-	-	-	-	-	(5)	-	1/8	
805	Ⅷ－１区	SB805(SP10)		土師器	小皿	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｷﾘ、板状圧痕	回転ﾅﾃﾞ	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	中・並	中・少	-	-	-	(9)	1.8	(5.4)	-	3/8	
806	Ⅷ－１区	SB805(SP10)		瓦器	椀	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ、ﾍﾗﾐｶﾞｷ	N4/ 灰	N4/ 灰	細・多	-	-	-	-	(16)	-	-	-	1/8	
807	Ⅷ－１区	SB805(SP23)		白磁	椀	削り出し高台	回転ﾅﾃﾞ後施釉	7.5Y8/1 灰白	7.5Y7/1 灰白	-	-	-	-	無	-	-	(6.2)	-	1/8	
808	Ⅷ－１区	SB805(SP14)		土師器	杯	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｷﾘ後板状圧痕	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾅﾃﾞ後仕上げﾅﾃﾞ	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/4 にぶい橙	中・並	中・多	-	-	-	13.8	3.7	6.6	-	7/8	
809	Ⅷ－１区	SB805(SP14)		須恵器	椀	回転ﾅﾃﾞ、ﾅﾃﾞ、指ｵｻｴ後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ、ﾅﾃﾞ	5Y8/1 灰白	2.5Y8/1 灰白	-	-	-	-	中・少	(16.2)	-	-	-	3/8	焼成不良
810	Ⅷ－１区	SB805(SP14)		須恵器	椀	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｷﾘ	回転ﾅﾃﾞ後ﾊｹﾒ	10YR8/1 灰白	10YR8/1 灰白	-	-	-	-	無	14.8	4.8	5.3	-	8/8	
811	Ⅷ－１区	SB806(SP02)		土師器	小皿	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｷﾘ後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ後仕上げﾅﾃﾞ	5YR7/6 橙	5YR7/6 橙	細・少	細・少	-	-	-	7.8	1.2	6.2	-	8/8	
812	Ⅷ－１区	SB806(SP09)		土師器	小皿	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｷﾘ	回転ﾅﾃﾞ	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	細・多	細・並	-	-	-	(9.8)	-	-	-	3/8	
813	Ⅷ－１区	SB806(SP03)		白磁	椀	回転ﾅﾃﾞ後施釉	回転ﾅﾃﾞ後施釉	7.5Y7/1 灰白	7.5Y8/1 灰白	-	-	-	-	精緻	-	-	-	-	破片	
814	Ⅷ－１区	SB806(SP05)		須恵器	捏鉢	回転ﾅﾃﾞ、ﾀﾀｷ後回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ後施釉	N7/ 灰白	N7/ 灰白	-	-	-	-	細・少	-	-	-	-	1/8	
816	Ⅷ－１区	SK801		須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｷﾘ	回転ﾅﾃﾞ	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	-	-	-	-	中・並	(11.6)	3.7	(6.9)	-	3/8	
817	Ⅷ－１区	SK802		土師器	足釜	指ｵｻｴ後ﾅﾃﾞ	-	10YR7/2 にぶい黄橙	-	中・少	-	-	-	-	-	-	-	-	破片	
818	Ⅷ－１区	SK803		黒色土器	椀	回転ﾅﾃﾞ、ﾏﾒﾂ	ﾏﾒﾂ	10YR8/3 浅黄橙	2.5Y6/1 黄灰	中・少	-	-	-	-	-	-	(5.2)	-	2/8	黒色土器 A 類
819	Ⅷ－１区	SD801		土師器	杯	回転ﾅﾃﾞ、ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	-	中・並	-	-	-	(14)	3	(8)	-	1/8	
820	Ⅷ－１区	SD801		須恵器	椀	ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ後ﾍﾗﾐｶﾞｷ	N8/ 灰白	N8/ 灰白	-	-	-	-	細・少	-	-	(6)	-	2/8	
821	Ⅷ－１区	SD802		土師器	杯	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｷﾘ	回転ﾅﾃﾞ	10YR6/2 灰黄褐	10YR5/2 灰黄褐	中・少	-	-	-	-	(12.2)	-	-	-	1/8	
822	Ⅷ－１区	SD802		須恵器	椀	ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	5Y7/1 灰白	5Y7/1 灰白	-	-	-	-	細・少	-	-	(5.2)	-	1/8	
823	Ⅷ－１区	SD802		土師器	足釜	指ｵｻｴ後ﾖｺﾅﾃﾞ、指ｵｻｴ後ﾊｹﾒ、指ｵｻｴ後ﾅﾃﾞ、ﾀﾀｷ後ﾅﾃﾞ（格子）	指ｵｻｴ後ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾊｹﾒ、ﾅﾃﾞ	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	中・並	-	-	-	-	(17.9)	-	-	-	1/8	
824	Ⅷ－１区	SD802		土師器	鍋	ﾊｹﾒ後ﾅﾃﾞ	ﾖｺﾅﾃﾞ	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙	中・並	-	-	-	-	-	-	-	-	破片	
825	Ⅷ－１区	SD803		須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N7/ 灰白	N7/ 灰白	-	-	-	-	細・少	(17.8)	-	-	-	1/8	
826	Ⅷ－１区	SD804		土師器	杯	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	10YR7/6 明黄褐	10YR8/3 浅黄橙	-	細・少	-	-	-	(14.8)	-	-	-	1/8	

第 34 表　兀塚遺跡出土土器観察表（27）

報告番号	調査区	遺構名	層位等	種類	器種	調整		色調		胎土					法量 (cm)				残存率	備考
						外面	内面	外部	内部	石英・長石	赤色粒	角閃石	雲母	その他	口径	器高	底径	その他		
827	Ⅷ－１区	SD804		土師器	鍋	ﾖｺﾅﾃﾞ	ﾖｺﾅﾃﾞ	10YR5/2 灰黄褐	10YR7/4 にぶい黄橙	中・並	-	-	細・少	-	-	-	-	-	破片	
828	Ⅷ－１区	SD805		土師器	小皿	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｷﾘ	回転ﾅﾃﾞ	7.5YR8/4 浅黄橙	7.5YR8/4 浅黄橙	細・並	細・並	-	-	-	(7.8)	1.1	(4.2)	-	2/8	
829	Ⅷ－１区	SD805		土師器	小皿	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｷﾘ (板状圧痕)	回転ﾅﾃﾞ	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/4 浅黄橙	中・少	中・少	-	-	-	7	1.25	4.9	-	8/8	
830	Ⅷ－１区	SD805		土師器	杯	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ、回転ﾍﾗｷﾘ後板状圧痕	回転ﾅﾃﾞ	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	中・並	-	-	-	-	11	-	-	-	8/8	
831	Ⅷ－１区	SD805		須恵器	鉢	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N7/ 灰白	N8/ 灰白	-	-	-	-	細・少	-	-	-	-	破片	
832	Ⅷ－１区	SD805		土師器	鍋	ﾖｺﾅﾃﾞ	ﾊｹﾒ、ﾖｺﾅﾃﾞ	7.5YR5/2 灰褐	10YR8/2 灰白	中・並	-	-	-	-	(33)	-	-	-	1/8	
833	Ⅷ－１区	SD807		土師器	小皿	回転ﾅﾃﾞ、ﾍﾗｷﾘ後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	10YR8/2 灰白	7.5YR8/3 浅黄橙	細・少	-	-	-	-	(8.1)	1.3	(6.8)	-	2/8	
834	Ⅷ－１区	SD806		須恵器	小皿	回転ﾅﾃﾞ、ﾍﾗｷﾘ	回転ﾅﾃﾞ	2.5Y8/1 灰白	2.5Y7/2 灰黄	-	-	-	-	細・少	(8.8)	1.1	-	-	1/8	
835	Ⅷ－１区	SD806		土師器	杯	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	2.5Y8/2 灰白	2.5Y8/2 灰白	細・少	細・少	-	-	-	(10.2)	2.9	(5.8)	-	2/8	
836	Ⅷ－１区	SD806		土師器	椀	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	7.5YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	-	中・並	-	-	-	(14)	-	-	-	1/8	
837	Ⅷ－１区	SD806		土師器	椀	回転ﾅﾃﾞ、指ｵｻｴ	回転ﾅﾃﾞ	5Y8/1 灰白	7.5YR7/4 にぶい橙	中・並	中・並	-	-	-	(15.4)	5.1	(5.4)	-	3/8	
838	Ⅷ－１区	SD807		須恵器	椀	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	7.5Y8/1 灰白	7.5Y8/1 灰白	-	-	-	-	細・少	-	-	(4)	-	1/8	
839	Ⅷ－１区	SD806		白磁	椀	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	7.5Y7/2 灰白	10Y8/1 灰白	-	-	-	-	-	-	-	-	-	破片	
840	Ⅷ－１区	SD806		土師器	鍋	ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾊｹﾒ	ﾖｺﾅﾃﾞ、指ｵｻｴ後ﾅﾃﾞ	10YR4/1 褐灰	10YR7/3 にぶい黄橙	細・並	細・少	-	-	-	-	-	-	-	破片	
841	Ⅷ－１区	SD806		須恵器	捏鉢	回転ﾅﾃﾞ、ﾍﾗｷﾘ後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ、ﾏﾒﾂ	N8/ 灰白	N8/ 灰白	-	-	-	-	中・多	(28)	14.4	(14)	-	2/8	
842	Ⅷ－１区	SD810		須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N8/ 灰白	N8/ 灰白	-	-	-	-	中・少	-	-	-	-	破片	
843	Ⅷ－１区	SD810		瓦器	椀	ﾏﾒﾂ	ﾏﾒﾂ	N6/ 灰	N3/ 暗灰	-	-	-	-	-	-	-	-	-	破片	
844	Ⅷ－１区	SD813		土師器	小皿	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｷﾘ後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	細・少	-	-	-	-	7.8	1.1	6	-	6/8	
845	Ⅷ－１区	SD813		瓦質土器	小皿	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｷﾘ後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N4/ 灰	7.5Y4/1 灰	中・少	-	-	-	-	(8.2)	1	(6.4)	-	2/8	
846	Ⅷ－１区	SD813		須恵器	椀	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	7.5Y8/1 灰白	7.5Y8/1 灰白	-	-	-	-	細・少	(14.8)	-	-	-	1/8	
847	Ⅷ－１区	SD813		須恵器	椀	回転ﾅﾃﾞ、ﾍﾗｷﾘ後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	5Y8/1 灰白	5Y8/1 灰白	-	-	-	-	細・少	-	-	(4.4)	-	1/8	
848	Ⅷ－１区	SD813		土師器	椀	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	10YR8/3 浅黄橙	10YR6/3 にぶい黄橙	-	-	-	-	細・微	(15)	-	-	-	1/8	
849	Ⅷ－１区	SD813		土師器	椀	ﾅﾃﾞ、ﾍﾗｷﾘ後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N8/ 灰白	N7/ 灰白	細・少	-	-	-	-	-	-	5.2	-	6/8	
850	Ⅷ－１区	SD813		瓦器	椀	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N5/ 灰	N4/ 灰	細・多	-	-	-	-	-	-	-	-	破片	内側付着物有
851	Ⅷ－１区	SD813		瓦質土器	捏鉢	回転ﾅﾃﾞ、ﾅﾃﾞ、板ﾅﾃﾞ、ﾍﾗｷﾘ	回転ﾅﾃﾞ	7.5Y4/1 灰	7.5Y8/1 灰白	中・並	-	-	-	-	-	-	(10.2)	-	2/8	
852	Ⅷ－１区	SD815		須恵器	椀	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	7.5Y7/1 灰白	7.5Y7/1 灰白	-	-	-	-	中・少	-	-	-	-	破片	
853	Ⅷ－１区	SD816A		土師器	小皿	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｷﾘ、板状圧痕	回転ﾅﾃﾞ	7.5YR8/3 浅黄橙	7.5YR8/3 浅黄橙	細・少	-	-	-	-	8	1.1	5.6	-	8/8	
854	Ⅷ－１区	SD816A		土師器	小皿	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｷﾘ	回転ﾅﾃﾞ	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	細・少	-	-	-	-	(7.4)	1.2	(5.4)	-	3/8	
855	Ⅷ－１区	SD816A		土師器	小皿	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｷﾘ (板状圧痕)	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾅﾃﾞ後仕上げﾅﾃﾞ	10YR8/3 浅黄橙	7.5YR8/4 浅黄橙	中・少	細・並	-	-	-	7.6	1.3	5.7	-	8/8	
856	Ⅷ－１区	SD816A		須恵器	小皿	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｷﾘ後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N8/ 灰白	N6/ 灰	-	-	-	-	中・少	(8.6)	1.4	(5.4)	-	2/8	

第 35 表　兀塚遺跡出土土器観察表（28）

報告番号	調査区	遺構名	層位等	種類	器種	調整		色調		胎土					法量 (cm)				残存率	備考
						外面	内面	外部	内部	石英・長石	赤色粒	角閃石	雲母	その他	口径	器高	底径	その他		
857	Ⅷ－１区	SD816A		土師器	杯	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｷﾘ後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/2 灰白	中・少	中・少	-	-	-	(11.8)	3.3	(5.8)	-	1/8	
858	Ⅷ－１区	SD816A		土師器	杯	回転ﾅﾃﾞ、ﾍﾗｷﾘ後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	7.5YR8/4 浅黄橙	10YR8/1 灰白	中・並	中・少	-	-	-	(11.8)	3.5	(6.3)	-	2/8	
859	Ⅷ－１区	SD816A		土師器	杯	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｷﾘ後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	10YR8/2 灰白	25YR8/1 灰白	中・並	-	-	-	-	(10.8)	-	(7.6)	-	3/8	
860	Ⅷ－１区	SD816A		土師器	杯	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｷﾘ後回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ	回転ﾅﾃﾞ	2.5Y8/2 灰白	2.5Y8/2 灰白	中・並	-	-	-	-	(12.6)	3	(6)	-	3/8	
861	Ⅷ－１区	SD816A		須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｷﾘ後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	-	-	-	-	細・多	(13)	3	(6.2)	-	2/8	
862	Ⅷ－１区	SD816A		須恵器	椀	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾅﾃﾞ後仕上げﾅﾃﾞ	5Y8/1 灰白	5Y8/1 灰白	-	-	-	-	中・少	-	-	(4.6)	-	1/8	
863	Ⅷ－１区	SD816A		瓦器	椀	回転ﾅﾃﾞ後ﾍﾗﾐｶﾞｷ	回転ﾅﾃﾞ後ﾍﾗﾐｶﾞｷ	N4/ 灰	N4/ 灰	細・少	-	-	-	-	(15.8)	-	-	-	1/8	
864	Ⅷ－１区	SD816A		土師器	椀	回転ﾅﾃﾞﾍﾗｷﾘ後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ、ﾅﾃﾞ	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	中・並	中・少	-	-	-	10.1	3.4	6.1	-	6/8	モミ粒痕あり
865	Ⅷ－１区	SD816A		青磁	椀	蓮弁文	施釉	2.5GY6/1 オリーブ灰	2.5GY6/1 オリーブ灰	-	-	-	-	細・少	(16.4)	-	-	-	1/8	横田・森田分類Ⅰ5b
866	Ⅷ－１区	SD816A		青磁	椀	回転ﾅﾃﾞ後施釉、回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ後施釉、回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ	線画後施釉	5Y6/3 オリーブ黄	5Y7/1 灰白	-	-	-	-	精緻	-	-	(6)	-	2/8	
867	Ⅷ－１区	SD816A		須恵器	捏鉢	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N5/ 灰	2.5Y8/2 灰白	-	-	-	-	中・少	-	-	-	-	破片	
868	Ⅷ－１区	SD816A		瓦質土器	捏鉢	回転ﾅﾃﾞ後ﾊｹﾒ、板ﾅﾃﾞ、ﾍﾗｷﾘ後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ後ﾅﾃﾞ、回転ﾅﾃﾞ後指ｵｻｴ	N5/ 灰	N5/ 灰	-	-	-	-	中・少	-	-	(15.6)	-	1/8	
869	Ⅷ－１区	SD816A		土師器	鍋	ﾖｺﾅﾃﾞ	ﾖｺﾅﾃﾞ	7.5Y3/1 オリーブ黒	10YR6/2 灰黄褐	中・並	中・少	-	-	-	-	-	-	-	破片	
870	Ⅷ－１区	SD816A		土師器	足釜	板ﾅﾃﾞ、指ｵｻｴ後ﾅﾃﾞ	-	7.5YR8/4 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	中・少	中・少	-	-	-	-	-	-	-	破片	
871	Ⅷ－１区	SD816A		須恵器	甕	ﾅﾃﾞ、格子目ﾀﾀｷ	ﾏﾒﾂ	5Y8/1 灰白	10YR5/2 灰黄褐	-	-	-	-	中・多	-	-	-	-	破片	
872	Ⅷ－１区	SD816A		須恵器	甕	格子目、ﾍﾗｷﾘ後ﾅﾃﾞ	指ｵｻｴ後ﾊｹﾒ	N3/ 暗灰	N4/ 灰	-	-	-	-	中・多	-	-	-	-	破片	
873	Ⅷ－１区	SD816B		土師器	小皿	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｷﾘ	回転ﾅﾃﾞ	2.5Y8/1 灰白	2.5Y8/1 灰白	細・少	中・少	-	-	-	7.2	1.1	5.2	-	8/8	
874	Ⅷ－１区	SD816B		土師器	小皿	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｷﾘ後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	2.5Y8/1 灰白	2.5Y8/2 灰白	中・少	中・少	-	-	-	7.1	1.2	5.2	-	8/8	
875	Ⅷ－１区	SD816B		土師器	小皿	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｷﾘ後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	2.5Y8/1 灰白	2.5Y8/1 灰白	細・多	中・少	-	-	-	7.6	1.2	5.2	-	8/8	
876	Ⅷ－１区	SD816B		土師器	小皿	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｷﾘ後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ、仕上げﾅﾃﾞ	10YR8/2 灰白	10YR8/1 灰白	中・少	細・少	-	-	-	7.3	1.3	5.7	-	8/8	
877	Ⅷ－１区	SD816B		土師器	小皿	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｷﾘ後ﾅﾃﾞ、ﾍﾗ起し痕	回転ﾅﾃﾞ	10YR7/1 灰白	10YR7/1 灰白	中・少	-	-	-	-	7.6	1.1	5.7	-	5/8	
878	Ⅷ－１区	SD816B		土師器	小皿	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｷﾘ	回転ﾅﾃﾞ	10YR6/1 褐灰	10YR5/1 褐灰	中・並	中・並	中・多	細・並	-	7.3	1.1	5	-	6/8	
879	Ⅷ－１区	SD816B		土師器	小皿	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｷﾘ	回転ﾅﾃﾞ	10YR8/2 灰白	10YR8/1 灰白	中・並	中・並	-	-	-	7.4	1.1	5.1	-	4/8	
880	Ⅷ－１区	SD816B		土師器	小皿	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｷﾘ後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ、仕上げﾅﾃﾞ	10YR7/1 灰白	10YR6/1 褐灰	中・少	中・少	-	-	-	7.5	1.1	5.1	-	8/8	
881	Ⅷ－１区	SD816B		土師器	小皿	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｷﾘ後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	2.5Y8/2 灰白	2.5Y8/2 灰白	中・並	中・少	-	-	-	7.6	1	5.3	-	6/8	

第 36 表　兀塚遺跡出土土器観察表（29）

報告番号	調査区	遺構名	層位等	種類	器種	調整		色調		胎土					法量 (cm)				残存率	備考
						外面	内面	外部	内部	石英・長石	赤色粒	角閃石	雲母	その他	口径	器高	底径	その他		
882	Ⅷ－１区	SD816B		土師器	小皿	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｷﾘ後ﾅﾃﾞ、ﾍﾗｷﾘ痕	回転ﾅﾃﾞ	7.5YR5/1 褐灰	7.5YR8/1 灰白	中・並	中・少	-	-	-	7.4	1.3	5	-	8/8	
883	Ⅷ－１区	SD816B		土師器	小皿	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｷﾘ後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	2.5Y8/1 灰白	2.5Y8/1 灰白	中・並	中・並	-	-	-	7.3	1	5	-	8/8	
884	Ⅷ－１区	SD816B		土師器	小皿	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｷﾘ	回転ﾅﾃﾞ	10YR5/1 褐灰	10YR6/1 褐灰	細・並	細・少	-	細・多	-	7.3	1.1	5.2	-	5/8	
885	Ⅷ－１区	SD816B		土師器	小皿	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｷﾘ後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	10YR6/1 褐灰	10YR6/1 褐灰	中・並	中・少	-	細・多	-	7.4	1.1	5.4	-	8/8	
886	Ⅷ－１区	SD816B		土師器	小皿	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｷﾘ (板状圧痕)	回転ﾅﾃﾞ	2.5Y8/1 灰白	7.5YR8/3 淡橙	中・少	中・少	-	-	-	8	1	6	-	5/8	
887	Ⅷ－１区	SD816B		須恵器	小皿	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｷﾘ後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	2.5Y7/1 灰白	2.5Y7/1 灰白	粗・並	-	-	-	細・少	7.5	1.1	5.6	-	8/8	
888	Ⅷ－１区	SD816B		須恵器	小皿	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｷﾘ後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	10YR8/1 灰白	10YR8/1 灰白	中・並	-	-	-	中・並	8	1.1	5.5	-	8/8	
889	Ⅷ－１区	SD816B		須恵器	小皿	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｷﾘ、板状圧痕	回転ﾅﾃﾞ	2.5Y8/1 灰白	2.5Y8/1 灰白	-	-	-	-	細・少	7.7	1	5.2	-	8/8	
890	Ⅷ－１区	SD816B		土師器	杯	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｷﾘ後ﾅﾃﾞ、ﾍﾗ起し痕	回転ﾅﾃﾞ	10YR5/1 褐灰	10YR6/1 褐灰	中・少	-	-	-	-	(15.6)	4	(9.3)	-	1/8	
891	Ⅷ－１区	SD816B		土師器	杯	回転ﾅﾃﾞ、ﾍﾗｷﾘ後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	中・並	細・少	-	-	-	(14)	3.1	(6.6)	-	2/8	
892	Ⅷ－１区	SD816B		土師器	杯	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｷﾘ後ﾅﾃﾞ、板状圧痕	回転ﾅﾃﾞ	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	細・多	-	-	-	-	(11.8)	3.5	(6.3)	-	2/8	
893	Ⅷ－１区	SD816B		土師器	杯	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ、回転ﾍﾗｷﾘ (板状圧痕)	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾅﾃﾞ後仕上げﾅﾃﾞ	10YR8/1 灰白	10YR8/1 灰白	中・並	中・少	-	-	-	11.7	3.5	8.3	-	7/8	口縁部歪み有
894	Ⅷ－１区	SD816B		須恵器	椀	回転ﾅﾃﾞ後ﾍﾗﾐｶﾞｷ、ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ後ﾍﾗﾐｶﾞｷ	5Y8/1 灰白	5Y8/1 灰白	-	-	-	-	細・少	(14.8)	4.8	(4.2)	-	2/8	
895	Ⅷ－１区	SD816B		須恵器	椀	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾅﾃﾞ後ﾍﾗﾐｶﾞｷ	N5/ 灰	2.5Y8/1 灰白	-	-	-	-	中・少	(14.9)	4.6	(5)	-	破片	
896	Ⅷ－１区	SD816B		須恵器	椀	回転ﾅﾃﾞ後ﾍﾗﾐｶﾞｷ	回転ﾅﾃﾞ後ﾍﾗﾐｶﾞｷ	N8/ 灰白	5Y8/1 灰白	-	-	-	-	中・少	19	5.2	5.2	-	6/8	
897	Ⅷ－１区	SD816B		須恵器	椀	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾅﾃﾞ後ﾍﾗﾐｶﾞｷ	5Y8/1 灰白	5Y8/1 灰白	-	-	-	-	中・少	(16.8)	5.2	(4.6)	-	3/8	
898	Ⅷ－１区	SD816B		須恵器	椀	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｷﾘ	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾅﾃﾞ後ﾊｹﾒ後ﾅﾃﾞ	N8/ 灰白	N8/ 灰白	-	-	-	-	中・少	14	4.7	4.7	-	6/8	
899	Ⅷ－１区	SD816B		須恵器	椀	回転ﾅﾃﾞ、裏地に所々ｵｻｴあり	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾅﾃﾞ後ﾍﾗﾐｶﾞｷ、所々にﾐｶﾞｷあり	N8/ 灰白	N8/ 灰白	-	-	-	-	中・少	(14.9)	-	-	-	2/8	
900	Ⅷ－１区	SD816B		須恵器	椀	回転ﾅﾃﾞ、ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾅﾃﾞ後ﾍﾗﾐｶﾞｷ	5Y8/1 灰白	5Y8/1 灰白	-	-	-	-	中・少	(14)	-	-	-	2/8	外、内側に重ね焼痕
901	Ⅷ－１区	SD816B		青磁	椀	回転ﾅﾃﾞ後施釉、線刻後施釉 (蓮弁 ?)	回転ﾅﾃﾞ後施釉	7.5Y6/2 灰オリーブ	7.5Y6/2 灰オリーブ	-	-	-	-	精緻	-	-	-	-	破片	横田・森田椀Ⅰ5b
902	Ⅷ－１区	SD816B		瓦器	椀	回転ﾅﾃﾞ後ﾍﾗﾐｶﾞｷ、回転ﾅﾃﾞ後指ｵｻｴ後ﾍﾗﾐｶﾞｷ	回転ﾅﾃﾞ後ﾍﾗﾐｶﾞｷ	N4/ 灰	N4/ 灰	細・少	-	-	-	-	-	-	-	-	破片	
903	Ⅷ－１区	SD816B		瓦器	椀	ﾅﾃﾞ	ﾍﾗﾐｶﾞｷ (ﾏﾒﾂ)	N4/ 灰	N3/ 暗灰	細・少	-	-	-	-	-	-	(4)	-	2/8	
904	Ⅷ－１区	SD816B		須恵器	捏鉢	回転ﾅﾃﾞ、ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N6/ 灰	N6/ 灰	-	-	-	-	中・並	(26)	-	-	-	2/8	

第 37 表　兀塚遺跡出土土器観察表（30）

報告番号	調査区	遺構名	層位等	種類	器種	調整		色調		胎土					法量 (cm)				残存率	備考
						外面	内面	外部	内部	石英・長石	赤色粒	角閃石	雲母	その他	口径	器高	底径	その他		
905	Ⅷ－１区	SD816C		土師器	小皿	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｷﾘ後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	細・少	-	-	-	-	(8.8)	1.1	(6.4)	-	3/8	口縁部歪み有
906	Ⅷ－１区	SD816C		土師器	小皿	回転ﾅﾃﾞ、ﾍﾗｷﾘ	回転ﾅﾃﾞ	7.5YR8/4 浅黄橙	7.5YR8/4 浅黄橙	-	中・少	-	-	-	(9.6)	1.5	(4.6)	-	1/8	
907	Ⅷ－１区	SD816C		土師器	小皿	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｷﾘ	回転ﾅﾃﾞ	2.5Y8/2 灰白	2.5Y8/2 灰白	細・少	-	-	-	-	(9.8)	1.3	(7.6)	-	3/8	
908	Ⅷ－１区	SD816C		土師器	小皿	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｷﾘ (板状圧痕)	回転ﾅﾃﾞ	7.5YR8/2 灰白	7.5YR6/2 灰褐	粗・並	中・少	-	-	-	8.4	1.4	6	-	8/8	
909	Ⅷ－１区	SD816C		土師器	杯	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｷﾘ、板状圧痕	回転ﾅﾃﾞ	10YR8/3 浅黄橙	10YR6/1 褐灰	細・並	粗・少	-	-	-	(13)	3.5	(6)	-	2/8	
910	Ⅷ－１区	SD816C		土師器	杯	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｷﾘ後ﾅﾃﾞ		5YR7/6 橙	7.5YR8/4 浅黄橙	細・少	-	-	-	-	(14.2)	3.4	(8.4)	-	3/8	
911	Ⅷ－１区	SD816C		土師器	杯	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｷﾘ後ﾅﾃﾞ、板状圧痕	回転ﾅﾃﾞ	10YR8/4 浅黄橙	10YR8/4 浅黄橙	中・並	中・並	-	-	-	(15.2)	3.7	(9.4)	-	3/8	
912	Ⅷ－１区	SD816C		土師器	杯	回転ﾅﾃﾞ、ﾍﾗｷﾘ後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ後ﾍﾗﾐｶﾞｷ	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	細・並	中・少	-	-	-	(13.8)	3.4	(9.4)	-	2/8	
913	Ⅷ－１区	SD816C		土師器	杯	回転ﾅﾃﾞ、ﾍﾗｷﾘ後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	5YR7/6 橙	10YR8/3 浅黄橙	-	中・多	-	-	-	(14.6)	3.5	(7)	-	2/8	
914	Ⅷ－１区	SD816C		須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｷﾘ (板状圧痕)	回転ﾅﾃﾞ	N8/ 灰白	2.5Y8/1 灰白	-	-	-	-	中・少	10	2.1	6.1	-	4/8	
915	Ⅷ－１区	SD816C		瓦器	椀	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N4/ 灰	N4/ 灰	中・少	-	-	-	-	(14)	-	-	-	2/8	
916	Ⅷ－１区	SD816C		須恵器	椀	回転ﾅﾃﾞ、ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾅﾃﾞ後ﾍﾗﾐｶﾞｷ	5Y8/1 灰白	5Y7/1 灰白	-	-	-	-	細・少	(15)	-	-	-	3/8	
917	Ⅷ－１区	SD816C		須恵器	椀	回転ﾅﾃﾞ、ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ後ﾍﾗﾐｶﾞｷ	5Y8/1 灰白	5Y8/1 灰白	-	-	-	-	細・少	(14.8)	-	-	-	2/8	
918	Ⅷ－１区	SD816C		須恵器	椀	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ後ﾍﾗﾐｶﾞｷ	5Y8/1 灰白	2.5Y8/2 灰白	-	-	-	-	細・並	(15.8)	-	-	-	2/8	
919	Ⅷ－１区	SD816C		黒色土器	椀	回転ﾅﾃﾞ、ﾐｶﾞｷあり	回転ﾅﾃﾞ	2.5Y7/3 浅黄	N5/ 灰	細・並	中・少	-	-	-	(17)	-	-	-	1/8	黒色土器 A 類
920	Ⅷ－１区	SD816C		須恵器	椀	回転ﾅﾃﾞ、ﾅﾃﾞ後ﾐｶﾞｷ、回転ﾍﾗｷﾘ後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ後ﾐｶﾞｷ	N8/ 灰白	2.5Y8/1 灰白	-	-	-	-	中・少	-	-	5.2	-	5/8	
921	Ⅷ－１区	SD816C		須恵器	椀	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	2.5Y7/1 灰白	2.5Y5/2 暗灰黄	-	-	-	-	-	-	-	(5)	-	2/8	
922	Ⅷ－１区	SD816C		須恵器	椀	ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	2.5Y8/1 灰白	2.5Y8/2 灰白	-	-	-	-	中・多	-	-	5.4	-	4/8	
923	Ⅷ－１区	SD816C		須恵器	椀	ﾅﾃﾞ	ﾍﾗﾐｶﾞｷ	N7/ 灰白	N8/ 灰白	-	-	-	-	無	-	-	-	-	破片	
924	Ⅷ－１区	SD816C		須恵器	椀	回転ﾍﾗｷﾘ	回転ﾅﾃﾞ後ﾍﾗﾐｶﾞｷ	5Y8/1 灰白	5Y8/1 灰白	-	-	-	-	細・並	-	-	-	-	破片	
925	Ⅷ－１区	SD816B		土師器	椀	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ後ﾍﾗﾐｶﾞｷ	7.5YR8/3 浅黄橙	7.5YR8/4 浅黄橙	粗・少	細・少	-	-	-	-	-	(5.6)	-	2/8	
926	Ⅷ－１区	SD816C		土師器	捏鉢	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ、回転ﾍﾗｷﾘ	回転ﾅﾃﾞ	2.5Y8/2 灰白	2.5Y8/4 淡黄	中・並	-	-	-	-	-	-	-	-	破片	
927	Ⅷ－１区	SD816C		須恵器	捏鉢	ﾏﾒﾂ、回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ、ﾏﾒﾂ	ﾏﾒﾂ	7.5Y8/1 灰白	2.5Y7/2 灰黄	-	-	-	-	細・並	-	-	-	-	破片	
928	Ⅷ－１区	SD817		土師器	小皿	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｷﾘ後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	細・少	-	-	-	-	(7.6)	1.4	(5)	-	3/8	
929	Ⅷ－１区	SD817		土師器	小皿	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｷﾘ後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	細・少	-	-	-	-	(7.8)	0.9	(6.2)	-	1/8	
930	Ⅷ－１区	SD817		須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｷﾘ後ﾅﾃﾞ、痕板状圧痕	回転ﾅﾃﾞ	N8/ 灰白	N8/ 灰白	-	-	-	-	中・少	8	1.7	3.8	-	4/8	

第 38 表　兀塚遺跡出土土器観察表（31）

報告番号	調査区	遺構名	層位等	種類	器種	調整		色調		胎土					法量 (cm)				残存率	備考
						外面	内面	外部	内部	石英・長石	赤色粒	角閃石	雲母	その他	口径	器高	底径	その他		
931	Ⅷ－１区	SD817		土師器	杯	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR8/3 浅黄橙	中・少	-	-	-	-	(13.5)	-	-	-	1/8	
932	Ⅷ－１区	SD817		土師器	杯	ﾅﾃﾞ、糸ｷﾘ	回転ﾅﾃﾞ	7.5YR7/4 にぶい橙	2.5Y8/3 淡黄	中・少	-	-	細・並	-	-	-	(6)	-	1/8	
933	Ⅷ－１区	SD817		土師器	椀	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	5YR7/6 橙	5YR7/6 橙	中・並	中・並	-	-	-	-	-	-	-	破片	
934	Ⅷ－１区	SD817		須恵器	椀	回転ﾅﾃﾞ後ﾍﾗﾐｶﾞｷ、ﾅﾃﾞ後ﾍﾗﾐｶﾞｷ	回転ﾅﾃﾞ後ﾍﾗﾐｶﾞｷ	N7/ 灰白	N7/ 灰白	-	-	-	-	中・少	(15.4)	-	-	-	1/8	重ね焼痕
935	Ⅷ－１区	SD817		須恵器	椀	回転ﾍﾗｷﾘ	回転ﾅﾃﾞ	7.5Y8/1 灰白	7.5Y8/1 灰白	-	-	-	-	細・少	-	-	(4.8)	-	3/8	
936	Ⅷ－１区	SD817		須恵器	椀	ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ後仕上げﾅﾃﾞ	5Y8/1 灰白	5Y8/1 灰白	-	-	-	-	中・並	-	-	5	-	8/8	
937	Ⅷ－１区	SD817		須恵器	椀	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	5Y8/1 灰白	5Y8/1 灰白	-	-	-	-	細・少	-	-	5	-	4/8	
938	Ⅷ－１区	SD817		須恵器	椀	板状圧痕	ﾏﾒﾂ	2.5Y8/1 灰白	2.5Y8/1 灰白	-	-	-	-	中・少	-	-	5	-	7/8	
939	Ⅷ－１区	SD817		瓦器	椀	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N4/ 灰	N3/ 暗灰	中・並	-	-	-	-	-	-	(6)	-	1/8	
940	Ⅷ－１区	SD817		瓦器	椀	指ｵｻｴ後ﾅﾃﾞ	ﾏﾒﾂ	2.5Y4/1 黄灰	N5/ 灰	細・少	-	-	-	-	-	-	(3.5)	-	1/8	
941	Ⅷ－１区	SD817		白磁	椀	回転ﾅﾃﾞ後施釉、回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ後施釉	回転ﾅﾃﾞ後施釉	2.5GY8/1 灰白	10Y8/1 灰白		-	-	-	無	(16)	-	-	-	2/8	横田・森田分類白磁椀Ⅳ
942	Ⅷ－１区	SD819		土師器	小皿	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｷﾘ	回転ﾅﾃﾞ	5YR6/4 にぶい橙	5YR7/6 橙	細・少	-	-	-	-	(8.1)	1.2	(6.3)	-	1/8	
943	Ⅷ－１区	SD819		土師器	杯	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｷﾘ後ﾅﾃﾞ、板状圧痕	回転ﾅﾃﾞ、仕上げﾅﾃﾞ	10YR8/2 灰白	2.5Y8/2 灰白	中・少	中・少	-	-	-	-	-	6.2	-	5/8	
944	Ⅷ－１区	SD819		土師器	杯	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	2.5Y8/1 灰白	2.5Y8/1 灰白	中・少	-	-	-	-	(13.6)	-	-	-	1/8	
945	Ⅷ－１区	SD819		土師器	鍋	ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾊｹﾒ後ﾖｺﾅﾃﾞ	ﾖｺﾅﾃﾞ、板ﾅﾃﾞ	2.5Y7/1 灰白	10YR7/2 にぶい黄橙	中・少	-	-	-	-	-	-	-	-	破片	
946	Ⅷ－１区	SD823		土師器	杯	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｷﾘ (板状圧痕右)	回転ﾅﾃﾞ	7.5YR8/2 灰白	7.5YR8/4 浅黄橙	中・多	中・多	-	-	-	15.6	4	7.7	-	5/8	
947	Ⅷ－１区	SD823		須恵器	椀	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	2.5Y8/1 灰白	2.5Y5/1 黄灰	-	-	細・並	中・多	-	-	-	4.6	-	4/8	
948	Ⅷ－１区	SD823		瓦器	椀	ﾅﾃﾞ	ﾏﾒﾂ	2.5Y6/3 にぶい黄	2.5Y7/3 浅黄	-	-	-	-	細・少	-	-	(5)	-	2/8	
949	Ⅷ－２区	SD824	最下層 (灰色砂層)	土師器	小型丸底壺	ﾊｹﾒ、指ｵｻｴ後ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾏﾒﾂ	ﾊｹﾒ、板ﾅﾃﾞ、ﾍﾗｹｽﾞﾘ	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙	中・多	-	-	-	-	9.2	-	-	-	5/8	
950	Ⅷ－２区	SD824	最下層	土師器	甕	ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾅﾃﾞ	ﾖｺﾅﾃﾞ、指ｵｻｴ、ﾍﾗｹｽﾞﾘ	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	中・並	中・少	-	中・少	-	(16.4)	-	-	-	3/8	
951	Ⅷ－２区	SD824	最下層 (灰色砂層)	土師器	高杯	ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾊｹﾒ、ﾐｶﾞｷ、ﾖｺﾅﾃﾞ	ﾖｺﾅﾃﾞ後ﾐｶﾞｷ	7.5YR8/8	2.5YR7/6 橙 7.5YR8/8	中・並	中・並	-	-	-	(21)	7.1	(11)	-	2/8	
952	Ⅷ－２区	SD824	灰褐色土第２層	須恵器	蓋	回転ﾍﾗｷﾘ後ﾅﾃﾞ、回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N8/ 灰白	7.5Y7/1 灰白	-	-	-	-	無	(18)	-	-	-	1/8	内・外面自然釉付着
953	Ⅷ－２区	SD824	灰褐色土第２層	須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ、ﾍﾗｷﾘ後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ後仕上げﾅﾃﾞ	N6/ 灰	N6/ 灰	-	-	-	-	中・微	-	-	(11)	-	2/8	
954	Ⅷ－２区	SD824	灰褐色土第２層	須恵器	高杯	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N5/ 灰	N6/ 灰	-	-	-	-	細・少	-	-	8.2	-	4/8	
956	Ⅷ－１区	SP1054		土師器	杯	回転ﾅﾃﾞ、ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ、ﾅﾃﾞ後ﾊｹﾒ	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	-	-	-	-	中・少	(14.5)	-	-	-	2/8	
957	Ⅷ－１区	SP1054		須恵器	椀	回転ﾅﾃﾞ後ﾍﾗﾐｶﾞｷ	回転ﾅﾃﾞ、指ﾅﾃﾞ、ﾍﾗﾐｶﾞｷ	7.5Y7/1 灰白	7.5Y7/1 灰白	-	-	-	-	中・少	(13.8)	-	-	-	1/8	
958	Ⅷ－１区	SP1062		土師器	小皿	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｷﾘ (板状圧痕)	回転ﾅﾃﾞ	2.5Y8/2 灰白	25YR8/2 灰白	中・並	-	-	-	-	8.4	1.5	6	-	8/8	
959	Ⅷ－１区	SP1062		土師器	杯	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｷﾘ後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	2.5Y8/2 灰白	2.5Y8/2 灰白	-	-	-	-	粗・少	14.4	3.6	7.8	-	4/8	

第 39 表　兀塚遺跡出土土器観察表（32）

報告番号	調査区	遺構名	層位等	種類	器種	調整		色調		胎土					法量 (cm)				残存率	備考
						外面	内面	外部	内部	石英・長石	赤色粒	角閃石	雲母	その他	口径	器高	底径	その他		
960	Ⅷ－１区	SP1062		須恵器	椀	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ、ﾊｹﾒ	N7/ 灰白	N7/ 灰白	-	-	-	-	細・少	-	-	-	-	破片	外面重ね焼痕
961	Ⅷ－１区	SP1062		瓦器	椀	回転ﾅﾃﾞ、指ｵｻｴ後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ、ﾍﾗﾐｶﾞｷ	N5/ 灰	N5/ 灰	-	-	-	-	中・少	-	-	-	-	破片	
962	Ⅷ－１区	SP1072		土師器	杯	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｷﾘ後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	10YR8/1 灰白	10YR8/1 灰白	細・並	-	-	-	-	(13.1)	1.5	(9.7)	-	2/8	
963	Ⅷ－１区	SP1097		土師器	小皿	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｷﾘ後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	5YR7/6 橙	5YR7/6 橙	中・少	中・並	-	-	-	8.2	0.9	6.4	-	5/8	
964	Ⅷ－１区	SP1097		土師器	小皿	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｷﾘ後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	7.5YR8/6 浅黄橙	7.5YR8/6 浅黄橙	中・並	中・少	-	-	-	7.9	1.3	5.3	-	8/8	
965	Ⅷ－１区	SP1097		瓦器	椀	ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	N4/ 灰	N8/ 灰白	-	-	-	-	中・少	-	-	(5.4)	-	2/8	
966	Ⅷ－１区	SP1098		土師器	小皿	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｷﾘ後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	中・並	中・少	-	-	-	7.6	1.3	6	-	8/8	
967	Ⅷ－１区	SP1100		須恵器	小皿	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｷﾘ、ﾍﾗｷﾘ痕	回転ﾅﾃﾞ	2.5Y8/2 灰白	2.5Y8/2 灰白	-	-	-	-	細・少	(8)	1.1	(6.6)	-	4/8	
968	Ⅷ－１区	SP1100		黒色土器	椀	回転ﾅﾃﾞ後ﾍﾗﾐｶﾞｷ、ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ後ﾍﾗﾐｶﾞｷ後暗文	10YR7/3 にぶい黄橙	5Y4/1 灰	細・多	中・少	-	-	-	(16.4)	-	-	-	1/8	黒色土器Ａ類
969	Ⅷ－１区	SP1103		土師器	杯	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	10YR8/2 灰白	10YR8/3 浅黄橙	中・並	中・少	-	-	-	(13)	-	-	-	2/8	
970	Ⅷ－１区	SP1103		土師器	鍋	ﾖｺﾅﾃﾞ、指ｵｻｴ後ﾊｹﾒ	ﾊｹﾒ、板ﾅﾃﾞ	7.5YR4/2 灰褐	7.5YR4/1 褐灰	中・多	-	-	-	-	-	-	-	-	破片	
971	Ⅷ－１区	SP1127		土師器	足釜	指ｵｻｴ後ﾖｺﾅﾃﾞ、指ｵｻｴ後板ﾅﾃﾞ	ﾊｹﾒ	10YR2/1 黒	10YR2/1 黒	中・並	-	-	-	-	(21.4)	-	-	-	1/8	
972	Ⅷ－１区	SP1135		土師器	杯	ﾏﾒﾂ、板状圧痕、ﾍﾗｷﾘ後ﾅﾃﾞ	ﾏﾒﾂ	10YR7/2 にぶい黄橙	10YR7/2 にぶい黄橙	中・多	細・少	-	-	-	10.5	2.7	6.7	-	8/8	歪み有
973	Ⅷ－１区	SP1139		瓦器	小皿	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾅﾃﾞ後ﾍﾗﾐｶﾞｷ	N4/ 灰	N4/ 灰	-	-	-	-	細・少	(9.2)	-	-	-	2/8	
974	Ⅷ－１区	SP1139		土師器	小皿	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｷﾘ	回転ﾅﾃﾞ後仕上げﾅﾃﾞ	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	中・並	-	-	-	-	-	1.5	(5.5)	-	3/8	
975	Ⅷ－１区	SP1139		須恵器	椀	回転ﾅﾃﾞ、ﾊｹﾒ後ﾐｶﾞｷ	回転ﾅﾃﾞ後ﾐｶﾞｷ	10YR7/1 灰白	2.5YR7/1 明褐灰	-	-	-	-	粗・少	-	-	4.8	-	8/8	
976	Ⅷ－１区	SP1142		土師器	小皿	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｷﾘ後仕上げﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	25YR8/1 灰白	10YR8/2 灰白	中・少	-	-	-	-	7.5	1.2	5.2	-	7/8	
977	Ⅷ－１区	SP1143		須恵器	小皿	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｷﾘ後ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	25YR8/1 灰白	25YR8/1 灰白	-	-	-	-	中・多	7.5	1.2	5.6	-	7/8	
980	Ⅷ－１区	包含層		土師器	小皿	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｷﾘ後板状圧痕	回転ﾅﾃﾞ	7.5YR8/3 浅黄橙	7.5YR8/3 浅黄橙	細・並	中・少	-	-	-	6.8	1.2	5.2	-	6/8	
981	Ⅷ－１区	包含層		土師器	小皿	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｷﾘ	回転ﾅﾃﾞ	7.5YR8/3 浅黄橙	7.5YR8/3 浅黄橙	細・少	中・少	-	-	-	7.1	1.4	4.7	-	7/8	
982	Ⅷ－１区	包含層		土師器	小皿	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｷﾘ	回転ﾅﾃﾞ	10YR8/2 灰白	7.5YR8/3 浅黄橙	中・少	細・少	-	-	-	7.2	1.3	5.6	-	7/8	
983	Ⅷ－１区	包含層		青磁	皿	回転ﾅﾃﾞ後施釉、回転ﾍﾗｷﾘ	回転ﾅﾃﾞ後施釉	7.5Y6/2 灰オリーブ	7.5Y6/3 オリーブ黄	-	-	-	-	無	-	-	(5)	-	1/8	猫描き文
984	Ⅷ－１区	包含層		青磁	椀	回転ﾅﾃﾞ後施釉	回転ﾅﾃﾞ後施釉	7.5Y6/2 灰オリーブ	7.5Y6/2 灰オリーブ	-	-	-	-	細・少	(12.8)	-	-	-	1/8	
985	Ⅷ－１区	包含層		青磁	椀	回転ﾅﾃﾞ後施釉	回転ﾅﾃﾞ後施釉	10Y5/2 オリーブ灰	10Y6/2 オリーブ灰	-	-	-	-	無	-	-	-	-	破片	
986	Ⅷ－１区	包含層		青磁	椀	回転ﾅﾃﾞ	回転ﾅﾃﾞ	7.5Y5/2 灰オリーブ	7.5Y5/2 灰オリーブ	-	-	-	-	無	-	-	-	-	破片	
987	Ⅷ－１区	包含層		青磁	椀	削り出し高台後施釉	回転ﾅﾃﾞ後施釉	2.5GY7/1 明　灰	7.5Y8/1 灰白	-	-	-	-	精緻	-	-	(5)	-	2/8	線刻
988	Ⅷ－１区	包含層		青磁	椀	削り出し高台、施釉	回転ﾅﾃﾞ後線刻後施釉	5Y6/2 灰オリーブ	N8/ 灰白	-	-	-	-	精緻	-	-	(5.6)	-	1/8	龍泉窯

第 40 表　兀塚遺跡出土土器観察表（33）

報告番号	調査区	遺構名	層位等	種類	器種	調整		色調		胎土					法量 (cm)				残存率	備考
						外面	内面	外部	内部	石英・長石	赤色粒	角閃石	雲母	その他	口径	器高	底径	その他		
989	Ⅷ－１区	包含層		白磁	椀	回転ﾅﾃﾞ後施釉	回転ﾅﾃﾞ後施釉	7.5Y8/1 灰白	N8/ 灰白	-	-	-	-	精緻	(16.2)	-	-	-	1/8	横田・森田分類 椀Ⅳ 1a 類
993	Ⅸ－１区	SB901(SP09)		弥生土器	鉢	ﾅﾃﾞ、ﾊｹﾒ	ﾏﾒﾂ	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR5/1 褐灰	中・並	-	-	-	-	-	-	-	-	破片	
995	Ⅸ－１区	SK901		弥生土器	壺	櫛描き文	ﾏﾒﾂ	7.5YR7/6 橙	7.5YR6/4 にぶい橙	中・多	中・並	-	-	-	-	-	-	-	破片	
996	Ⅸ－１区	SK901		弥生土器	壺	刻み目	ﾏﾒﾂ	7.5YR8/8 黄橙	7.5YR6/8 橙	中・並	中・並 -	-	-	-	-	-	-	-	破片	櫛描文、貼付突帯
997	Ⅸ－１区	SK901		弥生土器	壺	ﾖｺﾅﾃﾞ（ﾏﾒﾂ）、ﾏﾒﾂ	ﾖｺﾅﾃﾞ（ﾏﾒﾂ）、ﾊｹﾒ	7.5YR7/6 橙	7.5YR6/8 橙	中・並	-	-	-	-	(14.4)	-	-	-	1/8	
998	Ⅸ－１区	SK901		弥生土器	壺	ﾍﾗﾐｶﾞｷ、ﾅﾃﾞ	ﾏﾒﾂ（指ｵｻｴ）	5YR6/4 にぶい橙	5YR6/4 にぶい橙	粗・多	-	-	-	-	-	-	5.6	-	8/8	
999	Ⅸ－１区	SK901		弥生土器	甕	ﾏﾒﾂ	ﾏﾒﾂ	5YR5/6 明赤褐	5YR5/6 明赤褐	粗・並	中・多	-	-	-	(17.6)	-	-	14.4	1/8	
1000	Ⅸ－１区	SK901		弥生土器	甕	ﾖｺﾅﾃﾞ、板ﾅﾃﾞ	ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾏﾒﾂ	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙	中・少	-	細・少	細・少	-	(13)	-	-	-	1/8	下川津Ｂ類
1001	Ⅸ－１区	SK901		弥生土器	小型丸底壺	ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾏﾒﾂ	ﾖｺﾅﾃ、ﾅﾃﾞ	5YR6/8 橙	5YR6/8 橙	中・並	-	-	-	-	-	-	-	-	5/8	
1002	Ⅸ－１区	SK901		弥生土器	鉢	指ｵｻｴ後ﾊｹﾒ	指ｵｻｴ後ﾊｹﾒ	7.5YR6/6 橙	7.5YR6/6 橙	中・並	-	-	-	-	(10.6)	4.8	(2)	-	2/8	
1003	Ⅸ－１区	ST901		土師器	杯	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｷﾘ	回転ﾅﾃﾞ	10YR8/4 浅黄橙	10YR8/2 灰白	粗・少	-	-	-	-	(14.4)	-	-	-	2/8	
1004	Ⅸ－１区	ST901		土師器	杯	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｷﾘ後ﾅﾃﾞ、板状圧痕	回転ﾅﾃﾞ	5YR7/6 橙	5YR7/8 橙	中・並	中・並	-	-	-	-	-	6.8	-	6/8	
1005	Ⅸ－１区	ST901		土師器	椀	ﾏﾒﾂ	ﾏﾒﾂ（ﾍﾗﾐｶﾞｷ）	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	中・並	-	-	-	-	-	-	-	-	破片	
1006	Ⅸ－１区	ST901		瓦器	椀	指ｵｻｴ後ﾍﾗﾐｶﾞｷ	指ｵｻｴ後ﾍﾗﾐｶﾞｷ	N6/ 灰	N6/ 灰	-	-	-	-	細・少	(12.8)	-	-	-	1/8	
1007	Ⅸ－１区	ST901		瓦器	椀	回転ﾅﾃﾞ後指ｵｻｴ後ﾍﾗﾐｶﾞｷ	回転ﾅﾃﾞ後ﾍﾗﾐｶﾞｷ	2.5Y7/1 灰白 2.5Y3/1 オリーブ黒	細・少	-	-	-	-	-	(15.6)	-	-	-	1/8	
1008	Ⅸ－１区	ST901		瓦器	椀	回転ﾅﾃﾞ、ﾍﾗﾐｶﾞｷ、指ｵｻｴ		2.5Y6/1 灰	2.5Y8/1 灰白	-	-	-	-	中・少	16	5	5	-		
1009	Ⅸ－１区	SP1019		弥生土器	甕	ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾊｹﾒ、全体的にﾏﾒﾂ	ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾏﾒﾂ、指ｵｻｴ、ﾍﾗｹｽﾞﾘ	7.5YR4/6 褐	7.5YR4/6 褐	細・並	中・並	-	細・少	-	(18.9)	-	-	-	3/8	下川津Ｂ類
1010	Ⅸ－１区	SP1019		弥生土器	甕	ﾍﾗﾐｶﾞｷ、ﾅﾃﾞ	ﾏﾒﾂ（ﾅﾃﾞ）	10YR5/2 灰黄褐	7.5YR6/4 にぶい橙	中、多	-	-	中、少	-	-	-	4.4	-	6/8	下川津Ｂ類
1011	Ⅸ－１区	SP1019		弥生土器	甕	ﾏﾒﾂ、ﾅﾃﾞ	ﾏﾒﾂ（指ｵｻｴ）	2.5YR5/6 明赤褐	2.5YR5/6 明赤褐	中・並	中・少	-	-	-	-	-	2.2	-	8/8	
1013	Ⅸ－２区	包含層		縄文土器	鉢	ﾏﾒﾂ	ﾏﾒﾂ	10R5/6 赤	10R2/1 赤黒	中・多	中・少	-	細・少	-	-	-	-	-	破片	
1014	Ⅸ－１区	包含層		青磁	椀	施釉	施釉	7.5Y5/2 灰オリーブ	N8/ 灰白	-	-	-	-	精緻	-	-	-	-	破片	
1015		出土地点不明		青磁	皿	回転ﾅﾃﾞ後施釉	回転ﾅﾃﾞ後施釉	7.5Y6/1 灰	7.5Y6/1 灰	-	-	-	-	細・少	-	-	(7)	-	2/8	猫描き文
1017		出土地点不明		弥生土器	壺	ﾏﾒﾂ	ﾅﾃﾞ、指ｵｻｴ、ﾏﾒﾂ	10YR8/4 浅黄橙	10YR8/4 浅黄橙	中・多	中・少	-	-	-	-	-	6.6	-	4/8	
1018		出土地点不明		須恵器	蓋	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ、ﾍﾗｷﾘ	回転ﾅﾃﾞ	N6/ 灰	N6/ 灰	-	-	-	-	中・少	11.7	4	8.6	-	8/8	
1019		出土地点不明		須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ、回転ﾍﾗｷﾘ	回転ﾅﾃﾞ	N5/ 灰	N6/ 灰	-	-	-	-	中・多	11.8	3	9.2	-	8/8	
1020		出土地点不明		須恵器	杯	回転ﾅﾃﾞ、回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ	回転ﾅﾃﾞ	N6/ 灰	N7/ 灰白	-	-	-	-	細・少	11.9	3.6	9.7	-	8/8	

第 41 表　兀塚遺跡出土石器観察表（1）

報文番号	調査区	報告遺構	報告層位	種類・器種	法量				材質	備考
					長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)		
1	Ⅰ区	SD102		楔形石器	2.0	3.4	0.6	5.65	サヌカイト	
9	Ⅱ区	SR201・202		石鏃	1.2	1.4	0.2	0.35	サヌカイト	
10	Ⅱ区	SR201・202		石鏃	2.1	1.3	0.3	0.67	サヌカイト	
11	Ⅱ区	SR201・202		石鏃	3.4	1.0	0.4	2.38	サヌカイト	
12	Ⅱ区	SR201・202		削器	6.4	3.2	0.6	14.91	サヌカイト	
21	Ⅱ区	SR203	中層	石鏃	2.3	1.7	0.3	0.95	サヌカイト	
22	Ⅱ区	SR203		石鏃	4.4	2.0	0.5	3.15	サヌカイト	
23	Ⅱ区	SR203	下層Ⅲ	石庖丁	6.1	4.7	0.8	25.09	サヌカイト	
24	Ⅱ区	SR203		削器	7.1	6.0	0.7	35.29	サヌカイト	風化が進んでいる
25	Ⅱ区	SR203		楔形石器	7.2	4.1	1.3	35.45	サヌカイト	槍先形石器または石庖丁転用楔形石器
53	Ⅲ区	SR301		石鏃	2.2	1.2	0.2	0.67	サヌカイト	
54	Ⅲ区	SR301		石鏃	2.9	1.9	0.5	2.36	サヌカイト	
55	Ⅲ区	SR301	中層Ⅰ	石鏃	3.2	1.7	0.6	2.20	サヌカイト	
56	Ⅲ区	SR301		石鏃	3.0	2.1	0.5	2.42	サヌカイト	
93	Ⅲ区	SR302	下層Ⅳ	石鏃	2.4	1.4	0.2	0.58	サヌカイト	
94	Ⅲ区	SR302	下層Ⅱ (南壁 9 層)	石鏃	2.2	1.6	0.4	0.92	サヌカイト	
95	Ⅲ区	SR302		削器	11.1	3.5	1.5	41.24	サヌカイト	
96	Ⅲ区	SR302		削器	8.4	6.6	1.0	68.00	サヌカイト	
97	Ⅲ区	SR302	下層Ⅳ	楔形石器	3.7	3.4	1.0	10.66	サヌカイト	
98	Ⅲ区	SR302	中層Ⅲ	楔形石器	3.0	2.7	0.8	4.91	サヌカイト	
99	Ⅲ区	SR302	下層Ⅳ	楔形石器	3.8	1.9	1.0	8.47	サヌカイト	
100	Ⅲ区	SR302		石核	4.2	4.5	2.1	41.67	サヌカイト	
118	Ⅳ区	SD403	下層	石鏃	3.0	1.6	0.3	1.24	サヌカイト	
125	Ⅳ区	SD404	上層	石鏃	1.8	1.5	0.2	0.57	サヌカイト	
126	Ⅳ区	SD404	下層	楔形石器	2.7	2.4	0.6	5.34	サヌカイト	
208	Ⅳ区	SR401	中層 (南壁 20 層)	石鏃	2.0	2.0	0.3	0.62	サヌカイト	
209	Ⅳ区	SR401	上層 (南壁 18 層)	石鏃	1.8	1.8	0.4	0.73	サヌカイト	
210	Ⅳ区	SR401	最上層 (南壁 13 層)	石鏃	1.5	1.3	0.3	0.53	サヌカイト	
211	Ⅳ区	SR401	上層 (南壁 18 層)	石鏃	1.7	1.9	0.3	0.94	サヌカイト	
212	Ⅳ区	SR401	最下層 (南壁 28 層)	石鏃	2.9	1.9	0.3	1.21	サヌカイト	
213	Ⅳ区	SR401	最上層 (南壁 17 層)	石鏃	3.1	1.9	0.8	3.12	サヌカイト	
214	Ⅳ区	SR401	最上層 (南壁 13 層)	石鏃	2.8	1.3	0.3	1.23	サヌカイト	
215	Ⅳ区	SR401	最上層 (南壁 13 層)	石鏃	1.9	1.5	0.5	1.16	サヌカイト	
216	Ⅳ区	SR401	最上層 (南壁 17 層)	石鏃	3.2	1.2	0.4	1.40	サヌカイト	
217	Ⅳ区	SR401	中層 (南壁 20 層)	石鏃	1.7	1.3	0.2	0.54	サヌカイト	
218	Ⅳ区	SR401	最上層 (南壁 17 層)	石鏃	2.1	1.3	0.3	0.67	サヌカイト	
219	Ⅳ区	SR401	最下層 (南壁 28 層)	石鏃	5.3	2.9	0.5	10.32	サヌカイト	
220	Ⅳ区	SR401	最下層 (南壁 28 層)	削器	6.6	5.1	1.0	28.78	サヌカイト	
221	Ⅳ区	SR401	上層 (南壁 18 層)	打製石斧	4.0	4.4	1.1	19.31	サヌカイト	
222	Ⅳ区	SR401	最下層 (南壁 28 層)	打製石斧	4.6	5.5	1.3	31.26	サヌカイト	
223	Ⅳ区	SR401	上層 (南壁 21 層)	打製石斧	4.7	5.9	1.0	25.20	サヌカイト	
224	Ⅳ区	SR401	最上層 (南壁 17 層)	調整ある剥片	2.7	4.7	1.4	14.81	サヌカイト	
225	Ⅳ区	SR401	下層 (南壁 22 層)	敲き石	5.9	5.5	2.4	100.02	サヌカイト	
226	Ⅳ区	SR401	最下層 (南壁 28 層)	剥片	6.0	5.5	0.9	33.15	サヌカイト	
260	Ⅴ区	ST501		石鏃	2.0	1.1	0.3	0.40	サヌカイト	

第 42 表　兀塚遺跡出土石器観察表（2）

報文番号	調査区	報告遺構	報告層位	種類・器種	法量				材質	備考
					長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)		
262	Ⅴ区	ST502		剥片	4.5	2.3	0.5	3.82	サヌカイト	
264	Ⅴ区	SD502		石鏃	2.0	1.2	0.3	0.57	サヌカイト	
285	Ⅴ区	SD510	下層	石核	5.8	5.0	1.1	40.67	サヌカイト	
313	Ⅴ区	SD517	下層	石鏃	2.3	1.4	0.3	0.95	サヌカイト	
333	Ⅴ区	SD521		砥石	8.0	4.2	3.7	104.64	砂岩	
354	Ⅴ区	包含層		横長剥片石核	4.6	7.0	2.2	64.93	サヌカイト	旧石器？
372	Ⅵ区	SD602	下層	二次加工ある剥片	3.5	3.7	0.7	9.91	サヌカイト	
432	Ⅵ区	SX605		石鏃	2.0	1.4	0.3	0.48	サヌカイト	
433	Ⅵ区	SX605		石鏃	2.0	1.5	0.4	0.82	サヌカイト	
434	Ⅵ区	SX605		石鏃	3.5	1.9	0.4	2.80	サヌカイト	
455	Ⅵ区	SR601	上層	楔形石器	4.1	2.1	1.3	14.74	サヌカイト	
591	Ⅵ区	SR602	下層	有舌尖頭器	5.8	2.5	1.0	10.92	サヌカイト	風化が著しい
592	Ⅵ区	SR602	上層	石鏃	4.1	1.7	0.4	2.23	サヌカイト	
593	Ⅵ区	SR602	下層	石鏃	1.9	1.5	0.3	0.48	サヌカイト	
594	Ⅵ区	SR602	中層	石鏃	2.1	1.2	0.4	0.61	サヌカイト	
595	Ⅵ区	SR602	下層	槍先形石器	5.3	2.6	0.8	12.59	サヌカイト	
596	Ⅵ区	SR602	下層	石庖丁	4.9	4.5	1.0	25.35	サヌカイト	
597	Ⅵ区	SR602	中層	石匙	5.3	7.4	1.2	40.02	サヌカイト	
598	Ⅵ区	SR602	下層 (南壁 64･65 層)	削器	4.6	6.8	1.7	43.62	サヌカイト	
599	Ⅵ区	SR602	下層	石鍬	5.1	7.6	1.2	40.97	サヌカイト	
600	Ⅵ区	SR602	中層 (南壁 69 層)	石鍬	6.3	5.2	2.2	70.88	サヌカイト	石斧の基部
601	Ⅵ区	SR602	下層	石核	3.8	9.9	1.1	10.20	サヌカイト	
602	Ⅵ区	SR602	下層	石核	18.6	11.3	8.0	1560.36	サヌカイト	
603	Ⅵ区	SR602	下層	石核	15.2	7.0	2.9	220.66	サヌカイト	
604	Ⅵ区	SR602	中層 (南壁 69 層)	敲き石	4.7	6.9	6.2	274.34	花崗岩	
618	Ⅵ区	SR603	上層	石鏃	3.0	1.2	0.3	0.99	サヌカイト	
640	Ⅵ区	SR604	中層	石庖丁	4.6	4.2	1.1	25.47	サヌカイト	
644	Ⅵ区	包含層		横長剥片	2.6	2.6	0.8	5.19	サヌカイト	
645	Ⅵ区	包含層		横長剥片石核	3.1	5.8	1.8	30.10	サヌカイト	
646	Ⅵ区	包含層		横長剥片石核	5.1	11.5	2.8	99.83	サヌカイト	
678	Ⅶ－２区	SB717(SP05)		石鏃	2.3	1.6	0.4	1.28	サヌカイト	
695	Ⅶ－２区	SK702		石核	4.6	6.5	2.1	67.13	サヌカイト	
696	Ⅶ－２区	SD704		調整ある剥片	4.1	3.7	0.8	15.71	サヌカイト	
710	Ⅶ－４区	SD713		削器	3.8	2.9	0.9	10.35	サヌカイト	
711	Ⅶ－４区	SD713		砥石	4.0	2.0	1.3	11.58	粘板岩	
716	Ⅶ－３区	SX704	淡灰色粘質土	凹石	11.9	9.4	4.0	651.86	砂岩	
717	Ⅶ－３区	SX704	淡灰色粘質土	石鏃	2.5	1.7	0.3	1.00	サヌカイト	
753	Ⅶ－２区	SP1314		石鏃	1.5	1.5	0.3	0.38	サヌカイト	
781	Ⅷ－１区	SP1088		原石素材	20.6	10.5	9.1	2119.96	サヌカイト	
797	Ⅷ－１区	SB804(SP01)		縦長剥片	6.3	2.2	1.1	14.89	サヌカイト	
955	Ⅷ－２区	SD824	灰褐色土	石鏃	4.5	2.0	0.5	3.42	サヌカイト	
978	Ⅷ－１区	SP1127		石鏃	3.6	1.3	0.5	2.06	サヌカイト	
979	Ⅷ－１区	SP1127		楔形石器	5.2	3.3	2.2	42.95	サヌカイト	
990	Ⅷ-1 区	包含層		丸石	5.1	4.7	4.5	139.95	花崗岩	
991	Ⅷ-1 区	包含層		管玉	1.2	0.4	0.4	0.29	碧玉	

第 43 表　兀塚遺跡出土石器観察表（3）

報文番号	調査区	報告遺構	報告層位	種類・器種	法量				材質	備考
					長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)		
992	Ⅷ-2 区	包含層		楔形石器の削片	4.6	2.0	0.8	6.12	サヌカイト	
994	Ⅸ-1 区	SB901(SP09)		石核	5.2	7.6	2.1	72.21	サヌカイト	
1012	Ⅸ-1 区	SP1019		調整ある剥片	4.2	2.8	0.6	7.57	サヌカイト	

第 44 表　兀塚遺跡出土瓦観察表

報文番号	調査区	報告遺構	報告層位	器種	胎土			法量 (cm)			色調		残存率	備考
					白色砂粒	黒色砂粒	灰色砂粒	残存長	残存幅	厚さ	凸面	凹面		
132	Ⅳ区	SD405		丸瓦	-	中・並	-	9.4	8.1	1.2	5Y6/1 灰	5Y5/1 灰	破片	玉縁
239	Ⅴ区	SK509		軒丸瓦	-	-	-	10.5	13.5	1.7	N5/ 灰	N5/ 灰	瓦当部 2/8	
240	Ⅴ区	SK509		丸瓦	-	-	-	21.2	12.3	1.3	N5/ 灰	N4/ 灰	6/8	
241	Ⅴ区	SK509		平瓦	-	-	-	23.7	23.4	1.8	N5/ 灰	N3/ 暗灰	7/8	
242	Ⅴ区	SK509		丸瓦	中・少	細・少	-	33	20.8	1.4	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙	破片	
252	Ⅴ区	SK510		軒丸瓦	中・少	-	-	6	10.0	1.8	N4/ 灰	2.5Y7/2 灰黄	瓦当部 2/8	
253	Ⅴ区	SK510		軒平瓦	細・少	-	-	4.9	7.4	1.3	N3/ 暗灰	N3/ 暗灰	瓦当部破片	
1016		出土地点不明		平瓦	-	-	-	4.4	3.9	2.4	（縄目）5Y4/1 灰	(布目)N3/ 暗灰	破片	

第 45 表　兀塚遺跡出土鉄器観察表

報文番号	調査区	報告遺構名	報告層位	種類・器種	法量				材質	備考
					長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)		
101	Ⅲ区	SR302		不明鉄器	20.3	2.6	1.4	-		
334	Ⅴ区	SX503		不明鉄器	4.6	2.7	1	-		
605	Ⅵ区	SR602	上層	鉄鏃	8.1	2.5	0.7	-		

第 46 表　兀塚遺跡出土木製品観察表

報文番号	調査区	報告遺構	報告層位	器種	法量 (cm)			樹種	木取り
					長さ	幅	厚さ		
227	Ⅳ区	SR401	下層	建築部材	157.5	11.5	9.5	ブナ科コナラ属アカガシ亜属	芯持材
228	Ⅳ区	SR401	下層	建築部材	125.5	9.8	7.5	ブナ科コナラ属アカガシ亜属	
229	Ⅳ区	SR401	下層	板材	21.3	2.4	0.8	ヒノキ科ヒノキ属	板目
230	Ⅳ区	SR401	下層 (南壁 29 層)	板材	12.1	2.5	0.75	ヒノキ科ヒノキ属	板目
328	Ⅴ区	SD520		板材	13.9	8.8	0.6	ヒノキ科アスナロ属	柾目
343	Ⅴ区	SP1015		板材	31.3	14.6	12	ブナ科クリ属クリ	芯持材
347	Ⅴ区	SP1024		板材	25.5	9.5	10.2	ブナ科クリ属クリ	芯持材
348	Ⅴ区	SP1025		板材	29.6	14.6	12.8	ブナ科クリ属クリ	芯持材
606	Ⅵ区	SR602	中層	ミカン割材	35.4	6.1	5.2	ブナ科コナラ属コナラ亜属クヌギ節	芯持材
687	Ⅶ－２区	SB724(SP14)		柱材	23.4	10.8	9	ブナ科クリ属クリ	芯持材
688	Ⅶ－２区	SB724(SP15)		柱材	32.9	11.2	10.7	ブナ科クリ属クリ	芯持材
815	Ⅷ－１区	SB806(P06)		柱材				コウヤマキ科コウヤマキ属コウヤマキ	

第 47 表　兀塚遺跡検出時・報告時遺構名新旧対照表（1）

調査年度	報告調査区	報告遺構名	発掘時調査区	調査時遺構名
H7	Ⅰ区	SA101	Ⅰ区	SA01
H7	Ⅰ区	SA101(SP01)	Ⅰ区	SP97
H7	Ⅰ区	SA101(SP02)	Ⅰ区	SP96
H7	Ⅰ区	SA101(SP03)	Ⅰ区	SP95
H7	Ⅰ区	SA101(SP04)	Ⅰ区	SP94
H7	Ⅰ区	SA101(SP05)	Ⅰ区	SP93
H7	Ⅰ区	SA101(SP06)	Ⅰ区	SP92
H7	Ⅰ区	SA101(SP07)	Ⅰ区	SP91
H7	Ⅰ区	SA101(SP08)	Ⅰ区	SP90
H7	Ⅰ区	SA101(SP09)	Ⅰ区	SP89
H7	Ⅰ区	SA101(SP10)	Ⅰ区	SP88
H7	Ⅰ区	SA101(SP11)	Ⅰ区	SP87
H7	Ⅰ区	SA101(SP12)	Ⅰ区	SP86
H7	Ⅰ区	SA101(SP13)	Ⅰ区	SP85
H7	Ⅰ区	SA101(SP14)	Ⅰ区	SP84
H7	Ⅰ区	SA101(SP15)	Ⅰ区	SP83
H7	Ⅰ区	SA101(SP16)	Ⅰ区	SP82
H7	Ⅰ区	SA101(SP17)	Ⅰ区	SP81
H7	Ⅰ区	SD101	Ⅰ区	SD09
H7	Ⅰ区	SD102	Ⅰ区	SD10
H7	Ⅰ区	SD103	Ⅰ区	SD11
H7	Ⅰ区	SD104	Ⅰ区	SD12
H7	Ⅰ区	SD105	Ⅰ区	SD13
H7	Ⅱ区	SR201	Ⅱ区	SR02A
H7	Ⅱ区	SR202	Ⅱ区	SR02B
H7	Ⅱ区	SR203	Ⅱ区	SR01
H7	Ⅲ区	SD301	Ⅲ区	SD24
H7	Ⅲ区	SR301	Ⅲ区	SR05
H7	Ⅲ区	SR302	Ⅲ区	SR06
H7	Ⅲ区	SR303	Ⅲ区	SR07
H7	Ⅲ区	水田 1	Ⅲ区	-
H7	Ⅲ区	水田 2	Ⅲ区	-
H7	Ⅲ区	水田 3	Ⅲ区	-
H7	Ⅲ区	水田 4	Ⅲ区	-
H7	Ⅲ区	水田 5	Ⅲ区	SZ202
H7	Ⅲ区	水田 6	Ⅲ区	SZ204
H7	Ⅲ区	水田 7	Ⅲ区	SZ203
H7	Ⅲ区	水田 8	Ⅲ区	SZ201
H7	Ⅲ区	水田 9	Ⅲ区	SZ205
H7	Ⅲ区	水田 10	Ⅲ区	SZ206
H7	Ⅲ区	水田 11	Ⅲ区	SZ208
H7	Ⅲ区	水田 12	Ⅲ区	SZ210
H7	Ⅲ区	水田 13	Ⅲ区	SZ207
H7	Ⅲ区	水田 14	Ⅲ区	SZ209
H7	Ⅲ区	水田 15	Ⅲ区	SZ211
H7	Ⅲ区	水田 16	Ⅲ区	SZ214
H7	Ⅲ区	水田 17	Ⅲ区	SZ212
H7	Ⅲ区	水田 18	Ⅲ区	SZ213
H7	Ⅲ区	水田 19	Ⅲ区	SZ215
H7	Ⅲ区	畦畔 301	Ⅲ区	畦畔 101
H7	Ⅲ区	畦畔 302	Ⅲ区	畦畔 201
H7	Ⅲ区	畦畔 303	Ⅲ区	畦畔 203
H7	Ⅲ区	畦畔 304	Ⅲ区	畦畔 202
H7	Ⅲ区	畦畔 305	Ⅲ区	畦畔 204
H7	Ⅲ区	畦畔 306	Ⅲ区	畦畔 206
H7	Ⅲ区	畦畔 307	Ⅲ区	-
H7	Ⅲ区	畦畔 308	Ⅲ区	畦畔 208
H7	Ⅲ区	畦畔 309	Ⅲ区	畦畔 211
H7	Ⅲ区	畦畔 310	Ⅲ区	-
H7	Ⅲ区	畦畔 311	Ⅲ区	-
H7	Ⅲ区	畦畔 312	Ⅲ区	畦畔 209
H7	Ⅲ区	畦畔 313	Ⅲ区	畦畔 205・207
H7	Ⅲ区	畦畔 314	Ⅲ区	畦畔 210
H7	Ⅳ区	SD401	Ⅳ区	SD25
H7	Ⅳ区	SD402	Ⅳ区	SD26
H7	Ⅳ区	SD403	Ⅳ区	SD28
H7	Ⅳ区	SD404	Ⅳ区	SD27
H7	Ⅳ区	SD405	Ⅳ区	SD29
H7	Ⅳ区	SX401	Ⅳ区	SX17
H7	Ⅳ区	SR401	Ⅳ区	SR08
H7	Ⅴ区	SK501	Ⅴ－1区	SK10
H7	Ⅴ区	SK502	Ⅴ－1区	SK13
H7	Ⅴ区	SK503	Ⅴ－1区	SK11
H7	Ⅴ区	SK504	Ⅴ－1区	SK12
H7	Ⅴ区	SK505	Ⅴ－1区	SX15
H7	Ⅴ区	SK506	Ⅴ－1区	SK09
H7	Ⅴ区	SK507	Ⅴ－1区	SK08
H7	Ⅴ区	SK508	Ⅴ－1区	SK07
H8	Ⅴ区	SK509	Ⅴ－2区	SK1012
H8	Ⅴ区	SK510	Ⅴ－2区	SK1010
H8	Ⅴ区	SK511	Ⅴ－2区	SK1011
H8	Ⅴ区	SK512	Ⅴ－2区	SK1009
H7	Ⅴ区	ST501	Ⅴ－1区	SD22
H7	Ⅴ区	ST502	Ⅴ－1区	SD23･SX13
H7	Ⅴ区	SD501	Ⅴ－1区	SX10
H7	Ⅴ区	SD502	Ⅴ－1区	SD21
H7	Ⅴ区	SD503	Ⅴ－1区	SX12
H7	Ⅴ区	SD504	Ⅴ－1区	SD20
H8	Ⅴ区	SD504	Ⅴ－2区	SD1043
H7	Ⅴ区	SD505	Ⅴ－1区	SD31
H7	Ⅴ区	SD506	Ⅴ－1区	SD18
H8	Ⅴ区	SD507	Ⅴ－2区	SD1044
H8	Ⅴ区	SD508	Ⅴ－2区	SD1041
H8	Ⅴ区	SD509	Ⅴ－2区	SD1038
H7	Ⅴ区	SD510	Ⅴ－1区	SD17･SX07
H7	Ⅴ区	SD511	Ⅴ－1区	SD16
H8	Ⅴ区	SD512	Ⅴ－2区	SD1040
H8	Ⅴ区	SD513	Ⅴ－2区	SD1039
H7	Ⅴ区	SD514	Ⅴ－1区	SD19
H8	Ⅴ区	SD515	Ⅴ－2区	SD1045
H8	Ⅴ区	SD516	Ⅴ－2区	SD1046
H7	Ⅴ区	SD517	Ⅴ－1区	SD15
H8	Ⅴ区	SD518	Ⅴ－2区	SD1030
H8	Ⅴ区	SD519	Ⅴ－2区	SD1031
H8	Ⅴ区	SD520	Ⅴ－2区	SD1029
H8	Ⅴ区	SD521	Ⅴ－2区	SD1032
H7	Ⅴ区	SX501	Ⅴ－1区	SX11
H7	Ⅴ区	SX502	Ⅴ－1区	SX09
H7	Ⅴ区	SX503	Ⅴ－1区	SX08
H7	Ⅴ区	SP117	Ⅴ－1区	SP117
H7	Ⅴ区	SP136	Ⅴ－1区	SP136
H7	Ⅴ区	SP160	Ⅴ－1区	SP160
H7	Ⅴ区	SP161	Ⅴ－1区	SP161
H7	Ⅴ区	SP175	Ⅴ－1区	SP175
H7	Ⅴ区	SP197	Ⅴ－1区	SP197
H7	Ⅴ区	SP1004	Ⅴ－2区	SP1004
H7	Ⅴ区	SP1005	Ⅴ－2区	SP1005
H7	Ⅴ区	SP1015	Ⅴ－2区	SP1015
H7	Ⅴ区	SP1021	Ⅴ－2区	SP1021
H7	Ⅴ区	SP1024	Ⅴ－2区	SP1024
H7	Ⅴ区	SP1025	Ⅴ－2区	SP1025
H7	Ⅴ区	SP1026	Ⅴ－2区	SP1026
H7	Ⅴ区	SP1027	Ⅴ－2区	SP1027
H7	Ⅵ区	SB601	Ⅵ区	SB04
H7	Ⅵ区	SB601(SP01)	Ⅵ区	SP16
H7	Ⅵ区	SB601(SP02)	Ⅵ区	SP24
H7	Ⅵ区	SB601(SP03)	Ⅵ区	SP39
H7	Ⅵ区	SB601(SP04)	Ⅵ区	SP13
H7	Ⅵ区	SB601(SP05)	Ⅵ区	SP10
H7	Ⅵ区	SB601(SP06)	Ⅵ区	SP7
H7	Ⅵ区	SB601(SP07)	Ⅵ区	SP17
H7	Ⅵ区	SB602	Ⅵ区	SB03
H7	Ⅵ区	SB602(SP01)	Ⅵ区	SP15
H7	Ⅵ区	SB602(SP02)	Ⅵ区	SP31
H7	Ⅵ区	SB602(SP03)	Ⅵ区	SP38
H7	Ⅵ区	SB602(SP04)	Ⅵ区	SP45
H7	Ⅵ区	SB602(SP05)	Ⅵ区	SP22
H7	Ⅵ区	SB602(SP06)	Ⅵ区	SP23
H7	Ⅵ区	SB602(SP07)	Ⅵ区	SP19
H7	Ⅵ区	SB602(SP08)	Ⅵ区	SP18
H7	Ⅵ区	SB603	Ⅵ区	SB06
H7	Ⅵ区	SB603(SP01)	Ⅵ区	SP11
H7	Ⅵ区	SB603(SP02)	Ⅵ区	SP27
H7	Ⅵ区	SB603(SP03)	Ⅵ区	SP30
H7	Ⅵ区	SB603(SP04)	Ⅵ区	SP36
H7	Ⅵ区	SB603(SP05)	Ⅵ区	SP04
H7	Ⅵ区	SB603(SP06)	Ⅵ区	SP02
H7	Ⅵ区	SB603(SP07)	Ⅵ区	SP01
H7	Ⅵ区	SB604	Ⅵ区	SB05
H7	Ⅵ区	SB604(SP01)	Ⅵ区	SP21
H7	Ⅵ区	SB604(SP02)	Ⅵ区	SP43
H7	Ⅵ区	SB604(SP03)	Ⅵ区	SP32

第 48 表　兀塚遺跡検出時・報告時遺構名新旧対照表（2）

調査年度	報告調査区	報告遺構名	発掘時調査区	調査時遺構名
H7	Ⅵ区	SB604(SP04)	Ⅵ区	SP33
H7	Ⅵ区	SB604(SP05)	Ⅵ区	SP29
H7	Ⅵ区	SB604(SP06)	Ⅵ区	SP20
H7	Ⅵ区	SB604(SP07)	Ⅵ区	SP14
H7	Ⅵ区	SB605	Ⅵ区	SB02
H7	Ⅵ区	SB605(SP01)	Ⅵ区	SP66
H7	Ⅵ区	SB605(SP02)	Ⅵ区	SP50
H7	Ⅵ区	SB605(SP03)	Ⅵ区	SP56
H7	Ⅵ区	SB605(SP04)	Ⅵ区	SP47
H7	Ⅵ区	SB605(SP05)	Ⅵ区	SP67
H7	Ⅵ区	SB605(SP06)	Ⅵ区	SP51
H7	Ⅵ区	SB605(SP07)	Ⅵ区	SP42
H7	Ⅵ区	SB606	Ⅵ区	SB01
H7	Ⅵ区	SB606(SP01)	Ⅵ区	SP61
H7	Ⅵ区	SB606(SP02)	Ⅵ区	SP60
H7	Ⅵ区	SB606(SP03)	Ⅵ区	SP57
H7	Ⅵ区	SB606(SP04)	Ⅵ区	SP58
H7	Ⅵ区	SB606(SP05)	Ⅵ区	SP59
H7	Ⅵ区	SB606(SP06)	Ⅵ区	SP63
H7	Ⅵ区	SB606(SP07)	Ⅵ区	SP62
H7	Ⅵ区	SB607	Ⅵ区	SB07
H7	Ⅵ区	SB607(SP01)	Ⅵ区	SP69
H7	Ⅵ区	SB607(SP02)	Ⅵ区	SP70
H7	Ⅵ区	SB607(SP03)	Ⅵ区	SP72
H7	Ⅵ区	SB607(SP04)	Ⅵ区	SP74
H7	Ⅵ区	SB607(SP05)	Ⅵ区	SB07
H7	Ⅵ区	SB607(SP06)	Ⅵ区	SP73
H7	Ⅵ区	SK601	Ⅵ区	SK01
H7	Ⅵ区	SK602	Ⅵ区	SK02
H7	Ⅵ区	SK603	Ⅵ区	SK04
H7	Ⅵ区	SK604	Ⅵ区	SK03
H7	Ⅵ区	SK605	Ⅵ区	SK05
H7	Ⅵ区	SK606	Ⅵ区	SK06
H7	Ⅵ区	SD601	Ⅵ区	SD01
H7	Ⅵ区	SD602	Ⅵ区	SD02
H7	Ⅵ区	SD603	Ⅵ区	SD08
H7	Ⅵ区	SD604	Ⅵ区	SD14
H7	Ⅵ区	SX601	Ⅵ区	SX05
H7	Ⅵ区	SX602	Ⅵ区	SX06
H7	Ⅵ区	SX603	Ⅵ区	SX02
H7	Ⅵ区	SX604	Ⅵ区	SX03
H7	Ⅵ区	SX605	Ⅵ区	SX01
H7	Ⅵ区	SX606	Ⅵ区	SX04
H7	Ⅵ区	SR601	Ⅵ区	SR03
H7	Ⅵ区	SR602	Ⅵ区	SR04・SD05・06
H7	Ⅵ区	SR603	Ⅵ区	SD03・04
H7	Ⅵ区	SR604	Ⅵ区	SD07
H8	Ⅶ－１区	SB701	Ⅶ－１区	SB1016
H8	Ⅶ－１区	SB701(SP01)	Ⅶ－１区	SB1016(p7)
H8	Ⅶ－１区	SB701(SP02)	Ⅶ－１区	SB1016(p8)

調査年度	報告調査区	報告遺構名	発掘時調査区	調査時遺構名
H8	Ⅶ－１区	SB701(SP03)	Ⅶ－１区	SB1016(p9)
H8	Ⅶ－１区	SB701(SP04)	Ⅶ－１区	SB1016(p10)
H8	Ⅶ－１区	SB701(SP05)	Ⅶ－１区	SB1016(p11)
H8	Ⅶ－１区	SB701(SP06)	Ⅶ－１区	SB1016(p12)
H8	Ⅶ－１区	SB701(SP07)	Ⅶ－１区	SB1016(p1)
H8	Ⅶ－１区	SB701(SP08)	Ⅶ－１区	SB1016(p2)
H8	Ⅶ－１区	SB701(SP09)	Ⅶ－１区	SB1016(p3)
H8	Ⅶ－１区	SB701(SP10)	Ⅶ－１区	SB1016(p4)
H8	Ⅶ－１区	SB701(SP11)	Ⅶ－１区	SB1016(p5)
H8	Ⅶ－１区	SB701(SP12)	Ⅶ－１区	SB1016(p6)
H8	Ⅶ－１区	SB702	Ⅶ－１区	SB1021
H8	Ⅶ－１区	SB702(SP01)	Ⅶ－１区	SB1021(p6)
H8	Ⅶ－１区	SB702(SP02)	Ⅶ－１区	SB1021(p7)
H8	Ⅶ－１区	SB702(SP03)	Ⅶ－１区	SB1021(p8)
H8	Ⅶ－１区	SB702(SP04)	Ⅶ－１区	SB1021(p9)
H8	Ⅶ－１区	SB702(SP05)	Ⅶ－１区	SB1021(p10)
H8	Ⅶ－１区	SB702(SP06)	Ⅶ－１区	SB1021(p1)
H8	Ⅶ－１区	SB702(SP07)	Ⅶ－１区	SB1021(p2)
H8	Ⅶ－１区	SB702(SP08)	Ⅶ－１区	SB1021(p3)
H8	Ⅶ－１区	SB702(SP09)	Ⅶ－１区	SB1021(p4)
H8	Ⅶ－１区	SB702(SP10)	Ⅶ－１区	SB1021(p5)
H8	Ⅶ－１区	SB702(SP11)	Ⅶ－１区	SP1341
H8	Ⅶ－１区	SB702(SP12)	Ⅶ－１区	SB1021
H8	Ⅶ－１区	SB703	Ⅶ－１区	SB1019
H8	Ⅶ－１区	SB703(SP01)	Ⅶ－１区	SB1019(p1)
H8	Ⅶ－１区	SB703(SP02)	Ⅶ－１区	SB1019(p2)
H8	Ⅶ－１区	SB703(SP03)	Ⅶ－１区	SB1019(p3)
H8	Ⅶ－１区	SB703(SP04)	Ⅶ－１区	SB1019(p4)
H8	Ⅶ－１区	SB703(SP05)	Ⅶ－１区	SB1019(p5)
H8	Ⅶ－１区	SB703(SP06)	Ⅶ－１区	SB1019(p6)
H8	Ⅶ－１区	SB703(SP07)	Ⅶ－１区	SB1019(p7)
H8	Ⅶ－１区	SB703(SP08)	Ⅶ－１区	SB1019(p8)
H8	Ⅶ－１区	SB704	Ⅶ－１区	SB1026
H8	Ⅶ－１区	SB704(SP01)	Ⅶ－１区	SP1321
H8	Ⅶ－１区	SB704(SP02)	Ⅶ－１区	-
H8	Ⅶ－１区	SB704(SP03)	Ⅶ－１区	SP1353
H8	Ⅶ－１区	SB704(SP04)	Ⅶ－１区	SP1350
H8	Ⅶ－１区	SB704(SP05)	Ⅶ－１区	SP1319
H8	Ⅶ－１区	SB704(SP06)	Ⅶ－１区	SP1318
H8	Ⅶ－１区	SB704(SP07)	Ⅶ－１区	SP1317
H8	Ⅶ－１区	SB704(SP08)	Ⅶ－１区	SP1316
H8	Ⅶ－１区	SB704(SP09)	Ⅶ－１区	-
H8	Ⅶ－１区	SB704(SP10)	Ⅶ－１区	SP1314
H8	Ⅶ－１区	SB705	Ⅶ－１区	SB1025
H8	Ⅶ－１区	SB705(SP01)	Ⅶ－１区	SP1333
H8	Ⅶ－１区	SB705(SP02)	Ⅶ－１区	-
H8	Ⅶ－１区	SB705(SP03)	Ⅶ－１区	SP1342
H8	Ⅶ－１区	SB705(SP04)	Ⅶ－１区	SP1343
H8	Ⅶ－１区	SB705(SP05)	Ⅶ－１区	-
H8	Ⅶ－１区	SB705(SP06)	Ⅶ－１区	SP1354
H8	Ⅶ－１区	SB705(SP07)	Ⅶ－１区	-

調査年度	報告調査区	報告遺構名	発掘時調査区	調査時遺構名
H8	Ⅶ－１区	SB705(SP08)	Ⅶ－１区	-
H8	Ⅶ－１区	SB705(SP09)	Ⅶ－１区	SP1346
H8	Ⅶ－１区	SB705(SP10)	Ⅶ－１区	-
H8	Ⅶ－１区	SB705(SP11)	Ⅶ－１区	-
H8	Ⅶ－１区	SB705(SP12)	Ⅶ－１区	SP1340
H8	Ⅶ－１区	SB705(SP13)	Ⅶ－１区	SP1352
H8	Ⅶ－１区	SB705(SP14)	Ⅶ－１区	-
H8	Ⅶ－１区	SB706	Ⅶ－１区	SB1020
H8	Ⅶ－１区	SB706(SP01)	Ⅶ－１区	SB1020(p4)
H8	Ⅶ－１区	SB706(SP02)	Ⅶ－１区	SB1020(p5)
H8	Ⅶ－１区	SB706(SP03)	Ⅶ－１区	SB1020(p6)
H8	Ⅶ－１区	SB706(SP04)	Ⅶ－１区	SB1020(p1)
H8	Ⅶ－１区	SB706(SP05)	Ⅶ－１区	SB1020(p2)
H8	Ⅶ－１区	SB706(SP06)	Ⅶ－１区	SB1020(p3)
H8	Ⅶ－１区	SB707	Ⅶ－１区	-
H8	Ⅶ－１区	SB707(SP01)	Ⅶ－１区	-
H8	Ⅶ－１区	SB707(SP02)	Ⅶ－１区	SB1017(p3)
H8	Ⅶ－１区	SB707(SP03)	Ⅶ－１区	SB1017(p2)
H8	Ⅶ－１区	SB707(SP04)	Ⅶ－１区	SB1017(p1)
H8	Ⅶ－１区	SB707(SP05)	Ⅶ－１区	SP1310
H8	Ⅶ－１区	SB708	Ⅶ－１区	SB1017
H8	Ⅶ－１区	SB708(SP01)	Ⅶ－１区	SP1312
H8	Ⅶ－１区	SB708(SP02)	Ⅶ－１区	SP1311
H8	Ⅶ－１区	SB708(SP03)	Ⅶ－１区	SB1017(p4)
H8	Ⅶ－１区	SB708(SP04)	Ⅶ－１区	SB1017(p5)
H8	Ⅶ－１区	SB708(SP05)	Ⅶ－１区	SB1017(p6)
H8	Ⅶ－１区	SB708(SP06)	Ⅶ－１区	-
H8	Ⅶ－１区	SB708(SP07)	Ⅶ－１区	-
H8	Ⅶ－１区	SB708(SP08)	Ⅶ－１区	-
H8	Ⅶ－１区	SB708(SP09) (SB709-SP05)	Ⅶ－１区	-
H8	Ⅶ－１区	SB709	Ⅶ－１区	SB1018
H8	Ⅶ－１区	SB709(SP01)	Ⅶ－１区	SB1018(p3)
H8	Ⅶ－１区	SB709(SP02)	Ⅶ－１区	SB1018(p4)
H8	Ⅶ－１区	SB709(SP03)	Ⅶ－１区	SB1018(p5)
H8	Ⅶ－１区	SB709(SP04)	Ⅶ－１区	SB1018(p6)
H8	Ⅶ－１区	SB709(SP05) (SB708-SP09)	Ⅶ－１区	SB1018(p1)
H8	Ⅶ－１区	SB709(SP06)	Ⅶ－１区	SB1018(p2)
H8	Ⅶ－１区	SB710	Ⅶ－１区	-
H8	Ⅶ－１区	SB710(SP01)	Ⅶ－１区	SP1012
H8	Ⅶ－１区	SB710(SP02)	Ⅶ－１区	-
H8	Ⅶ－１区	SB710(SP03)	Ⅶ－１区	SP1014
H8	Ⅶ－１区	SB710(SP04)	Ⅶ－１区	-
H8	Ⅶ－１区	SB710(SP05)	Ⅶ－１区	SP1010
H8	Ⅶ－１区	SB710(SP06)	Ⅶ－１区	SP1011
H8	Ⅶ－１区	SB711	Ⅶ－１区	-
H8	Ⅶ－１区	SB711(SP01)	Ⅶ－１区	-
H8	Ⅶ－１区	SB711(SP02)	Ⅶ－１区	-
H8	Ⅶ－１区	SB711(SP03)	Ⅶ－１区	SP1325
H8	Ⅶ－１区	SB711(SP04)	Ⅶ－１区	-

第 49 表　兀塚遺跡検出時・報告時遺構名新旧対照表（3）

調査年度	報告調査区	報告遺構名	発掘時調査区	調査時遺構名
H8	Ⅶ－1区	SB711(SP05)	Ⅶ－1区	SP1323
H8	Ⅶ－1区	SB711(SP06)	Ⅶ－1区	-
H8	Ⅶ－1区	SB711(SP07)	Ⅶ－1区	SP1008
H8	Ⅶ－1区	SB711(SP08)	Ⅶ－1区	-
H8	Ⅶ－1区	SB711(SP09)	Ⅶ－1区	-
H8	Ⅶ－1区	SB712	Ⅶ－1区	-
H8	Ⅶ－1区	SB712(SP10)	Ⅶ－1区	SP1355
H8	Ⅶ－1区	SB712(SP11)	Ⅶ－1区	-
H8	Ⅶ－1区	SB712(SP12)	Ⅶ－1区	-
H8	Ⅶ－1区	SB712(SP13)	Ⅶ－1区	-
H8	Ⅶ－1区	SB712(SP14)	Ⅶ－1区	-
H8	Ⅶ－1区	SB712(SP15)	Ⅶ－1区	-
H8	Ⅶ－1区	SB712(SP16)	Ⅶ－1区	SP1001
H8	Ⅶ－1区	SB712(SP17)	Ⅶ－1区	-
H8	Ⅶ－1区	SB712(SP18)	Ⅶ－1区	-
H8	Ⅶ－1区	SB712(SP19)	Ⅶ－1区	SP1009
H8	Ⅶ－1区	SB712(SP20)	Ⅶ－1区	-
H8	Ⅶ－1区	SB712(SP21)	Ⅶ－1区	-
H8	Ⅶ－1区	SD701	Ⅶ－1区	SR1001
H8	Ⅶ－1区	SD702	Ⅶ－1区	SD1034
H8	Ⅶ－1区	SX701	Ⅶ－1区	SX1003
H8	Ⅶ－1区	SP1005	Ⅶ－1区	SP1005
H8	Ⅶ－1区	SP1301	Ⅶ－1区	SP1301
H8	Ⅶ－1区	SP1304	Ⅶ－1区	SP1304
H8	Ⅶ－1区	SP1305	Ⅶ－1区	SP1305
H8	Ⅶ－1区	SP1315	Ⅶ－1区	SP1315
H8	Ⅶ－1区	SP1335	Ⅶ－1区	SP1335
H8	Ⅶ－1区	SP1338	Ⅶ－1区	SP1338
H8	Ⅶ－1区	SP1344	Ⅶ－1区	SP1344
H8	Ⅶ－1区	SP1356	Ⅶ－1区	SP1356
H8	Ⅶ－2区	SH701	Ⅶ－2区	SH1001
H8	Ⅶ－2区	SH701(P1)	Ⅶ－2区	SH1001(p1)
H8	Ⅶ－2区	SH701(P2)	Ⅶ－2区	SH1001(p2)
H8	Ⅶ－2区	SH701(SP01)	Ⅶ－2区	-
H8	Ⅶ－2区	SH701(SP02)	Ⅶ－2区	-
H8	Ⅶ－2区	SH701(SP03)	Ⅶ－2区	-
H8	Ⅶ－2区	SH701(SP04)	Ⅶ－2区	-
H8	Ⅶ－2区	SB713	Ⅶ－2区	SB1007
H8	Ⅶ－2区	SB713(SP01)	Ⅶ－2区	SB1007(p11)
H8	Ⅶ－2区	SB713(SP02)	Ⅶ－2区	SB1007(p12)
H8	Ⅶ－2区	SB713(SP03)	Ⅶ－2区	SB1007(p1)
H8	Ⅶ－2区	SB713(SP04)	Ⅶ－2区	SB1007(p2)
H8	Ⅶ－2区	SB713(SP05)	Ⅶ－2区	SB1007(p3)
H8	Ⅶ－2区	SB713(SP06)	Ⅶ－2区	SB1007(p4)
H8	Ⅶ－2区	SB713(SP07)	Ⅶ－2区	SB1007(p5)
H8	Ⅶ－2区	SB713(SP08)	Ⅶ－2区	SB1007(p6)
H8	Ⅶ－2区	SB713(SP09)	Ⅶ－2区	SB1007(p7)
H8	Ⅶ－2区	SB713(SP10)	Ⅶ－2区	SB1007(p8)
H8	Ⅶ－2区	SB713(SP11)	Ⅶ－2区	SB1007(p9)
H8	Ⅶ－2区	SB713(SP12)	Ⅶ－2区	SB1007(p10)
H8	Ⅶ－2区	SB714	Ⅶ－2区	-

調査年度	報告調査区	報告遺構名	発掘時調査区	調査時遺構名
H8	Ⅶ－2区	SB714(SP01)	Ⅶ－2区	SP1090
H8	Ⅶ－2区	SB714(SP02)	Ⅶ－2区	SP1088
H8	Ⅶ－2区	SB714(SP03)	Ⅶ－2区	SP1111
H8	Ⅶ－2区	SB714(SP04)	Ⅶ－2区	-
H8	Ⅶ－2区	SB715	Ⅶ－2区	SB1004
H8	Ⅶ－2区	SB715(SP01)	Ⅶ－2区	SB1004(p5)
H8	Ⅶ－2区	SB715(SP02)	Ⅶ－2区	SB1004(p6)
H8	Ⅶ－2区	SB715(SP03)	Ⅶ－2区	SB1004(p7)
H8	Ⅶ－2区	SB715(SP04)	Ⅶ－2区	SB1004(p8)
H8	Ⅶ－2区	SB715(SP05)	Ⅶ－2区	SB1004(p1)
H8	Ⅶ－2区	SB715(SP06)	Ⅶ－2区	SB1004(p2)
H8	Ⅶ－2区	SB715(SP07)	Ⅶ－2区	SB1004(p3)
H8	Ⅶ－2区	SB715(SP08)	Ⅶ－2区	SB1004(p4)
H8	Ⅶ－2区	SB715(SP09)	Ⅶ－2区	-
H8	Ⅶ－2区	SB716	Ⅶ－2区	SB1005
H8	Ⅶ－2区	SB716(SP01)	Ⅶ－2区	SB1005(p5)
H8	Ⅶ－2区	SB716(SP02)	Ⅶ－2区	SB1005 (p6・SP1074)
H8	Ⅶ－2区	SB716(SP03)	Ⅶ－2区	SB1005(p7)
H8	Ⅶ－2区	SB716(SP04)	Ⅶ－2区	SB1005(p8)
H8	Ⅶ－2区	SB716(SP05)	Ⅶ－2区	-
H8	Ⅶ－2区	SB716(SP06)	Ⅶ－2区	SB1005(p1)
H8	Ⅶ－2区	SB716(SP07)	Ⅶ－2区	SB1005(p2)
H8	Ⅶ－2区	SB716(SP08)	Ⅶ－2区	SB1005(p3)
H8	Ⅶ－2区	SB716(SP09)	Ⅶ－2区	SB1005(p4)
H8	Ⅶ－2区	SB716(SP10)	Ⅶ－2区	-
H8	Ⅶ－2区	SB717	Ⅶ－2区	SB1010
H8	Ⅶ－2区	SB717(SP01)	Ⅶ－2区	SB1009・ 1010(p5)
H8	Ⅶ－2区	SB717(SP02)	Ⅶ－2区	SB1010(p6)
H8	Ⅶ－2区	SB717(SP03)	Ⅶ－2区	SB1010(p1)
H8	Ⅶ－2区	SB717(SP04)	Ⅶ－2区	SB1009・ 1010(p2)
H8	Ⅶ－2区	SB717(SP05)	Ⅶ－2区	SB1010 (p3・SP1304)
H8	Ⅶ－2区	SB717(SP06)	Ⅶ－2区	SB1010(p4)
H8	Ⅶ－2区	SB717(SP07)	Ⅶ－2区	-
H8	Ⅶ－2区	SB718	Ⅶ－2区	SB1003
H8	Ⅶ－2区	SB718(SP01)	Ⅶ－2区	SB1003(p7)
H8	Ⅶ－2区	SB718(SP02)	Ⅶ－2区	SB1003(p8)
H8	Ⅶ－2区	SB718(SP03)	Ⅶ－2区	SB1003(p9)
H8	Ⅶ－2区	SB718(SP04)	Ⅶ－2区	SB1003(p10)
H8	Ⅶ－2区	SB718(SP05)	Ⅶ－2区	SB1003(p11)
H8	Ⅶ－2区	SB718(SP06)	Ⅶ－2区	SB1003(p12)
H8	Ⅶ－2区	SB718(SP07)	Ⅶ－2区	SB1003(p1)
H8	Ⅶ－2区	SB718(SP08)	Ⅶ－2区	SB1003(p2)
H8	Ⅶ－2区	SB718(SP09)	Ⅶ－2区	SB1003(p3)
H8	Ⅶ－2区	SB718(SP10)	Ⅶ－2区	SB1003(p4)
H8	Ⅶ－2区	SB718(SP11)	Ⅶ－2区	SB1003(p5)
H8	Ⅶ－2区	SB718(SP12)	Ⅶ－2区	SB1003(p6)
H8	Ⅶ－2区	SB719	Ⅶ－2区	SB1009

調査年度	報告調査区	報告遺構名	発掘時調査区	調査時遺構名
H8	Ⅶ－2区	SB719(SP01)	Ⅶ－2区	SB1009・ 1010(p5)
H8	Ⅶ－2区	SB719(SP02)	Ⅶ－2区	SB1009(p1)
H8	Ⅶ－2区	SB719(SP03)	Ⅶ－2区	-
H8	Ⅶ－2区	SB719(SP04) (SB719・SP04)	Ⅶ－2区	SB1009・ 1010(p2)
H8	Ⅶ－2区	SB719(SP05)	Ⅶ－2区	-
H8	Ⅶ－2区	SB719(SP06)	Ⅶ－2区	SB1009(p3)
H8	Ⅶ－2区	SB720	Ⅶ－2区	-
H8	Ⅶ－2区	SB720(SP01)	Ⅶ－2区	-
H8	Ⅶ－2区	SB720(SP02)	Ⅶ－2区	-
H8	Ⅶ－2区	SB720(SP03)	Ⅶ－2区	-
H8	Ⅶ－2区	SB720(SP04)	Ⅶ－2区	SP1343
H8	Ⅶ－2区	SB720(SP05)	Ⅶ－2区	-
H8	Ⅶ－2区	SB721	Ⅶ－2区	SB1006
H8	Ⅶ－2区	SB721(SP01)	Ⅶ－2区	SB1006(p9)
H8	Ⅶ－2区	SB721(SP02)	Ⅶ－2区	SB1006(p10)
H8	Ⅶ－2区	SB721(SP03)	Ⅶ－2区	SB1006(p1)
H8	Ⅶ－2区	SB721(SP04)	Ⅶ－2区	SB1006(p2)
H8	Ⅶ－2区	SB721(SP05)	Ⅶ－2区	SB1006(p3)
H8	Ⅶ－2区	SB721(SP06)	Ⅶ－2区	SB1006(p4)
H8	Ⅶ－2区	SB721(SP07)	Ⅶ－2区	SB1006(p5)
H8	Ⅶ－2区	SB721(SP08)	Ⅶ－2区	SB1006(p6)
H8	Ⅶ－2区	SB721(SP09)	Ⅶ－2区	SB1006(p7)
H8	Ⅶ－2区	SB721(SP10)	Ⅶ－2区	SB1006(p8)
H8	Ⅶ－2区	SB722	Ⅶ－2区	SB1008
H8	Ⅶ－2区	SB722(SP01)	Ⅶ－2区	SP1330
H8	Ⅶ－2区	SB722(SP02)	Ⅶ－2区	SP1332
H8	Ⅶ－2区	SB722(SP03)	Ⅶ－2区	SP1336
H8	Ⅶ－2区	SB722(SP04)	Ⅶ－2区	SP1333
H8	Ⅶ－2区	SB722(SP05)	Ⅶ－2区	SP1331
H8	Ⅶ－2区	SB722(SP06)	Ⅶ－2区	SP1342
H8	Ⅶ－2区	SB722(SP07)	Ⅶ－2区	SP1340
H8	Ⅶ－2区	SB722(SP08)	Ⅶ－2区	SP1337
H8	Ⅶ－2区	SB723	Ⅶ－2区	SB1023
H8	Ⅶ－2区	SB723(SP01)	Ⅶ－2区	SP1050
H8	Ⅶ－2区	SB723(SP02)	Ⅶ－2区	-
H8	Ⅶ－2区	SB723(SP03)	Ⅶ－2区	-
H8	Ⅶ－2区	SB723(SP04)	Ⅶ－2区	SP1037
H8	Ⅶ－2区	SB723(SP05)	Ⅶ－2区	-
H8	Ⅶ－2区	SB723(SP06)	Ⅶ－2区	SP1068
H8	Ⅶ－2区	SB723(SP07)	Ⅶ－2区	SP1067
H8	Ⅶ－2区	SB723(SP08)	Ⅶ－2区	SP1064
H8	Ⅶ－2区	SB723(SP09)	Ⅶ－2区	-
H8	Ⅶ－2区	SB723(SP10)	Ⅶ－2区	SP1055
H8	Ⅶ－2区	SB723・ 724(SP14)	Ⅶ－2区	SP1003
H8	Ⅶ－2区	SB724	Ⅶ－2区	SB1024
H8	Ⅶ－2区	SB724(SP11)	Ⅶ－2区	SP1052
H8	Ⅶ－2区	SB724(SP12)	Ⅶ－2区	SP1039・1040
H8	Ⅶ－2区	SB724(SP13)	Ⅶ－2区	SP1036
H8	Ⅶ－2区	SB724(SP15)	Ⅶ－2区	SP1002

第 50 表　兀塚遺跡検出時・報告時遺構名新旧対照表（4）

調査年度	報告調査区	報告遺構名	発掘時調査区	調査時遺構名
H8	Ⅶ－２区	SB724(SP16)	Ⅶ－２区	-
H8	Ⅶ－２区	SB724(SP17)	Ⅶ－２区	SP1112
H8	Ⅶ－２区	SB724(SP18)	Ⅶ－２区	SP1073
H8	Ⅶ－２区	SB724(SP19)	Ⅶ－２区	SP1071
H8	Ⅶ－２区	SB724(SP20)	Ⅶ－２区	SP1069
H8	Ⅶ－２区	SB724(SP21)	Ⅶ－２区	-
H8	Ⅶ－２区	SB724(SP22)	Ⅶ－２区	-
H8	Ⅶ－２区	SB724(SP23)	Ⅶ－２区	SP1311
H8	Ⅶ－２区	SB724(SP24)	Ⅶ－２区	SP1056
H8	Ⅶ－２区	SB725	Ⅶ－２区	SB1022
H8	Ⅶ－２区	SB725(SP01)	Ⅶ－２区	SP1012
H8	Ⅶ－２区	SB725(SP02)	Ⅶ－２区	SP1030
H8	Ⅶ－２区	SB725(SP03)	Ⅶ－２区	SP1032
H8	Ⅶ－２区	SB725(SP04)	Ⅶ－２区	SP1033
H8	Ⅶ－２区	SB725(SP05)	Ⅶ－２区	-
H8	Ⅶ－２区	SB725(SP06)	Ⅶ－２区	SP1041
H8	Ⅶ－２区	SB725(SP07)	Ⅶ－２区	SP1007
H8	Ⅶ－２区	SK701	Ⅶ－２区	SK1301
H8	Ⅶ－２区	SK702	Ⅶ－２区	SK1002
H8	Ⅶ－２区	SD704	Ⅶ－２区	SD1301
H8	Ⅶ－２区	SD705	Ⅶ－２区	SD1051
H8	Ⅶ－２区	SD706	Ⅶ－２区	SD1302
H8	Ⅶ－２区	SD707	Ⅶ－２区	SD1002・1049
H8	Ⅶ－２区	SX702	Ⅶ－２区	SK1003
H8	Ⅶ－２区	SP1001	Ⅶ－２区	SP1001
H8	Ⅶ－２区	SP1004	Ⅶ－２区	SP1004
H8	Ⅶ－２区	SP1019	Ⅶ－２区	SP1019
H8	Ⅶ－２区	SP1031	Ⅶ－２区	SP1031
H8	Ⅶ－２区	SP1044	Ⅶ－２区	SP1044
H8	Ⅶ－２区	SP1045	Ⅶ－２区	SP1045
H8	Ⅶ－２区	SP1065	Ⅶ－２区	SP1065
H8	Ⅶ－２区	SP1075	Ⅶ－２区	SP1075
H8	Ⅶ－２区	SP1083	Ⅶ－２区	SP1083
H8	Ⅶ－２区	SP1093	Ⅶ－２区	SP1093
H8	Ⅶ－２区	SP1095	Ⅶ－２区	SP1095
H8	Ⅶ－２区	SP1312	Ⅶ－２区	SP1312
H8	Ⅶ－２区	SP1314	Ⅶ－２区	SP1314
H8	Ⅶ－２区	SP1327	Ⅶ－２区	SP1327
H8	Ⅶ－２区	SP1328	Ⅶ－２区	SP1328
H8	Ⅶ－２区	SP1351	Ⅶ－２区	SP1351
H8	Ⅶ－２区	SP1352	Ⅶ－２区	SP1352
H9	Ⅶ－３区	SB726	Ⅶ－３区	-
H8	Ⅶ－３区	SB726(SP01)	Ⅶ－３区	SP9746
H8	Ⅶ－３区	SB726(SP02)	Ⅶ－３区	SP9744
H8	Ⅶ－３区	SB726(SP03)	Ⅶ－３区	SP9747
H8	Ⅶ－３区	SB726(SP04)	Ⅶ－３区	SP9751
H8	Ⅶ－３区	SB726(SP05)	Ⅶ－３区	SP9770
H9	Ⅶ－３区	SB727	Ⅶ－３区	SB9703
H9	Ⅶ－３区	SB727(SP01)	Ⅶ－３区	SP9757
H9	Ⅶ－３区	SB727(SP02)	Ⅶ－３区	SP9756
H9	Ⅶ－３区	SB727(SP03)	Ⅶ－３区	SP9755
H9	Ⅶ－３区	SB727(SP04)	Ⅶ－３区	SP9771
H9	Ⅶ－３区	SB727(SP05)	Ⅶ－３区	SP9767
H9	Ⅶ－３区	SB728	Ⅶ－３区	SB9702
H9	Ⅶ－３区	SB728(SP01)	Ⅶ－３区	SP9733
H9	Ⅶ－３区	SB728(SP02)	Ⅶ－３区	SP9732
H9	Ⅶ－３区	SB728(SP03)	Ⅶ－３区	SP9731
H9	Ⅶ－３区	SB728(SP04)	Ⅶ－３区	SP9759
H9	Ⅶ－３区	SB728(SP05)	Ⅶ－３区	SP9737
H9	Ⅶ－３区	SB728(SP06)	Ⅶ－３区	SP9736
H9	Ⅶ－３区	SB728(SP07)	Ⅶ－３区	SP9735
H9	Ⅶ－３区	SB728(SP08)	Ⅶ－３区	SP9734
H9	Ⅶ－３区	SB729	Ⅶ－３区	SB9704
H9	Ⅶ－３区	SB729(SP01)	Ⅶ－３区	SP9738
H9	Ⅶ－３区	SB729(SP02)	Ⅶ－３区	SP9725
H9	Ⅶ－３区	SB729(SP03)	Ⅶ－３区	SP9724
H9	Ⅶ－３区	SB729(SP04)	Ⅶ－３区	SP9763
H9	Ⅶ－３区	SB729(SP05)	Ⅶ－３区	SP9766
H9	Ⅶ－３区	SB730	Ⅶ－３区	SB9701
H9	Ⅶ－３区	SB730(SP01)	Ⅶ－３区	-
H9	Ⅶ－３区	SB730(SP02)	Ⅶ－３区	SP9787
H9	Ⅶ－３区	SB730(SP03)	Ⅶ－３区	SP9702
H9	Ⅶ－３区	SB730(SP04)	Ⅶ－３区	SP9703
H9	Ⅶ－３区	SB730(SP05)	Ⅶ－３区	SP9704
H9	Ⅶ－３区	SB730(SP06)	Ⅶ－３区	SP9705
H9	Ⅶ－３区	SB730(SP07)	Ⅶ－３区	SP9706
H9	Ⅶ－３区	SB730(SP08)	Ⅶ－３区	SP9707
H9	Ⅶ－３区	SB730(SP09)	Ⅶ－３区	SP9708
H9	Ⅶ－３区	SB730(SP10)	Ⅶ－３区	SP9709
H9	Ⅶ－３区	SA701	Ⅶ－３区	SA9701
H9	Ⅶ－３区	SA701(SP01)	Ⅶ－３区	SP9779
H9	Ⅶ－３区	SA701(SP02)	Ⅶ－３区	SP9778
H9	Ⅶ－３区	SA701(SP03)	Ⅶ－３区	SP9777
H9	Ⅶ－３区	SA701(SP04)	Ⅶ－３区	SP9776
H9	Ⅶ－３区	SK703	Ⅶ－３区	SK9701
H9	Ⅶ－３区	SX703	Ⅶ－３区	SK9703
H9	Ⅶ－３区	SX704	Ⅶ－３区	SX9701
H8	Ⅶ－４区	SX705	Ⅶ－４区	SX1004
H8	Ⅶ－４区	SX706	Ⅶ－４区	SX1002
H9	Ⅶ－３区	SD708	Ⅶ－３区	SD9703
H9	Ⅶ－３区	SD709	Ⅶ－３区	SD9704
H9	Ⅶ－３区	SD710	Ⅶ－３区	SD9702
H9	Ⅶ－３区	SD711	Ⅶ－３区	SD9701
H9	Ⅶ－３区	SP9728	Ⅶ－３区	SP9728
H8	Ⅶ－４区	SD712	Ⅶ－４区	SD1037
H8	Ⅶ－４区	SD713	Ⅶ－４区	SD1036
H8	Ⅷ－１区	SB801	Ⅷ－１区	SB1011
H8	Ⅷ－１区	SB801(SP01)	Ⅷ－１区	SB1011(p6)
H8	Ⅷ－１区	SB801(SP02)	Ⅷ－１区	SB1011(p5)
H8	Ⅷ－１区	SB801(SP03)	Ⅷ－１区	SB1011(p4)
H8	Ⅷ－１区	SB801(SP04)	Ⅷ－１区	SB1011(p3)
H8	Ⅷ－１区	SB801(SP05)	Ⅷ－１区	SB1011(p2)
H8	Ⅷ－１区	SB801(SP06)	Ⅷ－１区	SB1011(p1)
H8	Ⅷ－１区	SB801(SP07)	Ⅷ－１区	SP1031
H8	Ⅷ－１区	SB801(SP08)	Ⅷ－１区	SP1030
H8	Ⅷ－１区	SB801(SP09)	Ⅷ－１区	-
H8	Ⅷ－１区	SB801(SP10)	Ⅷ－１区	SP1011
H8	Ⅷ－１区	SB801(SP11)	Ⅷ－１区	SP1009
H8	Ⅷ－１区	SB801(SP12)	Ⅷ－１区	SP1008
H8	Ⅷ－１区	SB801(SP13)	Ⅷ－１区	SP1006
H8	Ⅷ－１区	SB801(SP14)	Ⅷ－１区	-
H8	Ⅷ－１区	SB801(SP15)	Ⅷ－１区	-
H8	Ⅷ－１区	SB802	Ⅷ－１区	-
H8	Ⅷ－１区	SB802(SP01)	Ⅷ－１区	SP1107
H8	Ⅷ－１区	SB802(SP02)	Ⅷ－１区	-
H8	Ⅷ－１区	SB802(SP03)	Ⅷ－１区	SP1112
H8	Ⅷ－１区	SB802(SP04)	Ⅷ－１区	-
H8	Ⅷ－１区	SB802(SP05)	Ⅷ－１区	-
H8	Ⅷ－１区	SB802(SP06)	Ⅷ－１区	SP1133
H8	Ⅷ－１区	SB802(SP07)	Ⅷ－１区	SP1121
H8	Ⅷ－１区	SB802(SP08)	Ⅷ－１区	SP1115
H8	Ⅷ－１区	SB802(SP09)	Ⅷ－１区	SP1108
H8	Ⅷ－１区	SB802(SP10)	Ⅷ－１区	SP1105
H8	Ⅷ－１区	SB802(SP11)	Ⅷ－１区	SP1101
H8	Ⅷ－１区	SB802(SP12)	Ⅷ－１区	-
H8	Ⅷ－１区	SB802(SP13)	Ⅷ－１区	SP1134
H8	Ⅷ－１区	SB802(SP14)	Ⅷ－１区	SP1125
H8	Ⅷ－１区	SB802(SP15)	Ⅷ－１区	SP1122
H8	Ⅷ－１区	SB802(SP16)	Ⅷ－１区	-
H8	Ⅷ－１区	SB802(SP17)	Ⅷ－１区	-
H8	Ⅷ－１区	SB802(SP18)	Ⅷ－１区	-
H8	Ⅷ－１区	SB803	Ⅷ－１区	-
H8	Ⅷ－１区	SB803(SP01)	Ⅷ－１区	-
H8	Ⅷ－１区	SB803(SP02)	Ⅷ－１区	SP1086
H8	Ⅷ－１区	SB803(SP03)	Ⅷ－１区	SP1084
H8	Ⅷ－１区	SB803(SP04)	Ⅷ－１区	-
H8	Ⅷ－１区	SB803(SP05)	Ⅷ－１区	-
H8	Ⅷ－１区	SB803(SP06)	Ⅷ－１区	SP1093
H8	Ⅷ－１区	SB803(SP07)	Ⅷ－１区	-
H8	Ⅷ－１区	SB803(SP08)	Ⅷ－１区	-
H8	Ⅷ－１区	SB803(SP09)	Ⅷ－１区	SP1075
H8	Ⅷ－１区	SB803(SP10)	Ⅷ－１区	SP1082
H8	Ⅷ－１区	SB803(SP11)	Ⅷ－１区	SP1078
H8	Ⅷ－１区	SB803(SP12)	Ⅷ－１区	-
H8	Ⅷ－１区	SB803(SP13)	Ⅷ－１区	SP1090
H8	Ⅷ－１区	SB803(SP14)	Ⅷ－１区	SP1091
H8	Ⅷ－１区	SB803(SP15)	Ⅷ－１区	SP1095
H8	Ⅷ－１区	SB804	Ⅷ－１区	SB1015
H8	Ⅷ－１区	SB804(SP01)	Ⅷ－１区	SP1050
H8	Ⅷ－１区	SB804(SP02)	Ⅷ－１区	SP1044
H8	Ⅷ－１区	SB804(SP03)	Ⅷ－１区	SP1052
H8	Ⅷ－１区	SB804(SP04)	Ⅷ－１区	-

第 51 表　兀塚遺跡検出時・報告時遺構名新旧対照表（5）

調査年度	報告調査区	報告遺構名	発掘時調査区	調査時遺構名
H8	Ⅷ－1区	SB804(SP05)	Ⅷ－1区	SP1060
H8	Ⅷ－1区	SB804(SP06)	Ⅷ－1区	-
H8	Ⅷ－1区	SB805	Ⅷ－1区	-
H8	Ⅷ－1区	SB805(SP07)	Ⅷ－1区	SP1033
H8	Ⅷ－1区	SB805(SP08)	Ⅷ－1区	SP1026
H8	Ⅷ－1区	SB805(SP09)	Ⅷ－1区	SP1043
H8	Ⅷ－1区	SB805(SP10)	Ⅷ－1区	SP1053
H8	Ⅷ－1区	SB805(SP11)	Ⅷ－1区	SP1076
H8	Ⅷ－1区	SB805(SP12)	Ⅷ－1区	SP1061
H8	Ⅷ－1区	SB805(SP13)	Ⅷ－1区	-
H8	Ⅷ－1区	SB805(SP14)	Ⅷ－1区	SP1136
H8	Ⅷ－1区	SB805(SP15) (SB806・SP07)	Ⅷ－1区	SB1012(P3)
H8	Ⅷ－1区	SB805(SP16)	Ⅷ－1区	SP1025
H8	Ⅷ－1区	SB805(SP17)	Ⅷ－1区	SP1027
H8	Ⅷ－1区	SB805(SP18)	Ⅷ－1区	SP1051
H8	Ⅷ－1区	SB805(SP19)	Ⅷ－1区	-
H8	Ⅷ－1区	SB805(SP20)	Ⅷ－1区	-
H8	Ⅷ－1区	SB805(SP21)	Ⅷ－1区	-
H8	Ⅷ－1区	SB805(SP22)	Ⅷ－1区	-
H8	Ⅷ－1区	SB805(SP23)	Ⅷ－1区	SP1073
H8	Ⅷ－1区	SB805(SP24)	Ⅷ－1区	SP1059
H8	Ⅷ－1区	SB805(SP25)	Ⅷ－1区	SP1058
H8	Ⅷ－1区	SB805(SP26)	Ⅷ－1区	SP1049
H8	Ⅷ－1区	SB806	Ⅷ－1区	SB1012
H8	Ⅷ－1区	SB806(SP01)	Ⅷ－1区	SB1012(p4)
H8	Ⅷ－1区	SB806(SP02)	Ⅷ－1区	SB1012(p5)
H8	Ⅷ－1区	SB806(SP03)	Ⅷ－1区	SB1012(p6)
H8	Ⅷ－1区	SB806(SP04)	Ⅷ－1区	SB1012(p11)
H8	Ⅷ－1区	SB806(SP05)	Ⅷ－1区	SB1012(p1)
H8	Ⅷ－1区	SB806(SP06)	Ⅷ－1区	SB1012(p2)
H8	Ⅷ－1区	SB806(SP07) (SB805・SP15)	Ⅷ－1区	SB1012(p3)
H8	Ⅷ－1区	SB806(SP08)	Ⅷ－1区	SB1012(p10)
H8	Ⅷ－1区	SB806(SP09)	Ⅷ－1区	SB1012(p9)
H8	Ⅷ－1区	SB806(SP10)	Ⅷ－1区	SB1012(p8)
H8	Ⅷ－1区	SB806(SP11)	Ⅷ－1区	SB1012(p7)
H8	Ⅷ－1区	SB807	Ⅷ－1区	SB1013
H8	Ⅷ－1区	SB807(SP01)	Ⅷ－1区	SB1013(p4)
H8	Ⅷ－1区	SB807(SP02)	Ⅷ－1区	SB1013(p5)
H8	Ⅷ－1区	SB807(SP03)	Ⅷ－1区	SB1013(p6)
H8	Ⅷ－1区	SB807(SP04)	Ⅷ－1区	SB1013(p1)
H8	Ⅷ－1区	SB807(SP05)	Ⅷ－1区	SB1013(p2)
H8	Ⅷ－1区	SB807(SP06)	Ⅷ－1区	SB1013(p3)
H8	Ⅷ－1区	SB808	Ⅷ－1区	SB1014
H8	Ⅷ－1区	SB808(SP01)	Ⅷ－1区	SB1014(p4)
H8	Ⅷ－1区	SB808(SP02)	Ⅷ－1区	SP1016
H8	Ⅷ－1区	SB808(SP03)	Ⅷ－1区	SB1014(p6)
H8	Ⅷ－1区	SB808(SP04)	Ⅷ－1区	SB1014(p1)
H8	Ⅷ－1区	SB808(SP05)	Ⅷ－1区	SB1014(p2)
H8	Ⅷ－1区	SB808(SP06)	Ⅷ－1区	SB1014(p3)

調査年度	報告調査区	報告遺構名	発掘時調査区	調査時遺構名
H8	Ⅷ－1区	SK801	Ⅷ－1区	SK1005
H8	Ⅷ－1区	SK802	Ⅷ－1区	SK1018
H8	Ⅷ－1区	SK803	Ⅷ－1区	SK1006
H8	Ⅷ－1区	SK804	Ⅷ－1区	-
H8	Ⅷ－2区	SK805	Ⅷ－2区	SK1015
H8	Ⅷ－1区	SD801	Ⅷ－1区	SD1303
H8	Ⅷ－1区	SD802	Ⅷ－1区	SD1004
H8	Ⅷ－1区	SD803	Ⅷ－1区	SD1005
H8	Ⅷ－1区	SD804	Ⅷ－1区	SD1006
H8	Ⅷ－1区	SD805	Ⅷ－1区	SD1007
H8	Ⅷ－1区	SD806	Ⅷ－1区	SD1011(1～4・7～10区)
H8	Ⅷ－1区	SD807	Ⅷ－1区	SD1011(5・6区)
H8	Ⅷ－1区	SD808	Ⅷ－1区	-
H8	Ⅷ－1区	SD809	Ⅷ－1区	-
H8	Ⅷ－1区	SD810	Ⅷ－1区	SD1008
H8	Ⅷ－1区	SD811	Ⅷ－1区	SD1009
H8	Ⅷ－1区	SD812	Ⅷ－1区	SD1010
H8	Ⅷ－1区	SD813	Ⅷ－1区	SD1016
H8	Ⅷ－1区	SD814	Ⅷ－1区	SD1026
H8	Ⅷ－1区	SD815	Ⅷ－1区	SD1025
H8	Ⅷ－1区	SD816A	Ⅷ－1区	SD1015 (1～10区)
H8	Ⅷ－1区	SD816B	Ⅷ－1区	SD1015 (11・12区)
H8	Ⅷ－1区	SD816C	Ⅷ－1区	SD1019
H8	Ⅷ－1区	SD817	Ⅷ－1区	SD1018
H8	Ⅷ－1区	SD818	Ⅷ－1区	SD1065
H8	Ⅷ－1区	SD819	Ⅷ－1区	SD1027
H8	Ⅷ－1区	SD820	Ⅷ－1区	SD1022
H8	Ⅷ－2区	SD821	Ⅷ－2区	SD1035
H8	Ⅷ－1区	SD822	Ⅷ－1区	-
H8	Ⅷ－1区	SD823	Ⅷ－1区	SD1023
H8	Ⅷ－1区	SD824	Ⅷ－1区	SD1035
H8	Ⅷ－1区	SX801	Ⅷ－1区	SD1017
H8	Ⅷ－1区	SX802	Ⅷ－1区	SX1001
H8	Ⅷ－1区	SX803	Ⅷ－1区	SK1007
H8	Ⅷ－1区	SX804	Ⅷ－1区	SD1021
H8	Ⅷ－1区	SP1054	Ⅷ－1区	SP1054
H8	Ⅷ－1区	SP1062	Ⅷ－1区	SP1062
H8	Ⅷ－1区	SP1072	Ⅷ－1区	SP1072
H8	Ⅷ－1区	SP1097	Ⅷ－1区	SP1097
H8	Ⅷ－1区	SP1098	Ⅷ－1区	SP1098
H8	Ⅷ－1区	SP1100	Ⅷ－1区	SP1100
H8	Ⅷ－1区	SP1103	Ⅷ－1区	SP1103
H8	Ⅷ－1区	SP1127	Ⅷ－1区	SP1127
H8	Ⅷ－1区	SP1135	Ⅷ－1区	SP1135
H8	Ⅷ－1区	SP1139	Ⅷ－1区	SP1139
H8	Ⅷ－1区	SP1142	Ⅷ－1区	SP1142
H8	Ⅷ－1区	SP1143	Ⅷ－1区	SP1143
H8	Ⅸ－1区	SB901	Ⅸ－1区	SB1001

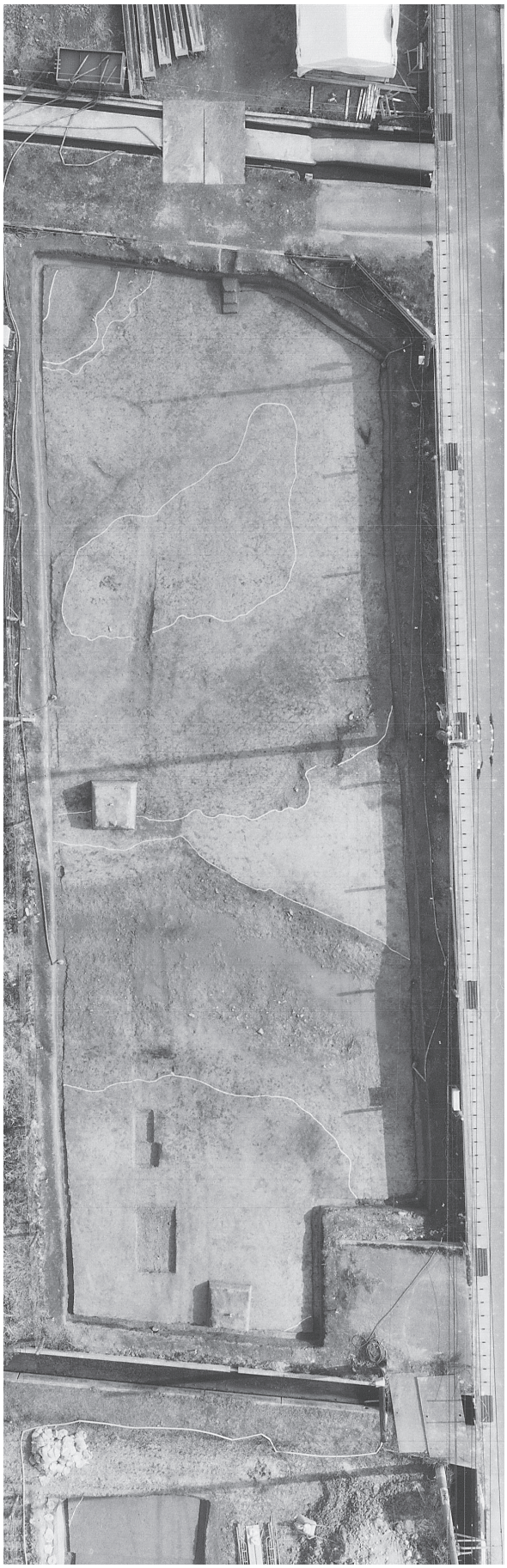
調査年度	報告調査区	報告遺構名	発掘時調査区	調査時遺構名
H8	Ⅸ－1区	SB901(SP01)	Ⅸ－1区	SP1026
H8	Ⅸ－1区	SB901(SP02)	Ⅸ－1区	SB1001(p1)
H8	Ⅸ－1区	SB901(SP03)	Ⅸ－1区	SB1001(p2)
H8	Ⅸ－1区	SB901(SP04)	Ⅸ－1区	SB1001(p3)
H8	Ⅸ－1区	SB901(SP05)	Ⅸ－1区	SB1001(p4)
H8	Ⅸ－1区	SB901(SP06)	Ⅸ－1区	SB1001(p5)
H8	Ⅸ－1区	SB901(SP07)	Ⅸ－1区	SB1001(p6)
H8	Ⅸ－1区	SB901(SP08)	Ⅸ－1区	SB1001(p7)
H8	Ⅸ－1区	SB901(SP09)	Ⅸ－1区	SB1001(p8)
H8	Ⅸ－1区	SB901(SP10)	Ⅸ－1区	SB1001(p9)
H8	Ⅸ－1区	SB901(SP11)	Ⅸ－1区	SB1001(p10)
H8	Ⅸ－1区	SB901(SP12)	Ⅸ－1区	SP1024
H8	Ⅸ－1区	SB902	Ⅸ－1区	SB1027
H8	Ⅸ－1区	SB902(SP01)	Ⅸ－1区	SP1025
H8	Ⅸ－1区	SB902(SP02)	Ⅸ－1区	-
H8	Ⅸ－1区	SB902(SP03)	Ⅸ－1区	-
H8	Ⅸ－1区	SB902(SP04)	Ⅸ－1区	SP1012
H8	Ⅸ－1区	SB902(SP05)	Ⅸ－1区	SP1015
H8	Ⅸ－1区	SB902(SP06)	Ⅸ－1区	-
H8	Ⅸ－1区	SB902(SP07)	Ⅸ－1区	-
H8	Ⅸ－1区	SB903	Ⅸ－1区	SB1002
H8	Ⅸ－1区	SB903(SP01)	Ⅸ－1区	SB1002(p5)
H8	Ⅸ－1区	SB903(SP02)	Ⅸ－1区	SB1002(p2)
H8	Ⅸ－1区	SB903(SP03)	Ⅸ－1区	SB1002(p3)
H8	Ⅸ－1区	SB903(SP04)	Ⅸ－1区	-
H8	Ⅸ－1区	SB903(SP05)	Ⅸ－1区	-
H8	Ⅸ－1区	SB903(SP06)	Ⅸ－1区	-
H8	Ⅸ－1区	SB903(SP07)	Ⅸ－1区	SB1002(p4)
H8	Ⅸ－1区	SB904	Ⅸ－1区	-
H8	Ⅸ－1区	SB904(SP01)	Ⅸ－1区	SP1021
H8	Ⅸ－1区	SB904(SP02)	Ⅸ－1区	-
H8	Ⅸ－1区	SB904(SP03)	Ⅸ－1区	-
H8	Ⅸ－1区	SB904(SP04)	Ⅸ－1区	-
H8	Ⅸ－1区	SB904(SP05)	Ⅸ－1区	-
H8	Ⅸ－1区	SK901	Ⅸ－1区	SK1001
H8	Ⅸ－1区	ST901	Ⅸ－1区	ST1001
H8	Ⅸ－1区	SD901	Ⅸ－1区	SD1001
H8	Ⅸ－1区	SD902	Ⅸ－1区	SD1002
H8	Ⅸ－1区	SP1019	Ⅸ－1区	SP1019

写 真 図 版

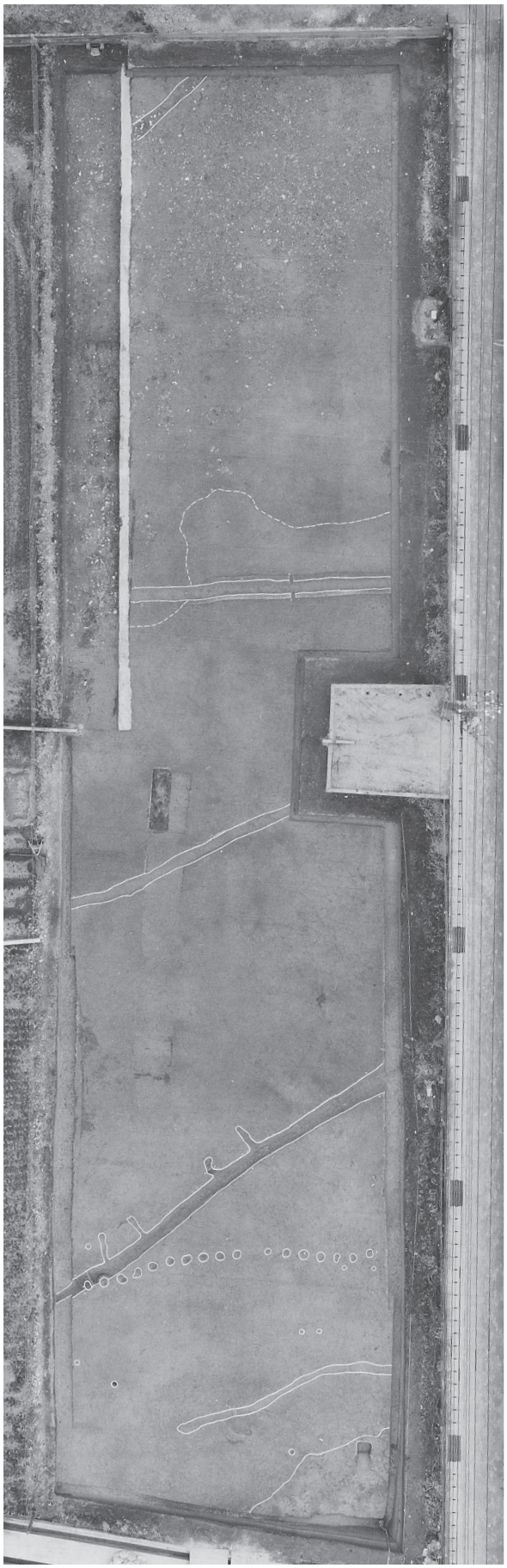
図版 1　兀塚遺跡

兀塚遺跡周辺空中写真（上が北）

図版２　兀塚遺跡



Ⅱ区空中写真（上が北）



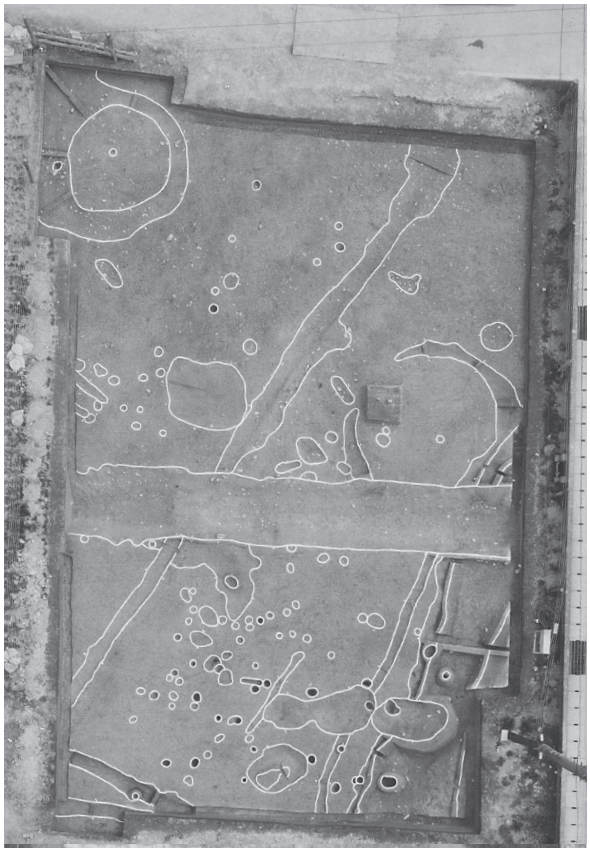
Ⅰ区空中写真（上が北）

図版３　兀塚遺跡

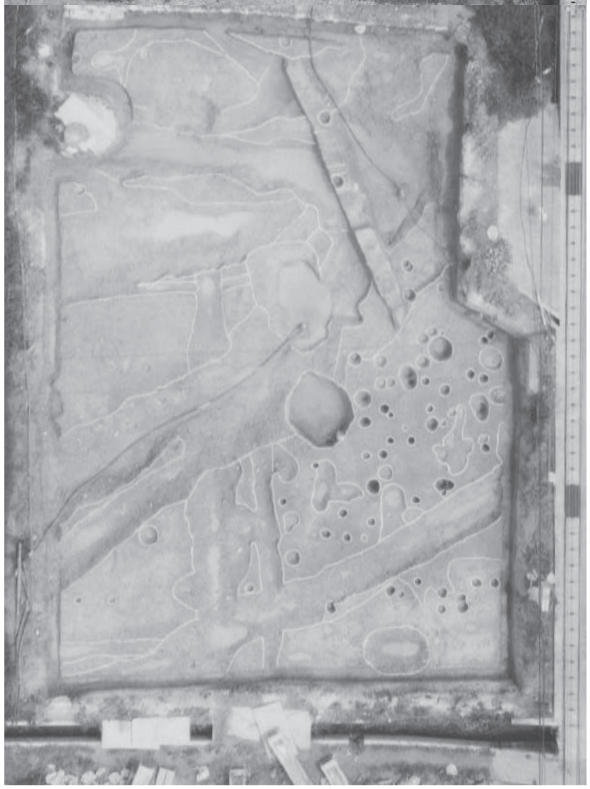
Ⅲ区第２水田面（上が北）

Ⅲ区第 SR301 ～ 303（上が北）

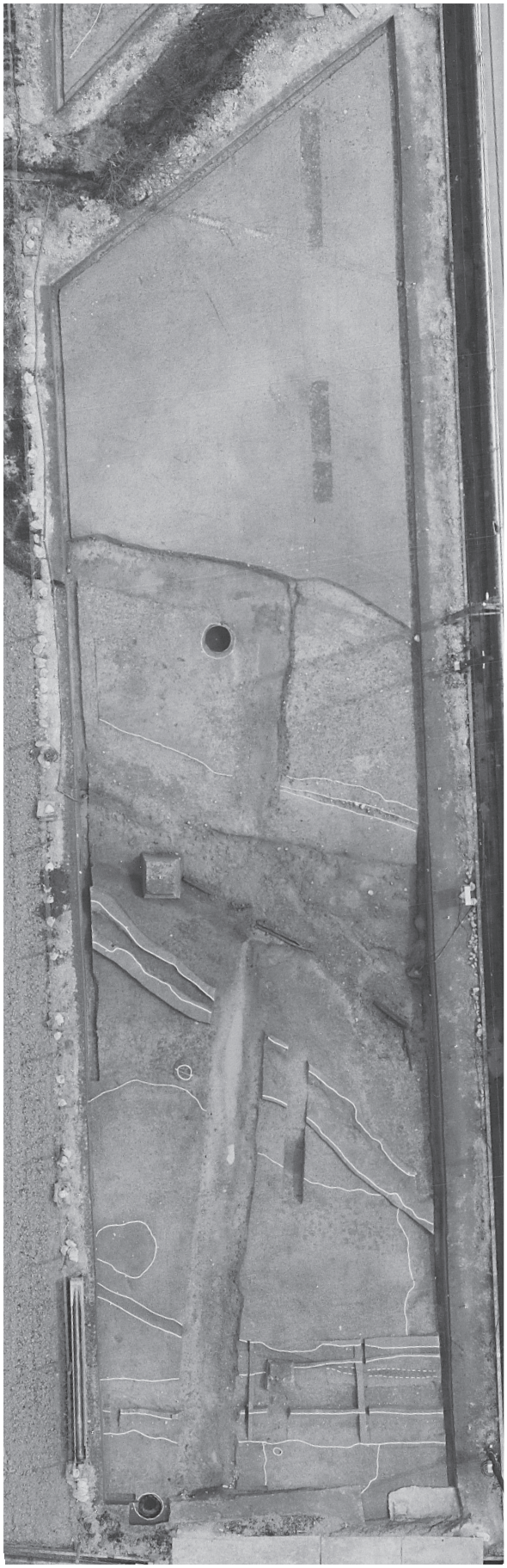
図版 4　兀塚遺跡



Ⅴ－１区空中写真（上が北）



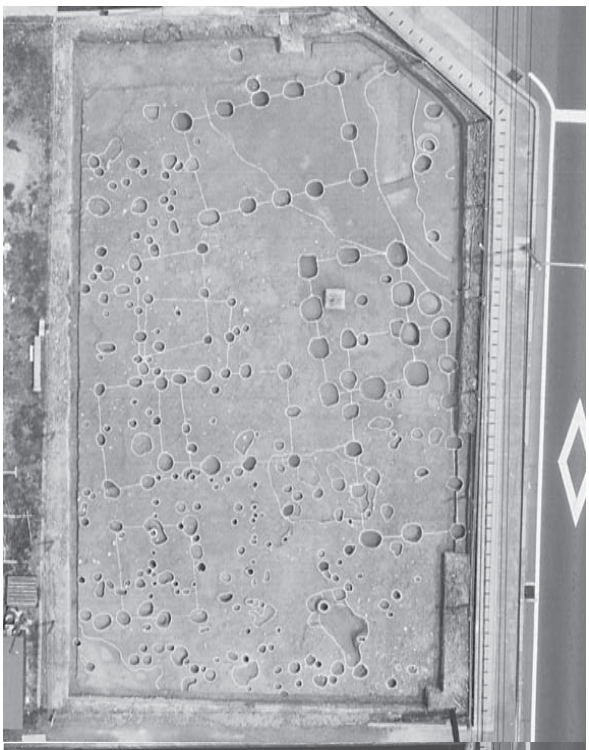
Ⅴ－２区空中写真（上が北）



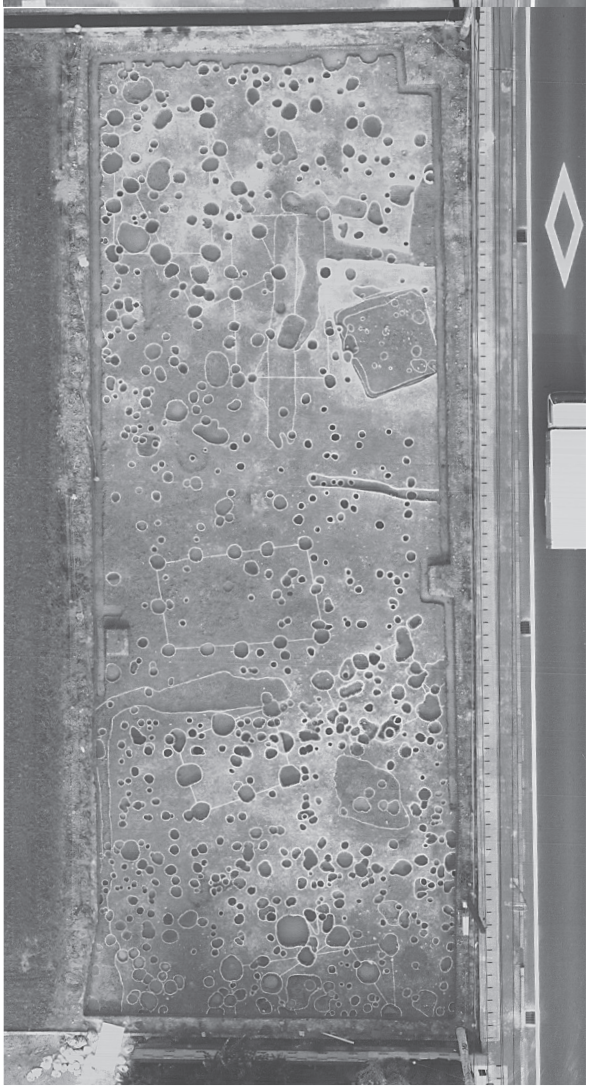
Ⅳ区空中写真（上が北）

図版５　兀塚遺跡

Ⅵ区空中写真（上が北）



Ⅶ－１区空中写真（上が北）



Ⅶ－２区空中写真（上が北）

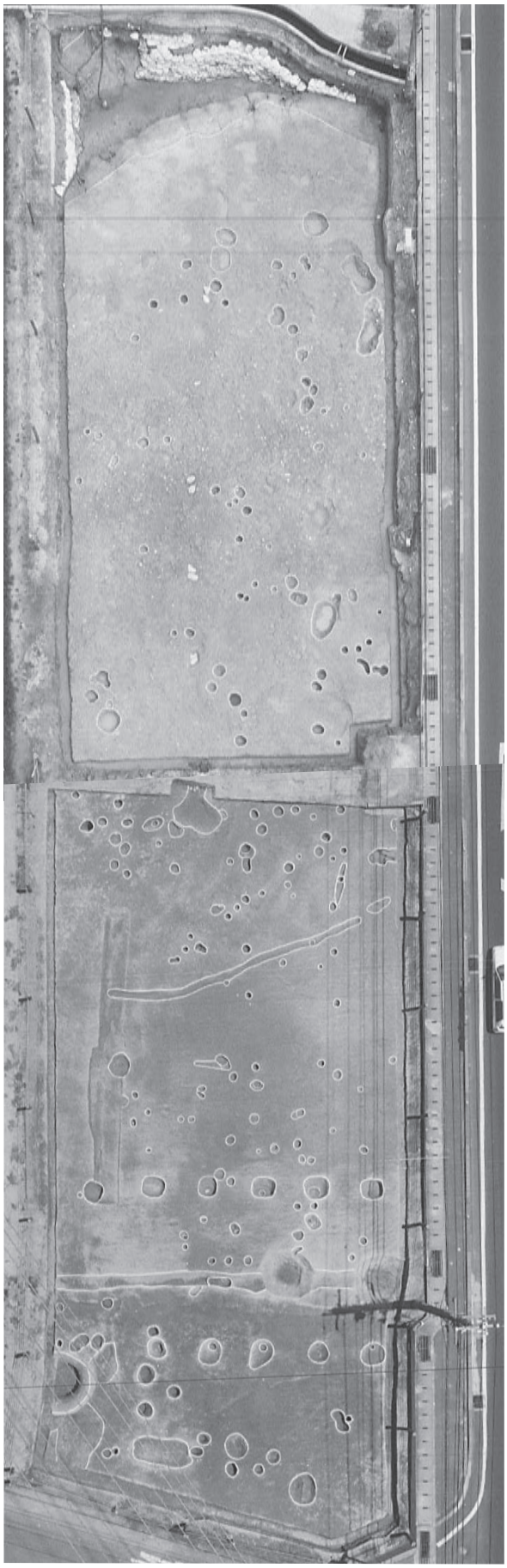
Ⅶ－４区空中写真（上が北）

Ⅶ－３区空中写真（上が北）

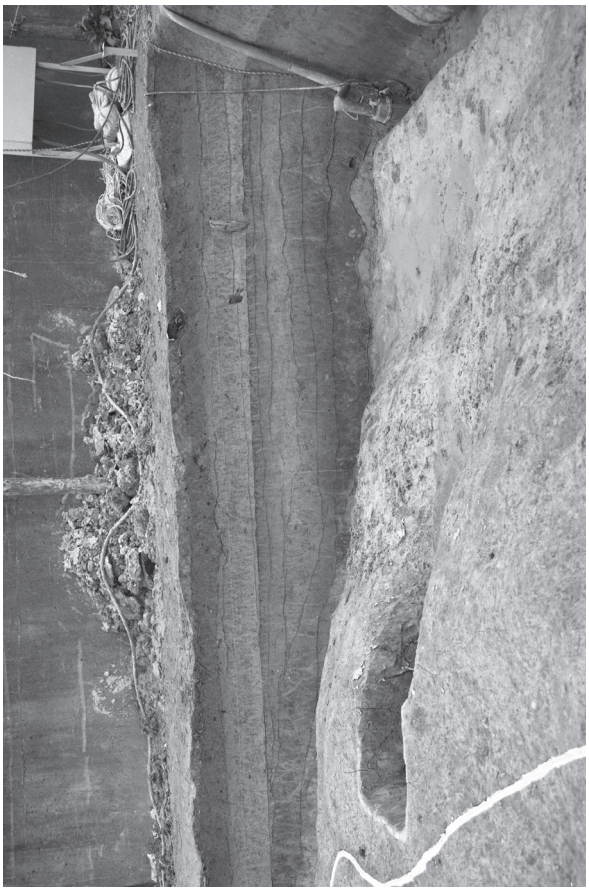
Ⅷ－１区空中写真（上が北）

図版６　兀塚遺跡

図版 7　兀塚遺跡

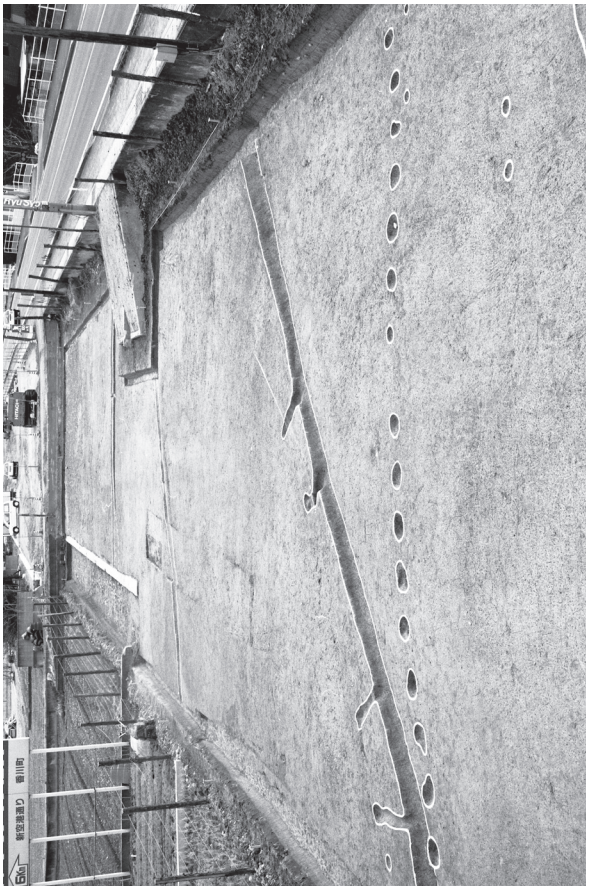


Ⅷ－２区空中写真

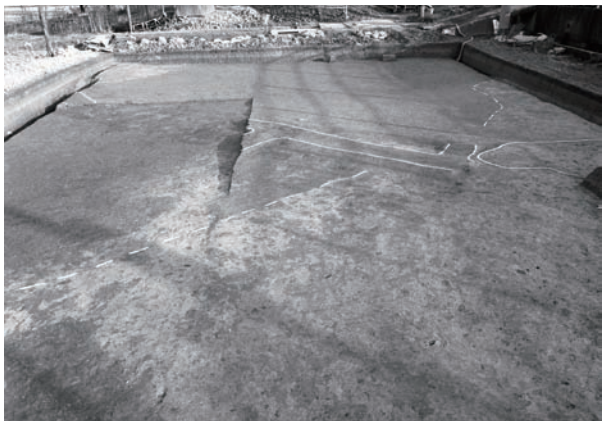


Ⅰ区 SR202 土層断面（北から）

Ⅸ－１区空中写真

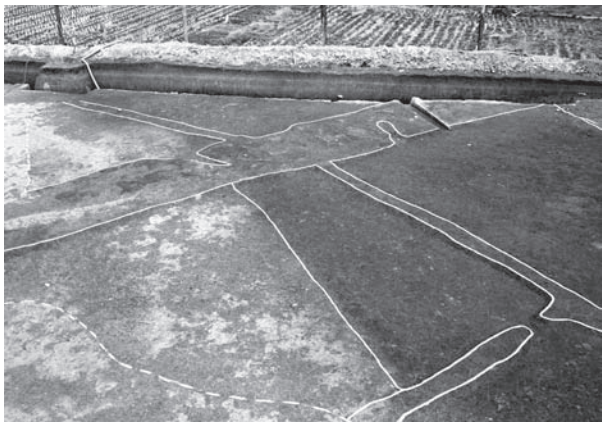


Ⅰ区全景（西から）



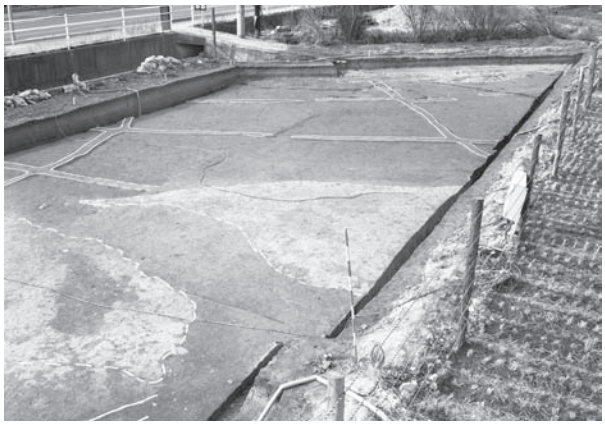
Ⅲ区第 1 水田面全景（西から）

Ⅲ区第 2 水田面全景（東から）



Ⅲ区第 2 水田面全景（南から）

Ⅲ区第 2 水田面全景（南から）



Ⅲ区第 2 水田面全景（北東から）

Ⅲ区 SD301 全景（南から）

Ⅲ区 SR301 全景（南西から）

Ⅲ区 SR302 全景（南東から）

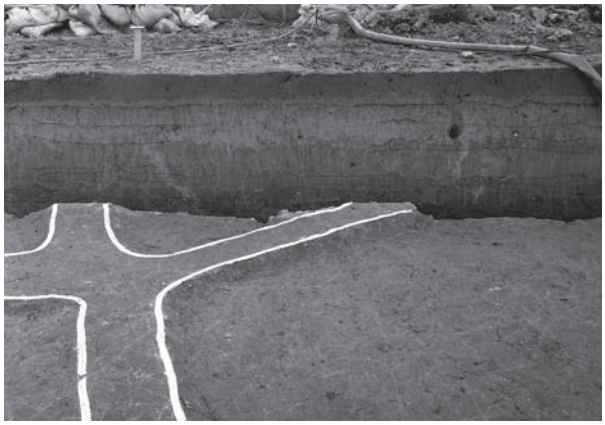
図版 9　兀塚遺跡

Ⅲ区 SR303 全景（南から）

Ⅲ区 SR303 土層断面（北から）

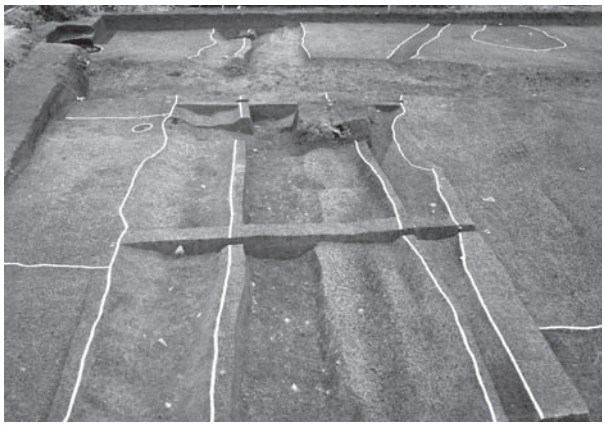
Ⅲ区第 2 水田面畦畔 308 土層断面（北から）

Ⅲ区第 2 水田面畦畔 313 土層断面（北から）



Ⅲ区第 2 水田面畦畔 308･313 土層断面（北から）

Ⅳ区 SD401 全景（南から）

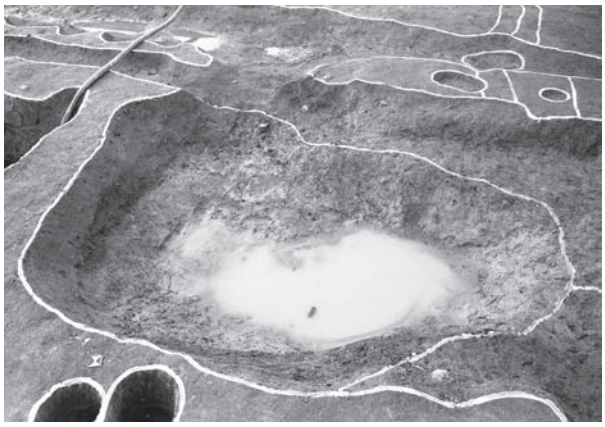


Ⅳ区 SD402・403 全景（南から）

Ⅳ区 SR401 全景（北から）

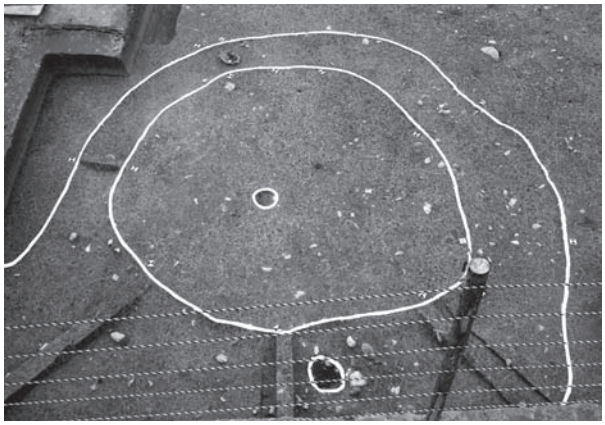
Ⅳ区 SR401 最下層木製品出土状況（北から）

Ⅳ区 SR401 最下層木製品出土状況（南から）



Ⅴ区 SK509（南から）

Ⅴ区 SK510（南から）



Ⅴ区 ST501 全景（北から）

Ⅴ区 ST501 全景（南から）

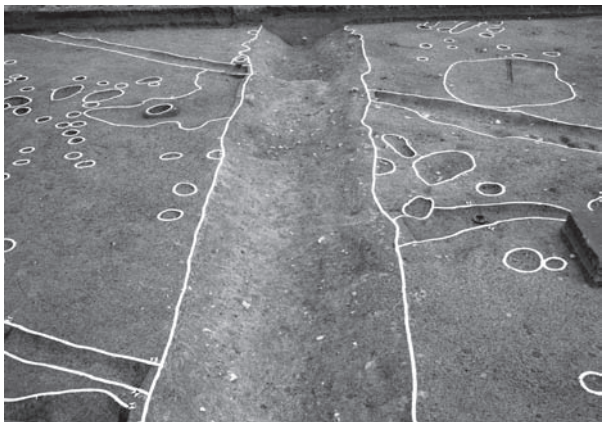
Ⅴ区 ST501　P1 出土状況（西から）

Ⅴ区 ST502 全景（北から）

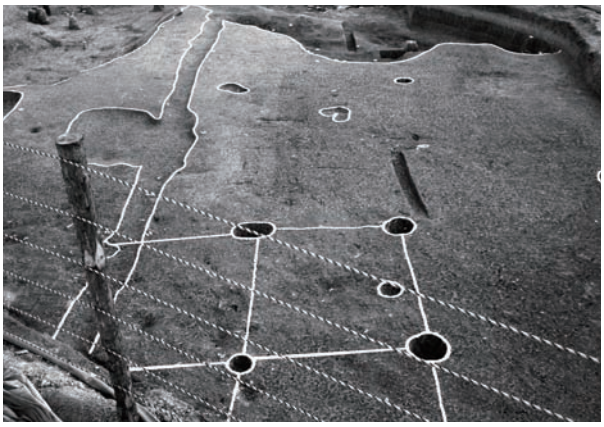
図版 11　兀塚遺跡

Ⅴ区 ST502　P1 出土状況（北から）

Ⅴ区 SD502 全景（東南から）



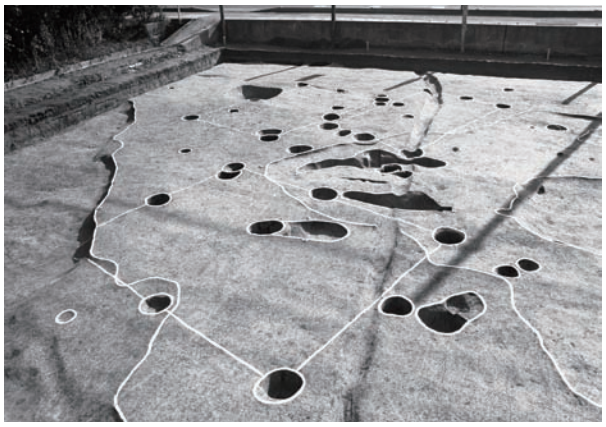
Ⅴ区 SD517 全景（南から）



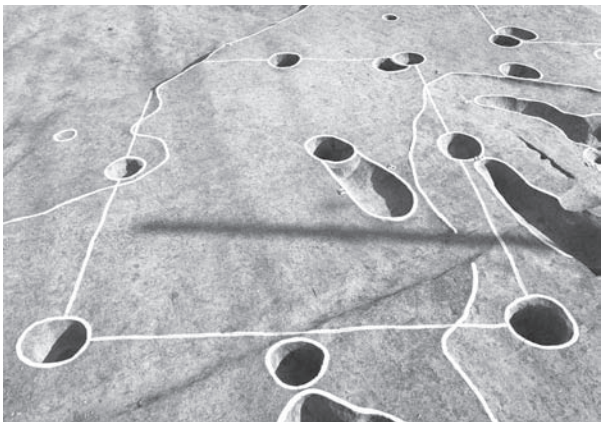
Ⅵ区 SB607，SD603 全景（北から）

Ⅵ区 SD603，SR604 全景（南から）

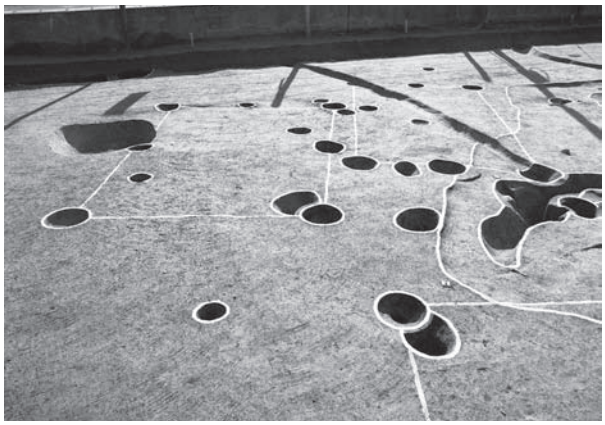
Ⅵ区掘立柱建物群全景（東から）



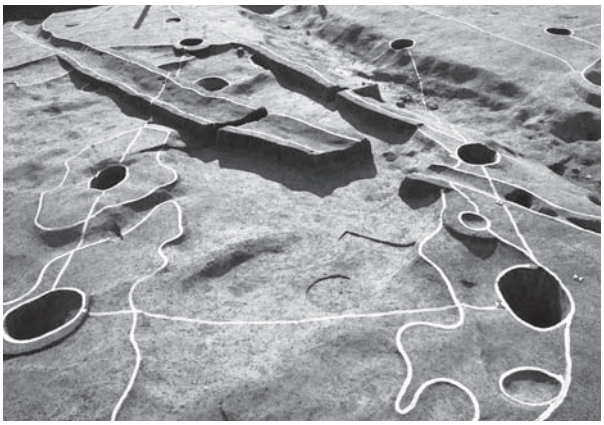
Ⅵ区 SB601･603 全景（北から）



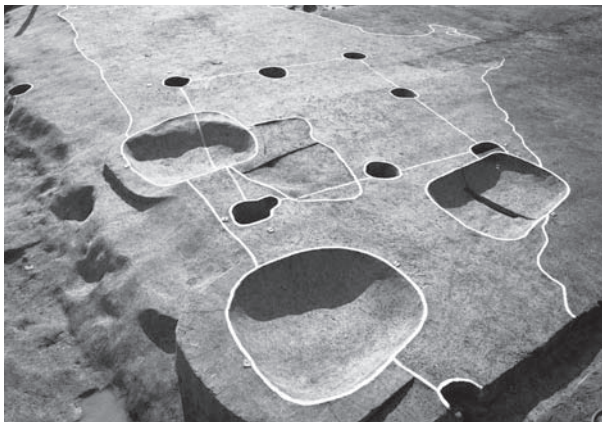
Ⅵ区 SB601 全景（北東から）



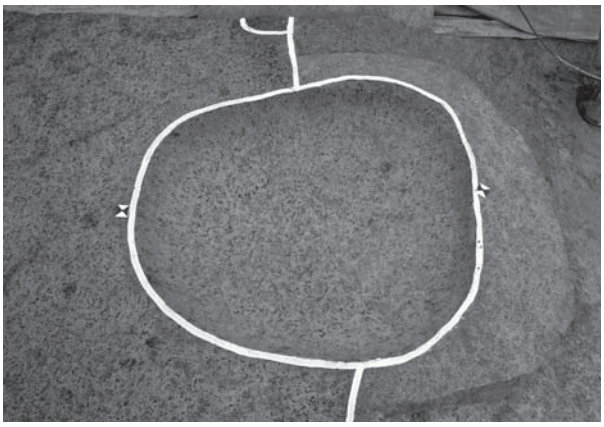
Ⅵ区 SB603･604 全景（北から）



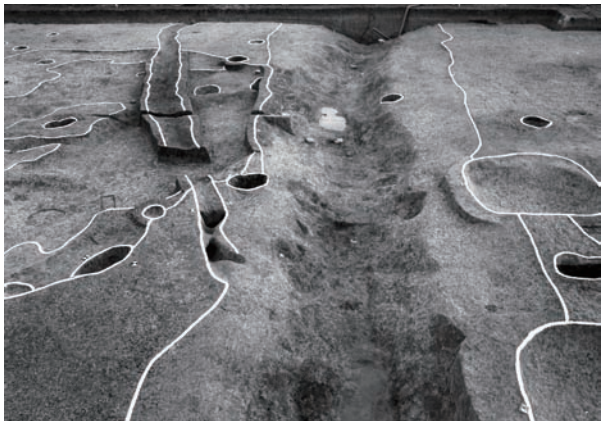
Ⅵ区 SB605 全景（北から）



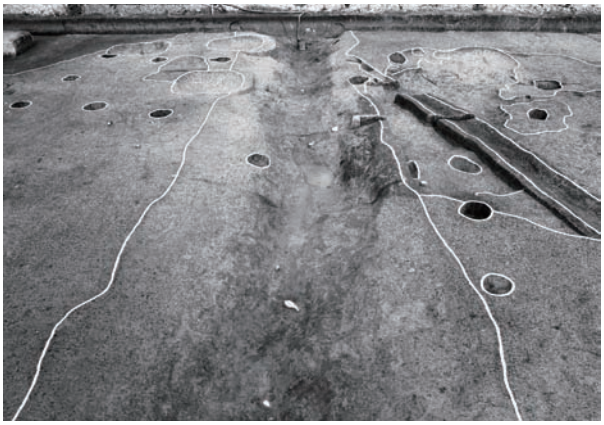
Ⅵ区 SB606 全景（北から）



Ⅵ区 SK602 全景（南から）

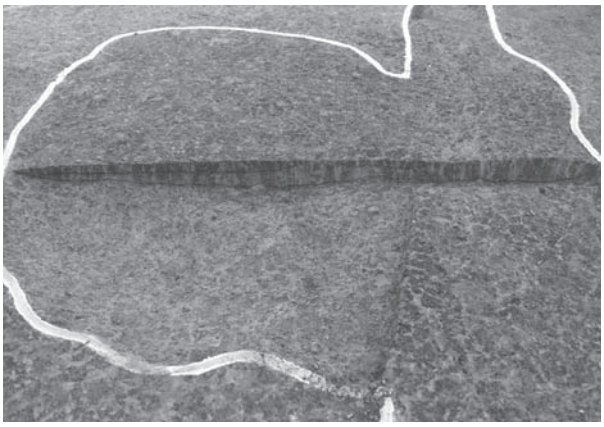


Ⅵ区 SD601･602 全景（北から）



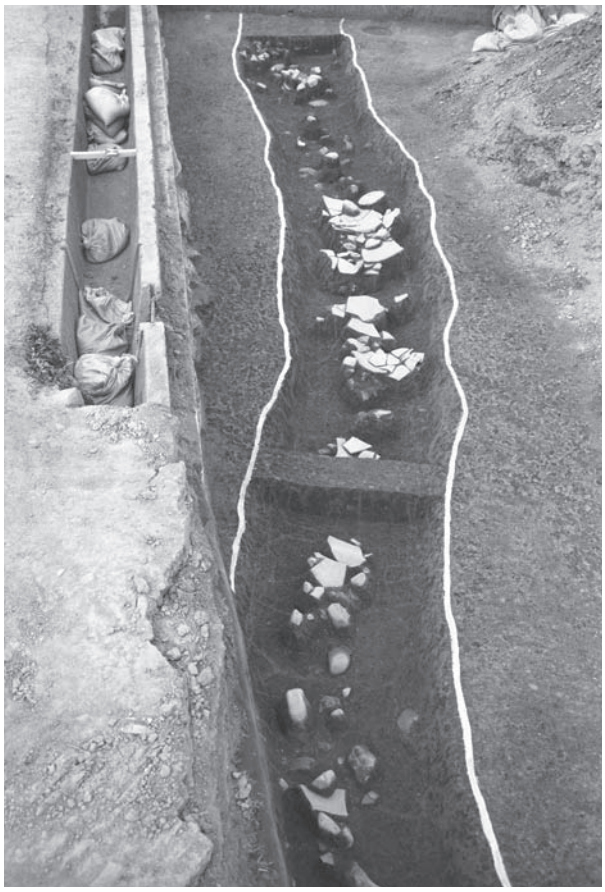
Ⅵ区 SD602 全景（南から）

Ⅵ区 SD602 土層断面（南から）



Ⅵ区 SD603，SK606 土層断面（北から）

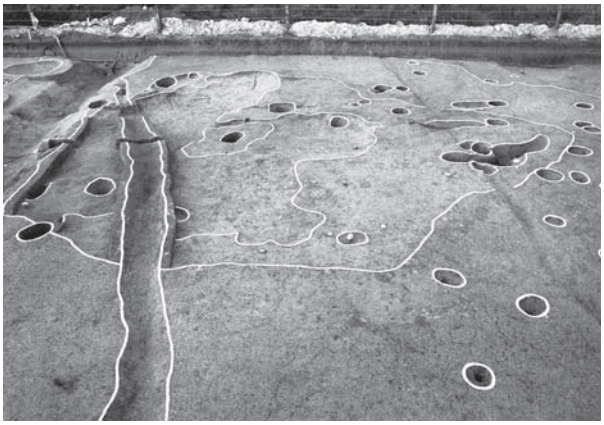
図版 13　兀塚遺跡



Ⅵ区 SD604 遺物出土状況（南から）

Ⅵ区 SD604 完掘状況（南から）

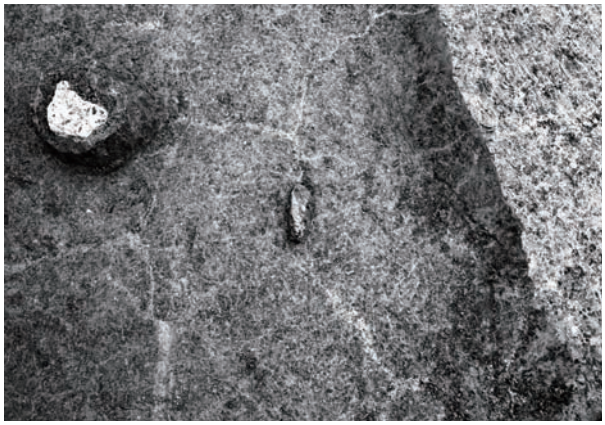
Ⅵ区 SX601・602 全景（北から）



Ⅵ区 SD601，SX605 全景（南から）

Ⅵ区 SR601 全景（南から）

Ⅵ区 SR602 全景（南から）



Ⅵ区 SR602 北半上層鉄鏃出土状況

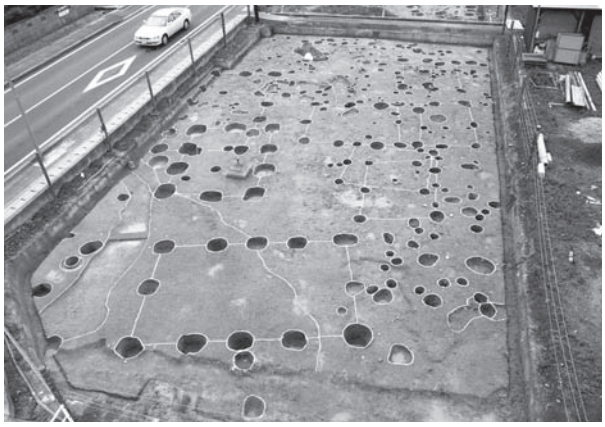
Ⅵ区 SR602 遺物出土状況（南から）

Ⅵ区 SR603 南部中・下層遺物出土状況（南から）

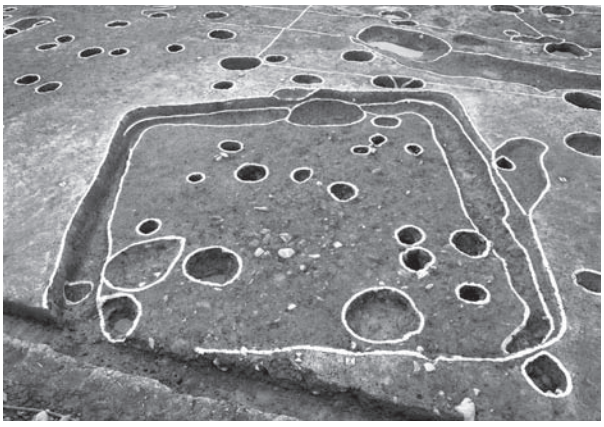
Ⅵ区 SR603 南部中・下層遺物出土状況（南から）

Ⅵ区 SR604 中・下層遺物出土状況（東から）

Ⅵ区 SR604 中層遺物出土状況（北から）



Ⅶ－１区全景（東から）

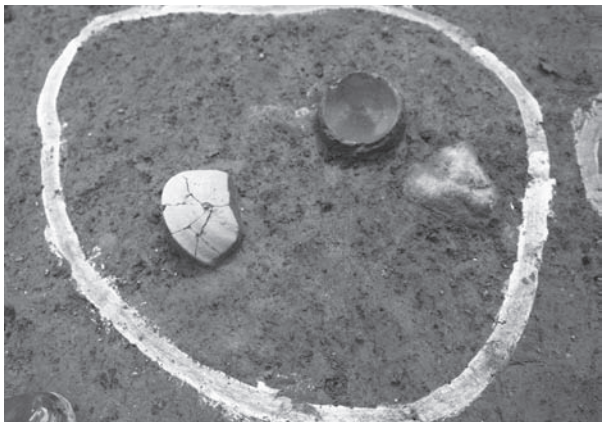


Ⅶ－２区 SH701 全景（南から）

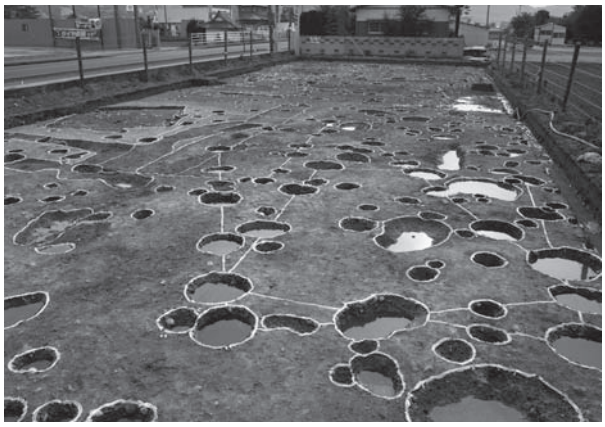
図版 15　兀塚遺跡

Ⅶ－２区 SH701 遺物出土状況（北から）

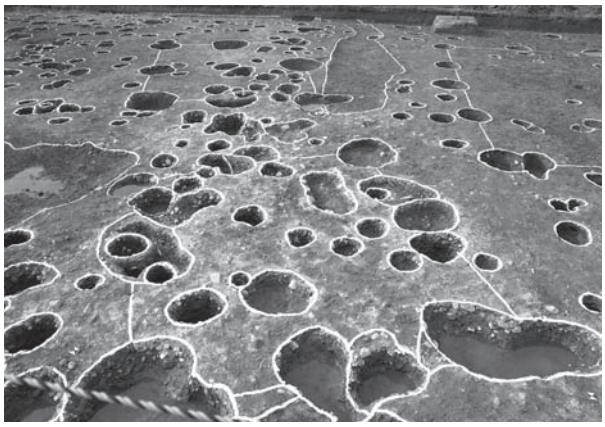
Ⅶ－２区 SH701 遺物出土状況（南から）



Ⅶ－２区 SH701 遺物出土状況（西から）

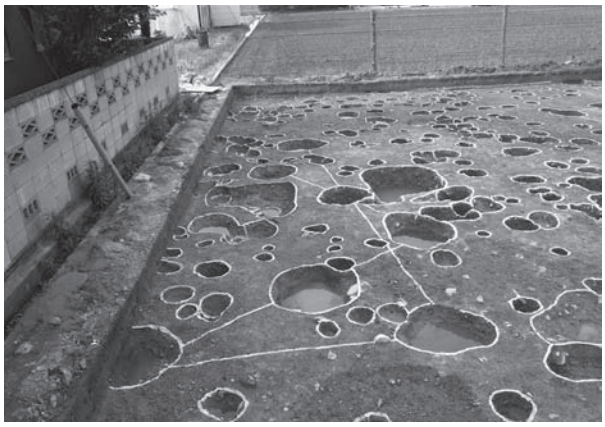


Ⅶ－２区 SB713･721 全景（東から）

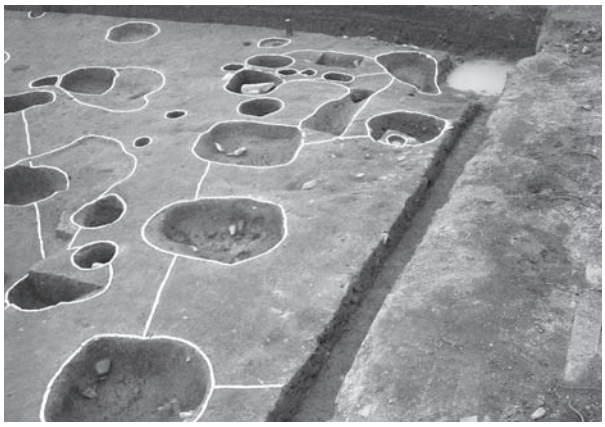


Ⅶ－２区 SB715･716 全景（南から）

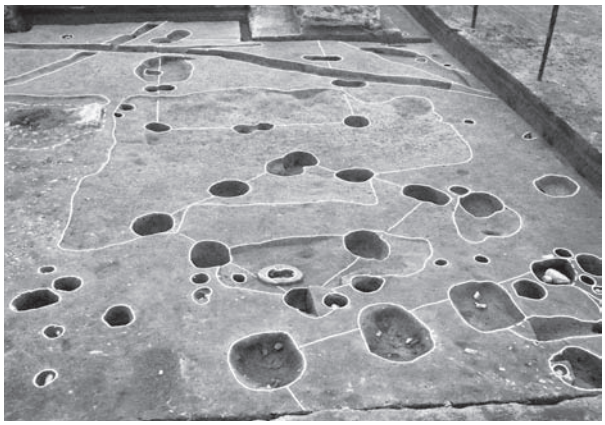
Ⅶ－２区 SB718 全景（南から）



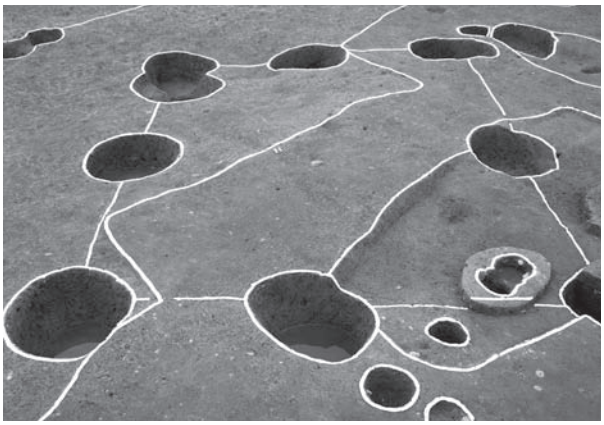
Ⅶ－２区 SB717･719（南から）



Ⅶ－３区 SB727 完掘状況南（東から）



Ⅶ－３区 SB710・727・728 全景（東から）



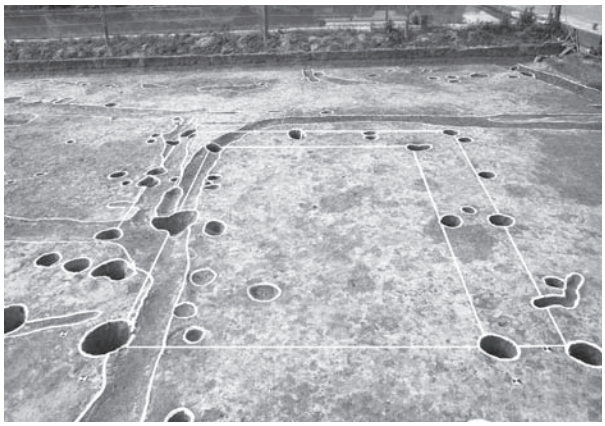
Ⅶ－３区 SB728 全景（南から）

Ⅶ－３区 SB730 全景（西から）

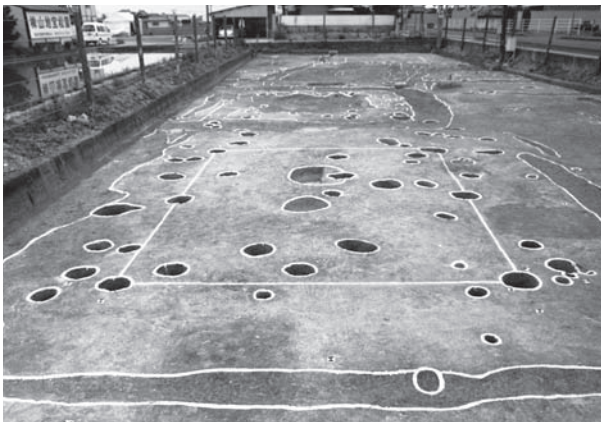
Ⅶ－３区 SD708 ～ 710 全景（西から）

Ⅶ－４区全景（西から）

Ⅷ－１区全景（東から）

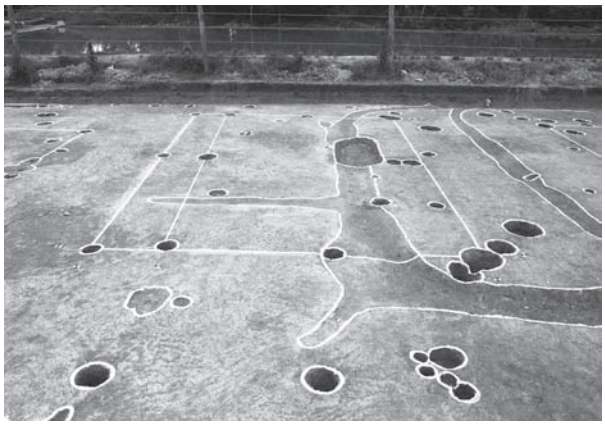


Ⅷ－１区 SB801（南から）

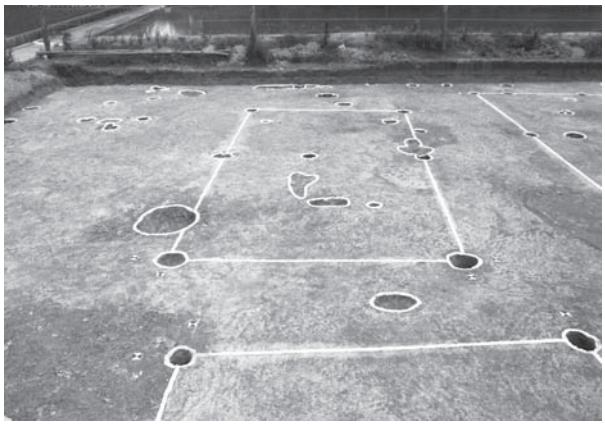


Ⅷ－１区 SB804 全景（西から）

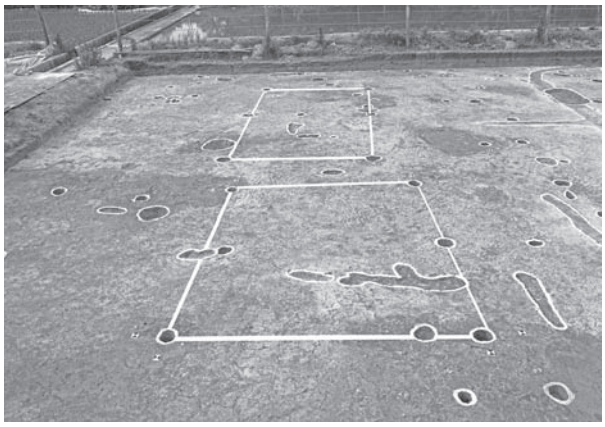
図版 17　兀塚遺跡



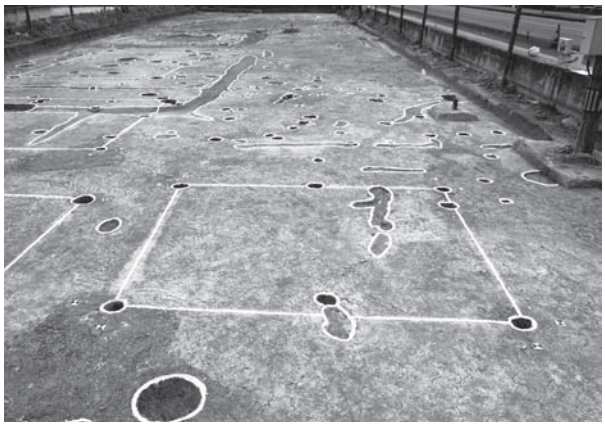
Ⅷ－１区 SB806 全景（南から）



Ⅷ－１区 SB807 全景（南から）



Ⅷ－１区 SB807･808 全景（南から）



Ⅷ－１区 SB808 全景（西から）

Ⅷ－１区 SD816 遺物出土状況（東から）

Ⅸ－１区全景（東から）

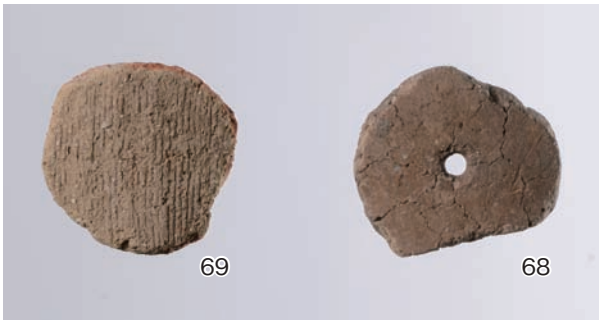
Ⅸ－１区 SB901・902 全景（東から）

Ⅸ－１区 ST901（北から）

39

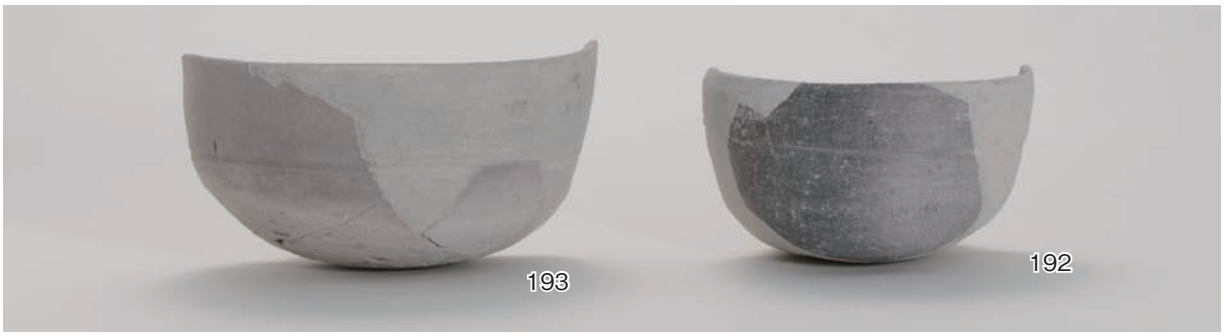
57

67

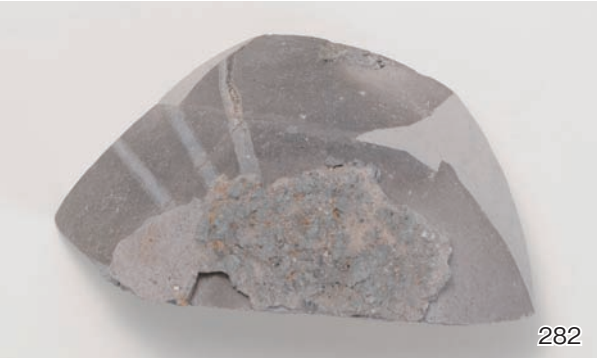

69
68

194

261


193
192

図版 19　兀塚遺跡



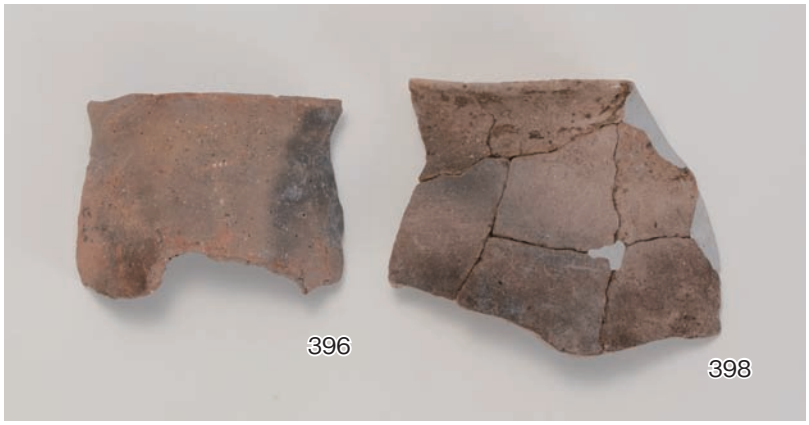
341

373

390

392

393


396
398

397

図版 21　兀塚遺跡

623

739

590

562
564
541

607
608

578

578

図版 23　兀塚遺跡

591
591

603
646
645
354
603
646
645
354

図版 25　兀塚遺跡

592
22
955
56
54
118
21
717
594
93
678
11
434
212
313
208
593
215
53
214
618
978
55
432
753

227

602

605

報告書抄録

ふりがな	はげづかいせき
書名	兀　塚　遺　跡
副書名	県道三木国分寺線道路改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	西村尋文
編集機関	香川県埋蔵文化財センター
所在地	〒762-0024 香川県坂出市府中町字南谷 5001-4　Tel 0877-48-2191　Fax 0877-48-3249
発行年月日	西暦 2014 年 11 月 28 日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
		市町						
はげづかいせき 兀塚遺跡	かがわけん 香川県　たかまつし 高松市 だんしちょう 檀紙町・えんざちょう 円座町	37201		34 度 17 分 24 秒	134 度 0 分 12 秒	1995.9.1 ～ 1997.5.31	8,147㎡	県道三木国分寺線道路改修事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
はげづかいせき 兀塚遺跡	集落	弥生時代 古代 中世 近世	竪穴建物跡・掘立柱建物・土坑・円形周溝墓・土壙墓・溝・水田・自然河川	弥生土器・土師器・須恵器・墨書土器・黒色土器・瓦器・陶磁器・土馬・石器	南海道周辺の古代～中世の集落跡

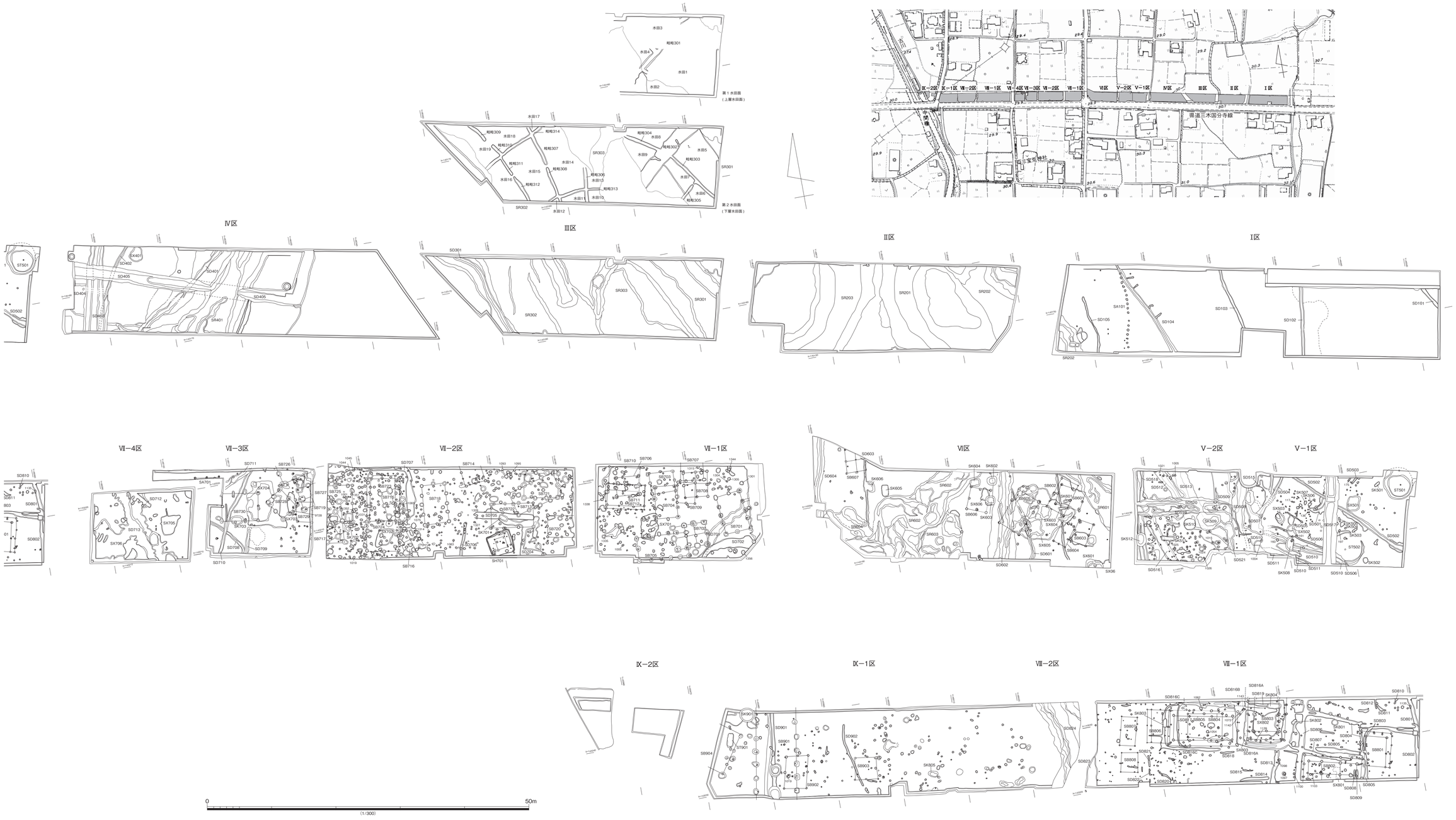
要　約

兀塚遺跡は推定南海道の北に位置する古代前半と中世前半を中心にした集落遺跡である。古代集落は多数の掘立柱建物を中心にした集落で、遺構密度も高い。７世紀代の建物は比較的不揃いな配置をとるが、８世紀以降条里地割に規制された建物配置をとる。また、集落内では８世紀後半頃の大型建物を確認した。規模的な点から公的施設の可能性が高い。周辺の河川跡からは多量の遺物と伴に墨書土器や土馬の脚部などが出土しており、大型建物の性格を推定するうえで重要な遺物になる。

県道三木国分寺線道路改修事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告

兀塚遺跡

2014年11月28日
編集　香川県埋蔵文化財センター
〒762-0024 香川県坂出市府中町字南谷5001-4
Tel 0877-48-2191　Fax 0877-48-3249
発行　香川県教育委員会
印刷　株式会社成光社



兀塚遺跡全体図　1：300